

勝保沢中ノ山遺跡II

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書 第25集 —

1989

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

勝保沢中ノ山遺跡II

—関越自動車道（新潟線）地域埋蔵
文化財発掘調査報告書 第25集—

1989

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



A区出土の石器



B区出土の石器

序

首都圏と直結する新しい高速自動車道の建設による政治、経済、文化のうねりは群馬県に新しい夜明けを告げるものと言えましょう。関越自動車道新潟線は昭和52年前橋まで開通しましたが、さらに、雄大な裾野を広げる赤城山西麓を北上する路線が決定され、新潟県と結合するため工事が進められることになりました。

この工事に先行して、先人の生きた証である埋蔵文化財の発掘調査が群馬県埋蔵文化財調査事業団により行われることになりましたが、赤城山西麓には火山灰土壌の堆積が厚く、遺跡の確認は日時を要しました。また、本遺跡地のような旧石器時代の文化層を含む場合は、縄文時代までの調査終了後あらためて石器が出土する関東ローム層を掘削するという二重三重の調査になるため、工事工程との調整には困難がありました。

調査は昭和57・58年度の2ケ年に亘り実施し、奈良・古墳・縄文の3文化層を調査しました。第1次調査では、旧石器時代の石器2,000点余が検出され、調査を2ヶ月延長して対処しました。

すでに縄文時代以後については報告済みですが、本年は旧石器時代について報告します。調査により自然と調和しつつ生活を続けた先人の足跡を明らかにすることができました。

本報告書の刊行にあたり、調査実施にあたりまして種々のご配慮、ご助言を頂きました群馬県教育委員会、日本道路公団東京第二建設局をはじめとする関係各位の皆様に感謝申し上げるとともに、原始に生きた人々の解明がさらに進み、県民の皆様の生涯学習の資料として生かされることを念じつつ序文とします。

平成元年2月26日

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は関越自動車道(新潟線)建設工事に伴う勝保沢中ノ山遺跡の発掘調査報告書第2分冊である。本遺跡は先土器、縄文、古墳、奈良時代および近世にわたる複合遺跡であり、本書はこのうち旧石器(先土器)時代の調査結果を掲載している。調査に至る経過・周辺遺跡など第1分冊の記載項目と重複するため、本書では割愛している。
2. 本遺跡は、群馬県勢多郡赤城村大字勝保沢字前ノ原479～481、中ノ山1318に所在する。
3. 遺跡名については小字名のうち、中ノ山の地名を採用して冠している。
4. 発掘調査は、当事業団が日本道路公団および群馬県教育委員会と委託契約を締結し実施した。調査担当および調査期間は以下の通りである。(()内は当時の勤務・職名)

試掘調査	担当者	真下高幸(群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究員)
		小野和之(")
	期 間	1981(昭和56)年5月14日～同年8月31日
第1次調査	担当者	石坂 茂(群馬県埋蔵文化財調査事業団 調査研究員)
		飯田陽一(")
		岩崎泰一(")
	期 間	1982(昭和57)年5月6日～同年11月15日
第2次調査	担当者	茂木允視(群馬県勢多郡赤城村教育委員会 指導主事)
		都丸 肇(" ")
		山田八重子(" 嘱託員)
	期 間	1983(昭和58)年5月23日～同年7月24日
5. 発掘調査資料の整理および報告書の作成は、1987(昭和62)年2月から1989(平成1)年1月までおこなった。
6. 本書作成の担当者は次の通りである。

事務担当	白石保三郎、井上唯雄、松本浩一、上原啓己、田口紀雄、平野進一、住谷 進、定方隆史、 国定 均、笠原秀樹、小林昌嗣、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のお江、今井もと子、 松井美智子、大澤美佐保、大島敬子、小野沢春美
編 集	岩崎泰一
本文執筆	石坂 茂(I-4-1・I-5-1)、飯田陽一(I-1・2・3)、岩崎泰一
図版作成	霜田恵子、中沢芳子、神谷みや子、須田はつ江、田中精子、矢島三枝子、小野里明美、高橋 節子、福島和恵、狩野君江、南雲富子、白石典之
遺構写真	石坂 茂、飯田陽一、岩崎泰一
遺物写真	佐藤元彦、たつみ写真スタジオ
保存処理	関 邦一、北爪健二、小材浩一
遺構測量	株式会社 測研
7. ローム層の地質および火山噴出物の識別同定については、新井房夫氏(群馬大学教育学部教授)に依頼し、その分析結果を寄稿していただいた。
8. 遺物の石材鑑定は飯島静雄氏(群馬地質学研究会員)の御協力をいただいた。

9. 遺跡の花粉分析については、(株)パリオ・サーヴェイに依頼して実施した。
10. 遺物分布図の原図の作成は、(株)中央航業に依頼した。
11. 出土遺物は群馬県立埋蔵文化財センターに保管してある。
12. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言・御協力を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称は略させていただいた。五十音順)
 新井房夫、安斎正人、岡村道雄、角張淳一、佐藤宏之、白石典之、鈴木敏中、諏訪間順、堤 隆、都丸 肇、長崎潤一、中村由克、能登 健、前島秀張、茂木允視、山田八重子
13. なお、調査にあたって、作業に従事し、また多くの便宜を図って戴いた地元の方々に記して感謝いたします。

凡 例

1. 調査区域内には、工事中基準杭を使用して2×2 mグリッドを設定し、各グリッドは東西、南北ラインともにアラビア数字を付与し、その呼称は北東隅をあてた。各グリッドの国家座標上における位置は、付図の全体図中に記載した。
2. 挿図中に使用した方位は、真北である。
3. 石器の実測図は、単独出土の石器の場合には縮尺=4/5で、接合資料の場合には縮尺=1/2で、掲載した。
 なお、レイアウトの都合により写真図版では遺物の縮尺は統一されていない。
4. I章の遺物実測図面中の矢印は使用痕が確認できる範囲を、アミ点の部分は摩耗痕が確認できる範囲を、それぞれ示している。
5. 石器の接合(4-5、5-5)中の矢印は、→が打面転移を、→が同一打面よりの剥離をそれぞれ示している。
6. 石器一覧表内の石器・石材の記載は、次のように略す。
 ナイフ形石器=ナイフ、加工痕ある剥片=加剥、使用痕ある剥片=使剥、楔形石器=楔、縦長剥片=縦剥、黒色安山岩=黒安、黒色頁岩=黒頁、頁岩=頁、珪質頁岩=珪頁、黒曜石=黒、輝石安山岩(粗粒)=輝安、閃緑岩=閃緑、チャート=チ、石英閃緑岩=石閃、灰色安山岩=灰安、砂岩=砂、文象斑岩=文斑、点紋頁岩=点頁、輝緑岩=輝緑
7. 遺物分布図に使用されたマークは、次のことを表している。

◆ ナイフ形石器	■ 加工痕ある剥片	★ 敲石
◇ 楔形石器	□ 使用痕ある剥片	☆ 台石
▲ 削器・搔器	✱ 石核	☆ 磨石
△ 彫器	● 剥片	☆ 礎
○ 縦長剥片	● 碎片	

目 次

巻頭写真

序

例言

凡例

I 旧石器時代の遺構と遺物 ……2	II 科学的分析 ……265
1, 遺跡の立地と周辺の遺跡 ……2	1, テフラの同定 ……265
2, 調査区の設定と調査の方法 ……3	2, 花粉分析 ……267
3, 基本土層 ……4	
4, A地点の調査 ……5	III 成果と今後の課題 ……271
4-1, 概要 ……5	1, 赤城西麓・暗色帯出土の石器群 ……271
4-2, 土壌・倒木址 ……7	2, ブロックの形成と遺跡の構造 (A区出土石器の分析を中心に) ……281
4-3, 石器の分布 ……11	
4-4, 出土石器 ……14	付. 計測値一覧表 ……291
4-5, 石器の接合 ……54	
4-6, 母岩別資料の分布 ……102	
4-7, 出土石器群の分析 ……107	
5, B地点の調査 ……118	
5-1, 概要 ……118	
5-2, 礫の分布 ……120	
5-3, 石器の分布 ……123	
5-4, 出土石器 ……133	
5-5, 石器の接合 ……196	
5-6, 母岩別資料の分布 ……251	
5-7, 出土石器群の分析 ……254	

挿 図 目 次

第 1 図	周辺の遺跡	2	第 49 図	接合資料A-3(2)	61
第 2 図	トレンチ配置図	3	第 50 図	接合資料A-4	62
第 3 図	遺跡の基本土層	4	第 51 図	接合資料A-5(1)	63
第 4 図	1号土壌(炭化物集中地点)	7	第 52 図	接合資料A-5(2)	64
第 5 図	2号土壌・3号土壌	8	第 53 図	接合資料A-19(1)	68
第 6 図	倒木址 No.1	9	第 54 図	接合資料A-19(2)	69
第 7 図	倒木址 No.2・No.3	10	第 55 図	接合資料A-19(3)	70
第 8 図	石器の分布1(1号ブロック)	11	第 56 図	接合資料A-16(1)	折込
第 9 図	石器の分布2(2号ブロック)	12	第 57 図	接合資料A-16(2)	71
第 10 図	石器の分布3(3号ブロック)	13	第 58 図	接合資料A-16(3)	72
第 11 図	A区出土の石器(1)	14	第 59 図	接合資料A-16(4)	73
第 12 図	A区出土の石器(2)	15	第 60 図	接合資料A-16(5)	74
第 13 図	A区出土の石器(3)	18	第 61 図	接合資料A-16(6)・A-9	75
第 14 図	A区出土の石器(4)	19	第 62 図	接合資料A-20(1)	76
第 15 図	A区出土の石器(5)	22	第 63 図	接合資料A-20(2)	77
第 16 図	A区出土の石器(6)	23	第 64 図	接合資料A-66	78
第 17 図	A区出土の石器(7)	24	第 65 図	接合資料A-65・A-50	79
第 18 図	A区出土の石器(8)	25	第 66 図	接合資料A-51・A-52	80
第 19 図	A区出土の石器(9)	26	第 67 図	接合資料A-32(1)	81
第 20 図	A区出土の石器(10)	29	第 68 図	接合資料A-32(2)・A-43	82
第 21 図	A区出土の石器(11)	30	第 69 図	接合資料A-57・A-49	83
第 22 図	A区出土の石器(12)	31	第 70 図	接合資料A-47・A-58	86
第 23 図	A区出土の石器(13)	32	第 71 図	接合資料A-41・A-8・A-39	87
第 24 図	A区出土の石器(14)	33	第 72 図	接合資料A-40・A-23	88
第 25 図	A区出土の石器(15)	34	第 73 図	接合資料A-35・A-12・A-25 A-21	89
第 26 図	A区出土の石器(16)	35	第 74 図	接合資料A-7・A-45・A-22	90
第 27 図	A区出土の石器(17)	36	第 75 図	接合資料A-15・A-28・A-29 A-13・A-36・A-26・A-38	91
第 28 図	A区出土の石器(18)	39	第 76 図	接合資料の分布(A-45)	92
第 29 図	A区出土の石器(19)	40	第 77 図	接合資料の分布(A-4・A-32・ A-40・A-41)	93
第 30 図	A区出土の石器(20)	41	第 78 図	接合資料の分布(A-21・A-23・ A-47・A-49)	94
第 31 図	A区出土の石器(21)	42	第 79 図	接合資料の分布(A-5・A-9)	95
第 32 図	A区出土の石器(22)	43	第 80 図	接合資料の分布(A-20)	96
第 33 図	A区出土の石器(23)	44	第 81 図	接合資料の分布(A-1)	97
第 34 図	A区出土の石器(24)	45	第 82 図	接合資料の分布(A-52・A-53・ A-60)	98
第 35 図	A区出土の石器(25)	46	第 83 図	接合資料の分布(A-19)	99
第 36 図	A区出土の石器(26)	47	第 84 図	接合資料の分布(A-2・A-3)	100
第 37 図	A区出土の石器(27)	48	第 85 図	接合資料の分布(A-16・A-43)	101
第 38 図	A区出土の石器(28)	49	第 86 図	剝離工程図(模式図)	109
第 39 図	A区出土の石器(29)	50	第 87 図	石器の長幅比(A区)	111
第 40 図	A区出土の石器(30)	52	第 88 図	器種構成と石器石材(A区)	112
第 41 図	A区出土の石器(31)	53	第 89 図	器種構成と石器石材(ブロック別)	113
第 42 図	接合資料A-1(1)	折込	第 90 図	母岩別資料と器種構成(A区)	114
第 43 図	接合資料A-1(2)	55	第 91 図	ブロックと器種構成	115
第 44 図	接合資料A-1(3)	56			
第 45 図	接合資料A-2(1)	57			
第 46 図	接合資料A-2(2)	58			
第 47 図	接合資料A-2(3)	59			
第 48 図	接合資料A-3(1)	60			

第92図	母岩と器種構成(1).....	116	第143図	B区出土の石器(37).....	179
第93図	母岩と器種構成(2).....	117	第144図	B区出土の石器(38).....	180
第94図	礫の分布(Ⅰ区).....	120	第145図	B区出土の石器(39).....	181
第95図	礫の分布1(Ⅲ区).....	121	第146図	B区出土の石器(40).....	182
第96図	礫の分布2(Ⅲ区).....	122	第147図	B区出土の石器(41).....	183
第97図	石器の分布1(1号・2号ブロック).....	124	第148図	B区出土の石器(42).....	184
第98図	石器の分布2(3号ブロック).....	125	第149図	B区出土の石器(43).....	185
第99図	石器の分布3(4号・5号ブロック).....	126	第150図	B区出土の石器(44).....	186
第100図	石器の分布4(6号ブロック).....	折込	第151図	B区出土の石器(45).....	187
第101図	石器の分布5(7号ブロック).....	127	第152図	B区出土の石器(46).....	188
第102図	石器の分布6(8号ブロック).....	128	第153図	B区出土の石器(47).....	189
第103図	石器の分布7(10号ブロック).....	128	第154図	B区出土の石器(48).....	190
第104図	石器の分布8(9号ブロック).....	129	第155図	B区出土の石器(49).....	191
第105図	石器の分布9(11号ブロック).....	131	第156図	B区出土の石器(50).....	194
第106図	石器の分布10(12号ブロック).....	132	第157図	B区出土の石器(51).....	195
第107図	B区出土の石器(1).....	133	第158図	接合資料B-14(1).....	197
第108図	B区出土の石器(2).....	134	第159図	接合資料B-14(2)・B-119.....	198
第109図	B区出土の石器(3).....	139	第160図	接合資料B-15(1).....	199
第110図	B区出土の石器(4).....	140	第161図	接合資料B-15(2).....	200
第111図	B区出土の石器(5).....	141	第162図	接合資料B-15(3).....	201
第112図	B区出土の石器(6).....	142	第163図	接合資料B-22(1).....	202
第113図	B区出土の石器(7).....	143	第164図	接合資料B-22(2).....	203
第114図	B区出土の石器(8).....	144	第165図	接合資料B-22(3).....	204
第115図	B区出土の石器(9).....	145	第166図	接合資料B-22(4).....	205
第116図	B区出土の石器(10).....	147	第167図	接合資料B-59(1).....	207
第117図	B区出土の石器(11).....	148	第168図	接合資料B-59(2).....	208
第118図	B区出土の石器(12).....	149	第169図	接合資料B-59(3)・B-19.....	209
第119図	B区出土の石器(13).....	150	第170図	接合資料B-114.....	210
第120図	B区出土の石器(14).....	154	第171図	接合資料B-23.....	211
第121図	B区出土の石器(15).....	155	第172図	接合資料B-44.....	212
第122図	B区出土の石器(16).....	156	第173図	接合資料B-17(1).....	214
第123図	B区出土の石器(17).....	157	第174図	接合資料B-17(2).....	215
第124図	B区出土の石器(18).....	158	第175図	接合資料B-17(3)・B-18.....	216
第125図	B区出土の石器(19).....	159	第176図	接合資料B-66(1).....	217
第126図	B区出土の石器(20).....	160	第177図	接合資料B-66(2)・B-68.....	218
第127図	B区出土の石器(21).....	161	第178図	接合資料B-63(1).....	219
第128図	B区出土の石器(22).....	162	第179図	接合資料B-63(2)・B-120.....	220
第129図	B区出土の石器(23).....	163	第180図	接合資料B-70.....	222
第130図	B区出土の石器(24).....	164	第181図	接合資料B-64(1).....	223
第131図	B区出土の石器(25).....	166	第182図	接合資料B-64(2)・B-50.....	224
第132図	B区出土の石器(26).....	167	第183図	接合資料B-115.....	225
第133図	B区出土の石器(27).....	168	第184図	接合資料B-26・B-24.....	226
第134図	B区出土の石器(28).....	169	第185図	接合資料B-16.....	228
第135図	B区出土の石器(29).....	170	第186図	接合資料B-65(1).....	229
第136図	B区出土の石器(30).....	171	第187図	接合資料B-65(2)・B-116.....	230
第137図	B区出土の石器(31).....	172	第188図	接合資料B-73・B-69.....	231
第138図	B区出土の石器(32).....	173	第189図	接合資料B-117・B-52・B-71.....	234
第139図	B区出土の石器(33).....	174	第190図	接合資料B-84・B-51・B-75.....	235
第140図	B区出土の石器(34).....	176	第191図	接合資料B-76・B-20・B-56・ B-58.....	236
第141図	B区出土の石器(35).....	177	第192図	接合資料B-118・B-25・B-107.....	237
第142図	B区出土の石器(36).....	178			

第193図	接合資料B-21・B-27	238
第194図	接合資料の分布(B-59・B-63・ B-56・B-86)	241
第195図	接合資料の分布(B-25・B-50・ B-119・B-116・B-68・B-69)	242
第196図	接合資料の分布(B-73・B-71・ B-118・B-120・B-115)	243
第197図	接合資料の分布(B-17)	244
第198図	接合資料の分布(B-70・B-65)	245
第199図	接合資料の分布(B-64)	246
第200図	接合資料の分布(B-16・B-18)	247
第201図	接合資料の分布(B-44・B-66)	248
第202図	接合資料の分布(B-23・B-19)	249
第203図	接合資料の分布(B-14)	250
第204図	接合資料の分布(B-15)	折込
第205図	接合資料の分布(B-22)	折込
第206図	剝離工程図(模式図)	255
第207図	石器の長幅比(B区)	257
第208図	器種構成と石器石材(B区)	258

第209図	器種構成と石器石材(ブロック別)1	259
第210図	器種構成と石器石材(ブロック別)2	260
第211図	母岩別資料と器種構成(B区)	261
第212図	ブロックと器種構成(1)	262
第213図	ブロックと器種構成(2)	263
第214図	母岩と器種構成	264
第215図	土層の堆積(模式図)	265
第216図	試料採取地点柱状図	267
第217図	花粉化石群集の変遷	269
第218図	ローム層の堆積状態	272
第219図	赤城山西麓出土の石器	273
第220図	諏訪西遺跡出土の剥片形状	274
第221図	土層堆積と石器の垂直分布(1)	276
第222図	土層堆積と石器の垂直分布(2)	277
第223図	石器石材の入手と石材組成	279
第224図	母岩別資料の分布1(A区)	283
第225図	母岩別資料の分布2(A区)	284
第226図	石器の搬入と石材の消費	285
第227図	砂川遺跡に於ける石材の消費過程	287

表 目 次

第1表	ブロックと器種組成(A区)	6
第2表	礫石器一覧表・石材と重量	119
第3表	ブロックと器種組成(B区)	119

第4表	花粉分析試料表	267
第5表	花粉分析結果	270
第6表	県内出土石器群の変遷	275

写 真 目 次

PL 1	遺跡の遠影
PL 2	1 土層の堆積状態(1)
	2 A区・第3区の調査
	3 土層の堆積状態(2)
	4 土層の逆転現象 No.1(確認状態)
	5 土層の逆転現象 No.1(土層の堆積状態)
	6 土層の逆転現象 No.1(完掘状態)
	7 土層の逆転現象 No.1(遺物の出土状態)
PL 3	1 土層の逆転現象 No.2(確認状態)
	2 土層の逆転現象 No.2(土層の堆積状態)
	3 土層の逆転現象 No.2(完掘状態)
	4 2・3号土壙(確認状態)
	5 2・3号土壙(完掘状態)
	6 3号土壙(完掘状態)
	7 1号ブロック(遺物と出土層位)

	8 1号ブロック(遺物の分布状況)
PL 4	1 2号ブロック(遺物の分布状況、西側から)
	2 2号ブロック(遺物の分布状況、北側から)
	3 2号ブロック(遺物の出土状態1)
	4 2号ブロック(遺物の出土状態2)
	5 3号ブロック(遺物と出土層位1)
	6 3号ブロック(遺物と出土層位2)
	7 グリッド出土の遺物(1)
	8 グリッド出土の遺物(2)
PL 5	A区出土の石器(1)
PL 6	A区出土の石器(2)
PL 7	A区出土の石器(3)
PL 8	A区出土の石器(4)
PL 9	A区出土の石器(5)
PL 10	A区出土の石器(6)

P L 11	A区出土の石器(7)	P L 28	B区出土の石器(8)
P L 12	1 A区出土の石器(8)	P L 29	B区出土の石器(9)
	2 A区出土の接合資料(1)	P L 30	B区出土の石器(10)
P L 13	A区出土の接合資料(2)	P L 31	B区出土の石器(11)
P L 14	A区出土の接合資料(3)	P L 32	B区出土の石器(12)
P L 15	A区出土の接合資料(4)	P L 33	B区出土の石器(13)
P L 16	A区出土の接合資料(5)	P L 34	B区出土の石器(14)
P L 17	A区出土の接合資料(6)	P L 35	B区出土の石器(15)
P L 18	A区出土の接合資料(7)	P L 36	B区出土の石器(16)
P L 19	1 B地点の調査風景	P L 37	B区出土の石器(17)
	2 7・11号ブロック(遺物の出土状態1)	P L 38	B区出土の石器(18)
	3 7・11号ブロック(遺物の出土状態2)	P L 39	1 B区出土の石器(19)
	4 12号ブロック出土の石核		2 B区出土の接合資料(1)
	5 7号ブロック出土の石核	P L 40	B区出土の接合資料(2)
P L 20	1 土層の堆積状態	P L 41	B区出土の接合資料(3)
	2 3号ブロック(遺物の出土状態)	P L 42	B区出土の接合資料(4)
	3 3号ブロック出土の石器(1)	P L 43	B区出土の接合資料(5)
	4 3号ブロック出土の石器(2)	P L 44	B区出土の接合資料(6)
	5 3号ブロック出土の石器(3)	P L 45	B区出土の接合資料(7)
	6 礫の出土状態(1号ブロック、南側から)	P L 46	1 A・B区出土の礫石器・類型A(1)
	7 礫の出土状態(1号ブロック、北側から)		2 A・B区出土の礫石器・類型B(2)
P L 21	B区出土の石器(1)	P L 47	1 A・B区出土の礫石器・類型C(3)
P L 22	B区出土の石器(2)		2 石器断面の状態・類型B(1)
P L 23	B区出土の石器(3)		3 石器断面の状態・類型B(2)
P L 24	B区出土の石器(4)		4 石器断面の状態・類型C(3)
P L 25	B区出土の石器(5)		5 石器断面の状態・類型C(4)
P L 26	B区出土の石器(6)	P L 48	調査風景
P L 27	B区出土の石器(7)		

付 図 目 次

付図1	出土石器の分布(全体図)	付図9	母岩別資料の分布6、A区 (黒色頁岩-1~8)
付図2	A区出土の石器分布	付図10	母岩別資料の分布7、A区 (頁岩-1、珪頁-1、輝緑岩-1・2)
付図3	B区出土の石器分布	付図11	母岩別資料の分布8、B区 (黒色安山岩-1)
付図4	母岩別資料の分布1、A区 (黒色安山岩-1・6)	付図12	母岩別資料の分布9、B区 (黒色頁岩-11・12)
付図5	母岩別資料の分布2、A区 (黒色安山岩-2・7)	付図13	母岩別資料の分布10、B区 (黒色頁岩-13・14、頁岩-1)
付図6	母岩別資料の分布3、A区 (黒色安山岩-3)	付図14	母岩別資料の分布11、B区 (輝石安山岩(粗粒)-1、黒色頁岩-16)
付図7	母岩別資料の分布4、A区 (黒色安山岩-4・9・10)	付図15	母岩別資料の分布12、B区 (チャート-1~3、メノウ、雲片)
付図8	母岩別資料の分布5、A区 (黒色安山岩-5)		

勝保沢中ノ山遺跡II

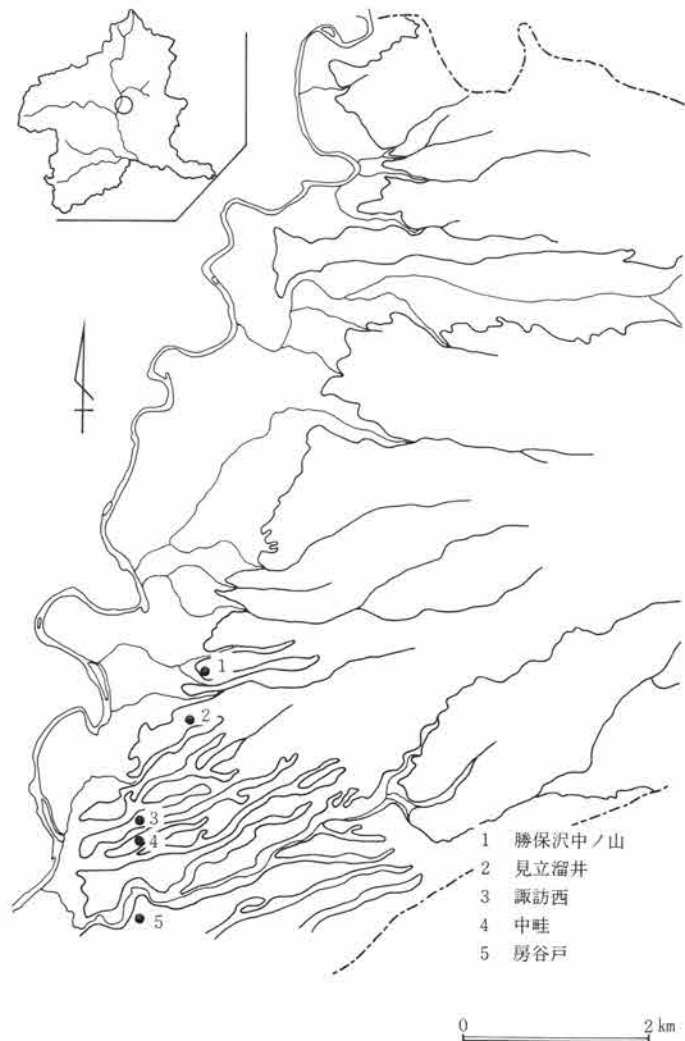
I 旧石器時代の遺構と遺物

1, 遺跡の立地と周辺の遺跡

勝保沢中ノ山遺跡は赤城山の西側・山麓端部に所在する。新世代第三紀に由来する火砕流堆積物を基盤とする赤城山西麓には、大小の河川や湧水による開析谷が存在する。赤城山麓には著しい開析がみられるが、南麓では狭長な丘陵性台地を形成するのに対し、西麓では広大な丘陵性台地が形成されるという、一般的な地形観の相違がみられる。勝保沢中ノ山遺跡の所在する赤城山西麓について詳細にみるならば、遺跡周辺の諏訪沢以南ではU字状の開析谷と狭長な丘陵性台地が、諏訪沢(川)以北では比高差の著しいV字状の開析谷が形成されるなど、本遺跡周辺を境に地形観が相違している。

本遺跡の周辺には、4ヶ所の旧石器時代遺跡(第1図)が確認され、とりわけ、見立溜井遺跡(第1図2)では計4枚の文化層が検出され、文化層の重複頻度が低い県内出土の石器群の中で、数少ない文化層(石器群)の複合する事例といえる。また、諏訪西遺跡(第1図3)や中畦遺跡(第1図4)ではAT降灰以前の「暗色帯」より石器群が出土しているほか、房谷戸遺跡(第1図5)ではAs-YP直上より大型尖頭器が、「暗色帯」よりナイフ形石器が出土しているほか、HA(八崎火山灰層)とHP(八崎降下軽石層)の間のロームより2点の石器が出土している。

以上、勝保沢中ノ山遺跡の立地する赤城山西麓の地形観や周辺の遺跡について、概要を記述した。関越道(新潟線)は赤城山西麓端部を縦断するため、長大な試掘坑とも言える埋蔵文化財の発掘調査によって、山麓端部における遺跡の動態や様相を知る絶好の機会であったが、比高差が著しく、V字状の開析谷の存在する地域(赤城村・勝保沢中ノ山遺跡以北、昭和村中棚遺跡以南)の遺跡は、十分な調査がおこなわれていない。わずかに、長井坂城址遺跡の調査があり、この地域での遺跡の様相を知ることができるが、資料不足の感は拭えない。さらに、東西方向の河川に沿う地域での遺跡の調査事例はなく、明確ではない。今後は、河川を単位とするような遺跡の動態を明らかにする必要がある。(飯田)

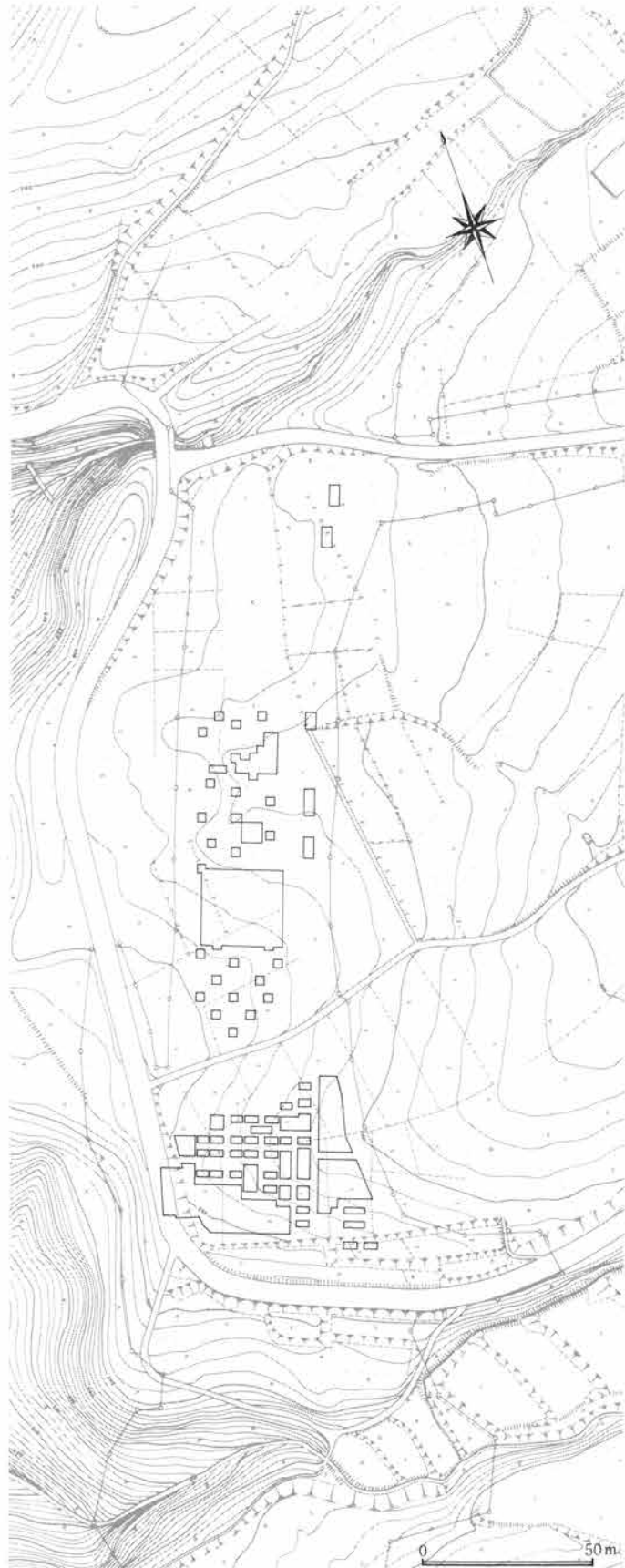


第1図 周辺の遺跡

2. 調査区の設定と調査の方法

丘陵性台地の先端に位置することや、良好なローム層の堆積が認められることから、本遺跡では旧石器時代・石器群の有無を確認する必要があった。縄文時代(VI層)を対象とする調査の終了した後、旧石器時代・石器群を対象とする調査を実施した。第一次調査(事業団対応)では、 2×4 mのトレンチを設定(第2図)し、試掘調査をおこなうこととし、石器群の存在が予想される構造物部分(A区)を主な対象に調査を実施した。その結果、92-A-18グリッド付近の15層中より石器が出土し、旧石器時代・石器群が存在すること、石器包含層まで1.5mを測ることが明らかとなった。そのため、As-BP・14層までを第一段階、HP・22層までを第二段階、以下の調査を第三段階とし、調査を実施することとした。出土遺物には、遺物集中区毎に連続する番号を与え、遺物の出土状況・集合状態を把握しながら調査の進行を計った。

側道部分の調査(第一次調査)結果より、旧石器時代・石器群の存在は予想されなかったが、第二次調査(村教育委員会対応)では、予想に反し広範な石器群の分布が確認され、以下の方法により調査をおこなった。本線部分(B・C区)を対象に2mグリッドを設定し、試掘調査をおこなった。その結果、A・B・C区にはほぼ同様なローム層の堆積が認められること、15層より17層にかけて3地点より石器群の出土することが明らかとなった。14層までには石器群の存在が認められないため大形掘削機械を用い、14層までを除去し、第1次調査と同様な方法により調査をおこなった。(飯田)

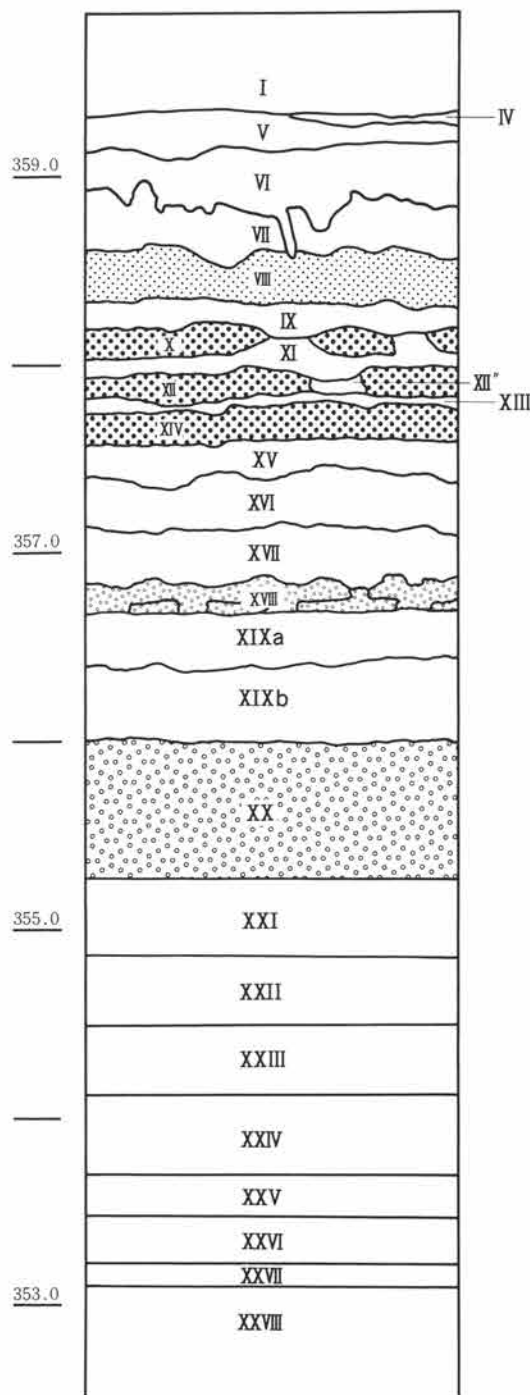


第2図 トレンチ配置図

3, 基本土層(第3図)

新世代第3紀に由来する火砕流堆積物を基盤とする赤城山西麓には、大小の河川や湧水による開析がみられる。沼尾川以北の北西側では比高差の著しいV字状の開析谷が形成され、広大な丘陵性台地が展開するのに対し、沼尾川以南の南西側ではU字状の開析谷と狭小な丘陵性台地からなる複雑な地形観を呈する。遺跡および周辺の遺跡では地点により土層の堆積状態が相違する場合も見受けられるが、ほぼ同様な土層の堆積状態を示し、対比は比較的容易である。ここでは、A区東側(75-A-30グリッド)における土層の堆積状態を遺跡の基本土層として示す(第3図)。各々のテフラについては第II章第1節で詳述する。(飯田)

- 第I層 表土層。
- 第II層 ニツ岳降下軽石層(FP)。
- 第III層 黒色土層。
- 第IV層 ニツ岳火山灰層(FA)。
- 第V層 黒褐色土層。
- 第VI層 暗褐色土層。
- 第VII層 黄褐色硬質ローム層。白色パミスを混入する。
- 第VIII層 白糸降下軽石層(SP)。
- 第IX層 褐色ローム層。白色パミスおよび砂状粒子を混入する。やや軟質である。
- 第X・XII・XIV層 板鼻褐色軽石層(BP)。
- 第XI・XIII層 褐色ローム層。部分的には砂状粒子および灰白色ロームが認められる。やや軟質である。
- 第XV層 暗褐色ローム層。0.5cmほどの白色パミス・黒色鉱物粒子をわずかに混入する。上面には多量の炭化物が認められる。石器包含層。
- 第XVI層 暗褐色ローム層。0.5cmほどの白色パミス・赤色パミスをわずかに混入する。鉱物分析の成果により、XV層上位部分には始良Tn火山灰(AT)の極大値が認められる。石器包含層。
- 第XVII層 暗褐色ローム層。0.5cmほどの白色パミスを混入する。XVI層より暗い色調を呈す。石器包含層。



第3図 遺跡の基本土層

- 第XVII層 八崎火山灰層(HA)。上位部分の白色軽石と下位部分の白色火山灰層よりなる。
- 第XIX層 褐色硬質ローム層。白色パミスを混入するが、上位部分(a層)にはパミスの混入は少なく、下位部分(b層)には多い。給源となる火山は不明であるが、中位部分には赤褐色パミスおよびスコリアが認められる。
- 第XX層 八崎軽石層(HP)。
- 第XXI層 褐色ローム層。白色パミスをわずかに混入する。やや軟質で、粘性に富む。
- 第XXII層 褐色硬質ローム層。赤色スコリアのブロックおよび粒子を混入する。
- 第XXIII層 褐色硬質ローム層。黒色スコリアを多く混入する。
- 第XXIV層 褐色ローム層。黒色スコリアを混入する。やや軟質で、粘性に富む。
- 第XXV層 褐色ローム層。黒色スコリアを混入する。上層よりやや暗い色調を呈す。
- 第XXVI層 褐色硬質ローム層。上位部分に灰白色火山灰をわずかに混入する。
- 第XXVII層 灰黄色軽石層。パミスは径0.1~1.0cmほどである。

4, A地点の調査

4-1, 概要

A区出土の石器は総計1,772点が出土している。石器群は、調査区・西南端の村道に沿う地点より2ヶ所のブロック(2号ブロック・3号ブロック)が、調査区・東端より1ヶ所のブロック(1号ブロック)が検出され、およそ50mの距離を隔て、ブロックは存在する。地形的には、2号ブロック・3号ブロックは丘陵性台地の南側斜面に、1号ブロックは丘陵性台地の北側斜面に、それぞれ展開する。縄文時代前期の遺構検出面の地形傾斜に比べ、旧石器時代・石器包含層(暗色帯)の地形の傾斜はやや平坦で、両時代の地形観には若干の相違がみられる。

石器の分布は、調査区・南西端に集中し、東端部分で散漫な分布状態を示す。第2図に示されるように、調査区の東側へ石器群が延び、調査範囲外にも石器が分布する可能性があるが、設定したトレンチ(4mを単位とし、その北側にトレンチを設定)内からは、3ヶ所以外のブロックを確認することができなかったことからみて、本調査によってほぼ単位的な石器群を把握されたものと思われる。3ヶ所のブロックのうち、2号ブロックおよび3号ブロックには、ブロックに2ヶ所の集中部が存在し、ブロックが細分される可能性がある。

出土した石器の石材は、全体の90%を黒色安山岩が占め、他に黒色頁岩(4%)や頁岩(1%)、輝緑岩・黒曜石・珪質頁岩がわずかにみられる。上述した石材の在り方は赤城山南麓や西麓に立地し、「暗色帯」(AT降灰以前)に出土する石器群には一般的であり、それ以後の上位の石器群が多様な石器石材よりなることと著しく異なり、対照的である。石器群には、多量の剥片(全体の24%)や碎片(全体の66%)が出土しており、全体の90%を占めている。器種組成は比較的単純で、ナイフ形石器・2種を主体に、削器・搔器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片が出土している。

出土した石器のうち、石器群の指導的な石器となっているナイフ形石器には、素材剥片を縦位に使用する柳葉形状を呈するナイフ形石器A群と素材剥片を横位に使用する台形状ないし切出状を呈するナイフ形石器B群が存在し、A・B両群とも同一の母岩より作出され、共存する。ナイフ形石器A群には、「基部加工のナ

I 旧石器時代の遺構と遺物

「ナイフ形石器」と「側縁加工のナイフ形石器」が存在する。ナイフ形石器A群には細分形態2種が確認され、基部加工のナイフ形石器には長野県杉久保遺跡出土の石器に類似する特徴が、側縁加工のナイフ形石器には大形の剥片を素材に作出されるという特徴が、それぞれみられる。一方、ナイフ形石器B群には、平坦な剥離を裏面基部に施す一群を除き細分形態2種が検出され、台形状ないし切出状を呈する一群(I類)を主体とし、剥片の先端部や側縁部に調整加工を施す一群(III類)が少数存在する。削器などの第二次生産具には、浅く粗い調整加工が表面側から裏面側へ向け、施される場合が多い。なお、ナイフ形石器は2号ブロックで、削器などの加工具は3号ブロックで、それぞれ作出されることが多い。

接合資料により確認される剥片剥離には、縦長の剥片を主体に剥離する工程と、横長の剥片を主体に剥離する工程の両者が存在する。剥離作業は平坦な打面(自然面ないし剥離面)とし、打撃面および作業面を固定し、打点を左右に大きく振りながら徐々に後退する剥離手法が主体を占め、盤状の剥片を石核素材に剥離をおこなう資料も、わずかではあるが存在する。接合資料には、縦長剥片を剥離する工程と、横長剥片を剥離する工程が同一の母岩に共存する資料がみられる。接合資料は65例442点が確認され、ブロック内での接合を主体とする一方で、ブロック間で接合する資料も存在し、50mの距離を隔て接合する資料を確認している。

また、接合作業を通し、22種に及ぶ母岩別資料の存在が確認されたが、その中には、原石の状態にまで復元可能な事例も多く、これまでになく確実な母岩別資料の分類を可能にしている。22種の母岩別資料は、2号ブロック・3号ブロックを主体とし分布する。このうち、4例は2号ブロックおよび3号ブロックに分布し、共に母岩を共有する関係が存在する。

遺構関係には、3ヶ所のブロックのほかに、明確な掘り込みを伴う3ヶ所の土壌や、自然営力に起因する4ヶ所の倒木址が検出されている。3基の土壌のうち、調査区・南西端の2基の土壌は、形状や規模の類似性が認められ、掘り込み状態も明確であることから、旧石器時代には数少ない人為的遺構として資料を呈示することができる。また、調査区・東端に位置する1基の土壌は、明確な掘り込みを持ち、その埋没土中に多量の炭化物粒を混入するが、調査区内にはほかにこれと同様な「落ち込み」はみられず、壙底には著しい凹凸が存在することや、As-BP直下(15層上面)の炭化物の存在は周辺地域に普遍的・一般的な現象であり、混入する可能性もあること、などから人為的遺構であるかどうか断定できない。4ヶ所の倒木址は、尾根上の平坦部に検出され、土層の逆転現象を明確に確認している。埋没土中の遺物の検出はないが、倒木址・No.2より、ナイフ形石器1点と石核1点を検出している。(石坂)

	ナイフ 形石器	削器	搔器	楔形 石器	加工痕 有剥片	使用痕 有剥片	石核	縦長 剥片	剥片	碎片	礫	磨石	敲石	合計
1ブロック		1							11					12
2ブロック	17				3		15	27	243	538	21	1	1	866
3ブロック	3	4	1	1	6	5	10	16	137	604	28		4	819
ブロック外					4	1	5	6	20	27	10	1	1	75
合計	20	5	1	1	13	6	30	49	411	1,169	59	2	6	1,772

第1表 ブロックと器種組成

4-2, 土壌・倒木址

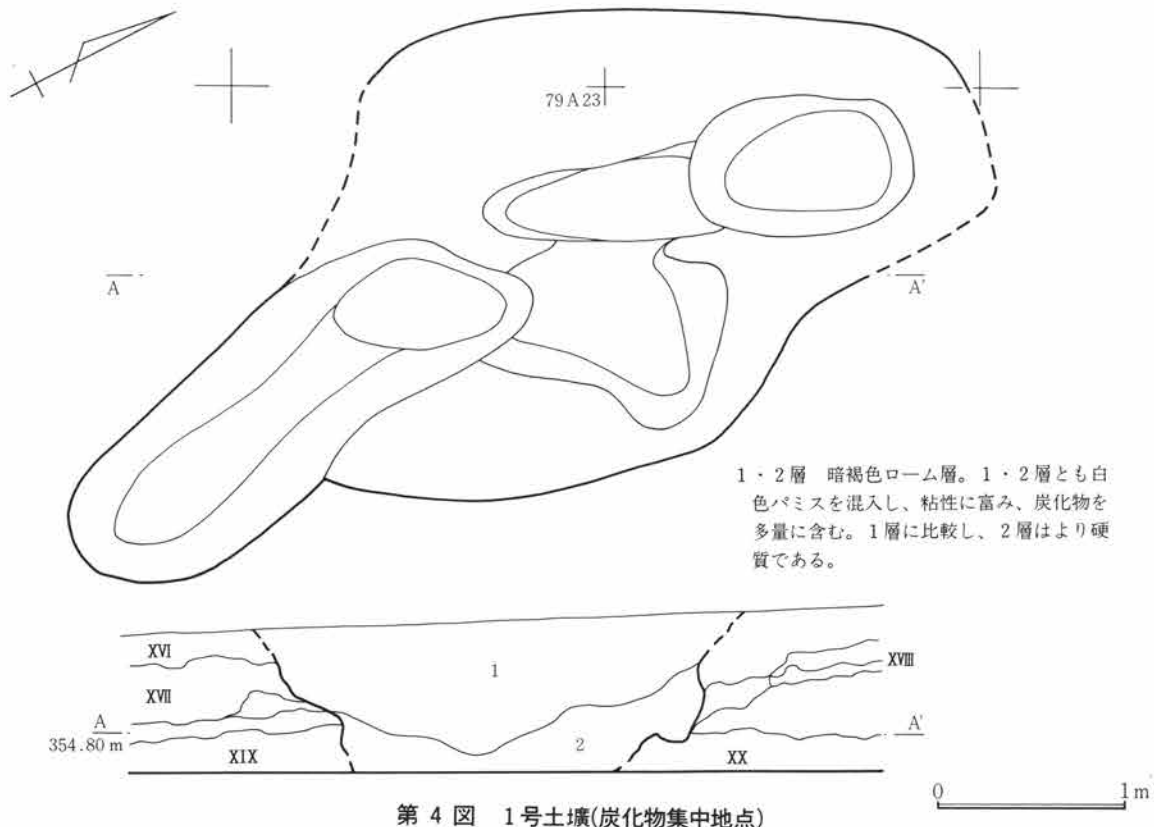
調査の過程において、土壌3基(炭化物集中地点を含む)・倒木址3基が検出された。いずれもXVII層あるいはXVIII層上面で比較的容易に確認された(PL2・PL3参照)。これらのほか、XVIII層上面より性格を明らかにすることの困難な落ち込み(5カ所)が確認され、このなかには土層の堆積状態よりローム層の逆転現象を示す事例も認められるが、成因を明確には判断しかねるためここでは除外した。1号土壌・炭化物集中地点(第4図)

本土壌は調査区東側の77・78-A-23・24グリッドに位置する。土壌は長軸5.4m・短軸2.2m・深さ0.9~1.1mを測り、概ね、長楕円形状を呈する。壙底には著しい凹凸が認められる。埋没土層は炭化物を多量に混入し、XV層およびXVI層に類似する。上面にはXIV層(BP)がレンズ状に厚く堆積する。埋没土層中より遺物の出土はない。土層断面より、本土壌の形成はXVII層堆積以後、XIV層堆積以前に限定される。

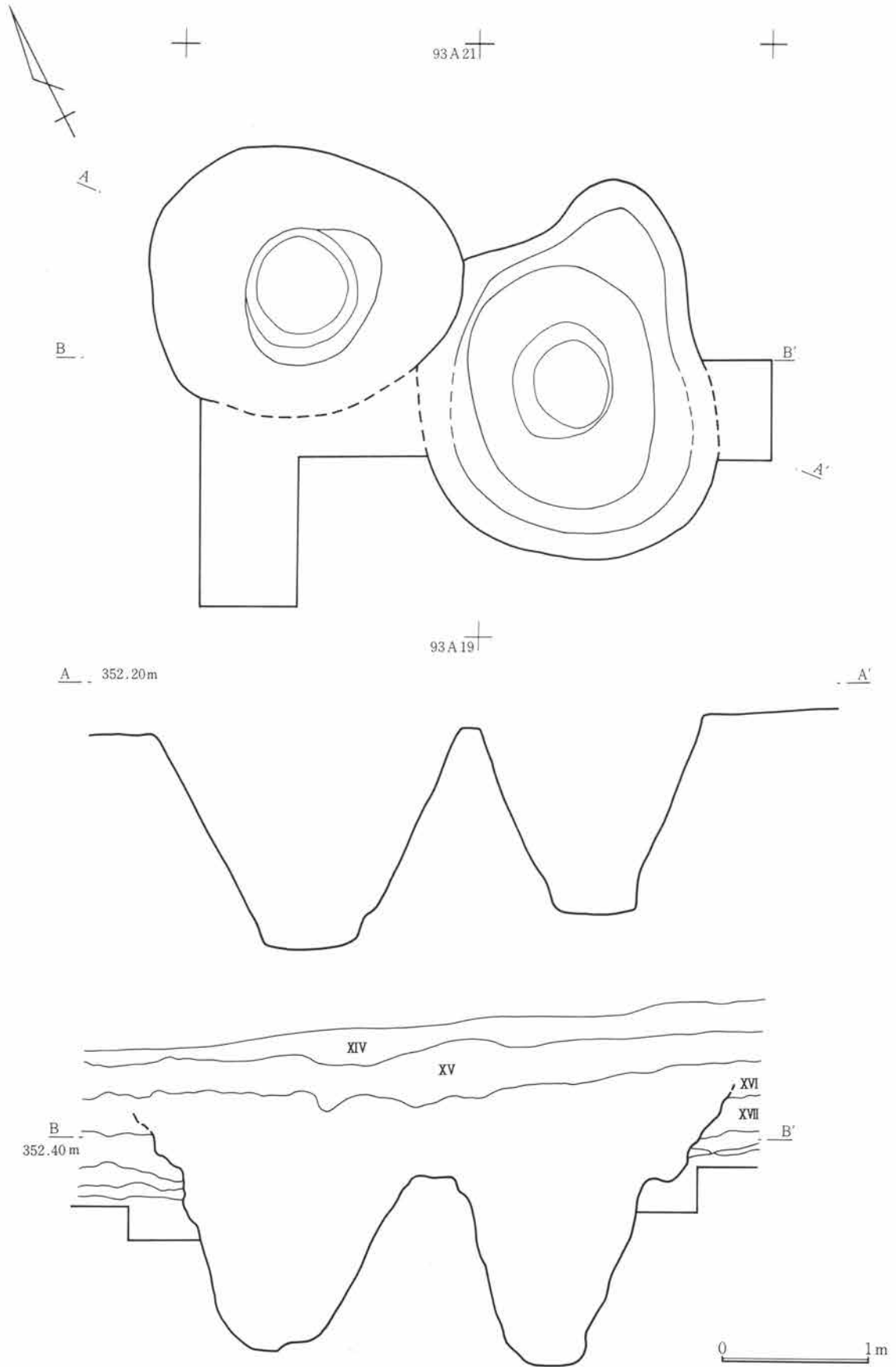
本土壌は明瞭であるものの、XV層上面における炭化物の存在は赤城山西麓での普遍的様相を呈し、自然現象と理解され、埋没土中の炭化物はXV層上面の炭化物との因果関係が指摘されることや、規模が著しく大きいこと、など人為的な所産としての可能性を否定する要素も存在する。

2号土壌(第5図、PL3)

本土壌は93-A-20・21グリッドに位置する。3号土壌に隣接し、2号ブロックの北側に位置する。土壌は長軸2.14m・短軸1.86m・深さ1.44m(壙底では長軸0.7m・短軸0.64m)を測り、概ね、形状は円形を基調とする。土壌は明瞭であり、八崎火山灰層(XVIII層・層厚16cm)および八崎軽石層(XX層・層厚72cm)を掘り込む。土壌は八崎軽石層下位よりくびれ、漏斗状の断面形状を示す。XVIII層上面で確認された。埋没土層は白色パミスを混入する暗褐色ロームを主体とし、下層ではより硬質である。埋没土中の遺物の出土はない。



I 旧石器時代の遺構と遺物



第 5 図 2号土坑・3号土坑

3号土壌(第5図、PL3)

本土壌は92-A-20・21グリッドに位置する。2号土壌に隣接し、2号ブロックの北側に位置する。土壌は長軸2.60m・短軸1.86m・深さ1.38m(壙底では長軸0.6m・短軸0.52m)を測り、概ね、形状は円形を基調とする。土壌は明瞭であり、八崎火山灰層および八崎軽石層を掘り込む。土壌は八崎軽石層下位よりくびれ、漏斗状の断面形状を示す。XVIII層上面で確認された。埋没土層は白色パミスを混入する暗褐色ロームを主体とし、下層ではより硬質である。埋没土中の遺物の出土は認められなかった。

倒木址 No.1(第6図、PL2・3)

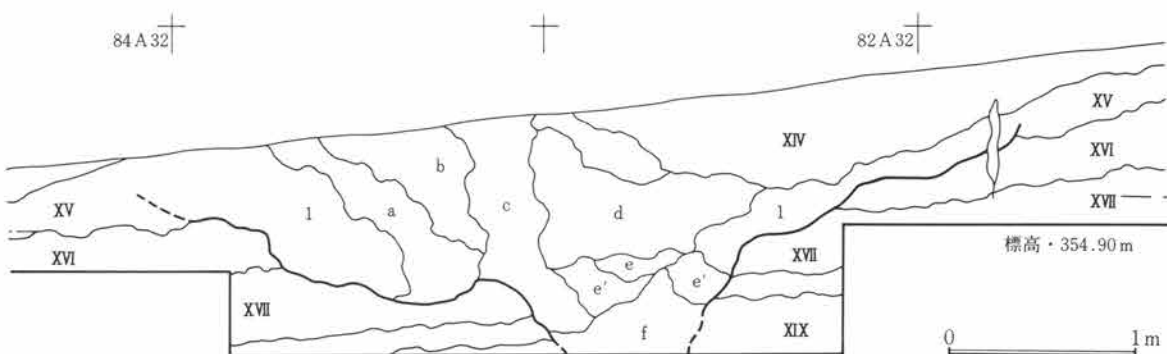
本址は92-A-18・19グリッドに位置し、2号ブロックと重複する。XVII層上面で確認され、長軸2.44m・短軸1.88m・深さ0.66mを測り、概ね、楕円形状を呈する。壁は明瞭に把握されるが、西側では緩く立ち上がり、U字状の断面形状を示す。土層断面より判断するならば、XVIII層より上位のローム層が逆転し、XV・XVI層が流れ込むかのように埋没し、本址の形成はXV・XVI層の堆積以前と推察される。埋没土中の暗褐色ロームよりナイフ形石器・石核・剥片が各々1点出土している。

倒木址 No.2(第7図、PL2・3)

本址は83・84-A-25・26グリッドに位置し、1号ブロックおよび2号ブロックとはおよそ20mの距離を隔て、検出された。XVII層上面で確認され、長軸3.6m・短軸3.2m・深さ0.6mを測り、概ね、楕円形状を呈する。壙底は凹凸が激しく、壁は緩く立ち上がり、皿状の断面形状を示す。土層断面より判断するならば、XVIII層より上位のローム層が逆転し、XV・XVI層が流れ込むかのように埋没し、本址の形成はXV・XVI層の堆積以前と推察される。埋没土中の遺物の出土は認められなかった。

倒木址 No.3(第7図、PL2・3)

本址は83-A-32グリッドに位置し、およそ10mの距離を隔て、1号ブロックの西側に検出された。土層断面での観察ではあるが、径3mほどの不整形円形状を呈するものと思われる。壙底は凹凸が激しく、壁は緩く立ち上がり、皿状の断面形状を示す。土層断面より判断するならば、XVIII層より上位のローム層が逆転し、XV・XVI層が流れ込むかのように埋没し、本址の形成はXV・XVI層の堆積以前と推察される。埋没土中の遺物の出土は認められなかった。



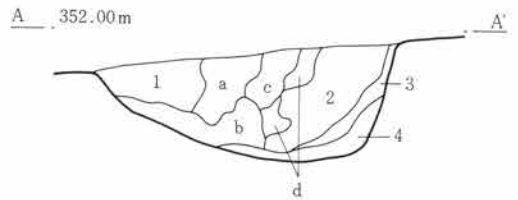
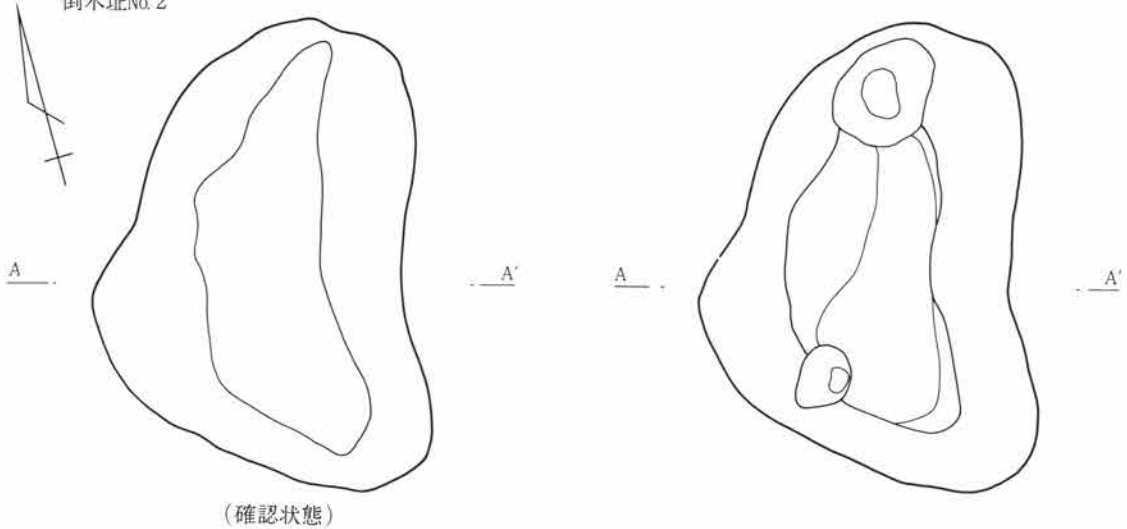
1層 暗褐色ローム層。炭化物をわずかに混入し、粘性に富む。XV層に類似する。

a～f層 ローム層の反転部分。a～d層は白色パミスを混入する。暗褐色土であり、白色パミスの混入はa層で少なく、d層で多い。全体にやや明るい色調を呈す。a～d層はXVII層に相当する。e・e'層はXVIII層に相当し、白色パミスを多量に混入する。

第6図 倒木址 No.1

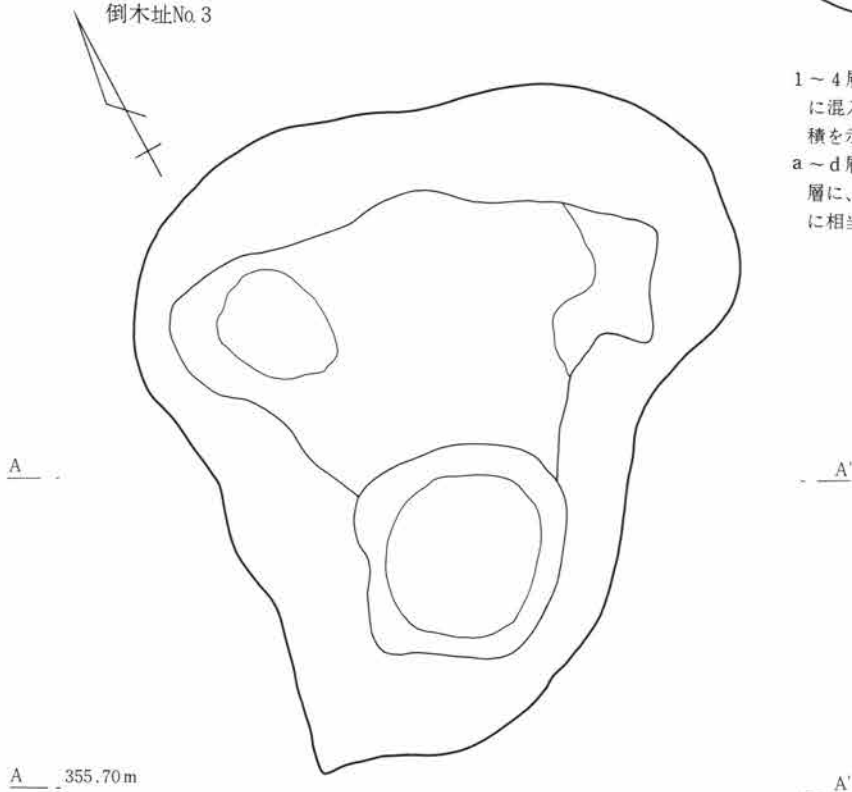
I 旧石器時代の遺構と遺物

倒木址No. 2

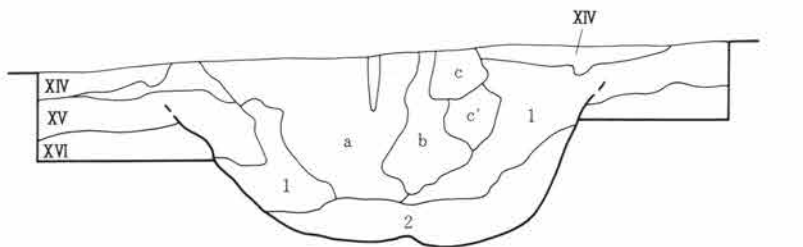


1～4層 暗褐色ローム層の炭化物をわずかに混入し、粘性に富む。1～4層は自然堆積を示す。4層はより硬質である。
 a～d層 ローム層の反転部分。a層はXVI層に、b・c層はXVII層に、d層はXVIII層に相当する。

倒木址No. 3



0 1m



1～2層 暗褐色ローム層。炭化物をわずかに混入し、粘性に富む。XV層に類似する。
 2層は、白色パミスの混入がより多い。
 a～c層 ローム層の反転部分。a層はXVII層に、b・c層はXVIII層に類似する。

第7図 倒木址 No. 2・No. 3

4-3, 石器の分布

1号ブロック(第8図、PL3)

本ブロックは77・78-A-33・34グリッドに位置する。台地中央よりやや北側の緩斜面に検出され、2・3号ブロックとはおよそ40mの距離を隔て位置する。ブロックは5.8m²ほどの範囲(長軸4.4m・短軸1.6m)に、概ね、略楕円形状に分布し、散漫な分布状況を示す。石器はXV層下位からXVI層上位にかけて出土し、およそ15cmの高低差を示す。石器はXVI層上位に最も多く出土している。

ブロックは総計12点の石器が出土しており、削器1点(30)・剥片11点が組成する。いずれも黒色安山岩を素材とし、母岩別資料2種類(黒色安山岩3が4点、黒色安山岩5が7点)、母岩の不明な資料1点からなる。石器の接合は3例が確認され、その内訳は2号ブロックと接合関係のあるもの2例(黒色安山岩3)、3号ブロックと接合関係にあるもの1例(黒色安山岩5)である。

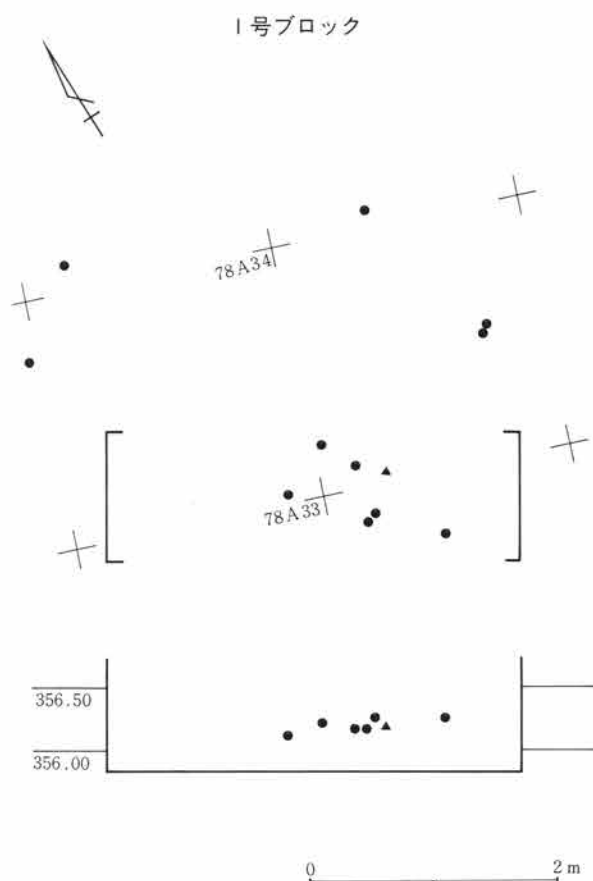
2号ブロック(第9図、PL4)

本ブロックは90・91・92-A-17・18・19グリッドに位置する。南側台地の緩斜面に検出され、隣接する3号ブロックとはおよそ6mの距離を隔て位置する。ブロックは36.7m²ほどの範囲(長軸7.2m・短軸6.6m)に、概ね、略円形状に分布する。ブロックは明瞭ではあるが、91-A-18を中心にU字状に石器の集中部が認められる。石器の集中部では0.25m²あたり20点から50点が出土し、周辺部に向うにしたがい、その分布密度は漸移的に減少する。石器はXV層上位からXVII層下位にかけて出土し、およそ80cmの高低差を示す。石器はXVI層中位に最も多く出土している。

ブロックは総計866点の石器が出土しており、ナイフ形石器17点(2・4・6・7・9~20)・加工痕ある剥片3点・石核15点・縦長剥片27点・剥片243点・碎片538点・礫23点(磨石1点・敲石1点を含む)が組成する。石器石材は黒色安山岩821点・黒色頁岩18点・珪質頁岩3点・雲母片岩1点・輝石安山岩(粗粒)23点からなり、母岩別資料・11種類(黒色安山岩1~7・9、黒色頁岩5~7、珪質頁岩1)が確認されている。石器の接合は35例が確認され、その内訳はブロック内でのみ接合関係のあるもの27例、1号ブロックと接合関係のあるもの2例(黒色安山岩3)、3号ブロックと接合関係のあるもの4例(黒色安山岩1、黒色頁岩3・5・搬入)のほか、単独に出土する石器と接合関係のあるもの2例(黒色安山岩9・10)である。

3号ブロック(第10図、PL4)

本ブロックは97・98・99-A-18・19・20グリッドに位置する。南側台地の緩斜面に検出され、隣接する2号ブロックとはおよそ6mの距離を隔て位置する。ブロックは30.6m²ほどの範囲(長軸7.6m・短軸6.0m)に、概ね、略楕円形状に分布する。ブロックは明瞭ではあるが、97-A-19グリッドおよび98-A-18グリッドの2ヶ所に石器の集中部が認められる。石器の集中部では0.25m²あたり20~30点が出土し、周辺部に向う

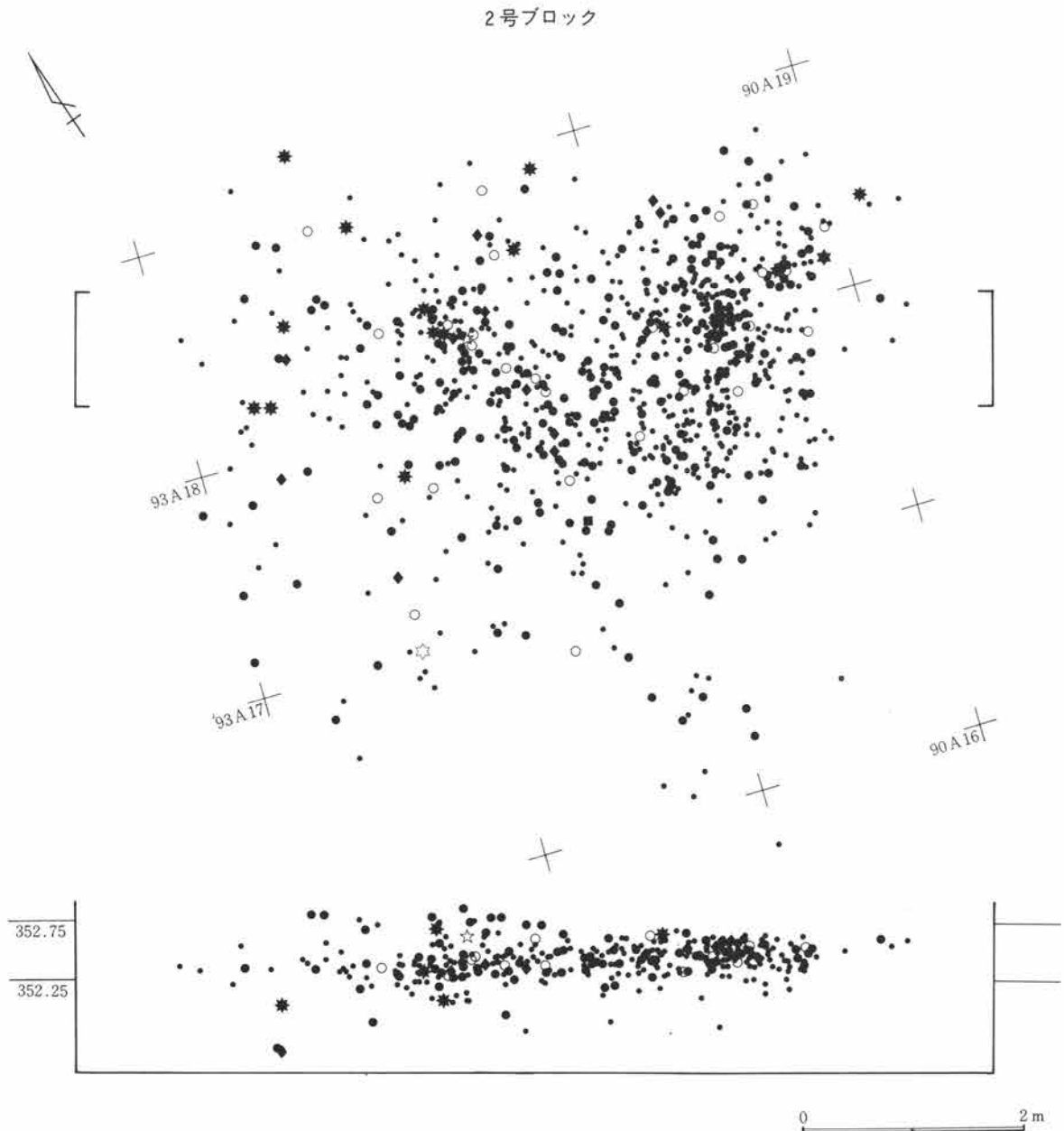


第8図 石器の分布1(1号ブロック)

I 旧石器時代の遺構と遺物

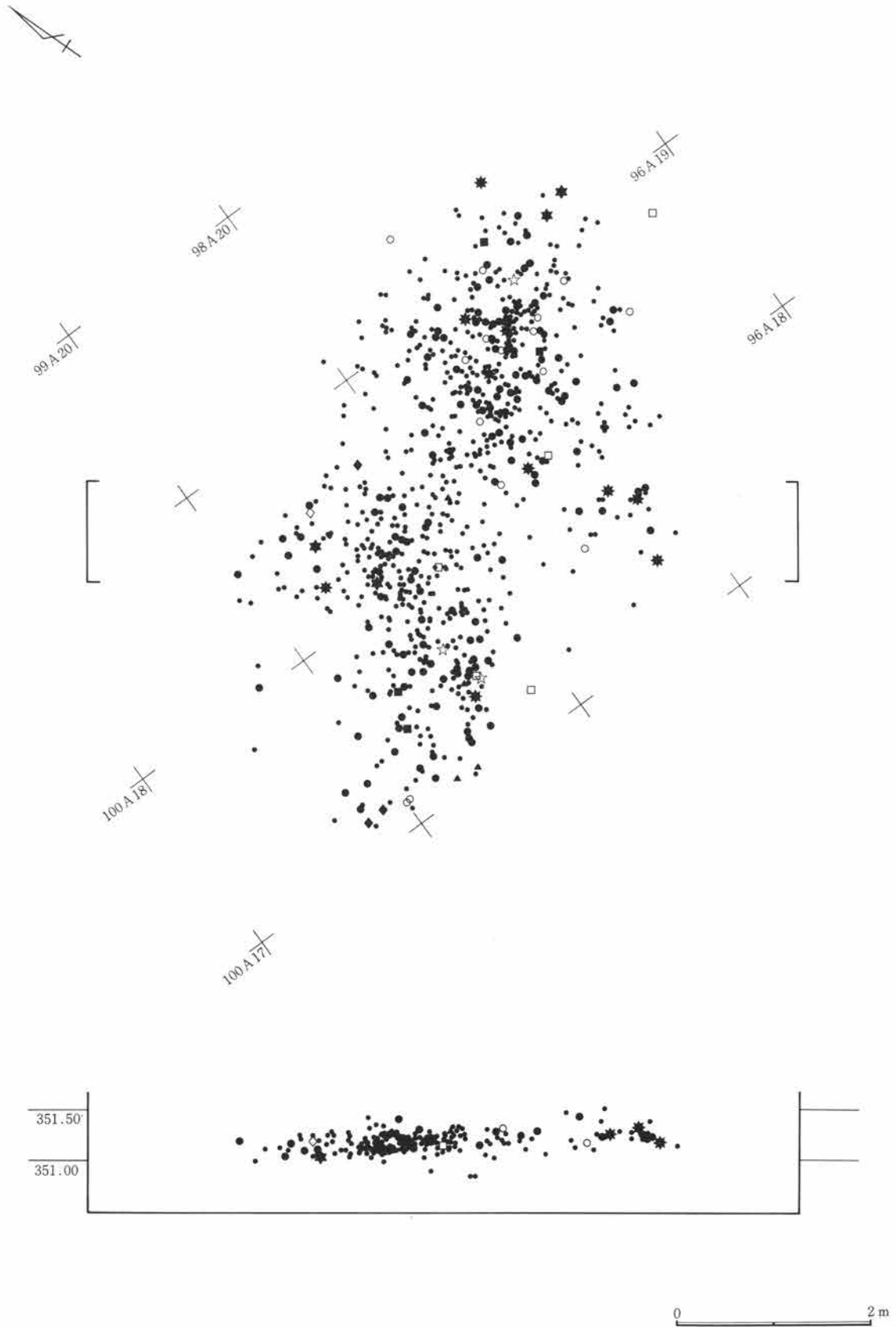
にしたがい、その分布密度は漸移的に減少する。石器はXV層下位からXVII層上位にかけて出土し、およそ50cmの高低差を示す。石器はXVI層中位に最も多く出土している。

ブロックは総計819点の石器が出土しており、ナイフ形石器3点・削器4点・搔器1点・楔形石器1点・加工痕ある石器6点・使用痕ある石器5点・石核10点・縦長剥片16点・剥片137点・碎片604点・敲石4点を含む礫32点が組成する。石器石材は黒色安山岩709点・黒色頁岩46点・珪質頁岩7点・頁岩15点・黒曜石2点・輝石安山岩(粗粒)24点・輝緑岩6点・珪質変岩2点・玢岩4点のほか、閃緑岩・熔結凝灰岩・泥岩・はんれい岩1点からなり、母岩別資料は16種類(黒色安山岩1～7・9、黒色頁岩1～5・8、珪質頁岩1、頁岩1)が確認されている。石器の接合は32例が確認され、その内訳はブロック内でのみ接合関係のあるもの26例、1号ブロックと接合関係のあるもの1例、2号ブロックと接合関係のあるもの4例のほか、単独に出土する石器と接合関係のあるもの1例である。



第9図 石器の分布2(2号ブロック)

3号ブロック



第10図 石器の分布3(3号ブロック)

I 旧石器時代の遺構と遺物

4-4, 出土石器

A区では、3ヶ所のブロックより総計1,772点が出土している。その多くは剥片411点・碎片1,169点などであり、全体の89.2%を占める。石器群はナイフ形石器・二種を主体とし、これに削器5点・搔器1点・楔形石器1点・加工痕ある剥片13点・使用痕ある剥片6点・石核30点・縦長剥片49点が組成する。

ナイフ形石器(第11~14図、1~20)

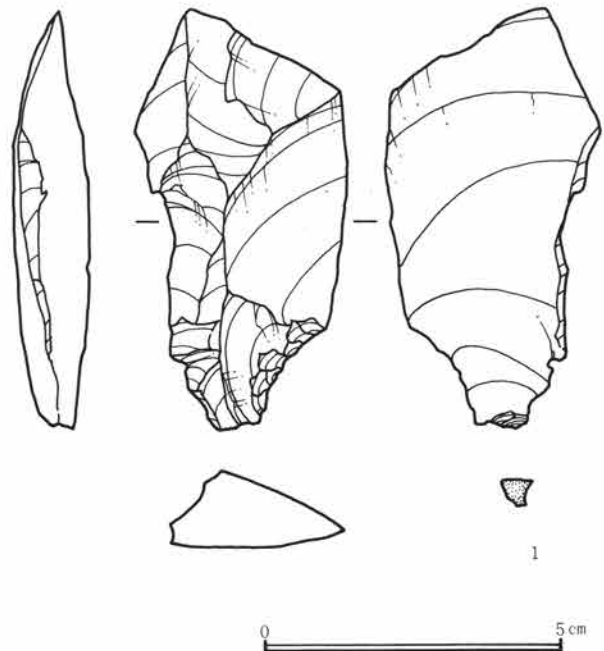
ナイフ形石器は広義の石刃技法を技術基盤として得られる剥片を縦位使用し、調整加工を施すことにより作出される一群のナイフ形石器(A群)が5点、横位使用し、調整加工を施すことにより作出される一群のナイフ形石器(B群)が15点、の総計20点が出土している。A群では3点が2号ブロックに出土するほか2点が3号ブロックに出土する。B群では14点が2号ブロックに、1点が3号ブロックに出土する。

1は、礫面を打面とし、作出される縦長剥片を素材とする。基部側の右側縁に丁寧な調整加工が施される。調整加工はやや浅く裏面側から表面側へ向け、内湾ぎみに施される。やや幅広く、鈍い先端を石器先端部とし、三角形の断面形状を示す。石器長軸と剥片長軸は一致する。明瞭な使用痕は認められない。長さ6.95cm・幅3.45cm・重さ25.90gを測る。石器は母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。2号ブロック出土。

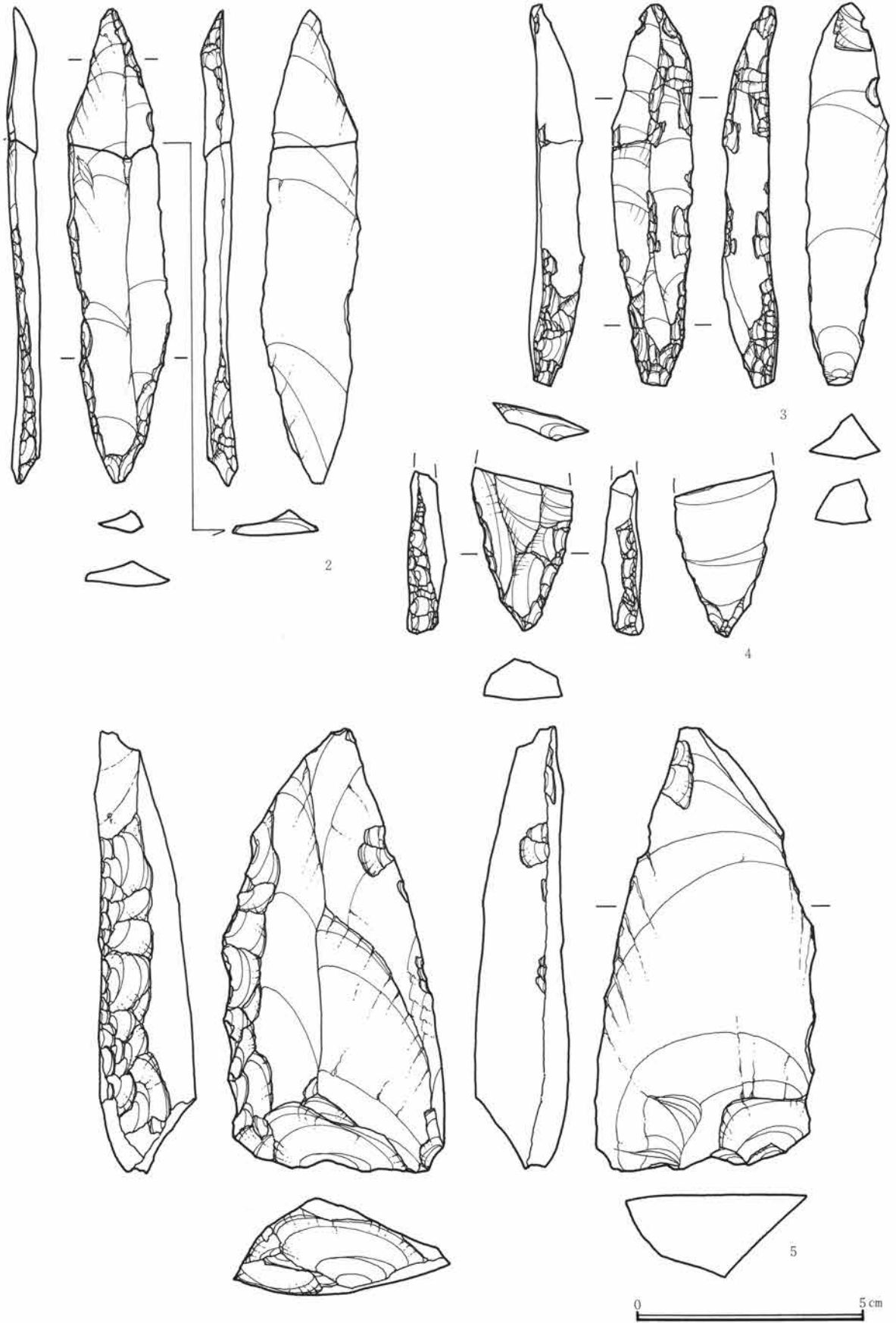
2は、両側縁の平行する縦長剥片を素材とする。基部側の両側縁および先端部・右側縁に調整加工が施される。調整加工は裏面側から表面側へ向け急斜度に施され、打面および打瘤は調整加工により除去される。石器上半部より欠損するが、接合により復元される。石器形状は優美な柳葉形状を呈し、基部は尖る。三角形の断面形状を示す。石器長軸と剥片長軸は一致する。長野県・杉久保遺跡出土のナイフ形石器(いわゆる杉久保型ナイフ形石器)に類似する。明瞭な使用痕は認められない。長さ10.4cm・幅2.2cm・重さ13.60gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

3は、両側縁の平行する縦長剥片を素材とする。基部側の両側縁および先端部・右側縁に調整加工が施される。調整加工は裏面側から表面側へ向け急斜度に施されるほか、背面を構成する稜線部分には右側縁側から左側縁側へ向かう調整加工が施される。打面および打瘤は除去されることなく遺存する。石器形状は優美な柳葉形状を呈し、三角形の断面形状を示す。石器は倒木址No.1の埋没土中より出土するが、土層の観察よりXVI層中に遺存することが明らかである。明瞭な使用痕は認められないが、石器先端には浅い剝離痕が認められる。長さ8.4cm・幅1.9cm・重さ16.51gを測る。母岩別資料・珪質頁岩-1に分類される。2号ブロック出土。

4は、石器の上半を欠損するため明らかでないが、石器基部の形状および調整加工より、2に類似し、石器群の特徴的な、あるいは、範形的な存在とすることが可能である。基部側の両側縁に丁寧な調整加工が施される。調整加工は裏面側から表面側へ向け、急斜度に



第11図 A区出土の石器(1)



第12図 A区出土の石器(2)

I 旧石器時代の遺構と遺物

施されるほかに、裏面基部には槌状の剝離が認められる。打面および打瘤は調整加工により除去され、石器基部は尖る。三角形状の断面形状を示す。石器の形状は優美な柳葉形状を呈すものと思われる。石器の長軸と剥片の長軸は一致する。明瞭な使用痕は認められない。長さ3.6cm・幅2.2cm・重さ5.80gを測る。黒曜石製。3号ブロック出土。

5は、大形の縦長剥片を素材とする。調整加工は裏面側から表面側へ向け急斜度に施され、左側縁にはやや粗い調整加工が施される。打面および打瘤は調整加工により除去される。石器先端を欠損するため明らかではないが、石器先端は尖り、石器基部は平縁をなす。三角形状の断面形状を示す。石器の長軸と剥片の長軸は一致する。右側縁に浅い剝離痕や微細な刃こぼれが認められる。長さ9.7cm・幅4.9cm・重さ95.58gを測る。黒色頁岩製。2号ブロック出土。

6は、縦長の剥片を横位使用し、左右・両側縁に調整加工を施すことにより作出される。調整加工は裏面側から表面側へ向け急斜度に施され、打面部は調整加工により除去される。石器の形状は横長・長方形形状を呈し、楔状の断面形状を示す。剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ1.7cm・幅2.2cm・重さ2.47gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。2号ブロック出土。

7は、縦長の剥片を横位使用し、左右・両側縁に調整加工を施すことにより作出される。調整加工は裏面側から表面側へ向け急斜度に施され、打面部は調整加工により除去される。石器の形状は横長・長方形形状を呈し、三角形状の断面形状を示す。剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ2.6cm・幅3.1cm・重さ9.36gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。2号ブロック出土。

8は、縦長の剥片を横位使用し、左右・両側縁に調整加工を施すことにより作出される。調整加工は左側縁では裏面側から表面側へ向け急斜度に施されるが、右側縁には折断手法が認められる。打面部はこの折断により除去される。石器の形状は縦長・長方形形状を呈し、三角形状の断面形状を示す。剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ2.8cm・幅1.8cm・重さ5.10gを測る。母岩別資料・珉質頁岩-1に分類される。3号ブロック出土。

9は、縦長の剥片を横位使用し、左右・両側縁に調整加工を施すことにより作出される。調整加工は裏面側から表面側へ向け急斜度に施され、打面部は調整加工により除去される。石器の形状は横長・台形形状を呈し、楔状の断面形状を示す。剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。長さ3.1cm・幅3.7cm・重さ11.90gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-6に分類される。2号ブロック出土。

10は、縦長の剥片を用い、左側縁に調整加工が施すことにより作出される。調整加工は表面側から裏面側へ向け急斜度に施され、打面部は調整加工により除去される。石器の形状は三角形状を呈し、石器基部は尖る。剥片の長軸と石器の長軸は一致し、剥片の端部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ3.1cm・幅2.8cm・重さ6.65gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-10に分類される。2号ブロック出土。

11は、縦長の剥片を横位使用し、左右・両側縁に調整加工を施すことにより作出される。石器は剥片を折断した後、裏面側から表面側へ向け、調整加工が施され、打面部は調整加工により除去される。石器の形状は三角形状を呈し、石器基部は尖る。剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ2.4cm・幅2.5cm・重さ4.66gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-6に分類される。2号ブロック出土。

12は、縦長の剥片を横位使用し、左右・両側縁に調整加工を施すことにより作出される。左側縁では、表

4. A地点の調査

面側から裏面側へ向け、調整加工が施されるが、右側縁には、折断手法が認められる。打面部は折断により除去される。石器の形状は長方形を呈し、石器基部はわずかに尖る。剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ2.7cm・幅2.6cm・重さ4.46gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。2号ブロック出土。

13は、縦長の剥片を横位使用し、左右・両側縁に調整加工を施すことにより作出される。左側縁では、裏面側から表面側へ向け、調整加工が施されるが、右側縁では、表裏・両面から調整加工が施される。打面部は調整加工により除去される。石器の形状は長方形を呈し、石器基部はわずかに尖る。剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ3.3cm・幅2.2cm・重さ8.54gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-4に分類される。2号ブロック出土。

14は、横長の剥片を用い、剥片の先端部および側縁部に調整加工を施すことにより作出される。両側縁ともに裏面側から表面側へ向かう調整加工が施されるが、右側縁には折断手法を適用する。打面部は折断により除去される。石器の形状は切出形石器に近い形状を呈し、石器基部は尖る。剥片の長軸と石器の長軸はほぼ一致し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ3.7cm・幅2.5cm・重さ4.97gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-7に分類される。2号ブロック出土。

15は、縦長の剥片を横位使用し、左右・両側縁に調整加工を施すことにより作出される。調整加工は裏面側から表面側へ向け急斜度に施され、打面部は調整加工により除去される。石器の形状は横長・長方形を呈し、三角形の断面形状を示す。剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁部を石器の機能部とするが、石器の長軸に対し、石器の機能部は斜交する。明確な使用痕は認められない。長さ3.0cm・幅2.8cm・重さ7.74gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。2号ブロック出土。

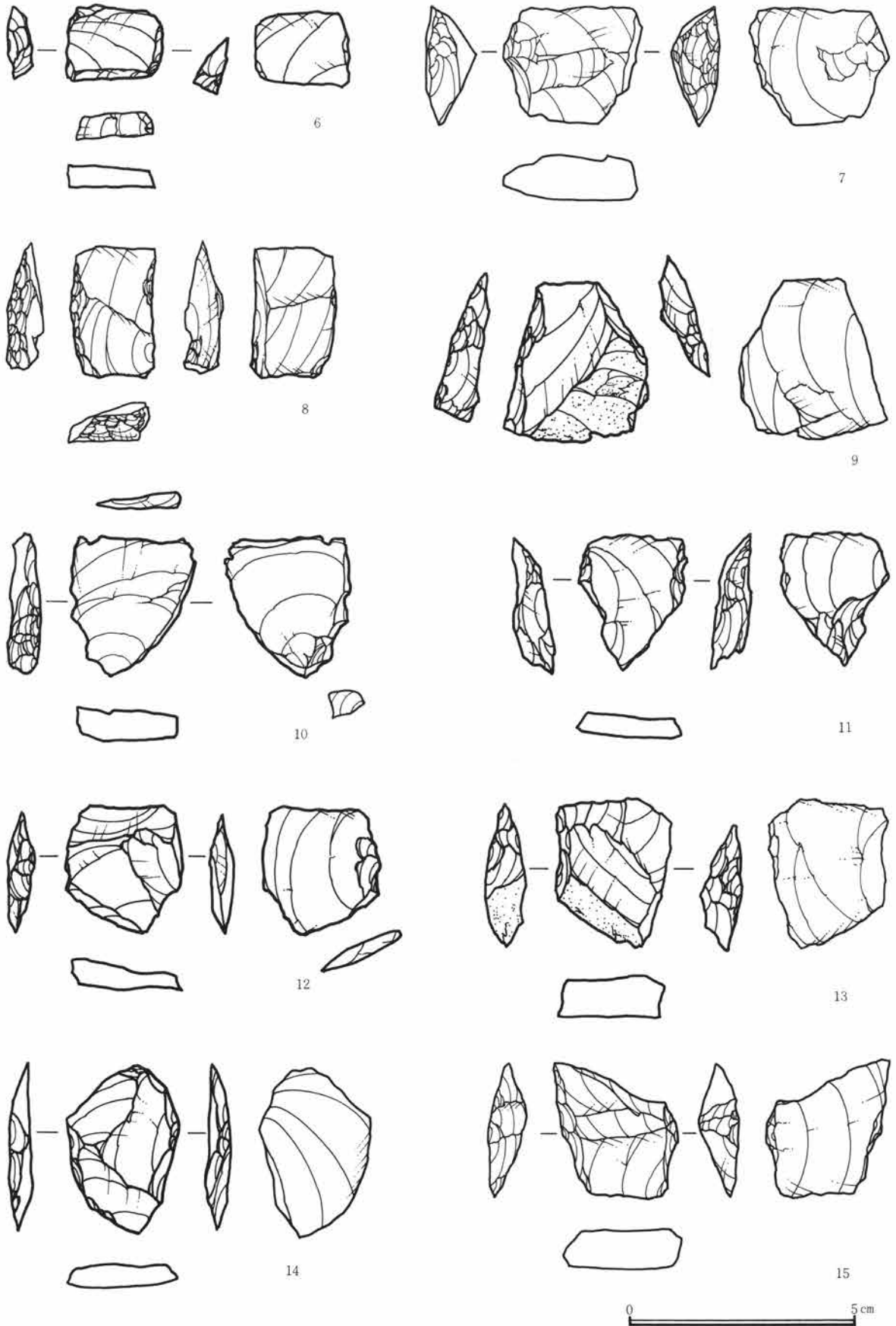
16は、縦長の剥片を横位使用し、左右・両側縁に調整加工を施すことにより作出される。石器の上下両端には、表面側から裏面側へ向かう調整加工が施されるが、左側縁には折断手法を適用する。右側縁には礫面を残す。打面部は折断により除去される。石器の形状は横長・長方形を呈し、楔状に近い断面形状を示す。剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ3.7cm・幅3.8cm・重さ19.18gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-10に分類される。2号ブロック出土。

17は、縦長の剥片を用い、剥片の先端部および側縁部に調整加工を施すことにより作出される。先端部には裏面側から表面側へ向かう調整加工がわずかに施されるほかに、打面部には表面側から裏面側へ向け調整加工を施す。石器の形状は縦長・長方形を呈し、楔状の断面形状を示す。剥片の長軸と石器の長軸はほぼ一致し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ2.8cm・幅2.3cm・重さ5.08gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-6に分類される。2号ブロック出土。

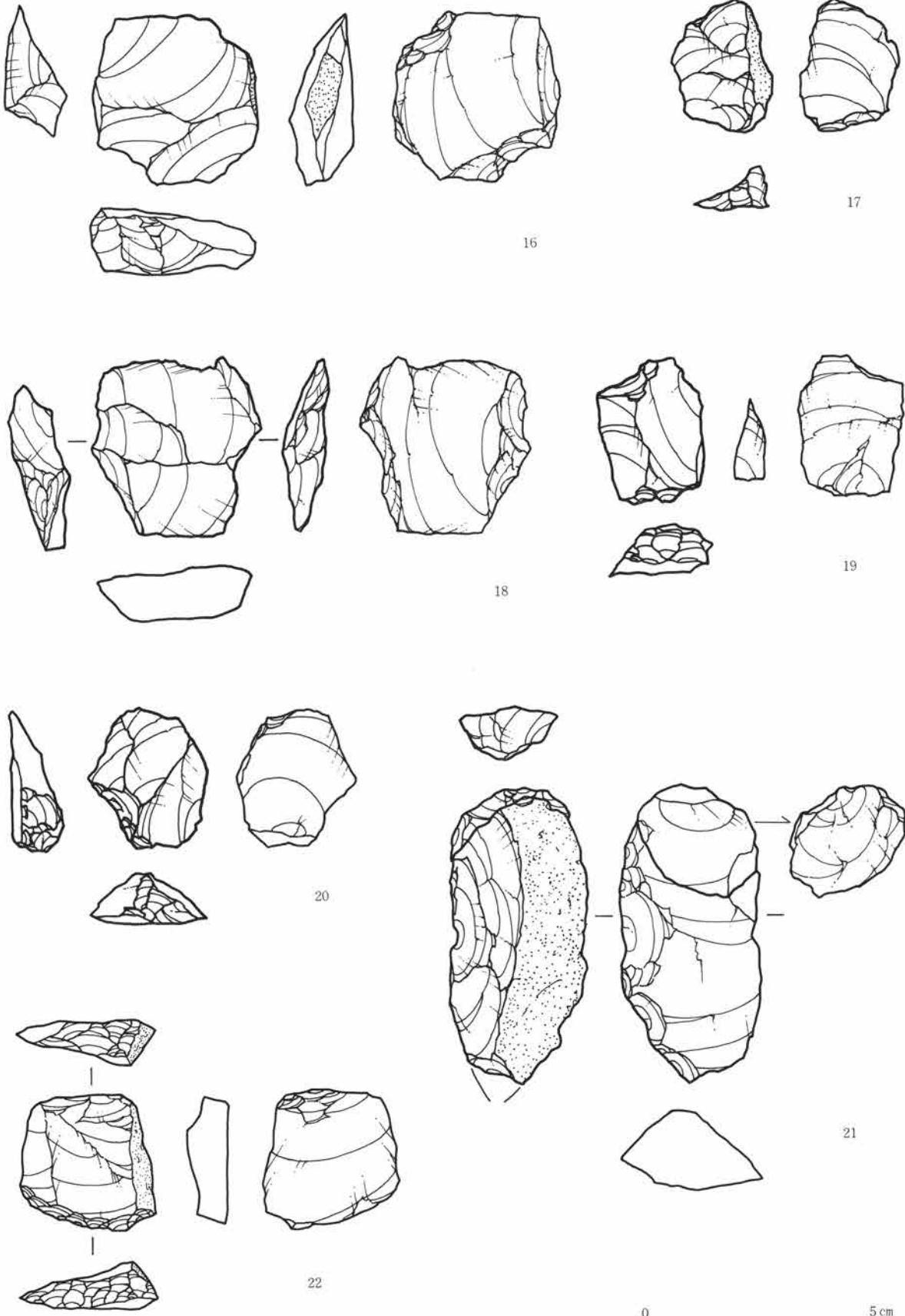
18は、縦長の剥片を横位使用し、左右・両側縁に調整加工を施すことにより作出される。左右・両側縁とも表面側から裏面側へ向かう調整加工が施され、打面部は調整加工により除去される。石器の形状は横長・長方形を呈し、三角形の断面形状を呈する。剥片の長軸と石器の長軸は90°相違し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ3.8cm・幅3.8cm・重さ15.90gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-4に分類される。2号ブロック出土。

19は、縦長の剥片を用い、剥片の先端部および側縁部に調整加工を施すことにより作出される。先端部には裏面側から表面側へ向かう調整加工がわずかに施されるほかに、打面部には、表面側から裏面側へ向かう調整加工が施される。石器の形状は縦長・長方形を呈し、楔状の断面形状を示す。剥片長軸と石器長軸はほぼ一致し、剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ3.0cm・幅2.3cm・重

I 旧石器時代の遺構と遺物



第13図 A区出土の石器(3)



第14図 A区出土の石器(4)

I 旧石器時代の遺構と遺物

さ7.35gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-4に分類される。2号ブロック出土。

20は、縦長の剥片を用い、剥片の先端部および側縁部に調整加工を施すことにより作出される。先端部には表面側から裏面側へ向かう調整加工がわずかに施されるほか、側縁部には裏面側から表面側へ向かう調整加工が施される。石器の形状は縦長・長方形を呈し、石器基部は除去されることなく遺存する。剥片長軸と石器長軸はほぼ一致する。剥片の側縁部を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ3.0cm・幅2.65cm・重さ6.55gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-4に分類される。2号ブロック出土。

搔器(第14図、22)

22は、縦長剥片を用い、剥片の上下両端に調整加工を施すことにより作出される。剥片の上端では表面側から裏面側に向かう調整加工が施されるほか、裏面側には平坦剥離が施されるが、剥片の下端には裏面側から表面側へ向かう調整加工が施される。石器の形状および調整加工にはナイフ形石器B群(6~20)に類似する特徴が認められ、特徴的な縞状の剥離ではないが、剥片端部に施される調整加工により石器の機能部が作出される。機能部は弧状を呈す。一部、礫面を残す。長さ2.9cm・幅3.0cm・重さ9.41gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-5に分類される。3号ブロック出土。

削器(第14~16図、21・27・28・30)

21は、縦長剥片を用い、剥片の側縁に調整加工を施すことにより作出される。右側縁には、表面側から裏面側へ向かう調整加工がやや粗く施され、石器の機能部が作出される。石器は先端部を欠損する。なお、石器は2点の接合資料よりなるが、剥片の打面部分に接合する資料は製作途上の欠損と扱えられる。長さ6.4cm・幅3.1cm・重さ33.19gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-5に分類される。3号ブロック出土。

27は、大形の縦長剥片を用い、剥片を折断した後に、剥片の側縁に調整加工を施すことにより作出される。右側縁には、裏面側から表面側へ向かう調整加工がやや浅く施され、石器の機能部が作出される。なお、石器は2点の接合資料よりなるが、剥片の上端部分に接合する資料は製作途上の欠損と扱えられる。長さ4.4cm・幅5.4cm・重さ54.44gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-5に分類される。3号ブロック出土。

28は、大形の縦長剥片を用い、剥片の側縁に調整加工を施すことにより作出される。左側縁には、表裏・両面から調整加工が浅く施されるが、右側縁には、裏面側から表面側へ向かう調整加工が施される。石器の機能部は左側縁に作出される。石器は2点の接合資料からなるが、剥片の端部に接合する資料は製作途上の欠損と扱えられる。長さ8.3cm・幅5.1cm・重さ90.31gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-5に分類される。3号ブロック出土。

30は、縦長剥片を用い、剥片の側縁および端部に調整加工を施すことにより作出される。左右・両側縁には、表面側から裏面側へ向かう調整加工が浅く施されるほか、同様な調整加工が粗く剥片の端部に施され、石器の機能部が作出される。石器の背面には礫面が大きく残る。長さ6.8cm・幅6.7cm・重さ61.57gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-5に分類される。1号ブロック出土。

楔形石器(第16図、29)

29は、縦長の剥片を用い、剥片を切断した後に、上下両端に対向する剥離面が形成される。表裏・両面とも微細な剥離が認められる。石器上端には、切断による平坦面が存在し、この平坦面を打面とし、表裏・両面の微細な剥離が生じるが、石器下端には、表裏・両面の微細な剥離が形成された後に、裏面側から表面側

へ向かう調整加工が施されるため、平坦面が存在したのか否かは明らかではない。左側縁には石器の下端方向からの剥離が、右側縁には石器の上端方向からの剥離(やや裏面側に捩れる)が、認められる。以上の石器の特徴には、典型的な楔形石器の範疇を越えるが、対向する剥離面の存在を重視し、器種を認定しておく。長さ2.6cm・幅1.6cm・重さ5.35gを測る。母岩別資料・珪質頁岩-1に分類される。3号ブロック出土。

加工痕ある剥片(第15・17・18図、23~26、31~35)

23は、平坦な剥離面を打面とし、作出される横長の剥片を素材とする。左側縁には浅く粗い調整加工が裏面側から表面側へ向け施され、石器の機能部が作出される。長さ3.5cm・幅6.0cm・重さ22.70gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-2に分類される。ブロック外より単独で出土する。

24は、縦長の剥片を用い、剥片端部に調整加工を施すことにより作出される。剥片を断ち截るかのよう、調整加工は急峻に施される。石器は母岩別資料・珪質頁岩-1に分類され、接合はされないが、石器を構成する諸属性には楔形石器・第16図29との類似性が指摘される。長さ2.4cm・幅1.7cm・重さ1.94gを測る。2号ブロック出土。

25は、縦長の剥片を用い、剥片端部に微細な調整加工を施すことにより作出される。石器の下半を欠損するため、打面形状や打角など素材剥片の形状は明確ではない。長さ1.5cm・幅1.3cm・重さ0.80gを測る。黒色頁岩製。2号ブロック出土。

26は、礫面を打面とし、作出される横長・扇状の剥片を素材とする。浅く粗い調整加工が剥片端部に施され、石器の機能部が作出される。長さ6.0cm・幅8.0cm・重さ59.60gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-5に分類される。ブロック外より単独で出土する。

31は、平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長の剥片を素材とする。先端部には浅く粗い調整加工が施されるが、明瞭な使用痕が認められないため、石器の機能部分は明確ではない。長さ8.4cm・幅2.7cm・重さ26.20gを測る。黒色頁岩製。ブロック外より単独で出土する。

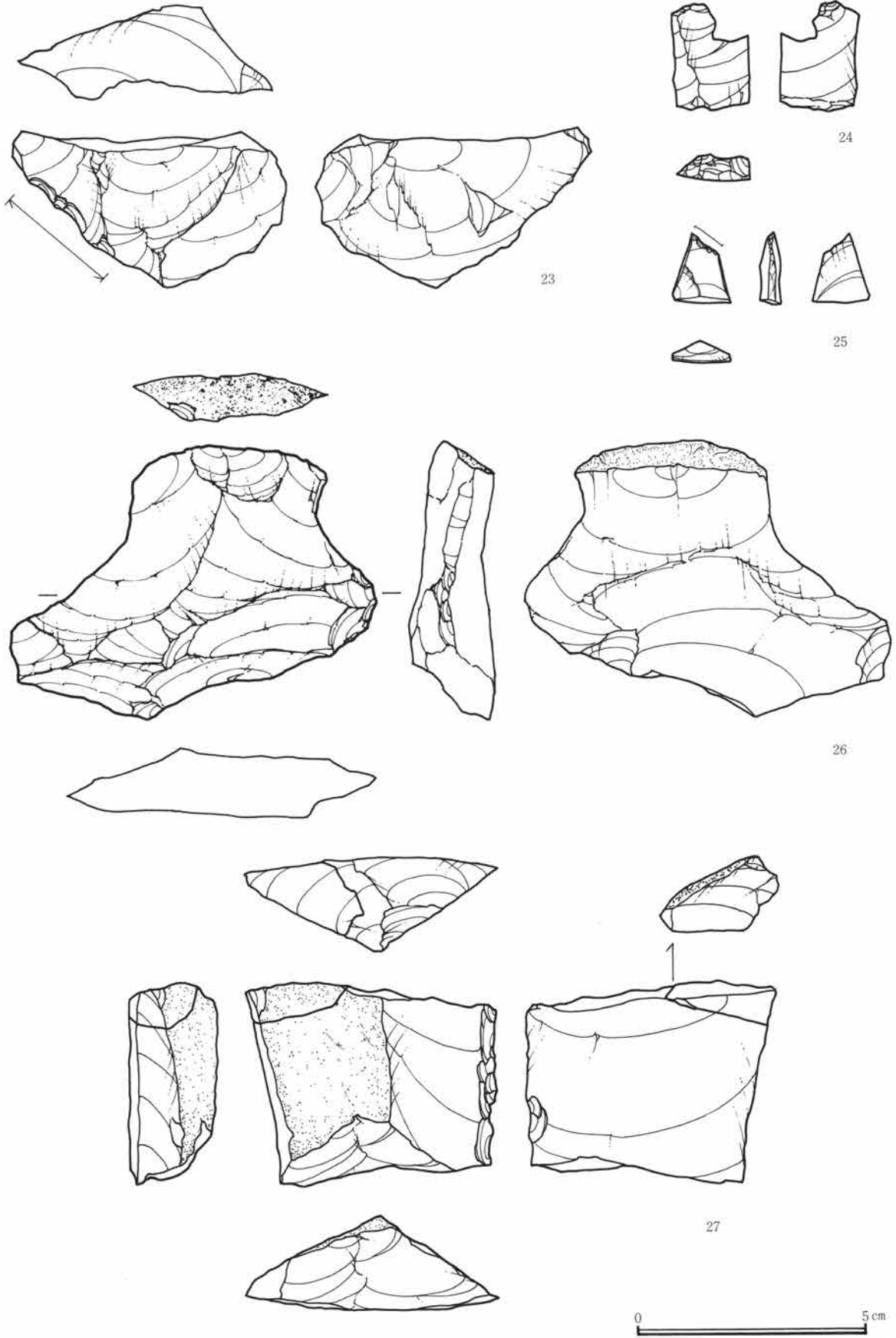
32は、平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長の剥片を素材とする。先端部には、表面側から裏面側へ向かう調整加工が粗く施され、石器の機能部が作出される。石器は2点の接合資料よりなるが、欠損が製作時であるのか使用時であるのか、判然としない。明瞭な使用痕は認められない。長さ7.9cm・幅3.6cm・重さ20.53gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-1に分類される。3号ブロック出土。

33は、平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長の剥片を素材とする。先端部には、裏面側から表面側へ向かう調整加工が施され、石器の機能部が作出される。石器は2点の接合資料よりなるが、欠損が製作時であるのか使用時であるのか、判然としない。明瞭な使用痕は認められない。長さ10.4cm・幅3.4cm・重さ45.70gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-8に分類される。3号ブロック出土。

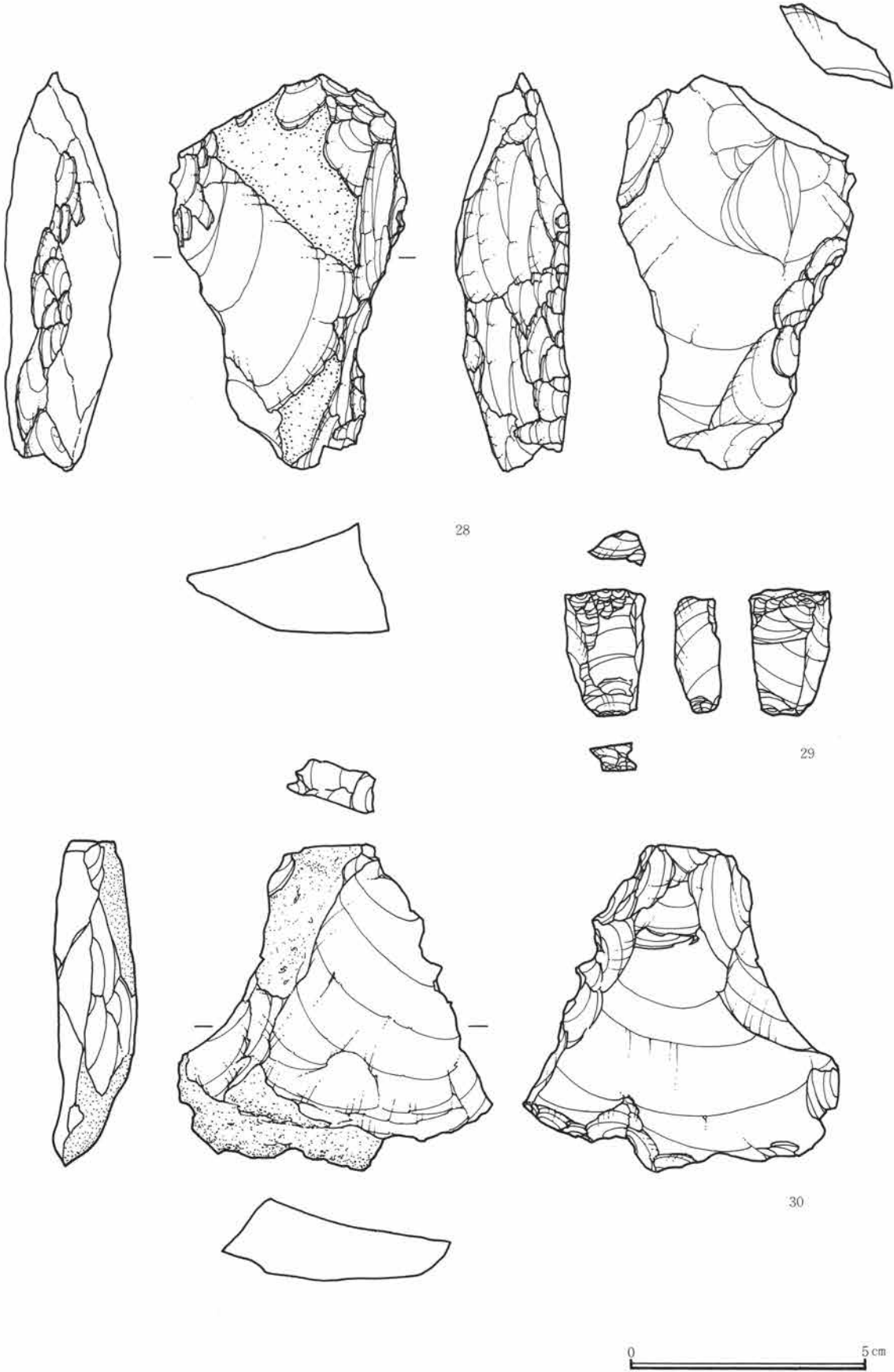
34は平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長の剥片を素材とする。右側縁には、裏面側から表面側へ向かう粗い調整加工が浅く施され、石器の機能部が作出される。石器の下半を欠損するが、欠損が製作時であるのか使用時であるのか、判然としない。明瞭な使用痕は認められない。長さ5.0cm・幅3.4cm・重さ16.72gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。2号ブロック出土。

35は、大形の縦長の剥片を素材とする。右側縁には、表面側から裏面側へ向かう粗い調整加工が浅く施される。剥離段階で打面部分を欠損するため、打面形状および打角などは明確ではない。先端部にはわずかに欠損が認められる。明瞭な使用痕は認められない。長さ10.9cm・幅5.7cm・重さ71.40gを測る。黒色頁岩製。ブロック外より単独で出土する。

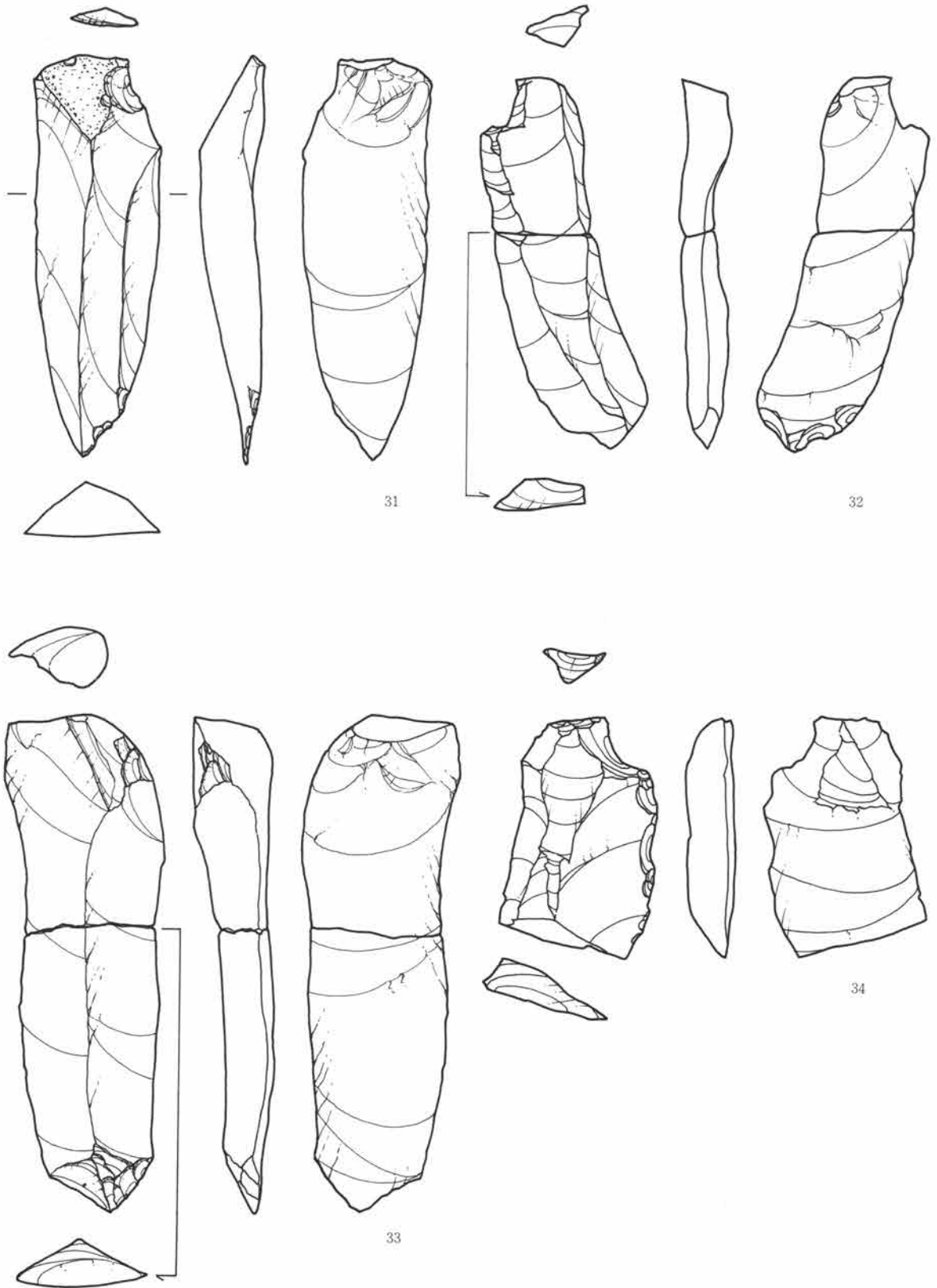
I 旧石器時代の遺構と遺物



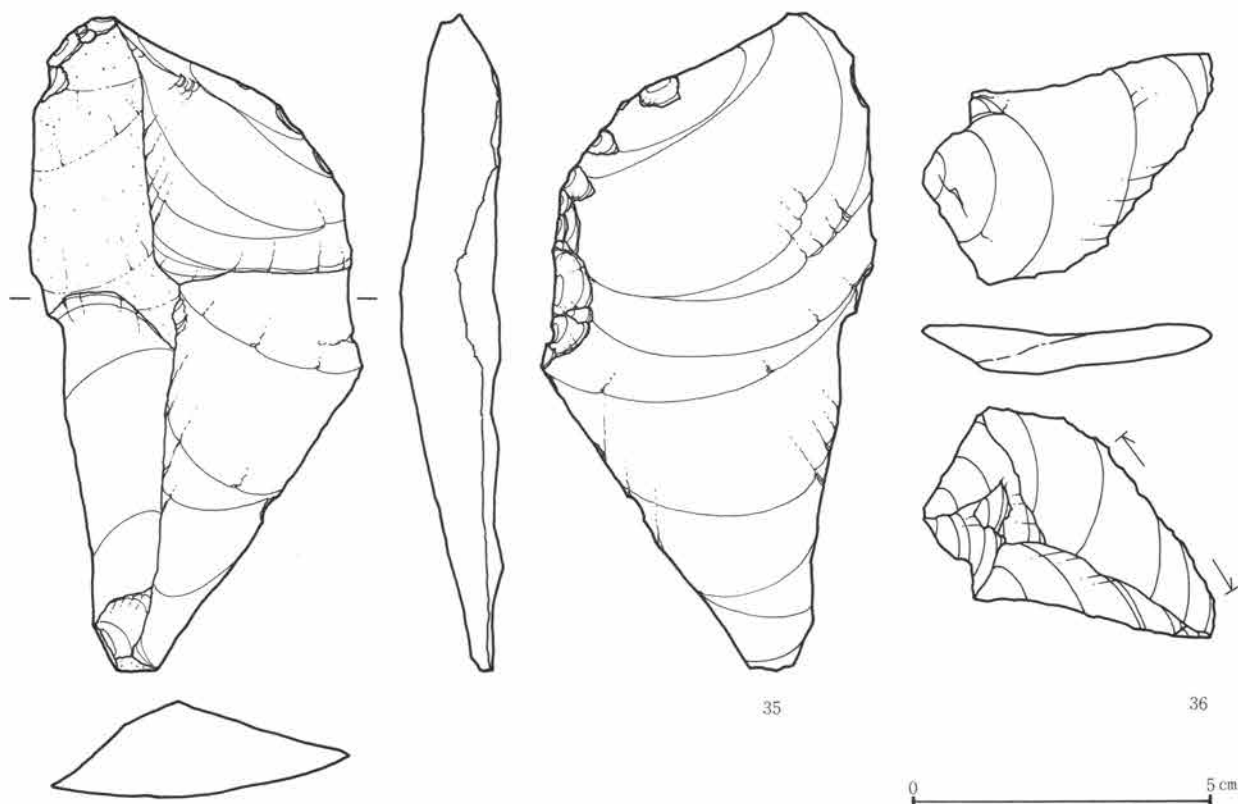
第15図 A区出土の石器(5)



第16図 A区出土の石器(6)



第17図 A区出土の石器(7)



第18図 A区出土の石器(8)

使用痕ある剥片(第18・19図、36~41)

36は、やや幅広の縦長剥片を素材とする。右側縁には微細な刃こぼれが認められ、石器の機能部となる。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。点状の打面形状を呈する。長さ4.9cm・幅3.8cm・重さ9.32gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-7に分類される。3号ブロック出土。

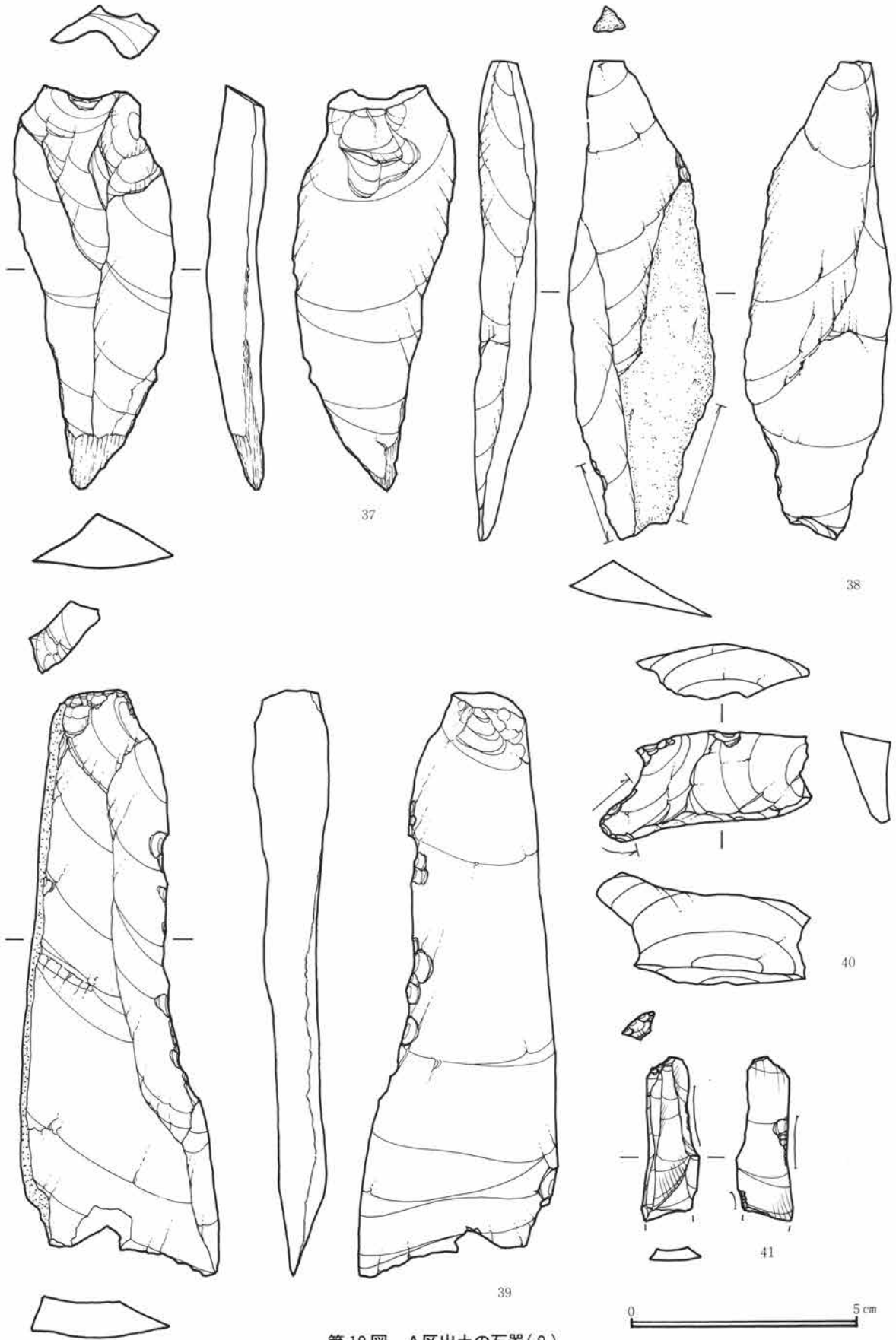
37は、平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長の剥片を素材とする。右側縁には微細な刃こぼれが認められ、石器の機能部となる。先端部には、受熱による剥落が認められる。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。長さ8.7cm・幅3.5cm・重さ33.28gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

38は、平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長の剥片を素材とする。左右・両側縁には微細な刃こぼれが認められ、石器の機能部となる。先端部にはわずかに欠損が認められる。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。長さ10.4cm・幅3.3cm・重さ35.40gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

39は、平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長の剥片を素材とする。右側縁には微細な刃こぼれが認められ、石器の機能部となる。左側縁には礫面を残す。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。長さ12.7cm・幅4.4cm・重さ69.58gを測る。黒色頁岩製。ブロック外より単独で出土する。

40は、平坦な剥離面を打面とし、作出される横長の剥片を素材とする。剥片端部には微細な刃こぼれが認められ、石器の機能部となる。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。長さ2.4cm・幅4.7cm・重さ8.22gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-7に分類される。3号ブロック出土。

41は、縦長の剥片を素材とする。右側縁の表裏面には微細な刃こぼれが認められ、石器の機能部となる。石器下半を欠損するが、欠損が製作時であるのか使用時であるのか判然としない。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。長さ3.6cm・幅1.3cm・重さ1.79gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。



第19図 A区出土の石器(9)

石核(第20～27図、42～62)

2号ブロックより15点、3号ブロックより10点のほか、単独出土の5点を加え、総計30点が出土している。円礫を多く用いるほか、大形の剥片を石核素材に用いる場合も多い。円礫を用いる石核には、原石を分割する工程の有無が存在する。

42は、大形の縦長剥片を素材とする。打面および剥片端部で裏面側を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、2枚前後の剥片が剥離される。石核素材には180°方向の相違する剥離面が認められ、一部礫面が残る。長さ5.5cm・幅4.7cm・重さ50.07gを測る。母岩別資料・黒色安山岩－4に分類される。3号ブロック出土。

43は、大形の横長剥片を素材とする。打面の周辺で、裏面側を作業面とする剥片剥離がおこなわれる。5枚前後の剥片が剥離される。石核素材には一部礫面残り、ほぼ同一の剥離方向を示す剥離面が認められる。長さ4.4cm・幅6.6cm・重さ51.31gを測る。母岩別資料・黒色安山岩－3に分類される。2号ブロック出土。

44は、大形の横長剥片を素材とする。打面の周辺で、表裏・両面を作業面とする剥片剥離がおこなわれる。5枚前後の剥片が剥離される。石核素材には、90°方向の相違する剥離面が認められる。長さ3.5cm・幅4.6cm・重さ30.96gを測る。母岩別資料・黒色安山岩－5に分類される。3号ブロック出土。

45は、大形の横長剥片を素材とする。打面の周辺で、裏面側を作業面とする剥片剥離がおこなわれる。5枚前後の剥片が剥離される。石核素材には180°方向の相違する剥離面が認められ、一部礫面が残る。長さ5.3cm・幅7.4cm・重さ85.06gを測る。母岩別資料・黒色安山岩－4に分類される。2号ブロック出土。

46は、大形の横長剥片を素材とする。打面および剥片の側縁・端部で表裏・両面を作業面とする剥片剥離がおこなわれる。10枚前後の剥片が剥離される。石核素材には、90°方向の相違する剥離面が認められる。長さ4.0cm・幅6.0cm・重さ36.68gを測る。母岩別資料・黒色安山岩－7に分類される。3号ブロック出土。

47は、大形の横長剥片を分割することにより得られる剥片を素材とする。剥片の左右・両側縁で、裏面側を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、3枚ほどの剥片が剥離される。石核素材にはほぼ同一の剥離方向を示す剥離面が認められ、部分的に礫面を残す。長さ5.3cm・幅5.5cm・重さ52.54gを測る。母岩別資料・黒色安山岩－4に分類される。2号ブロック出土。

48は、大形の横長剥片を分割することにより石核素材を作出する。剥片の左右・両側縁で表面側を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、左側縁で3枚・右側縁で1枚の剥片が剥離される。石核素材には90°方向の相違する剥離面が認められる。長さ2.6cm・幅3.6cm・重さ7.21gを測る。母岩別資料・黒色安山岩－4に分類される。2号ブロック出土。

49は、やや幅広の大形剥片を素材とする。剥片端部で、表面側を作業面とする剥片剥離がおこなわれる。石核素材には、ほぼ同一の剥離方向を示す剥離面が認められ、部分的に礫面を残す。長さ6.6cm・幅6.9cm・重さ108.29gを測る。母岩別資料・黒色安山岩－5に分類される。2号ブロック出土。

50は、大形の横長剥片を分割することにより得られる剥片を素材とする。剥片端部で、裏面側を作業面とする剥片剥離がおこなわれる。石核素材には大きく礫面を残す。長さ4.5cm・幅3.5cm・重さ22.05gを測る。母岩別資料・黒色安山岩－4に分類される。2号ブロック出土。

51は、原石を分割することにより得られる大形の剥片を石核素材とする。礫面・分割面および剥離面を打面とし、裏面側を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、5枚前後の剥片が剥離される。石核形状は柱状を呈し、大きく礫面を残す。長さ4.5cm・幅3.7cm・重さ45.80gを測る。母岩別資料・黒色安山岩－4に分類される。2号ブロック出土。

52は、大形の縦長剥片を素材とする。剥片の左右・両側縁部で、裏面側を作業面とする剥片剥離がおこな

I 旧石器時代の遺構と遺物

われる。石核素材には、ほぼ同一の剥離方向を示す剥離面が認められ、部分的に礫面を残す。長さ10.2cm・幅4.7cm・重さ88.67gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。2号ブロック出土。

53は、大形の剥片を分割することにより石核素材を作出する。分割面を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、2枚ないし3枚の剥片が剥離される。長さ4.1cm・幅3.4cm・重さ26.01gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-4に分類される。2号ブロック出土。

54は、大形の横長剥片を素材とする。剥片の側縁で、裏面側を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、1枚の剥片が剥離される。石核は剥片剥離が終了した後に分割される。石核素材には90°方向の相違する剥離面が認められ、一部礫面を残す。長さ6.3cm・幅8.7cm・重さ89.99gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-4に分類される。2号ブロック出土。

55は、大形の横長剥片を素材とする。打面および剥片の側縁で、表裏・両面を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、5枚前後の剥片が剥離される。石核は剥片剥離が終了した後に分割される。石核素材には、ほぼ同一の剥離方向を示す剥離面が認められ、一部に礫面を残す。長さ8.7cm・幅9.2cm・重さ116.11gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-5に分類される。3号ブロック出土。

56は、楕円形状を呈す河床礫を素材とする石核である。平坦な剥離面を打面とし、裏面側には大きく礫面を残す。剥片剥離は石核の正面および左側でおこなわれるが、打面調整は認められない。石核形状は横長・柱状を呈する。長さ4.7cm・幅6.2cm・重さ103.49gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。2号ブロック出土。

57は、楕円形状を呈す河床礫を素材とする石核である。平坦な礫面を打面とし、大きく礫面を残す。剥片剥離は礫の小口部分でおこなわれる。打面調整および石核調整は認められない。長さ5.6cm・幅9.0cm・重さ640.5gを測る。母岩別資料・頁岩-1に分類される。ブロック外より単独出土。

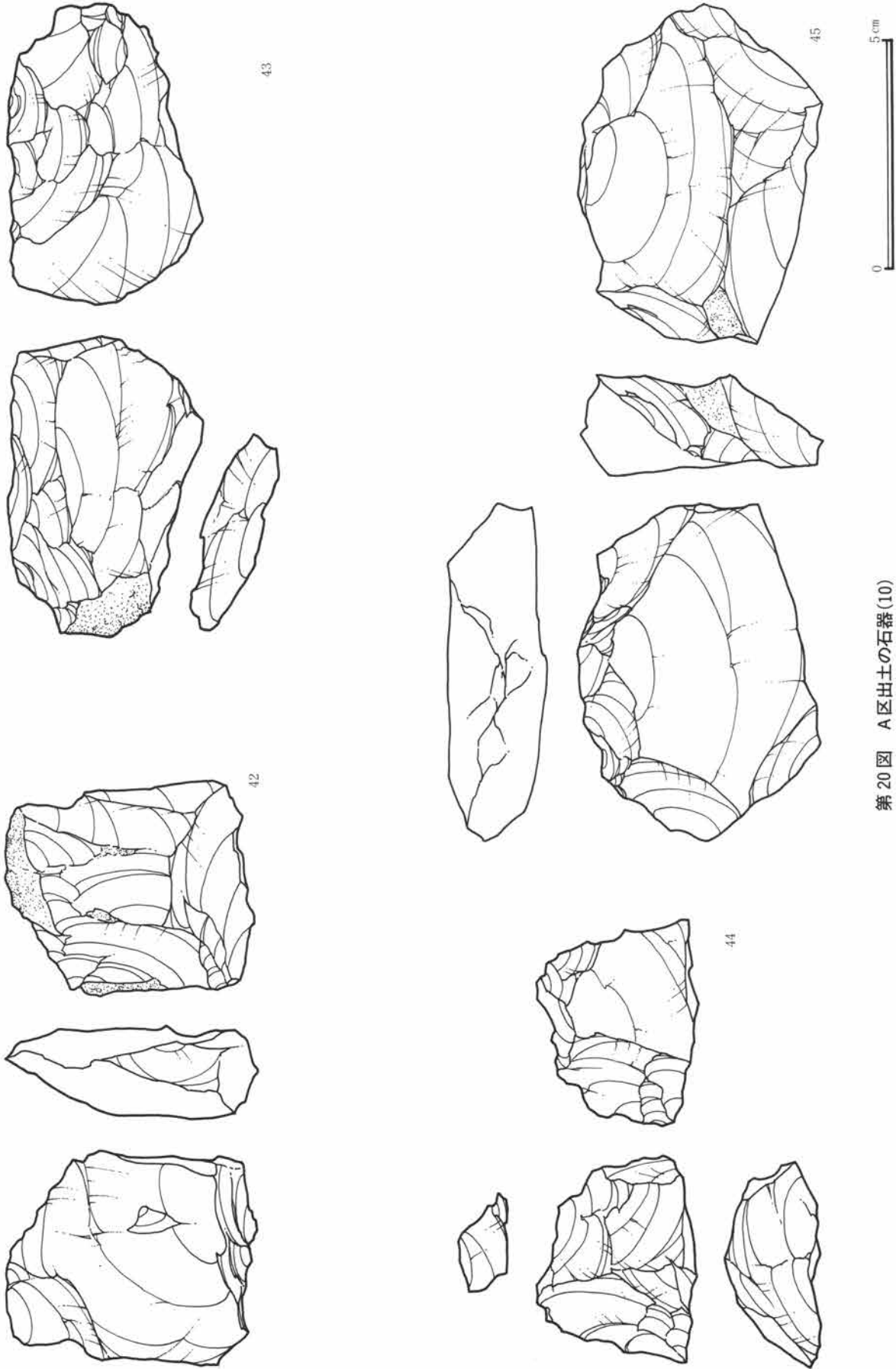
58は、楕円形状を呈す河床礫を素材とする石核である。平坦な剥離面を打面とし、裏面側には大きく礫面を残す。剥片剥離は石核の正面および打面の2ヶ所でおこなわれるが、打面調整は認められない。石核形状は横長・柱状を呈する。長さ8.4cm・幅10.1cm・重さ498.0gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。2号ブロック出土。

59は、楕円形状を呈す河床礫より作出される盤状の剥片を素材とする石核である。石核の周辺より自然面および剥離面を打面とし、剥片剥離はおこなわれる。裏面側には大きく礫面を残す。長さ5.7cm・幅6.9cm・重さ192.90gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。2号ブロック出土。

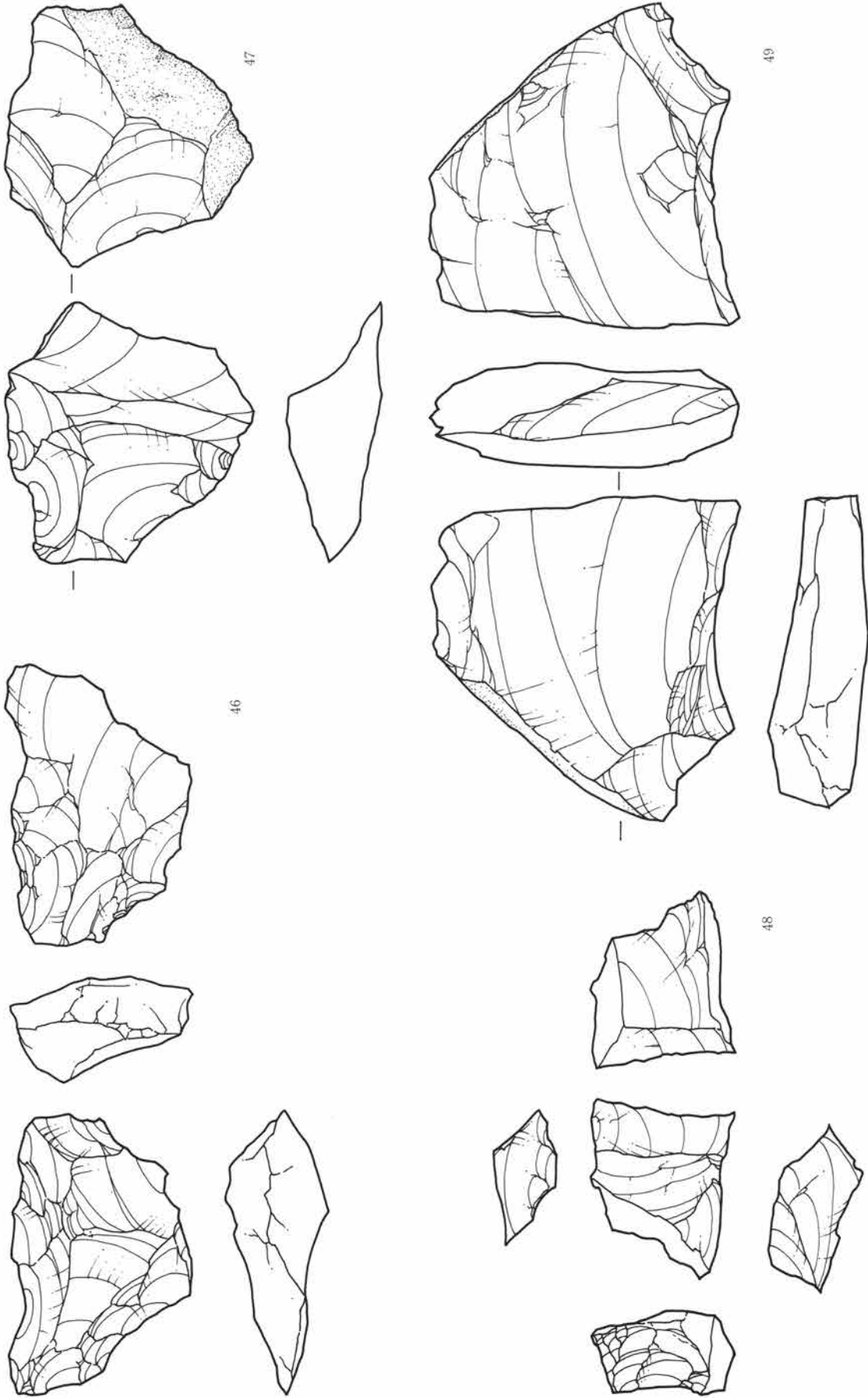
60は、楕円形状を呈す河床礫を素材とする石核である。平坦な剥離面を打面とし、石核下端には礫面を残す。剥片剥離は石核の上下両端よりおこなわれ、上端より10枚前後の、下端より5枚前後の、剥片が剥離される。打面左側に存在する剥離は打面調整を目的とする。石核形状は縦長・柱状を呈する。長さ9.5cm・幅5.6cm・重さ226.8gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-2に分類される。ブロック外より単独出土。

61は、楕円形状を呈す河床礫より作出される大形の剥片を素材とする石核である。剥片剥離は石核下端に存在する平坦な剥離面を打面としておこなわれ、5枚前後の剥片が剥離される。裏面側には大きく礫面を残す。長さ9.9cm・幅4.6cm・重さ99.67gを測る。黒色頁岩製。2号ブロック出土。

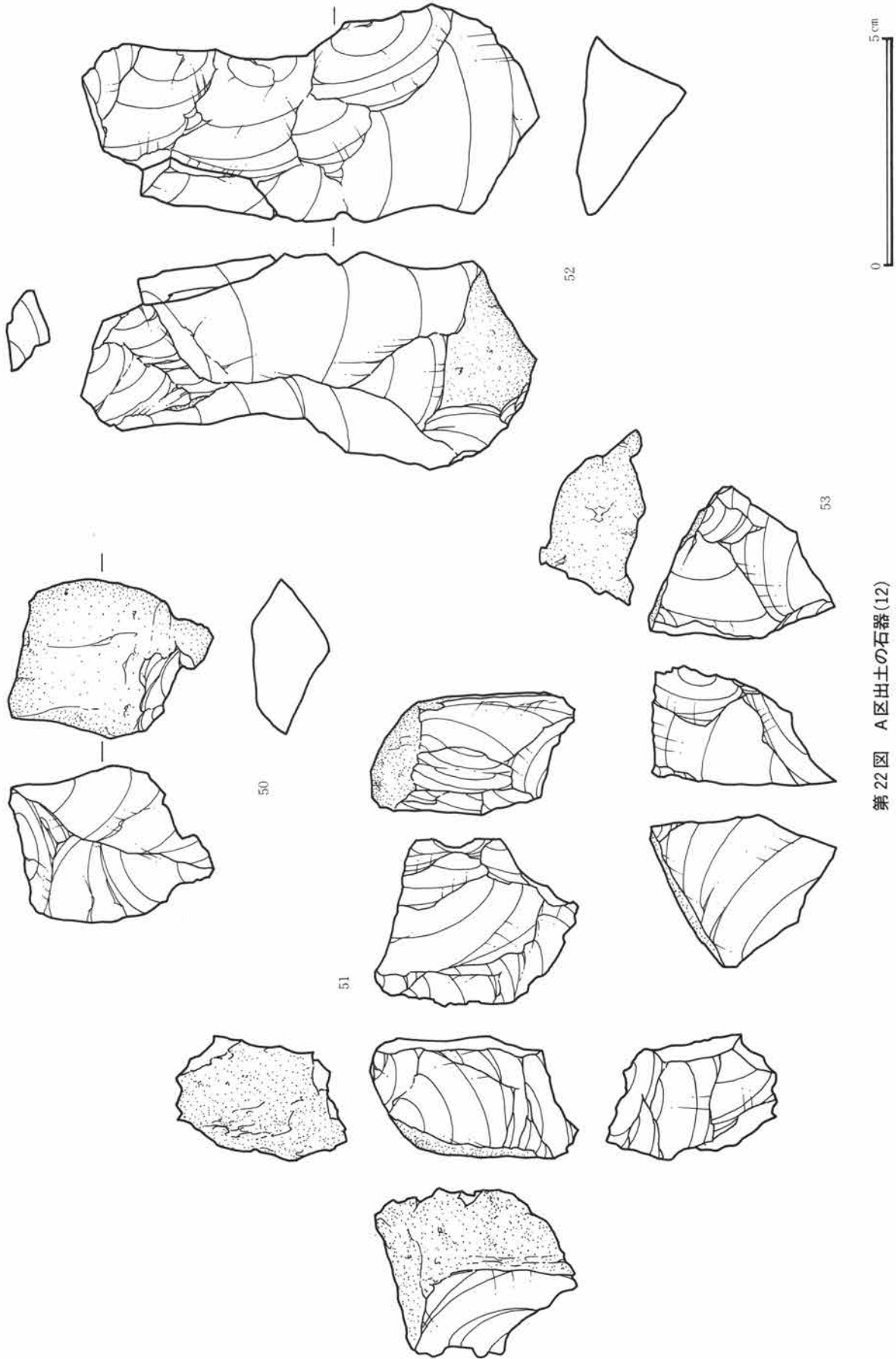
62は、楕円形状を呈す河床礫を素材とする石核である。平坦な剥離面を打面とし、裏面側には大きく礫面を残す。剥片剥離は石核の上下両端よりおこなわれ、上端より2枚の、下端より1枚の、剥片が剥離される。打面調整は認められない。長さ8.8cm・幅7.6cm・重さ340.1gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。3号ブロック出土。



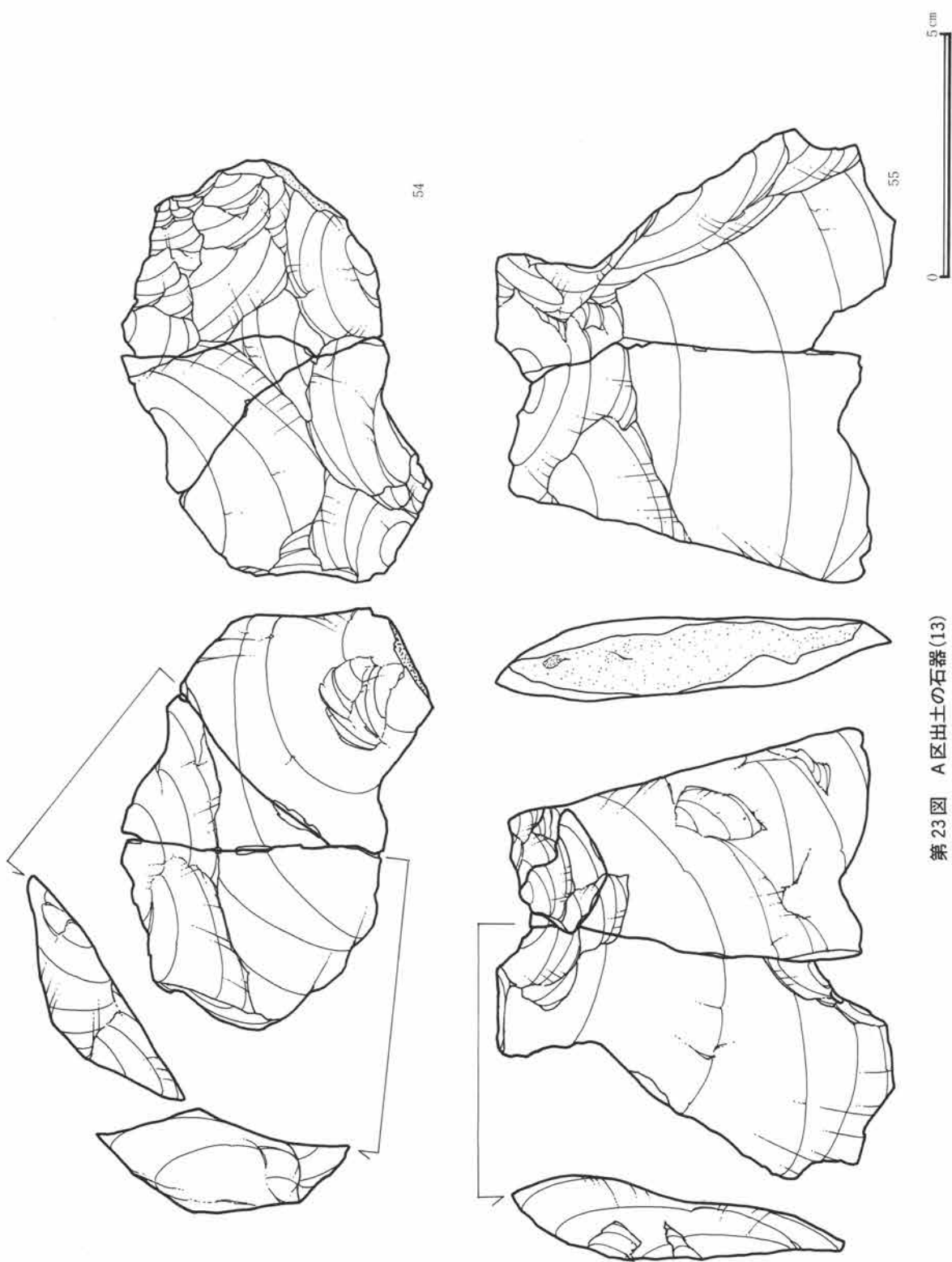
第 20 図 A 区出土の石器(10)

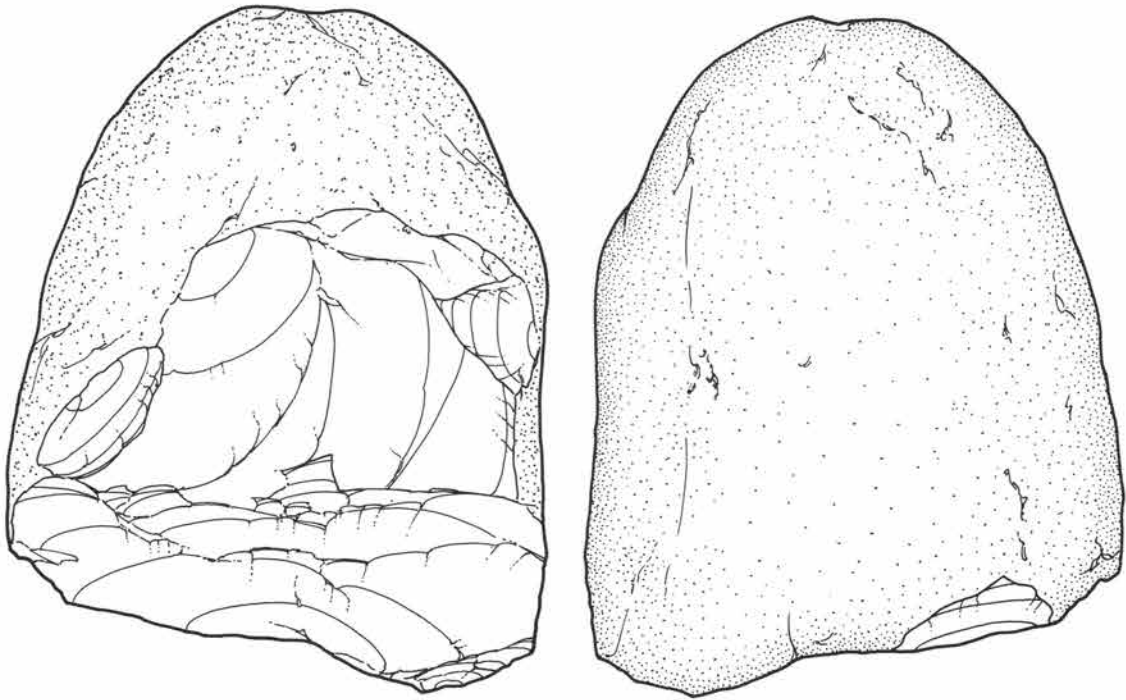
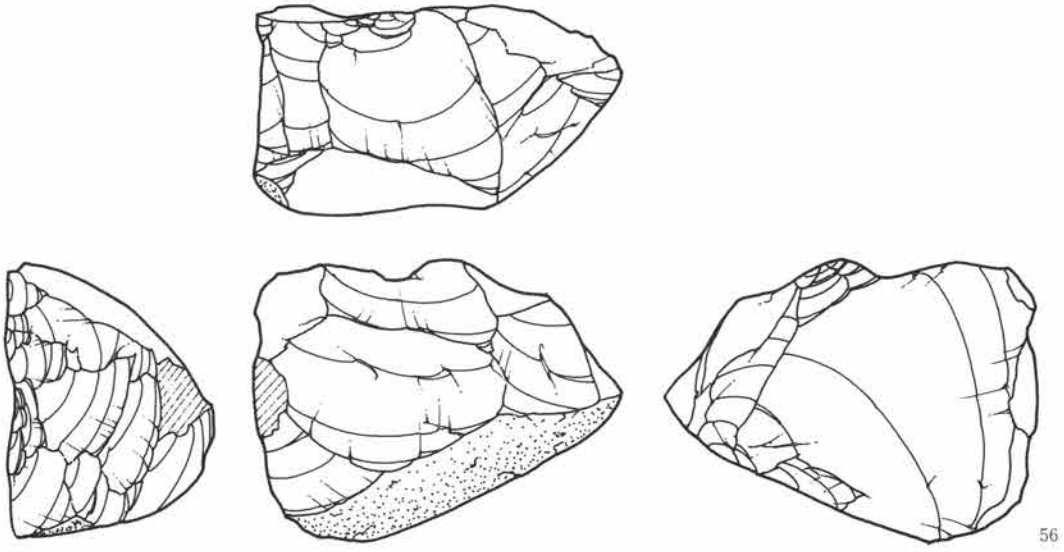


第21図 A区出土の石器(11)

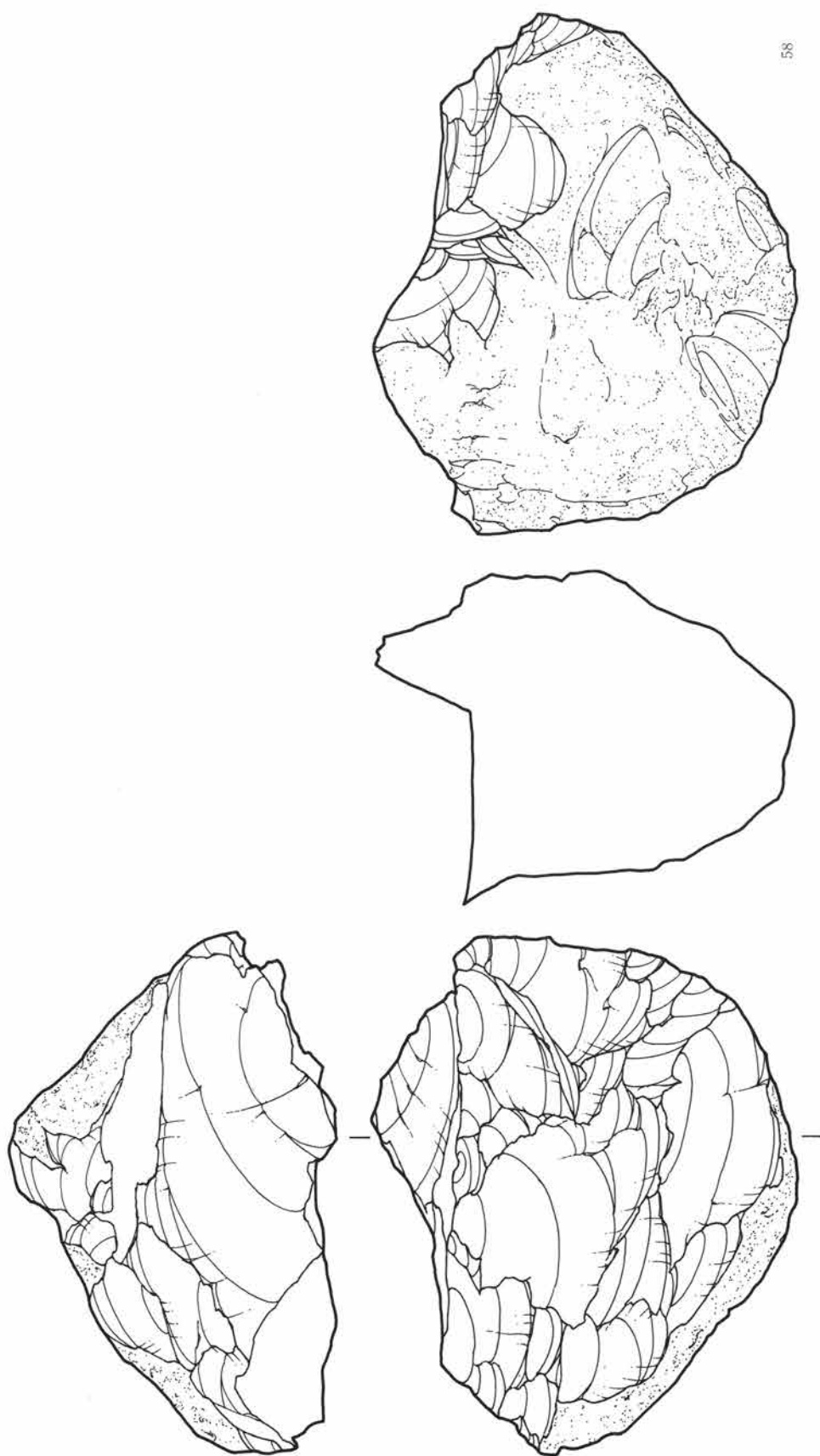


第 22 図 A 区出土の石器(12)





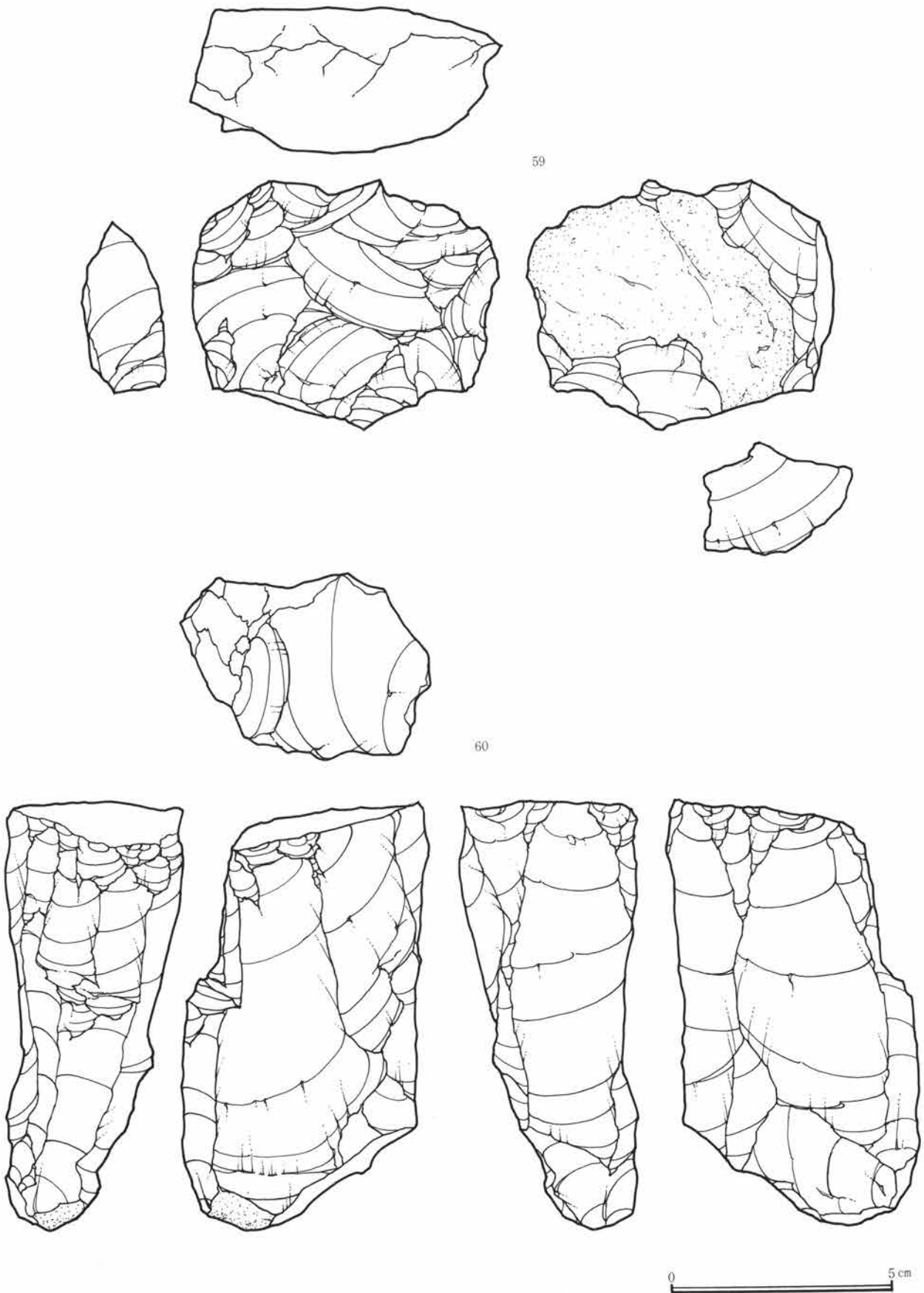
第24図 A区出土の石器(14)



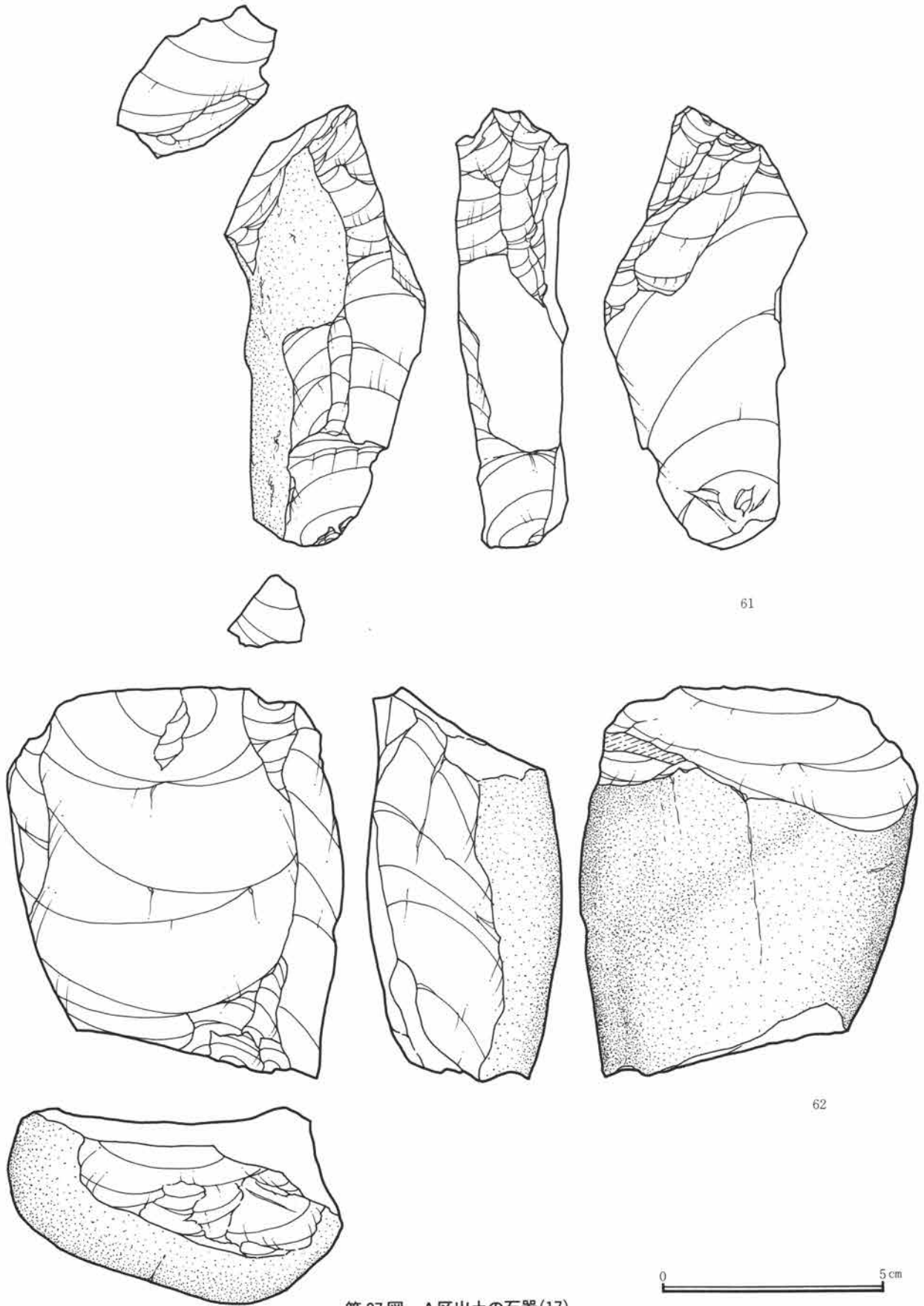
58



第25図 A区出土の石器(15)



第26図 A区出土の石器(16)



第27図 A区出土の石器(17)

縦長剥片(第28～34図、63～95)

総計49点の縦長剥片には、2号ブロックの27点・3号ブロックの16点が存在するほか、単独出土の6点がこれに加わる。石器石材は黒色安山岩が全体の60%ほど(残り40%ほどを黒色頁岩が)を占める。

63・66・67・71・86・87の6点は母岩別資料・黒色安山岩-2に分類される縦長剥片である。いずれも平坦な剥離面を打面とし、同一の剥片剥離工程より作出される。左右・両側縁がほぼ平行する剥片形状を示し、三角形の断面形状を呈する。形状の明らかな4点(66・71・86・87)より、長さ5.2～8.2cm・幅2.4～3.2cmほどを測り、長幅比2:1を示す剥片が多く認められる。いずれも2号ブロックより出土する。

63は平坦な剥離面を打面とし作出される。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。左側縁には折断面が認められ、剥片端部を欠損する。接合資料A-2を構成する。66は平坦な剥離面を打面とし作出される。剥片の形状は三角形を呈する。67は点状の打面形状を呈するが、他の資料同様平坦な剥離面を打面とし作出されると思われる。横位の折断により、剥片の下半を欠損する。接合資料A-2を構成する。71は平坦な剥離面を打面とし作出される。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。右側縁には折断面が認められ、剥片端部を欠損する。接合資料A-2を構成する。86は点状の打面形状を呈するが、他の資料同様平坦な剥離面を打面とし作出されると思われる。剥片の中央付近で横位に切断される。接合資料A-2を構成する。87は平坦な剥離面を打面とし作出される。横位の折断により、剥片端部を欠損する。

64・72・79・81・82・89・95の7点は母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される縦長剥片である。81・82の2点は礫面を打面とするが、他の5点は平坦な剥離面を打面とし、同一の剥片剥離工程より作出される。左右・両側縁がほぼ平行する剥片形状を示し、三角形の断面形状を呈する。82を除く6点には横位の折断が認められる。形状の明らかな5点(72・79・81・82・89)より、長さ8～10cm・幅4～6cmほどを測り、長幅比2:1を示す剥片が多く認められる。いずれも2号ブロックより出土する。

64は平坦な剥離面を打面とし作出される。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。横位の折断により、剥片の下半を欠損する。72は平坦な剥離面を打面とし作出されると思われるが、横位の折断により剥片の上半を欠損するため明らかではない。剥片の中央付近で横位に折断される。接合資料A-3を構成する。79は平坦な剥離面を打面とし作出される。剥片の中央付近で横位に折断される。頭部調整は認められない。接合資料A-4を構成する。81は平坦な礫面を打面とし作出される。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。剥片の中央付近で横位に折断される。接合資料A-3を構成する。82は平坦な礫面を打面とし作出される。剥片の形状は三角形を呈し、著しい頭部調整が施される。接合資料A-3を構成する。89は平坦な剥離面を打面とし作出される。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。剥片の中央付近で横位に折断される。接合資料A-4を構成する。95は平坦な剥離面を打面とし作出されると思われるが、横位の折断により剥片の上半を欠損するため明らかではない。剥片の中央付近で横位に折断される。接合資料A-11を構成する。

69・70・92・94の4点は母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される縦長剥片である。点状の打面形状を示す1点(69)を除き、いずれも平坦な剥離面を打面とし、同一の剥片剥離工程より作出される。左右・両側縁がほぼ平行する剥片形状を示し、三角形の断面形状を呈する。形状の明らかな3点(70・92・94)より、長さ5～7cm・幅3～4cmほどを測り、長幅比2:1を示す剥片が多く認められる。いずれも2号ブロックより出土する。

69は平坦な剥離面を打面とし作出されると思われるが、剥離段階の欠損のため明らかではない。2点の接合よりなる。接合資料A-1を構成する。70は平坦な剥離面を打面とし作出される。剥片の下半を欠損する

I 旧石器時代の遺構と遺物

ため明らかではないが、剥片の形状は三角形状を呈する。接合資料A-1を構成する。92は平坦な剥離面を打面とし作出される。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。剥片端部を一部欠損する。接合資料A-1を構成する。94は平坦な剥離面を打面とし作出されると思われるが、剥離段階の欠損のため明らかではない。3点の接合よりなる。接合資料A-1を構成する。

77・80の2点は母岩別資料・黒色頁岩-1に分類される縦長剥片である。いずれも平坦な剥離面を打面とし、同一の剥片剥離工程より作出される。左右・両側縁がほぼ平行する剥片形状を示し、三角形状の断面形状を呈する。いずれも3号ブロックより出土する。

77は平坦な剥離面を打面とし、作出される。右側縁には折断面が認められ、剥片の形状は三角形状を呈する。長さ9.3cm・幅3.9cmを測る。80は点状の打面形状を呈するが、他の資料同様平坦な剥離面を打面とし、作出されると思われる。背面構成は両設打面の存在を示す。長さ7.9cm・幅2.6cmを測る。

65・68・73~76・78・84・85・88・91・93の12点は黒色頁岩を素材とする縦長剥片である。礫面を打面とする3点(73・74・91)を除き、いずれも平坦な剥離面を打面とし、同一の剥片剥離工程より作出される。左右・両側縁がほぼ平行する剥片形状を示し、三角形状あるいは台形状の断面形状を呈する。形状の明らかな8点より、長さ5~12cm・幅2~4cmほどを測り、長幅比2:1を示す剥片が多く認められる。65・68・75の3点は2号ブロックより、76・88・93の3点は3号ブロックより、出土する。

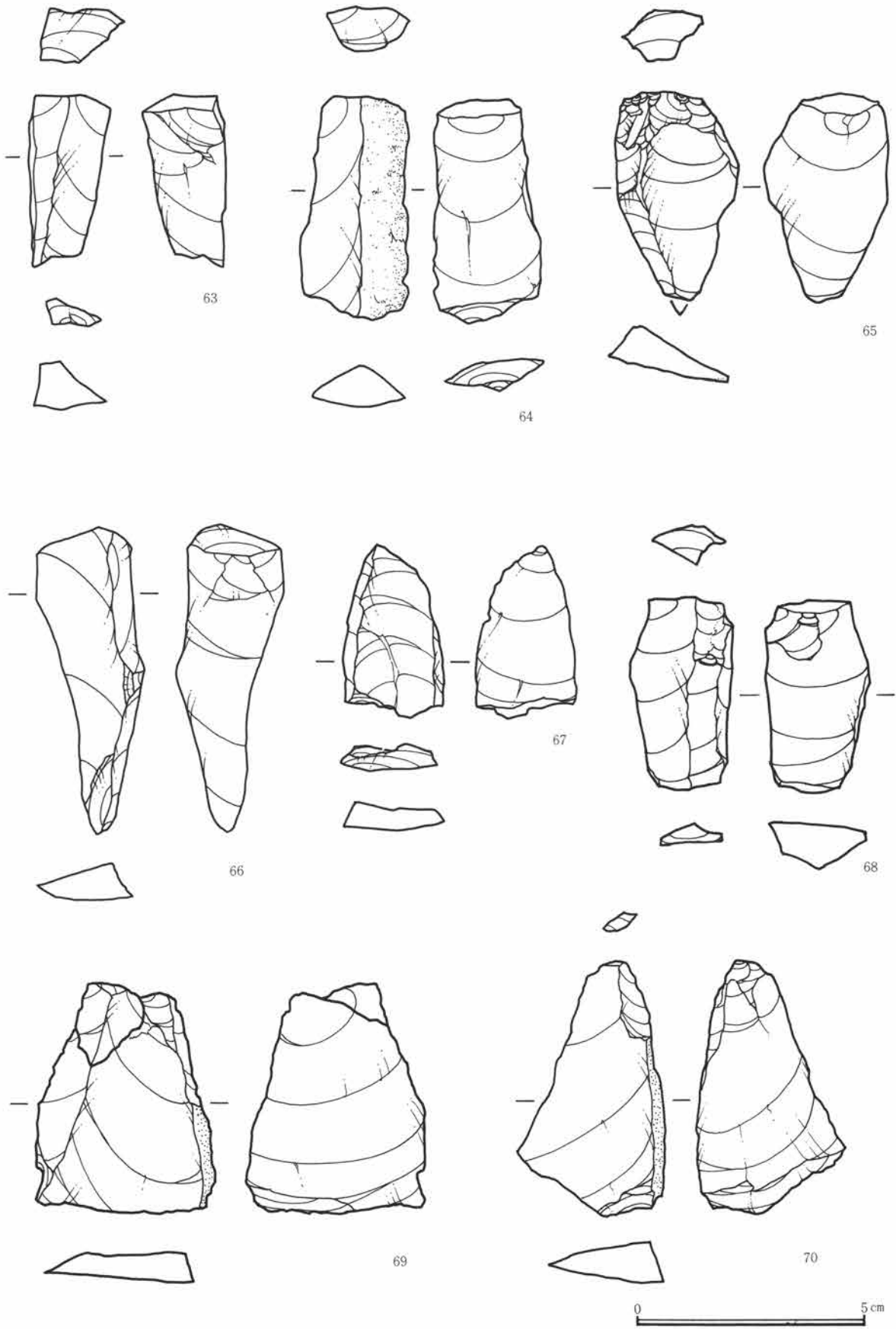
65は平坦な剥離面を打面とし作出される。背面構成は両設打面の存在を示すほか、著しい頭部調整が認められる。剥片の形状は三角形状を呈する。68は平坦な剥離面を打面とし作出される。横位の切断により、剥片の下半を欠損する。73は礫面を打面とし作出される。背面構成は両設打面の存在を示す。横位の切断により、剥片端部を欠損する。74は礫面を打面とし作出される。背面構成は両設打面の存在を示す。横位の切断により、剥片端部を欠損する。剥片の形状は三角形状を呈する。75は平坦な剥離面を打面とし作出される。横位の切断により、剥片端部を欠損する。台形状の断面形状を示す。76は平坦な剥離面を打面とし作出される。右側縁には大きく礫面を残す。剥片端部を一部欠損する。台形状の断面形状を示す。78は平坦な剥離面を打面とし作出される。剥片中央および剥片端部で横位に折断される。84は平坦な剥離面を打面とし作出される。横位に折断され、剥片端部を欠損する。台形状の断面形状を示す。85は平坦な剥離面を打面とし作出される。著しい頭部調整は認められないが、左右・両側縁が平行し、良好な形状を呈する。台形状の断面形状を示す。88は平坦な剥離面を打面とし作出される。剥片中央および剥片端部で横位に折断される。91は礫面を打面とし作出される。節理の存在する部分より欠損するため、剥片の形状は明らかではない。93は点状の打面形状を呈するが、他の資料同様平坦な剥離面を打面とし作出されると思われる。剥片の中央付近で横位に折断される。左側縁には折断面が認められ、剥片の下半を欠損する。

剥片(第35~39図、96~119)

総計411点の剥片は、1号ブロックの11点・2号ブロックの243点・3号ブロックの137点のほか、単独出土の20点からなる。石器石材には、黒色安山岩が全体の92%を占めるほか、黒色頁岩(4.4%)・頁岩(2.2%)が用いられる。ここでは、剥片形状の明らかな資料を図示する。

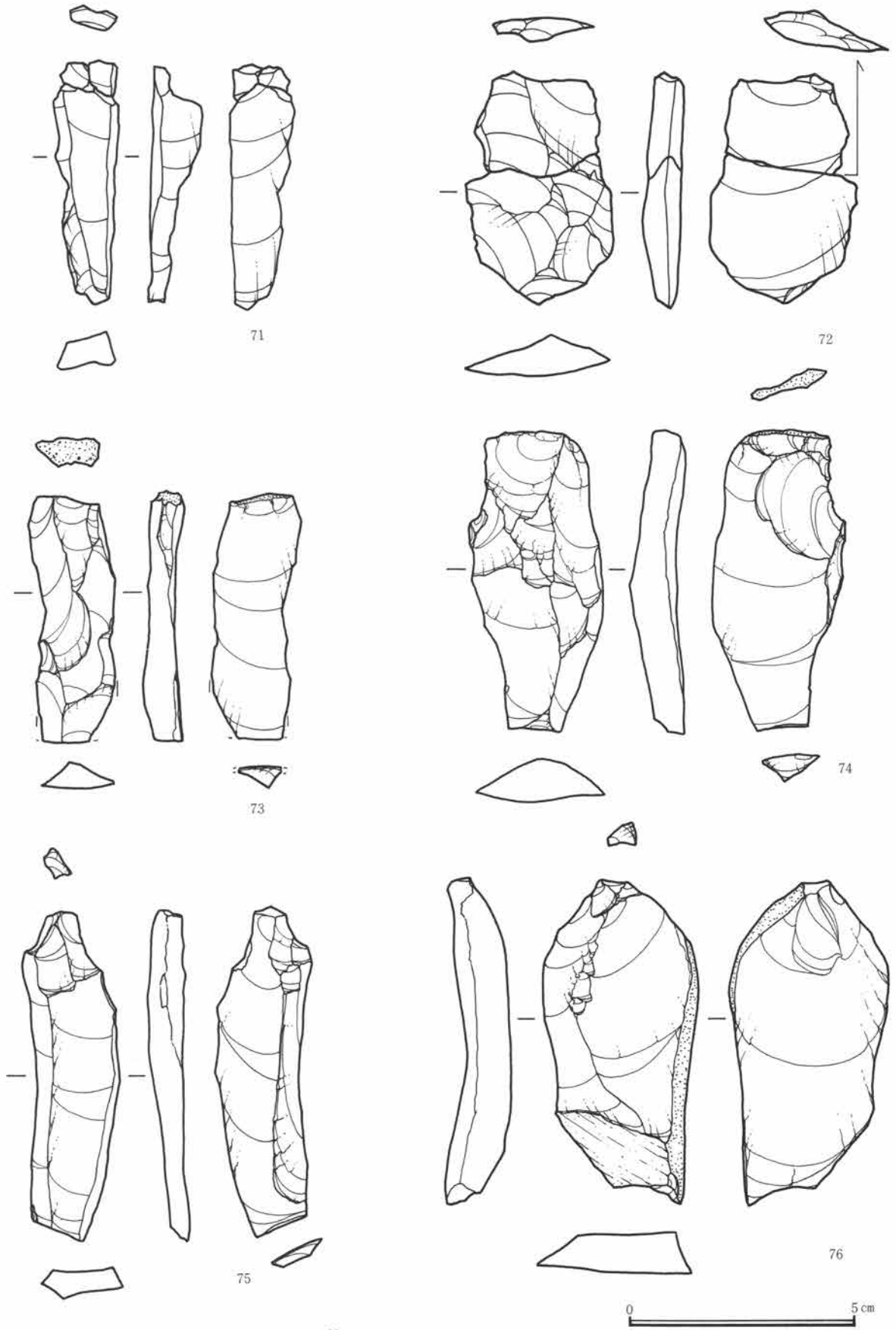
98・103・109・111・113の4点は母岩別資料・黒色安山岩-3に、105・107・115の3点は母岩別資料・黒色安山岩-4に、96・108・110・114・118・119の6点は母岩別資料・黒色安山岩-5に、それぞれ分類される。礫面を打面とする118や複剥離面を打面とする119を除き、平坦な剥離面を打面とし作出される。

97・99・101・102・104・106・112・117の8点は礫面あるいは平坦な剥離面を打面とし作出される。黒色頁岩を素材とする。

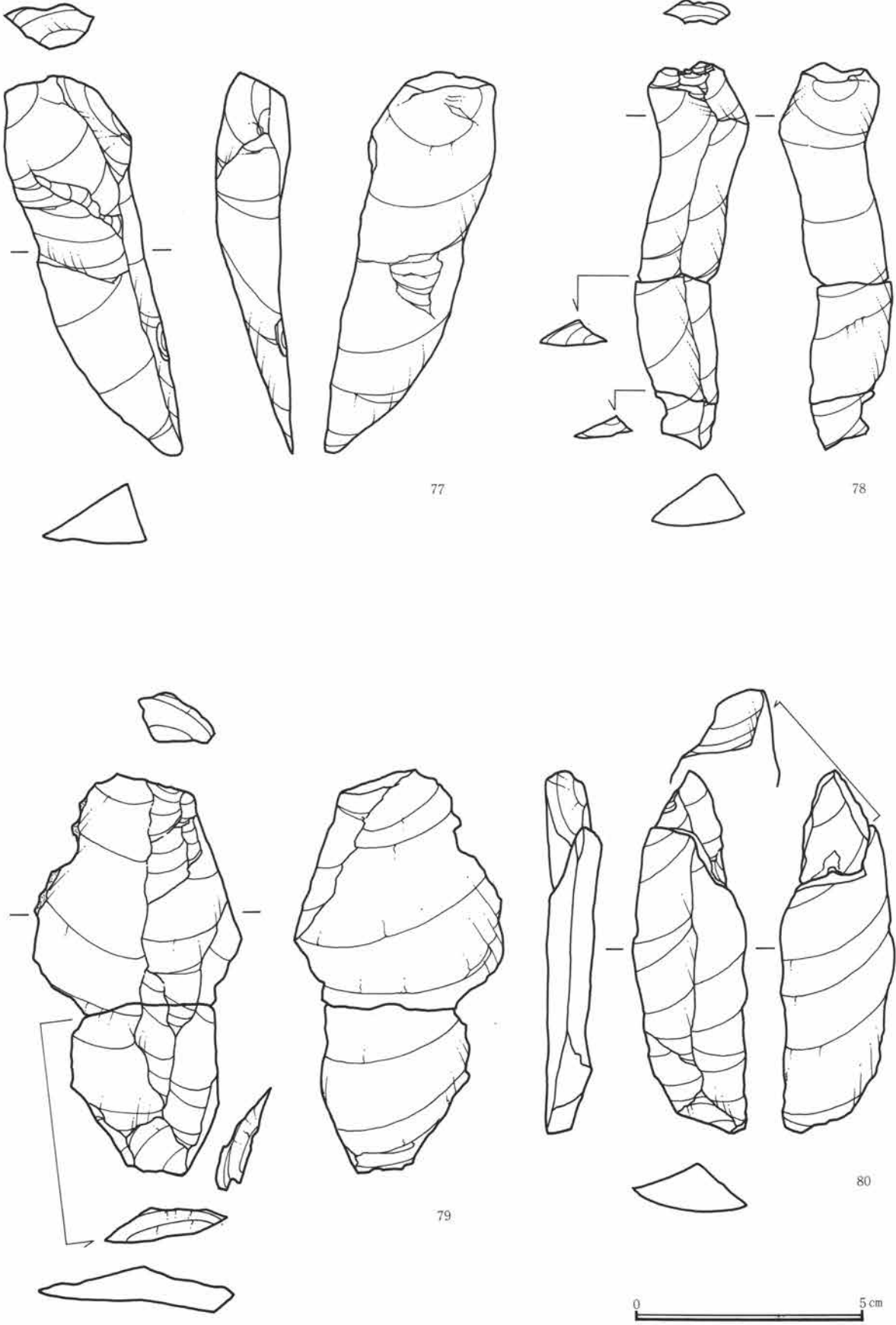


第 28 図 A 区出土の石器(18)

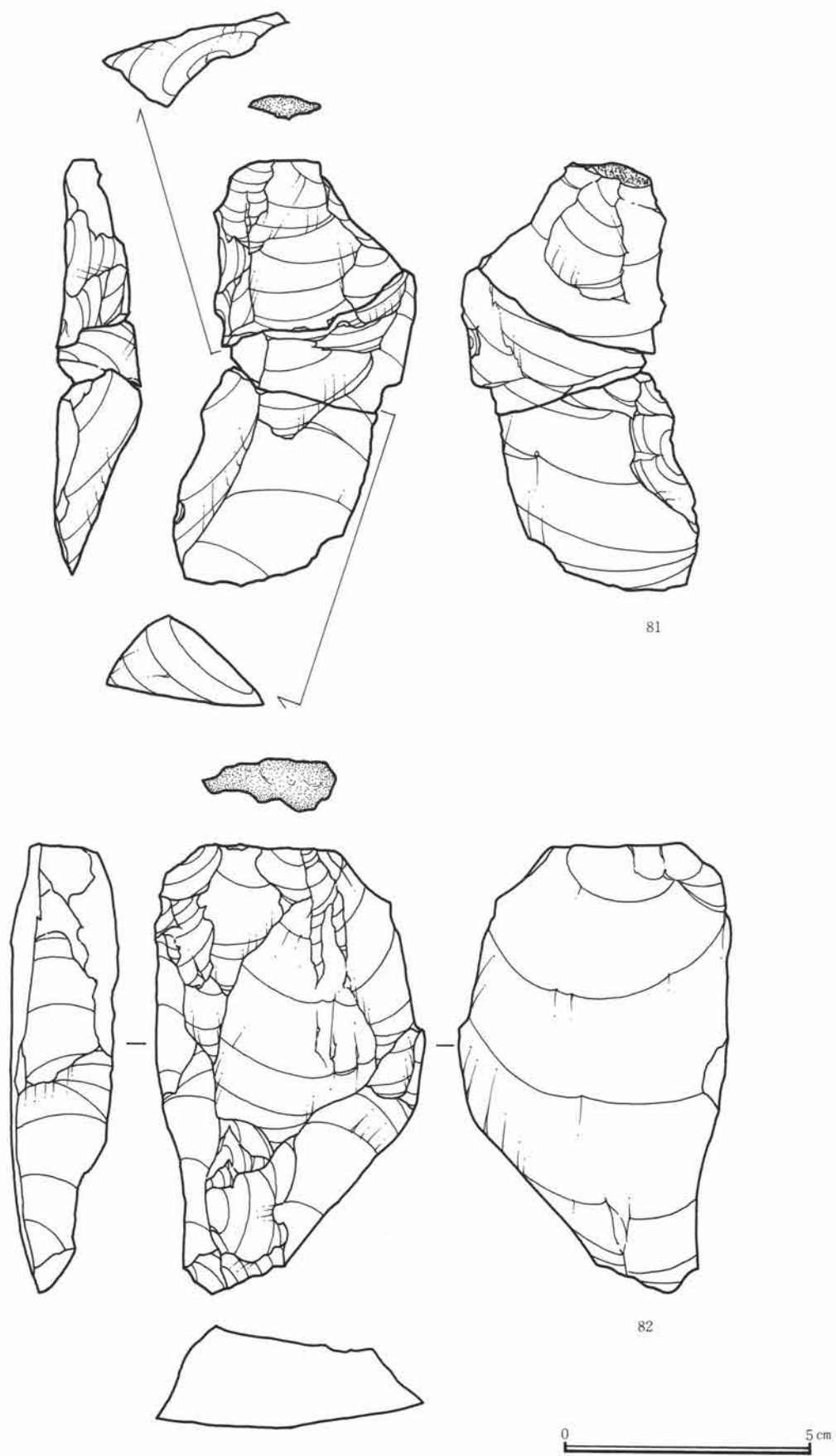
I 旧石器時代の遺構と遺物



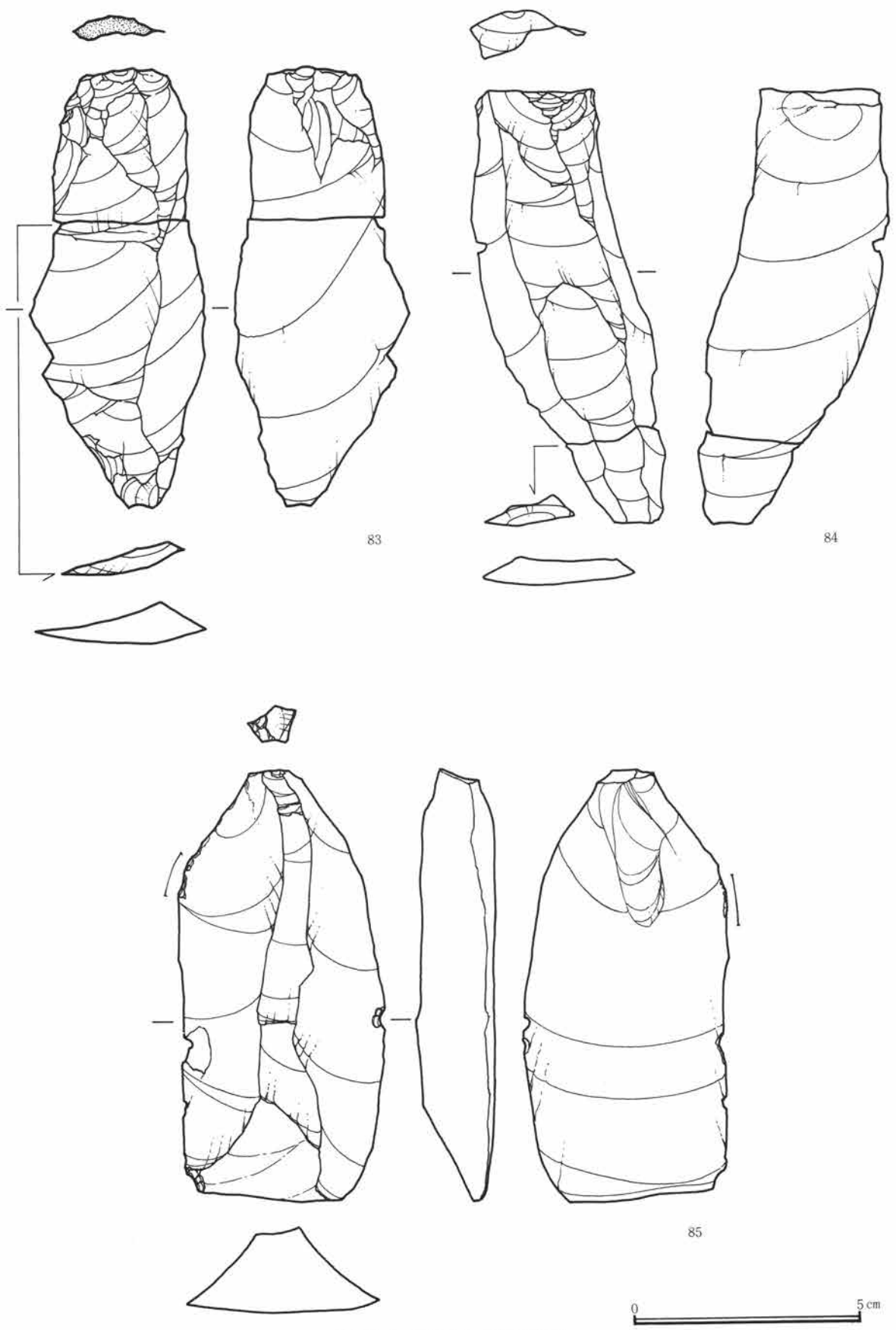
第 29 図 A 区出土の石器(19)



第30図 A区出土の石器(20)

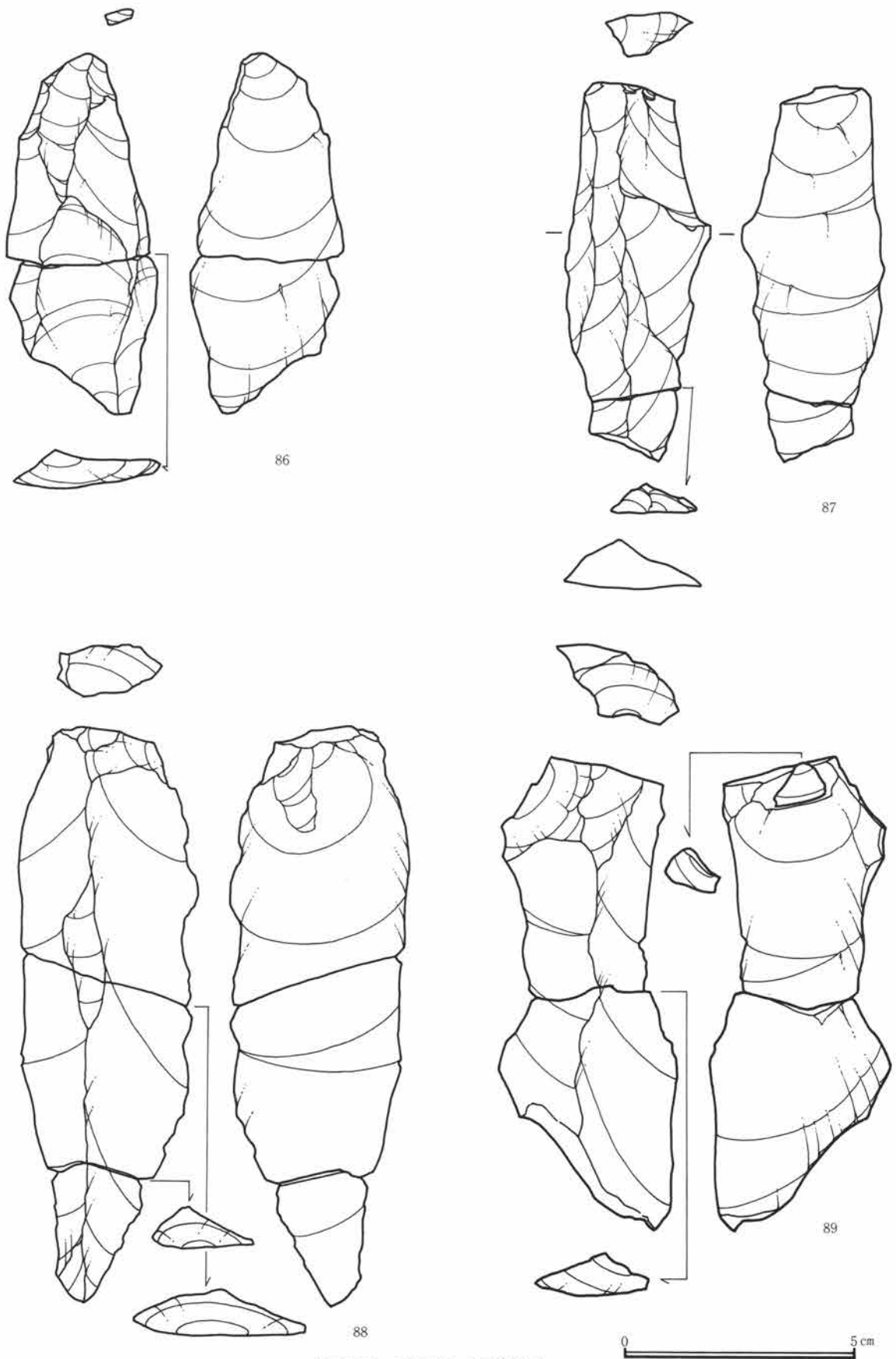


第 31 図 A 区出土の石器(21)

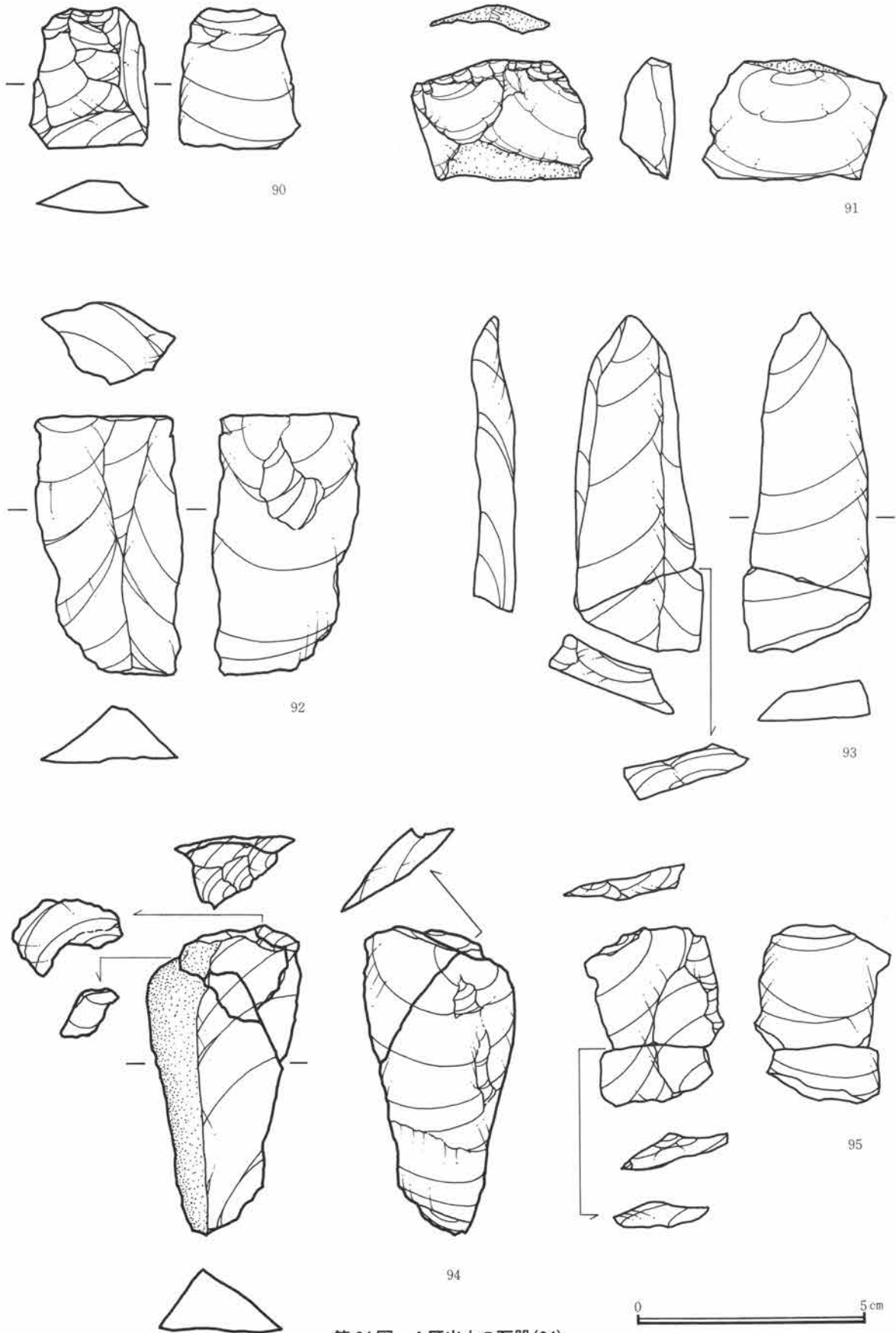


第 32 図 A 区出土の石器(22)

I 旧石器時代の遺構と遺物

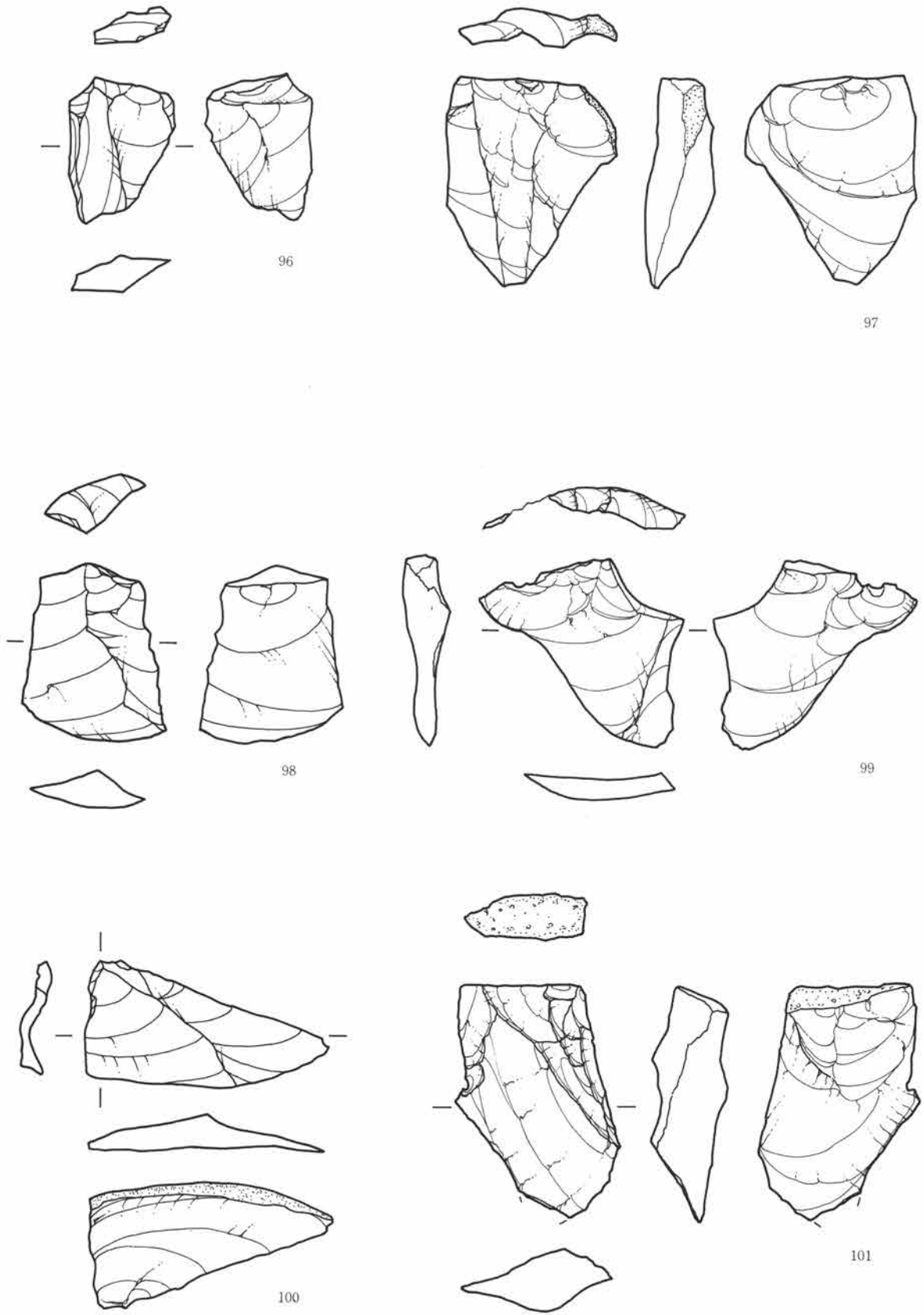


第 33 図 A 区出土の石器(23)

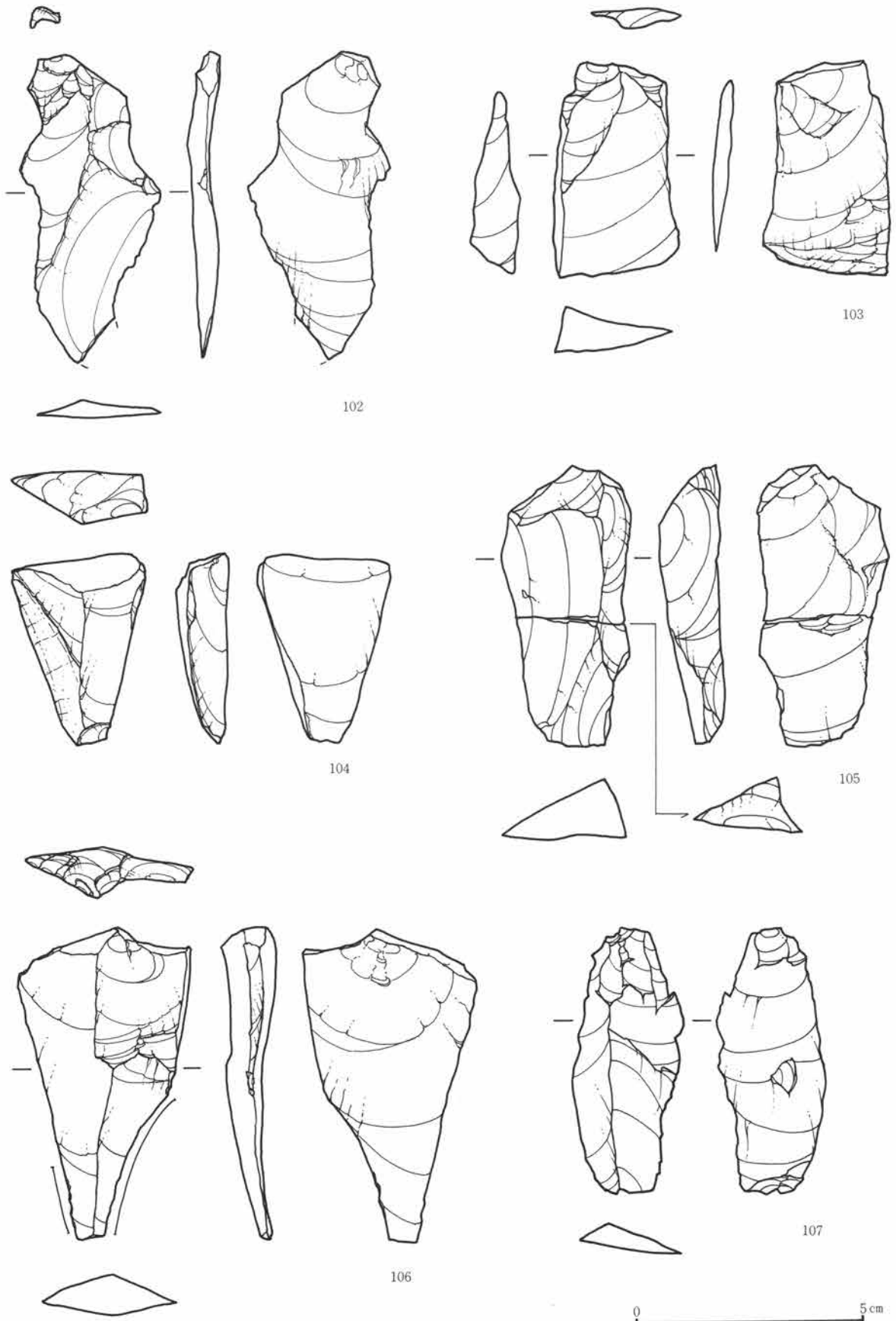


第 34 図 A 区出土の石器 (24)

I 旧石器時代の遺構と遺物

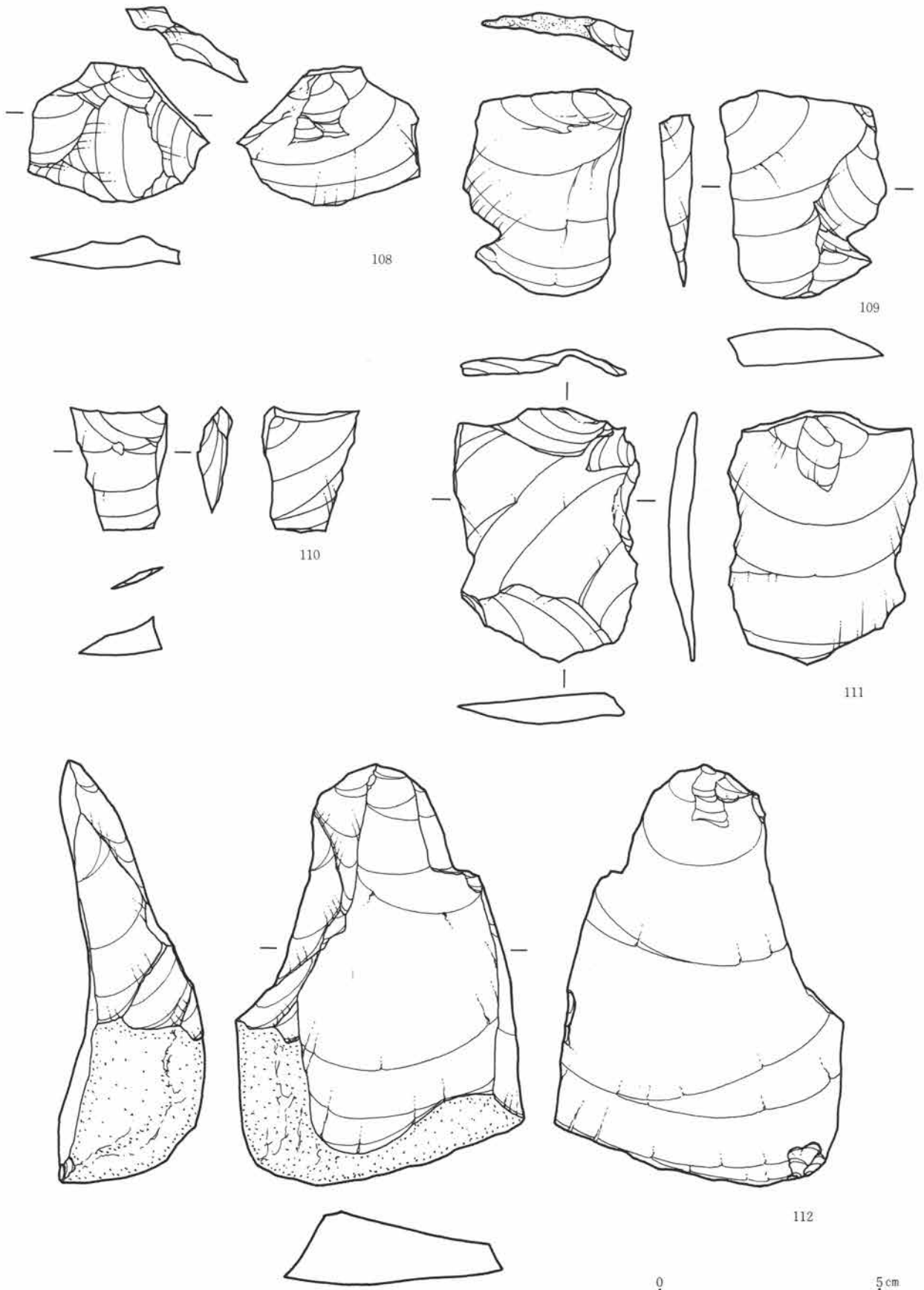


第 35 図 A 区出土の石器 (25)

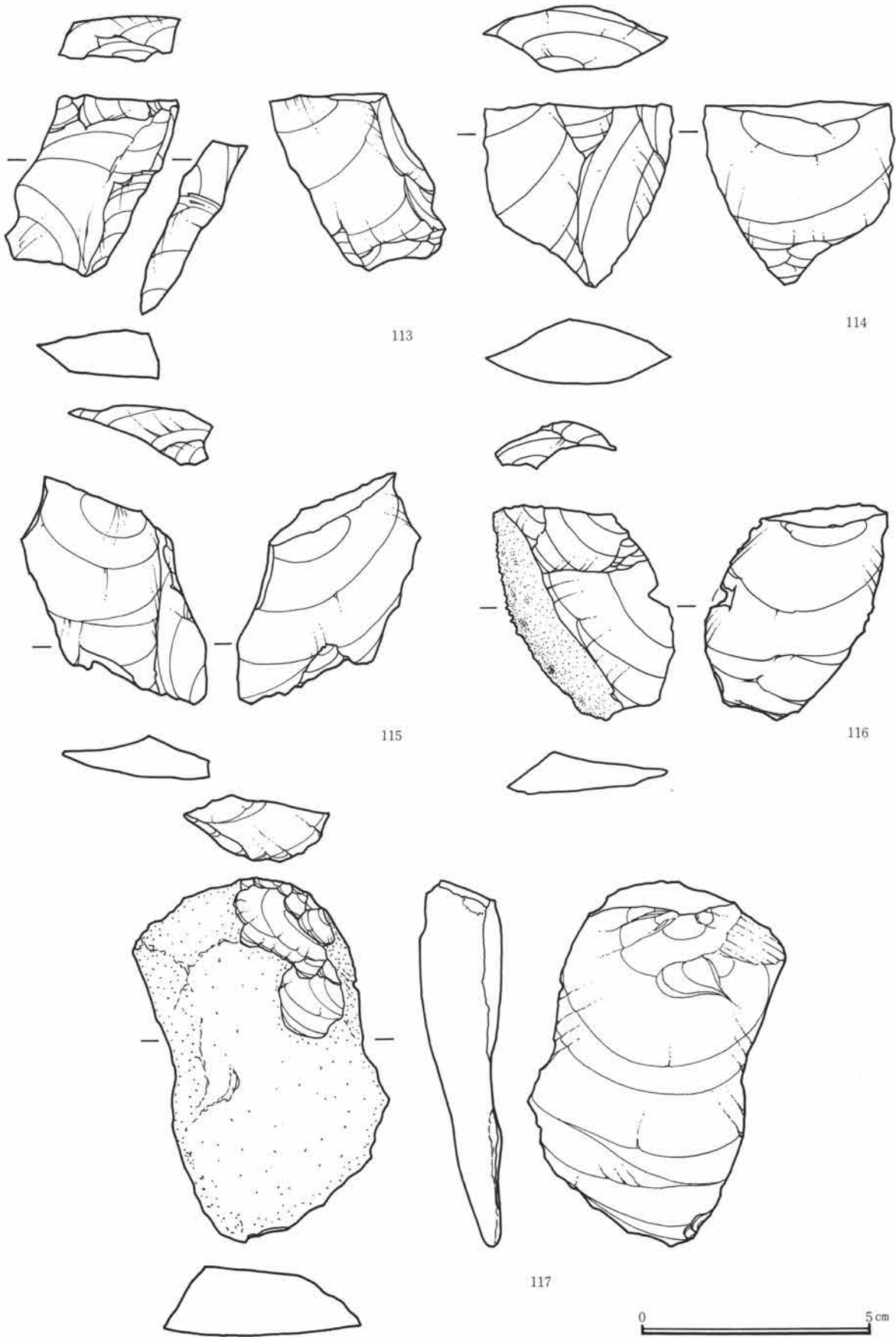


第 36 図 A 区出土の石器(26)

I 旧石器時代の遺構と遺物

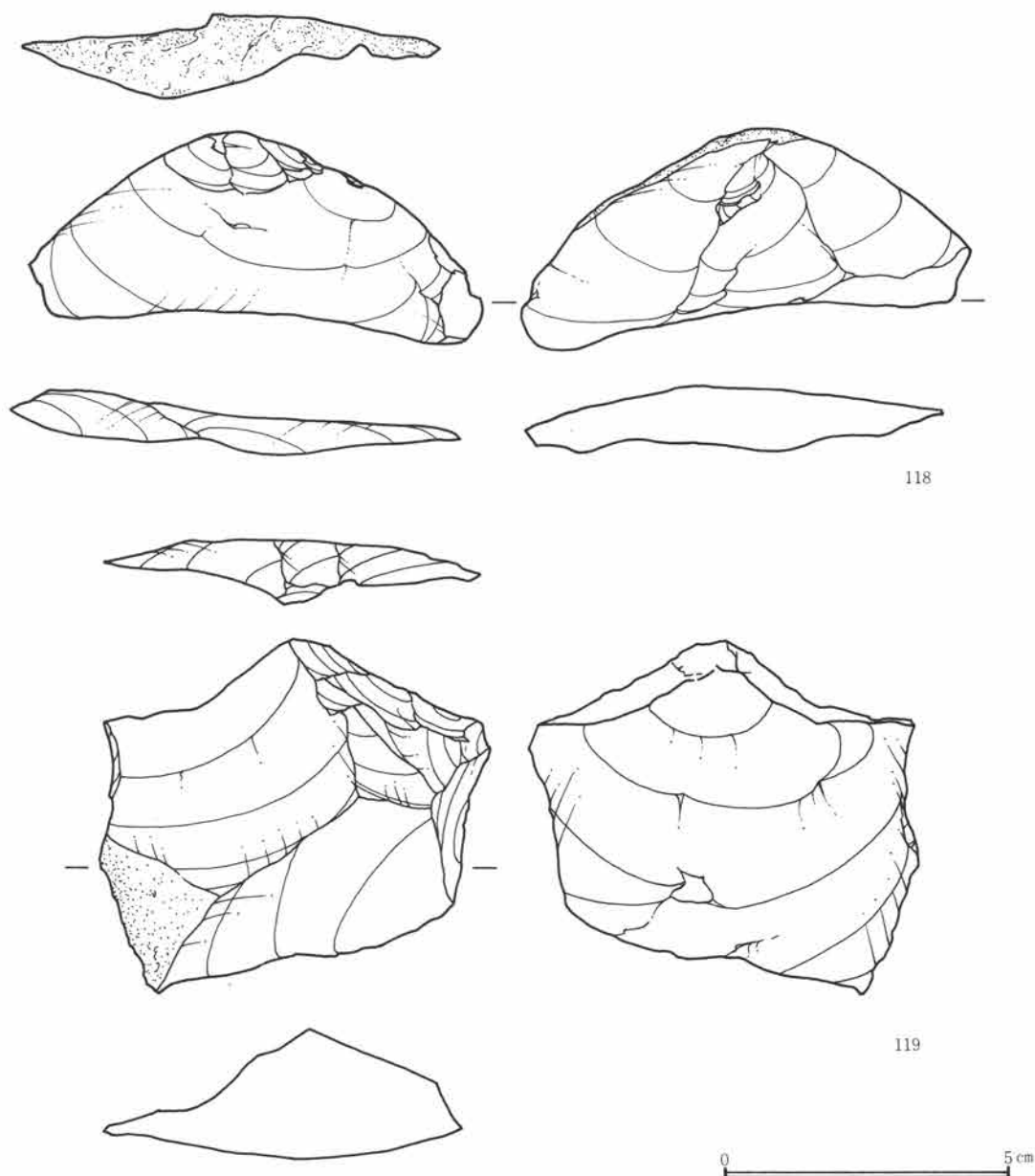


第 37 図 A 区出土の石器(27)



第 38 図 A 区出土の石器(28)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第 39 図 A 区出土の石器(29)

礫石器(第40・41図、120～133)

総計14点の礫石器が出土している。これらは周辺の河床より採集される円礫および偏平礫や山麓斜面より採集される亜角礫が用いられる。前者の場合、2号ブロックでブロックの周辺部より磨石1点が、ブロックの中心部より磨石1点(127)・敲石1点(122)が、3号ブロックでは中心部より敲石2点(120・123)・周辺部より敲石2点(121・125)が、それぞれ出土する。後者の場合、2号ブロックではブロックの中心部より1点(131)が、3号ブロックでは3点(130・132・133)が、それぞれ出土する。その多くはXVI層中位より出土し、輝石安山岩(粗粒)が用いられる。なお、亜角礫の場合、ブロックの中心部に出土すること、礫重量は1,000gを越えることが、多いことなどが指摘される。使用状態や受熱の有無については、明確ではないが、摩耗痕や打撃痕などわずかながら使用痕の認められる資料が存在するほか、単独出土の4点が存在する。

4. A地点の調査

120は、楕円形状を呈す輝石安山岩(粗粒)を用いる。表裏・両面のほか、側縁および小口部分には著しい打撃痕が認められ、石器の機能部となる。長さ6.3cm・幅7.5cm・重さ770.8gを測る。3号ブロック出土。

121は、楕円形状を呈す小形の閃緑岩を用いる。側縁および小口部分には打撃痕がわずかに認められ、石器の機能部となる。長さ9.0cm・幅7.1cm・重さ447.0gを測る。3号ブロック出土。

122は、円形・偏平な輝石安山岩(粗粒)を用いる。側縁および小口部分には著しい打撃痕が認められ、石器の機能部となる。また、明確ではないが、表裏・両面には摩耗痕が認められる。長さ9.1cm・幅8.0cm・重さ408.8gを測る。2号ブロック出土。

123は、楕円形状を呈す輝石安山岩(粗粒)を用いる。石器の表面のほか、側縁および小口部分には著しい打撃痕が認められ、石器の機能部となる。長さ11.8cm・幅7.9cm・重さ824.2gを測る。3号ブロック出土。

124は、楕円形状を呈す小形の輝石安山岩(粗粒)を用いる。側縁および小口部分には著しい打撃痕が認められ、石器の機能部となる。また、明確ではないが、石器の表裏・両面には摩耗痕が認められる。長さ11.9cm・幅9.9cm・重さ1,045.5gを測る。2号ブロックの周辺より出土する。

125は、楕円形状を呈す小形の輝石安山岩(粗粒)を用いる。表裏・両面のほか、側縁および小口部分には打撃痕がわずかに認められ、石器の機能部となる。長さ9.0cm・幅7.1cm・重さ447.0gを測る。3号ブロック出土。

126は、楕円形状を呈す輝緑岩を用いる。表裏・両面には著しい摩耗痕が認められ、石器の機能部となる。長さ17.3cm・幅9.4cm・重さ1,372.6gを測る。2号ブロックの周辺より出土する。

127は、楕円形状を呈す小形の輝石安山岩(粗粒)を用いる。表裏・両面のほか、側縁および小口部分には著しい打撃痕が認められ、石器の機能部となる。また、明確ではないが、石器の裏面に摩耗痕が認められる。長さ10.7cm・幅7.6cm・重さ578.3gを測る。2号ブロック出土。

128は、輝石安山岩(粗粒)を用いるが、石器の形状は欠損のため明確でない。表裏・両面には著しい摩耗痕が認められ、石器の機能部となる。なお、石器は遺存部分より亜角礫に分類され、通常、顕著な平坦部分は認められない。長さ8.9cm・幅7.7cm・重さ639.3gを測る。3号ブロック出土。

129は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。石器の形状は欠損のため明確ではないが、遺存部分より亜角礫に分類される。割れ面には著しい凹凸が認められる。小口部分には打撃痕がわずかに認められるが、明確ではない。長さ7.0cm・幅9.9cm・重さ379.5gを測る。3号ブロック出土。

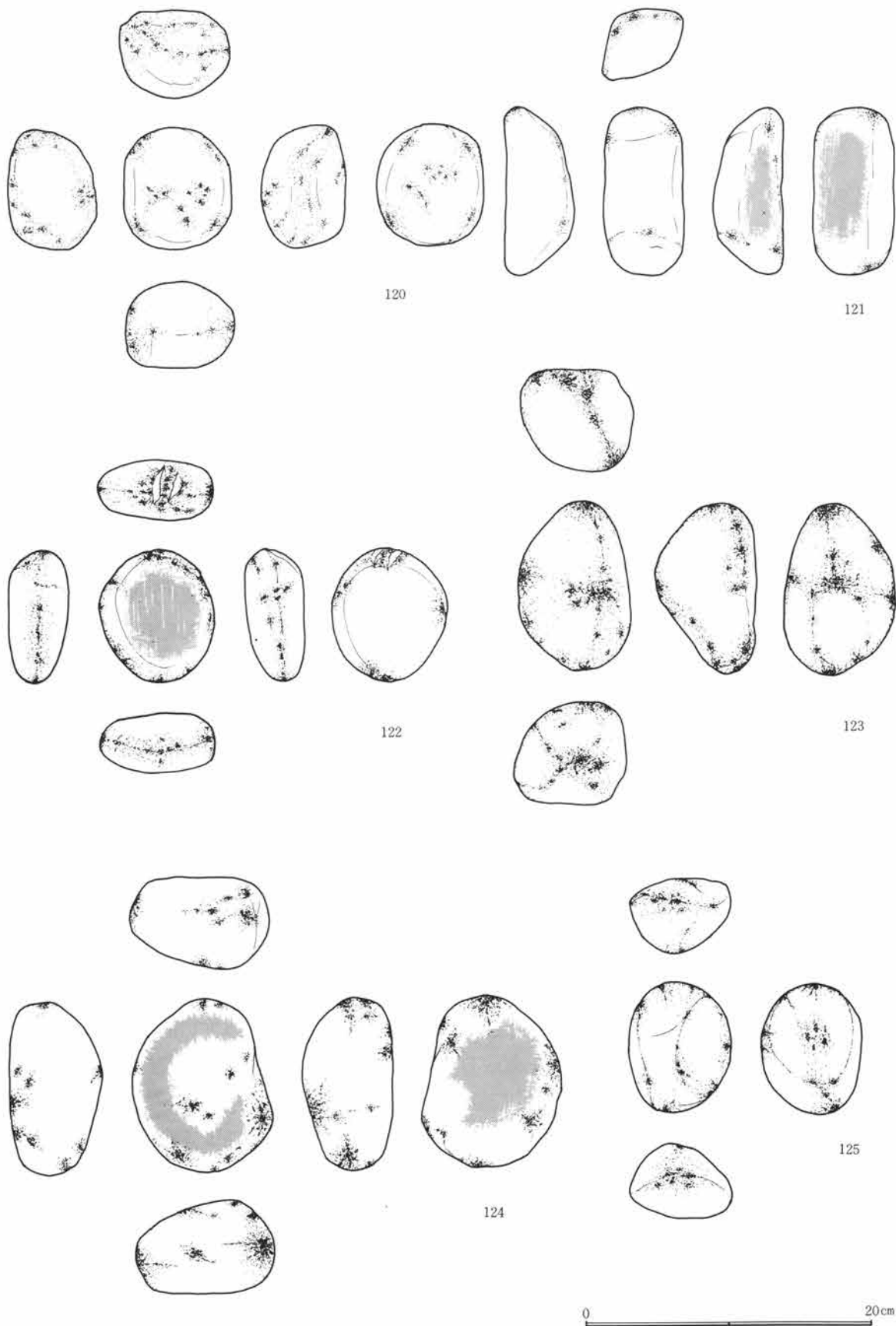
130は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。石器の形状は欠損のため明確ではないが、遺存部分より亜角礫に分類される。風化により明確ではないが、割れ面は摩耗状態を示す。長さ11.3cm・幅9.5cm・重さ703.3gを測る。71-A-22グリッドより単独出土。

131は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。石器の形状は欠損のため明確ではないが、遺存部分より亜角礫に分類される。表裏・両面にはわずかながら摩耗痕が認められ、石器の機能部となる。長さ16.0cm・幅13.3cm・重さ2,731.0gを測る。2号ブロック出土。

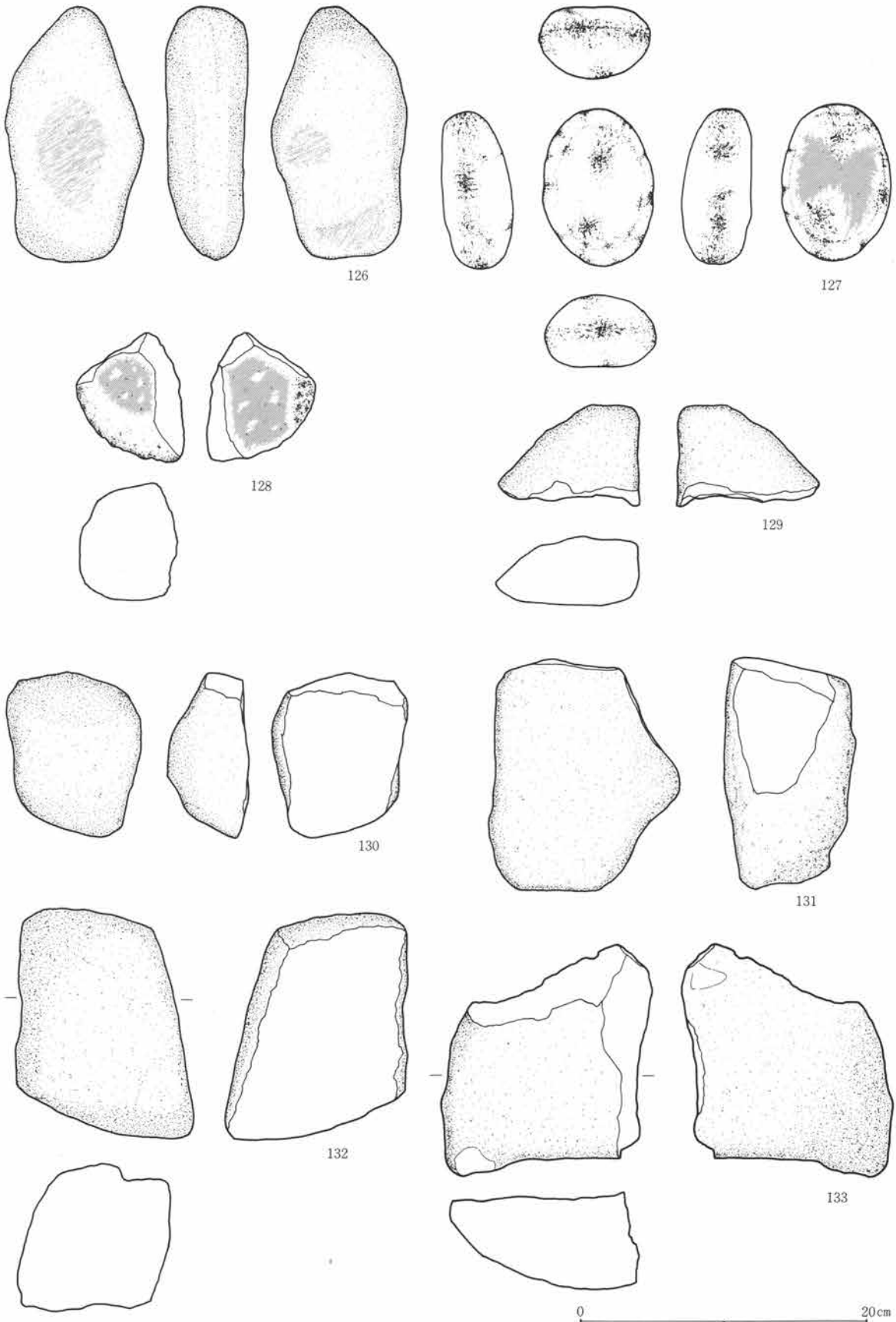
132は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。遺存部分より亜角礫に分類される。打撃痕や摩耗痕など明確な使用痕は認められないが、礫面には小剥離痕が認められる。長さ15.7cm・幅12.8cm・重さ2,874.0gを測る。3号ブロック出土。

133は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。石器の形状は欠損のため明確ではないが、遺存部分より亜角礫に分類される。側縁部分には打撃痕が認められるほか、礫面にはヒビが生じるなどの状態が観察される。長さ15.9cm・幅14.7cm・重さ1,825.0gを測る。3号ブロック出土。

I 旧石器時代の遺構と遺物



第40図 A区出土の石器(30)



第41図 A区出土の石器(31)

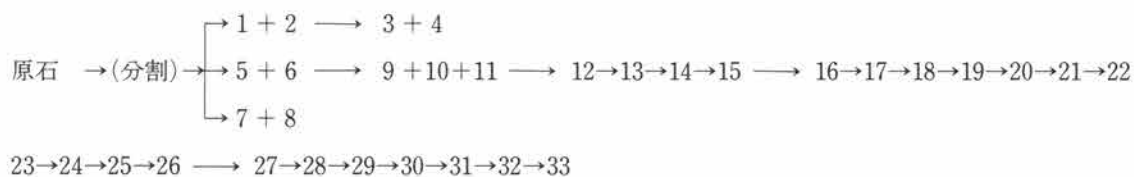
I 旧石器時代の遺構と遺物

4-5, 石器の接合

(1) 接合資料

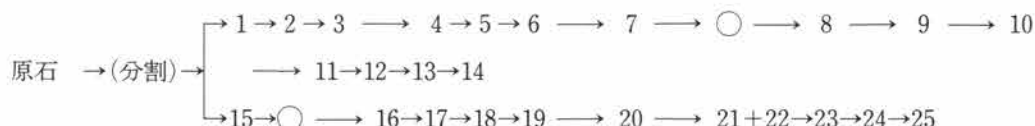
総計1,772点の出土石器には、65例442点の接合資料が確認され、接合率は全体の四分の一(24.9%)ほどに達する。接合により、原石の状態にまで復元することの可能な資料も多く存在するため、比較的容易に製作工程上の位置づけや搬入石器の認識が可能な状況にある。ブロックは比較的単純な様相を示すが、およそ50mの距離を隔て位置するブロックとの接合資料が存在する。

接合資料・A-1 (母岩別資料・黒色安山岩-1、第42~44図)



河床より採集される円礫を原石に用いる。剥片剥離は小口部分より原石を分割・二分することより開始される。石核素材(1)は打面を作出した後に、側縁調整に相当する3・4が剥離される段階で作業を中止するが、一方の石核素材では剥片剥離作業が継続される。まず、5~8が剥離されることにより石核素材の両端に打面が作出されるほか、部分的な石核の側縁調整(9~11)が施される。以下、上下両端に設定される平坦な剥離面を打面とし、目的とする剥片の製作工程が展開する。同一打面より、多い場合には6~8枚、少ない場合には3~4枚の剥片を剥離し、180°打面を転移することにより剥片剥離作業が継続される。打点は背面を構成する稜上を選択され、剥片剥離は左右に大きく打点を振りながら後退する。打面調整は認められない。接合によりほぼ完全な状態に復元されるが、石器素材となる資料および搬出される資料は存在しない。

接合資料・A-2 (母岩別資料・黒色安山岩-2、第45~47図)

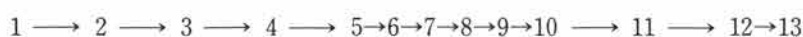


河床より採集される円礫を原石に用い、剥片剥離は原石を分割することにより開始される。本資料では、分割をおこなうことにより、盤状石核素材および柱状石核素材の両者を獲得する。

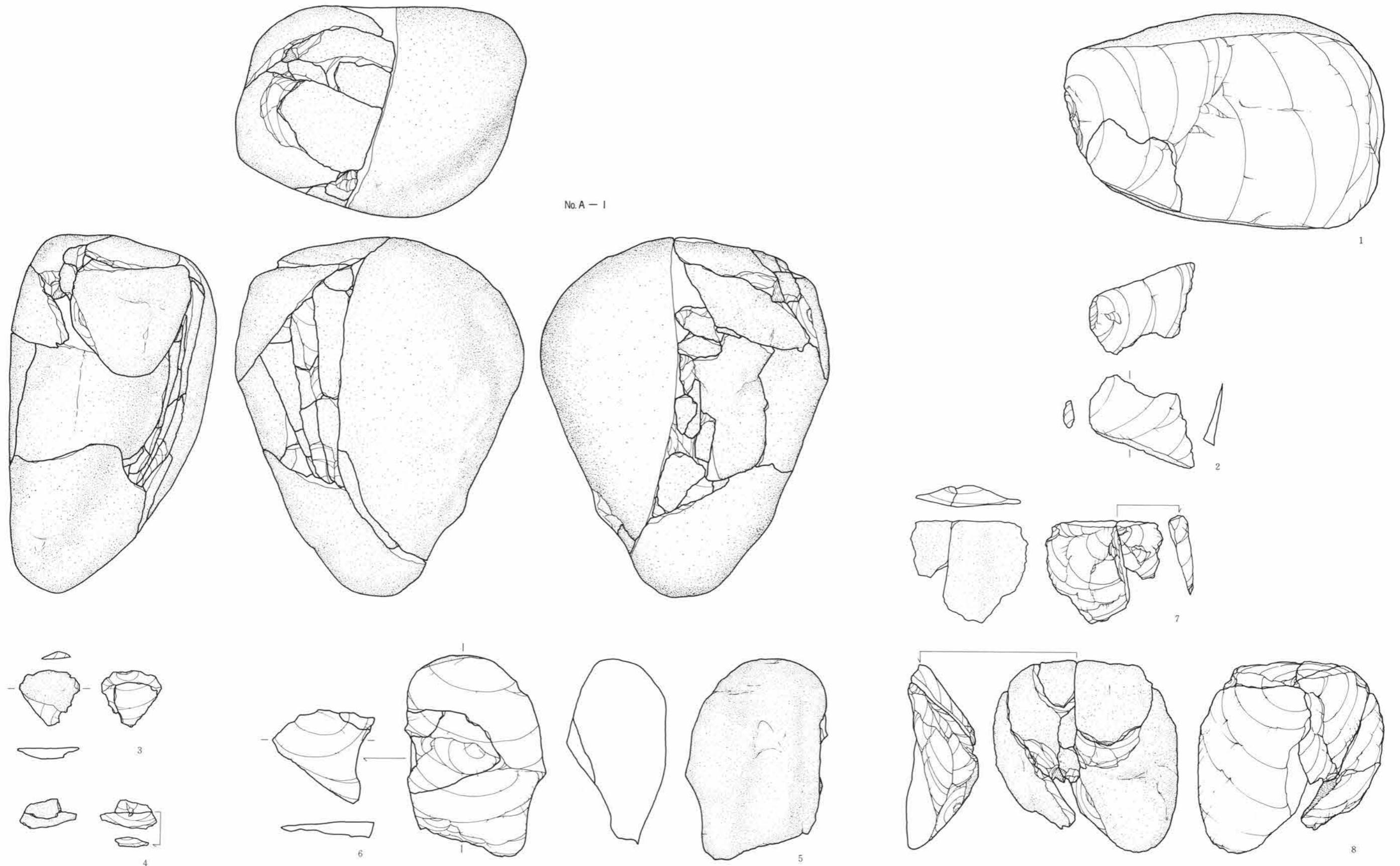
1~14は、盤状の石核素材より作出される横長の剥片である。平坦な剥離面を打面とし、剥離面および作業面を交互に変え、剥片剥離がおこなわれる。

15~25は、柱状の石核素材より作出される縦長剥片および石核(25)である。分割面を打面とし、平坦な剥離面を打面とする下設打面(15)が作出され、下設打面より剥片が剥離された後に、平坦な剥離面を打面とする上設打面より、連続して剥片(17~24)が剥離される。剥片剥離は平坦な剥離面を打面とし、周辺を廻るように展開する。打面調整および石核調整は認められない。接合資料のなかには、良好な形状の剥片が存在するほか、遺存する剥離面構成より、良好な形状の剥片の存在が予想される。

接合資料・A-3 (母岩別資料・黒色安山岩-3、第48・49図)

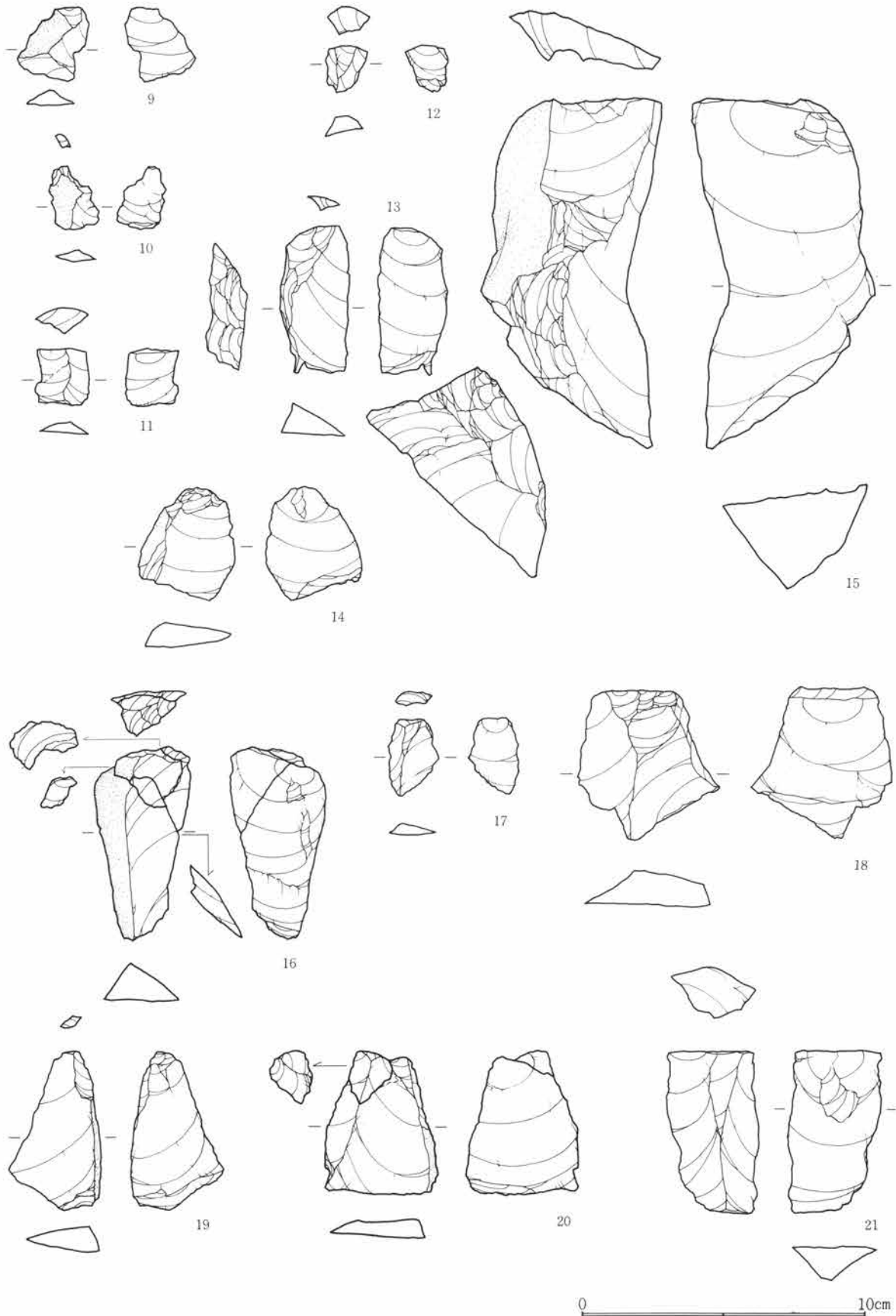


原石の形状は明確ではないが、遺存状況より楕円形状を呈する河床礫を原石に用いると思われる。上下両



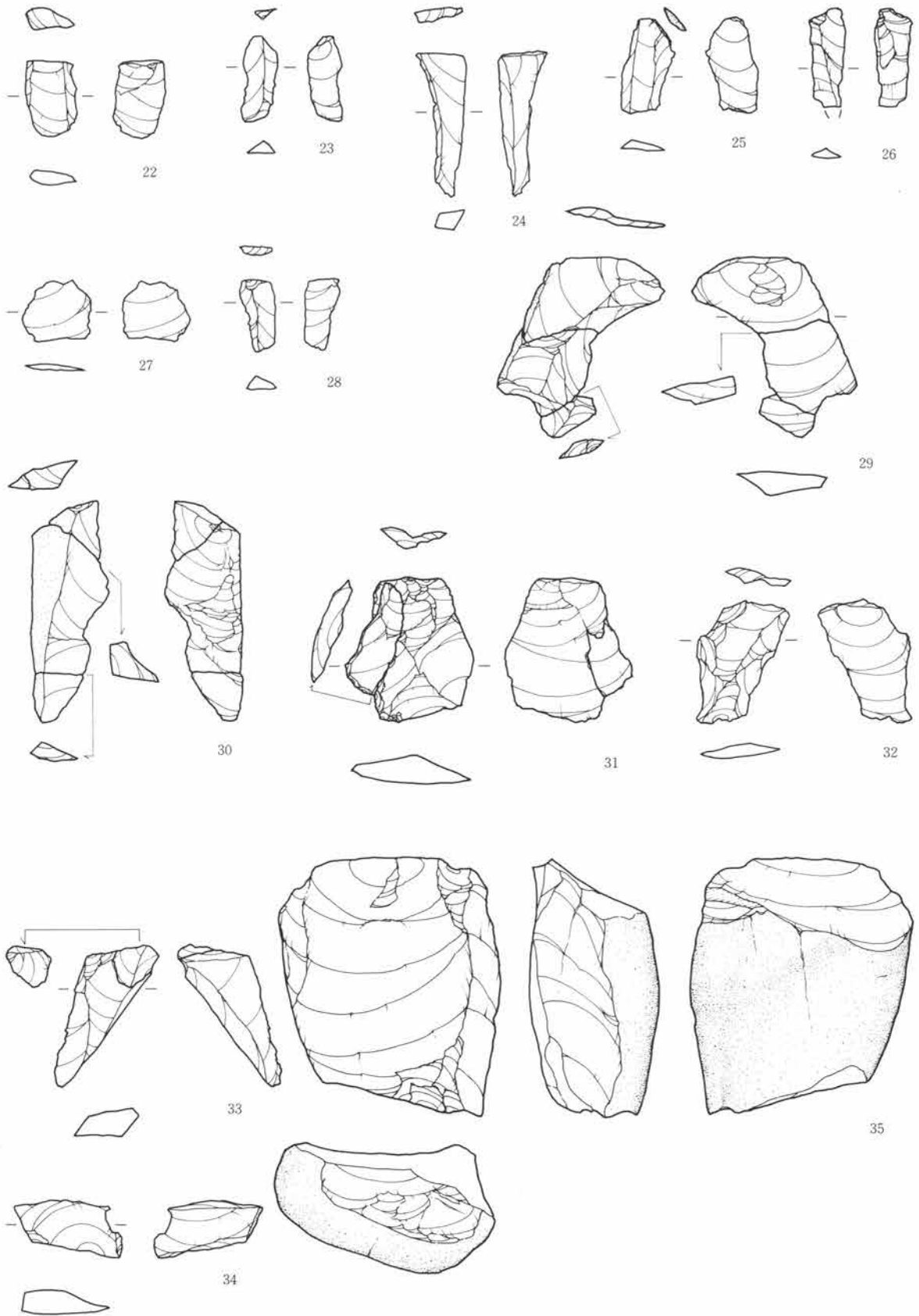
第 42 図 接合資料 A-1 (1)

0 10cm



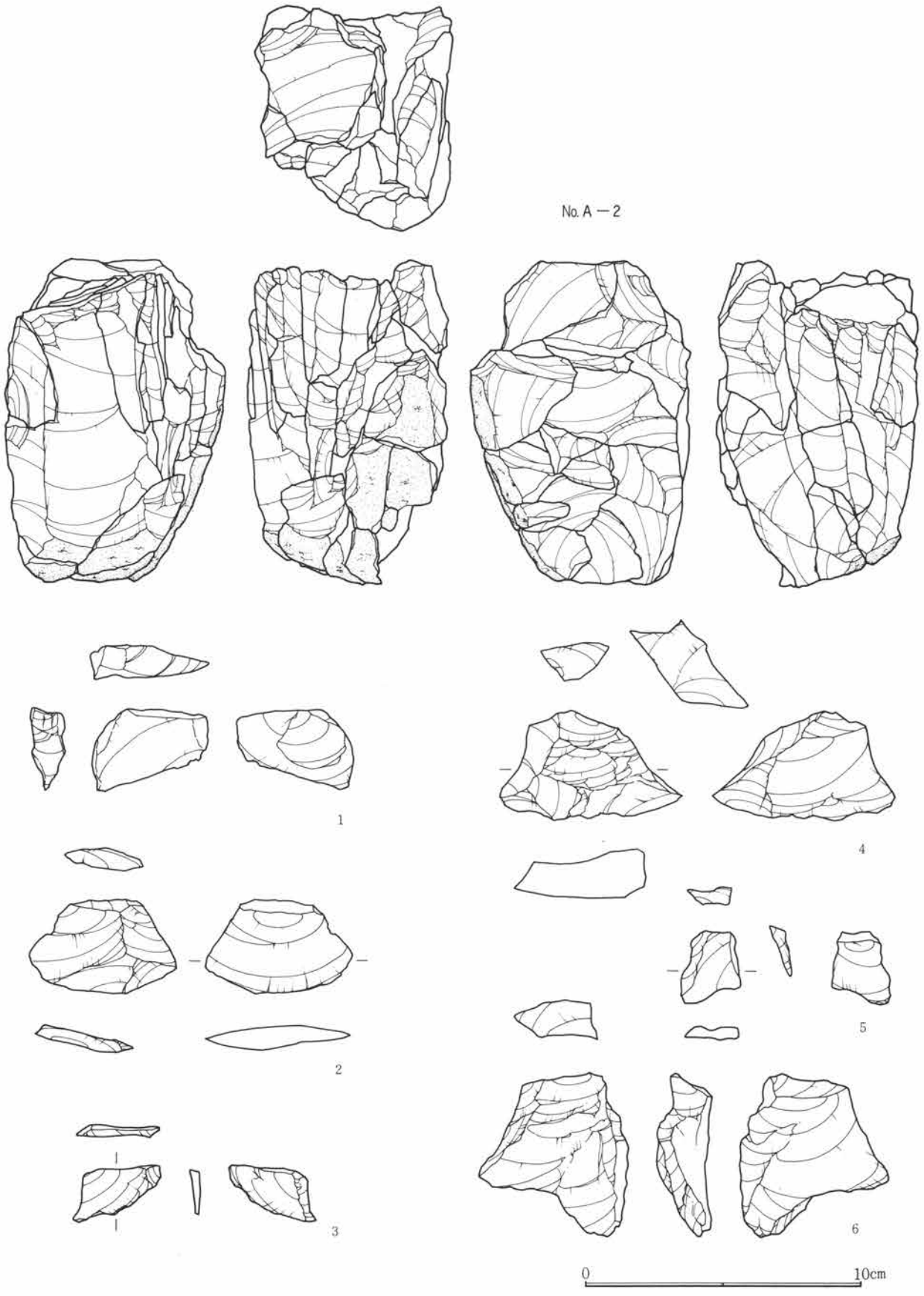
第43図 接合資料A-1(2)

I 旧石器時代の遺構と遺物



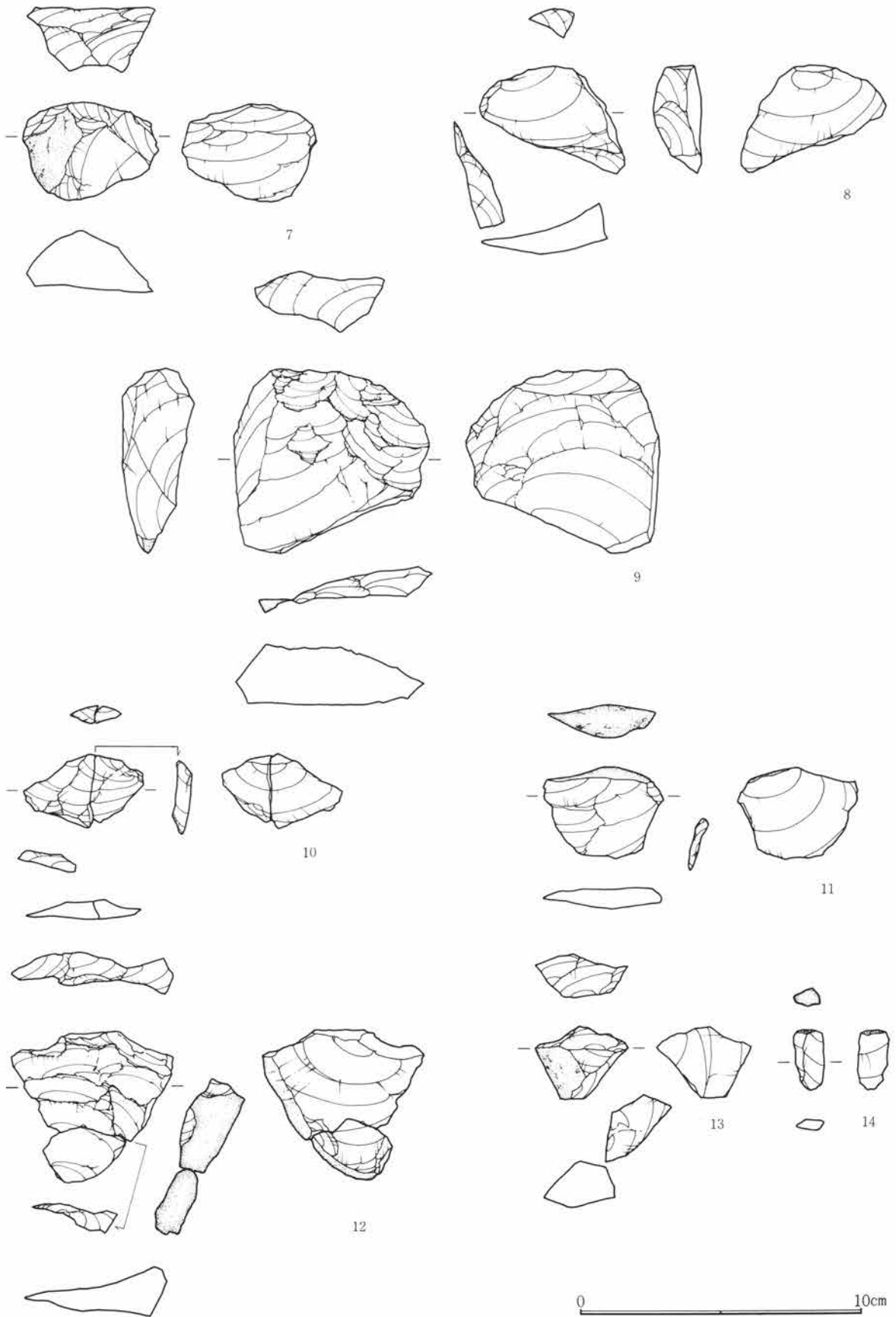
0 10cm

第44図 接合資料A-1(3)

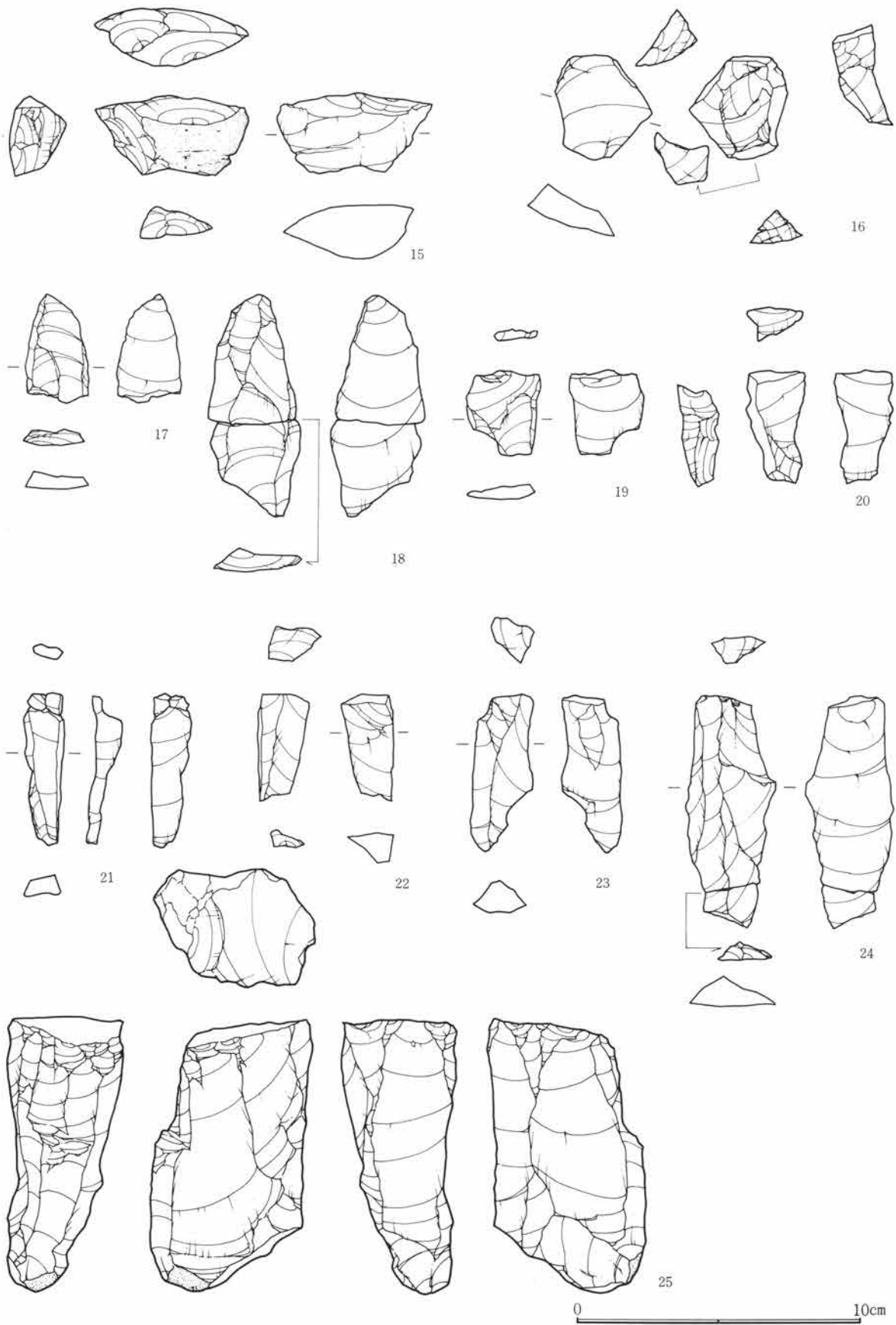


第45図 接合資料A-2(1)

I 旧石器時代の遺構と遺物

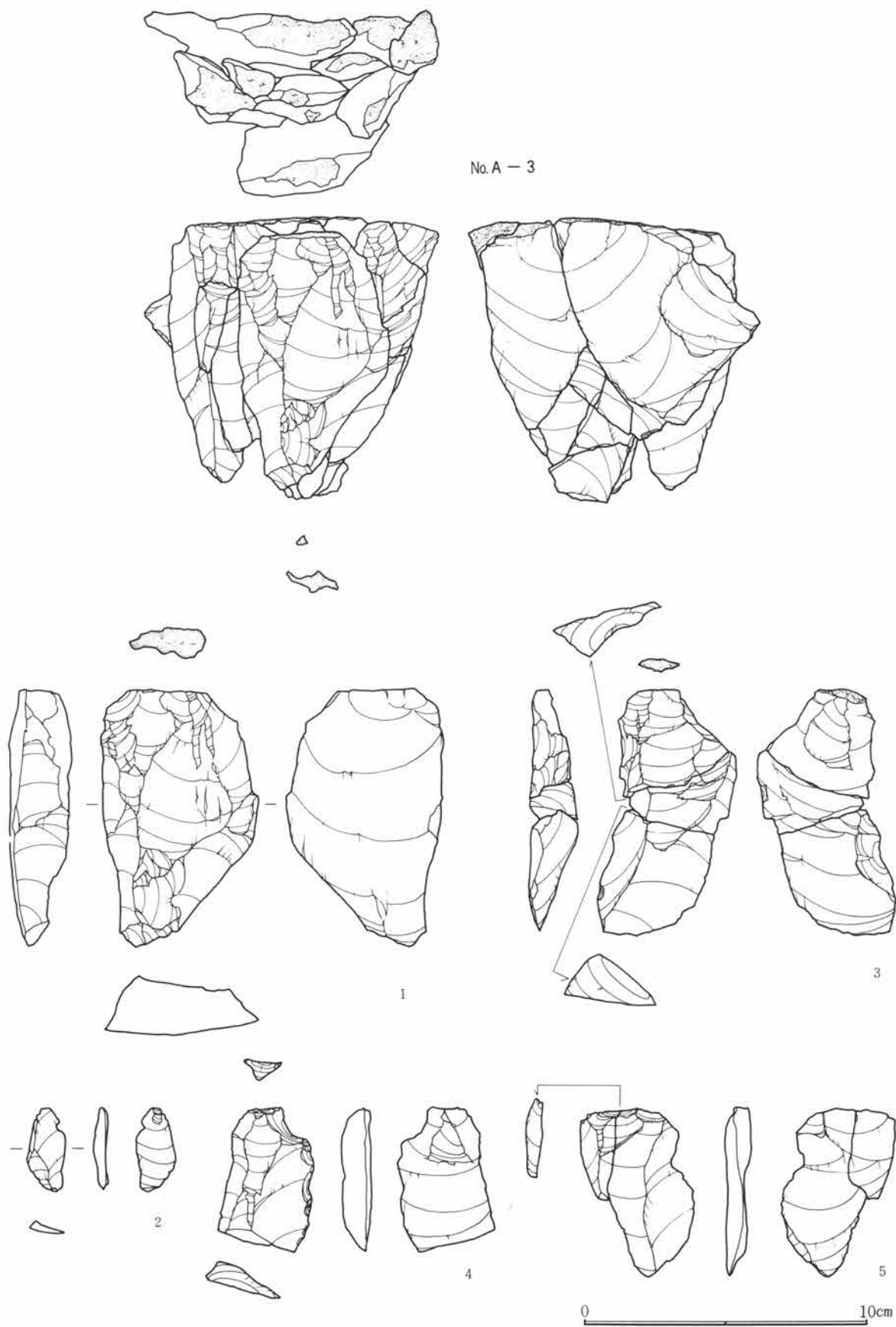


第46図 接合資料A-2(2)

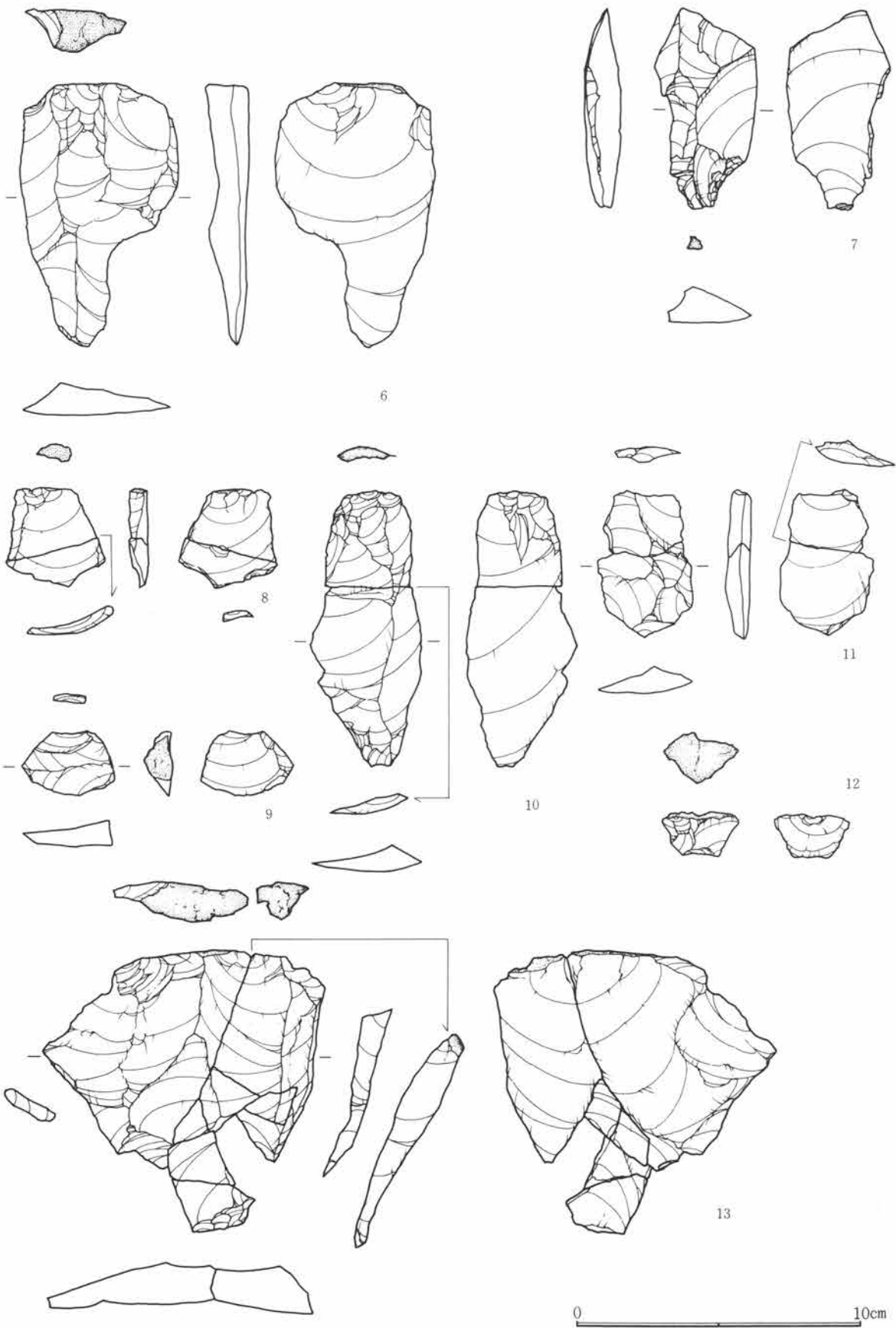


第 47 図 接合資料 A-2(3)

I 旧石器時代の遺構と遺物

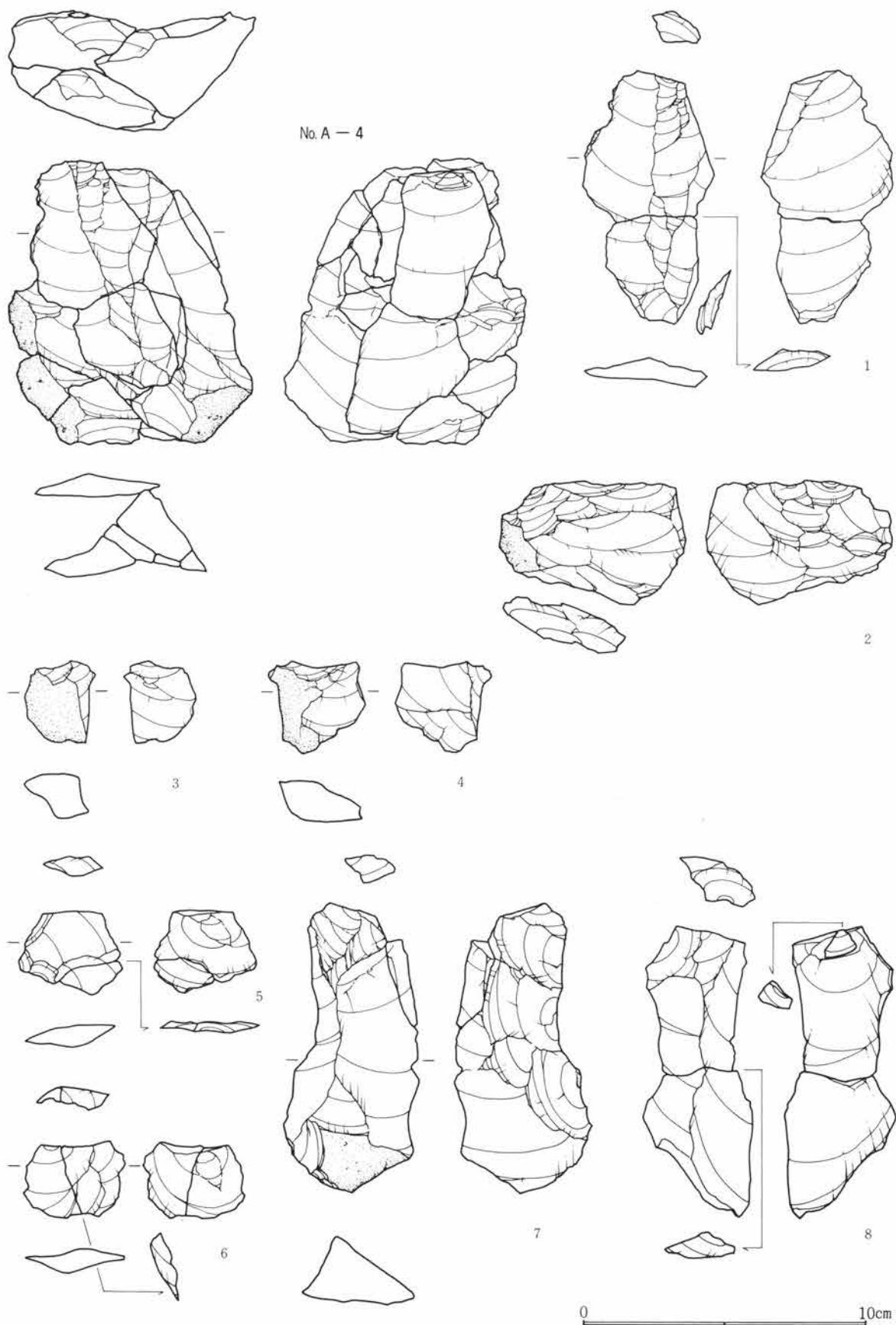


第48図 接合資料A-3(1)

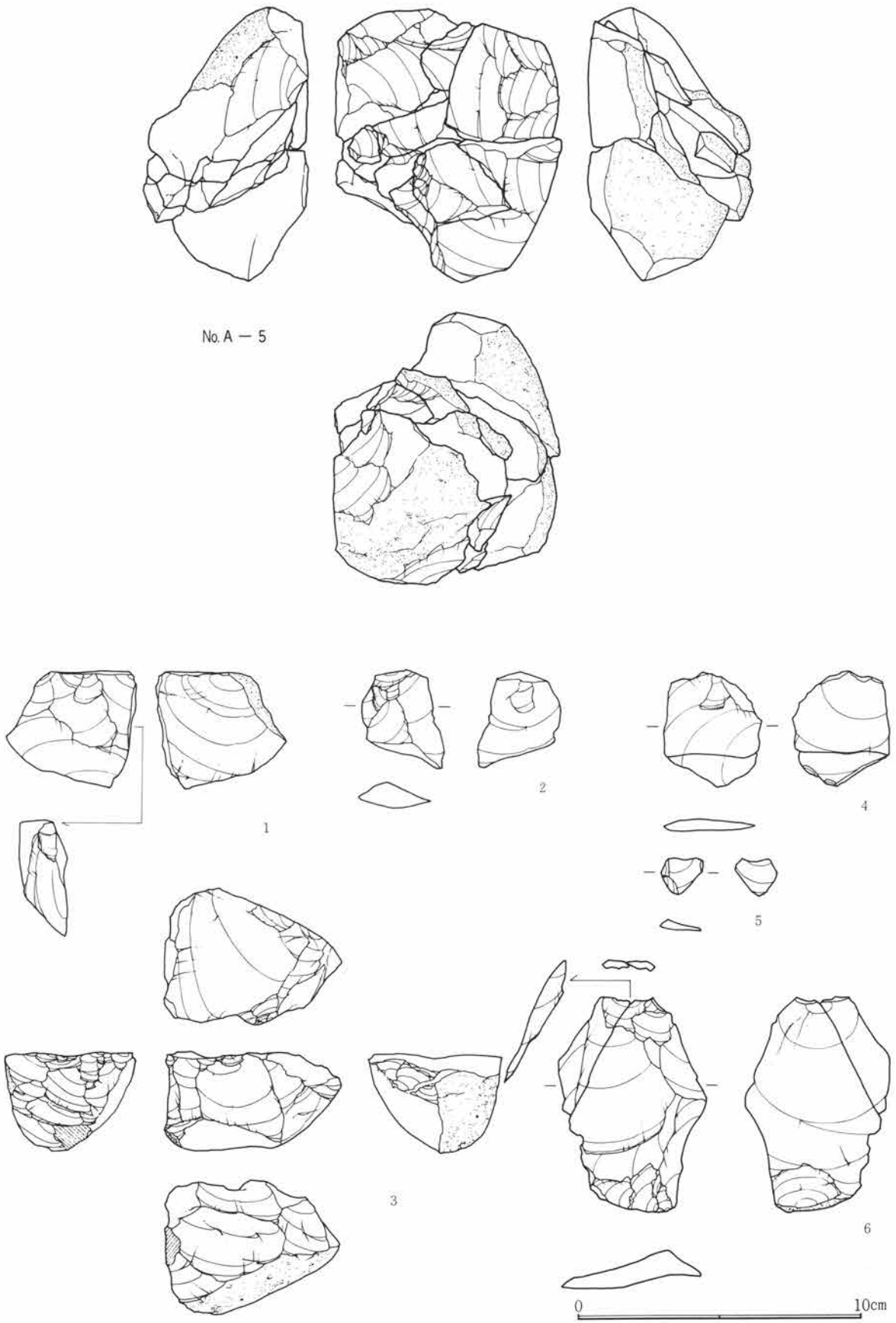


第49図 接合資料A-3(2)

I 旧石器時代の遺構と遺物

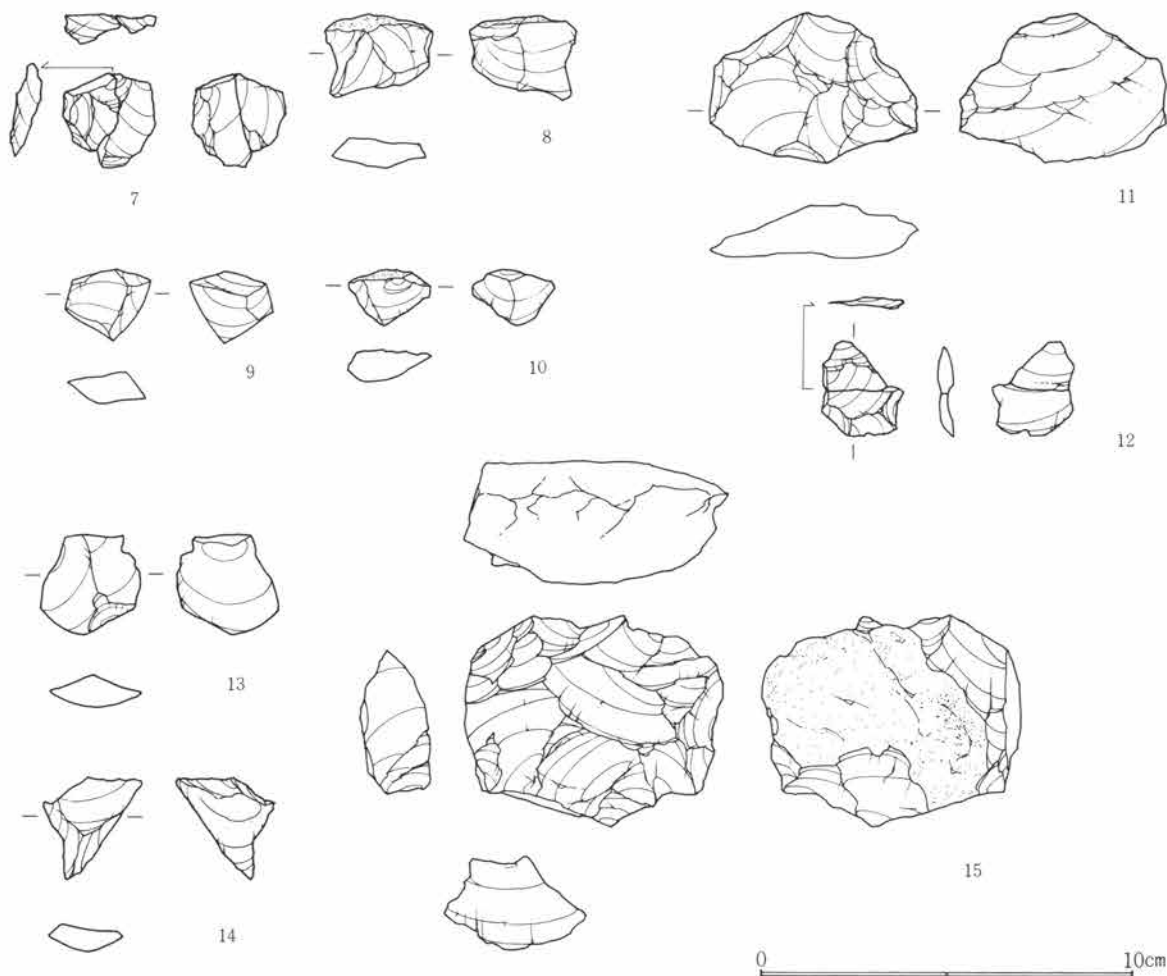


第50図 接合資料A-4



第51図 接合資料A-5(1)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第52図 接合資料A-5(2)

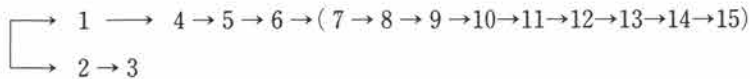
端に存在する礫面を打面とし、剥片剥離は同一の打面より連続しておこなわれる。上設の打面では剥片(5～10・12・13)が連続して剥離されるのに対し、下設の打面では2・4・11が剥離されるが、連続して剥離する状況は認められない。上設の打面および下設の打面とも、打点は背面を構成する稜上を選択され、剥片剥離は左右に大きく打点を振りながら漸移的に後退する。打面調整は認められないが、粗い頭部調整が施される。大形の剥片(3)は横位分割され、石核の素材に用い、横長の剥片を剥離する。接合資料にはナイフ形石器1点が存在する。

接合資料・A-4(母岩別資料・黒色安山岩-3、第50図)

1→2→3+4→(5→6→7)→8

本資料は8点(取りあげ個体数11点)よりなる接合資料である。遺存状況より、楕円形状を呈する河床礫を原石に用いると思われる。剥片剥離は平坦な剥離面を打面とし、打点を左右に大きく振りながら漸移的に後退する。左右・両側縁の平行する剥片が作出されるが、このうち、大形の剥片(2・7)は石核素材に用いられる。2・7の打面部および側縁部では、表面側から裏面側へ向かう剥片剥離がおこなわれ、横長の剥片を連続して剥離する。打面調整は認められないが、粗い頭部調整が施される。

接合資料・A-5(母岩別資料・黒色安山岩-3、第51・52図)



本資料は14点(取りあげ個体数16点)よりなる接合資料である。遺存状況より、楕円形状を呈する河床礫を原石に用いる。平坦な剥離面を打面とする上設打面および礫面を打面とする下設打面より、剥片剥離はおこなわれる。

1～3は、礫面を打面とし剥離されるが、すでに、この段階において二分されてしまう。3は石核素材に用いられ、平坦な剥離面を打面とし剥片(2)が剥離される。その後、上設の打面より4・5・6が剥離される。打面調整および石核調整は認められない。

7～14は、平坦な剥離面あるいは礫面を打面とし作出される横長の剥片である。

接合資料・A-19(母岩別資料・黒色安山岩-5、第53～55図)

原石 →(分割)→ 1→2→3→4→5→6→7→8→9→10→11→12→13→14→15→16

本資料は16点(取りあげ個体数20点)よりなる接合資料である。楕円形状を呈する河床礫を原石に用いる。小口部分より原石を分割・二分することにより、石核素材とする。剥片剥離は礫面を打面とし、打点を左右に振りながら後退する。打面調整および石核調整は認められない。直接の接合関係は確認されないが、原石の形状および剥片剥離工程は接合資料・A-20に類似する。

多種多様な形状の剥片が作出されるが、縦長の剥片は小形(6・7・9)、横長の剥片は大形(2・11・12)、であることが多い。

接合資料・A-20(母岩別資料・黒色安山岩-5、第62・63図)

原石 →(分割)→ ○→1→2 → 3→4→5→6→7→8→9→10→11

本資料は11点(取りあげ個体数16点)よりなる接合資料である。楕円形状を呈する河床礫を原石に用いる。小口部分より原石を分割・二分することにより、石核素材とする。剥片剥離は平坦な剥離面を作出(○→1→2)することにより開始され、目的とする剥片の剥離は打点を左右に振りながら後退するが、作業が進行するにしたがい石核正面右側より左側に移動する。打面調整および石核調整は認められない。

接合資料・A-16(母岩別資料・黒色安山岩-4、第56～61図)

原石 → ○ → 1→2→3 → 4 → 5 → 6→7→8→9 → 10→11→12 → (13～19)
→(20～33)→34→(35～41)→42 → 43 → 44→45→46→47 → 48 → 49→50→51→52
→ 53→54→55→56→57 → 58 → 59→60→61 → 62→63→64

本資料は64点(取りあげ個体数86点)よりなる接合資料である。楕円形状を呈する河床礫を原石に用いる。剥片剥離は礫面を打面とし、平坦な剥離面を作出することにより開始される。まず、平坦な剥離面を打面とし、1～3が剥離され、さらに、2の剥離面を打面に4が、4の剥離面を打面に5が、それぞれ剥離される。つぎに、正面右側の礫面を打面とし、6～9が、6～9の剥離面を打面とし、10～12が、連続して剥離される。この段階で剥離される剥片よりナイフ形石器1点(7)が作出される。さらに、10～12の剥離面を打面とし(13～19)・(20～33)・34・(35～41)・42が剥離され、このうち(13～19)・(20～33)・(35～41)の大形剥片は盤状の石核素材に用いられる。この段階以後、石核正面および石核上面を交互に剥離面とする剥片剥離作

I 旧石器時代の遺構と遺物

業が進行する。43は(13~42)の剥離面を打面とし剥離され、48は礫面を打面とし剥離される。44~47は43の剥離面を打面に、49~52は44~47の、53~57は49~52の剥離面を打面に剥離される。

(13~19) 13+(14→15→16)+(17→18→19)

13~19は、大形剥片を獲得する段階で13・14~16・17~19に三分される。その後、礫面を打面とする剥片剥離がおこなわれる。作出される剥片の形状は横長・不定形なものが多い。

(20~33) 20+(21→22→23→24→25→26→27→28→29→30→31→32→33)

20~33は、礫面あるいは分割面や剥離面を打面とし作出され、作業面を固定することなく剥片剥離がおこなわれる。作出される剥片の形状は横長・不定形のものが多い。

(35~41) 35→36→37→38→39→40→41

35~41は、礫面あるいは剥離面を打面とし作出され、作業面を固定することなく剥片剥離がおこなわれる。作出される剥片の形状は横長・不定形なものが多い。40・41は39を剥離する段階で二分される。

接合資料・A-66(母岩別資料・輝緑岩1、第64図)

原石→○→1 → 2 → 3

本資料は3点(取りあげ固体数4点)よりなる接合資料である。楕円形状ないし棒状を呈する河床礫を原石に用いる。剥片剥離は平坦な礫面を打面とし開始される。上面の平坦な礫面より2枚の剥片が連続して剥離した後に、90°の打面転移をおこない、側面の平坦な礫面より1枚の剥片(2)が剥離される。横長・不定形な剥片が作出される。明確な打面調整や頭部調整は認められない。

接合資料・A-65(母岩別資料・輝緑岩2、第65図)

原石→○→○→○→1 → 2

本資料は2点よりなる接合資料である。楕円形状ないし棒状を呈する河床礫を原石に用いる。剥片剥離は平坦な礫面(小口部分)を打面とし開始され、4枚の剥片が連続して剥離される。横長・不定形な剥片が作出される。明確な打面調整や頭部調整は認められない。

接合資料・A-50(母岩別資料・黒色頁岩2、第65図)

原石→○→○→1 → 2

本資料は2点よりなる接合資料である。楕円形状ないし棒状を呈する河床礫を原石に用いる。剥片剥離は平坦な礫面(小口部分)を打面とし開始され、3枚の剥片が連続して剥離される。横長・不定形な剥片が作出される。明確な打面調整や頭部調整は認められない。

接合資料・A-51(母岩別資料・黒色頁岩3、第66図)

1 → 2 → 3 → 4 → 5

本資料は5点よりなる接合資料である。剥片剥離は上下両端の打面よりおこなわれ、下設打面より1を剥離、上設打面より2・3を剥離した後に、90°の打面転移をおこない4・5を剥離する。比較的形状の整った剥片が作出される。打面調整および石核調整は認められない。

接合資料・A-52(母岩別資料・黒色頁岩3、第66図)

1 → 2 → 3

本資料は3点よりなる接合資料である。剥片剥離は上面および左側側面よりおこなわれる。上面の礫面より1を剥離した後に、90°の打面転移をおこない、左側側面の礫面より2を剥離し、再び、90°の打面転移をおこない、上面の礫面より3を剥離する。比較的形状の整う剥片が作出される。打面調整および石核調整は認められないが、このうち一点(3)には、顕著な頭部調整を施す。

接合資料・A-32(母岩別資料・黒色安山岩-6、第67・68図)

1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 → 9 → 10 → 11 → 12 → 13 → 14

本資料は14点よりなる接合資料である。遺存状況より河床礫を石核素材に用いられると思われる。剥片剥離は同一打面より連続しておこなわれ、平坦な剥離面より1～6の剥片を連続して剥離する。さらに、1～6の剥離面を打面とし、7～14の剥片を連続して剥離する。7～9は石核の正面右側に、10～14は正面左側に、打点を左右に大きく振りながら後退し、作出される。打面調整や石核調整は認められないが、このうち2点(2・4)には粗い頭部調整を施す。

接合資料・A-43(母岩別資料・黒色安山岩-10、第68図)

1 → 2 → 3 → 4

本資料は4点よりなる接合資料である。遺存状況より河床礫を石核素材に用いられると思われる。剥片剥離は礫面を打面とし、1～4の剥片を連続して剥離する。頻繁な打面転移をおこなう。接合資料にはナイフ形石器2点が存在する。

接合資料・A-57(黒色頁岩、第69図)

○ → 1 → ○ → ○ → ○ → 2

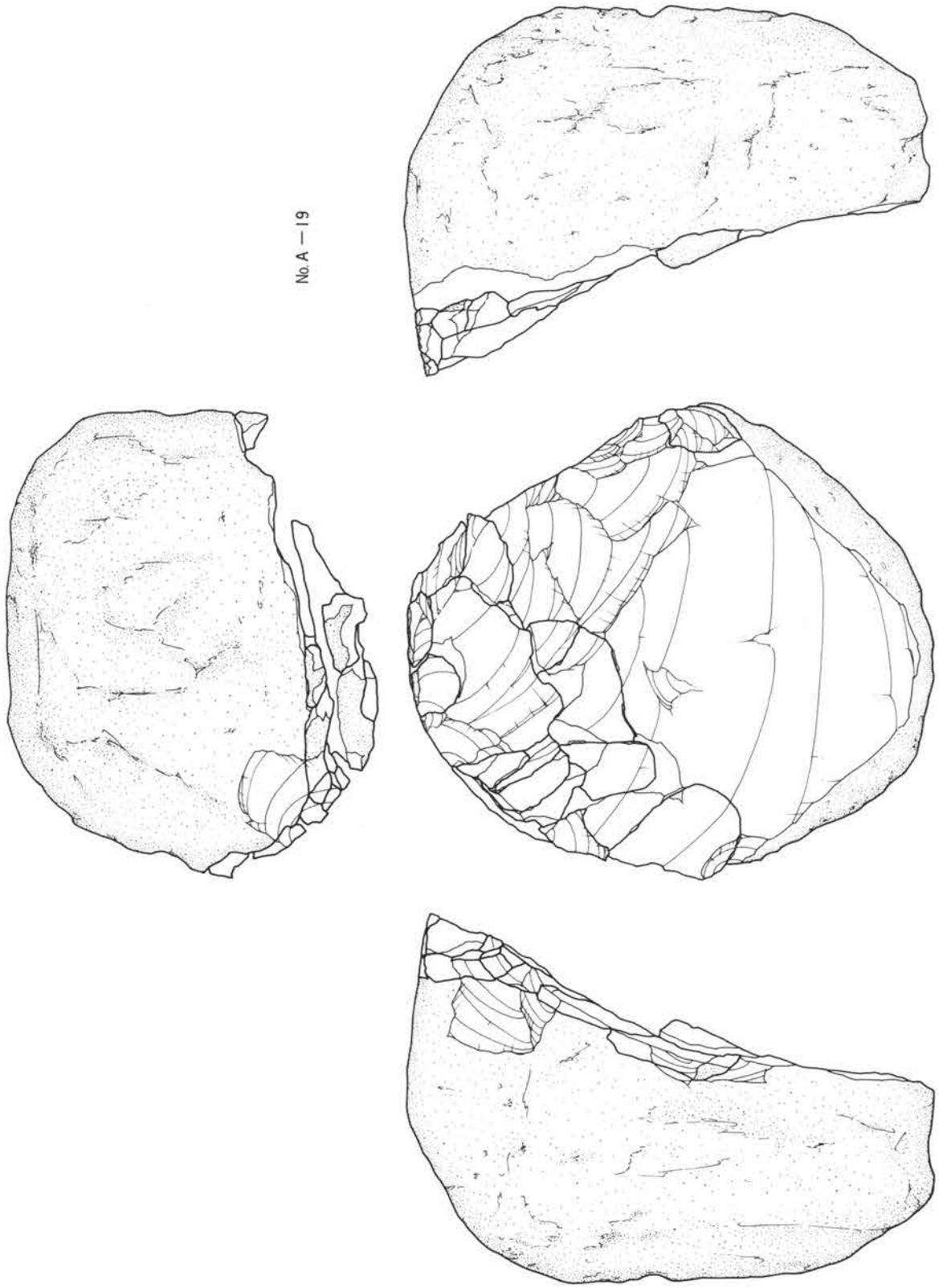
本資料は2点よりなる接合資料である。楕円形状を呈する河床礫より作出される大形の剥片を石核素材に用いられると思われる。剥片端部に形成される平坦な剥離面を打面とし、剥片剥離はおこなわれ、5枚前後の剥片が剥離される。石核素材を構成する剥離方向の状態より、両設打面の存在を示す上下・両方向からの剥離が認められる。剥片剥離より、両側縁の平行する形状の整う小形の剥片が作出される。打面調整・石核調整および頭部調整は認められない。出土資料には同一の母岩に分類される資料は存在しない。

接合資料・A-49(母岩別資料・黒色頁岩-1、第69図)

1 → 2 → 3

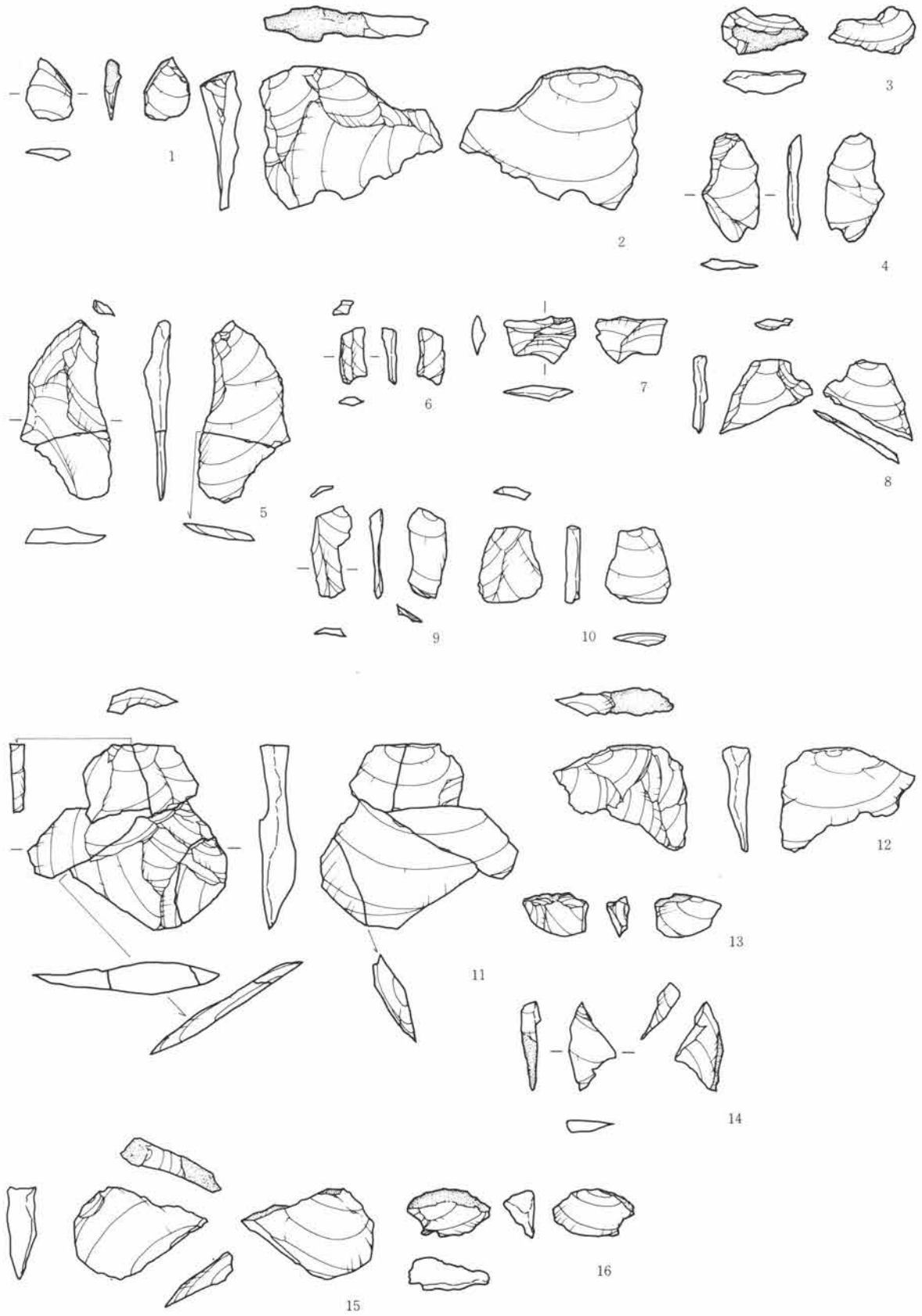
本資料は3点(取りあげ個体数6点)よりなる接合資料である。平坦な剥離面を打面とし、剥片剥離は連続しておこなわれる。打面調整および頭部調整は認められない。剥片剥離より、両側縁の平行する形状の整う大形の剥片が作出される。

1・3は器体の中央付近で、2は器体の頭部付近で、それぞれ折断される。出土資料には、同様な母岩に分類される資料は認められないこと、また、剥離段階に生じる剥片や碎片が認められないことから、石器素材としての搬入が想定される。

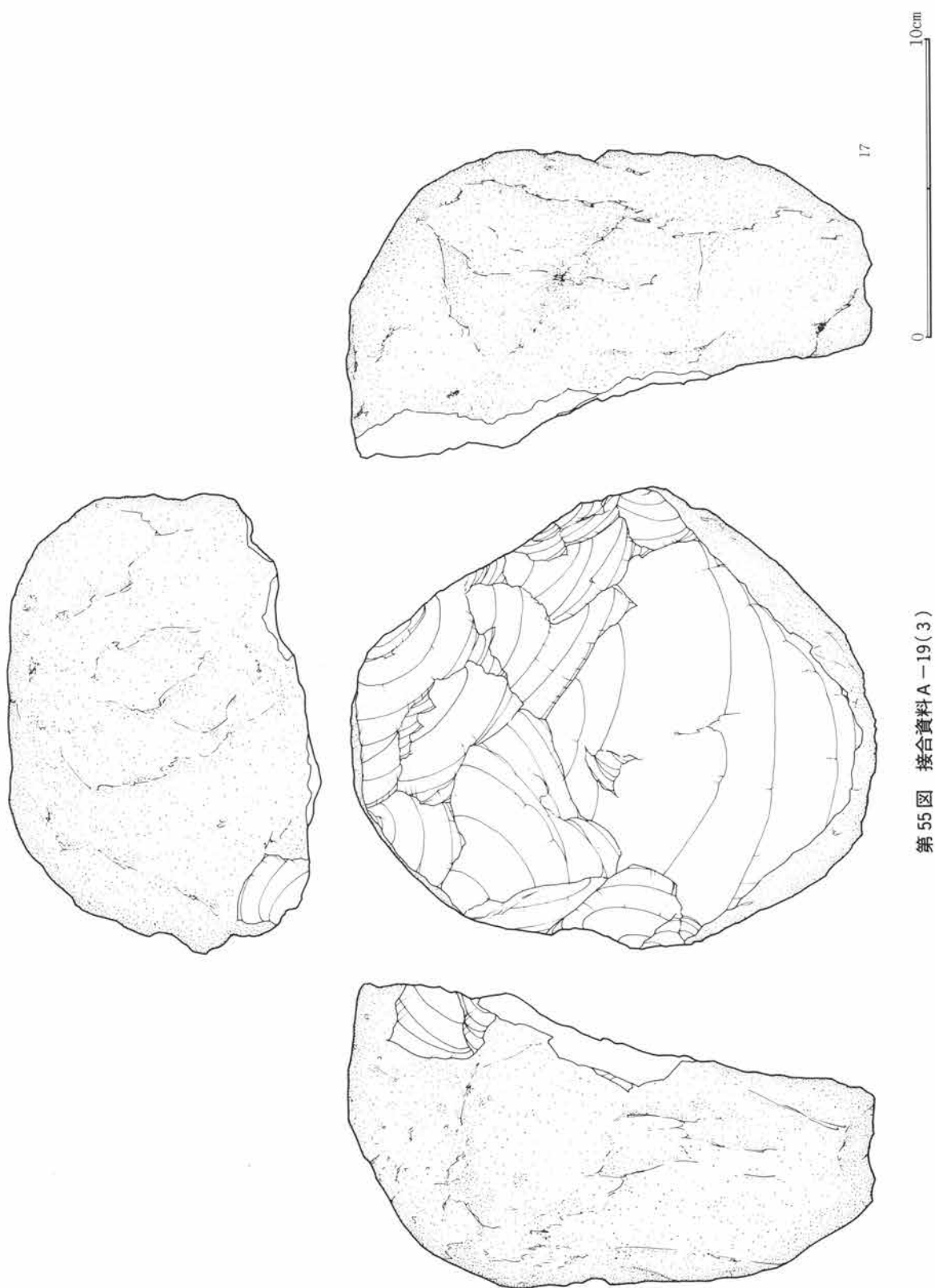


第53図 接合資料A-19(1)

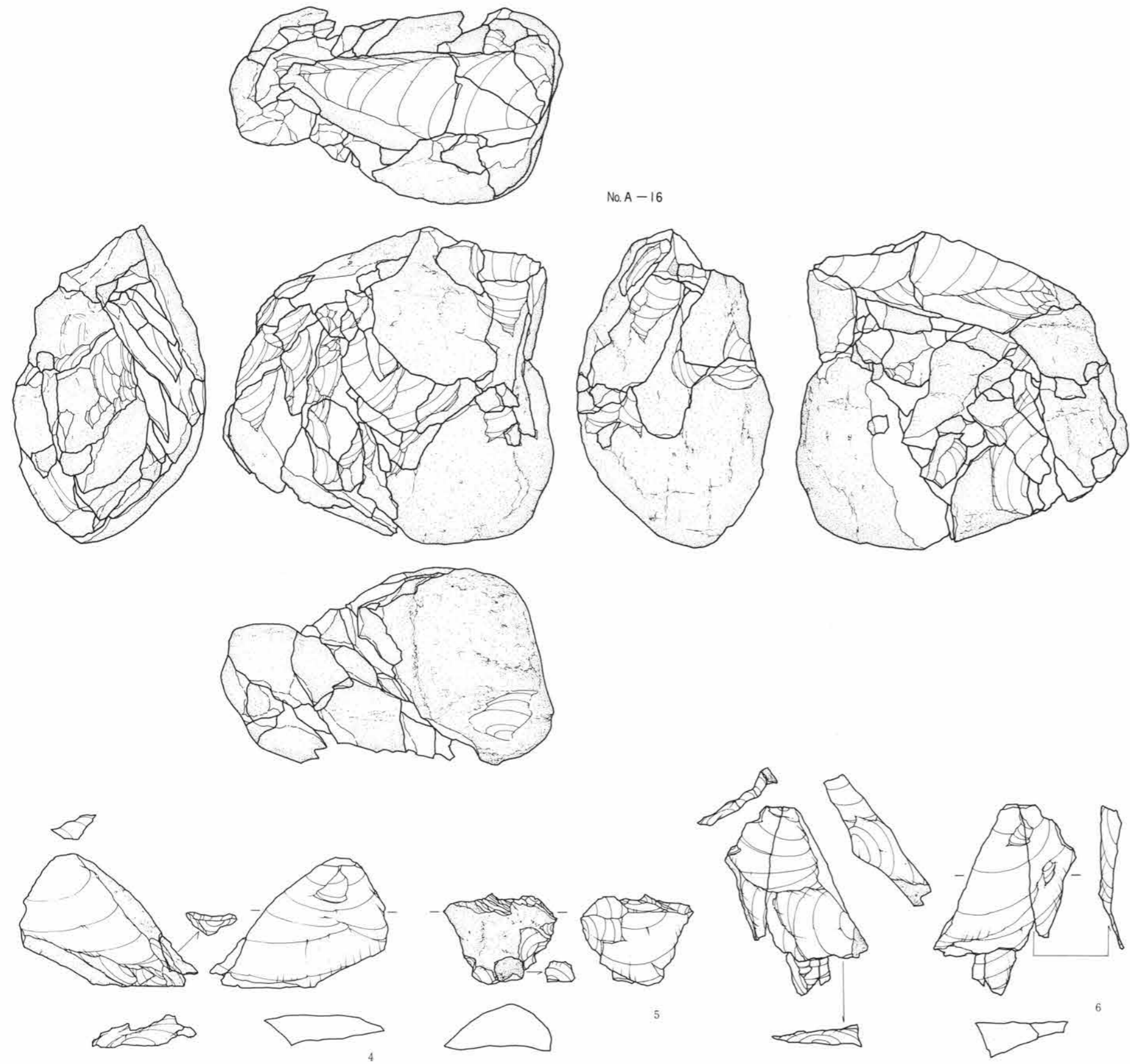
4. A地点の調査



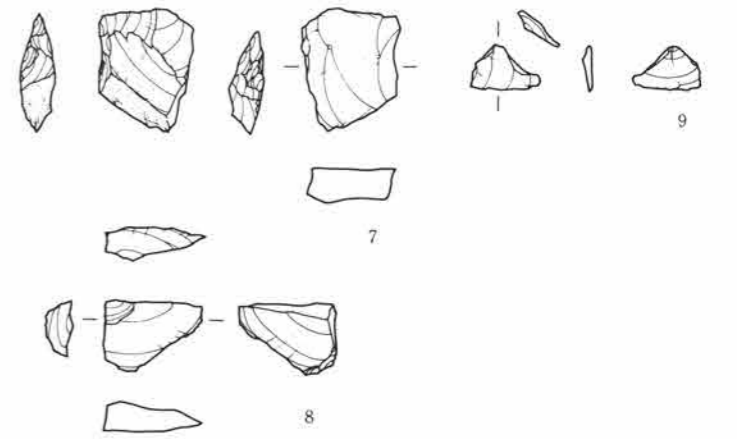
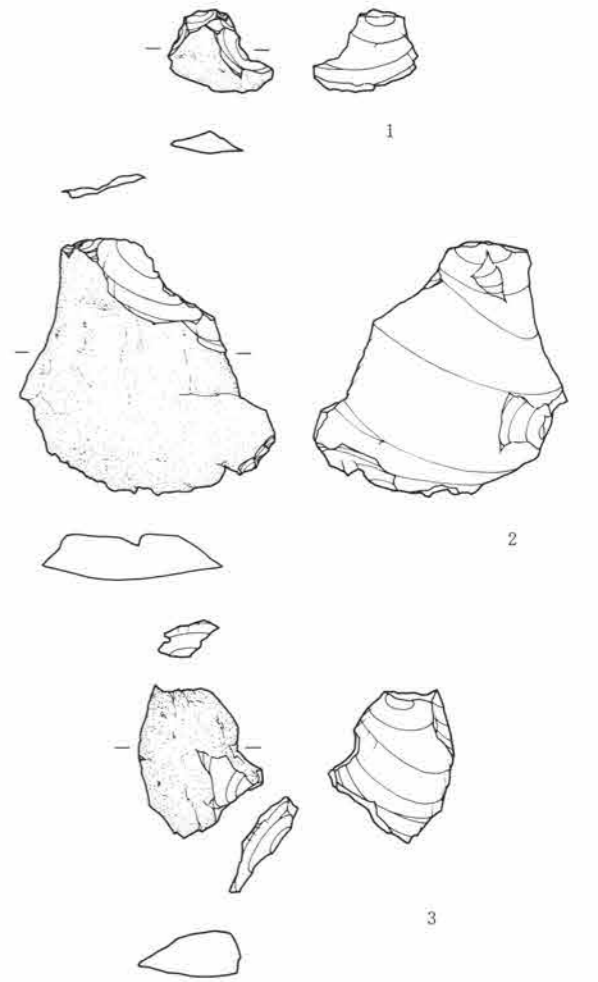
第54図 接合資料A-19(2)



第55図 接合資料A-19(3)



No. A-16



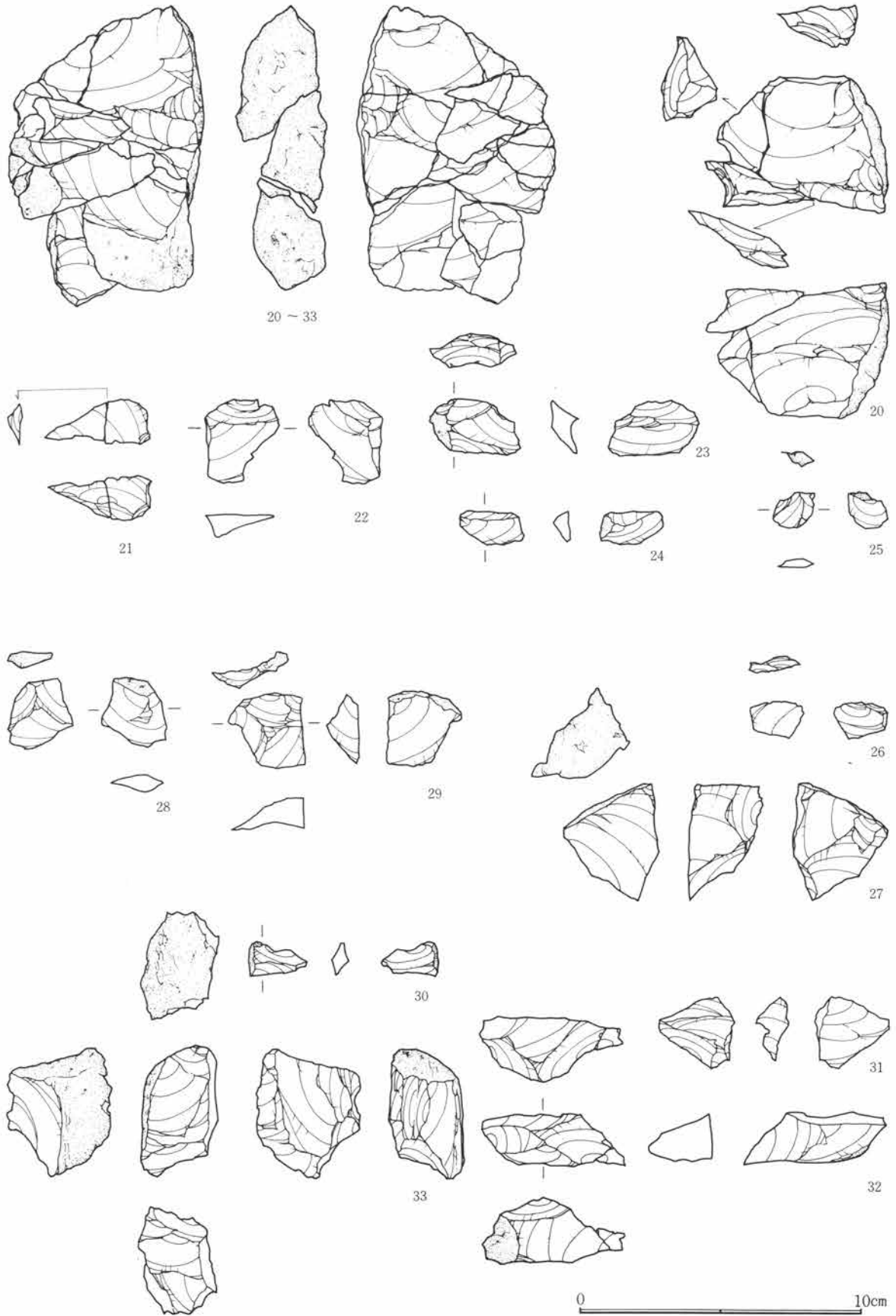
第 56 图 接合資料 A-16(1)

0 10cm



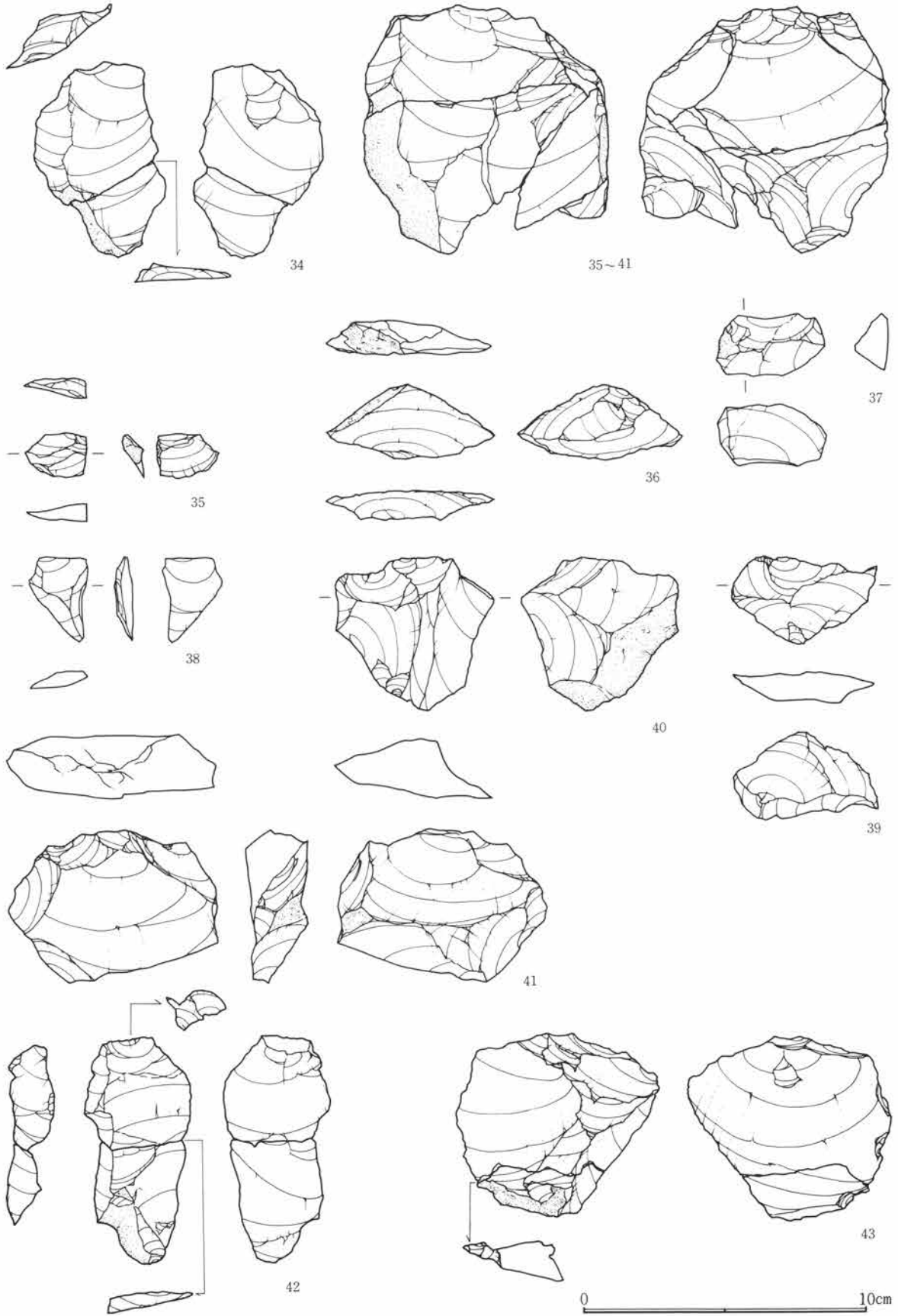
第57図 接合資料A-16(2)

I 旧石器時代の遺構と遺物



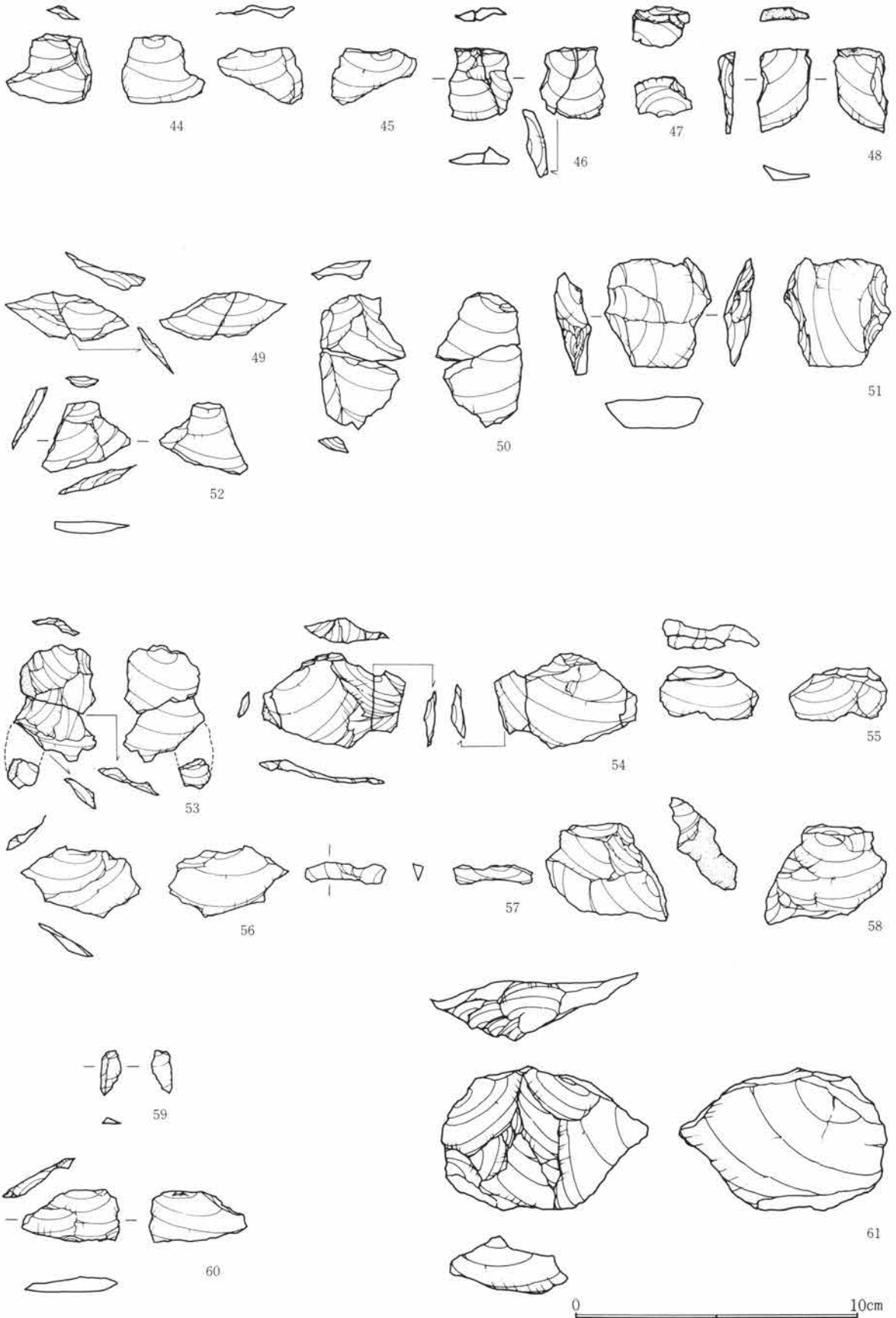
第58図 接合資料A-16(3)

4. A地点の調査



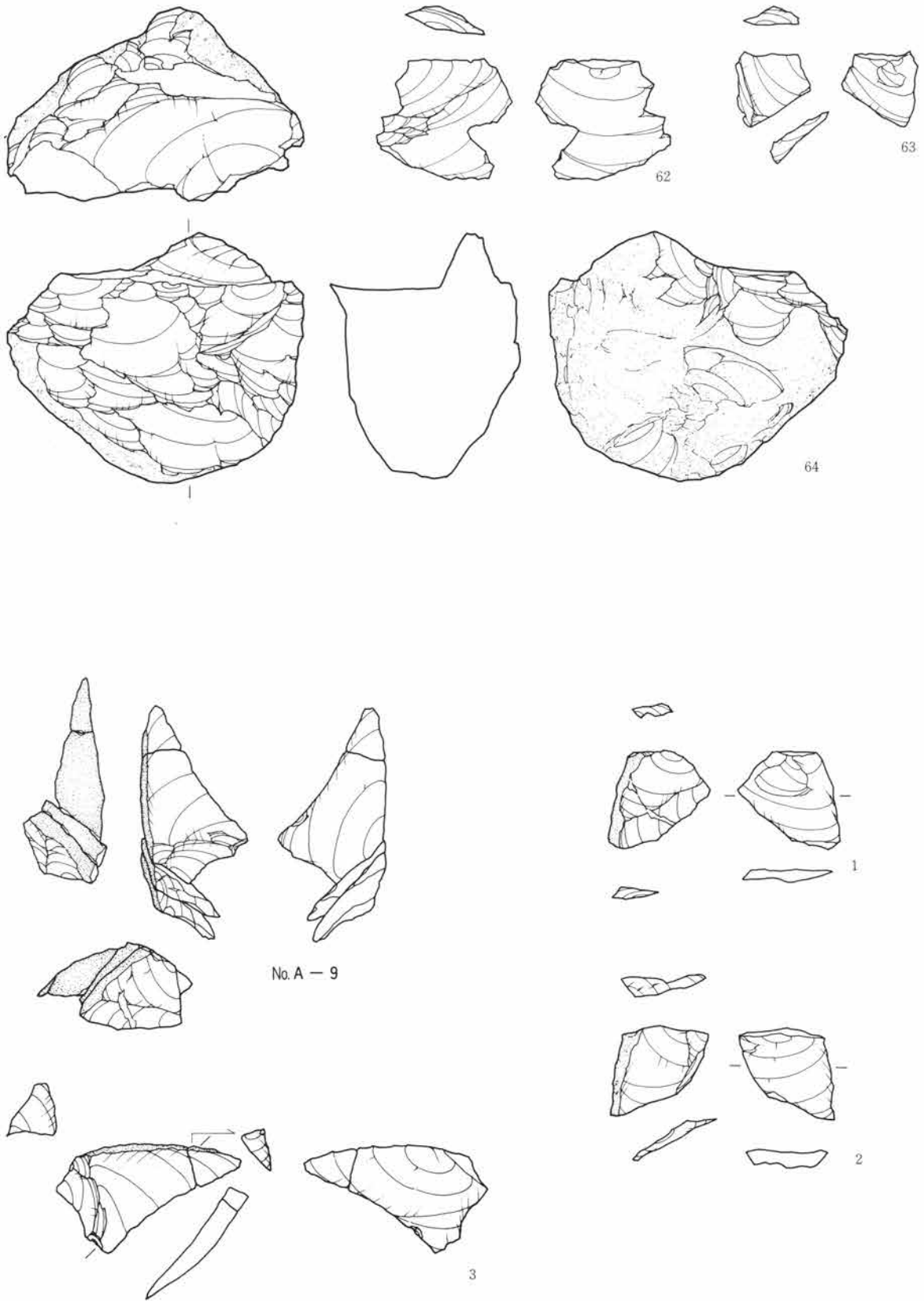
第59図 接合資料A-16(4)

I 旧石器時代の遺構と遺物

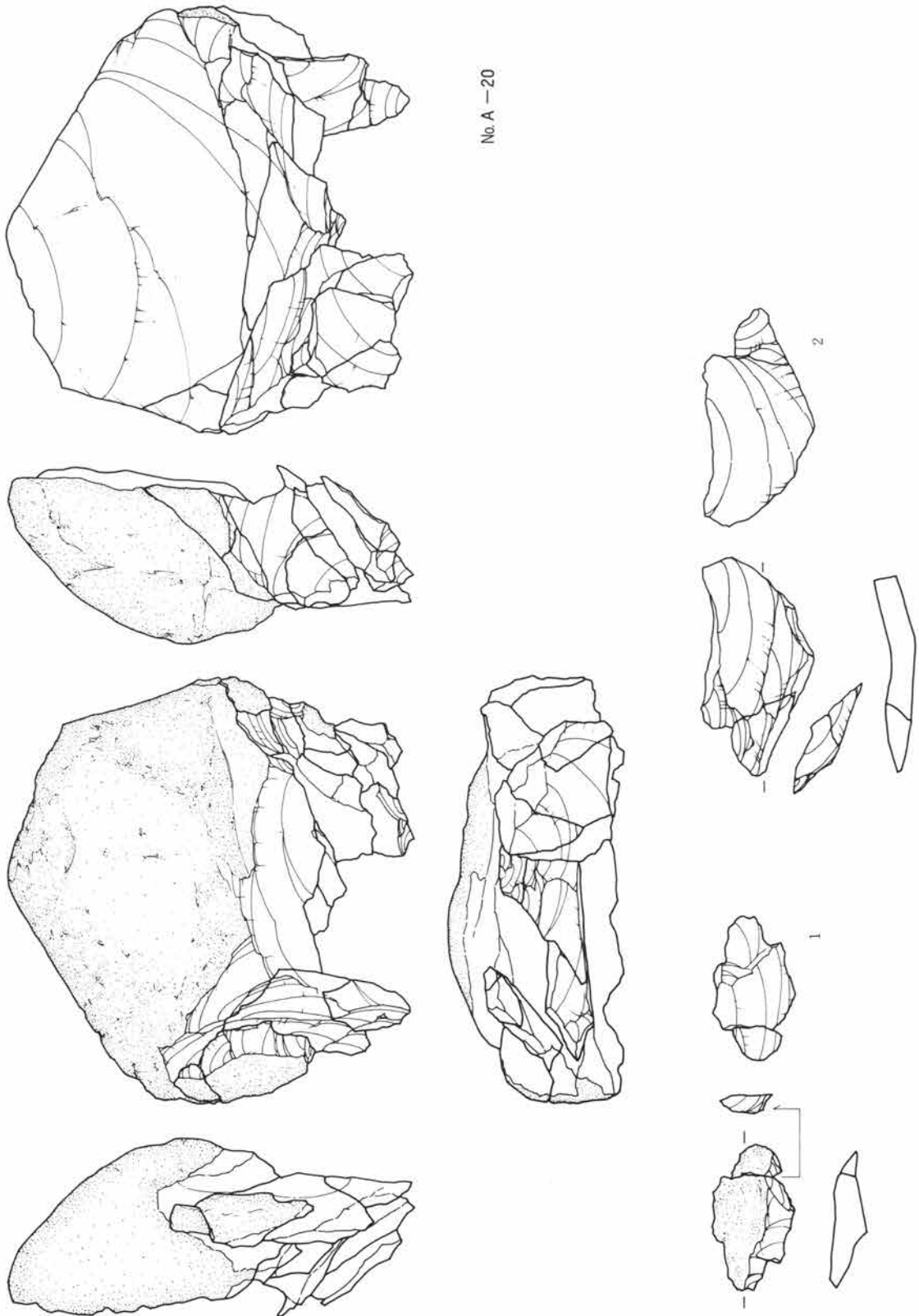


第60図 接合資料A-16(5)

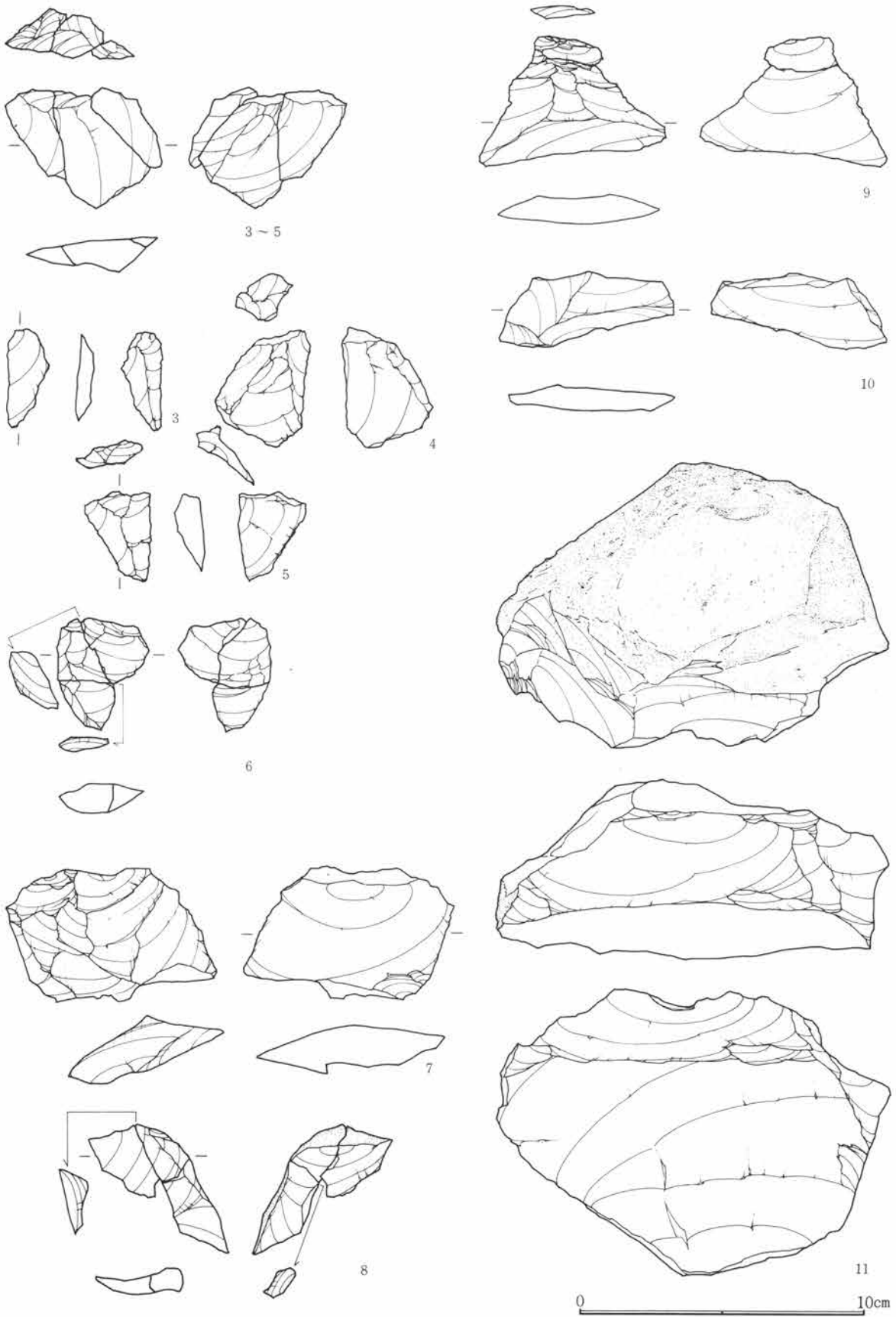
4. A地点の調査



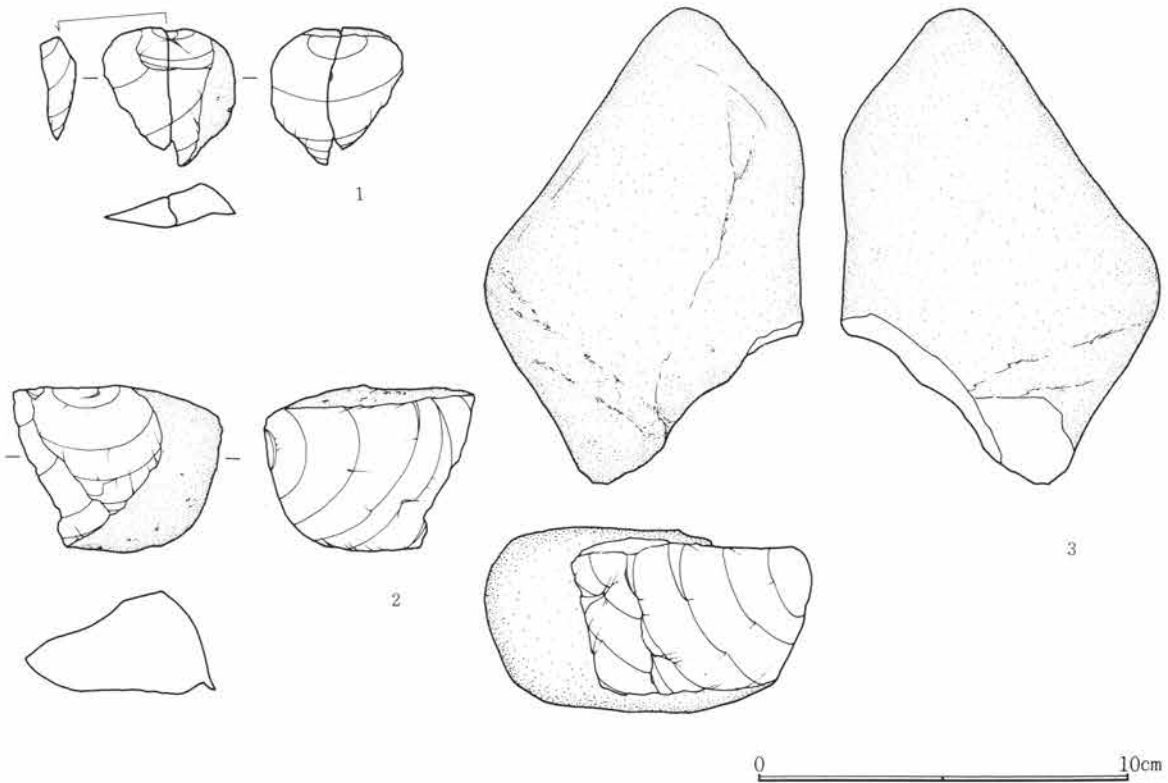
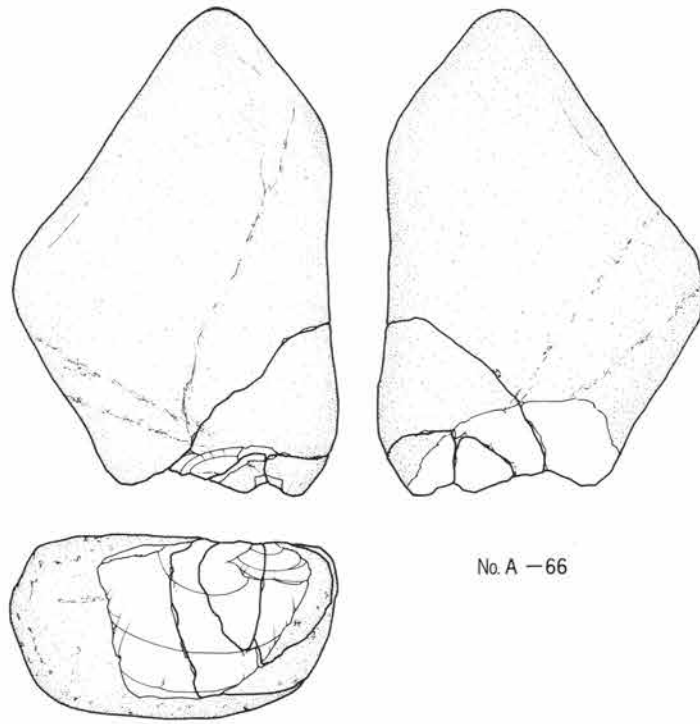
第 61 図 接合資料 A - 16(6)・A - 9



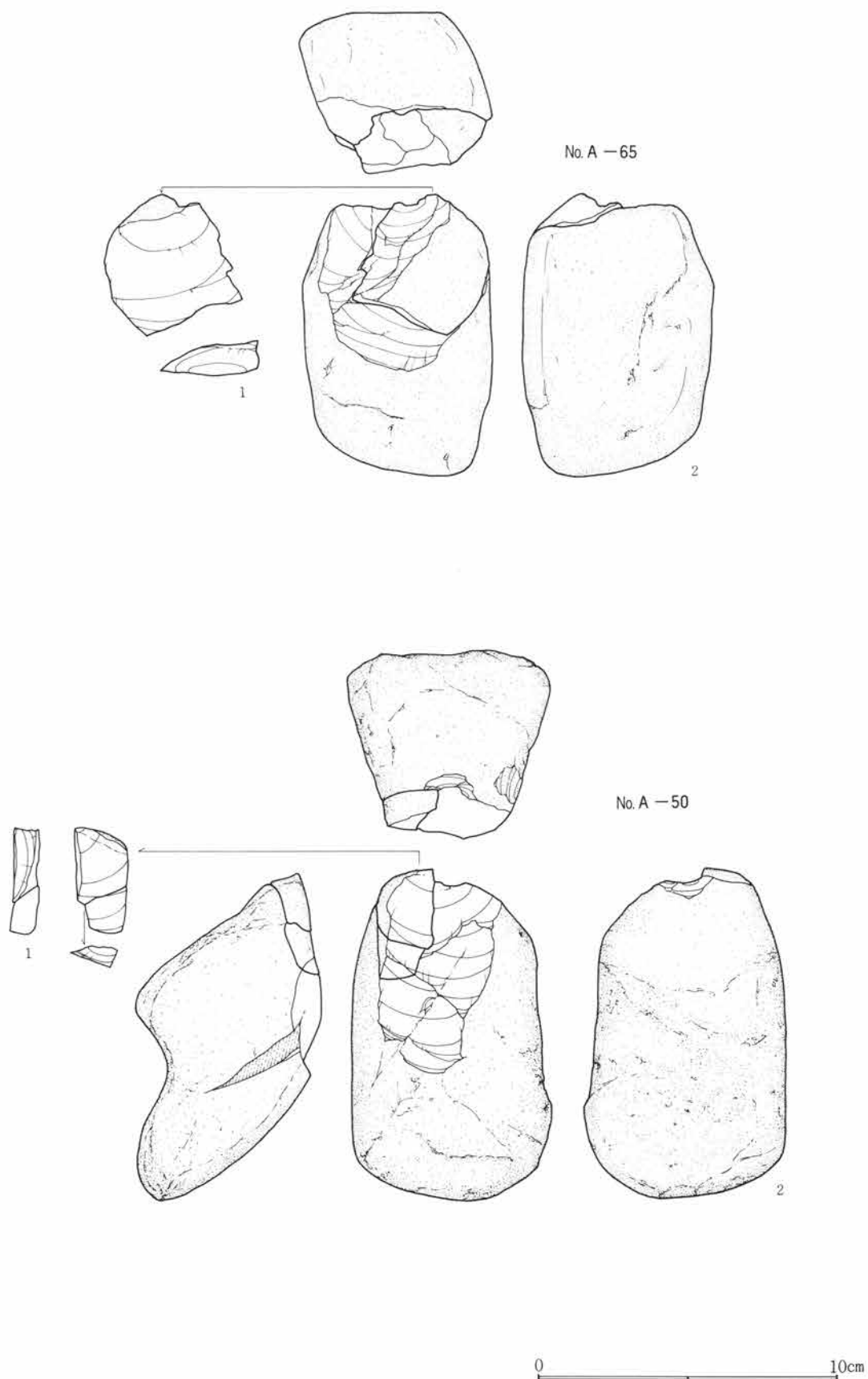
第62図 接合資料A-20(1)



第63図 接合資料A-20(2)

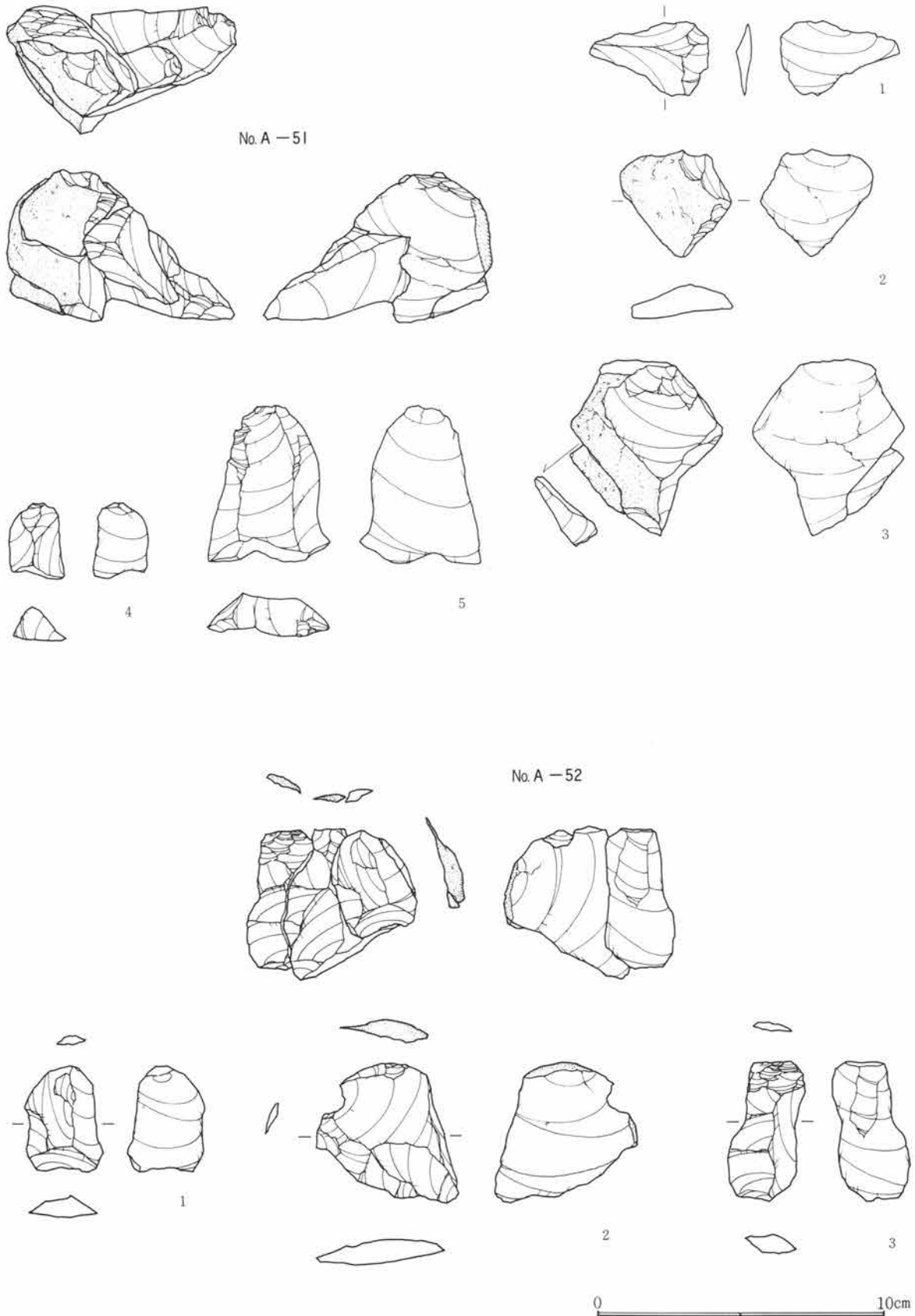


第 64 図 接合資料 A-66

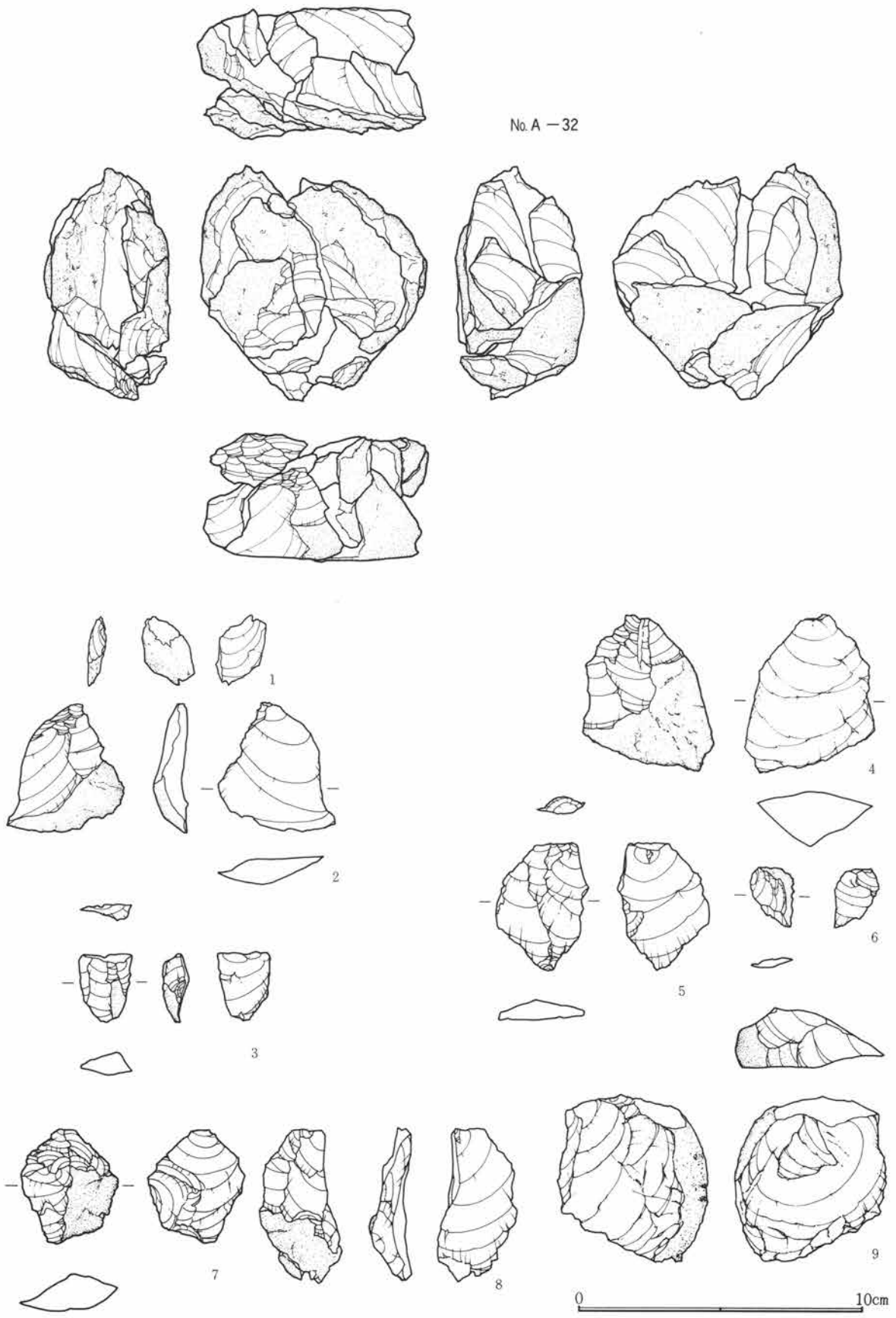


第 65 図 接合資料 A-65・A-50

I 旧石器時代の遺構と遺物

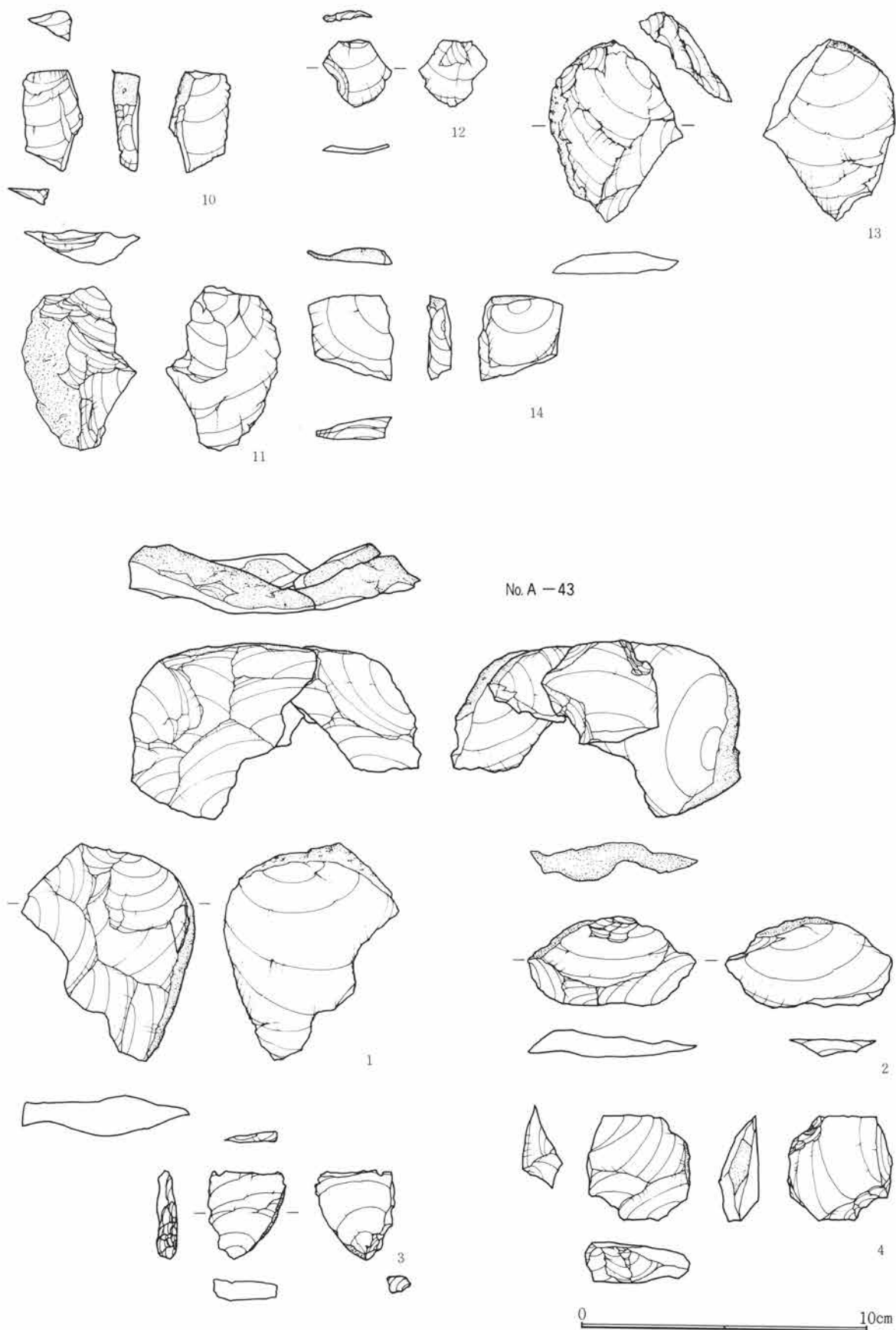


第66図 接合資料A-51・A-52

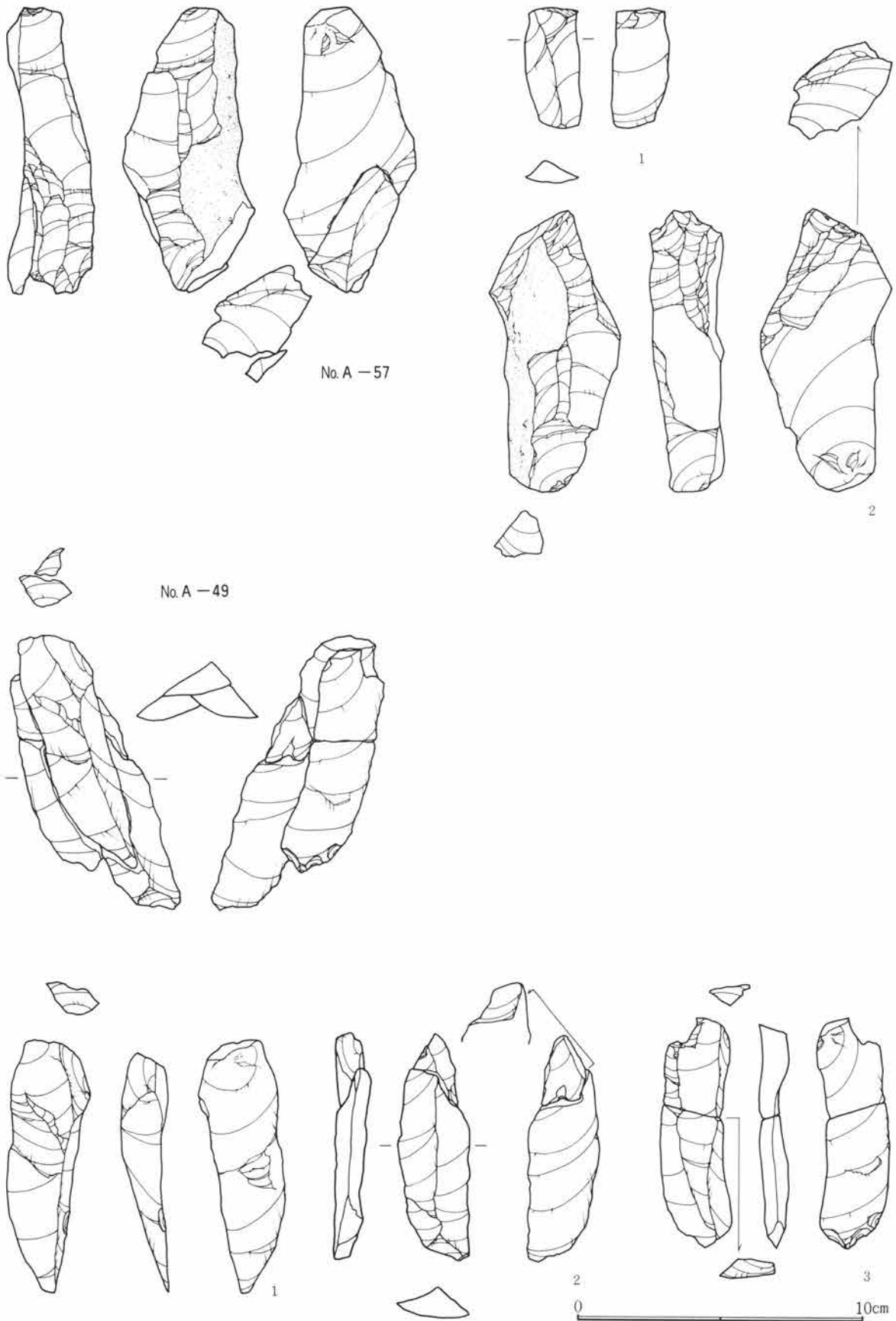


第67図 接合資料A-32(1)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第 68 図 接合資料 A-32(2)・A-43



第 69 図 接合資料 A-57・A-49

I 旧石器時代の遺構と遺物

接合資料・A-47(母岩別資料・頁岩-1、第70図)

1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8

本資料は8点(取りあげ個体数10点)よりなる接合資料である。楕円形状を呈する河床礫を石核素材に用いる。平坦な剥離面を打面とし、剥片剥離は同一の打面より連続しておこなわれる。打点は左右に振りながら後退する。両側縁の平行する形状の整う小形の剥片が作出される。

2～8は、1を剥離することにより獲得される平坦な剥離面を打面とし、作出される。

接合資料・A-58(黒色頁岩、第70図)

○→○→○→1→2

本資料は2点よりなる接合資料である。平坦な剥離面を打面とし、剥片剥離は同一の打面より連続しておこなわれる。両側縁の平行する形状の整う小形の剥片が作出される。

1には明確な頭部調整は認められないが、2には顕著な頭部調整が施される。打点は背面を構成する稜上を選択され、剥片剥離は打点を左右に大きく振りながら後退する。

接合資料・A-41(母岩別資料・黒色安山岩-9、第71図)

○→○→○→○→1→2→3

本資料は3点(取りあげ個体数4点)よりなる接合資料である。河床礫を石核素材に用い、平坦な礫面を打面とし、剥片剥離は同一の打面より連続しておこなわれる。横長・不定形な剥片が作出され、1・3の剥片端部には折断が認められる。打面調整および頭部調整は認められない。

接合資料・A-8(母岩別資料・黒色安山岩-8、第71図)

○→○→○→○→1→2

本資料は2点(取りあげ個体数4点)よりなる接合資料である。河床礫を石核素材に用い、平坦な礫面を打面とし、剥片剥離は同一の打面より連続しておこなわれる。やや幅広な縦長の剥片が作出される。打面調整および頭部調整は認められない。

接合資料・A-39(母岩別資料・黒色安山岩-9、第71図)

○→○→○→○→○→1+2→3

本資料は3点よりなる接合資料である。河床礫を石核素材に用い、平坦な礫面を打面とし、剥片剥離は同一の打面より連続しておこなわれる。両側縁の平行する形状の整う大形の剥片が作出される。打面調整および頭部調整は認められない。

接合資料・A-40(母岩別資料・黒色安山岩-9、第72図)

1→2→3 → ○ → 4 → 5

本資料は5点よりなる接合資料である。河床礫を石核素材に用い、平坦な礫面を打面とし、剥片剥離は同一の打面より連続しておこなわれるが、4・5を剥離する段階では90°打面を転移する。やや幅広な縦長の剥片が作出される。

1～3は、打点は背面を構成する稜上を選択され、打点を左右に大きく振りながら後退することにより獲

得される。

接合資料・A-23(母岩別資料・黒色安山岩-5、第72図)

○→○ → 1+2 → 3→4

本資料は4点(取りあげ個体数5点)よりなる接合資料である。盤状の大形剥片を石核素材に用いる。平坦な剥離面を打面とし同一の打面より剥片(○→○)を、礫面を打面とし1+2を、剥離した後に、90°打面を転移し、平坦な分割面を打面とする3が剥離される。

接合資料・A-35(母岩別資料・黒色安山岩-6、第73図)

○ → 1 → 2

本資料は2点よりなる接合資料である。資料規模に乏しいため明確ではないが、剥片剥離は90°打面を転移することにより獲得されることが推察される。1・2ともナイフ形石器の素材剥片に用いられる。

接合資料・A-12(母岩別資料・黒色安山岩-3、第73図)

1+2

本資料は2点よりなる接合資料である。折断および調整加工が施されるため明確ではないが、横長・台形状の剥片が作出される。剥片中央および剥片端部に折断手法を、打面部に調整加工を、施すことによりナイフ形石器が作出される。

接合資料・A-25(母岩別資料・黒色安山岩-5、第73図)

本資料は3点よりなる接合資料である。平坦な剥離面を打面とし作出される盤状の大形剥片を石核素材に用い、素材は三分割ないし四分割される。分割により、台形状の剥片が作出される。

接合資料・A-21(母岩別資料・黒色安山岩-5、第73図)

1+2+(3→4)+5

本資料は5点よりなる接合資料である。平坦な剥離面を打面とし作出される大形剥片を石核素材に用いる。素材の中央付近を分割することにより、石核素材を獲得する。平坦な剥離面を打面とし、表面側から裏面側へ向かう剥片剥離がおこなわれるほか、分割面を打面とする剥片剥離がおこなわれる。

接合資料・A-7(母岩別資料・黒色安山岩-3、第74図)

○→○→○→1→2→3

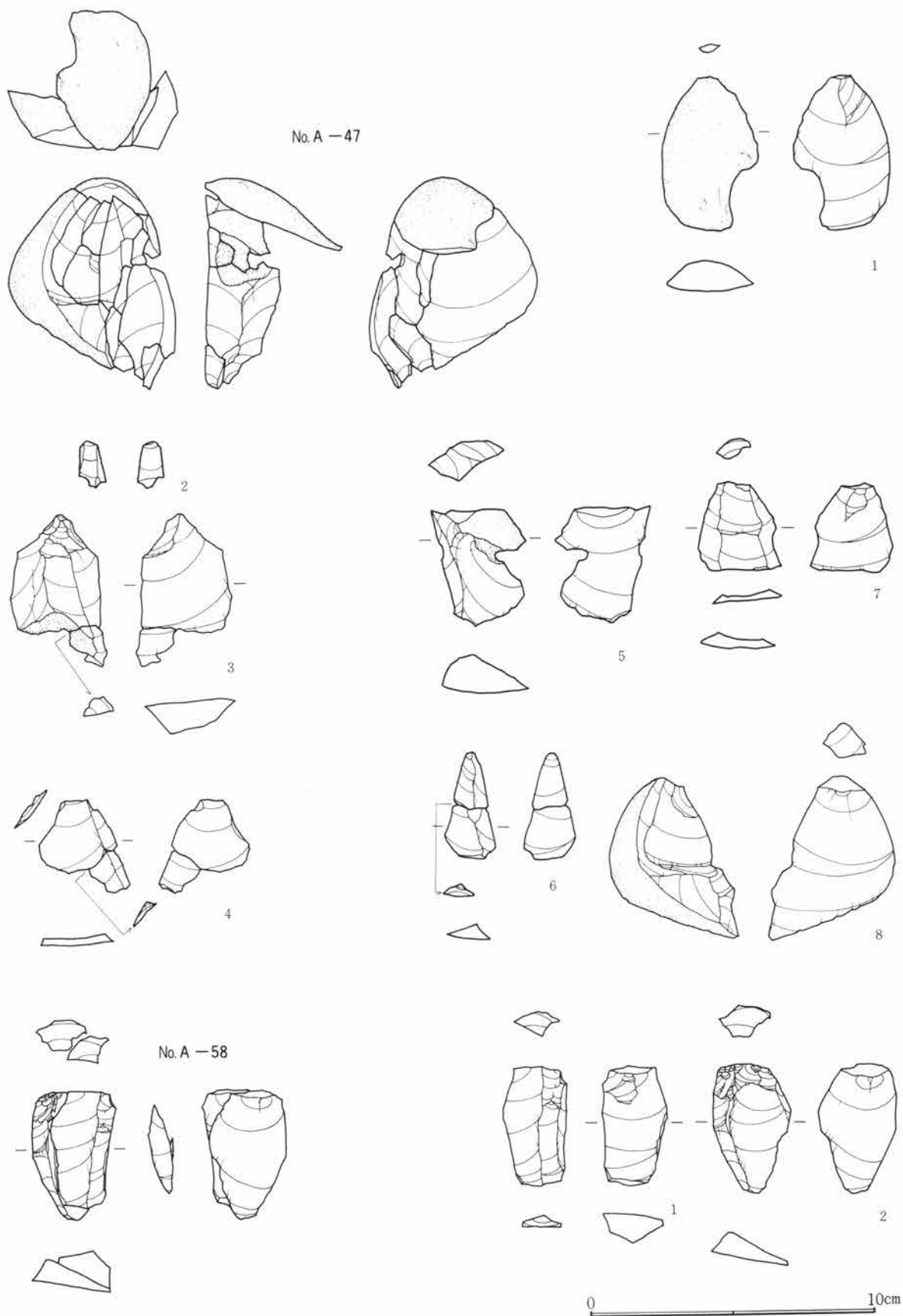
本資料は3点(取りあげ個体数4点)よりなる接合資料である。河床礫を石核素材に用い、平坦な礫面を打面とし、剥片剥離は同一の打面より連続しておこなわれる。横長・不定形な剥片が作出される。

接合資料・A-45(母岩別資料・黒色安山岩-10、第74図)

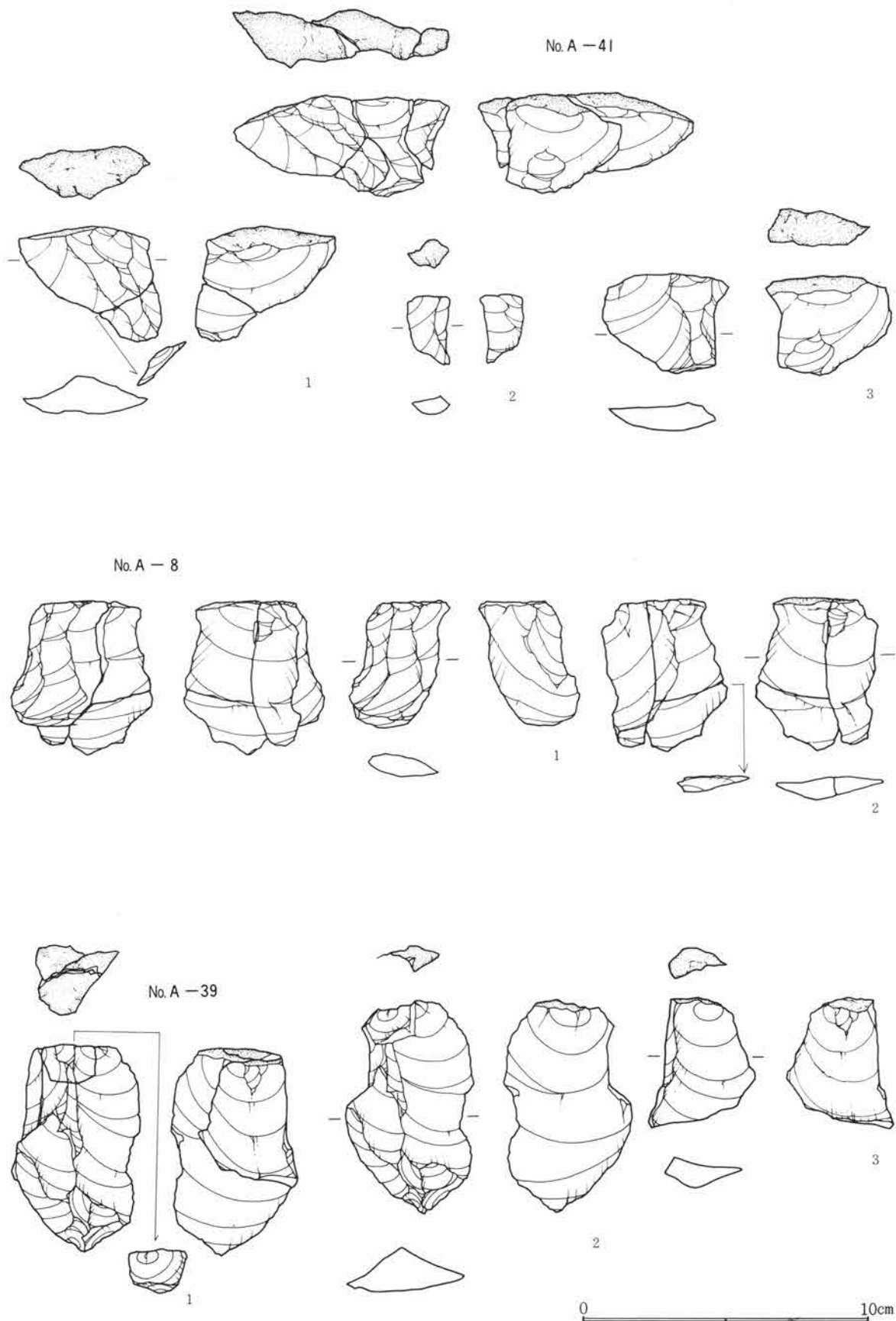
○→○→○→1→2→3→4

本資料は4点(取りあげ個体数5点)よりなる接合資料である。河床礫を石核素材に用い、平坦な礫面を打面とし、剥片剥離は同一の打面より連続しておこなわれる。横長・不定形な剥片が作出される。

I 旧石器時代の遺構と遺物

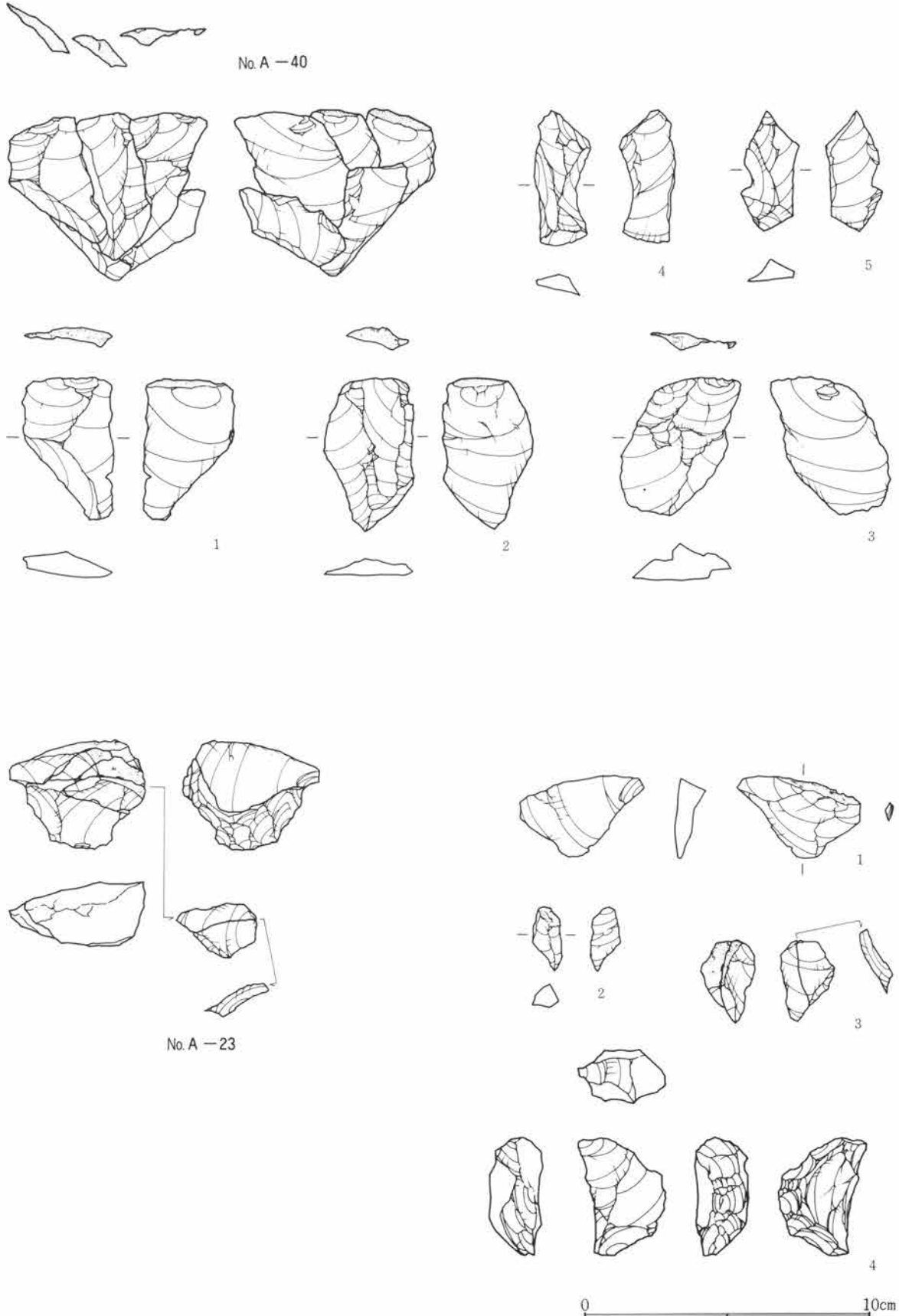


第70図 接合資料A-47・A-58



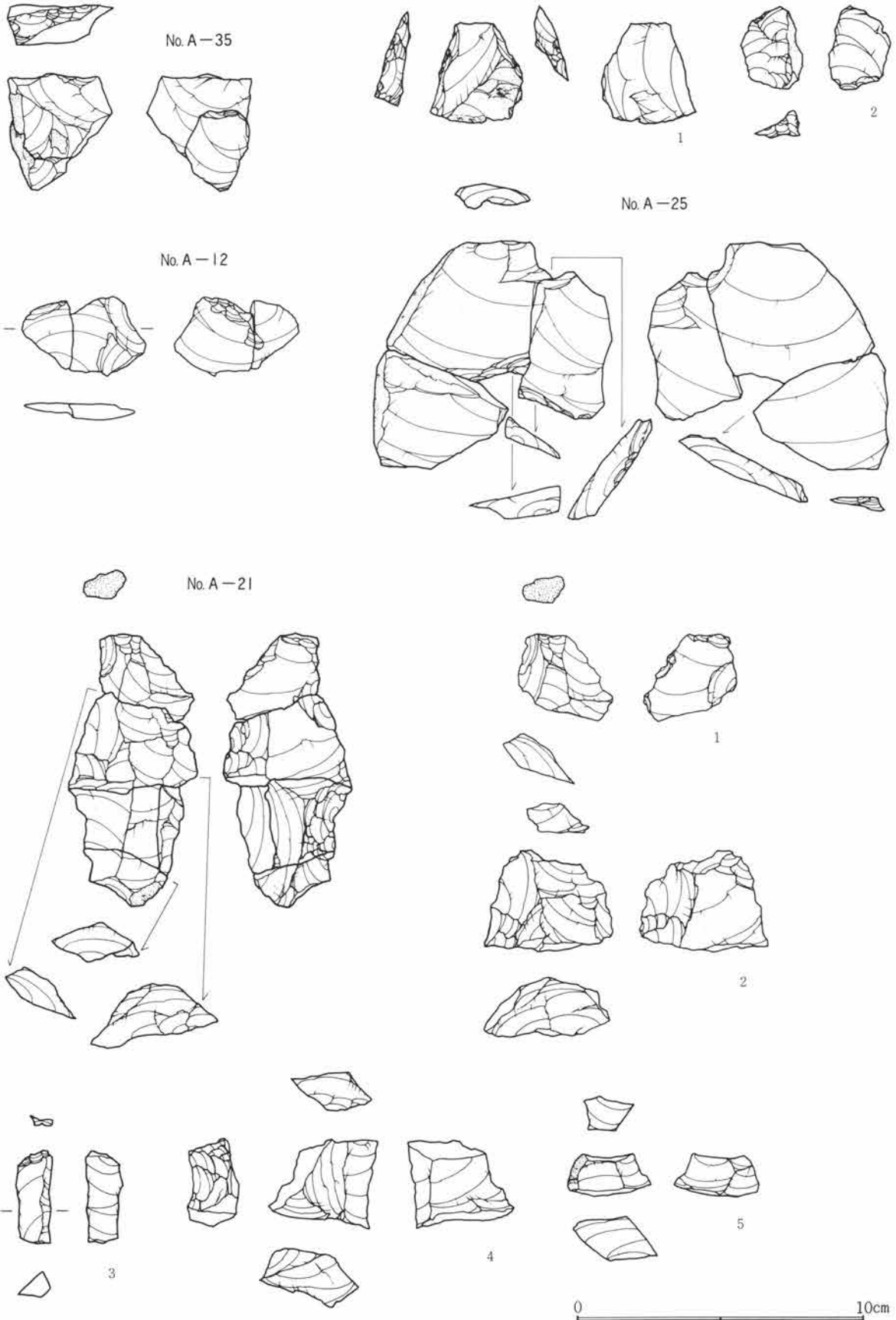
第71図 接合資料A-41・A-8・A-39

I 旧石器時代の遺構と遺物



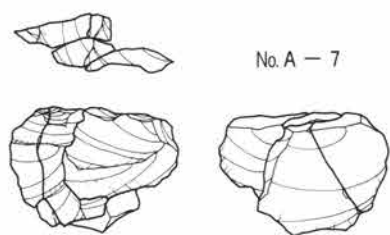
第72図 接合資料A-40・A-23

4. A地点の調査

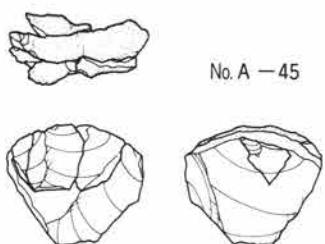
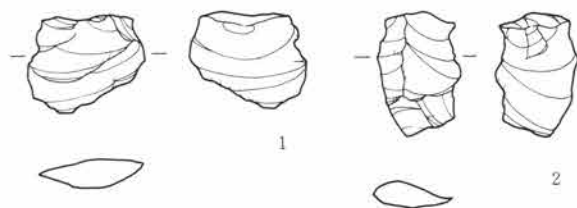


第73図 接合資料A-35・A-12・A-25・A-21

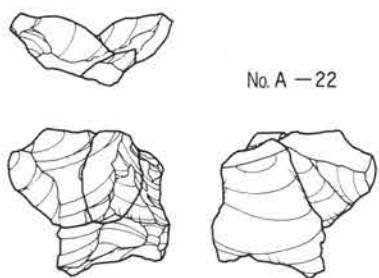
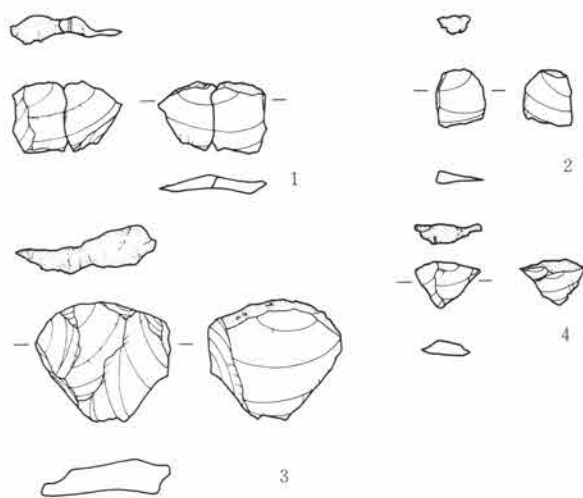
I 旧石器時代の遺構と遺物



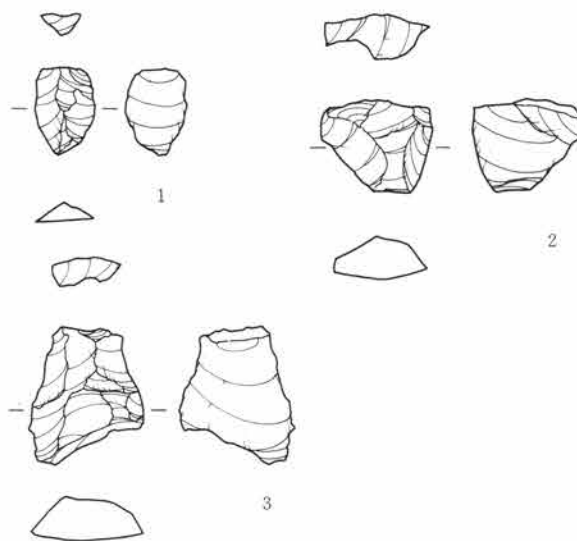
No. A - 7



No. A - 45

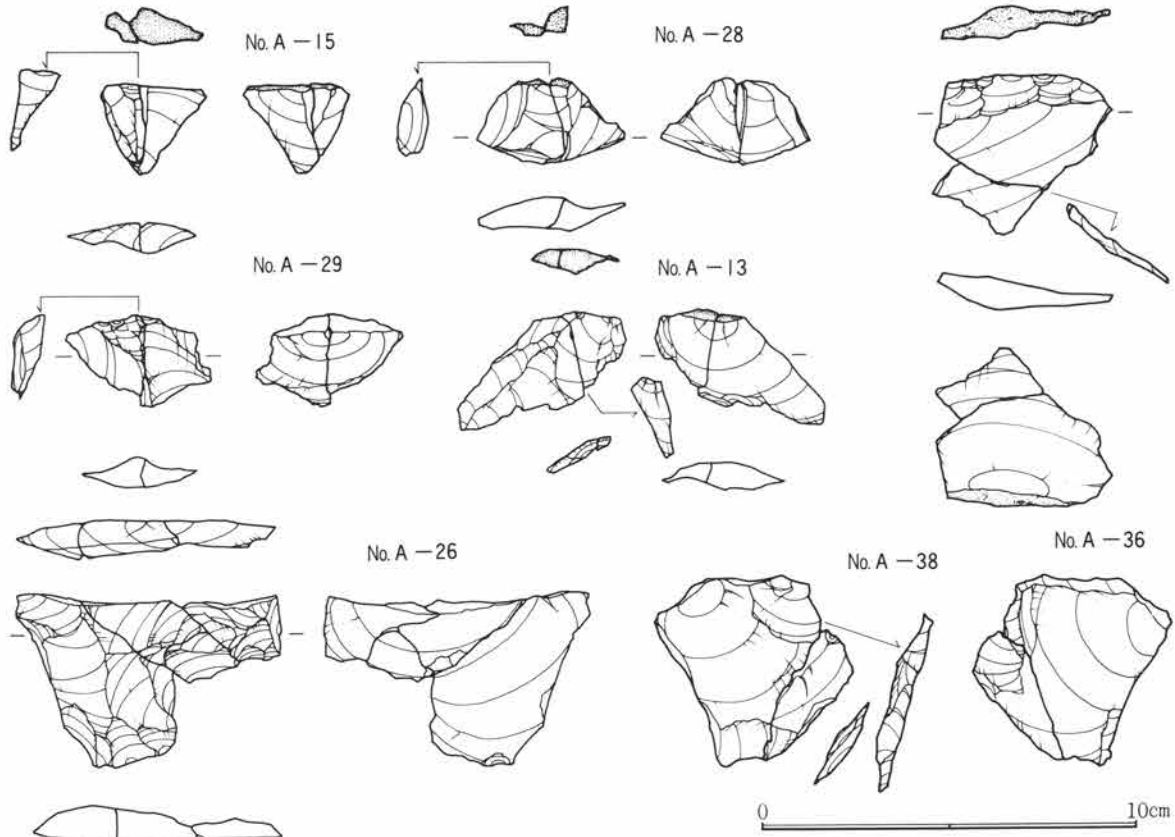


No. A - 22



0 10cm

第74図 接合資料A-7・A-45・A-22



第75図 接合資料A-15・A-28・A-29・A-13・A-36・A-26・A-38

接合資料・A-22(母岩別資料・黒色安山岩-5、第74図)

○→○→○→1→2→3

本資料は3点よりなる接合資料である。平坦な剝離面を打面とし、剝片剝離は同一の打面より連続しておこなわれる。打点は背面を構成する稜上に選択され、剝片剝離は打点を左右に大きく振りながら後退する。やや幅広の剝片が作出される。打面調整および頭部調整は認められない。

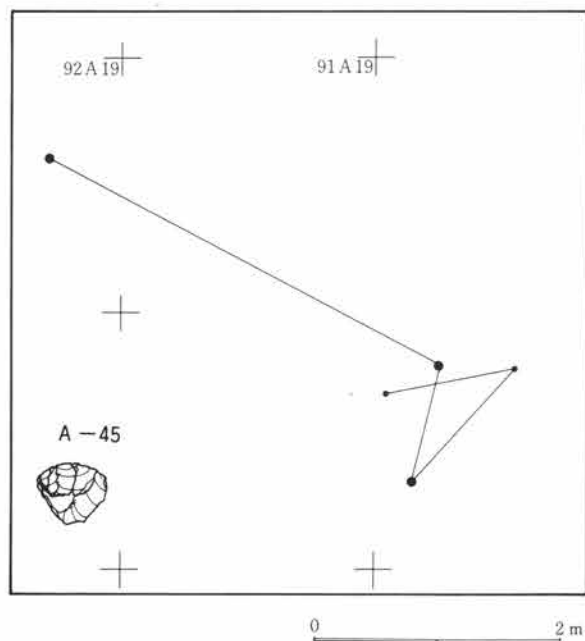
その他(第75図)

A区には、縦位あるいは横位に折断面の認められる剝片が接合する資料が多く存在する。縦位折断面の多くは剝離段階で生じるものと思われる。ここでは、形状の良好な資料を図示する。

A-15およびA-13は、平坦な礫面を打面として作出される。接合資料には打点部分より縦位に折断面され、折断面には打面からの剝離方向が認められる。打面調整および頭部調整は認められない。母岩別資料・黒色安山岩-3に分類される。

A-28・A-29およびA-26は、平坦な剝離面を打面として作出される。接合資料には打点部分より縦位に折断面され、折断面には打面からの剝離方向が認められる。打面調整および頭部調整は認められない。母岩別資料・黒色安山岩-5に分類される。A-26は、斜めに振れ折断面される。

A-36およびA-38は、平坦な礫面を打面として作出される。接合資料には横位に折断面され、折断面には剝片の側縁方向からの剝離が認められる。打面調整および頭部調整は認められない。



第76図 接合資料の分布(A-45)

A-45(第76図)は5点よりなる接合資料である。2号ブロックの東側(90-A-18グリッド)に分布する4点と、2号ブロックの西側(92-A-19グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料はブロックの東側に分布の主体が認められるが、西側に分布する1点は、接合資料では比較的大形な剥片である。母岩別資料・黒色安山岩10に分類される。

A-4(第77図)は8点よりなる接合資料である。2号ブロックの北側(91-A-19グリッド)に分布の主体が認められるほか、グリッドの周辺に2点が分布する。接合資料は、分布の主体となる91-A-19グリッドには2点の石核が分布する。母岩別資料・黒色安山岩3に分類される。

A-32(第77図)は14点よりなる接合資料である。2号ブロックの東側(90-A-18グリッド)に分布する12点と、2号ブロックの北側(92-A-19グリッド)に分布する2点とが接合する。接合資料はブロックの東側に分布の主体が認められるが、北側に分布する2点は、接合資料では比較的形状の整う剥片である。母岩別資料・黒色安山岩6に分類される。

A-40(第77図)は5点よりなる接合資料である。2号ブロックの中央部(91-A-18の周辺)に分布する。接合資料は比較的散漫な分布状態を示すが、A-4・A-32に比較して、その分布範囲は狭い。母岩別資料・黒色安山岩9に分類される。

A-41(第77図)は4点よりなる接合資料である。2号ブロックの中央部(91-A-18の周辺)に分布する。接合資料は比較的散漫な分布状態を示すが、A-4・A-32に比較して、その分布範囲は狭い。母岩別資料・黒色安山岩9に分類される。

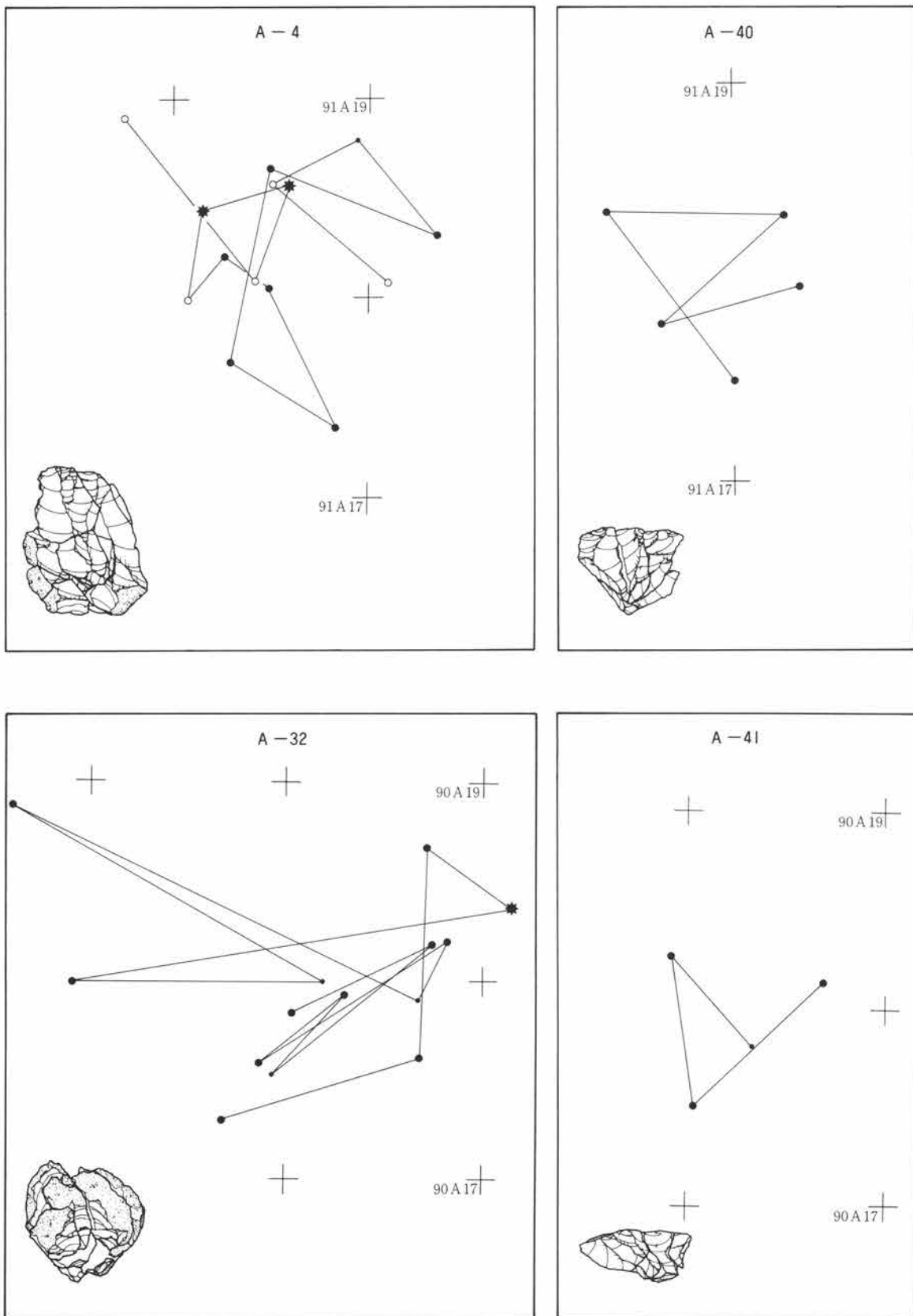
3号ブロックに存在する接合資料；これに該当する接合資料はA-21・A-23・A-47・A-49など4例がある。

A-21(第78図)は5点よりなる接合資料である。3号ブロックの東側(97-A-18・19グリッド)に分布する。接合資料は比較的散漫な分布状態を示す。母岩別資料・黒色安山岩5に分類される。

(2)、分布

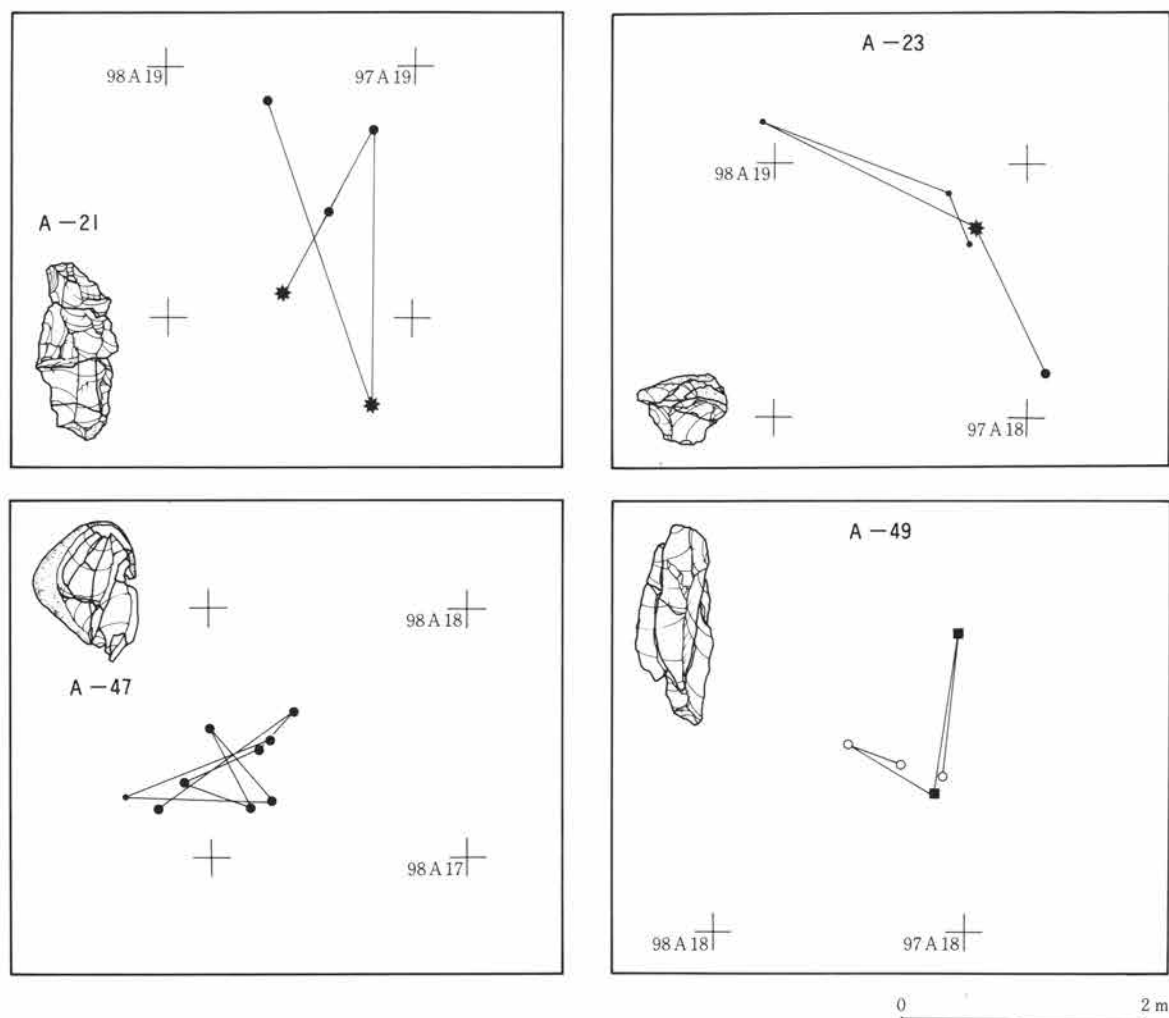
A区では接合資料の分析より、ブロックのすべてに接合資料が認められ、互いに接合する資料が存在することから接合資料の存在の有無という観点では石器群の同時性を疑う根拠はなく、ブロックが互いに密接な関係を保ち遺存することが想定される。石器群の同時性については、接合資料の検討と同時に母岩別資料の検討を含めおこなわれるべきであるが、ここでは、図版が繁雑となることを避け、接合資料の分布状況について記述する。

2号ブロックに存在する接合資料；これに該当する接合資料は、A-45・A-4・A-32・A-40・A-41など5例がある。



第77図 接合資料の分布(A-4・A-32・A-40・A-41)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第78図 接合資料の分布(A-21・A-23・A-47・A-49)

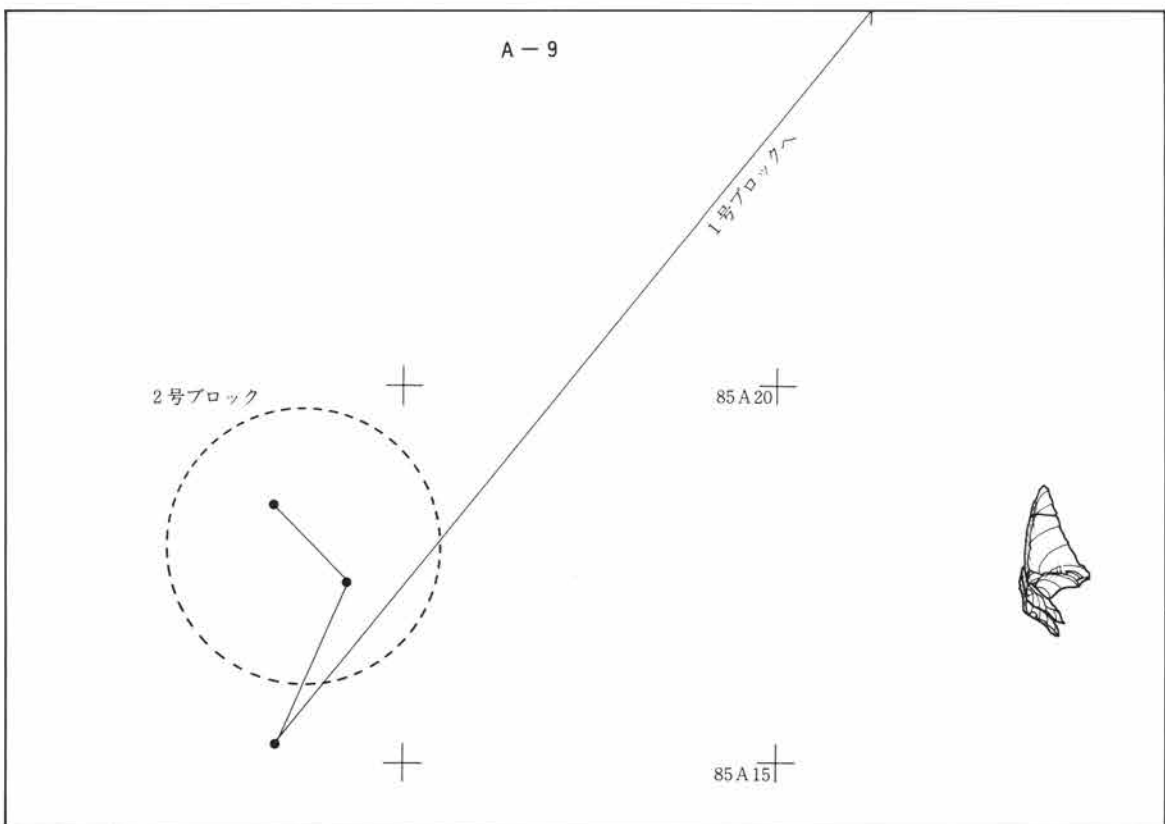
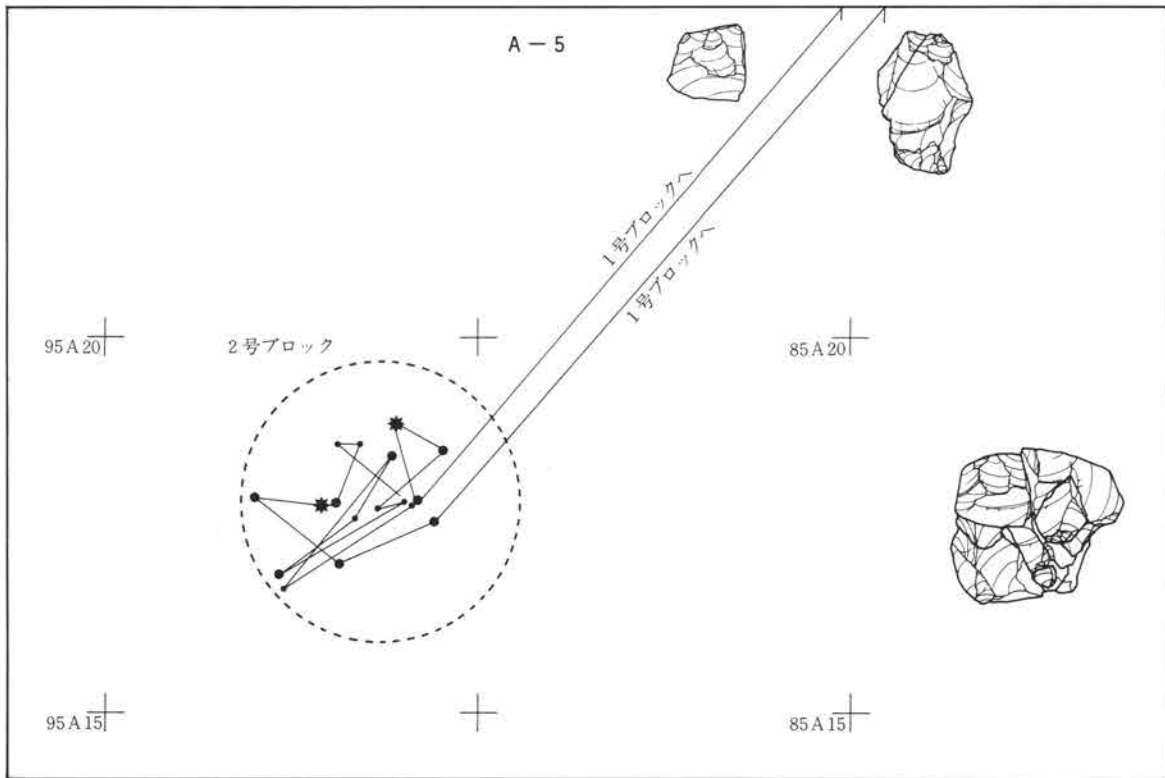
A-23(第78図)は5点よりなる接合資料である。3号ブロックの北東側(97-A-19グリッド)およびその周辺に分布する。接合資料は比較的散漫な分布状態を示す。母岩別資料・黒色安山岩5に分類される。

A-47(第78図)は10点よりなる接合資料である。3号ブロックの南側(98・99-A-18グリッド)に分布する。接合資料は集中的な分布状態を示す。母岩別資料・頁岩1に分類される。

A-49(第78図)は6点よりなる接合資料である。3号ブロックの北東側(97-A-19グリッド)に分布する5点と、1mほどの距離を隔て分布(97-A-20グリッド)する1点とが接合する。接合資料はブロックの北東部に分布の主体が認められ、集中的な分布状態を示す。母岩別資料・黒色頁岩1に分類される。

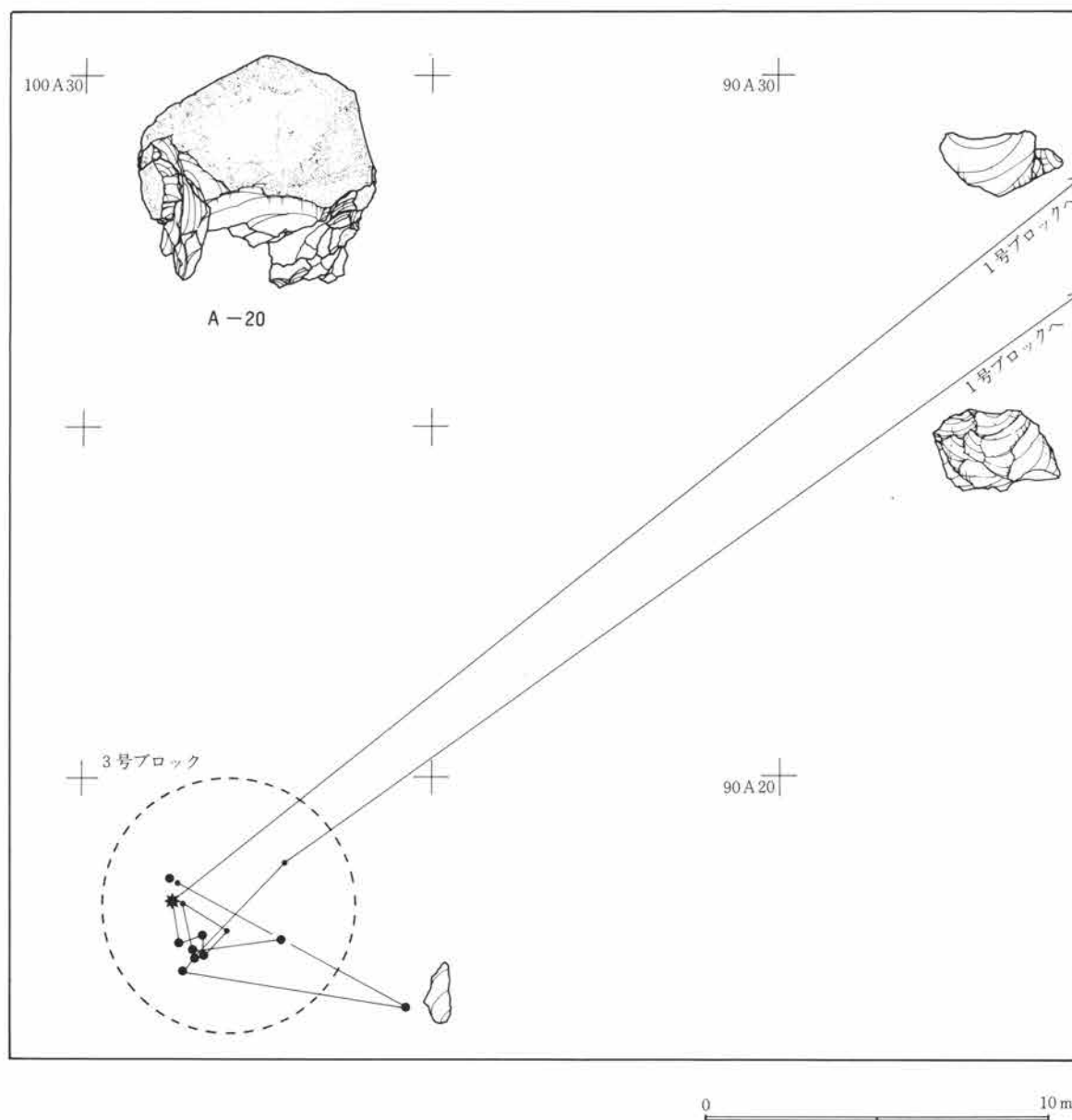
ブロック間に存在する接合資料；これに該当する接合資料はA-5・A-9・A-20・A-1・A-52・A-53・A-60などがある。

A-5(第79図)は16点よりなる接合資料である。2号ブロックの全域(90・91・92-A-18・19・20グリッド)に分布する14点と、1号ブロック(77・78-A-33・34グリッド)に分布する2点とが接合し、50mの距離を隔て接合資料は存在する。2号ブロックから1号ブロックへの石器の移動は明らかではあるが、移動する必然性の乏しい剥片であることが注目される。母岩別資料・黒色安山岩3に分類される。



0 10 m

第 79 図 接合資料の分布(A-5・A-9)



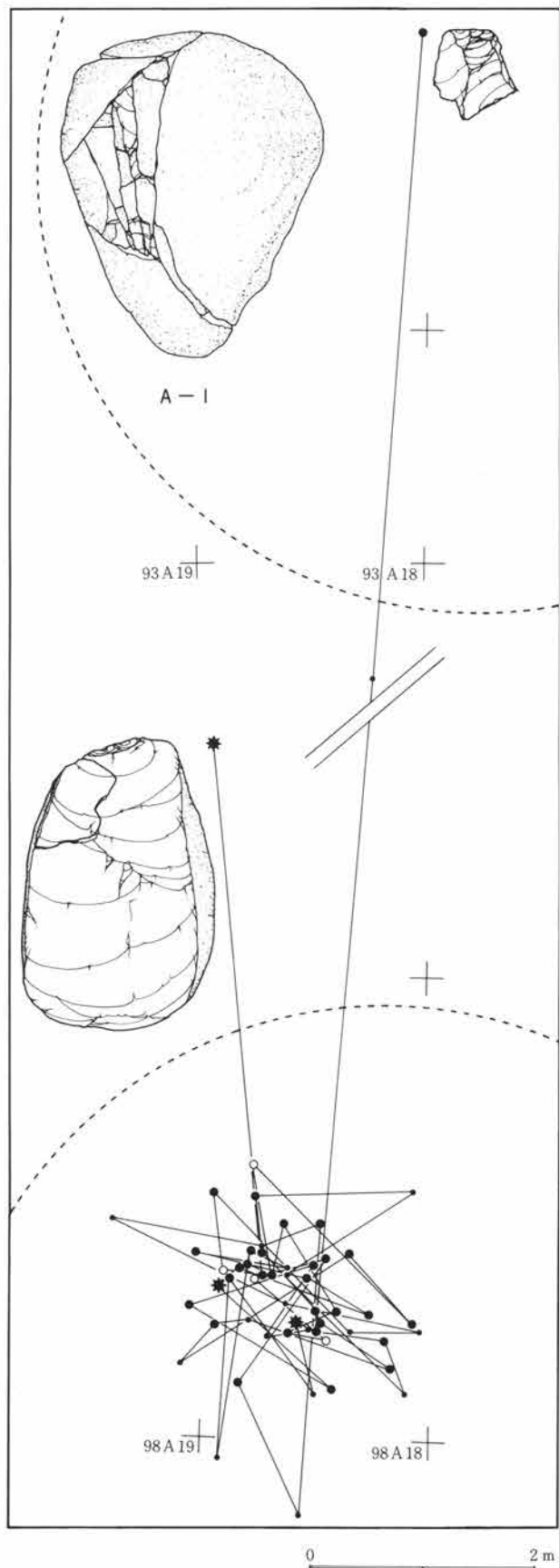
第80図 接合資料の分布(A-20)

A-9(第79図)は4点よりなる接合資料である。2号ブロック(90・91・92-A-18・19・20グリッド)に分布する3点と、1号ブロック(77・78-A-33・34グリッド)に分布する1点とが接合し、50mの距離を隔て接合資料は存在する。2号ブロックから1号ブロックへの石器の移動は明らかではあるが、移動する必然性の乏しい剥片であることが注目される。母岩別資料・黒色安山岩3に分類される。

A-20(第80図)は16点よりなる接合資料である。3号ブロック全域(97・98・99-A-18・19・20グリッド)およびその外側に分布する14点と、1号ブロック(77・78-A-33・34グリッド)に分布する2点とが接合し、50mの距離を隔て接合資料は存在する。3号ブロックから1号ブロックへの石器の移動は明らかではあるが、移動する必然性の乏しい剥片であることが注目される。母岩別資料・黒色安山岩5に分類される。

A-1(第81図)は49点よりなる接合資料である。3号ブロックの中央部(97-A-19グリッド)に分布する

4. A地点の調査



第81図 接合資料の分布(A-1)

46点と、2号ブロック(90-A-18グリッド)およびその外側に分布する3点とが接合する。3号ブロックから2号ブロックおよびその外側への石器の移動は明らかであり、石核素材1点(第42図1)と、剥片2点(第43図18・第44図26)とが存在する。母岩別資料・黒色安山岩1に分類される。

A-52(第82図)は3点よりなる接合資料である。2号ブロック(92-A-19グリッド)に分布する2点と、3号ブロック(98-A-19グリッド)に分布する1点とが接合し、10mの距離を隔て接合資料は存在する。いずれのブロックから、石器が移動するのかは明らかではない。母岩別資料・黒色頁岩3に分類される。

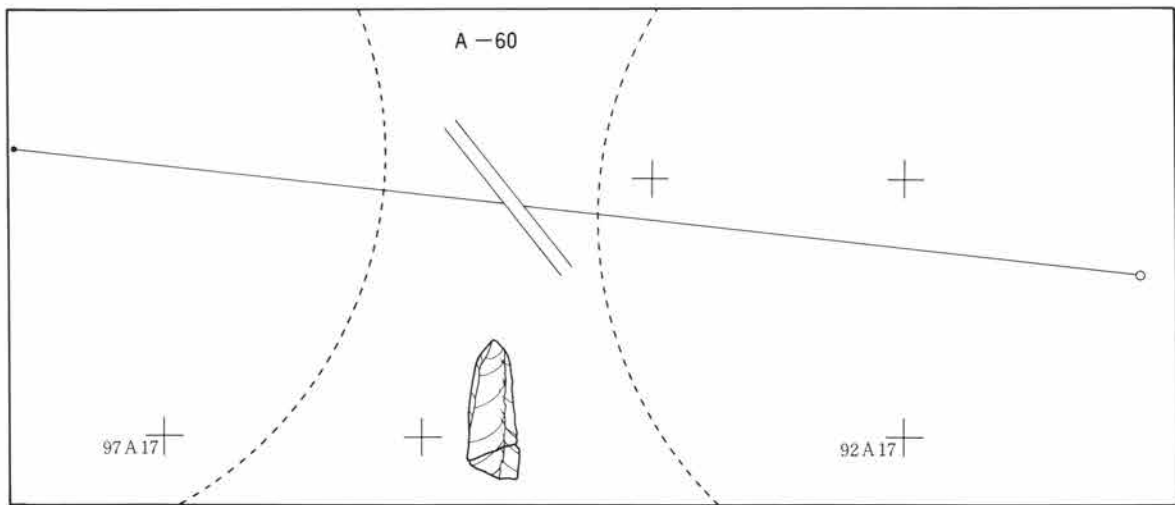
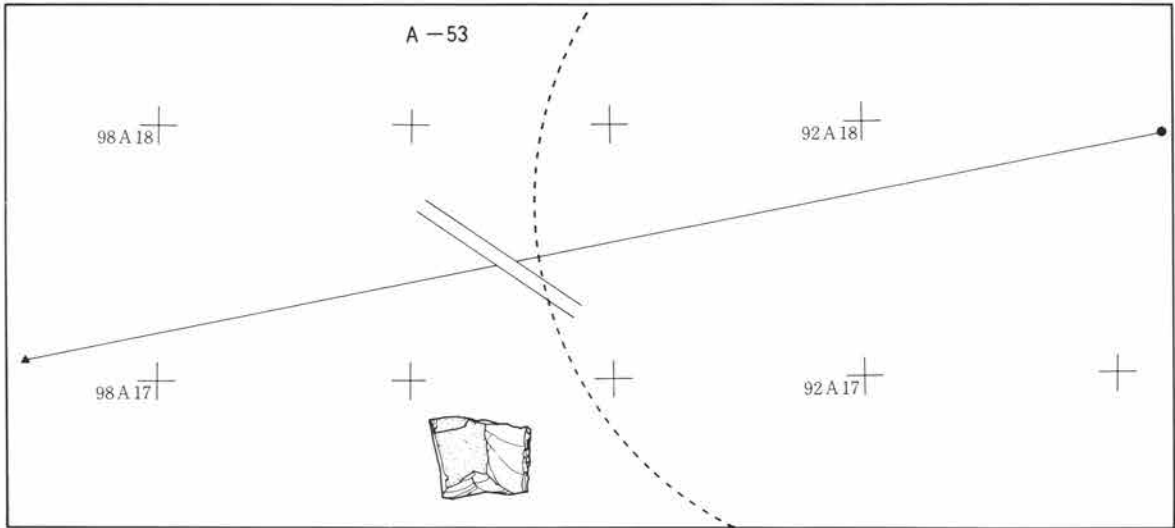
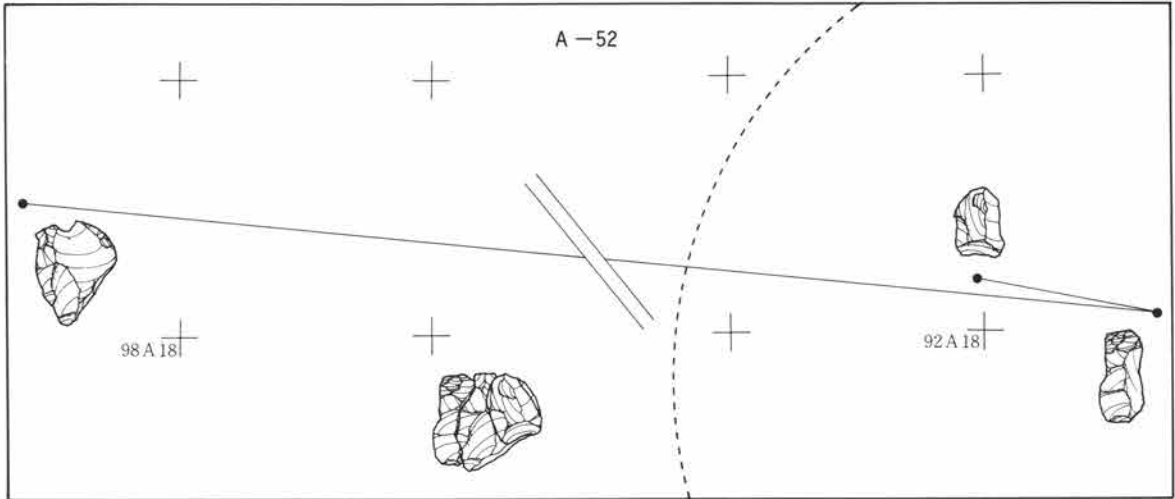
A-53(第82図)は2点よりなる接合資料である。2号ブロック(90-A-18グリッド)に分布する碎片1点と、3号ブロック(98-A-18グリッド)に分布する削器1点とが接合し、18mの距離を隔て接合資料は存在する。一方は石器の製作段階あるいは使用段階に生じる碎片であること、一方が間接的な生産具であること、からするならば、製作空間としての2号ブロックおよび使用空間としての3号ブロックというように扱えられるが、石器が外部から搬入される石材を用いるためこの解釈も実態にはそぐわない。

A-60(第82図)は2点よりなる接合資料である。2号ブロック(91-A-18グリッド)に分布する1点と、3号ブロック(97-A-19グリッド)に分布する1点とが接合し、12mの距離を隔て接合資料は存在する。石器は両側縁の平行する縦長剥片であること、外部から搬入される石材を用いること、からこれを分割(折断)し、互いのブロックに共有すると解釈される。

ブロックおよびブロックの周辺(外側)に存在する接合資料；これに該当する接合資料はA-2・A-3・A-16・A-19などがある。

A-19(第83図)は総計20点よりなる接合資料

I 旧石器時代の遺構と遺物



0 2 m

第 82 図 接合資料の分布 (A-52・A-53・A-60)

4. A地点の調査

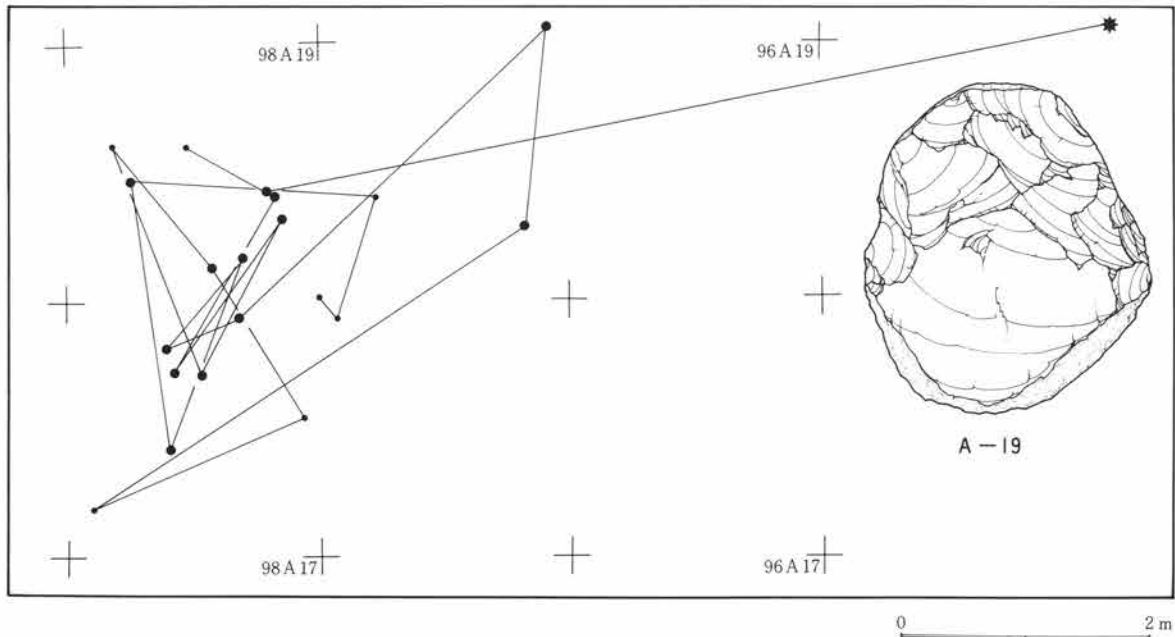
である。3号ブロックの中央付近(98-A-18・19グリッド)に分布する19点と、3号ブロックの外側(94-A-20グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料はブロックの東北側集中部に分布の主体が認められ、剥片や碎片が分布する。ブロックの外側に分布する1点は、未だ使用可能な石核である。母岩別資料・黒色安山岩5に分類される。

A-2(第84図)は25点よりなる接合資料である。2号ブロックの東側(90・91-A-18・19グリッド)に分布する24点と、2号ブロックの外側(91-A-16グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料はブロックの東側に分布の主体が認められ、多くの縦長剥片や剥片・碎片が分布するが、外側に分布する1点は、未だ使用可能な石核である。母岩別資料・黒色安山岩2に分類される。

A-3(第84図)は25点よりなる接合資料である。2号ブロックの中央部(91-A-18グリッド)に分布する24点と、2号ブロックの外側(93-A-17グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料はブロックの中央に分布の主体が認められる。2ヶ所より分割(折断)される折断剥片のうち、ブロックの周辺より出土する剥片中央の一点(第48図3)については、分布状況より目的的な石器の移動とは認められない。母岩別資料・黒色安山岩3に分類される。

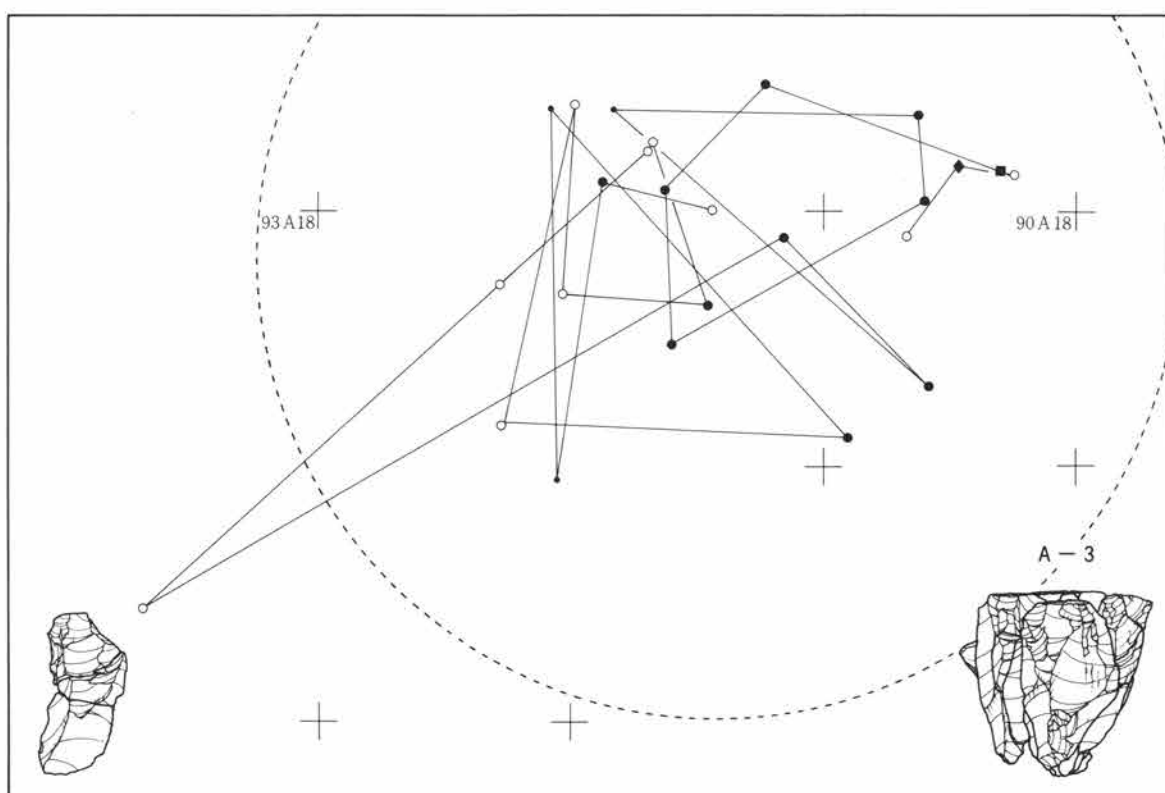
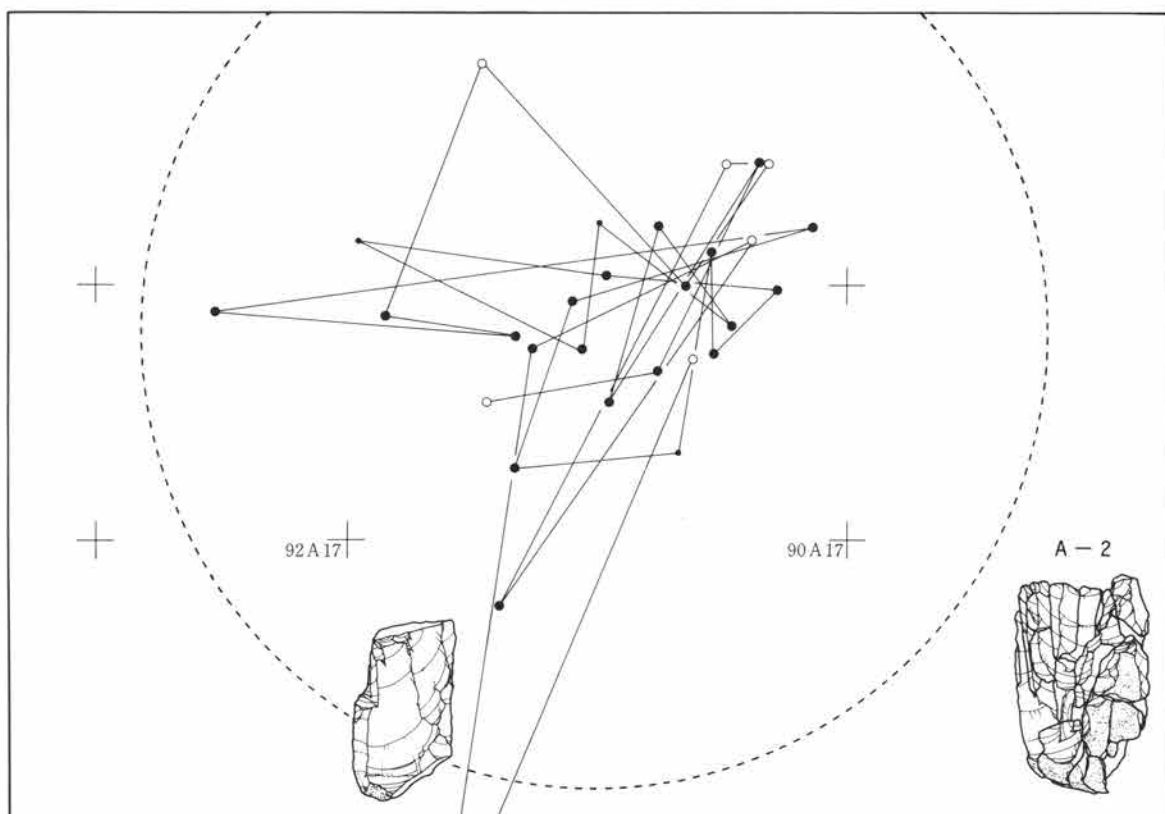
A-16(第85図)は86点よりなる接合資料である。2号ブロックの中央部(90・91・92-A-17・18・19グリッド)に分布する85点と、2号ブロックの外側(91-A-15グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料はブロックの全域に分布するが、2ヶ所の集中部のうち、東側集中部分に分布の主体がみられる。ブロックの外側より出土する碎片・1点(第57図13)については、分布状況より目的的な石器の移動とは認められない。母岩別資料・黒色安山岩4に分類される。

A-43(第85図)は4点よりなる接合資料である。2号ブロックの北東側(90-A-18グリッド)に分布する3点と、ブロックの外側(92-A-15グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料はブロックに分布の主体が認められる。ブロックの周辺に出土する大形の剥片(第68図1)については、分布状況より目的的な石器の移動とは認められない。母岩別資料・黒色安山岩10に分類される。



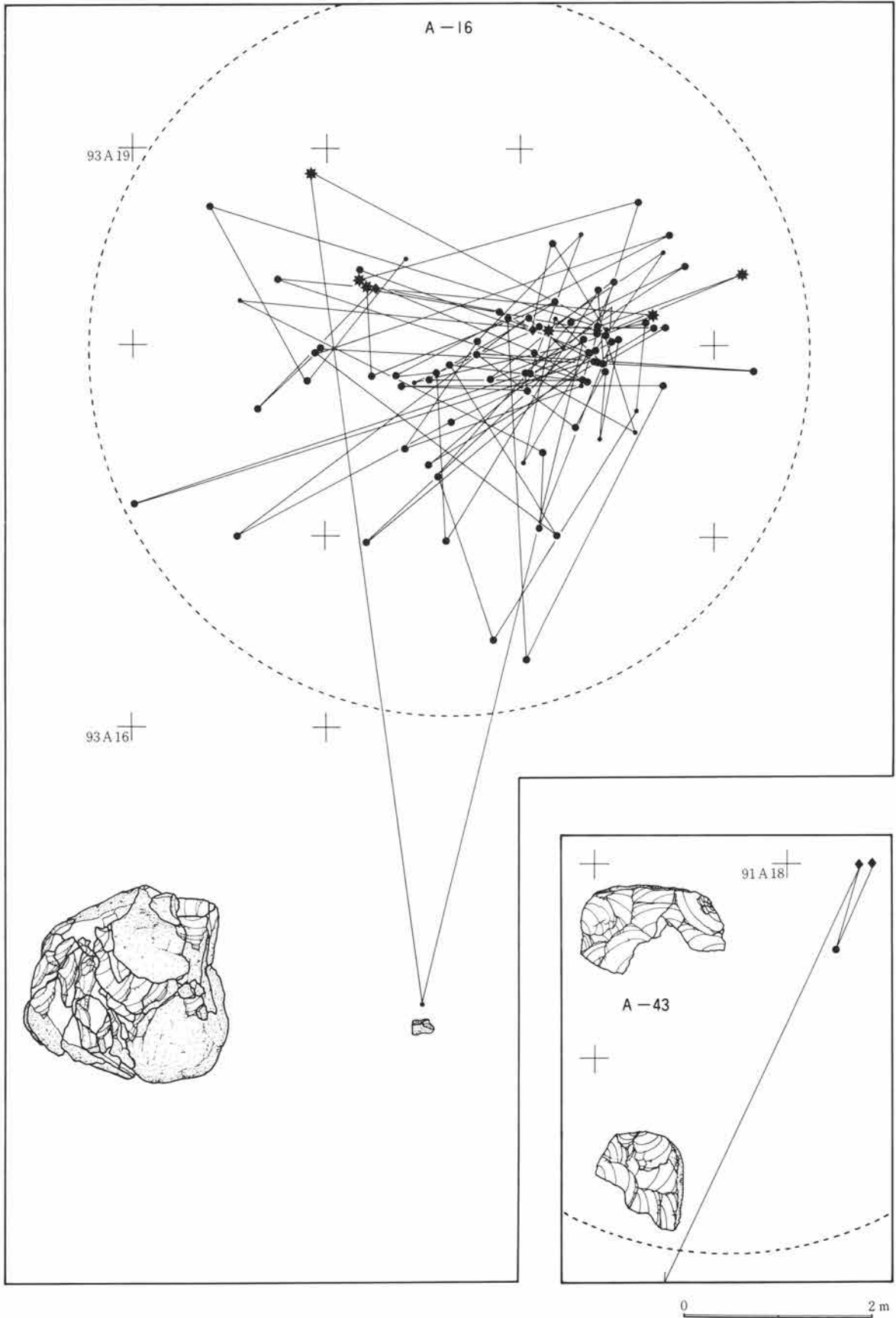
第83図 接合資料の分布(A-19)

I 旧石器時代の遺構と遺物



0 2 m

第 84 図 接合資料の分布(A-2・A-3)



第 85 図 接合資料の分布(A-16・A-43)

I 旧石器時代の遺構と遺物

4-6, 母岩別資料の分布

多くの場合、石器石材として多用される黒色安山岩や黒色頁岩・珪質頁岩は母岩別資料に分類することが困難であるが、A区出土の石器(総計1,772点)の場合には、接合作業により原石の状態にまで復元される事例(資料数1,081点、全体の61.0%)が多い。これまでになく確実な分類が可能であり、22種類に及ぶ母岩別資料が抽出されている。各々の母岩別資料について、工程段階は多種多用ではあるが、全般的な傾向として、遺跡周辺で採集が可能な黒色安山岩の場合には一連の石器の製作工程が認められるが、遺跡周辺で採集することのできない黒色頁岩および珪質頁岩は外部より搬入されることが多い。

母岩別資料・黒色安山岩-1(付図4)

本母岩別資料は総計72点(石核2点・縦長剥片4点・剥片31点・碎片35点)から構成され、接合資料A-1および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。3号ブロックを分布の主体とするほか、2号ブロックおよび92-A-19グリッドにそれぞれ2点が分布する。

3号ブロックには、石核1点・剥片29点・碎片34点が存在する。ブロックには2ヶ所の集中部(ブロックの北東側および南西側)が認められるが、本母岩別資料は北東側の集中部に分布し、10㎡ほどの範囲に良好に集中する。多量の碎片や剥片が分布し、石器の製作址の様相を示す。2号ブロックおよび92-A-19グリッドでは、互いに2mほどの距離を隔て剥片が分布するが、石器の移動を明確には捉えられていない。両ブロックの中間に存在する地点には石核2点(第42図1・第55図17)が隣接し出土すること、から明らかに人為的・意図的な移動として捉えられる。

接合作業により原石の状態にまで復元されることから、本母岩別資料は原石の搬入→石器の製作→放棄という一連の過程を経ることは明らかであり、また、外部へ搬出される資料は存在しない。

母岩別資料・黒色安山岩-2(付図5)

本母岩別資料は総計53点(石核1点・縦長剥片7点・剥片19点・碎片25点のほか、加工痕ある剥片1点)から構成され、接合資料A-2および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。2号ブロックを分布の主体とするが、3号ブロックに11点が分布するほか、91-A-16グリッドに1点(石核)が分布する。

2号ブロックには、石核1点・剥片18点・碎片17点が存在する。ブロックには2ヶ所の集中部(ブロックの東側および西側)が認められるが、本母岩別資料は東側(92-A-17グリッド)の集中部に分布し、6㎡ほどの範囲に良好に集中する。剥片および碎片の数量がほぼ等しく判然としないが、碎片や剥片が多く分布し、石器の製作址の様相を示す。一方、3号ブロックには、剥片1点・碎片8点が存在する。ブロックには2ヶ所の集中部(ブロックの北東側および南西側)が認められるが、北東側の集中部に剥片が分布するのに対し、南西側の集中部に碎片が分布する。91-A-16グリッドには石核1点(第47図25)が存在するが、石器の移動に関して、明確な意義づけをおこなうことは困難である。

接合資料より想定するならば、2号ブロックおよび3号ブロックにおいて石器が製作されることは明らかであり、原石の四分の一ほどが消費されている。原石の分割工程は確認されないが、出土資料においては(原石の搬入→分割)→分割→石器の製作→放棄という一連の過程を経ることは明らかであり、一部の石器については外部への搬出が想定される。

母岩別資料・黒色安山岩-3(付図6)

本母岩別資料は総計204点(石核4点・縦長剥片17点・剥片69点・碎片108点のほか、ナイフ形石器5点・加工痕ある剥片1点)から構成され、接合資料A-3・A-4・A-5・A-9および接合関係の認められな

4. A地点の調査

い同一の母岩別資料よりなる。2号ブロックを分布の主体とするほか、1号ブロック・3号ブロックおよび93-A-16グリッド・91-A-15グリッドに分布する。

2号ブロックには、石核4点・縦長剥片16点・剥片61点・碎片108点が存在する。本母岩別資料の場合、ブロックの全域に分布し、20mほどの範囲に良好に集中する。多量の碎片や剥片が分布し、石器の製作址の様相を示す。1号ブロックには2mほどの範囲に剥片4点が、3号ブロックには互いに2mほどの距離を隔て剥片2点が、分布する。50mの距離を隔て接合することより、明らかに人為的・意図的な移動として捉えられる。ブロック周辺のグリッドより4点の剥片が分布するが、石器の移動に関して、明確な意義づけをおこなうことは困難である。

2号ブロックにおいて石器の製作がおこなわれ、1号および3号ブロックに石器が搬出されたことは明らかである。本母岩別資料は原石の搬入→分割→石器の製作→放棄という一連の過程を経ることが明らかであり、接合資料より判断するならば、出土資料には原石の1/4ほどが存在しないことから、一部の石核や石器には外部への搬出が想定される。

母岩別資料・黒色安山岩-4(付図7)

本母岩別資料は総計295点(ナイフ形石器4点・石核9点・剥片90点・碎片192点)から構成され、接合資料A-16からなる。2号ブロックを分布の主体とするが、91・92-A-15グリッドに分布する。

2号ブロックには、ナイフ形石器4点・石核9点・剥片89点・碎片190点が存在する。本母岩別資料はブロックの全域に分布し、30mほどの範囲に良好に集中する。多量の碎片や剥片が分布し、石器の製作址の様相を示す。91・92-A-15グリッドには、互いに2mほどの距離を隔て剥片2点が分布する。

接合作業により原石の状態にまで復元されることから、本母岩別資料は原石の搬入→石器の製作→放棄という一連の過程を経ることは明らかである。接合資料には空白となる部分が存在するため外部への石器の搬出が想定される。

母岩別資料・黒色安山岩-5(付図8)

本母岩別資料は総計182点(石核7点・剥片86点・碎片84点のほか、削器4点・加工痕ある剥片1点)から構成され、接合資料A-19・A-20・A-21・A-22・A-23・A-25・A-26・A-28・A-29からなる。3号ブロックを分布の主体とするほか、1号ブロック・2号ブロックおよび75-A-31・77-A-24・94-A-18・94-A-20・95-A-17・95-A-22グリッドに分布する。

3号ブロックには、石核6点・剥片70点・碎片81点のほか削器3点が存在する。本母岩別資料はブロックの全域に分布し、22mほどの範囲に良好に集中する。多量の碎片や剥片が分布し、石器の製作址の様相を示す。1号ブロックには削器1点・剥片3点が2mほどの範囲に分布するが、50mほど距離を隔て接合することより、明らかに人為的・意図的な移動として捉えられる。グリッドより出土する石器には、明確な意義づけをおこなうことは困難であるが、94-A-20グリッド出土の石核(第55図17)には、両ブロックの中間地点に石核2点が存在することから明らかに人為的・意図的な移動として捉えられる。

接合資料より判断するならば、本母岩別資料は3号ブロックにおいて石器が製作されることは明らかであり、原石の大半が消費され、1号ブロックおよび2号ブロックへ石器が搬入されることが想定される。遺跡においては、原石の搬入→分割→石器の製作→放棄という過程を経ることは明らかであり、一部の石器については外部への石器の搬出が想定される。

母岩別資料・黒色安山岩-6(付図4)

本母岩別資料は総計31点(剥片19点・碎片8点のほか、ナイフ形石器3点)から構成され、接合資料A-

I 旧石器時代の遺構と遺物

A-35および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。2号ブロックを分布の主体とするほか、3号ブロックに分布する。

2号ブロックには、剥片16点・碎片5点のほかナイフ形石器3点が存在する。本母岩別資料はブロックの中央に分布し、径4mほどの範囲に良好に集中する。碎片や剥片が分布の主体を占め、石器の製作址の様相を示す。3号ブロックには、剥片3点・碎片2点が存在する。2ヶ所の集中部のうち、北東側の集中部に4点が、南西側の集中部に1点が、分布する。

本母岩別資料には、石核が存在しないこと、剥片剥離の初期段階に生じる剥片が多く存在すること、の2点から原石は消費し尽くされない段階で外部へ搬出されることが明らかである。

母岩別資料・黒色安山岩-7(付図5)

本母岩別資料は総計119点(石核2点・剥片26点・碎片88点のほか、ナイフ形石器1点・使用痕ある剥片2点)から構成され、接合資料A-36・A-37・A-38および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。3号ブロックを分布の主体とするほか、2号ブロックおよび88-A-18・95-A-18グリッドに分布する。

3号ブロックには、石核2点・剥片8点・碎片80点が存在する。本母岩別資料はブロックの全域に分布し、10㎡ほどの範囲に良好に集中する。多量の碎片や剥片が分布し、石器の製作址の様相を示す。2号ブロックには、剥片16点・碎片7点が存在する。本母岩別資料はブロックの全域に分布するが、剥片の数量に比較し、碎片の数量は少ない。2号ブロックおよび3号ブロックは対照的な石器の分布状況を示す。

2号ブロックおよび3号ブロックはともに石器の製作址的な様相を示す可能性を否定することはできないが、器種別分布より、3号ブロックでは剥片剥離から石器の製作まで一連の石器製作がおこなわれ、同時に、3号ブロックより2号ブロックへの剥片の搬入・石器の製作がおこなわれている可能性が強い。グリッドより出土する石器には、明確な意義づけは困難である。

母岩別資料・黒色安山岩-9(付図7)

本母岩別資料は総計26点(剥片20点・碎片6点)から構成され、接合資料A-39・A-40・A-41および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。2号ブロックを分布の主体とするほか、91-A-17グリッドに分布する。

2号ブロックには、剥片19点・碎片6点が存在する。ブロックには2ヶ所の集中部(東側および西側)が認められるが、本母岩別資料は東側の集中部に分布し、6㎡ほどの範囲に良好に集中する。剥片や碎片が分布の主体となることから、石器の製作址的な様相を示す。

接合資料に示されるように、本母岩別資料は礫面を打面とすることから、ほぼ同一段階の剥片剥離工程より作出されることは明らかである。

母岩別資料・黒色安山岩-10(付図7)

本母岩別資料は総計17点(剥片5点・碎片10点のほか、ナイフ形石器2点)から構成され、接合資料A-45および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。2号ブロックを分布の主体とするほか、91-A-15グリッドに分布する。

2号ブロックには、剥片4点・碎片10点のほかナイフ形石器2点が存在する。ブロックには2ヶ所の集中部(東側および西側)が認められるが、本母岩別資料は東側の集中部に分布し、4㎡ほどの範囲に良好に集中する。剥片・碎片やナイフ形石器が分布の主体となることから、剥片剥離の一部をはじめ、ナイフ形石器の製作がおこなわれることは明らかである。

母岩別資料・黒色頁岩－1(付図9)

本母岩別資料は総計5点(加工痕ある剥片2点・縦長剥片3点)から構成され、接合資料A-49よりなる。3号ブロックを分布の主体とし分布する。ブロックには2ヶ所の集中部(東側および西側)が認められるが、本母岩別資料は東側の集中部に散漫な状態で分布する。母岩別資料には碎片が存在しないため石器が外部より搬入される可能性を否定できないが、接合状況(A-49、第69図2)より判断するならば、石器の製作がおこなわれている可能性が強い。

母岩別資料・黒色頁岩－2(付図9)

本母岩別資料は総計3点(石核1点・剥片2点)から構成され、接合資料A-50および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。3号ブロックを分布の主体とし分布する。3号ブロックには、石核1点・剥片1点が存在する。本ブロックには2ヶ所の集中部(東側および西側)が認められるが、母岩別資料は東側の集中部に散漫な状態で分布する。接合および遺存状況より判断するならば、原石を搬入したのちに石器の製作がおこなわれるが、石核素材を大きく残し、剥片剥離を終了している。

母岩別資料・黒色頁岩－3(付図9)

本母岩別資料は総計9点(剥片8点・碎片1点)から構成され、接合資料A-51・52および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。2号ブロックを分布の主体とするほか、3号ブロックに分布する。

2号ブロックには剥片6点・碎片2点が存在する。ブロックには2ヶ所の集中部(東側および西側)が認められるが、本母岩別資料は西側の集中部に分布し、長軸3m・短軸1.5mほどの範囲に散漫な状態で分布する。3号ブロックには剥片1点が存在する。

接合状態および遺存状態より判断するならば、石核素材を消費する割合は多くはなく、剥片剥離を終了し、石核は外部へ搬出されると言える。

母岩別資料・黒色頁岩－4(付図9)

本母岩別資料は総計2点(碎片2点)から構成され、接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。3号ブロックを分布の主体とし、ブロック北東側の集中部に分布する。資料規模に乏しいため明確ではないが、本母岩別資料には通常の剥離状態は認められないため、石核素材から作出されるというより、敲石の破片とすべきであろうか。

母岩別資料・黒色頁岩－5(付図9)

本母岩別資料は総計4点(剥片1点・碎片1点のほか、削器2点)から構成され、接合資料A-54および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。3号ブロックには削器2点・碎片1点が、2号ブロックには剥片1点が、存在する。本母岩別資料の場合、遺跡外部より石器や剥片が搬入されると言える。

母岩別資料・黒色頁岩－6(付図9)

本母岩別資料は総計5点(剥片3点・碎片2点)から構成され、すべて同一の母岩別資料よりなり、接合資料は存在しない。2号ブロックを分布の主体とし、ブロック西側の集中部に分布する。

遺存状態より判断するならば、石核素材を消費する割合は多くはなく、剥片剥離を終了し、石核は外部へ搬出されると言える。

母岩別資料・黒色頁岩－7(付図9)

本母岩別資料は総計8点(剥片1点・碎片7点)から構成され、すべて同一の母岩別資料よりなり、接合資料は存在しない。3号ブロックを分布の主体とするほか、2号ブロックに分布する。

3号ブロックには剥片1点・碎片5点が、2号ブロックには碎片2点が、それぞれ存在する。3号ブロッ

I 旧石器時代の遺構と遺物

クでは南西側の集中部に、2号ブロックでは西側の集中部に、それぞれ散漫な状態で分布する。

遺存状態より判断するならば、石核素材を消費する割合は多くはなく、剥片剥離を終了し、石核を外部へ搬出すると言える。

母岩別資料・黒色頁岩－8(付図9)

本母岩別資料は総計15点(剥片3点・碎片10点のほか、加工痕ある剥片2点)から構成され、接合資料A-8および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなり、3号ブロックを分布の主体とする。

ブロックには2ヶ所の集中部(北東側および南西側)が認められるが、剥片や碎片が北東側の集中部に、加工痕ある剥片が南西側の集中部に、それぞれ分布する。

接合資料および遺存状態より判断するならば、石核素材を消費する割合は多くはなく、剥片剥離を終了した後、石核を外部へ搬出すると言える。

母岩別資料・輝緑岩－1(付図10)

本母岩別資料は総計5点(石核1点・剥片3点・碎片1点)から構成され、接合資料A-66よりなる。3号ブロックには2ヶ所の集中部(北東側および南西側)が認められるが、北東側の集中部を分布の主体とする。

接合状態および遺存状態より判断するならば、原石を搬入したのちに石器の製作がおこなわれるが、石核素材を大きく残し、剥片剥離を終了している。

母岩別資料・輝緑岩－2(付図10)

本母岩別資料は総計2点(石核1点・剥片1点)から構成され、接合資料A-65よりなる。3号ブロックには2ヶ所の集中部(北東側および南西側)が認められるが、北東側の集中部を分布の主体とする。

接合状態および遺存状態より判断するならば、原石を搬入したのちに石器の製作がおこなわれるが、石核素材を大きく残し、剥片剥離を終了している。

母岩別資料・珪質頁岩－1(付図10)

本母岩別資料は総計10点(碎片6点のほか、ナイフ形石器2点・楔形石器1点・加工痕ある剥片1点)から構成され、すべて同一の母岩別資料よりなり、接合資料は存在しない。2号ブロックおよび3号ブロックを分布の主体とする。

3号ブロックにはナイフ形石器1点・楔形石器1点のほか碎片4点が、2号ブロックにはナイフ形石器1点・加工痕ある石器1点のほか碎片2点が、それぞれ存在する。また、3号ブロックではブロックの中央に、2号ブロックではブロックの全域に、本母岩別資料は散漫な状態で分布する。

遺存状態より判断するならば、遺跡外部より石器や剥片が搬入され、若干の二次加工がおこなわれると言える。

母岩別資料・頁岩－1(付図10)

本母岩別資料は総計17点(石核1点・剥片9点・碎片7点)から構成され、接合資料A-47および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。3号ブロックを分布の主体とするほか、76-A-21グリッドに分布する。

3号ブロックには剥片9点・碎片7点が存在する。ブロックには、2ヶ所の集中部(北東側および南西側)が認められるが、本母岩別資料は南西側の集中部に分布し、4㎡ほどの範囲に良好に集中する。76-A-21グリッドには石核1点(第24図57)が存在する。

接合状態および遺存状態より判断するならば、3号ブロックでは石器の製作がおこなわれること、グリッド出土の石核は人為的・意図的な移動であること、は明らかである。

4-7, 出土石器群の分析

1, 検出遺構

A区には、3基の土壙(第4・5図)と4ヶ所の倒木址(第6・7図)が存在する。旧石器時代遺跡において、遺構の検出事例は増加傾向にあるとはいえ、調査事例に比べ、検出事例は極めて少ない。類例に乏しいため、遺構の用途を性格づけることは困難な状況で、縄文時代以降の遺構の構造を参考に、検出遺構の用途をここでは類推しておく。

1号土壙は、A区東側の南側斜面に検出され、土層の堆積状態よりXVII層堆積以後XIV層堆積以前に土壙の形成時期は限定されよう。埋没土層(多量の炭化物粒を含む)の堆積状態や完掘状態は、人為的な所産としての可能性を示す。なお、赤城山西麓ではXV層上面には多量の炭化物が存在し、普遍的な存在であること、人為的な所産というよりも自然現象である可能性が強く、埋没土層中の炭化物はXV層上面の炭化物と因果関係が指摘され、また、規模が著しく大きく、人為的な所産としての可能性を否定する要素も存在し、ここでは、結論を保留しておく。

2号土壙・3号土壙は、A区東側の南側斜面に検出され、ブロック(2号)の北側に位置する。土層の観察は充分ではなく、埋没土層が自然堆積を示すのか否か、明示することはできないが、XVII層堆積以後XIV層堆積以前に土壙の形成時期は限定されよう。XVIII層・XX層をともに掘り込むこと、完掘状態はともに酷似すること、などから人為的な所産として判断される。土壙の時期については、ブロックの形成時期と同一の時期が予想されるけれど、土壙が開口状態にあったのか否か、断定することはできない。用途については、明確ではないが、調査所見では埋没土層の上位から下位へ向かうにしたがってパミスを多く含む傾向が指摘され、「自然堆積状態を示す」との推察が可能で、検出土壙の形状は縄文時代の陥し穴に類似するといえる。この場合、生活址・製作址の周辺に陥し穴が共存するか否か、あるいは、陥し穴と仮定した場合、調査区内には同様な土壙は存在せず、独立状態を示す、などが問題となる。人為的所産との判断には、土壙の形態に疑問はないものの、配置・配列の問題は慎重な検討を要す。旧石器時代・陥穴状土壙の報告事例は、宮城県青葉山遺跡(E地点)の報告・分析がみられるが、類例は少なくそして乏しい。青葉山遺跡E地点では、隅丸長方形の土壙3基が4m～5mの距離を隔て等距離・等間隔に検出され、土壙の長軸は土壙の配列に直行し、検出土壙の配列状態は組織的狩猟法を示唆するという。この報文の中では、宮城県支倉遺跡・千葉県木の根遺跡・静岡県広野北遺跡の土壙を対象に分析し、旧石器時代・陥穴状土壙に3類型を指摘する。勝保沢中ノ山遺跡検出の土壙はATの降灰期前に遡り、最古の検出事例とみられ、土壙の形状は千葉県木の根遺跡検出の土壙に近い。近年の成果によれば、同様な段階の土壙の検出(静岡県三島市初音ヶ原遺跡)も報告され、分布状態や形状は縄文時代「陥し穴」の配列状態や形態と遜色がなく、あたかも旧石器時代の「陥し穴」であるかのような様相を呈す。勝保沢中ノ山遺跡検出の土壙の場合には、土壙の規模や形態は「陥し穴」に酷似する。しかしながら、勝保沢検出の土壙には、生活址・製作址の周辺に土壙が存在するという問題や隣接して検出されたという配置・配列の問題の他に、同種遺構の希少性という問題があり、調査方法の改善(遺構の認識・遺構のスライス調査・科学的分析など)を含め、更に、類例を増加・蓄積しなければならない。

4ヶ所の倒木址は、調査区中央部の尾根上に検出され、土層の堆積状態は、No.1～No.4の倒木址がXIV層(As-BP)降下以前に形成されることを示す。倒木址の存在意義や派生する問題については、すでに言及しており(岩崎 1985)、現在まで報告事例も増加し、地域や時期を問わず検出されており、同種・同様な遺構が今後とも増加することが予想される。これまでの知見では、倒木址は暗色帯に検出される場合が多く、それよ

I 旧石器時代の遺構と遺物

り上位部分(As-BP? As-SPなど火山灰の供給が顕著な時期)には、検出事例が減少する傾向が指摘されよう。なお、No.1～No.4の倒木址の存在は当時の植生の証ではあるけれども、花粉分析による樹種の同定は極めて難しく、下触牛伏遺跡などでは花粉分析を実施しているが、良好な結果は得られていない。

2. 剥片剥離技術(第86図)

A区出土の石器群には65例442点の接合資料が確認され、1例あたり6.8点が接合する。接合資料には原石の状態にまで復元することの可能な資料も多く、また、これまでにない確実な母岩別資料の分類が可能な状況にあり、剥片剥離の実態が明確な状態に扱えられる。

原石の選択；出土資料には、原石の形状が明らかな資料が5例ほど存在する。原石には径20cm、あるいは、径10cmほどの円礫や長さ10cm・幅5cm・高さ5cmほどの長円礫を用いる。黒色頁岩や珪質頁岩など搬入石材について、原石の形状は必ずしも明らかではないが、石器群の主体を占める黒色安山岩や輝緑岩の場合には、遺跡周辺の河床での採集が可能ではある。

原石の分割；集団の保有する技術のなかで石器製作が可能な範囲において原石は選択され、出土資料には集団の許容範囲や石材の性状あるいは遺跡の立地環境などを反映することが容易に推察されよう。A区・出土資料には原石の形状により「原石の分割」工程の有無が存在し、径20cm前後の大形の原石の場合には、分割をおこない、概ね、径10cm前後の円礫と大きさの等しい石核の素材を獲得する。

剥片剥離の展開；剥片剥離は石器の製作を意図し、組織的・体系的におこなわれるものの、原石や石核形状による制約のなかで、厳密には多種多様なバラエティーがみられる。A-1・A-2やA-19・A-20では両者とも分割をおこない、石核素材を獲得するが、A-1やA-2では縦長の剥片を、A-19・A-20では横長の剥片を、連続して作出するなど、相違する形状の剥片の剥離がおこなわれる。この相違については、作出石器と剥片形状とが密接に拘わる石刃石器文化のなかで、「石器の量産」という構造的解釈を与えられることが多いが、石器群には同一母岩に複数の剥離技術が認められるなど混沌とした様相を示し、石器群の過渡の様相や変質が正しく評価しなければならない。接合資料や出土石核より判断するならば、

- a類 単設の平坦な打面より剥片剥離をおこなうもの、A-47・49・57など
- b類 両設の平坦な打面より剥片剥離をおこなうもの、A-1～4など
- c類 90°の打面転移をおこなうもの、A-51・52など
- d類 大形剥片を石核素材とするもの、A-16など

などが石器群には存在する。a類～d類の剥離手法には、分析より石器群の同時性が明らかなこと、a類やb類の剥離手法は石刃技法を技術基盤とする石器群には普遍的な存在であること、などから広義の石刃技法を技術基盤とする石器群における剥離手法の様相を示すとも言えよう。作出石器および素材剥片の形状より、石器群には縦長の剥片を指向する傾向が指摘され、a類やb類には主体的な剥離手法としての評価を、c類やd類には客体的な剥離手法としての評価を、それぞれに与えよう。形状の相違する剥片を作出する4種の剥離手法について、これらが共存することの意義は明らかではないが、c類やd類の剥離手法についてその実態を記述する。90°の打面転移を伴うc類の剥離手法には、同一の打面より連続する剥離作業が存在するなど工程上の連続性が認められ、広義の石刃技法を技術基盤とする石器群の範疇には分類の可能な、充分な要素が存在する。d類の剥離手法には接合資料(A-2～5・A-16・A-21)や石核(42～55)などにはd類の剥離手法が存在するなど、a～c類の剥離手法より作出される大形の剥片を石核の素材とし、広義の石刃技

4. A地点の調査

母岩	接合番号	原石	分割	剥離工程			石核有無	剥片剥離
				初期段階	剥離の展開	最終段階		
黒安1	A-1	○	○				遺存 遺存	Ib類
黒安2	A-2		○				遺存 遺存	Ib類 Id類
黒安3	A-3		-				×	Ib類 Id類
	A-4		-				×	Ib類 Id類
	A-5		-				×	Ia類 Ib類
	A-8		-				×	Ia類
	A-9		○					×
黒安4	A-16	○	×				遺存 遺存	Ic類 Id類
黒安5	A-19		○				遺存	III類
	A-20		○				遺存	II類
	A-23		-				遺存	Id類
黒安6	A-32	○	×				×	Ic類
黒安9	A-39		-				×	Ia類
	A-40		-				×	Ic類
	A-41		-				×	Ia類
黒安10	A-43	×	×				×	II類
黒頁1	A-49		-				×	Ia類
黒頁2	A-50	○	×				遺存	Ia類
黒頁3	A-51		-				×	Ic類
	A-52		-				×	Ic類
黒頁搬	A-57						遺存	Ia類
頁1	A-47		○				×	Ia類
輝緑1	A-66	○	×				遺存	Ic類
輝緑2	A-65	○	×				遺存	Ia類

第86図 剥離工程図(模式図)

I 旧石器時代の遺構と遺物

法を技術基盤としつつ、横長の剥片を主体に作出する。石刃技法の発展段階から推察するならば、既存の剥離体系(横長剥片剥離手法)とは相違する剥離体系(石刃技法)が加わることにより、互いに異なる剥離体系(a～d類の剥離手法)が同一の母岩に存在するという、石刃技法の生成から成立への過渡的様相を示す石器群とすることができる。なお、このほか、礫を分割し、横長の剥片を剥離する剥離手法が存在する(II類)。

技術上の諸属性；多くの場合、大別4種の剥離手法は平坦な打面(自然面ないし剥離面)より剥離作業をおこなない、明確な打面の調整は認められない。同一の母岩には自然面打面ないし剥離面打面の両者が混在するが、平坦な打面が得られない場合にのみ打面の作出をおこなう。d類の剥離手法を除き、縦長の剥片を作出することが重視され、打点を左右に振り、同一の打面より連続して剥離作業をおこなう。石核には部分的な側縁調整や粗い頭部調整が認められるが、明確な打面調整や打面再生は顕著には認められない。出土石核や接合剥片の状態より、作業面の大きさは長さ8～10cm・幅8～10cmほどに限定されるようである。剥離作業は、より広く剥離の対象部分を確保するよう打点が選択され、形状の整う薄い剥片を量産すると評価される。

3. 出土石器(第87図)

総計1,772点の出土石器は明確な出土状態を示し、3ヶ所のブロックを形成する。各々のブロックには接合資料や同一の母岩が存在するなど石器群の同時性は明らかで、明瞭であるがためブロックの構造を分析するうえでの良好な資料と言えよう。

ナイフ形石器 総計20点が1号ブロックを除く各々のブロックから出土しており、剥片を縦位に用いるか、横位に用いるか、により二分される。ナイフ形石器の分類については、県内出土のAT降灰期前の石器群を分析する中で呈示しており、「AT降灰期前の石器群—県内出土石器群の分析—」(岩崎 1988年)を参照されたい。

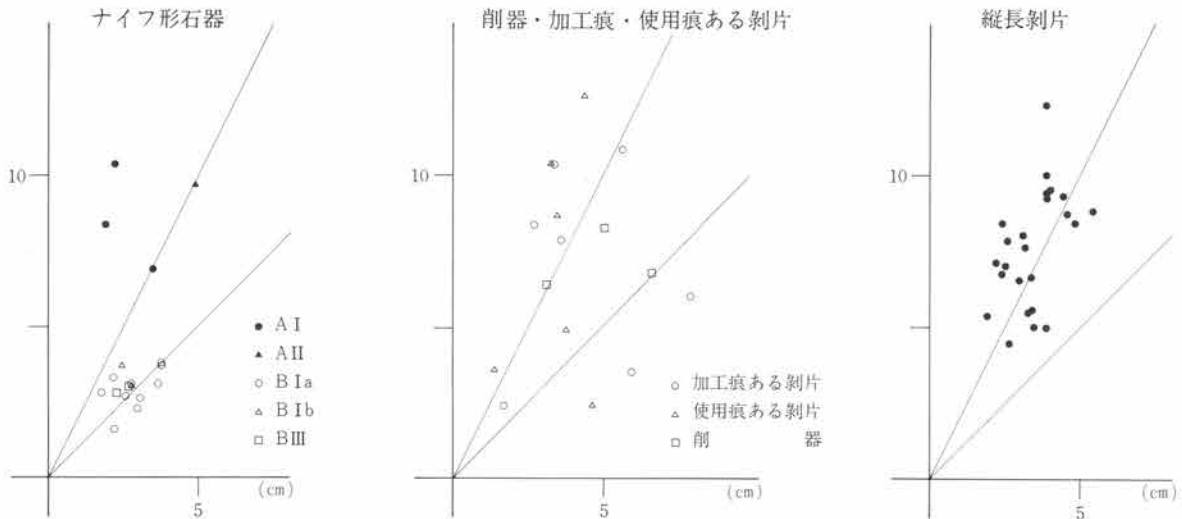
A群 縦長の剥片を縦位使用し、調整加工を施すことにより作出される一群。(1～5)

B群 縦長の剥片を横位使用し、調整加工を施すことにより作出される一群。(6～20)

ナイフ形石器A群には剥片の上下両端部分に調整加工が施されることが多く、「基部加工のナイフ形石器」が主体を占めるほか、「一側縁加工のナイフ形石器」が組成する。「二側縁加工のナイフ形石器」の組成は、現状では確認されない。素材剥片の形状は、基部加工のナイフ形石器には左右の側縁が平行する形状の整った縦長の剥片を、一側縁加工のナイフ形石器には幅広の大形剥片を、それぞれ用いている。裏面側から表面側への調整加工を施し、希に、稜上の調整加工(3)が施されるようである。

ナイフ形石器B群には剥片を横位に使用し、左右両端に調整加工が施されることが多く、台形状(I a類)や切出状(I b類)を呈する石器が主体を占めるほか、剥片の先端部や側縁部に調整加工を施す「立野ヶ原系ナイフ形石器」に類似する石器(III類)が存在する。平坦剥離手法を裏面基部に施すII類のナイフ形石器は、現状では確認されない。素材剥片の形状は、縦長の剥片ばかりではなく幅広の剥片を用いることもまた多い。調整加工は、裏面側から表面側への調整加工が施されるものが主体を占め、表面側から裏面側への調整加工が施されるもの(10・12・16・18)、表裏両面から調整加工が施されるもの(11)などがみられ、概ね、急峻な調整加工が施されるようである。表面側から裏面側への調整加工には急峻な調整加工が施されるものと平坦な調整加工が施されるものがみられる。

ナイフ形石器A群の1とB群の6・7・13・15は母岩別資料・黒色安山岩-3に分類され、同一の母岩よりA群とB群が作出され、両者が共存し、ナイフ形石器(A群・B群)が同一の母岩・同一の剥離手法により



第87図 石器の長幅比(A区)

作出される。両群とも縦長の剥片を用いてはいるが、折断手法の有無が存在するため、A群に比べB群は、素材剥片の選択にはより柔軟な状態にある。また、調整加工の在り方はより発達した状態を示す状況にあるが、浅く粗い調整加工の施される事例(1)のほか、表裏両面あるいは表面側から裏面側への粗い調整加工を施す事例が認められるなど、石器群の過渡的な様相を示す。

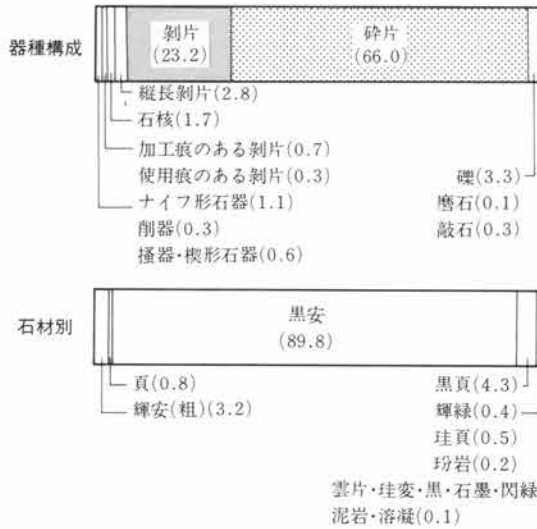
楔形石器 1点が出土している。上下両端の対向する剥離が認められず、必ずしも明らかではないが、石器上端の表裏両面には石器の下端へ向かう微細な剥離が認められ、器種を認定した。3号ブロック出土の楔形石器(29)と2号ブロック出土の加工痕ある剥片(24)には、明確ではないため図示はしていないが、接合関係が存在する可能性が大きい。現状では、使用ないし製作により生じる碎片の分布が両地点ともにみられ、両地点の密接な関係が窺われる。

削器・搔器 5点が出土している。削器の場合、幅広の縦長剥片を用い、石器の刃部は側縁部分に位置する。表面側から裏面側への調整加工が施され、素材剥片の形状を変えずに石器の刃部が作出されるような、剥片を選択している。「表面側から裏面側」へ向け施す、この加工方法は前代の伝統を引き継ぐ「刃潰し加工」技術の確立への石器群の変質を反映する。搔器の場合、素材剥片の形状や調整加工などには、ナイフ形石器・B群と同様な属性よりなる。明確には判断することができないが、剥片の上下両端の調整加工のうち、下端の調整加工にはやや趣の相違する丁寧な調整加工を用い、エッジの整った機能部が作出される。

加工痕ある剥片・使用痕ある剥片 19点が出土している。加工痕ある剥片・使用痕ある剥片には、多種多様な形状の剥片が用いられるが、削器や搔器と同様に、素材剥片の形状を変えずに石器の機能部を確保する形状の剥片を選択する。長幅比2:1前後を示す縦長の剥片、長幅比1:2前後を示す横長の剥片が用いられるが、縦長の剥片形状を用いることが多い。

I 旧石器時代の遺構と遺物

A区(1772点)



第 88 図 器種構成と石器石材(A区)

縦長剥片 49点が出土している。長さ 5 cm~10 cm・幅 3 cm~5 cm、長幅比 2 : 1 前後を示し、類似する値を示すナイフ形石器(A群)や加工痕ある剥片・使用痕ある剥片などの素材剥片として用いられている。また、上述の計測値は出土石核や接合資料より得られる計測値に一致するなど、石器群の同時性を検証する判断材料を提供している。

4. ブロックの構造

a. 石器と石材(第88図)

A区・出土石器には、遺跡周辺の地域で採集が可能な黒色安山岩や輝緑岩など在地系石材を主体に、黒色頁岩・珪質頁岩や信州系の黒曜石などをはじめ、14種に及ぶ多種多様な石材からなる。在地系石材(黒色安山岩)が主体を占める点では、赤

城山の南麓や西麓に立地し、暗色帯に出土する石器群と同様な傾向を示す。なお、珪質変岩・石墨片岩・雲母片岩など、わずかながら存在する資料の場合、石器と石材の対応関係については明確ではない。

b. 母岩別資料の分布と接合

石器群は22種に及ぶ母岩別資料からなり、これらが3ヶ所のブロックを構成する。母岩別資料には、上述した工程上の類型化が可能であるが、ここでは、分布状態や接合状態の検討をおこない、ブロックの形成や構造を明らかにしたい。

分布状態；付図4~10に明らかなように、母岩別資料には単一のブロックに分布する一群と複数のブロックに分布する一群に大別され、以下の類型が抽出される。

2号ブロックにのみ存在する母岩別資料、黒安-4(A-16)、黒安-9(A-29・A-40・A-41)、黒安-10(A-43)、黒頁-6

3号ブロックにのみ存在する母岩別資料、黒頁-1(A-49)、黒頁-2(A-50)、黒頁-4・8、輝緑-1(A-66)、輝緑-2(A-65)

2号ブロックを主体に、他ブロックにも存在する母岩別資料、黒安-2(A-2)、黒安-3(A-3~5・8・9)、黒安-6(A-32)、黒頁-3(A-51・52)

3号ブロックを主体に、他ブロックにも存在する母岩別資料、黒安-1(A-1)、黒安-5(A-19・20・23)、黒安-7、黒頁-7、頁岩-1(A-47)

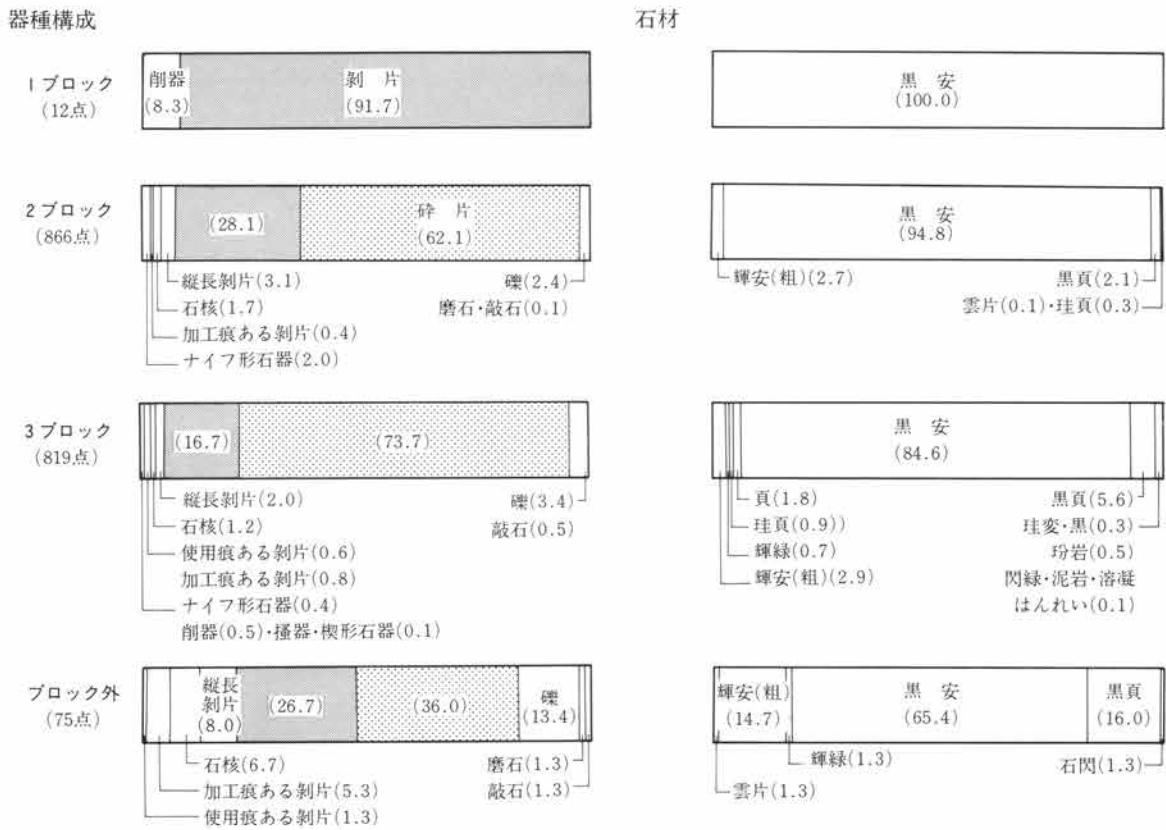
1号ブロックを除く各ブロックに存在する母岩別資料、黒頁-5、珪頁-1

接合状態；出土石器には、66例に及ぶ接合資料が存在する。ブロック内での接合資料59例・ブロック間での接合資料7例が確認されている。

1-2号ブロックで接合する資料2例、黒安-3(A-5・A-9)

1-3号ブロックで接合する資料1例、黒安-3(A-20)

2-3号ブロックで接合する資料4例、黒安-1(A-1)、黒頁-3(A-52)、黒頁(A-53・A-60)



第89図 器種構成と石器石材(ブロック別)

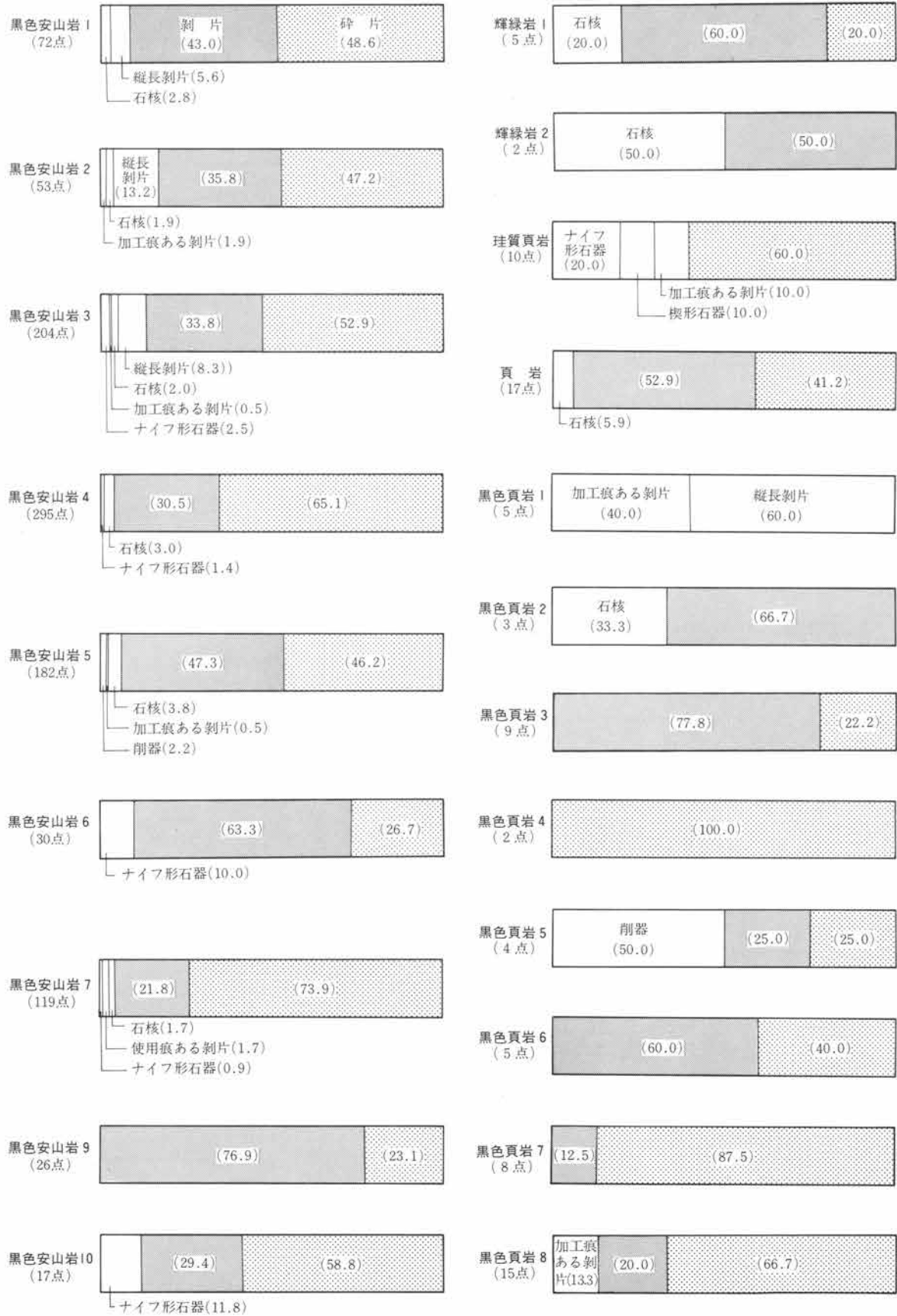
1号ブロックを除き、2号ブロックおよび3号ブロックでは、黒色安山岩には「一方のブロックを主、一方のブロックを従」、黒色頁岩の場合には均等な状態でブロックに分布する傾向がみられる。

同一の母岩ないし接合資料の分布というなかで、以上の傾向は10mの距離を隔て存在する2号ブロック・3号ブロックには石材の消費や石器の製作など対等な関係が存在すること、資料数量は決して多くはないが、50mの距離を隔て存在する1号ブロックでは、2号ブロックおよび3号ブロックより石器や剥片の消費地点という互いに異なる関係が存在すること、の2点が指摘されよう。

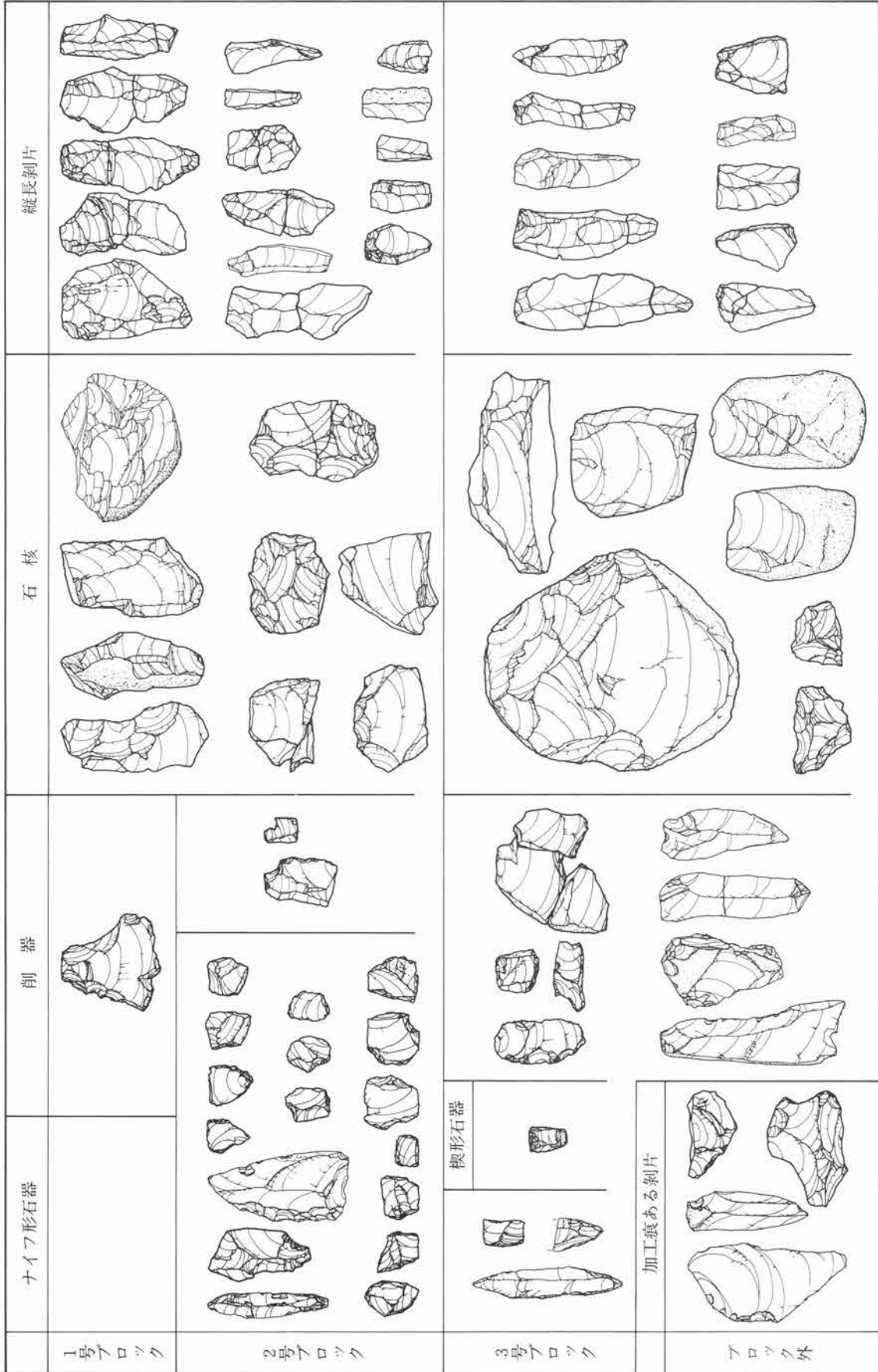
c、ブロックと器種組成(第89～91図)

ブロックと器種組成の関係については、石器の分布状態が良好であるため明確な状態に把握され、特徴的な片寄りがブロックにはみられる。母岩の分布や接合状態より、対等な関係が成り立つ2号ブロックおよび3号ブロックには黒色頁岩製や珪質頁岩製のナイフ形石器A群・B群を組成する。これらについては、遺跡外部より搬入されることが明らかであり、ブロックの対等な関係を示す。同様な状態は縦長剥片の組成状況にも明らかである。このほか、各々のブロックには石器の集中部分が2ヶ所からなること、800点前後の石器からなること、などの類似性が認められる。以上の類似性とは対照的に、ブロック内部での石器の製作には明確な相違を示す。第一次生産具であるナイフ形石器は2号ブロックを、削器や搔器、加工痕や使用痕ある剥片などの加工具は3号ブロックを、主体にそれぞれ作出される、などの対照的な在り方を示す。一方では、1号ブロックでは、資料規模に乏しいため明らかでないが、ブロック内部での主体的な剥片剥離工程が存在

I 旧石器時代の遺構と遺物

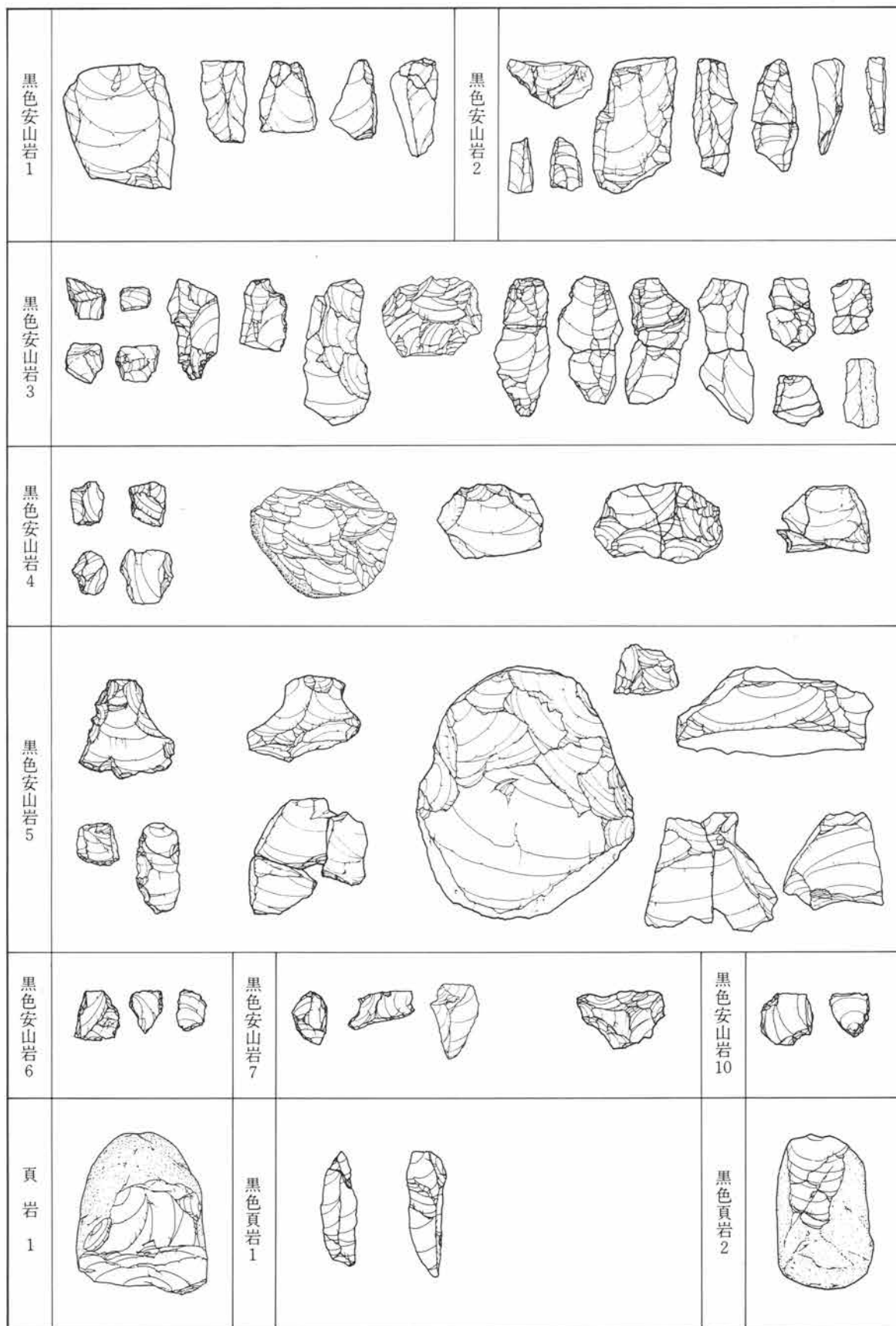


第90図 母岩別資料と器種構成(A区)

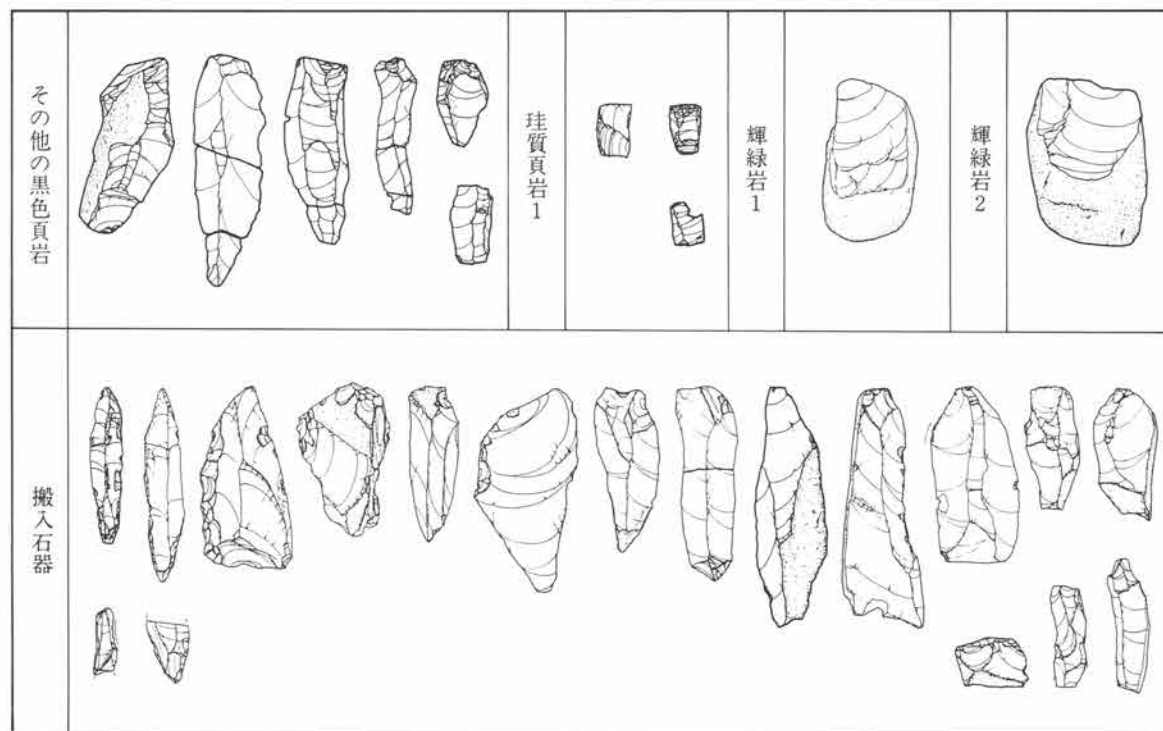


第91図 ブロックと器種構成

I 旧石器時代の遺構と遺物



第 92 図 母岩と器種構成(1)



第93図 母岩と器種構成(2)

しないことや、2号ブロックおよび3号ブロックから石器や剥片が搬入されること、など消費地点あるいは使用空間ともいうべき状況を示す。

以上のように、規模や出土状態、および、石材消費や石器製作の類似する2号ブロック・3号ブロック、これとは著しく異なる様相を示す1号ブロック、の二群にブロックは扱えられる。

d, 母岩別資料と器種組成(第92・93図)

石器群は22種類に及ぶ母岩別資料からなる。1,080点(出土総数の60%)がこれらの母岩別資料に分類され、原石の状態にまで復元される接合資料も多い。このため、厳密な状態での母岩の分類が可能で、石器石材と器種との対応関係について、以下の類型を抽出することができる。

- | | |
|----------------------|-----------------------------|
| 石核・剥片・碎片からなる母岩別資料 | (黒色安山岩1～5・7、黒色頁岩2・8、輝緑岩1・2) |
| 特定の石器を含む母岩別資料 | (黒色安山岩3～5・7) |
| 剥片・碎片からなる母岩別資料 | (黒色安山岩8・9、黒色頁岩3・4・6・7、頁岩1) |
| 特定の石器・剥片・碎片からなる母岩別資料 | (黒色安山岩6・10、黒色頁岩1・5) |
| 特定の石器・碎片からなる母岩別資料 | (黒色頁岩・珪質頁岩・黒曜石など) |

石器製作には、特定の石材が特定の石器に用いられる場合や特定の石材が多種多様な石器器種に用いられる場合など、地域や時期の相違あるいは普遍性と地域性がみられるが、本遺跡出土石器群の場合には石器石材や母岩の相違にかかわらず、等質な状態で石器が作出され、同一の技術基盤を背景に存在することを示す。ただ、黒色安山岩-1(A-1)や黒色安山岩-5(A-19・A-20)では、同様な形状の原石を用い、互いに分割をおこない石核素材が作出されるにもかかわらず、黒色安山岩-1では縦長剥片を主体に、黒色安山岩-5では横長剥片を主体に、作出石器の形状に近い形状の剥片を剥離する互いに異なる剥離技術が存在する。

5, B地点の調査

5-1, 概要

B区では、総計1,867点の石器が出土している。調査区域内には山麓原形面の凹凸を反映した3ヶ所の尾根状の高まりがある。B区出土の石器は、このうち中央の尾根に検出されている。石器群は尾根上の平坦部や南側斜面の3地点(B-I、B-II、B-III)から検出され、このうち、B-III区に最も多く石器が出土している。B-I区には4ヶ所のブロック(1号~4号)が、B-III区には8ヶ所のブロックが、およそ25m前後の距離を隔て存在する。石器はXV層~XVII層に出土するが、XVI層に最も多く出土している。石器の分布は、台地の先端部分に広がるのが予想されよう。

なお、B-II区には4点の石器(加工痕のある石器をはじめ、3点の剥片)が出土しているが、図面の記載がなくその出土位置を明示することができない。

出土した石器の石材は、全体の70%を黒色安山岩が占め、黒色頁岩(全体の18%)がこれに次ぎ、チャートや珪質変岩・頁岩などがわずかではあるがみられ、A区出土の石器と同様な傾向を示す。石器群には多量の剥片(全体の40%)や、碎片(全体の42%)が出土しており、両者で全体の80%を越す。石器器種の組成は単純で、ナイフ形石器や削器・搔器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片が出土している。出土した石器のうち、段階を示す示準的存在であるナイフ形石器は、A群の存在も予想されるものの、素材剥片を横位に使用する台形状を呈するナイフ形石器・B群のほかは確認されていない。ナイフ形石器・B群は2点が確認され、いずれもB群I類に分類されるものであるが、B群についても組成内容は資料数量の不足から、その実態は必ずしも明らかではない。調整加工は裏面側から表面側へ向けて急峻な調整加工を施し、「ブランディング」加工が完成した状態を示す一方で、削器などには表面側から裏面側へ向け、浅く粗い調整加工を施す場合が多く、相違する。なお、削器や加工痕ある剥片・使用痕ある剥片などの加工具は3号ブロックや6号ブロック・7号ブロックに多く組成しており、分布上の偏在性が指摘されよう。接合資料により確認される剥片剥離には、90°打面を転移し、剥片を作出する剥離手法を主体に、同一の打面より剥離をおこなう剥離手法が存在する。各々の剥離手法には、打点が打面の周辺を廻る求心的剥離をおこなう場合と、打点を左右に振りながら後退する場合などの多様性がみられるほか、大形の剥片を石核素材に剥離をおこなう剥離手法が存在する。剥片剥離は以上の多種多様な剥離手法を用い、剥片の剥離をおこなうが、広義の石刃技法を技術基盤として作出される縦長剥片は資料総数が極めて少なく、客体的な存在といえよう。打面調整や打面再生など技術上の類似性は認められるとはいえ、このような状態はA区出土の石器群とは著しく異なる。接合資料は118例513点が確認され、ブロック内で接合する資料ばかりでなく、ブロック間で接合する資料も多く存在する。母岩別資料はB-III区を主体に総計14種が確認され、6号ブロックや7号ブロックに主体的な分布域を形成するほか、周辺ブロックに客体的な分布域を形成している。

調査段階の所見では、石器の出土状態より文化層(石器群)が重複する可能性が指摘されてはいたが、接合資料や母岩別資料の分析を行う中で、接合関係や石器石材の分布状態には文化層(石器群)を区分するだけの根拠がなく、文化層(石器群)の重複する可能性は否定されよう。

遺構関係ではA区検出の土壌のような「掘り込み」の明確な遺構は存在せず、12ヶ所のブロックのほかにながら大形礫や小形礫の分布がみられるにすぎない。大形礫や小形礫の分布は、「配石」や「礫群」の分布状態とは異なることから、ここでは名称を敢えて付さず、使用痕や割れ面の状態から類型区分した。その結果、

5. B地点の調査

類型Aには「台石」や「磨石」としての機能が推察され、類型Bには人為的分割ないしは剥離行為が、また、「礫群」と同様な欠損状態を示す類型Cには火処を示唆することが、それぞれ想定されるという結論を得た。

(石坂)

類型B					類型C						
ブロック	石 材			総重量 (g)	平均重量 (g)	ブロック	石 材			総重量 (g)	平均重量 (g)
	総数	輝安	その他				総数	輝安	その他		
1	4	4		944.50	236.13	5	8	8		474.03	59.25
2	1	1		216.60	216.60	6	19	19		1,263.76	66.51
6	17	17		1,140.23	67.07	7	8	4	4	1,717.85	214.73
7	3	3		4,378.80	1,459.60	9	1	1		121.80	121.80
10	2	2		1,493.70	746.85	11	1	1		68.65	68.65
12	1	1		4.79	4.79	12	4	4		1,165.01	291.25
外	1	1		185.80	185.80	外	1	1		185.90	185.90

第2表 礫石器一覧表・石材と重量

	ナイフ 形石器	削器	彫器	掻器	楔形 石器	加工痕 有剥片	使用痕 有剥片	石核	縦長 剥片	剥片	碎片	礫	磨石	敲石	台石	合 計
1ブロック							1			3		5	1		2	12
2ブロック		1			2	3	1	1		11	13	2				34
3ブロック		6			1	4	7	7	2	128	190	6	2	2	1	356
4ブロック								2	2	6	1					11
5ブロック								2		26	15	10				53
6ブロック	2	6				10	5	12		179	153	61			1	429
7ブロック		4				4	1	7	2	163	163	26	3	4	1	378
8ブロック										4	6	3		1		14
9ブロック						5		4	1	60	70	6				146
10ブロック					1				1	12	11	4			1	30
11ブロック								4		71	69	9				153
12ブロック						2		4		46	23	9	1	1		86
ブロック外		2	1		1	3	1	2	2	44	83	22	1	3		165
合 計	2	19	1		5	31	16	45	10	753	797	163	8	11	6	1,867

第3表 ブロックと器種組成 (B区)

5-2, 礫の分布(第94~96図)

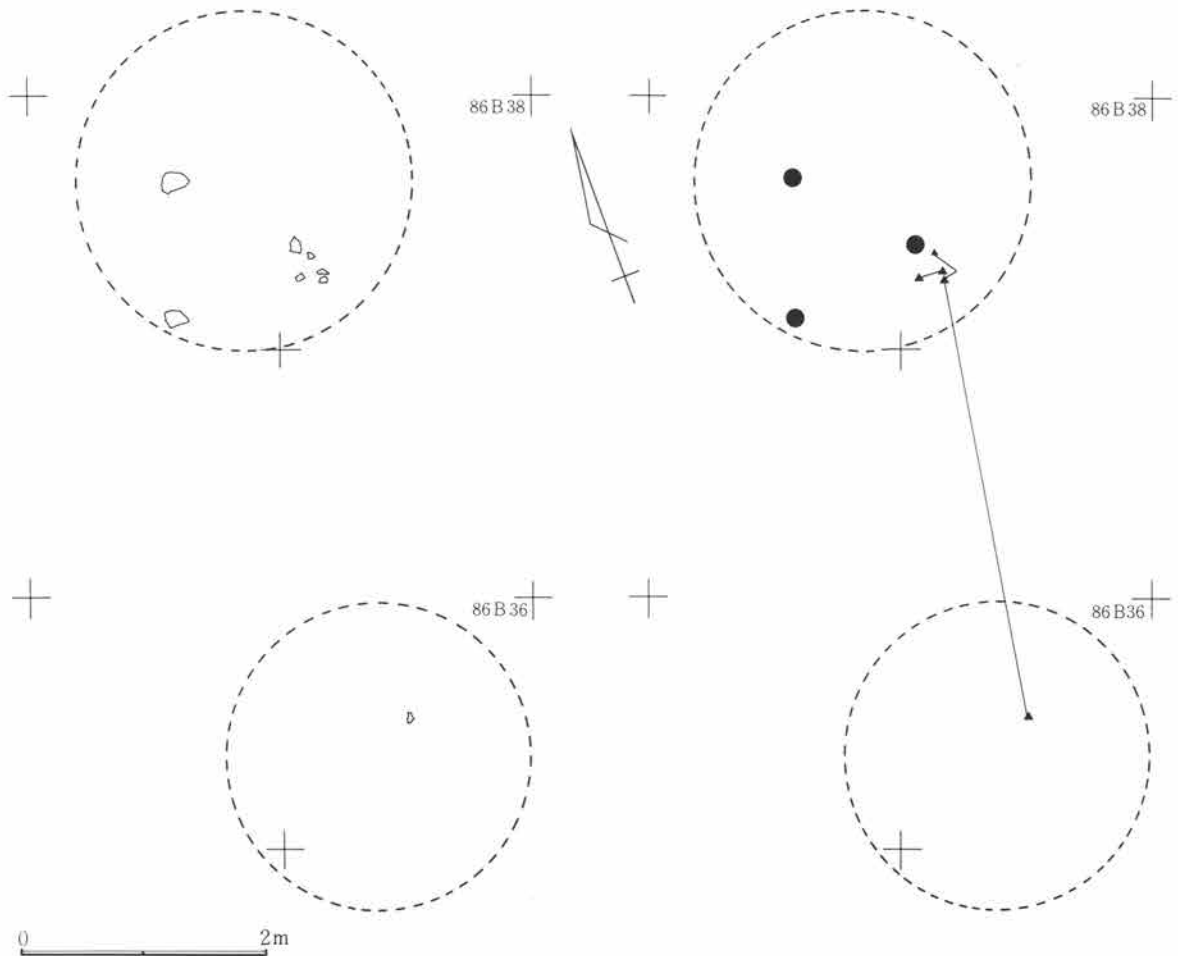
総計160点の礫のうちの15例の接合資料を含む74点の礫には、出土状態および使用痕跡などから明らかに人為的所産としての遺物と認められる。これらには亜角礫や輝石安山岩・粗粒(9例27点の接合資料を含む41点)が用いられる場合や、円礫が用いられる場合(36点)が認められる。前者の礫の場合には山麓斜面に、後者の礫の場合には河床に、それぞれ存在し、遺跡周辺より容易に採集が可能である。礫を構成する諸属性にもとづき、以下の類型により分類される。

類型A；円礫あるいは亜角礫を素材とする。礫重量は1,000gを越え、3,000g前後の礫が多く用いられる。わずかながら打撃痕や摩耗痕が認められる。

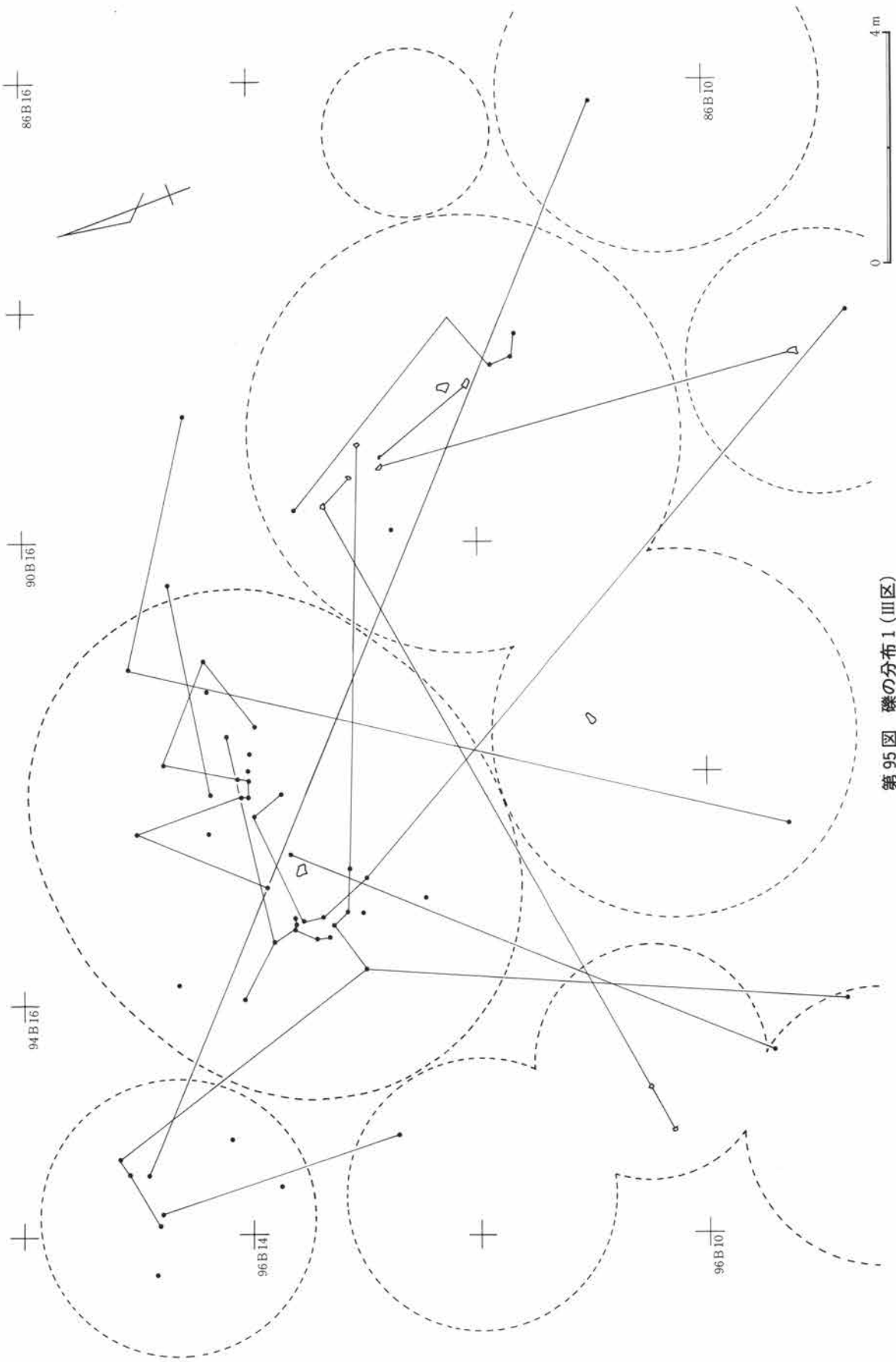
類型B；円礫あるいは亜角礫を素材とする。600g前後あるいは1,500g前後の礫が多く用いられるほか、4,000gを越える礫が存在する。接合事例が多く確認され、接合により完形状態に復元される。割れ面の状態は意図的な分割を示唆する。

類型C；円礫あるいは亜角礫を素材とする。接合により完形状態に復元される資料が少なく、明確ではないが、1,000gを越える礫が用いられることは少なく、500g未満の礫が多く用いられるであろうことが推察される。割れ面の状態は凹凸が激しく、礫群・構成礫と同様な状態を示す。

類型Aは4ヶ所のブロックに存在し、総計6点が出土している。1号ブロックには輝石安山岩(粗粒)が用

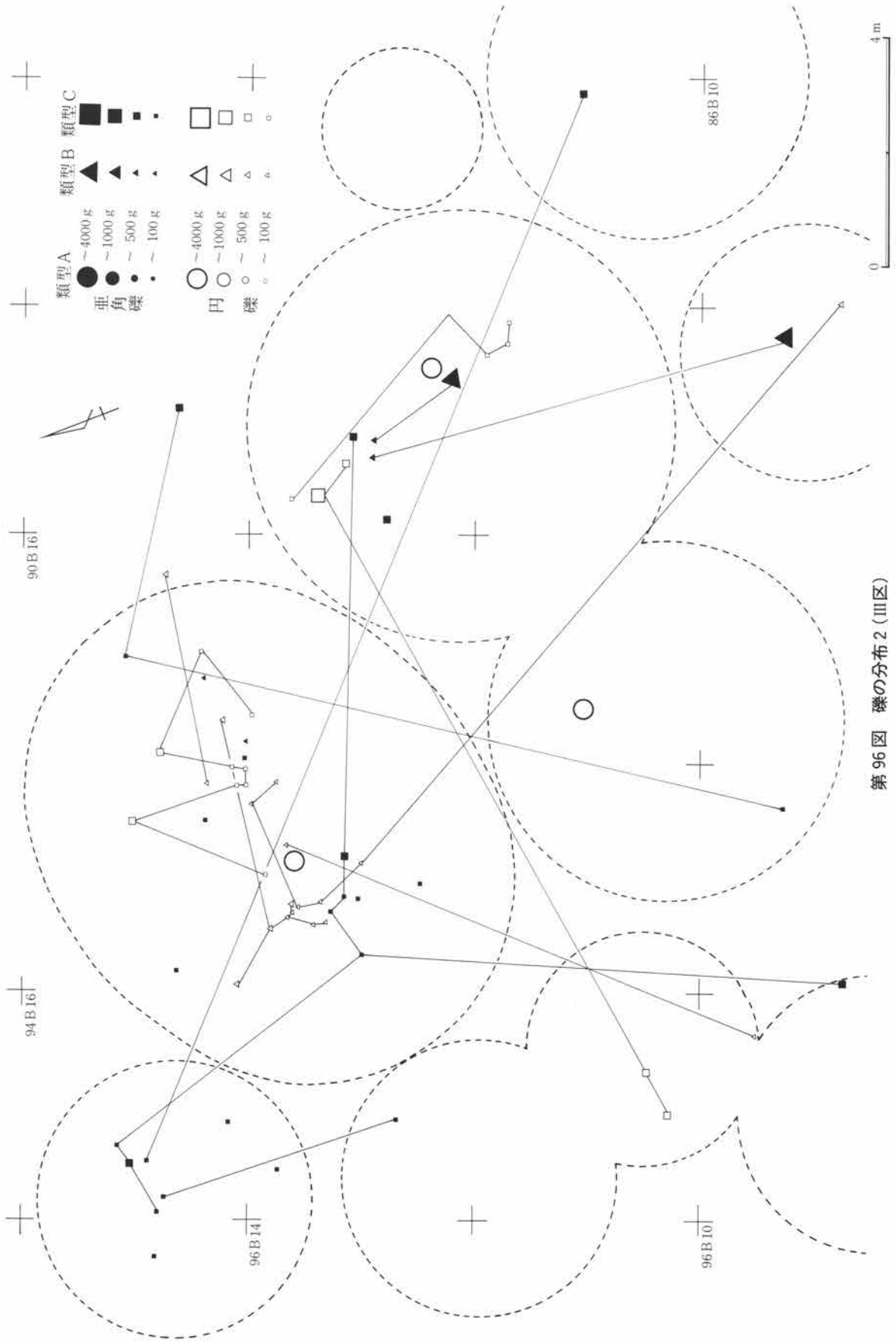


第94図 礫の分布(I区)



第95図 礫の分布1(Ⅲ区)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第96図 石の分布2 (III区)

いられ、3点をブロックに保有する(第94図)。礫重量はそれぞれ2,390g・3,190g・6,100gを測り、礫形状は表裏・両面に平坦面が存在する直角礫(完形)を用いる。いずれも明瞭ではないが、平坦面には打撃痕や摩耗痕が部分的に認められる。他の3ヶ所ではそれぞれ灰色安山岩・1点をブロックに保有する(第95・96図)。6号ブロックには灰色安山岩・1点がブロックの中央付近に出土する。礫重量は3,290gを測り、完形の偏平礫を用いる。礫面には打撃痕が認められる。7号ブロックには灰色安山岩・1点が出土する。礫重量は2,620gを測り、完形の偏平礫を用いる。礫面には摩耗痕が認められる。11号ブロックには灰色安山岩・1点が出土する。礫重量は2,120gを測り、完形の偏平礫を用いる。明瞭な使用痕は認められない。

類型Bは6ヶ所のブロックに存在し、9例36点の接合資料を含む38点が出土している。B-I区(第94図)では1号ブロックに、B-III区(第95・96図)では5・6・7のブロックに、分布の主体が認められる。接合資料はブロック内で完結する傾向が指摘されるが、接合資料B-9(輝石安山岩・粗粒)や接合資料47・48・49(輝石安山岩・細粒、同一母岩)など複数のブロックに存在し、母岩の共有ないし母岩の移動が推察されるものも存在する。接合により完形状態に還元されるが、600g前後の礫2例・1,500g前後の礫2例・4,000g前後の礫1例が用いられる。明瞭な使用痕は認められない。なお、割れ面には明瞭な打撃痕が認められ、そこには、意図的な分割あるいは剥離行為が認められる。

類型Cは6ヶ所のブロックに存在し、6例24点の接合資料を含む33点が出土している。B-III区にのみ検出され、分布の主体は5～7・12の4ヶ所のブロックにある。接合資料はブロック内で完結する傾向が認められるが、接合資料B-1～3・5は複数のブロックに存在し、母岩の共有あるいは母岩の移動が推察されるものも存在する。接合により完形の状態に還元される資料は少なく、100g～200gの礫が多く用いられる。割れ面には著しい凹凸や剥落が認められる。類型Cの出土する周辺には火処の存在が想定されるが、礫の出土状態は散漫である。

輝石安山岩(粗粒)は赤城山の火山活動に由来する火山性噴出物であるが、酸化により赤みを帯びるといふ石材性状を有す。そのため、受熱の有無を表皮の状態より判断することは困難である。B-I・III区では、いわゆる礫群と呼称される礫の分布状態は認められないが、出土状態や使用痕跡などから人為的な所産としての分布状態を示し、各々の機能は以下の如く位置づけられよう。類型Bの場合、意図的な分割がおこなわれることの意義を明らかにしえないが、類型Aは台石や磨石として、類型Cは火処の存在を間接的に示すものとして、評価することが可能である。なお、3号ブロックには、3,000gを越える大形礫(346・河床礫)が出土している。器体の中央付近で欠損するが、類型Aに分類される可能性がある。

5-3. 石器の分布

B区では、丘陵性台地の中央部(B-I区、PL20)に4ヶ所、丘陵性台地の南側緩斜面(B-III、PL19)に8ヶ所、の石器ブロックが確認されている。互いに隣接し分布するため、ブロックは明瞭ではなく、とりわけ、B-III区ではその傾向が著しい。一次調査では、工事工程の都合により側道部分に調査が限定され、十分な試掘調査をおこなうことができなかったが、二次調査では、十分な試掘をおこなうことができた。その結果、広範な石器の分布が確認され、調査区西側の台地先端部に石器の分布が及ぶこととさえ予想される。石器の分布状態(付図3)より判断するならば、なお若干、石器群の分布域は区域外へ及ぶということが予想され、石器群の分布域を明瞭に把握しえないのが現状といえようか。石器群は3層(XV層～XVII層)に互り出土し、XVI層にもっとも多く出土する。石器群(文化層)の重複が調査所見より指摘されていたが、接合関

I 旧石器時代の遺構と遺物

係や母岩の分析の結果、石器群(文化層)の重複を示す状況は窺えず、単位的な石器群であることが明らかである。また、B-II区では加工痕ある石器1点(第115図180)など総計4点が出土しているが、図面の記載がなく、出土位置を明示しえなかった。

1号ブロック(第97図、P L20)

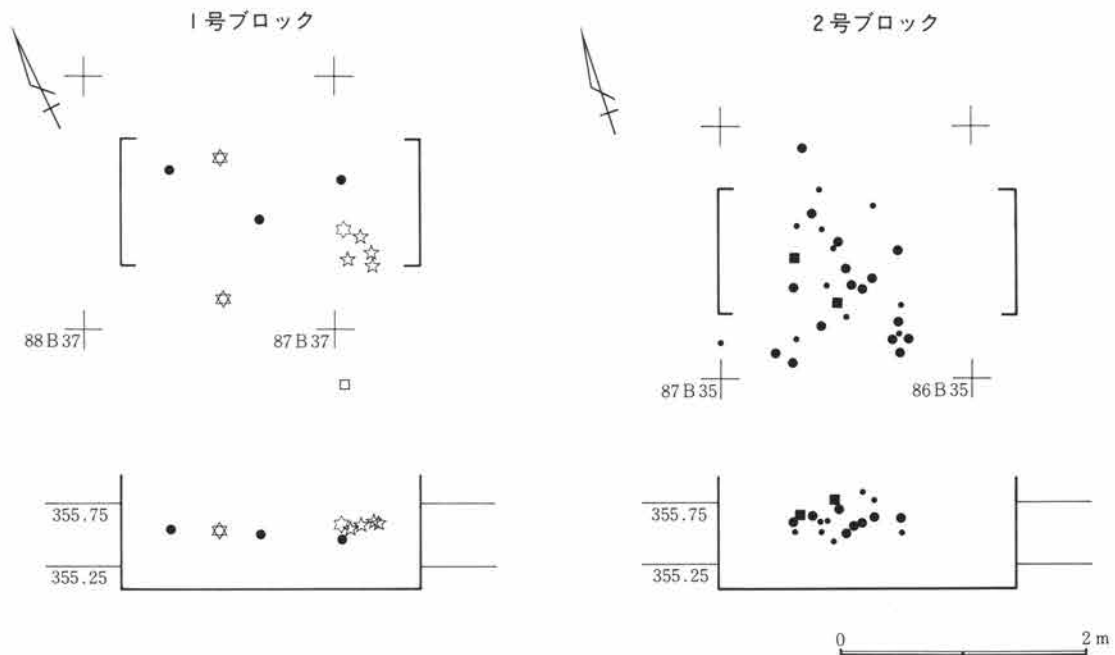
本ブロックは86・87-B-38グリッドに位置する。台地中央に検出され、隣接する2号ブロックとはおよそ4mの距離を隔てる。ブロックは1.3㎡ほどの範囲(長軸2.2m・短軸0.8m)に分布し、散漫な分布状況を示す。ブロックは概ね楕円形状を呈す。石器はXVI層より出土し、およそ15cmの高低差を示すが、XVI層中位にもっとも多く出土している。

ブロックは総計12点の石器が出土している。使用痕ある剥片1点・剥片3点・礫8点(磨石1点・台石2点を含む)が組成し、石器の製作址の様相はみられない。石器石材は黒色安山岩2点・黒色頁岩1点・チャート1点・輝石安山岩(粗粒)8点からなる。石器の接合は2例が確認され、その内訳はブロック内で接合するもの1例(B-11)、ブロック間で接合するもの1例(B-10)、である。

2号ブロック(第97図)

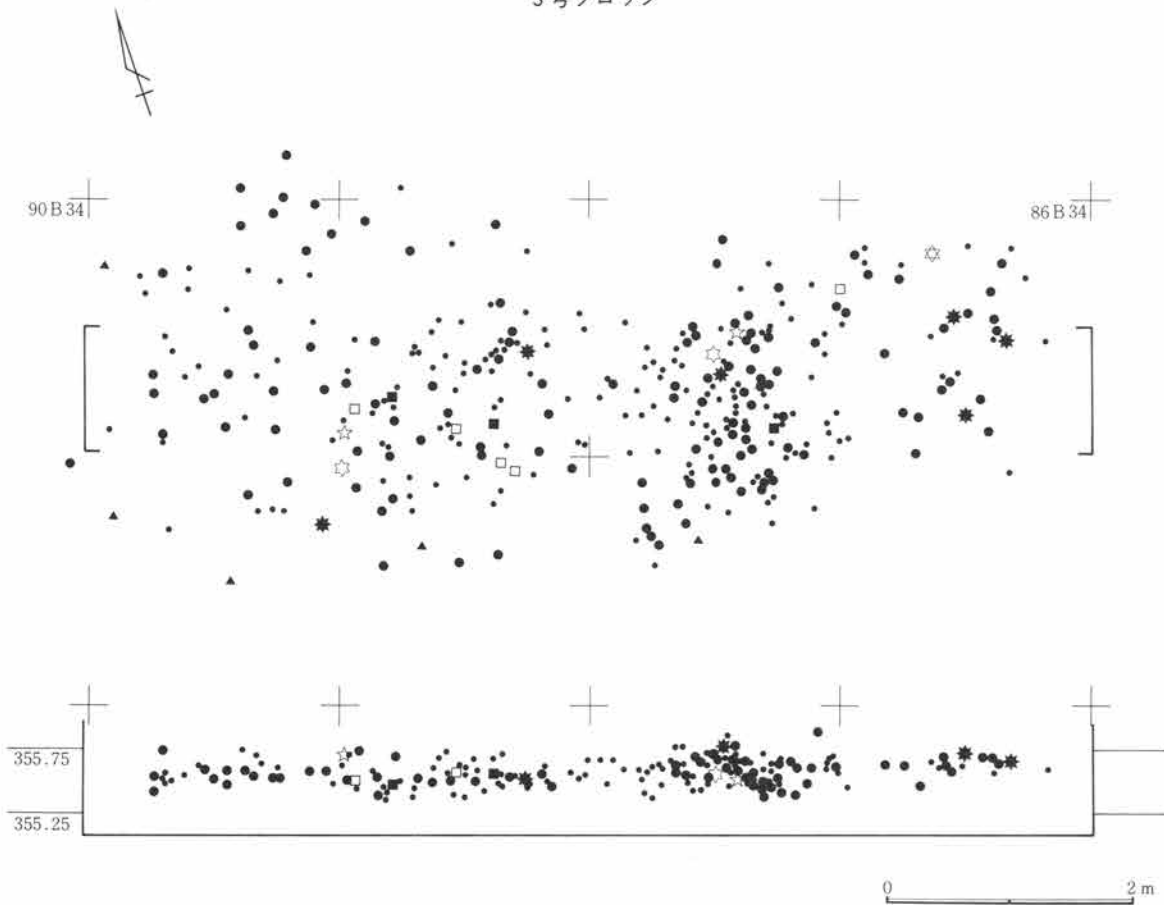
本ブロックは86-B-36グリッドに位置する。台地中央よりやや南側の緩斜面に検出され、隣接する3号ブロックとはおよそ2mの距離を隔てる。ブロックは2.4㎡ほどの範囲(長軸2.4m・短軸1.4m)に分布する。ブロックは明瞭であり、概ね楕円形状に分布する。石器はXV層下位よりXVII層上位にかけて出土し、およそ45cmの高低差を示すが、XVI層中位にもっとも多く出土している。

ブロックは総計34点の石器が出土している。削器1点・楔形石器2点・加工痕ある剥片3点・使用痕ある剥片1点・剥片11点・碎片13点・礫2点が組成し、石器の製作址の様相はみられない。石器石材は黒色安山岩25点・黒色頁岩7点・輝石安山岩(粗粒)2点からなる。石器の接合は6例が確認され、その内訳はブロック内で接合するもの4例(B-29・34・51・62)、ブロック間で接合するもの1例(B-10)、単独に出土する



第97図 石器の分布1(1号・2号ブロック)

3号ブロック



第98図 石器の分布2(3号ブロック)

石器と接合するもの1例(B-52)、である。

3号ブロック(第98図、P L20)

本ブロックは86・87・88・89-B-33・34グリッドに位置する。台地中央よりやや南側の緩斜面に検出され、隣接する4号ブロックとはおよそ2.5mの距離を隔てる。ブロックは24.6m²ほどの範囲(長軸8.0m・短軸3.8m)に分布する。ブロックは明瞭ではあるが、87-B-34グリッド付近(東群)および88-B-34グリッド付近(西群)の2ヶ所に石器の集中部が認められる。西群に比較し、東群にはより集中し分布する傾向が強い。石器はXV層下位からXVII下位にかけて出土し、およそ60cmの高低差を示すが、XVI層中位にもっとも多く出土している。

ブロックは総計356点の石器が出土している。削器6点・楔形石器1点・加工痕ある剥片4点・使用痕ある剥片7点・石核7点・剥片130点(縦長剥片2点を含む)・碎片190点・礫11点(磨石2点・台石1点・敲石2点を含む)が組成し、石器の製作址の様相を示す。石器石材は黒色安山岩322点・黒色頁岩17点・輝石安山岩(粗粒)8点・輝緑岩4点・砂岩2点・石英閃緑岩2点・閃緑岩1点からなる。石器の接合は21例が確認され、その内訳はブロック内で接合するもの17例(B-4・24・25・50・53・54・56・57・61・80・82・86・90・95・100・103・109・110)、単独に出土する石器と接合するもの4例(B-55・58・59・63)、である。

4号ブロック(第99図)

本ブロックは91-B-33グリッドに位置する。ブロックは0.8m²ほどの範囲(長軸1.4m・短軸0.6m)に分

I 旧石器時代の遺構と遺物



第99図 石器の分布3(4号・5号ブロック)

布し、散漫な分布状況を示す。ブロックは概ね楕円形状を呈する。散漫な分布状況を示す。石器はXVI層より出土し、およそ35cmの高低差を示すが、XVI層中位にもっとも多く出土している。

ブロックは総計11点の石器が出土している。石核2点・剥片8点(縦長剥片2点を含む)・破片1点が組成し、石器石材は黒色安山岩6点・黒色頁岩5点からなる。石器の接合は黒色安山岩2例(B-33・35)がブロック内で接合する。

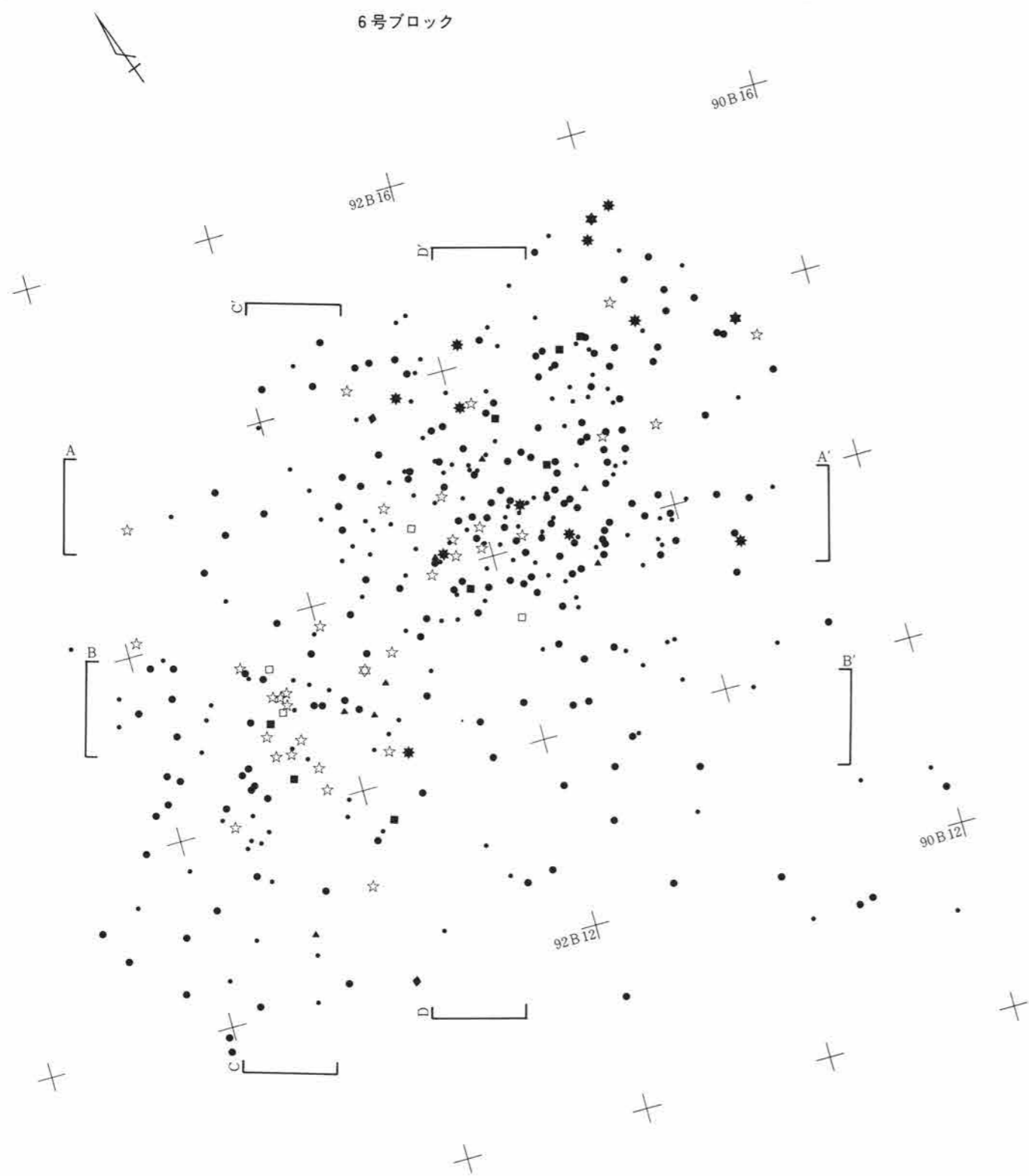
5号ブロック(第99図)

本ブロックは95・96-B-15・16グリッドに位置する。中央台地・南側緩斜面に検出され、6号ブロックおよび12号ブロックに隣接する。ブロックは12.4㎡ほどの範囲(長軸4.3m・短軸3.4m)に分布し、概ね円形状を呈する。ブロックは明瞭ではあるが、0.25㎡あたり3点が出土し、単位面積あたりの分布密度は低い。石器はXV層からXVI層にかけて出土し、およそ45cmの高低差を示すが、XVI層中位にもっとも多く出土している。

ブロックは総計53点の石器が出土している。石核2点・剥片26点・破片15点・礫10点が組成する。石器石材は黒色安山岩2点・黒色頁岩40点・緑色片岩1点・輝石安山岩(粗粒)10点からなる。石器の接合は礫の接合3例を含む11例が確認され、その内訳はブロック内で接合するもの3例、ブロック間で接合するもの8例、である。

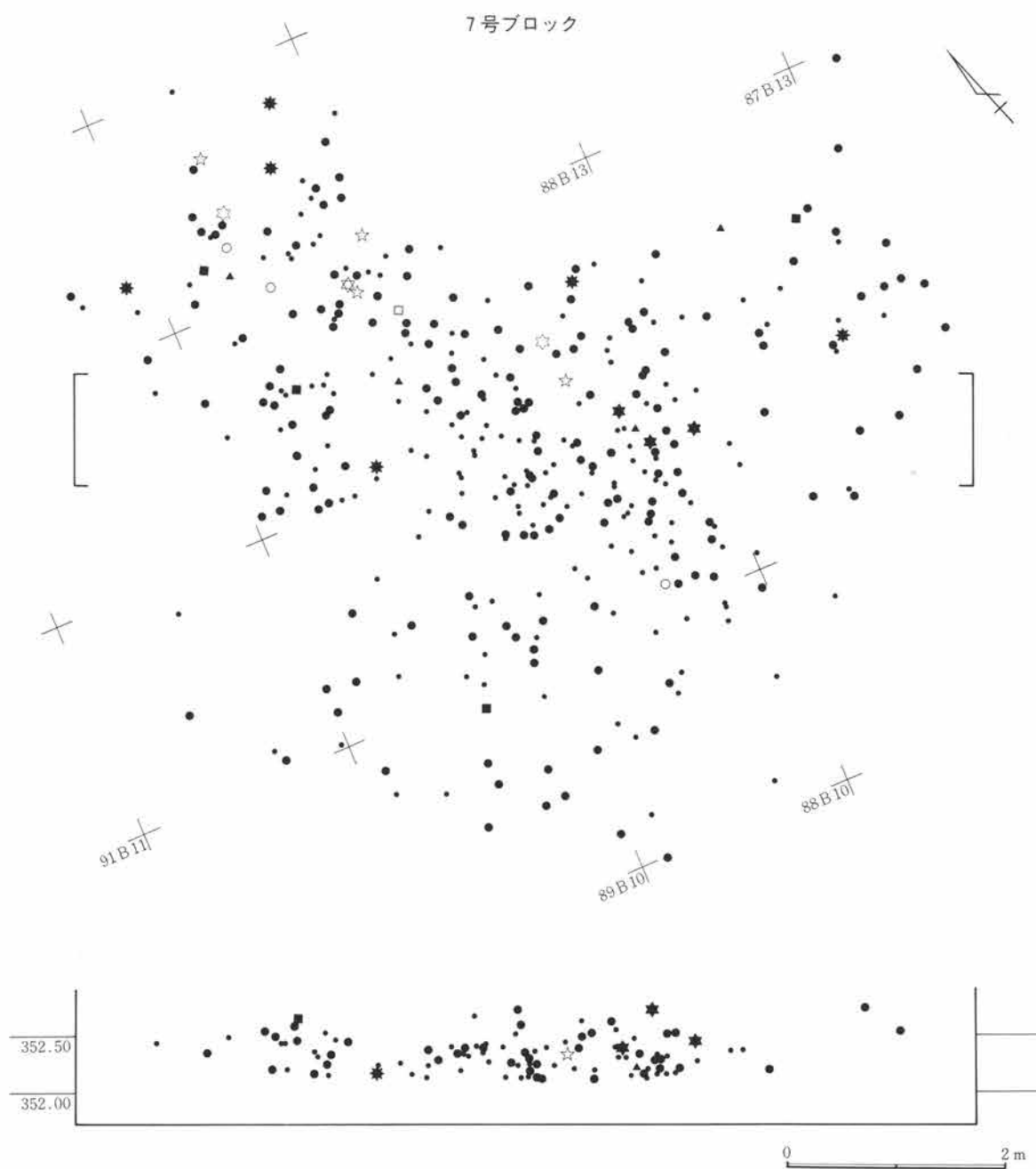
6号ブロック(第100図)

本ブロックは90・91・92・93・94-B-13・14・15グリッドに位置する。中央台地・南側緩斜面に検出され、5号ブロック・7号ブロック・11号ブロック・12号ブロックに隣接する。ブロックは48.2㎡ほどの範囲(長軸9.8m・短軸6.2m)に分布し、概ね楕円形状を呈する。ブロックは散漫な分布状況を示し明瞭さに欠けるが、91・92-B-13・14グリッドおよび93-B-14グ



第100図 石器の分布4(6号ブロック)

0 2m

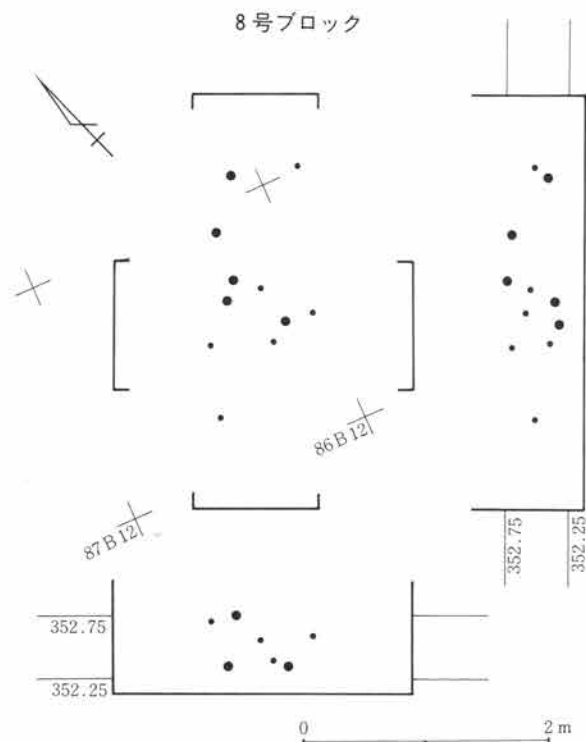


第101図 石器の分布5(7号ブロック)

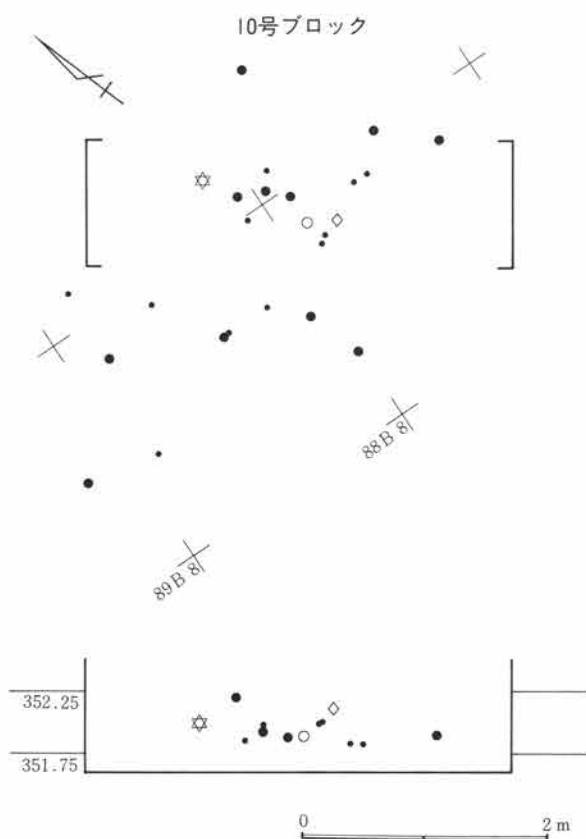
リッドの2ヶ所に石器の集中部が認められる。石器の集中部では0.25m²あたり10~20点が出土し、周辺部に向かうにしたがいその分布密度は漸移的に減少する。石器はXV層下位からXVII層下位にかけて出土し、およそ60cmの高低差を示すが、XVI層中位にもっとも多く出土している。

ブロックは総計429点の石器が出土しており、ナイフ形石器2点・削器6点・加工痕ある剥片10点・使用痕ある剥片5点・石核12点・剥片179点・碎片153点・礫61点が組成し、石器の製作址の様相を示す。石器石材は黒色安山岩228点・黒色頁岩128点・チャート4点・メノウ2点・流紋岩1点・輝石安山岩(細粒)14点・輝石安山岩(粗粒)48点・文象斑岩2点・珪質変岩2点からなり、母岩別資料は6種類(黒色安山岩-1・黒色頁岩-11~14・16)が確認されている。石器の接合は礫の接合4例を含む39例が確認され、その内訳はブ

I 旧石器時代の遺構と遺物



第102図 石器の分布6(8号ブロック)



第103図 石器の分布7(10号ブロック)

ロック内で接合するもの9例、ブロック間で接合するもの23例、単独で出土する石器と接合するもの3例、である。

7号ブロック(第101図、P L 19)

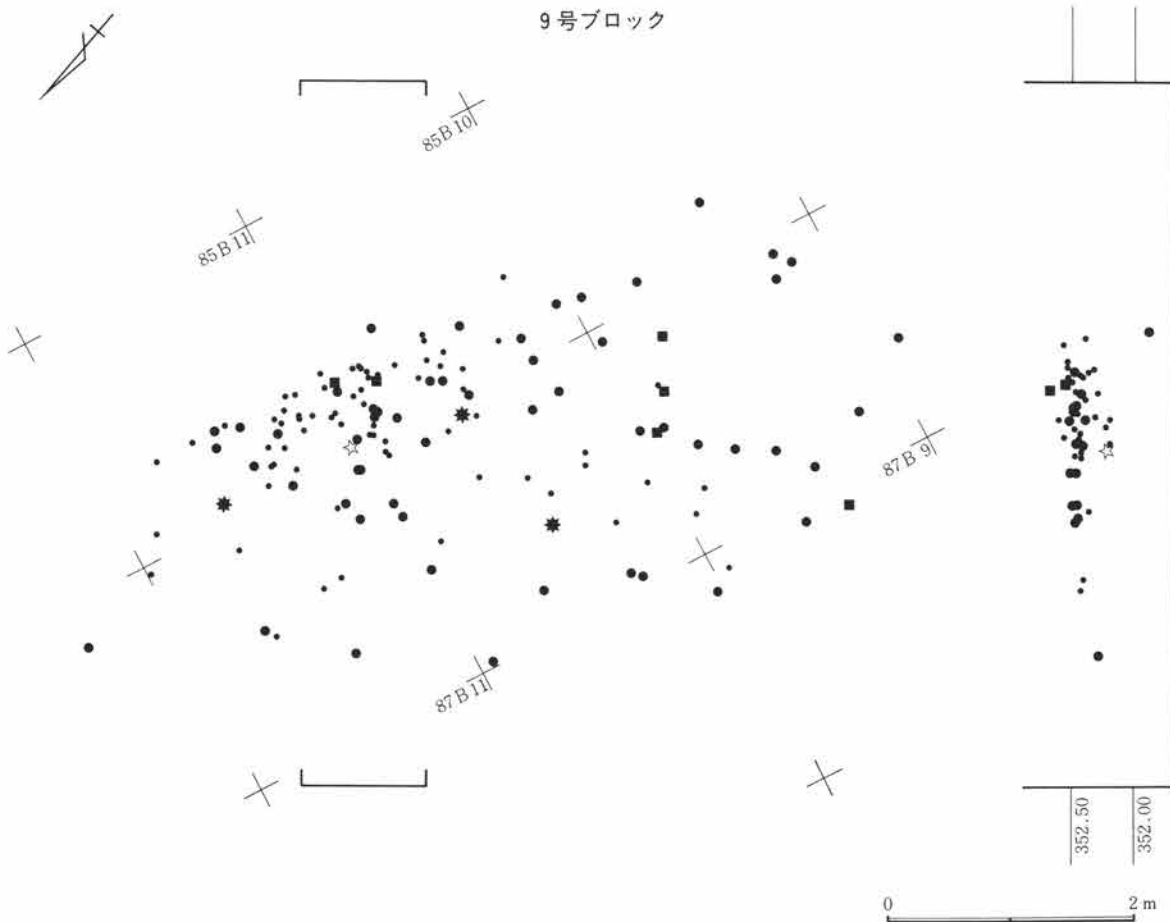
本ブロックは87-B-12・13グリッド、88・89-B-11・12・13・14グリッド、90-B-12・13グリッドに位置する。中央台地・南側緩斜面に検出され、8号ブロック・9号ブロック・10号ブロック・11号ブロックに隣接する。ブロックは45.2㎡ほどの範囲(長軸8.2m・短軸7.2m)に分布し、概ね楕円形状を呈する。ブロックは散漫な分布状況を示し明瞭さに欠けるが、石器はXV層上位からXVII層上位にかけて出土し、およそ65cmの高低差を示すが、XVI層に最も多く出土している。

ブロックは総計378点の石器が出土しており、削器4点・使用痕ある剥片1点・加工痕ある剥片4点・石核7点・縦長剥片2点・剥片163点・碎片163点・礫34点(磨石3点・台石1点・敲石4点を含む)が組成し、石器の製作址の様相を示す。石器石材は黒色安山岩297点・黒色頁岩33点・頁岩2点・輝石安山岩(粗粒)27点・輝緑岩4点・チャート9点・雲母片岩2点・メノウ2点のほか、珪質変岩・灰色安山岩1点からなり、母岩別資料・8種類(黒色安山岩-1、頁岩-1、メノウ、雲母石英片岩、黒色頁岩-11~14)が確認されている。石器の接合は40例が確認され、その内訳はブロック内で接合関係のあるもの15例、ブロック間で接合するもの23例、単独で出土する石器と接合するもの2例、である。

8号ブロック(第102図)

本ブロックは86-B-12・13グリッドに位置し、7号ブロックおよび9号ブロックに隣接する。ブロックは3.6㎡ほどの範囲(長軸2.8m・短軸1.7m)に分布し、略楕円形状を呈する。ブロックは明瞭であるが、散漫な分布状況を示す。石器はXV層下位からXVII層中位にかけて出土し、およそ45cmの高低差を示す。

ブロックは総計14点の石器が出土しており、剥



第104図 石器の分布8(9号ブロック)

片4点・碎片6点・礫4点(敲石1点を含む)が組成する。石器石材は黒色安山岩9点・輝石安山岩(粗粒)2点のほか、黒色頁岩・点紋頁岩・流紋岩1点からなり、母岩別資料・1種類(黒色頁岩-13)が確認されている。石器の接合はブロック間で接合するものが1例のみ確認されている。

9号ブロック(第104図)

本ブロックは調査区東端の台地南側斜面に検出され、85-B-10・11・12グリッド、86-B-10・11・12グリッドに位置する。8号ブロックおよび10号ブロックに隣接する。ブロックは16.4m²ほどの範囲(長軸6.8m・短軸3.1m)に分布し、楕円形状を呈する。ブロックの存在は明瞭であるが、86-B-11を中心に石器の集中部が認められ、周辺部に向かうにしたがい、その分布密度は漸移的に減少する傾向がみられる。石器はXV層下位からXVII層上位にかけて出土し、およそ60cmの高低差を示すが、XVI層にもっとも多く出土している。

ブロックは総計146点の石器が出土しており、加工痕ある剥片5点・石核4点・縦長剥片1点・剥片60点・碎片70点・礫6点が組成し、石器の製作址の様相を示す。石器石材は黒色安山岩132点・黒色頁岩8点・輝石安山岩(粗粒)5点・チャート1点からなり、母岩別資料・3種類(黒色安山岩-1、黒色頁岩-11・13)が確認されている。石器の接合は11例が確認され、その内訳はブロック内で接合関係のあるもの3例、ブロック間で接合するもの7例、単独に出土する石器と接合するもの1例、である。

I 旧石器時代の遺構と遺物

10号ブロック(第103図)

本ブロックは台地中央の南側斜面に検出され、87・88・89-B-9・10グリッドに位置する。7号ブロックおよび9号ブロックに隣接し、およそ2mの距離を隔て存在する。ブロックは8.6㎡ほどの範囲(長軸4.4m・短軸2.4m)に分布し、散漫な分布状況を示す。ブロックの形状は、概ね、楕円形状を呈する。石器はXV層下位からXVII層上位にかけて出土し、およそ45cmの高低差を示すが、XVI層中位にもっとも多く出土している。

ブロックは総計30点の石器が出土しており、楔形石器1点・縦長剥片1点・剥片12点・碎片11点・礫5点(台石1点を含む)が組成し、石器の製作址的な様相を指摘するにはやや貧弱な石器の組成といえよう。石器石材は黒色安山岩24点・黒色頁岩3点・輝石安山岩(粗粒)2点・輝石安山岩(細粒)1点からなり、母岩別資料・2種類(輝石安山岩(細粒)-1、黒色頁岩-11)が確認されている。ブロックの中央付近には大形礫(亜角礫・類型B)が存在する。石器の接合は6例が確認され、その内訳はブロック間で接合するもの5例、単独で出土する石器と接合するもの1例、である。

11号ブロック(第105図、P L19)

本ブロックは台地中央の南側斜面に検出され、90・91・92-B-10・11・12グリッドに位置する。6号ブロックおよび7号ブロックに隣接するほか、東側には10号ブロックが、西側には12号ブロックが、それぞれ2~4mの距離を隔て存在する。ブロックは19.9㎡ほどの範囲(長軸6.6m・短軸3.9m)に、概ね、略楕円形状に分布する。91-B-11グリッドに石器の集中部がみられ、周辺部に向かうにしたがい、その分布密度は漸移的に減少する傾向がみられる。ブロックは明瞭な分布状態を示す。石器はXIV層下位からXVI層下位にかけて出土し、およそ60cmの高低差を示すが、XV層にもっとも多く出土している。

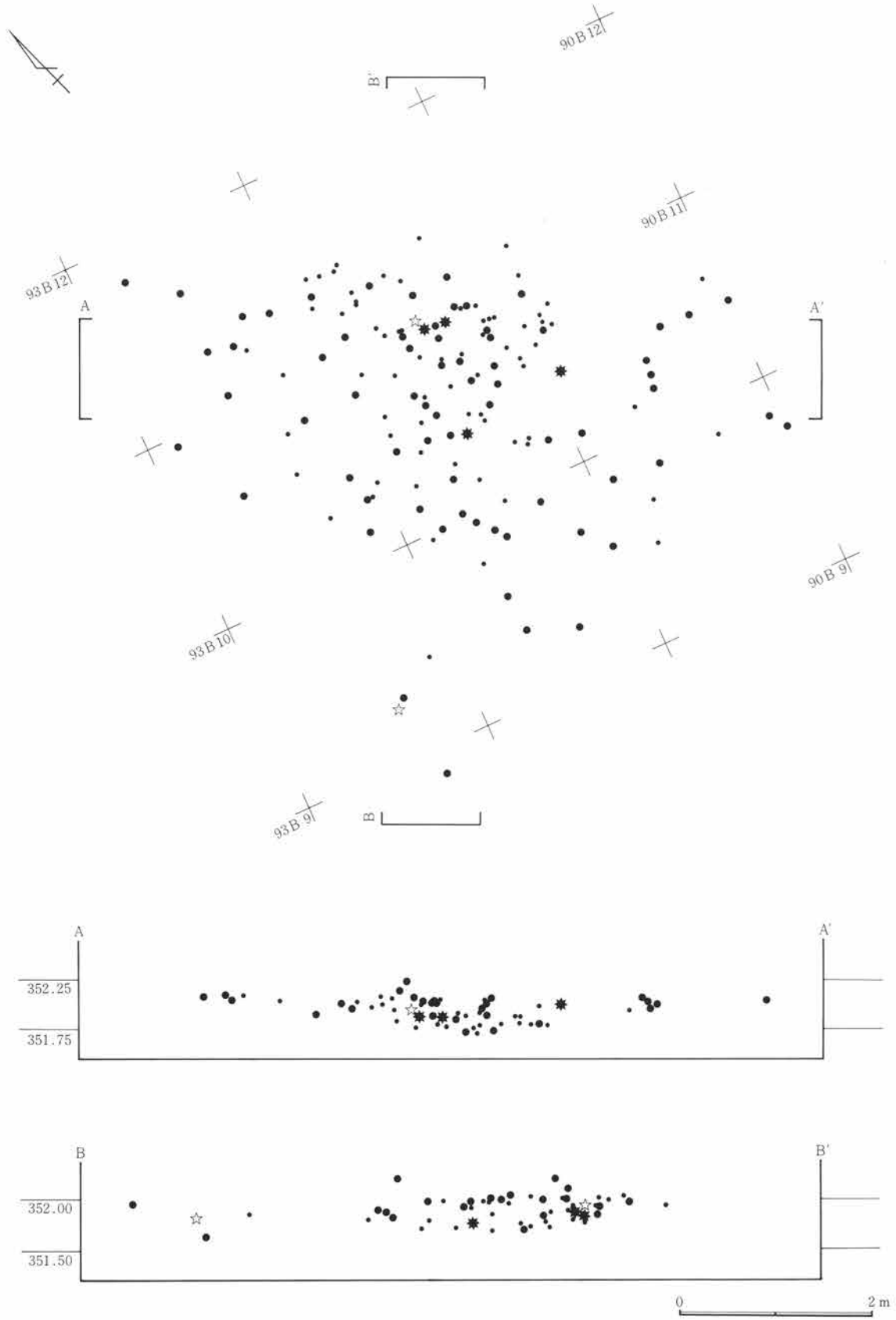
ブロックは総計153点の石器が出土しており、石核4点・剥片71点・碎片69点・礫9点が組成し、石器の製作址の様相を示す。石器石材は黒色安山岩108点・黒色頁岩28点・頁岩8点・輝石安山岩(粗粒)7点・珪質変岩1点・灰色安山岩1点からなり、母岩別資料6種類(頁岩-1、黒色頁岩-11・13・14・16)が確認されている。ブロックの中央付近には大形礫(河床礫・類型A)が存在する。石器の接合は16例が確認され、その内訳はブロック内で接合するもの3例、ブロック間で接合するもの13例、である。

12号ブロック(第106図、P L19)

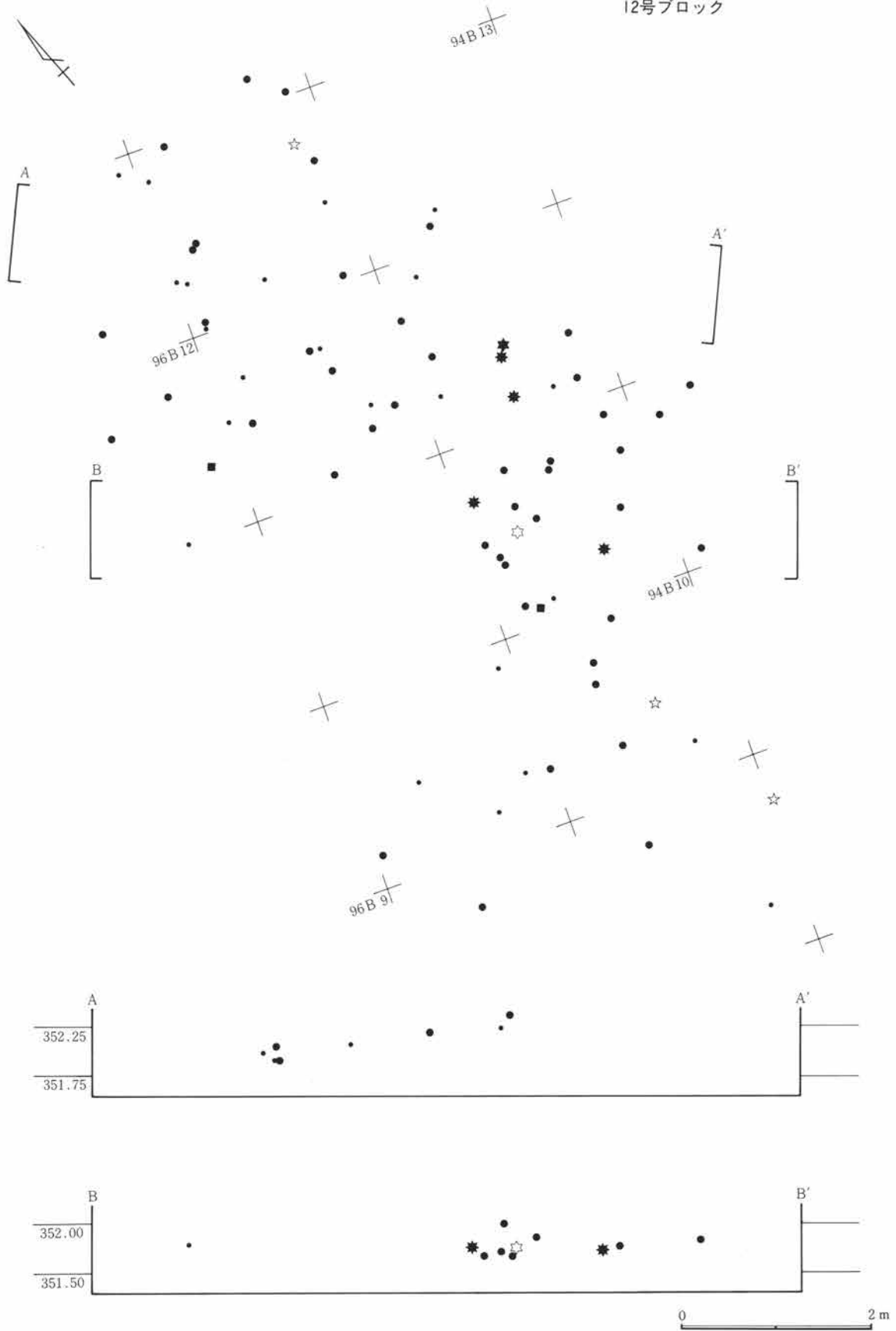
本ブロックは調査区西端の台地南側斜面に検出され、94・95・96-B-9・10・11・12・13グリッドに位置する。6号ブロックに隣接するほか、北側には5号ブロックが、東側には11号ブロックが、2~4mの距離を隔て存在する。ブロックは45.8㎡ほどの範囲(長軸11.2m・短軸5.1m)に分布し、概ね楕円形状を呈する。ブロックは散漫な分布状況を示し明瞭さに欠けるが、94-B-11グリッドに石器の集中部が認められ、3ヶ所の石器集中部に細分される。石器はXVI層下位からXVII層上位にかけて出土し、およそ35cmの高低差を示すが、XVII層上位にもっとも多く出土している。

ブロックは総計86点の石器が出土しており、加工痕ある剥片2点・石核4点・剥片46点・碎片23点・礫11点(磨石1点・敲石1点を含む)が組成する。石器石材は黒色安山岩33点・黒色頁岩37点・頁岩5点・輝石安山岩(粗粒)9点・輝石安山岩(細粒)1点・文象斑岩1点からなり、母岩別資料9種類(黒色安山岩-1、頁岩-1、輝石安山岩(細粒)-1、黒色頁岩-11~14)が確認されている。6号ブロックや7号ブロック、10号ブロックや11号ブロックに特徴的な大形礫は検出されていない。石器の接合は20例が確認され、その内訳はブロック内で接合するもの3例、ブロック間で接合するもの17例、である。

11号ブロック



第105図 石器の分布 9 (11号ブロック)



第106図 石器の分布10(12号ブロック)

5-4, 出土石器

B区では、12ヶ所のブロックより総計1,867点の石器が出土している。石器群はナイフ形石器2点・削器19点・搔器1点・彫器1点・楔形石器5点・加工痕ある剥片30点・使用痕ある剥片16点が組成する。剥片(752点)や碎片(797点)が多く出土しており、主体(全体の82.9%)を占め、石器群は削器・搔器など間接生産具を主体とし、直接生産具に乏しい石器群であることが指摘される。

ナイフ形石器(第107図、134・135)

A区出土のナイフ形石器には、広義の石刃技法を技術基盤として得られる剥片が用いられるが、剥片を縦位に使用し急斜度な調整加工を施すことにより作出される一

群(A群)と、剥片を横位に使用し急斜度な調整加工を施すことにより作出される一群(B群)との両者が認められた。B区では、後者の一群(B群)のナイフ形石器・2点が6号ブロックより出土しているのみであり、前者の一群(A群)のナイフ形石器の場合、その存在が予想されるにも拘わらず、石器群には認められない。

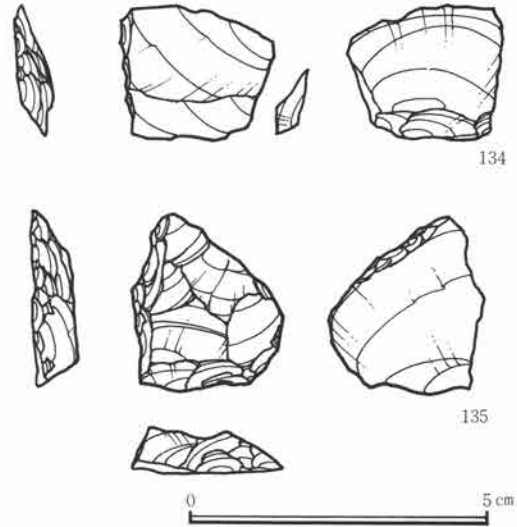
134は、扇状の横長剥片を素材とし、折断手法および急斜度な調整加工を施すことにより作出される。調整加工は左側縁および右側縁に施されるが、左側縁では裏面側から表面側に向かうやや粗い調整加工が施されるのに対し、右側縁には折断手法が施される。打面形状は二つの平坦な剥離面より構成され、一部、調整加工との重複が認められる。石器の形状は横長・長方形を呈し、楔状の断面形状を示す。剥片の長軸および石器の長軸はほぼ一致し、剥片の先端部を調整加工を加えることなく石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。長さ2.2cm・幅2.6cm・重さ4.19gを測る。黒色頁岩製。6号ブロック出土。

135は、横長の剥片を素材とし、急斜度な調整加工を施すことにより作出される。左側縁および石器基部には、裏面側から表面側へ向けやや粗い調整加工が施される。打面および打瘤は調整加工により除去される。石器の形状および断面形状は三角形を示す。剥片の長軸および石器の長軸はほぼ一致し、右側縁を石器の機能部とする。明確な使用痕は認められない。なお、右側縁には浅く粗い調整加工が施され、「錐形石器」に類似する先端形状を示すが、機能部の作出状態が左右で相違するため、石器の転用とは言え「錐形石器」には分類しがたい。ここでは、ナイフ形石器の範疇に把え分類する。長さ2.9cm・幅2.5cm・重さ5.93gを測る。黒色頁岩製。6号ブロック出土。

彫器(第108図、136)

彫器は、I区より1点が出土している。石器先端を欠損すること、資料規模に乏しいこと、の二点から必ずしも明確でないが、石器の先端には明らかに剥片の剥離方向に対向する剥離面・二面が認められる。ここでは、以上の理由により器種認定をおこなう。

136は、縦長の剥片を素材とする。左右・両側縁より槌状剥離を施すことで、交叉刃状の機能部が剥片端部に作出される。槌状剥離はともに表面側へ振れ、石器先端は彫刻刃面を作出する段階で欠損状態となる。剥片の打面形状は、剥片を剥離する段階で欠損するため明らかではない。素材剥片の側縁には礫面を残す。長



第107図 B区出土の石器(1)

I 旧石器時代の遺構と遺物

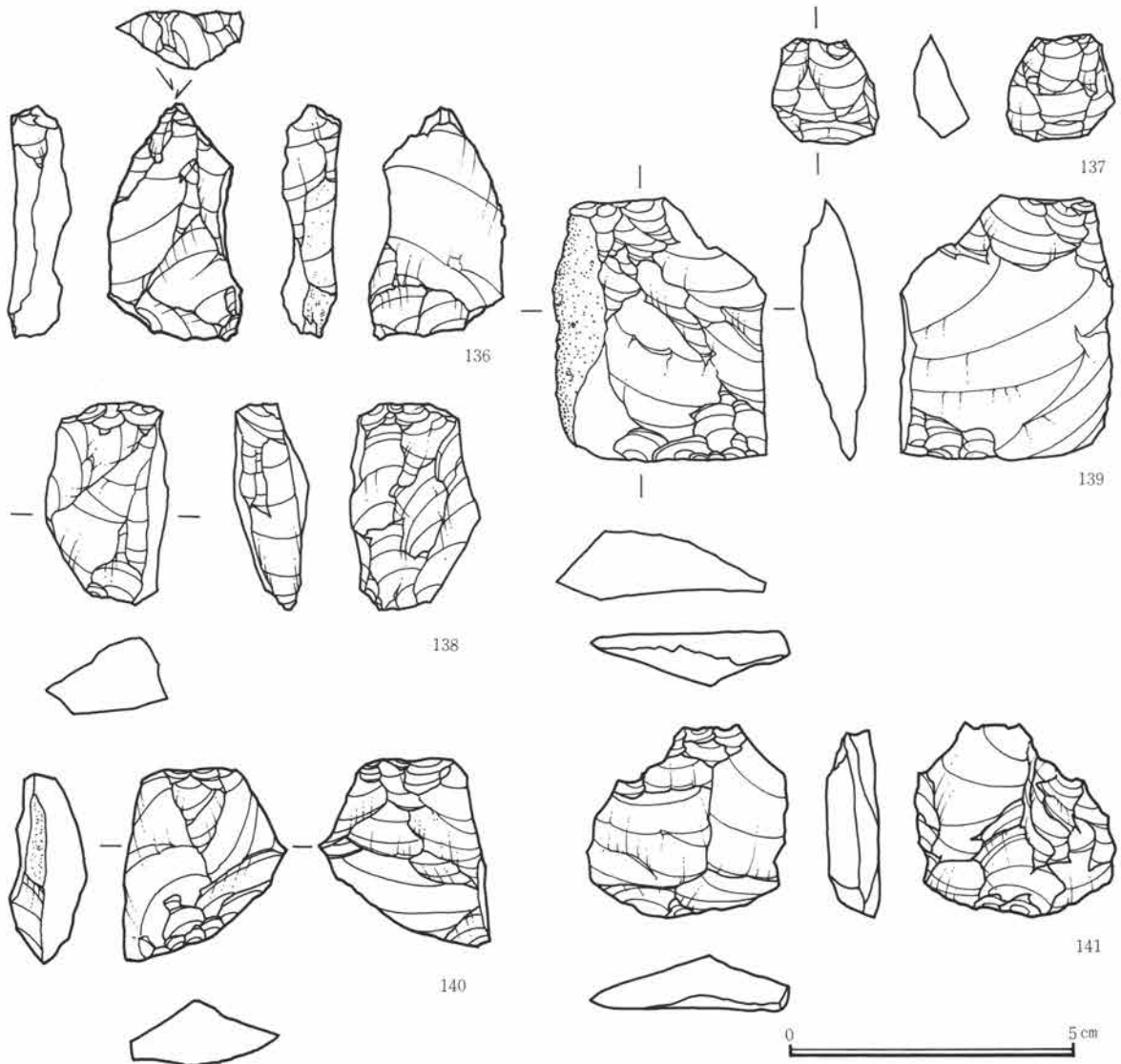
さ4.1cm・幅2.0cm・重さ8.71gを測る。黒色安山岩製。2号ブロックの周辺より単独出土。

楔形石器(第108図、137~141)

楔形石器は、総計5点(I区より3点・III区より2点)が出土している。いずれも剥片を素材とし、剥片の上下両端に石器の長軸に平行する剥離面が認められ、縁辺は潰れた状態を示し、断面形状は紡錘状を呈する場合が多い。

137は、石器の素材に用いられる剥片の形状は明らかではないが、小形の剥片を素材に用いると思われる。石器の上下両端には対向する剥離面は認められないが、石器の下端には表裏両面とも石器の長軸に平行する剥離が認められ、縁辺は潰れた状態となる。石器の形状は方形に近く、断面形状は楔状を呈する。長さ1.9cm・幅1.8cm・重さ3.61gを測る。黒色安山岩製。10号ブロック出土。

138は、石器の素材に用いられる剥片の形状は明らかではないが、小形の剥片を素材に用いると思われる。石器の上下両端に対向する剥離面が形成される。上下両端とも縁辺は潰れた状態となる。石器の形状は長方



第108図 B区出土の石器(2)

形に近く、断面形状は紡錘状を呈する。長さ3.5cm・幅2.2cm・重さ10.30gを測る。黒色安山岩製。2号ブロック出土。

139は、やや幅広の剥片を素材とする。石器の上下両端には対向する剥離面が形成され、上下両端とも縁辺は潰れた状態となる。石器の形状は方形に近く、断面形状は紡錘状を呈する。左側縁には礫面が認められるほか、意図的であるのか、偶発的であるのか、明らかではないが、右側縁には折断面が認められる。長さ4.6cm・幅3.7cm・重さ21.57gを測る。黒色安山岩製。ブロックの周辺より出土。

140は、石器の素材に用いられる剥片の形状は明らかではないが、やや幅広の剥片を素材とすると思われる。石器の上下両端には対向する剥離面が形成され、上下両端とも縁辺は潰れた状態となる。石器の形状は台形に近く、断面形状は紡錘状を呈する。左側縁には礫面を残す。長さ3.3cm・幅2.9cm・重さ9.32gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

141は、石器の素材に用いられる剥片の形状は明らかではないが、やや幅広の剥片を素材とすると思われる。石器の上下両端には対向する剥離面が形成され、縁辺は潰れた状態となるほか、左側縁には微細な剥離が認められる。石器の形状は台形に近く、断面形状は紡錘状を呈する。長さ3.3cm・幅3.5cm・重さ10.09gを測る。黒色安山岩製。2号ブロック出土。

削器(第109～111図、142～156)

削器は、総計15点(I区より4点・III区より11点)が出土している。削器には、表面側から裏面側へ向け浅く粗い調整加工により作出されることが多く、側縁あるいは剥片の端部を石器の機能部とすることが多い。III区では、特定のブロックより出土する傾向が指摘され、6号ブロックおよび7号ブロックには各々4点が出土している。ここでは、調整加工の斉一性や連続性に着目し、機能部が意図的に作出されるのか否かを基準に器種の認定をおこなっている。

142は、平坦な剥離面を打面とし作出される縦長剥片を用い、側縁に調整加工を施すことにより石器の機能部が作出される。左右・両側縁とも表面側から裏面側へ向かう粗い調整加工が施され、刃部形状は鋸歯状を呈する。石器の下半を欠損するが、製作時の欠損であるのか、使用時の欠損であるのか、判然としない。石器の形状は明確ではないが、剥片の形状を大きく変えることなく石器を作出するものと思われる。打瘤は調整加工により除去される。明確な使用痕は認められない。長さ6.3cm・幅3.4cm・重さ35.69gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

143は、やや幅広の剥片を用いる。剥片の周辺には表面側から裏面側へ向かう浅く粗い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。石器の形状は楕円形状を呈し、台形状の断面形状を示す。打面および打瘤は調整加工により除去される。明確な使用痕は認められない。長さ4.2cm・幅3.4cm・重さ17.31gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-13に分類される。7号ブロック出土。

144は、やや幅広の縦長剥片を用い、両側縁に調整加工を施すことにより機能部が作出される。左右・両側縁とも裏面側から表面側へ向かう急斜度な調整加工が施されるほか、石器の先端には微細な剥離が認められる。石器の下半を欠損するが、製作時の欠損であるのか使用時の欠損であるのか、判然としない。台形状の断面形状を示す。明確な使用痕は認められない。長さ3.5cm・幅2.5cm・重さ10.04gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。

145は、平坦な剥離面を打面とし作出される縦長の剥片を用い、側縁に調整加工を施すことにより石器の機能部が作出される。右側縁には裏面側から表面側へ向かう調整加工が施されるが、機能部の作出というより

I 旧石器時代の遺構と遺物

石器の形状を整えるという意味合いが強い。明確な使用痕が認められないこともあり、分類が適切であるのか検討を要す。長さ5.7cm・幅4.1cm・重さ26.81gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。6号ブロック出土。

146は、やや幅広の縦長剥片を用い、側縁および剥片端部に調整加工を施すことにより作出される。裏面側から表面側へ向かう調整加工が施されているが、右側縁では浅く、剥片端部では急斜度な調整加工となる。剥片の打面部分は剥離段階で欠損する。石器は2点の接合資料(B-115)からなるが、欠損あるいは折断する状態には適切な説明をくわえることはできない。長さ5.4cm・幅4.0cm・重さ36.90gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。6号ブロック出土。

147は、平坦な剥離面を打面とし作出される横長の剥片を用い、側縁および剥片の端部に調整加工を施すことによりく状の機能部が作出される。左側縁および剥片端部には表面側から裏面側へ向かう浅く粗い調整加工が施される。石器は3点の接合資料(B-107)からなるが、剥片剥離段階での欠損である。長さ3.5cm・幅4.8cm・重さ22.94gを測る。黒色安山岩製。6号ブロック出土。

148は、やや幅広の剥片を用い、剥片の上下両端に調整加工を施すことにより、石器の機能部を作出している。上下両端とも、調整加工は表裏・両面に施される。石器の形状は器体の両端を欠損するため明らかではない。石器は2点の接合資料(B-61)よりなり、両側縁には折断面が認められるが、折断が生じる段階を特定することは困難な状況にある。長さ3.7cm・幅3.8cm・重さ8.56gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。

149は、平坦な剥離面を打面とし作出される幅広の剥片を用い、側縁に調整加工を施すことにより石器の機能部が作出される。左側縁には表面側から裏面側へ向かう浅く粗い調整加工を、右側縁には裏面側から表面側へ向かう浅く粗い調整加工を、施すことにより石器の機能部が作出される。石器の形状は楕円形状を呈し、三角形の断面形状を示す。長さ4.6cm・幅4.8cm・重さ36.03gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。6号ブロック出土。

150は、礫面を打面とし作出される幅広の剥片を用いる。右側縁には、表裏両面に浅く粗い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。石器の形状は器体の下半を欠損するため明らかではない。長さ2.7cm・幅3.2cm・重さ11.84gを測る。黒色安山岩製。7号ブロック出土。

151は、やや幅広の剥片を用い、上下両端に調整加工を施すことにより石器の機能部が作出される。石器の上端には裏面側から表面側へ向かう浅い調整加工が、石器端部には表面側から裏面側へ向かう浅い調整加工が施されるが、石器の上端では凹状の機能部が、剥片端部ではV状の機能部が作出される。長さ3.8cm・幅4.4cm・重さ17.60gを測る。黒色頁岩製。7号ブロック出土。

152は、やや幅広の剥片を用い、側縁に裏面側から表面側へ向かう粗い調整加工を施すことにより、石器の機能部を作出している。石器の形状は器体の上半を欠損するため明らかではない。左側縁には、使用することにより生じる微細な剥離が認められる。長さ4.2cm・幅4.6cm・重さ32.05gを測る。黒色安山岩製。7号ブロック出土。

153は、やや幅広の大形剥片を用い、粗い調整加工を施すことにより作出される。表面側から裏面側へ向かう浅く粗い調整加工が剥片端部に施され、石器の機能部が作出される。縦横に折断されるため石器の形状は明らかではない。石器は2点の接合資料(B-53)からなるが、折断(欠損)および調整加工には、古・調整加工→新・折断(欠損)の新旧関係が認められる。長さ3.8cm・幅5.5cm・重さ26.84gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。

154は、表裏両面に浅い調整加工を施すことにより作出される。欠損資料であるため、石器の形状や剥片形状は明らかではない。石器の両端には折断面がみられる。長さ2.9cm・幅1.7cm・重さ2.84gを測る。黒色安山岩製。2号ブロックの周辺より単独出土。

155は、幅広の大形剥片を用い、粗い調整加工を施すことにより作出される。表面側から裏面側へ向かう浅く粗い調整加工が剥片端部に施され、石器の機能部が作出される。石器の形状は台形状を呈し、三角形の断面形状を示す。長さ4.5cm・幅4.9cm・重さ35.60gを測る。黒色頁岩製。9号ブロック出土。

156は、やや幅広の大形剥片を用い、粗い調整加工を施すことにより作出される。石器の機能部は左側縁に作出されるが、左側縁の上半では裏面側から表面側へ向かう調整加工が、左側縁の下半では表面側から裏面側へ向かう調整加工が、それぞれ施される。また、剥片端部には、表裏両面とも浅く粗い剥離が認められるが、機能部を作出するというよりも形状を整えるという意味合いの強いものである。長さ7.6cm・幅5.2cm・重さ66.97gを測る。黒色安山岩製。2号ブロック出土。

加工痕ある剥片(第111～114図、157～179)

加工痕ある剥片は総計30点が出土している。石器には表面側から裏面側に向かう浅く粗い調整加工を施し、石器の機能部を作出している。縦長の剥片の場合には側縁に、横長の剥片の場合には剥片端部に、石器の機能部が作出されるなど、加工部位と剥片形状には一定の傾向が窺われる。石器は6ヶ所のブロックから2点～5点が出土する。石器石材は黒色安山岩や黒色頁岩を多く用いる。

157は、平坦な剥離面を打面とし、作出されるやや幅広の剥片を素材とする。剥片端部には、表面側から裏面側へ向かう浅い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。石器は2点の接合資料(B-115)よりなるが、剥片を剥離する段階で欠損することが折断面の観察により明らかである。明確な使用痕は認められない。長さ6.0cm・幅6.7cm・重さ77.17gを測る。黒色安山岩製。6号ブロック出土。

158は、平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長剥片を素材とする。左側縁には、表面側から裏面側へ向かう粗い調整加工を施し、石器の機能部を作出している。石器は2点の接合資料(B-34)よりなるが、明確な使用痕は認められない。器体の中央付近で折断。長さ8.0cm・幅2.9cm・重さ21.56gを測る。黒色頁岩製。2号ブロック出土。

159は、礫面を打面とし作出される縦長剥片を素材とする。剥片端部には、表面側から裏面側へ向かう調整加工が施され、石器の機能部が作出される。明確な使用痕は認められない。長さ3.5cm・幅3.3cm・重さ10.93gを測る。黒色安山岩製。

160は、比較的形の整った縦長の剥片を素材とする。右側縁には裏面側から表面側へ向かう浅い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。器体の上半を欠損するが、製作時の欠損であるのか、使用時の欠損であるのか、判然としない。明確な使用痕は認められない。長さ3.4cm・幅3.2cm・重さ11.10gを測る。黒色安山岩製。93-B-11グリッドより出土。

161は、複剥離打面より作出されるやや幅広の剥片を素材とする。右側縁には、表面側から裏面側へ向かう浅く、粗い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。石器には2点の接合資料(B-28)からなるが、製作時の欠損であるのか、使用時の欠損であるのか、判然としない。明確な使用痕は認められない。長さ5.6cm・幅4.7cm・重さ39.65gを測る。黒色頁岩製。6号ブロック出土。

162は、平坦な剥離面を打面とし作出される幅広の剥片を素材とする。左側縁には、剥片を剥離する段階に生じる折断面が認められ、この部分には、表面側から裏面側へ向かう調整加工が施される。長さ4.4cm・幅

I 旧石器時代の遺構と遺物

2.8cm・重さ16.57gを測る。黒色安山岩製。6号ブロック出土。

163は、やや幅広の剥片を素材とする。剥片端部には、表面側から裏面側へ向かう浅い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。明確な使用痕は認められない。長さ3.2cm・幅3.3cm・重さ9.05gを測る。黒色頁岩製。9号ブロック出土。

164は、やや幅広の剥片を素材とする。左側縁には裏面側から表面側へ向かう浅い調整加工により直線状の機能部が作出されるほか、剥片端部には表面側から裏面側へ向かう調整加工により鋸歯状の機能部が作出される。明確な使用痕は認められない。長さ2.9cm・幅3.8cm・重さ10.22g。黒色頁岩製。7号ブロック出土。

165は、やや幅広の剥片を素材とする。右側縁には、表面側から裏面側へ向かう調整加工が施され、剥片端部には表裏両面とも浅い調整加工が施される。明確な使用痕は認められない。長さ3.6cm・幅2.1cm・重さ9.98gを測る。黒色安山岩製。7号ブロック出土。

166は、左側縁に裏面側から表面側へ向かう急斜度な調整加工を施すことにより、石器の機能部が作出される。石器の形状は欠損のため明らかではない。明確な使用痕は認められない。長さ3.0cm・幅1.5cm・重さ4.93gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。

167は、平坦な剥離面を打面とし作出される剥片を素材とする。左側縁には、表面側から裏面側へ向かう浅く粗い調整加工が施される。右側縁には折断面が認められる。明確な使用痕は認められない。長さ4.0cm・幅1.9cm・重さ10.14gを測る。黒色安山岩製。12号ブロック出土。

168は、平坦な剥離面を打面とし作出される剥片を素材とする。右側縁には、裏面側から表面側へ向かう浅い調整加工が施される。石器は2点の接合資料(B-117)からなるが、剥片を剥離する段階で欠損が生じる。明確な使用痕は認められない。長さ3.1cm・幅3.1cm・重さ7.65gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。6号ブロック出土。

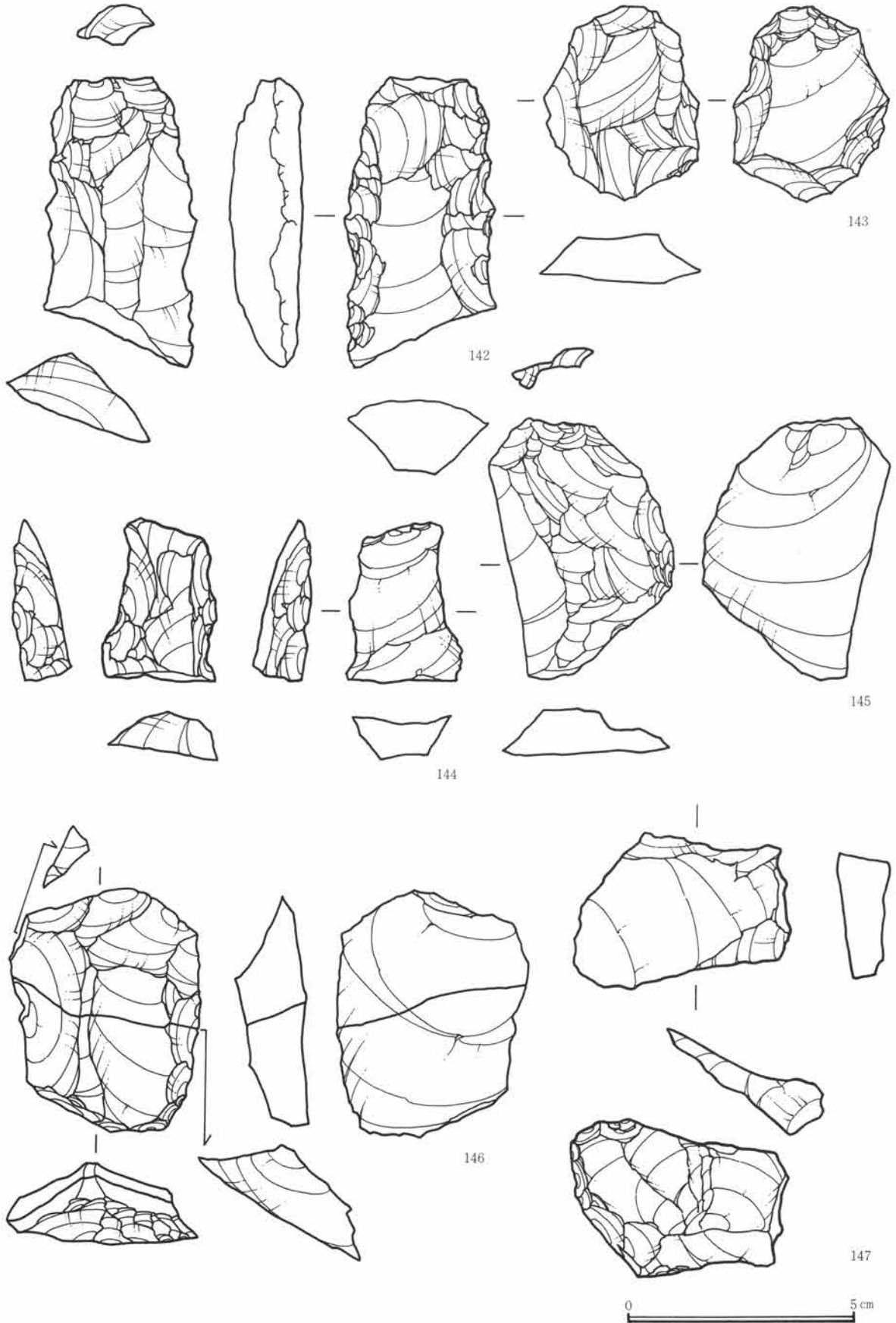
169は、やや幅広の剥片を素材とする。右側縁には、表裏両面とも浅い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。明確な使用痕は認められない。長さ4.9cm・幅3.3cm・重さ21.72gを測る。黒色頁岩製。2号ブロック出土。

170は、平坦な剥離面を打面とし作出される剥片を素材とする。左側縁には、裏面側から表面側へ向かう浅い調整加工が施される。石器は2点の接合資料(B-115)からなり、器体の中央付近で欠損するが、製作時の欠損であるのか、使用時の欠損であるのか、判然としない。明確な使用痕は認められない。長さ5.6cm・幅5.2cm・重さ33.03gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。6号ブロック出土。

171は、石器先端に表面側から裏面側へ向かう浅い調整加工を施すことにより、石器の機能部が作出される。打面および打瘤は調整加工により除去され、剥片の形状は不明である。明確な使用痕は認められない。なお、石器先端の両側縁には槌状剥離に類似する剥離が認められるが、彫器作出に伴う剥離であるのかは明確でない。長さ4.6cm・幅2.9cm・重さ15.07gを測る。黒色安山岩製。90-B-15グリッドより単独出土。

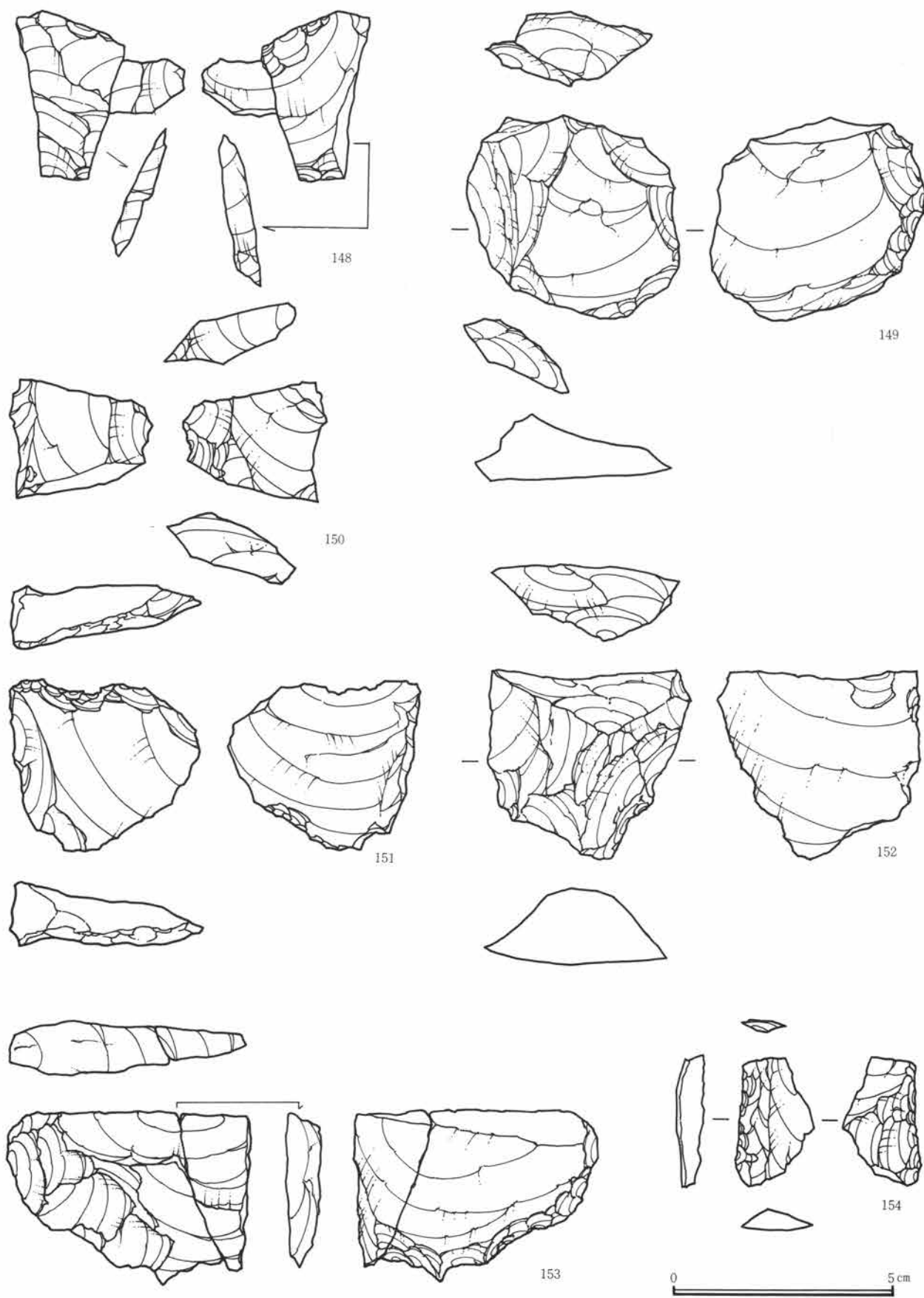
172は、礫面を打面とし作出される剥片を素材とする。右側縁および剥片端部には、表面側から裏面側へ向かう粗い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。明確な使用痕は認められない。長さ6.0cm・幅5.7cm・重さ88.04gを測る。黒色頁岩製。12号ブロック出土。

173は、器体の上半を欠損するため素材となる剥片の形状は明確ではないが、遺存部分より縦長の剥片を用いると思われる。左側縁には、表面側から裏面側へ向かう浅く粗い調整加工が施され、ノッチ状の機能部が作出される。右側縁には微細な使用痕が認められる。長さ2.1cm・幅2.0cm・重さ2.45gを測る。黒色安山岩製。6号ブロック出土。

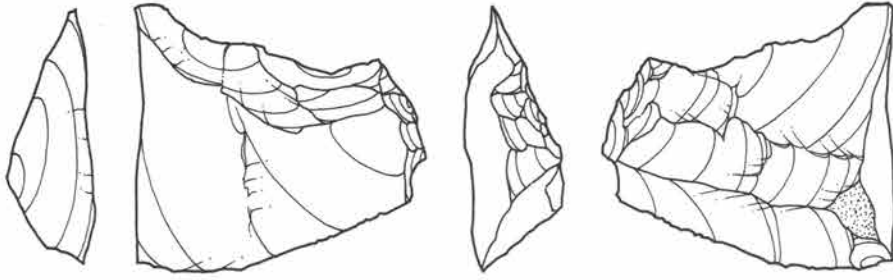


第109図 B区出土の石器(3)

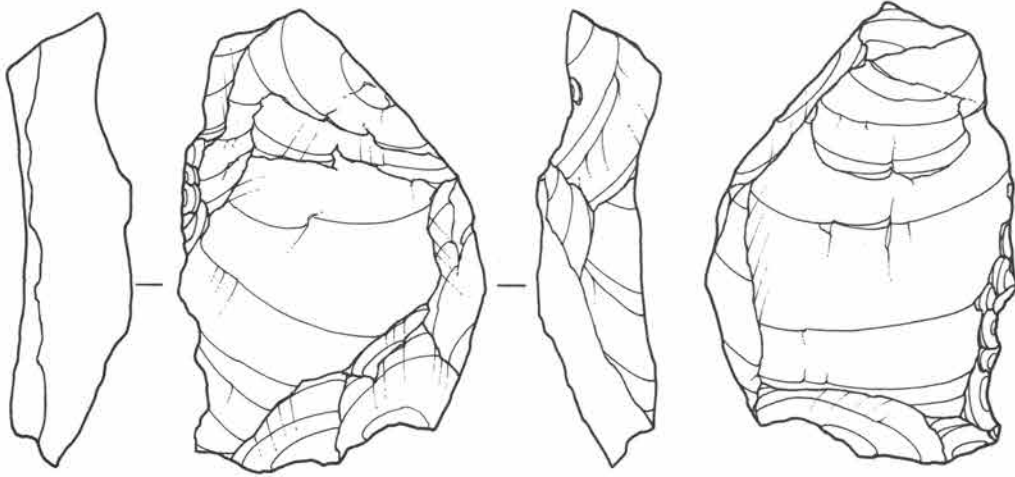
I 旧石器時代の遺構と遺物



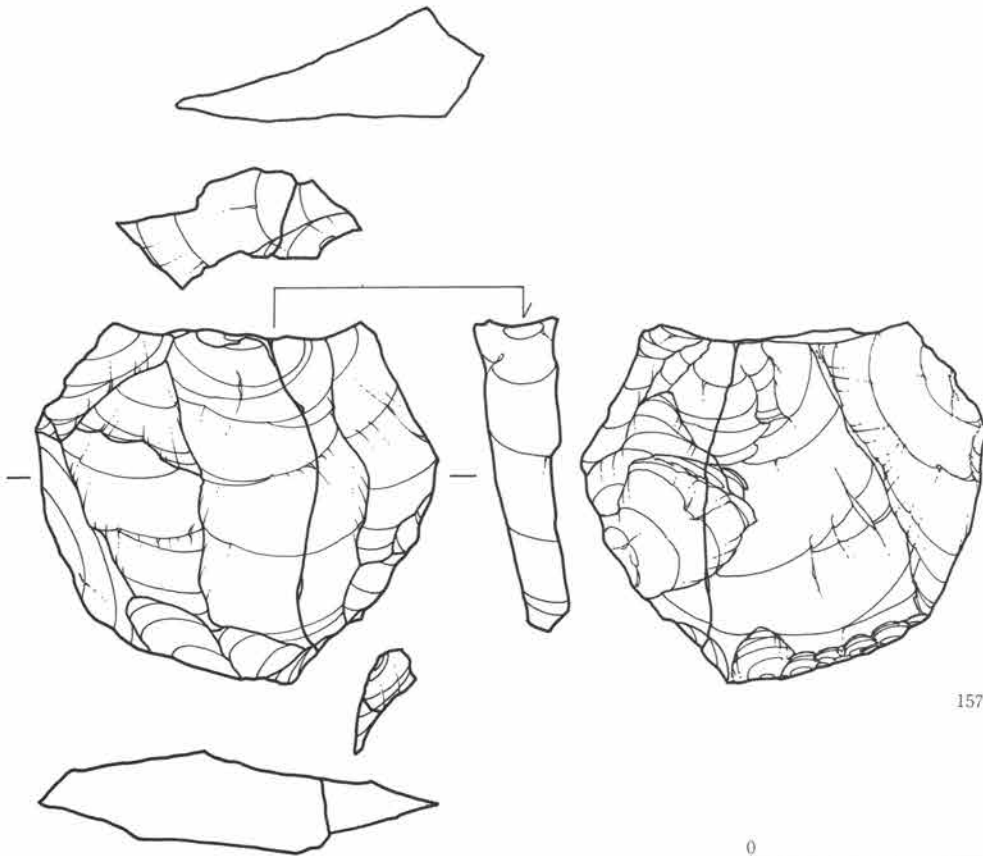
第110図 B区出土の石器(4)



155



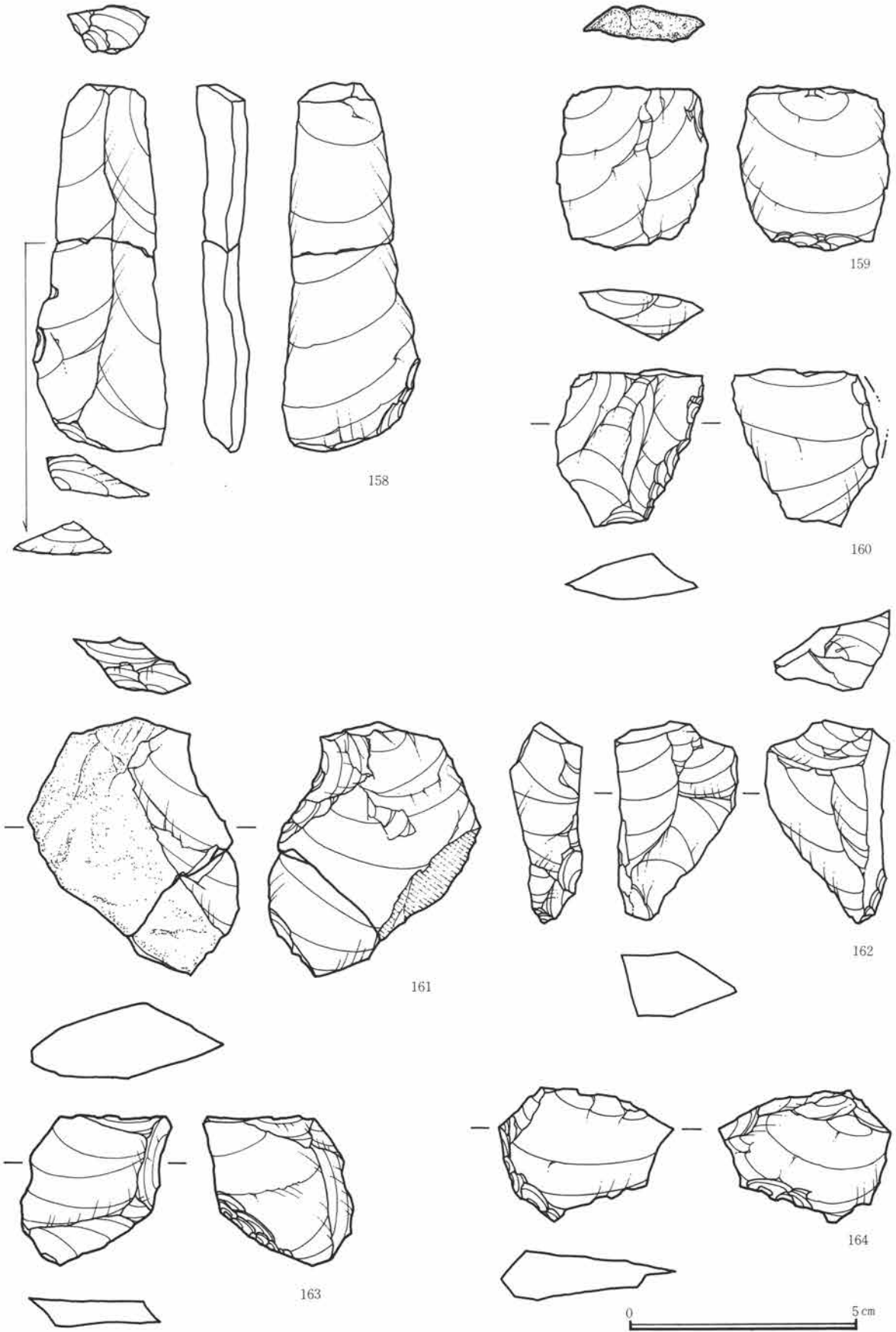
156



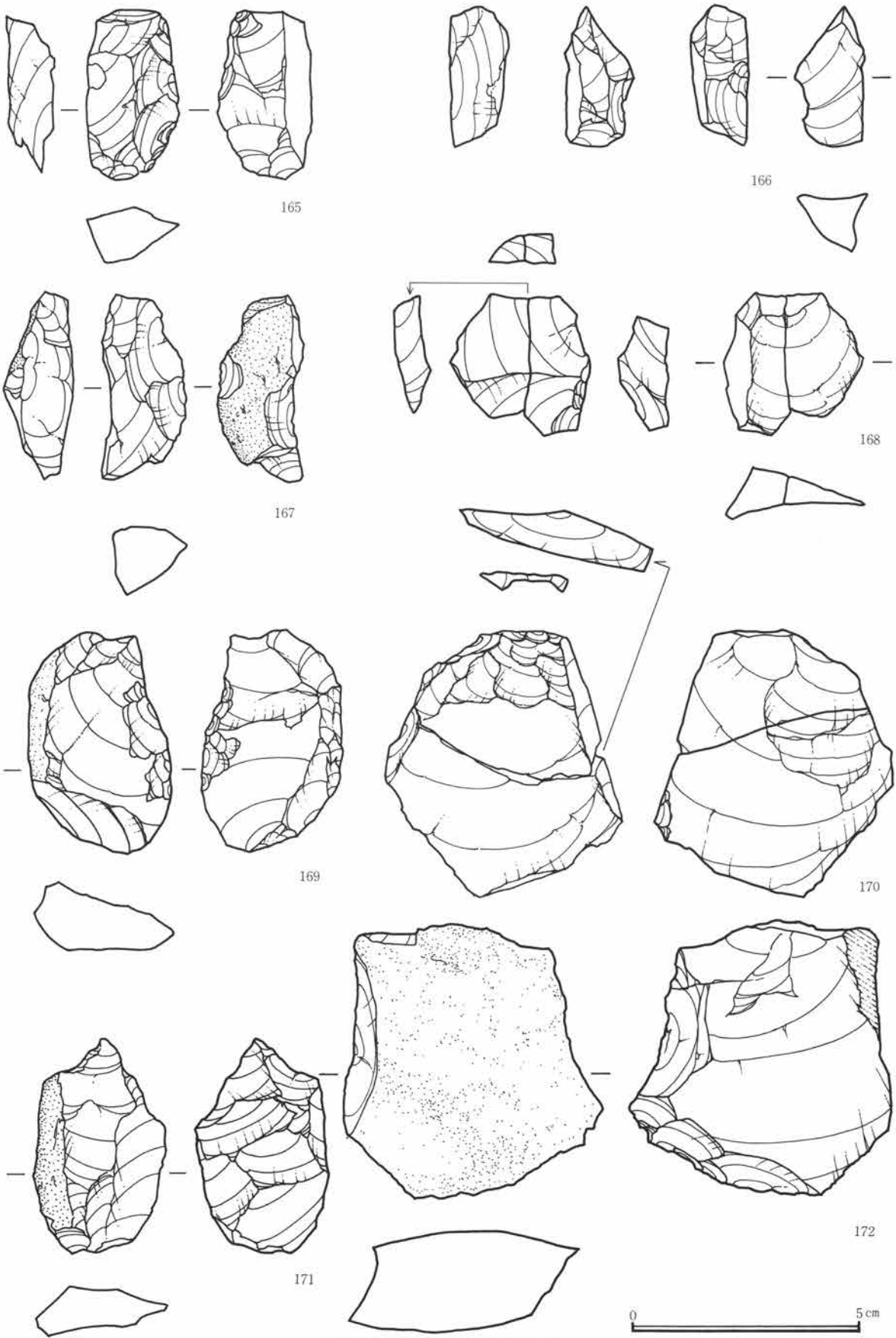
157



第111図 B区出土の石器(5)

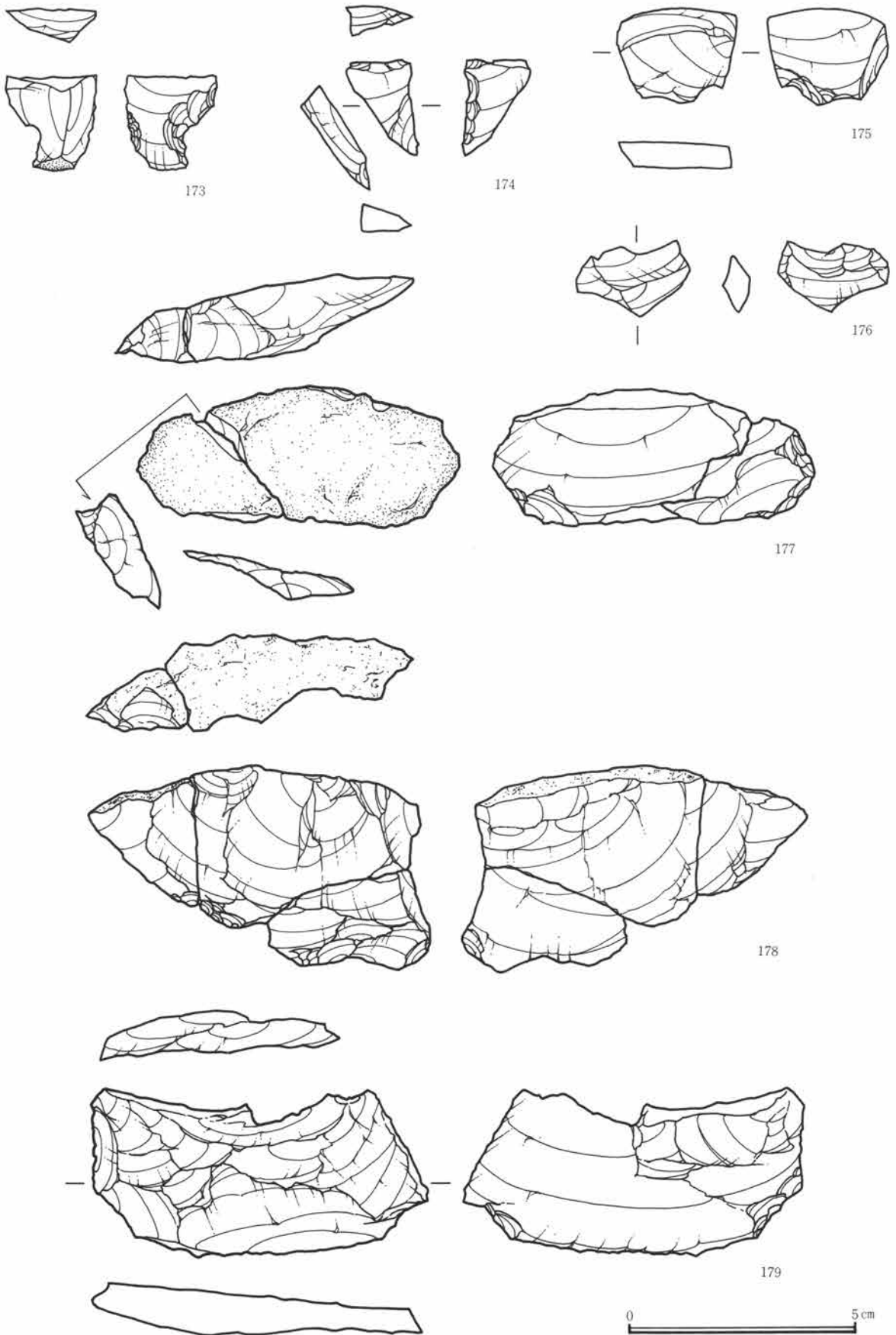


第112図 B区出土の石器(6)



第113図 B区出土の石器(7)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第114図 B区出土の石器(8)

174は、器体の上半を欠損するため素材となる剥片の形状は明確ではないが、遺存部分より縦長の剥片を用いると思われる。右側縁には、表面側から裏面側へ向かう浅い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。明確な使用痕は認められない。長さ2.1cm・幅1.5cm・重さ1.65gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。9号ブロック出土。

175は、平坦な剥離面を打面とし作出される剥片を素材とする。左側縁には、裏面側から表面側へ向かう浅く粗い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。器体の下半を欠損する。明確な使用痕は認められない。長さ2.1cm・幅2.7cm・重さ4.13gを測る。黒色安山岩製。7号ブロック出土。

176は、やや幅広の剥片を素材とする。石器の上半には、表面側から裏面側へ向かう粗い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。明確な使用痕は認められない。長さ1.6cm・幅2.5cm・重さ1.91gを測る。黒色安山岩製。7号ブロック出土。

177は、複剥離面を打面とし作出される幅広の剥片を素材とする。剥片端部には、表面側から裏面側へ向かう浅い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。石器は2点の接合資料(B-57)からなり、調整加工が連続しないことや、明確な使用痕が認められないことから製作時の欠損である可能性が大きい。長さ3.0cm・幅7.1cm・重さ32.03gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。

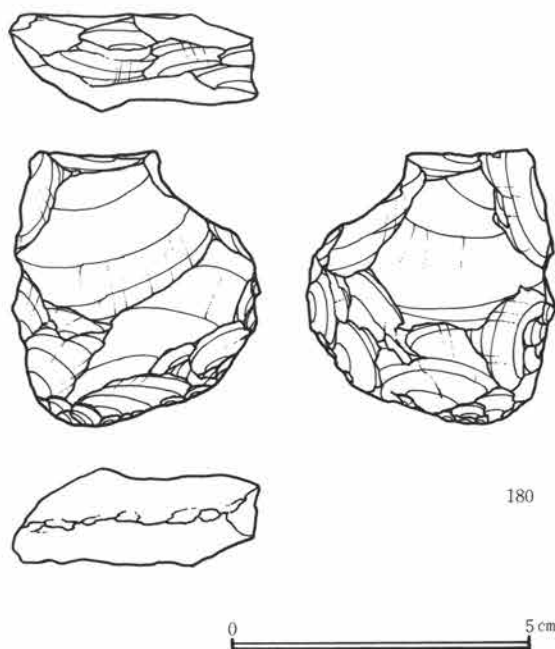
178は、礫面を打面とし作出される幅広の剥片を素材とする。剥片端部には、裏面側から表面側へ向かう浅い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。石器は3点の接合資料(B-118)からなり、調整加工が接合部分を越えて連続することから、使用時あるいは使用後の欠損である可能性が大きい。明確な使用痕は認められない。長さ4.5cm・幅7.6cm・重さ47.37gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。

179は、礫面を打面とし作出される幅広の剥片を素材とする。剥片端部には、表面側から裏面側へ向かう浅い調整加工が施され、石器の機能部が作出される。明確な使用痕は認められない。長さ3.6cm・幅7.4cm・重さ29.33gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。

加工痕ある石器(第115図、180)

図面の記載がなく、石器の出土位置を明示しえないが、表裏両面とも大きく剥離面に覆われる石器・1点がB-II区より出土している。打製石斧に類似する形態的特徴を示すが、接合状態(B-21、第193図)より、石器は打製石斧の製作技術とも相違するなど判然としない。接合状態より石器を検討する必要から一部では説明が重複するが、両項の併読を願いたい。

180は、石器下半では比較的小さな剥離や微細な剥離を、石器上半では比較的大きな剥離を、施すことにより作出される。相互の新旧関係は必ずしも明らかではないが、表裏両面とも大きく剥離面に覆われ、接合状態より判断するならば、「石器下半の剥離→石器上半の剥離」という新旧関係にある。石器の下端には、表裏両面ともつぶれたような微細な剥離が認



第115図 B区出土の石器(9)

I 旧石器時代の遺構と遺物

められ、打製石斧に類似する形態的特徴を示すが、打製石斧の刃部形態あるいは側縁形態とは相違する。同一の母岩(B-18・第175図)より、石器の形状は10cmを越えることはないこと、厚さ(3.6cm)に比べ幅(4.4cm)が狭いこと、などが指摘される。また、1(第193図)を剥離の後、上端より2を剥離するが、石器の作出過程で石器は分割状態を示すなど打製石斧として評価するにあたり、調整加工の在り方が不自然である。以上のように、石器の形態や接合状態および調整加工には、打製石斧の特徴となる情報は存在しない。唯一、打製石斧の頭部破片の可能性が指摘されるが、明らかではない。長さ4.5cm・幅4.1cm・重さ30.87gを測る。黒色頁岩製。II区出土。

使用痕ある剥片(第116~119図、181~194)

使用痕ある剥片は総計16点が出土している。石器には意図する機能を確保することのできる範囲の中で、側縁形状の良好な剥片を用いている。縦長の剥片の場合には側縁を、横長の剥片の場合には剥片端部を、機能部とすることが多い。I区では3号ブロックに、III区では6号ブロックに、多く出土する傾向が指摘されよう。

181は、左右両側縁が平行する、比較的形状の整う縦長の剥片を素材とする。剥片の左側縁には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする石器の上半で欠損するが、使用するには、現状の大きさでは不十分であるため、少なくとも製作時の欠損ではないといえる。長さ2.4cm・幅1.4cm・重さ1.17gを測る。黒色頁岩製。2号ブロック出土。

182は、平坦な剥離面を打面とし作出される横長の剥片を素材とする。剥片端部には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。素材剥片の形状は横長台形状を示し、剥片端部の形状は弧状を呈する。石器の表面には、節理面を大きく残す。長さ3.9cm・幅4.9cm・重さ17.31gを測る。黒色安山岩製。88-B-16グリッドより、単独で出土。

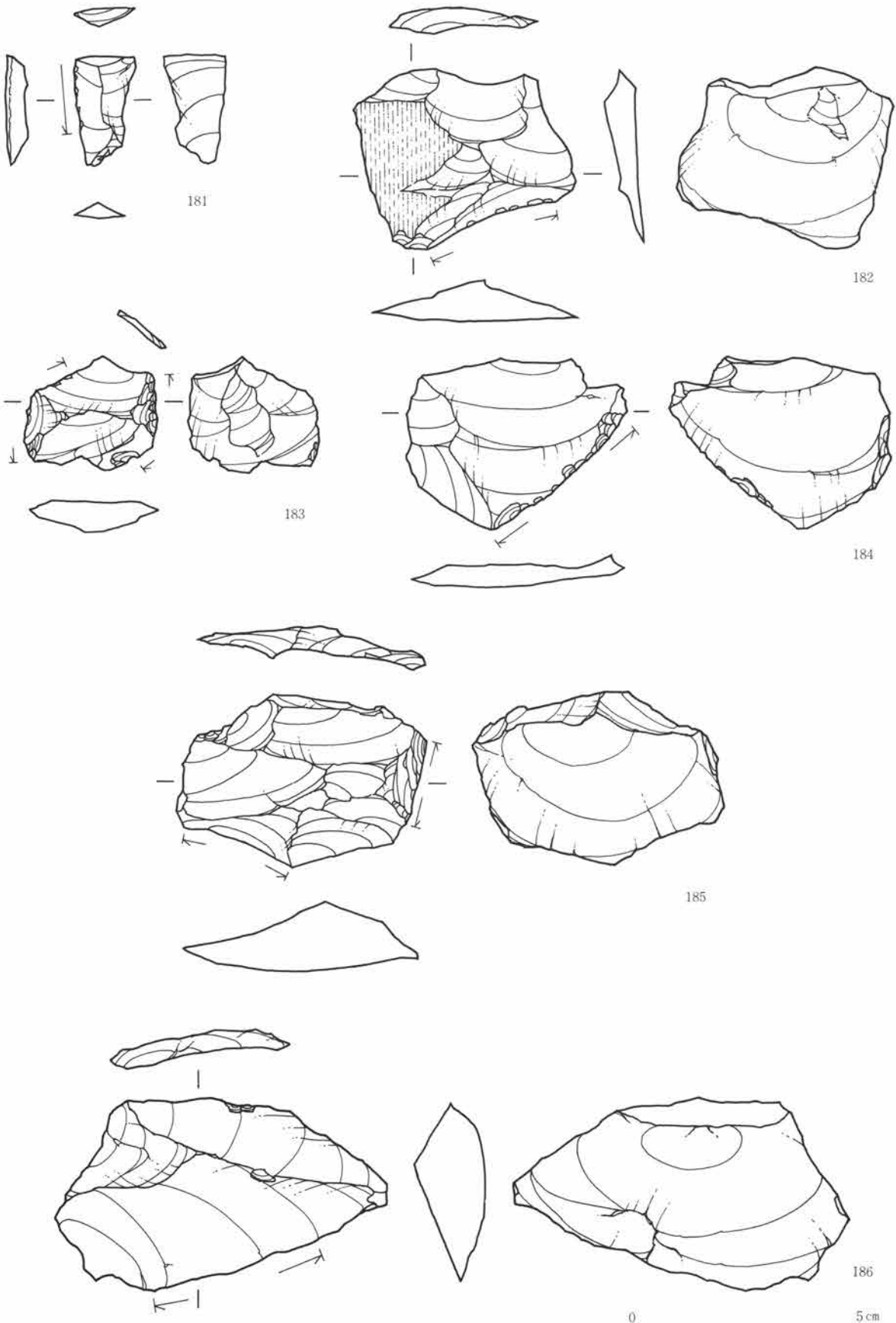
183は、やや幅広の剥片を素材とする。剥片の左右両側縁には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。打面および打瘤は、剥片を剥離する段階で欠損する。長さ2.5cm・幅3.0cm・重さ4.70gを測る。母岩別資料・チャート-3に分類される。6号ブロック出土。

184は、やや幅広の剥片を素材とする。剥片の右側縁には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。打面および打瘤は、剥片を剥離する段階で欠損する。長さ3.7cm・幅4.9cm・重さ10.62gを測る。黒色頁岩製。7号ブロック出土。

185は、平坦な剥離面を打面とし、作出される横長の剥片を素材とする。剥片の右側縁および剥片端部には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。打面調整および頭部調整は認められない。三角形の断面形状を呈する。長さ3.7cm・幅5.5cm・重さ26.28gを測る。黒色頁岩製。6号ブロック出土。

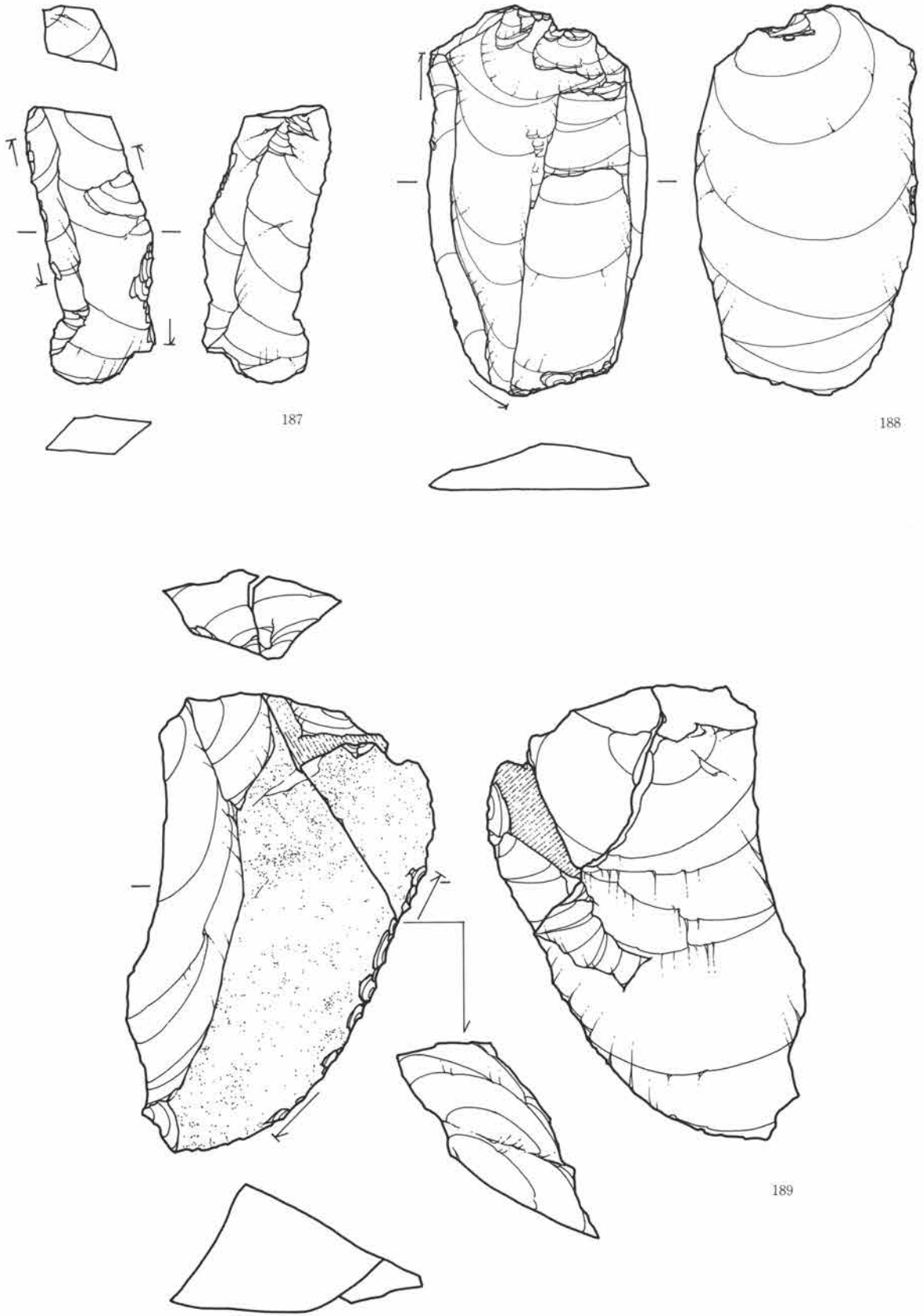
186は、平坦な剥離面を打面とし、作出される横長の剥片を素材とする。剥片端部には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。背面を構成する剥離の方向は剥片の剥離方向と90°異なる。打面調整および頭部調整は認められない。三角形の断面形状を呈する。長さ4.2cm・幅7.3cm・重さ33.79gを測る。黒色安山岩製。5号ブロック出土。

187は、平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長の剥片を素材とする。剥片の左右両側縁には、連続する微細な使用痕が認められ、石器の機能部として用いられている。長さ5.8cm・幅2.8cm・重さ16.02gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

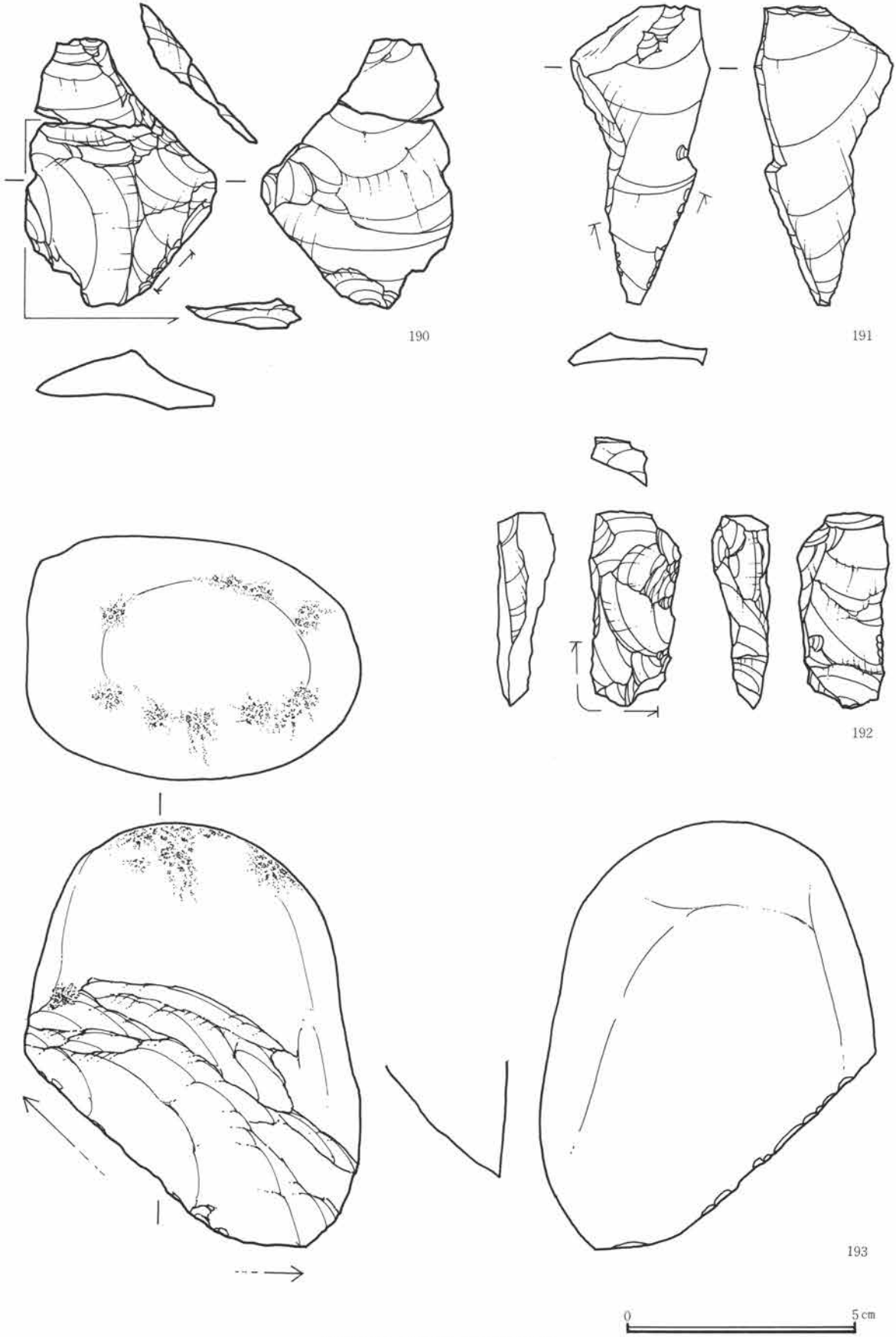


第116図 B区出土の石器(10)

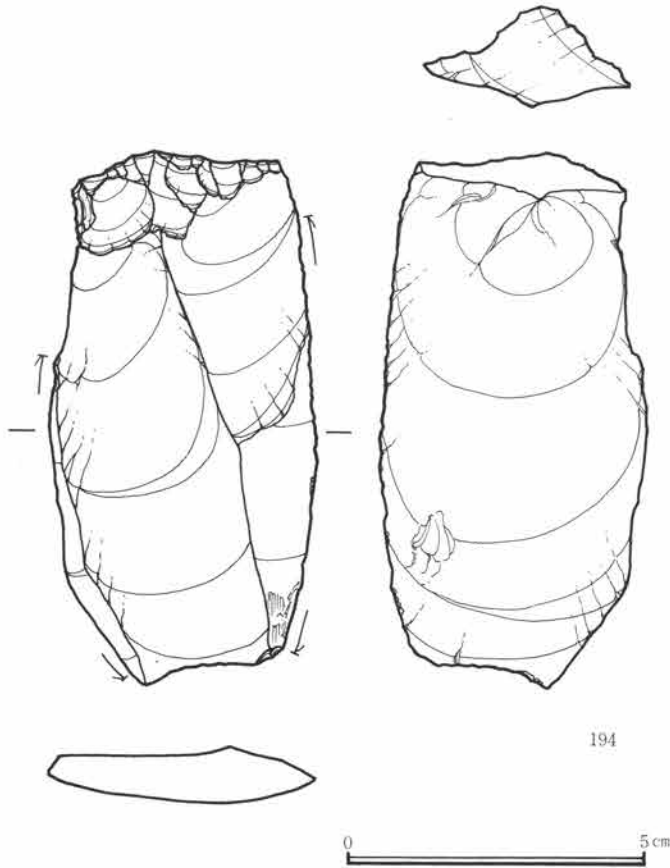
I 旧石器時代の遺構と遺物



第117図 B区出土の石器(11)



第118図 B区出土の石器(12)



第119図 B区出土の石器(13)

188は、左右両側縁が平行する比較的形の整う縦長の剥片を素材とする。剥片端部には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。背面を構成する剥離の方向は剥片の剥離方向に一致する。打面および打瘤は、剥片を剥離する段階で欠損する。長さ7.5cm・幅6.7cm・重さ38.57gを測る。黒色頁岩製。1号ブロック出土。

189は、平坦な剥離面を打面とし、作出されるやや幅広の縦長剥片を素材とする。剥片の右側縁には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。石器は2点の接合資料(B-25)からなるが石器が欠損する要因については判然としない。長さ9.6cm・幅6.8cm・重さ141.57gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

190は、平坦な剥離面を打面とし、作出されるやや幅広の縦長剥片を素材とする。剥片の右側縁には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。石器は2点の接合資料(B-19)からなるが、石器が

欠損する要因については判然としない。長さ5.8cm・幅4.2cm・重さ18.56gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-13に分類される。6号ブロック出土。

191は、平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長の剥片を素材とする。剥片の左右・両側縁には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。長さ6.7cm・幅3.0cm・重さ11.23gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

192は、平坦な剥離面を打面とし、作出される縦長の剥片を素材とする。剥片の左側縁および剥片端部には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。左右の側縁には折れ面が存在し、石器の断面形状は長方形を示す。長さ4.3cm・幅2.0cm・重さ9.32gを測る。母岩別資料・チャート-3に分類される。6号ブロック出土。

193は、楕円形状を呈する河床礫を石器の素材とする。斜めに半載することにより石器の機能部を作出している。石器の下端には連続する微細な使用痕が認められる。なお、小口部分には顕著な集合打痕が認められ、当初石器は敲石として機能したものと推察される。長さ9.2cm・幅7.3cm・重さ403.60gを測る。閃緑岩製。3号ブロック出土。

194は、平坦な剥離面を打面とし、作出される形状の良好な縦長の剥片を素材とする。左右両側縁には、連続する微細な使用痕が認められ、この部分を石器の機能部とする。なお、石器の先端には受熱に起因するとみられる表皮の剥落が認められる。長さ8.9cm・幅4.5cm・重さ51.74gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

石核(第120~137図、195~234)

B区では、10ヶ所のブロックより総計45点の石核が出土している。円礫(原石)を用い、90°の打面転移を介在することにより剥片剥離がおこなわれるが、原石を分割する工程の有無が存在する。また、大形剥片を用いる石核も多く存在するが、これらの石核には打面の作出などの剥片剥離工程のなかで生じる素材を転用する場合が多い。石核の形状より、以下の3群に大別し、記述する。

河床礫あるいは分割礫を用い剥片剥離がおこなわれる一群(195~206)。剥片剥離は礫面を打面とする場合や、剥離により打面を作出する場合がみられる。同一の打面より連続して剥片剥離がおこなわれ、90°の打面転移を介在し、剥離作業が繰り返される。B区より出土する石器の一群には、上述の剥片剥離を基調とするほか、小口部分の表裏両面で交互に剥離をおこなう事例(第126図、205)や、求心的剥離をおこなう事例(第121図、196)などが存在する。

やや厚みのある剥片を用い、剥片剥離がおこなわれる一群(207~218)。剥片の打面部分や剥片端部のほか、側縁部分などで剥片剥離はおこなわれるが、出土資料により剥離作業に選択される部位はさまざまであり、規格性には乏しい。

大形の盤状剥片を用い、剥片剥離がおこなわれる一群(219~233)。打面部分や剥片端部あるいは側縁部分で剥片剥離がおこなわれ、石核素材の表裏両面を作業面とする事例と一方を作業面とする事例とが存在する。

195は、円礫を石核素材に用いる。正面および裏面を作業面とするが、正面の作業面では平坦な剥離面を、裏面の作業面では礫面を、それぞれ打面とし大きく左右に打点を振りながら剥片剥離がおこなわれる。石核の正面側では5枚前後の、裏面側では3枚前後の、剥片を剥離する。石核には明確な打面調整は認められないが、石核形状より頭部調整の存在が推察される。長さ5.9cm・幅6.6cm・重さ271.10gを測る。黒色頁岩製。6号ブロック出土。

196は、円礫を石核素材に用いる。礫面を打面とし石核の周縁を廻るように剥片剥離がおこなわれるほか、石核の正面には90°方向の相違する剥離面が認められる。石核には明確な打面調整は認められない。石器には20点を越える剥片が接合(B-59)する。楔状の石核形状を呈する。長さ3.0cm・幅4.8cm・重さ38.97gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。3号ブロック出土。

197は、円礫を石核素材に用いる。石核の形状は断面楔状を呈し、石核の表裏両面および左右の側縁で、剥片を剥離する。平坦な自然面、ないし、剥離面を打面とし、石核の表面では上下両端の打面より剥離され、各々4枚前後の剥片を剥離し、石核の裏面では礫面を打面とし2枚の剥片を剥離している。なお、側面での剥離作業は、石核の表裏両面の剥離作業に先行するようである。長さ3.4cm・幅5.1cm・重さ60.90gを測る。黒色安山岩製。11号ブロック出土。

198は、円礫を石核素材に用いる。平坦な剥離面を打面とし、石核の表裏両面および側面を作業面とする剥片剥離がおこなわれる。上下両端の打面より剥片剥離がおこなわれ、上下両端とも3枚前後の剥片が剥離されるほかに、左側縁を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、3枚前後の剥片が剥離される。そしてさらに、石核は90°打面転移され、右側縁において表裏両面を作業面とする剥離がおこなわれ、5枚前後の剥片が剥離される。明確な打面調整は認められないが、石核形状には頭部調整の存在が推察されよう。側縁には大きく礫面を残す。長さ9.6cm・幅9.2cm・重さ563.50gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。12号ブロック出土。

199は、円礫を石核素材に用いる。石核の表裏両面では礫面および平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれる。石核の正面では、上設の打面より3枚前後の剥片が、下設の打面より2枚の剥片が、石核の裏

I 旧石器時代の遺構と遺物

面では両端の打面より各々2枚の剥片がそれぞれ剥離される。なお、側縁には90°方向の相違する剥離面が認められるが、側縁の剥離は石核の表裏両面の剥離に先行する。明確な打面調整は認められないが、石核形状より頭部調整の存在が推察されよう。長さ4.3cm・幅5.8cm・重さ94.96gを測る。接合資料B-66。黒色安山岩製。11号ブロック出土。

200は、円礫を石核素材に用いる。石核の表面側では、礫面および平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれる。右側縁・石核上面・左側縁の順に打面を移動し、90°打面転移をおこなうことにより、剥片剥離は展開する。裏面側には、大きく礫面を残す。長さ4.6cm・幅6.2cm・重さ85.80gを測る。接合資料B-18。母岩別資料・黒色頁岩-13に分類される。9号ブロック出土。

201は、円礫を石核素材に用いる。平坦な剥離面を打面・表裏両面を作業面とし、上下両端より剥片剥離がおこなわれ、上端の打面より5枚前後の剥片が、下端の打面より10枚前後の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。上設の打面では、大きく左右に打点を振りながら剥片剥離が行われ、下設の打面では、交互剥離となる。断面、楔状の石核形状を呈する。長さ5.6cm・幅7.2cm・重さ118.50gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。

202は、円礫を石核素材に用いる。平坦な剥離面を打面とし周辺を作業面とする剥片剥離がおこなわれる。石核形状に示されるように、石核の正面や裏面には90°方向の相違する剥片剥離が認められ、打面転移をおこなうことにより、剥片剥離は連続して展開する。裏面には大きく礫面を残す。明確な打面調整は認められないが、石核形状には頭部調整の存在が推察される。石器には20点を越える剥片が接合(B-22)する。長さ4.4cm・幅6.8cm・重さ240.60gを測る。黒色頁岩製。12号ブロック出土。

203は、円礫を石核素材に用いる。平坦な剥離面を打面とし、石核の表面側を作業面とする剥片剥離がおこなわれる。石核上面→左側縁→石核下面の順に打面を移動し、90°打面転移をおこなうことにより、剥片剥離は展開する。石核には明確な打面調整は認められない。楔状の石核形状を呈する。長さ4.3cm・幅8.2cm・重さ108.94gを測る。黒色頁岩製。4号ブロック出土。

204は、円礫を石核素材に用いる。90°打面転移をおこなうことにより、剥片剥離がおこなわれる。石核下面では礫面を打面とする剥片剥離がおこなわれるが、石核の正面・上面や左右の側縁ではいずれも剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれる。石核には明確な打面調整は認められない。裏面側には大きく礫面を残す。接合資料(B-122)。長さ5.8cm・幅6.8cm・重さ240.60gを測る。黒色頁岩製。12号ブロック出土。

205は、円礫を石核素材に用いる。小口部分より表裏両面を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、石核の表面側で5枚以上の剥片が、石核の裏面側で2枚以上の剥片が、それぞれ剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。石器には5点を越える剥片が接合(B-23)する。長さ9.6cm・幅8.3cm・重さ469.70gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-12bに分類される。12号ブロック出土。

206は、円礫を分割することにより得られる石核素材を用いる。この分割面より打面を左側縁側に作出し、分割面を作業面とする剥片剥離がおこなわれるが、右側縁側では分割面を打面とし石核の周辺を作業面とする剥片剥離がおこなわれる。明確な打面調整は認められないが、石核形状には頭部調整の存在が推察される。多面体状の石核形状を呈す。石器には10点を越える剥片が接合(B-17)する。長さ8.6cm・幅8.9cm・重さ589.61gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-16に分類される。6号ブロック出土。

207は、やや厚みのある剥片を石核素材に用いる。剥片剥離は右側縁側の表裏両面、および、石核下面でおこなわれ、右側縁側の表裏両面では2枚以上の剥片が、石核下面では1枚以上の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。多面体状の石核形状を呈す。長さ3.0cm・幅4.6cm・重さ33.20gを測る。

黒色安山岩製。87-B-14グリッドより単独出土。

208は、やや厚みのある剥片を石核素材に用いる。剥片剥離は石核上面および側縁の平坦な剥離面を打面とし、90°打面転移をおこなうことにより剥片剥離が展開する。石核には明確な打面調整は認められない。多面体状の石核形状を呈す。石器には4点の剥片が接合(B-120)する。長さ3.7cm・幅3.5cm・重さ32.71gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。6号ブロック出土。

209は、やや厚みのある剥片を石核素材に用いる。石核の表裏両面および左右の側面では平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、数枚の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。多面体状の石核形状を呈す。接合資料(B-59)。長さ3.5cm・幅4.7cm・重さ48.97gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。3号ブロック出土。

210は、やや厚みのある剥片を石核素材に用いる。石核の正面では平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれる。石核には明確な打面調整は認められない。多面体状の石核形状を呈す。石器には20点を越える剥片が接合(B-15)する。裏面側には大きく節理面を残す。長さ3.5cm・幅5.1cm・重さ57.14gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-11bに分類される。6号ブロック出土。

211は、分割礫を石核素材に用いる。平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、数枚の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。多面体状の石核形状を呈す。石器には5点の剥片が接合(B-119)する。長さ3.5cm・幅3.2cm・重さ39.21gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。6号ブロック出土。

212は、やや厚みのある剥片を石核素材に用いる。平坦な剥離面を打面とし、石核の正面および側縁を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、数枚の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。多面体状の石核形状を呈す。接合資料(B-64)。長さ3.2cm・幅4.5cm・重さ34.43gを測る。黒色安山岩製。6号ブロック出土。

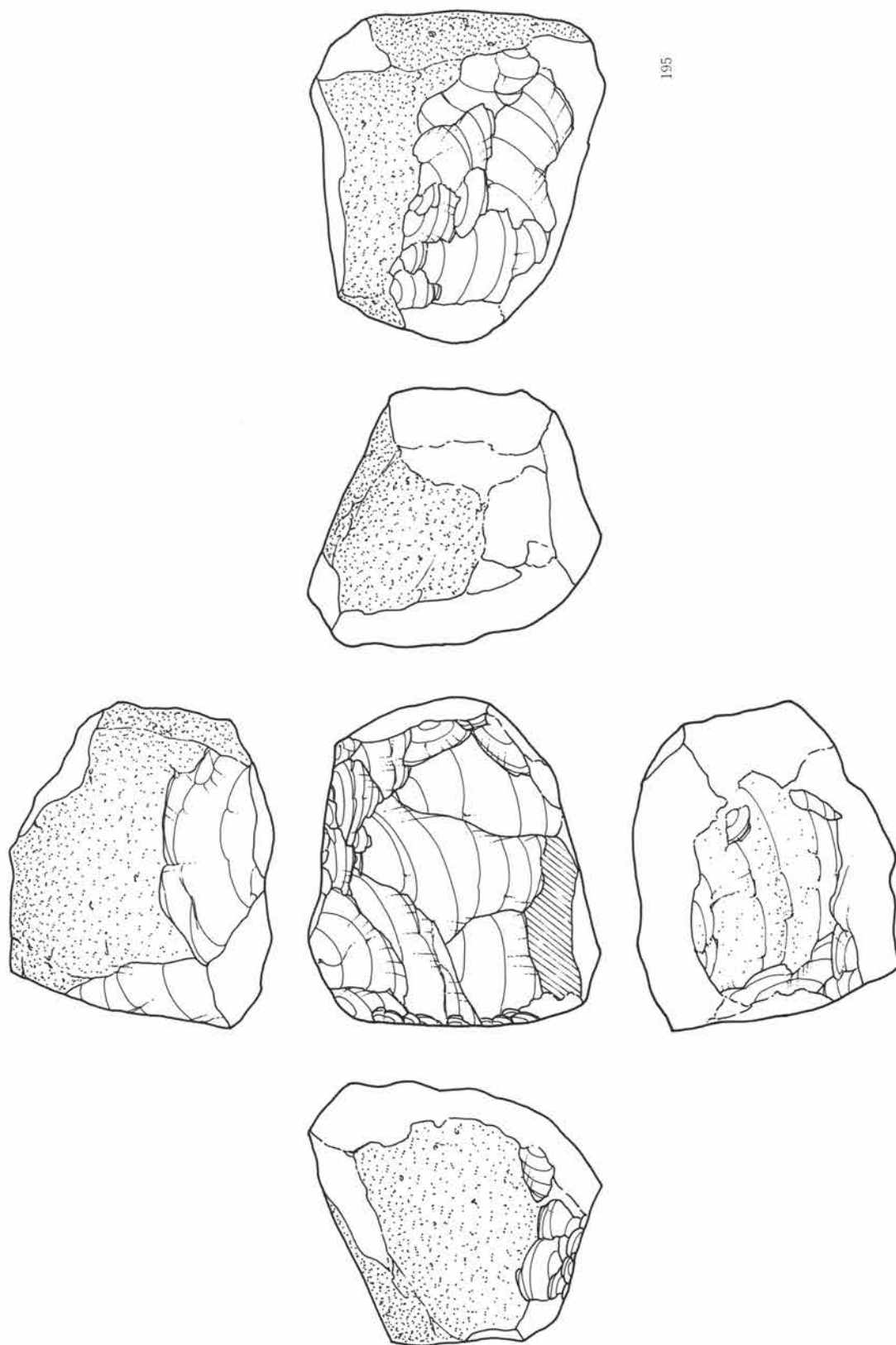
213は、分割礫を石核素材に用いる。礫面および平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、数枚の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。多面体状の石核形状を呈す。接合資料(B-66)。長さ3.6cm・幅3.0cm・重さ32.94gを測る。黒色安山岩製。11号ブロック出土。

214は、やや厚みのある剥片を石核素材に用いる。石核の正面および左右両側縁では礫面および平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、2枚前後の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。裏面側には大きく礫面を残す。多面体状の石核形状を呈す。接合資料(B-73)。長さ2.9cm・幅4.4cm・重さ37.86gを測る。黒色安山岩製。86-B-9グリッドで単独出土。

215は、分割礫を石核素材に用いる。礫面および平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、数枚の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。多面体状の石核形状を呈す。接合資料(B-65)。長さ3.5cm・幅5.0cm・重さ36.62gを測る。黒色安山岩製。7号ブロック出土。

216は、やや厚みのある剥片を石核素材に用いる。平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、剥片1枚が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。裏面側には礫面を大きく残す。多面体状の石核形状を呈す。接合資料(B-15)。長さ5.9cm・幅2.6cm・重さ29.88gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-11bに分類される。9号ブロック出土。

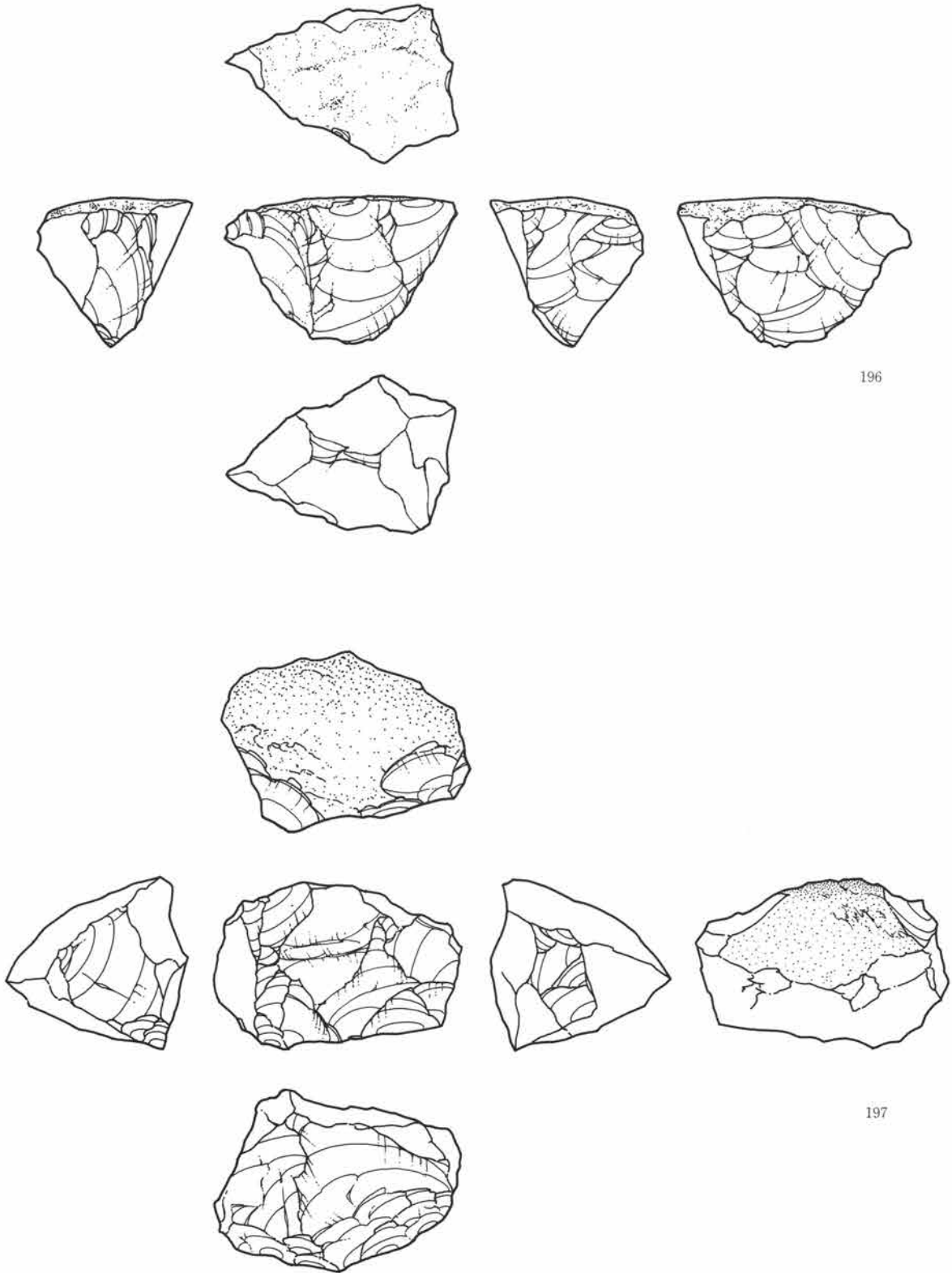
217は、やや厚みのある剥片を石核素材に用いる。平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、石核の表面側では上下両端で3枚前後の剥片が、裏面側では側縁で3枚前後の剥片が、それぞれ剥離される。石核の正面には上下両端の打面より剥片剥離がおこなわれるほか、右側縁では表裏両面を作業面とする剥片剥



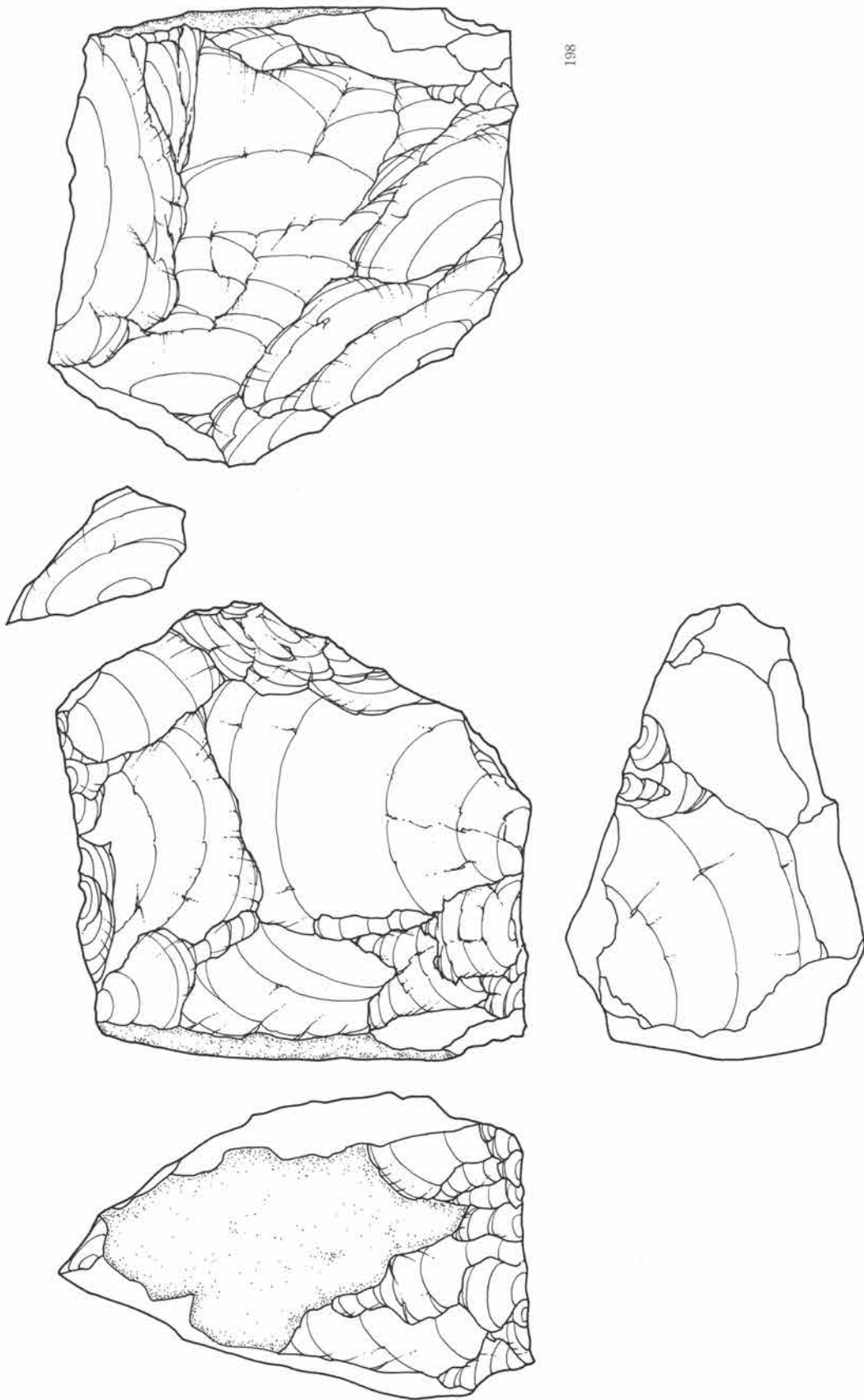
195



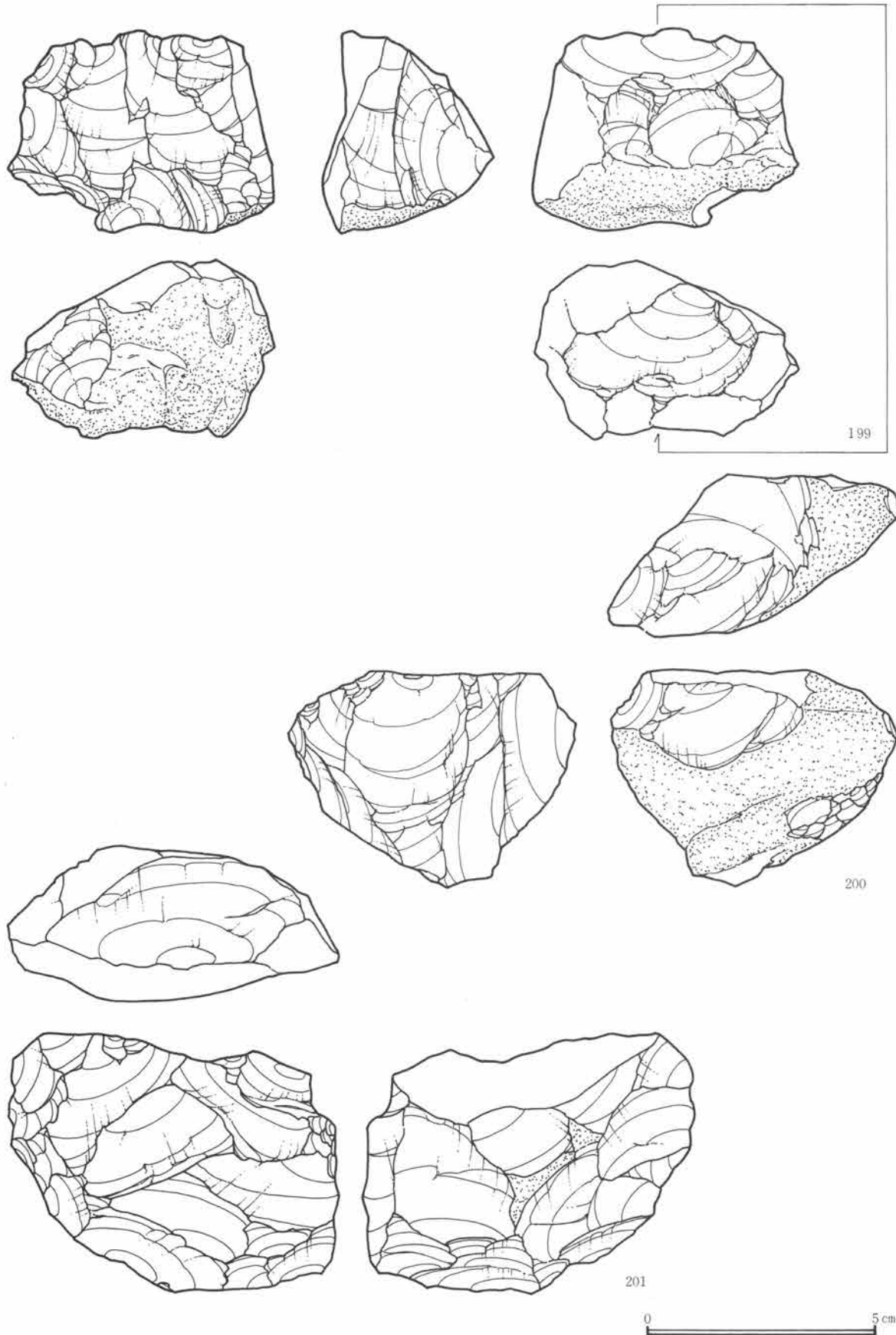
第120図 B区出土の石器(14)



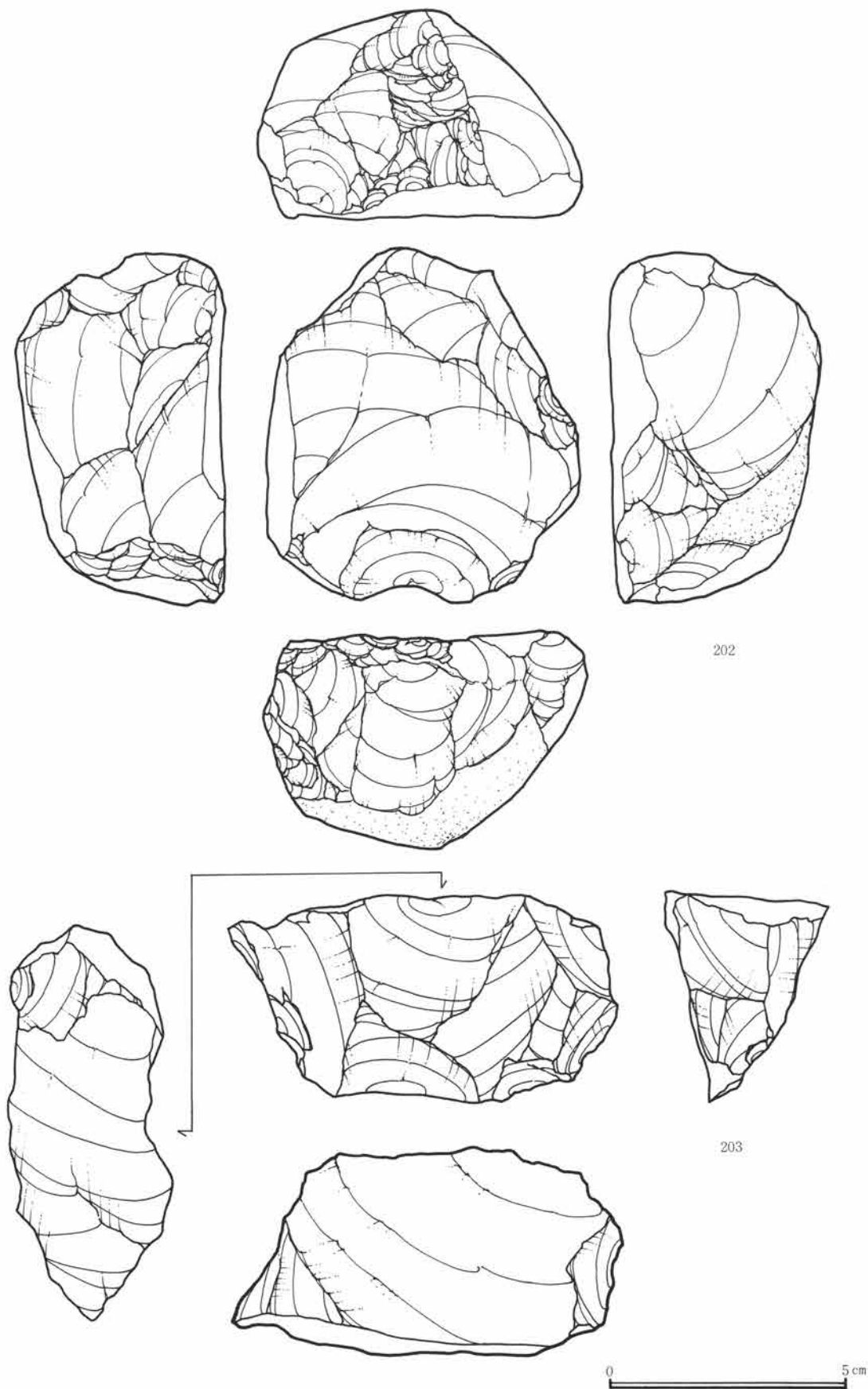
第121図 B区出土の石器(15)



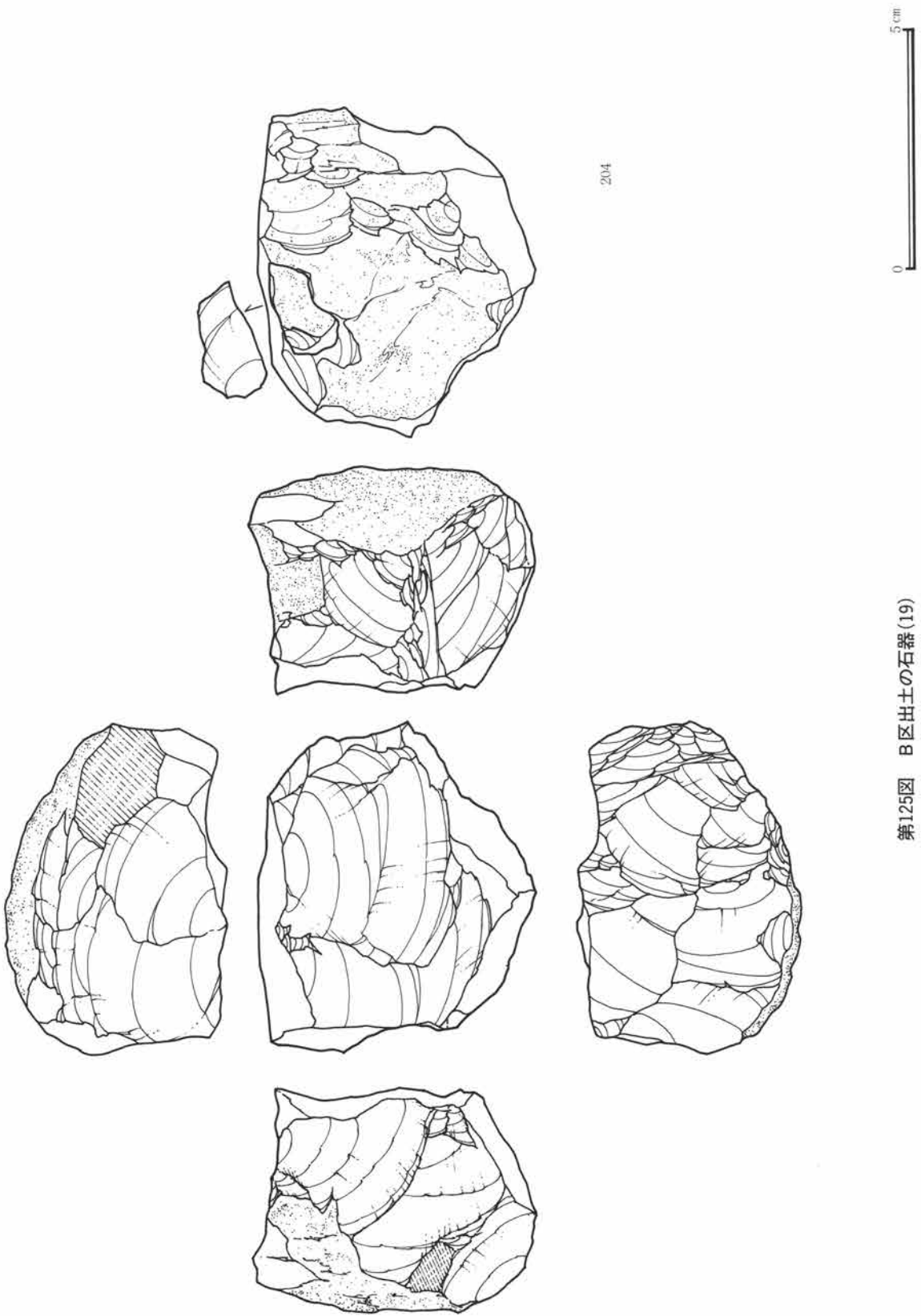
第122図 B区出土の石器(16)



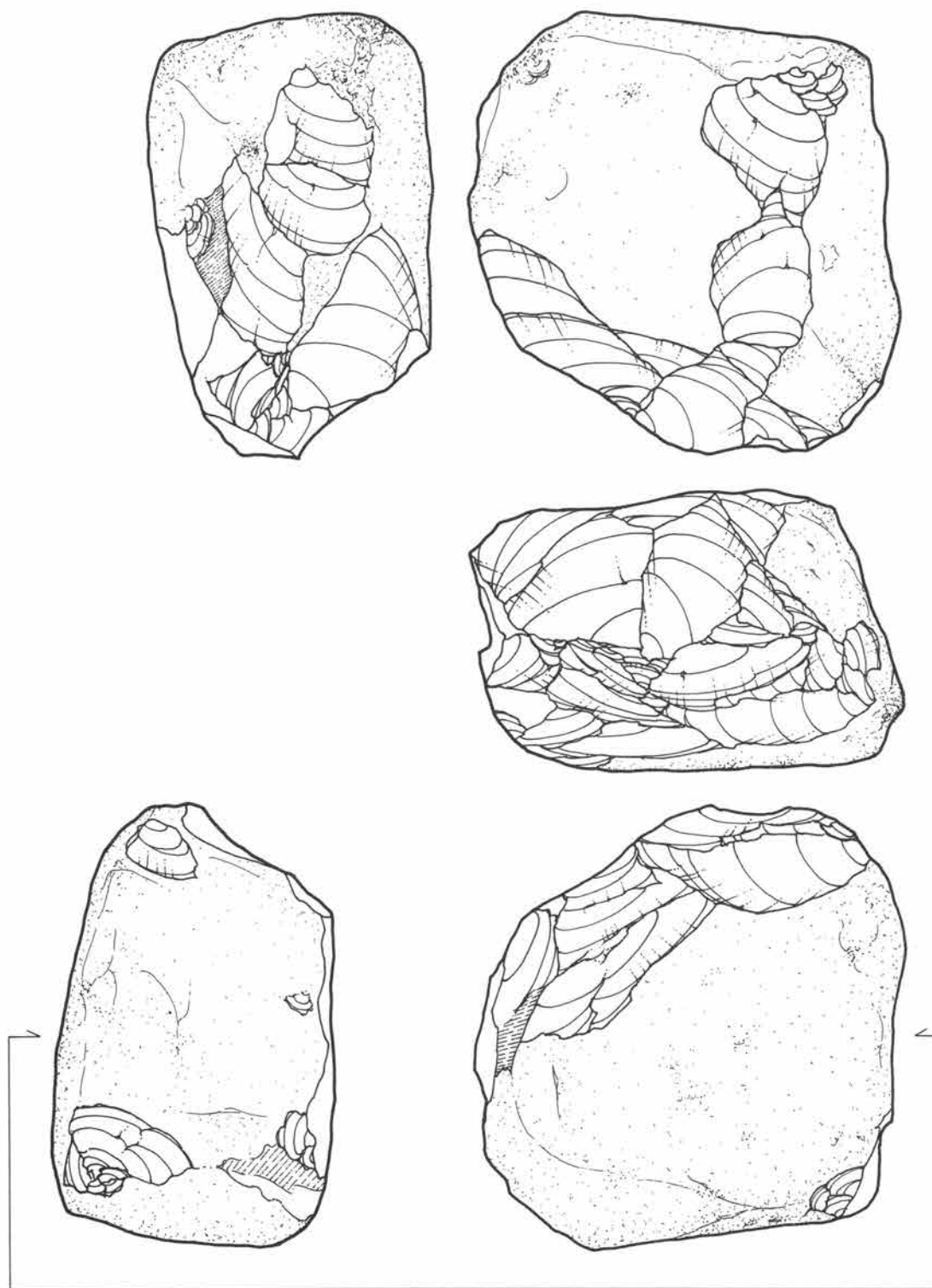
第123図 B区出土の石器(17)



第124図 B区出土の石器(18)



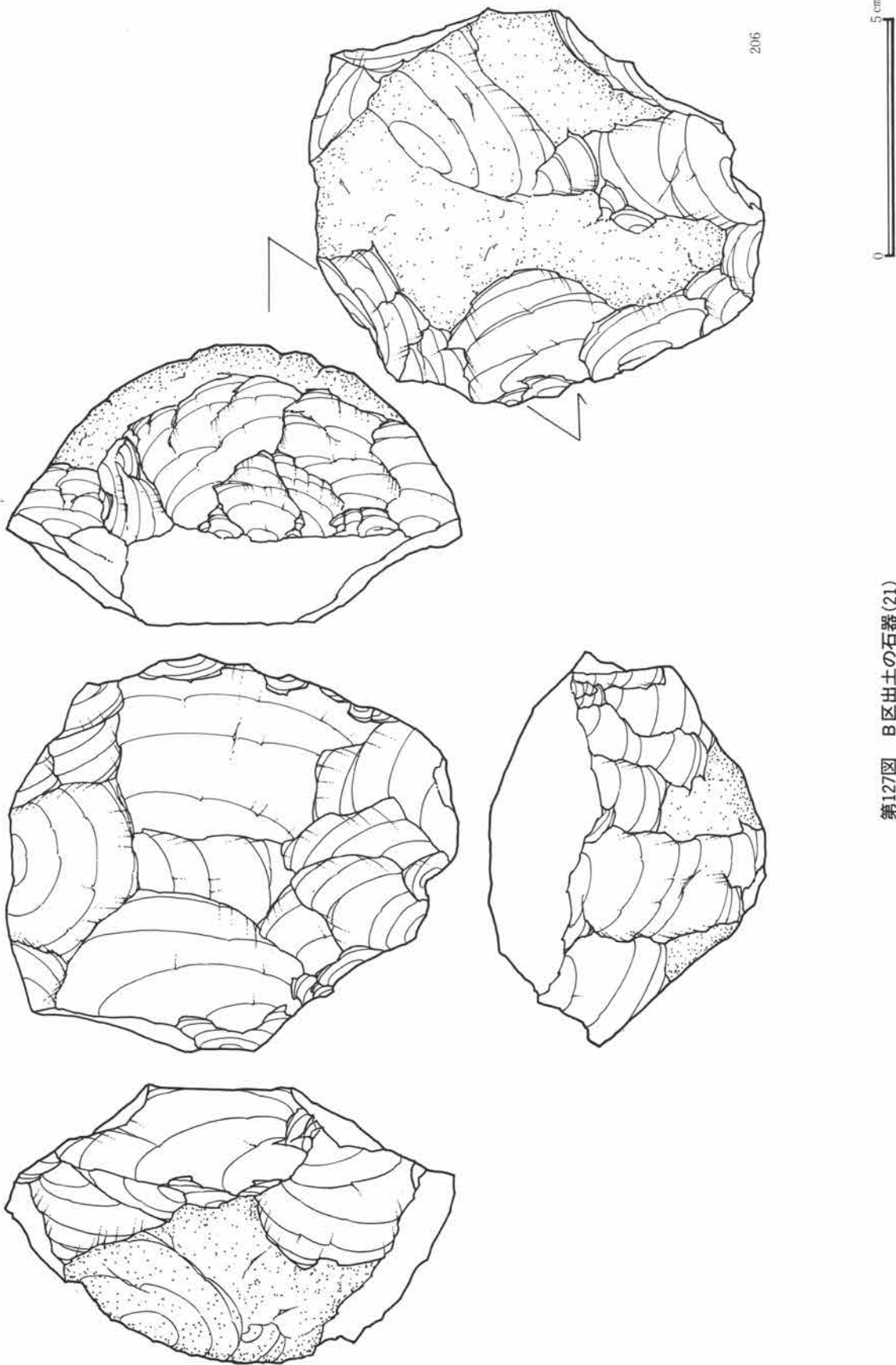
第125図 B区出土の石器(19)



205

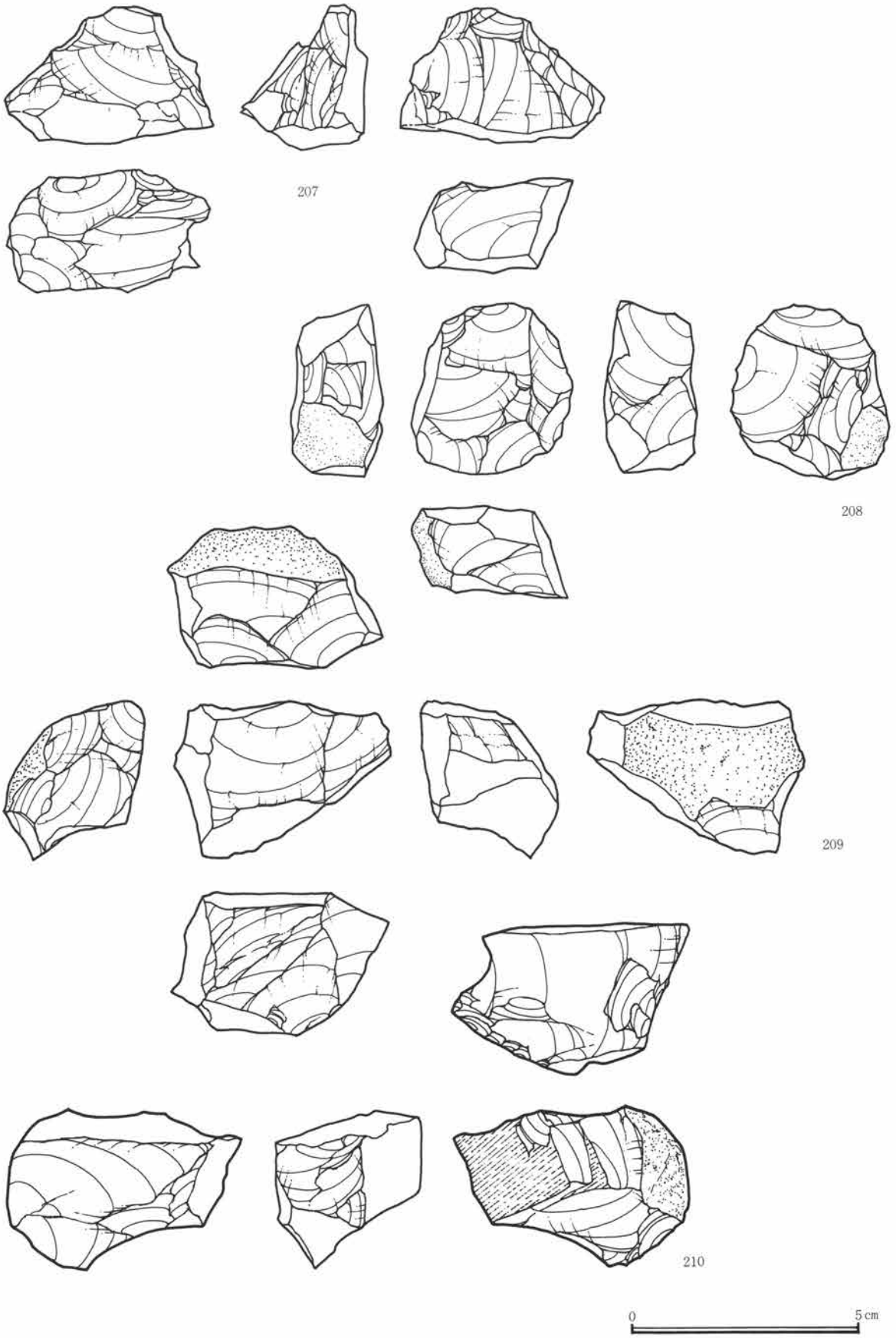


第126図 B区出土の石器(20)

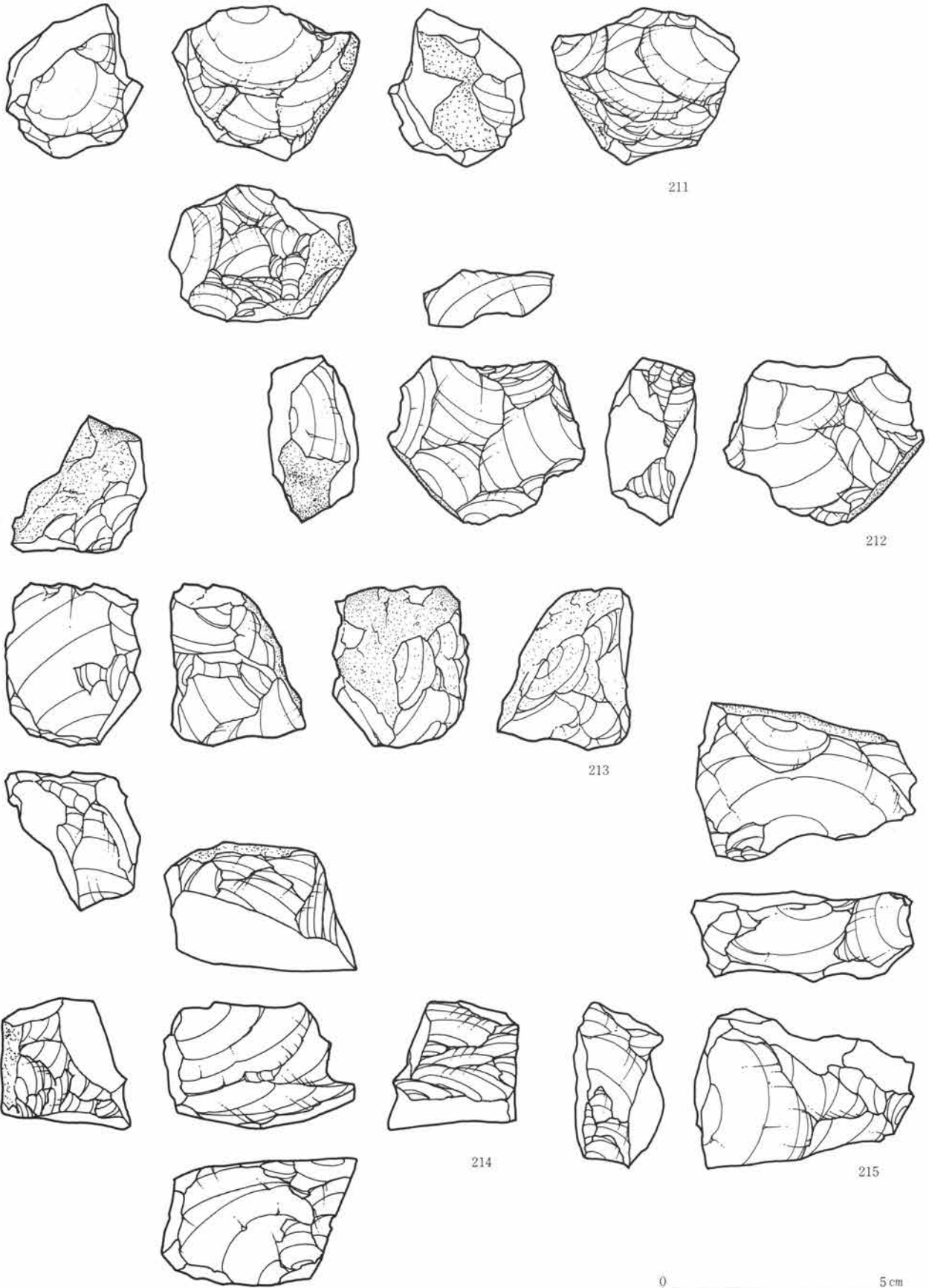


第127図 B区出土の石器(21)

I 旧石器時代の遺構と遺物

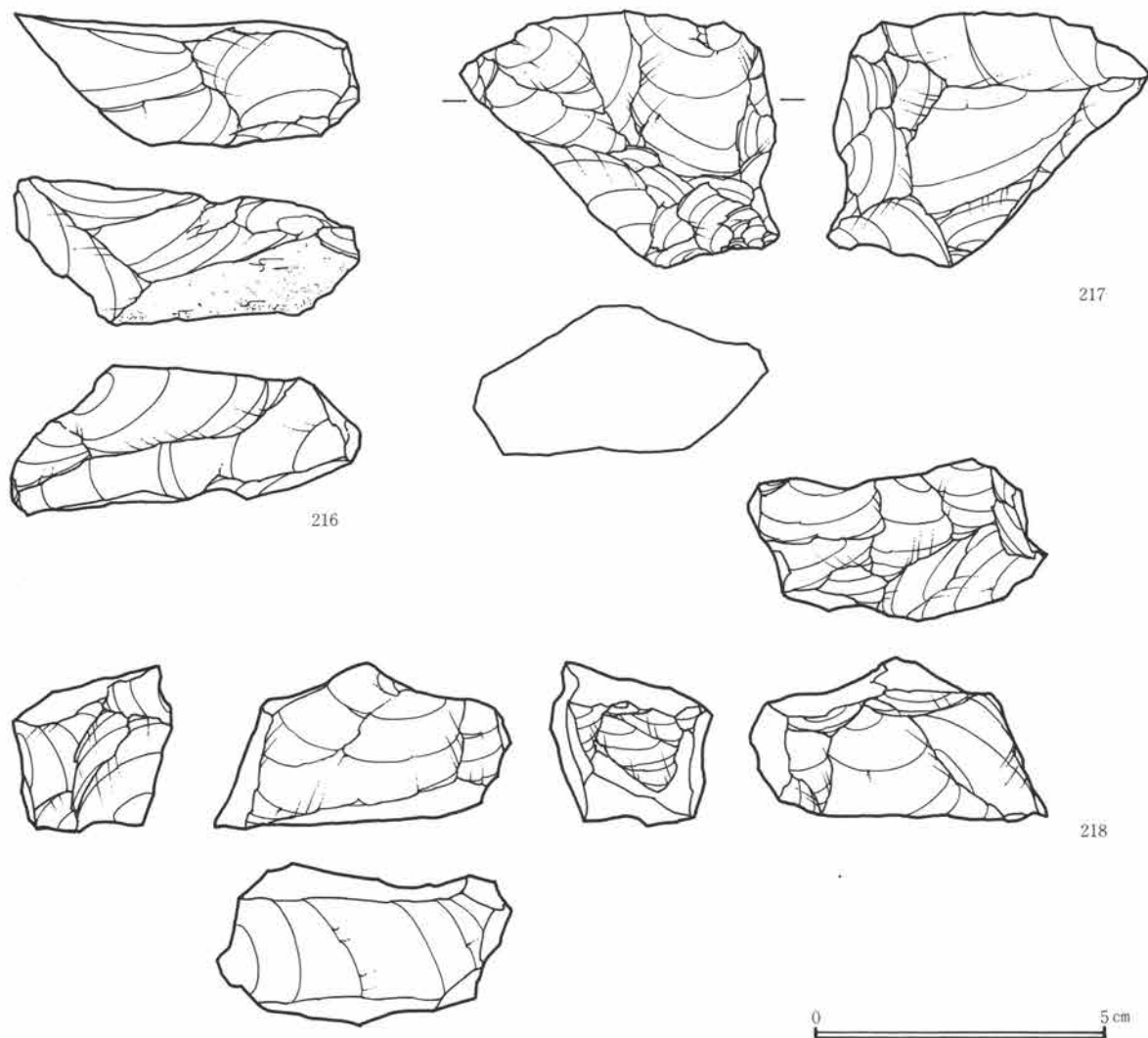


第128図 B区出土の石器(22)



第129図 B区出土の石器(23)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第130図 B区出土の石器(24)

離がおこなわれる。石核には明確な打面調整は認められない。多面体状の石核形状を呈す。接合資料(B-22)。長さ4.3cm・幅5.5cm・重さ55.37gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-14に分類される。6号ブロック出土。

218は、やや厚みのある剥片を石核素材に用いる。上下両端の剥離面を打面とし、石核の表裏両面を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、数枚の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。多面体状の石核形状を呈す。石器には3点の剥片が接合(B-116)する。長さ2.7cm・幅5.1cm・重さ38.13gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。6号ブロック出土。

219は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の裏面側では打面および側縁を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、打面部では3枚前後の剥片が、側縁部では1枚の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。長さ4.3cm・幅5.7cm・重さ50.50gを測る。黒色安山岩製。7号ブロック出土。

220は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の裏面側では打面および側縁を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、打面部では1枚の剥片が、側縁部では5枚前後の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。長さ4.0cm・幅4.6cm・重さ30.90gを測る。黒色安山岩製。9号ブロック出土。

221は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の裏面側では側縁を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、2枚の剥片が剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。長さ4.9cm・幅5.3cm・重さ48.88gを測る。黒色安山岩製。6号ブロック出土。

222は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の表裏両面では剥片の打面部周辺を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、数枚の剥片が剥離される。明確な打面調整は認められない。石核には2点の剥片が接合(B-26)する。長さ6.2cm・幅6.4cm・重さ64.48gを測る。黒色頁岩製。7号ブロック出土。

223は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の裏面側では左右の側縁を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、右側縁側では4枚前後の剥片が、左側縁側では2枚前後の剥片が、剥離される。石核には明確な打面調整は認められない。長さ8.3cm・幅7.9cm・重さ113.53gを測る。黒色安山岩製。4号ブロック出土。

224は、大形の縦長剥片を石核素材に用いる。剥片の表面側を打面とし、剥片端部を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、数枚の剥片が剥離される。明確な打面調整は認められない。石核には1点の剥片が接合(B-24)する。長さ11.4cm・幅5.7cm・重さ167.10gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

225は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の表面側では側縁を作業面とする剥離が、剥片端部では側縁を打面とする剥離が、おこなわれる。明確な打面調整は認められない。石核には10点を越える剥片が接合(B-63)する。長さ5.6cm・幅7.0cm・重さ92.60gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。

226は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。石核の正面では礫面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、右側縁・石核の上面・左側縁の順に打面を移動し、90°打面転移をおこなうことにより剥片剥離が展開する。明確な打面調整は認められない。石核には5点の剥片が接合(B-19)する。長さ6.6cm・幅4.9cm・重さ79.58gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-13に分類される。7号ブロック出土。

227は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。石核の表面側では礫面を打面とする剥離により、石核の裏面側では側縁の剥離面を打面とする剥離により、小形の剥片が連続して剥離される。接合資料(B-59)。長さ5.1cm・幅4.8cm・重さ50.49gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。3号ブロック出土。

228は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の打面部および側縁部では、平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれる。石核には明確な打面調整は認められない。接合資料(B-15)。長さ2.6cm・幅5.2cm・重さ78.27gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-11bに分類される。6号ブロック出土。

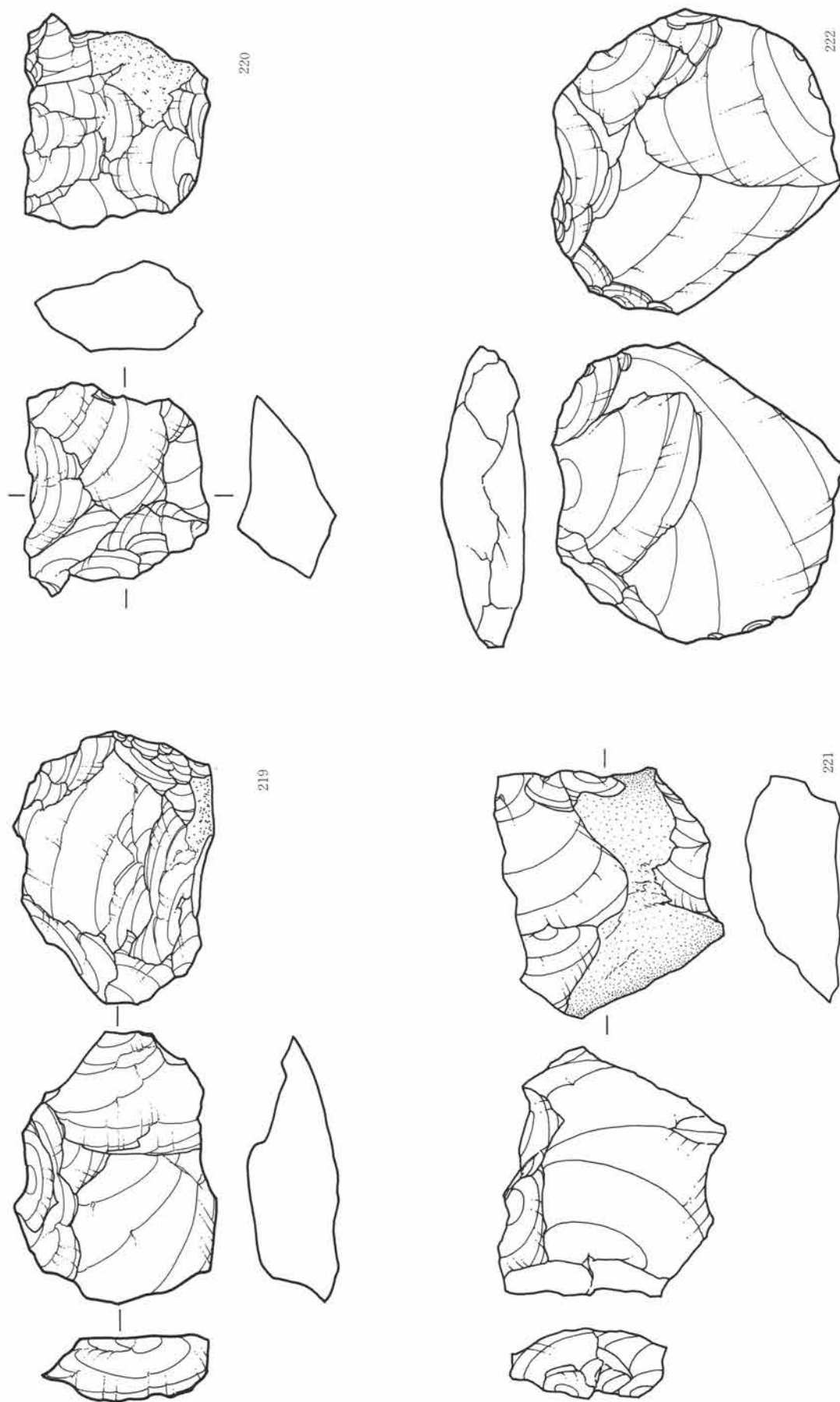
229は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の打面部では平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、5枚前後の剥片が剥離される。明確な打面調整は認められない。接合資料(B-15)。長さ2.9cm・幅5.3cm・重さ69.30gを測る。母岩別資料・黒色頁岩-11bに分類される。6号ブロック出土。

230は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片端部では平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれる。明確な打面調整は認められない。接合資料(B-70)。長さ3.6cm・幅6.9cm・重さ146.46gを測る。黒色安山岩製。6号ブロック出土。

231は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の周辺では平坦な剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、10枚前後の剥片が連続して剥離される。明確な打面調整は認められない。石核には4点の剥片が接合(B-50)する。亀甲状の石核形状を呈する。長さ6.0cm・幅9.1cm・重さ156.72gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。

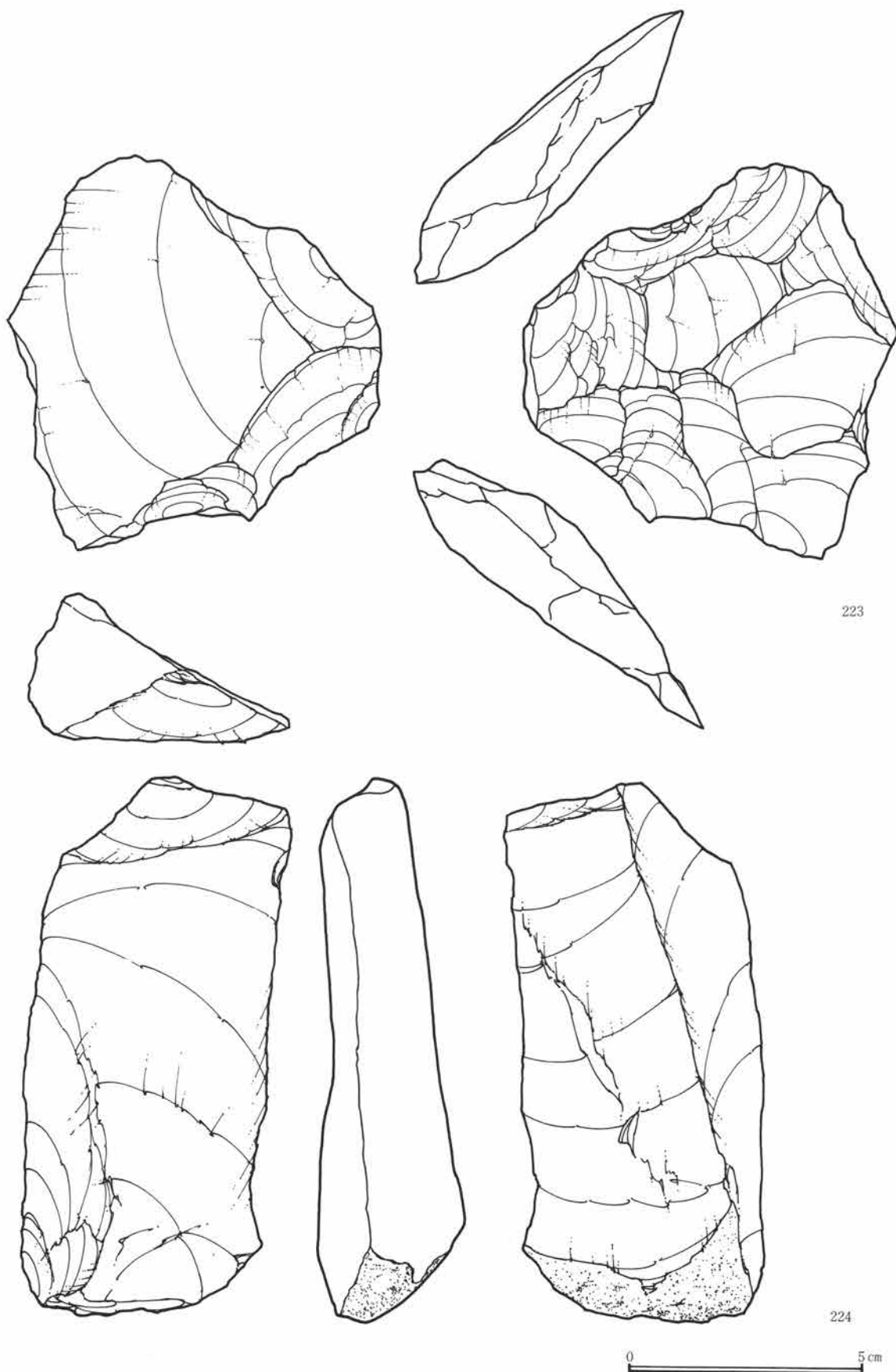
232は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の打面部および右側縁では表裏両面を作業面とする剥離がおこなわれ、打面部および右側縁では5枚前後の剥片を交互に剥離する。明確な打面調整は認められないが、石核形状より頭部調整の存在が推察される。石核には5点の剥片が接合(B-44)する。長さ7.5cm・幅

I 旧石器時代の遺構と遺物



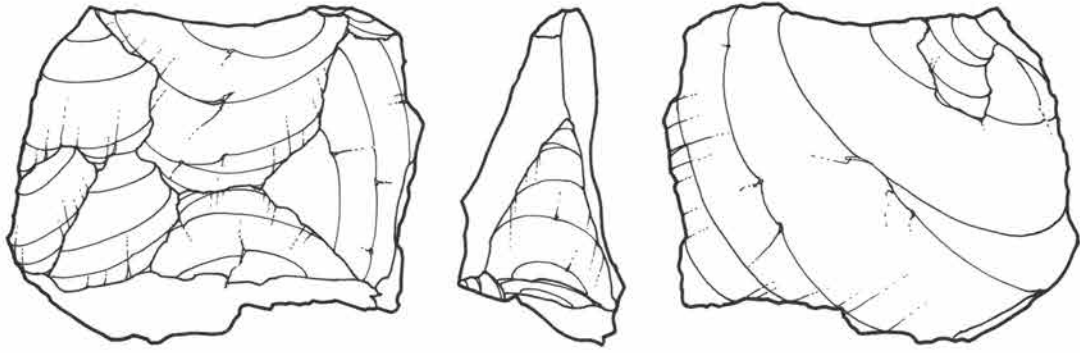
0 5 cm

第131図 B区出土の石器(25)

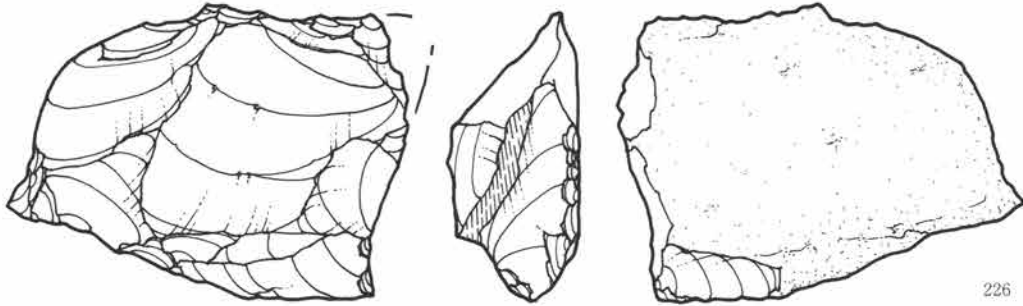


第132図 B区出土の石器(26)

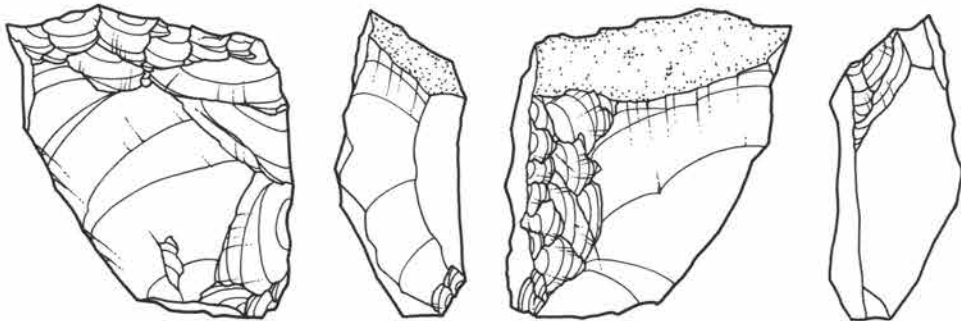
I 旧石器時代の遺構と遺物



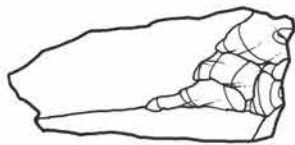
225



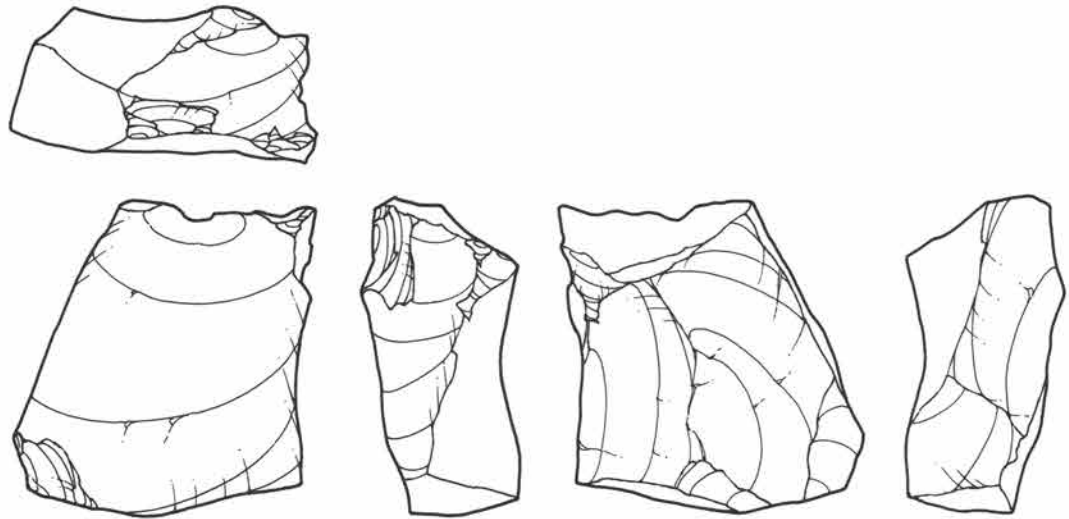
226



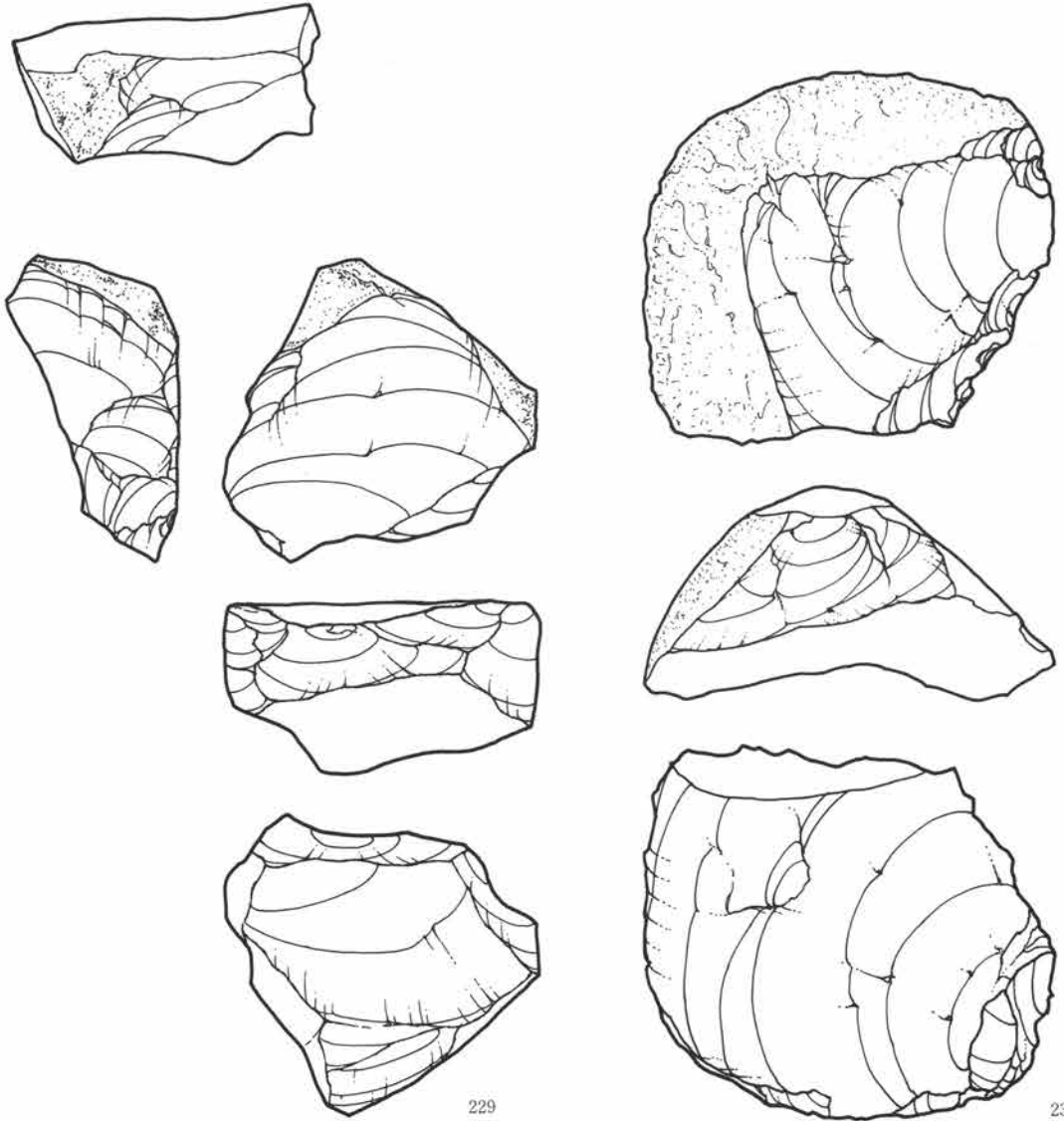
227



第133図 B区出土の石器(27)



228

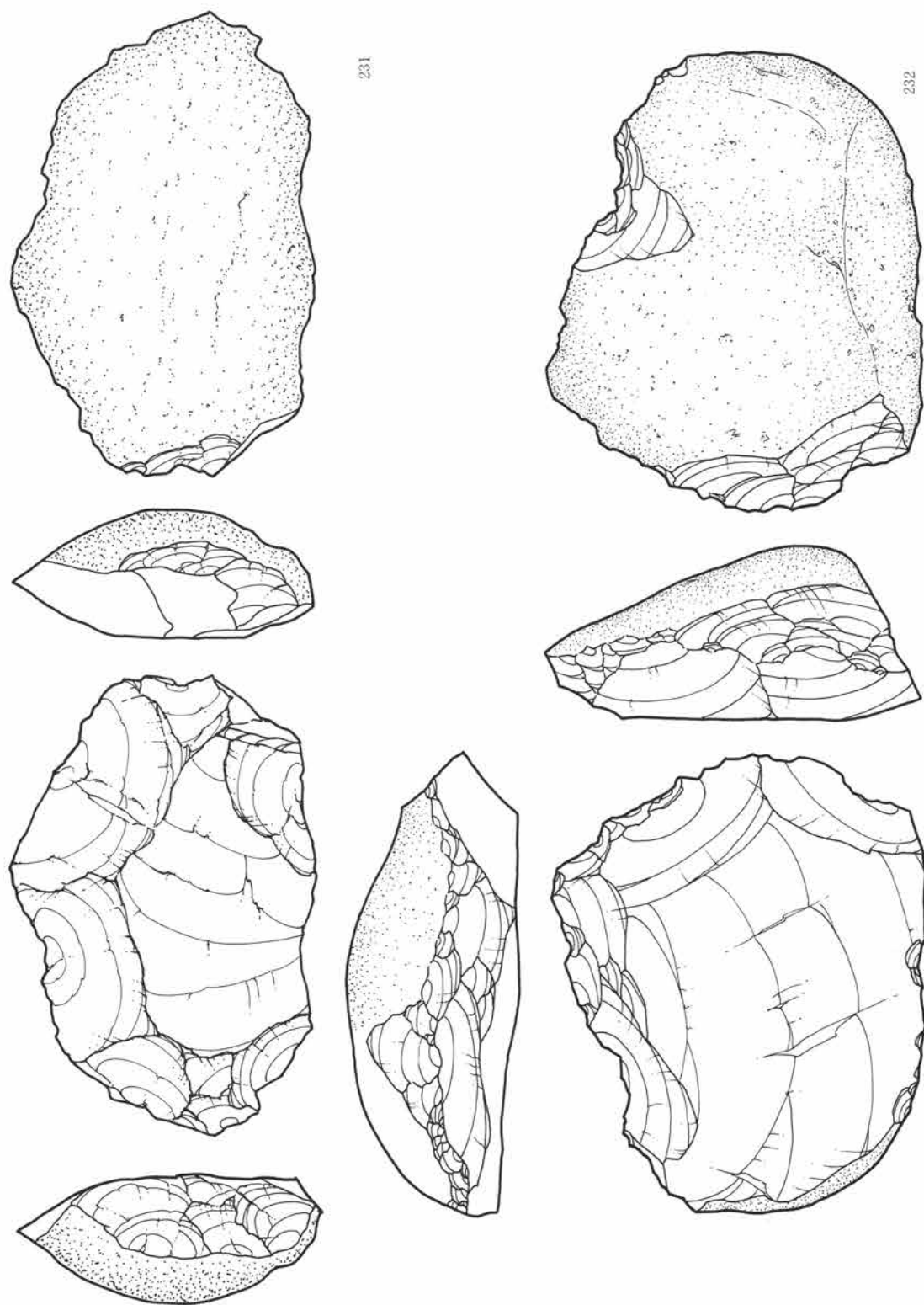


229

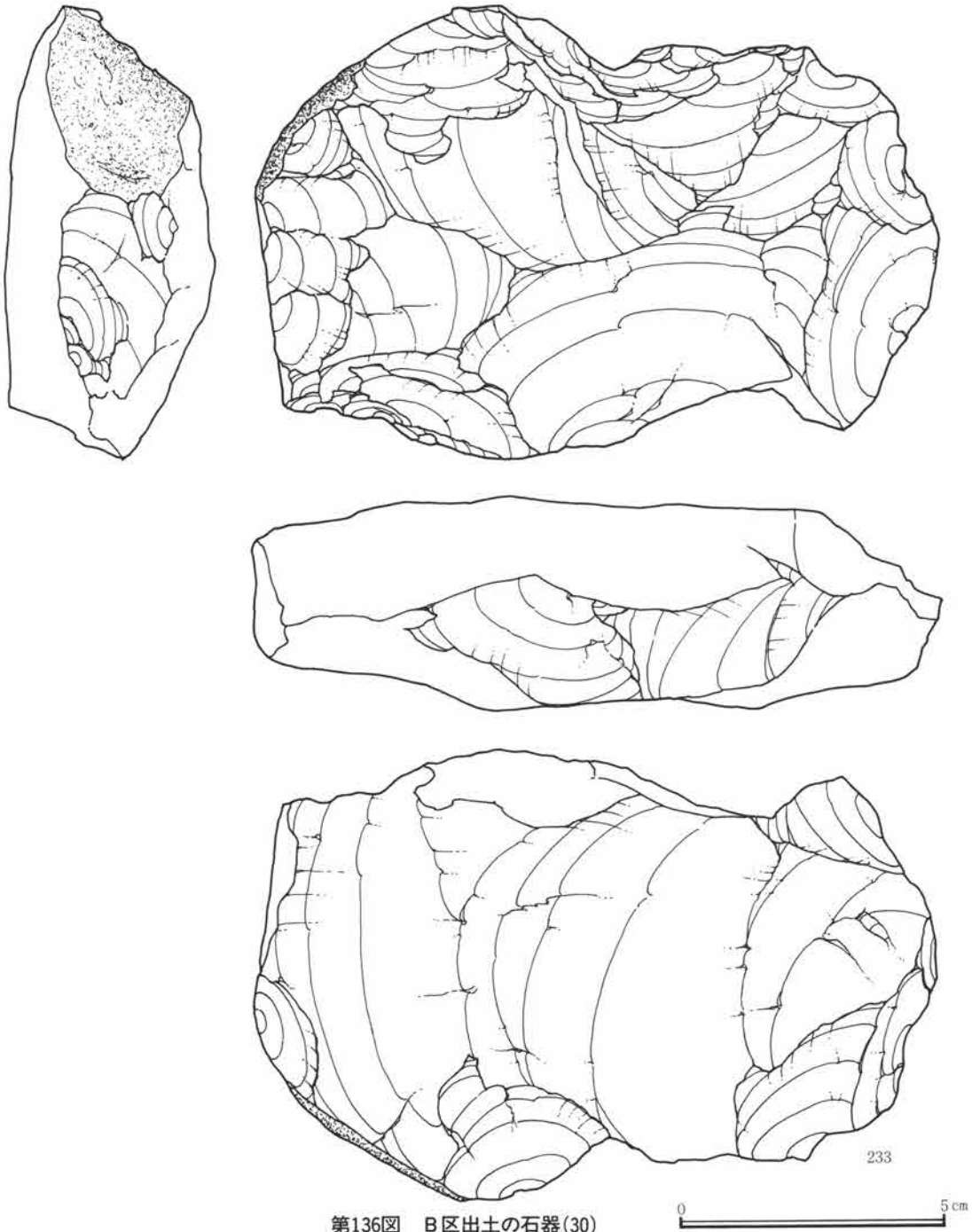
230



第134図 B区出土の石器(28)



第135図 B区出土の石器(29)

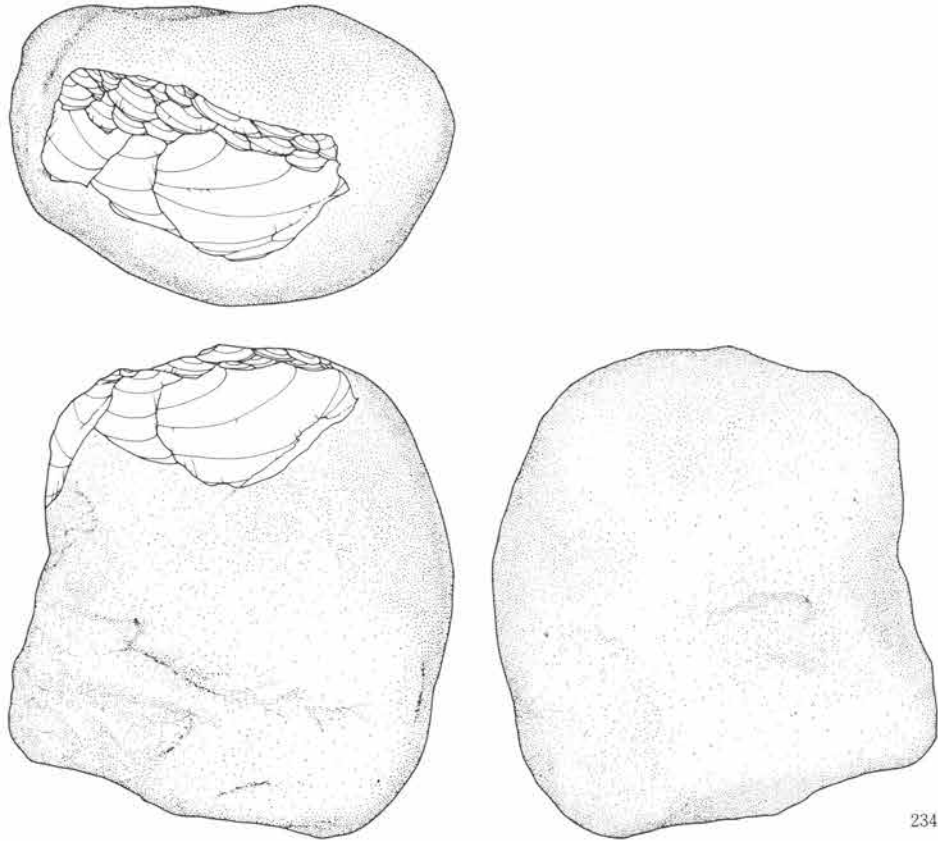


第136図 B区出土の石器(30)

9.0cm・重さ565.74gを測る。母岩別資料・頁岩-1に分類される。11号ブロック出土。

233は、大形の盤状剥片を石核素材に用いる。剥片の表面側では、左右・両側縁および打面部を作業面とする剥片剥離がおこなわれ、左側縁では7枚前後の剥片が、右側縁では2枚前後の剥片が剥離されるほか、打面部では2枚前後の剥片が剥離される。明確な打面調整は認められない。長さ12.9cm・幅8.5cm・重さ507.3gを測る。黒色頁岩製。7号ブロック出土。

234は、円礫を石核素材に用いる。礫面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、3枚前後の剥片が剥離される。長さ16.2cm・幅15.0cm・重さ3,200.0gを測る。黒色安山岩製。3号ブロック出土。



第137図 B区出土の石器(31)

0 10cm

縦長剥片(第138・139図、235～243)

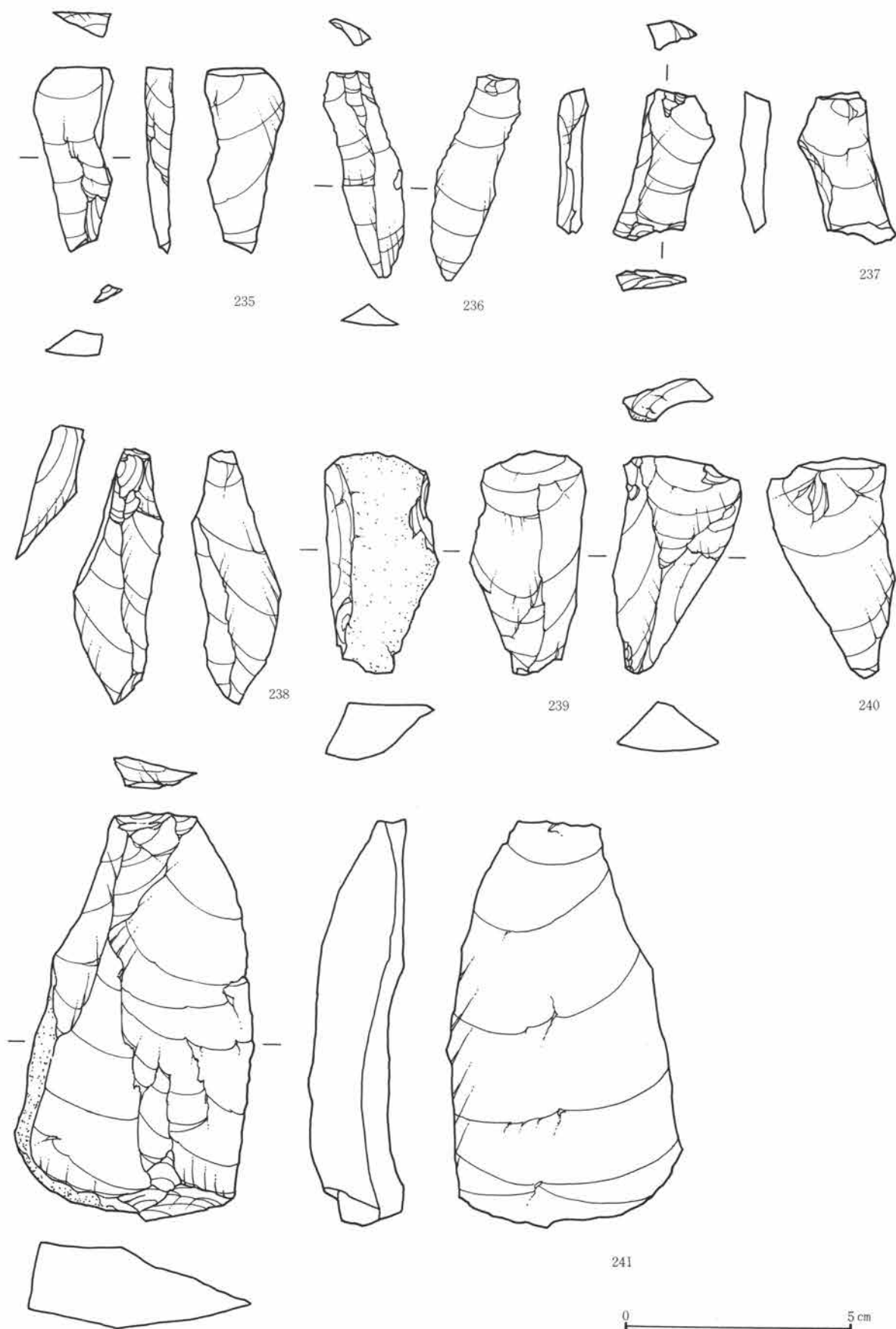
縦長剥片は、5ヶ所のブロックより総計10点が出土している。多くは平坦な剥離面を打面とし作出されるが、A区出土の縦長剥片に比較し、B区出土の縦長剥片は左右の側縁が平行する形状の整う事例は少ない。剥片の背面を構成する剥離の方向は剥片を剥離する方向に一致するが、方向の相違する剥離もわずかではあるが認められる。出土資料には微細な頭部調整は認められないが、剥片の稜上を粗く除去する手法が認められる。打点は背面を構成する稜上を選択することが多い。

235は、平坦な剥離面を打面とし作出される。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。頭部調整および打面調整は認められない。剥片を剥離する段階で、側縁を欠損する。先鋭な剥片形状を示す。長さ4.4cm・幅1.8cm・重さ4.12gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

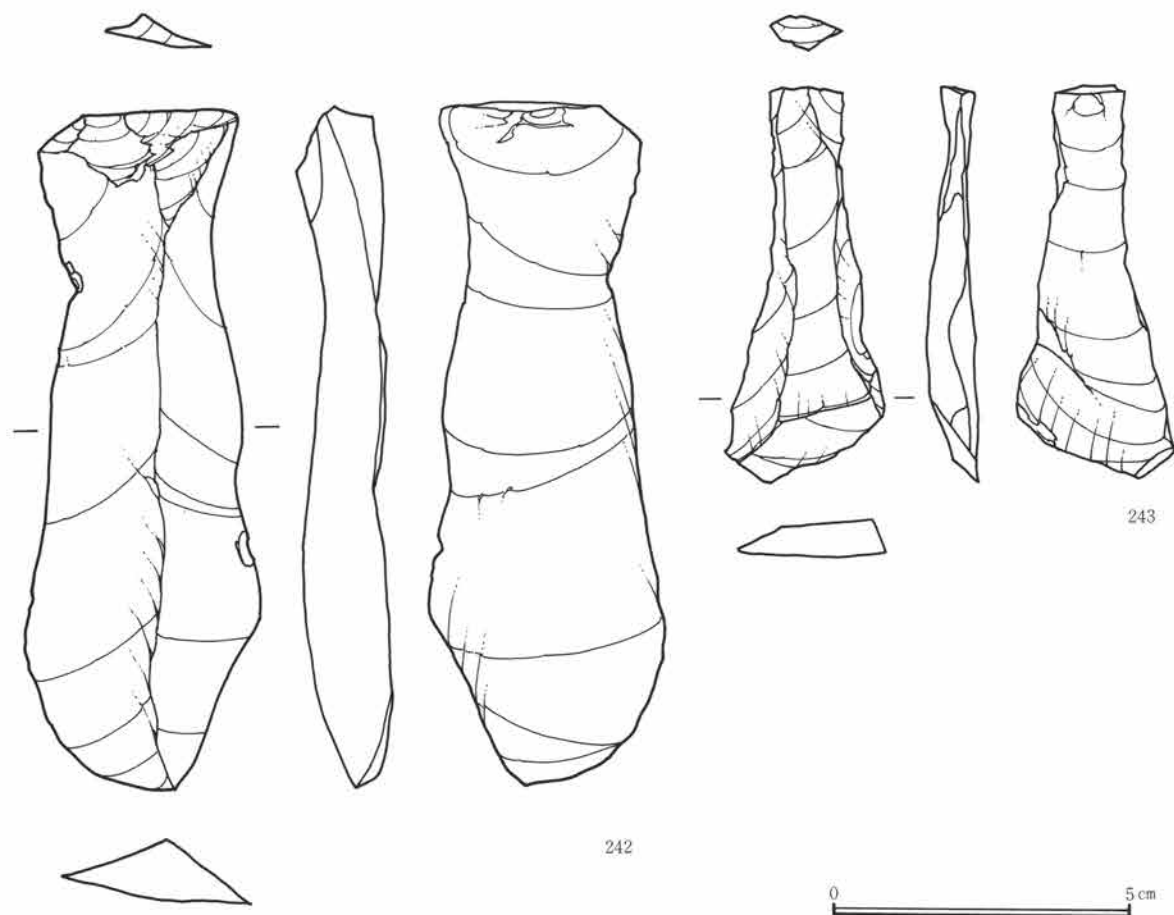
236は、平坦な剥離面を打面とし作出される。粗い頭部調整が施され、先鋭な剥片形状を示す。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。長さ4.6cm・幅1.9cm・重さ2.30gを測る。黒色頁岩製。87-B-13グリッドより単独で出土。

237は、平坦な剥離面を打面とし作出される。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。頭部調整および打面調整は認められない。剥片端部を欠損する。長さ3.3cm・幅2.2cm・重さ4.31gを測る。黒色安山岩製。7号ブロック出土。

238は、平坦な剥離面を打面とし作出される。粗い調整加工が施され、先鋭な剥片形状を示す。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。剥片を剥離する段階で側縁を欠損する。長さ5.6cm・幅



第138図 B区出土の石器(32)



第139図 B区出土の石器(33)

1.9cm・重さ10.41gを測る。黒色頁岩製。87-B-35グリッドより単独で出土。

239は、剥片を剥離する段階で打面部分を欠損するが、平坦な剥離面を打面とし作出されると思われる。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向にほぼ一致するが、90°方向の相違する剥離も認められる。剥片端部を欠損する。長さ7.1cm・幅2.6cm・重さ16.77gを測る。黒色安山岩製。10号ブロック出土。

240は、平坦な剥離面を打面とし作出される。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向にほぼ一致するが、90°方向の相違する剥離も認められる。粗い頭部調整が施される。先鋭な剥片形状を示す。長さ5.1cm・幅2.8cm・重さ11.67gを測る。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。7号ブロック出土。

241は、平坦な剥離面を打面とし作出される。粗い頭部調整が施され、幅広な剥片形状を示す。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。長さ8.9cm・幅5.2cm・重さ102.53gを測る。黒色安山岩製。4号ブロック出土。

242は、平坦な剥離面を打面とし作出される。粗い頭部調整が施され、側縁が平行する剥片形状を示す。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。長さ11.2cm・幅4.0cm・重さ51.40gを測る。黒色頁岩製。3号ブロック出土。

243は、平坦な剥離面を打面とし作出される。頭部調整および打面調整は認められない。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致する。側縁および剥片端部を欠損する。先鋭な剥片形状を示す。長さ6.6cm・幅2.7cm・重さ10.52gを測る。黒色安山岩製。4号ブロック出土。

剥片(第140図～第154図、244～335)

剥片は総計752点が出土しており、全体の40%を占める。これらのなかには、さまざまな形状の剥片が存在する。作出器種と剥片形状との関係や剥片剥離工程との関係について、把握が必ずしも充分ではないこと、また、一部の資料には剥離原則を越える剥離現象が存在する場合も想定されること、などから目的とする剥片形状や折断の有無など判然としないものが多い。主要器種を構成する削器には加工量の多少が存在し、「形状修正」的な一群と「形状保持」的な一群の両者が存在するように、目的剥片としての縦長剥片を指向する傾向は認められるが、接合資料には、広義の石刃技法を技術基盤とするような剥片剥離の手法はみられず、目的剥片としての縦長剥片を強く指向する段階にはないといえよう。同様な状態は「加工痕ある剥片」や「使用痕ある剥片」などの剥片の形状とも一致する。

通常、石器の製作では、意図する剥片の形状と石器の形態とは合理的かつ整合性をもって存在するため、たとえば、ナイフ形石器の形態変化にみられるように徐々にその関係は変動(変質)したと思われる。そのため、単位的な石器群における目的剥片は、石器の素材となる剥片の形状を認識したのちに、把握しなければならないが、上述したように判然としない資料も多く、実態を示すに足る十分な資料を提示しえない制約がここにはある。

ここでは、接合関係の認められない形状の良好な剥片および大形の剥片のほか、折断剥片(第151～152図、320～325)・搬入資料(チャートなど)を掲載するが、接合資料とあわせて技術的背景を担い作出される剥片の資料提示とすることとしたい。

244～259・261～266・301～310は、礫面あるいは平坦な剥離面を打面とし、作出される横長の剥片である。明確な打面調整は認められないが、剥片には粗い頭部調整が施され、打点は背面の稜上を選択することが多い。幅広の剥片形状を呈し、長幅比2:1前後を示す。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致することが多い。248・253・258・263・266・301・302・304・308の9点には、黒色頁岩が用いられている。

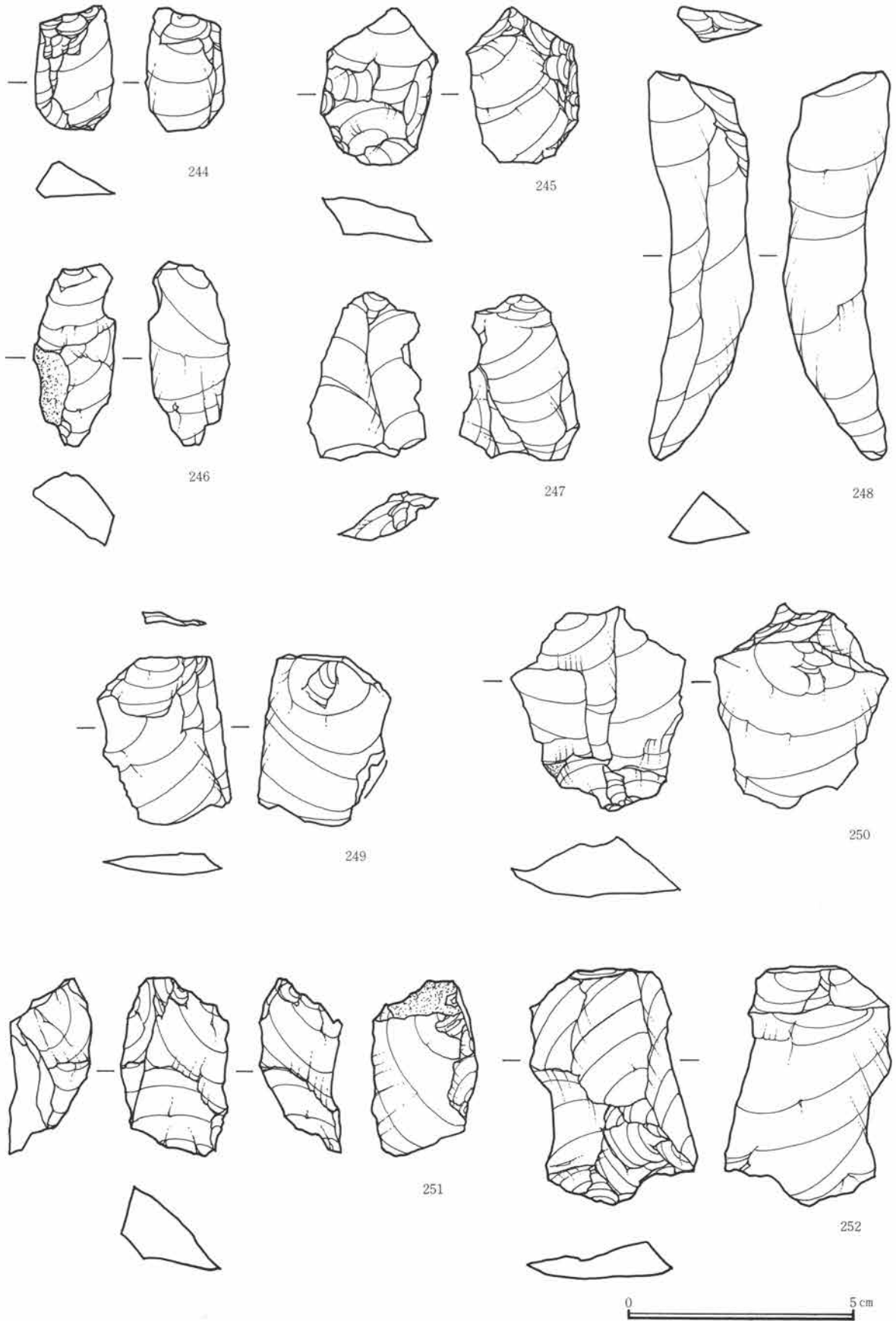
267～292は、礫面あるいは平坦な剥離面を打面とし、剥離される横長の剥片である。明確な打面調整は認められないが、剥片には粗い頭部調整が施され、打点は背面の稜上を選択されることが多い。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致することが多い。271・276・281の3点には、黒色頁岩が用いられている。

293～300は、礫面あるいは平坦な剥離面を打面とし、作出される幅広の剥片である。明確な打面調整は認められないが、剥片には粗い頭部調整が施される。幅広の剥片形状を呈し、長幅比1:1前後を示す。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致すること、打点は背面の稜上を選択すること、などの傾向がある。294は黒色頁岩を用いている。

311～317は、チャート製の小形剥片である。礫面あるいは平坦な剥離面を打面とし、作出される。明確な打面調整および頭部調整は認められない。打点は背面の稜上を選択することが多い。剥片の背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致するものや90°方向の相違するもの、あるいは、求心的な背面構成を示すもの、などが存在する。チャート製の剥片は総計16点が出土している。

318・319は、メノウ製の小形剥片である。礫面あるいは平坦な剥離面を打面とし作出される。明確な打面調整および頭部調整は認められない。打点は背面の稜上を選択することが多い。剥片の背面を構成する剥離の方向は剥片の剥離方向に一致するもの、90°方向の相違するもの、が存在する。メノウ製の小形剥片は総計4点が出土している。

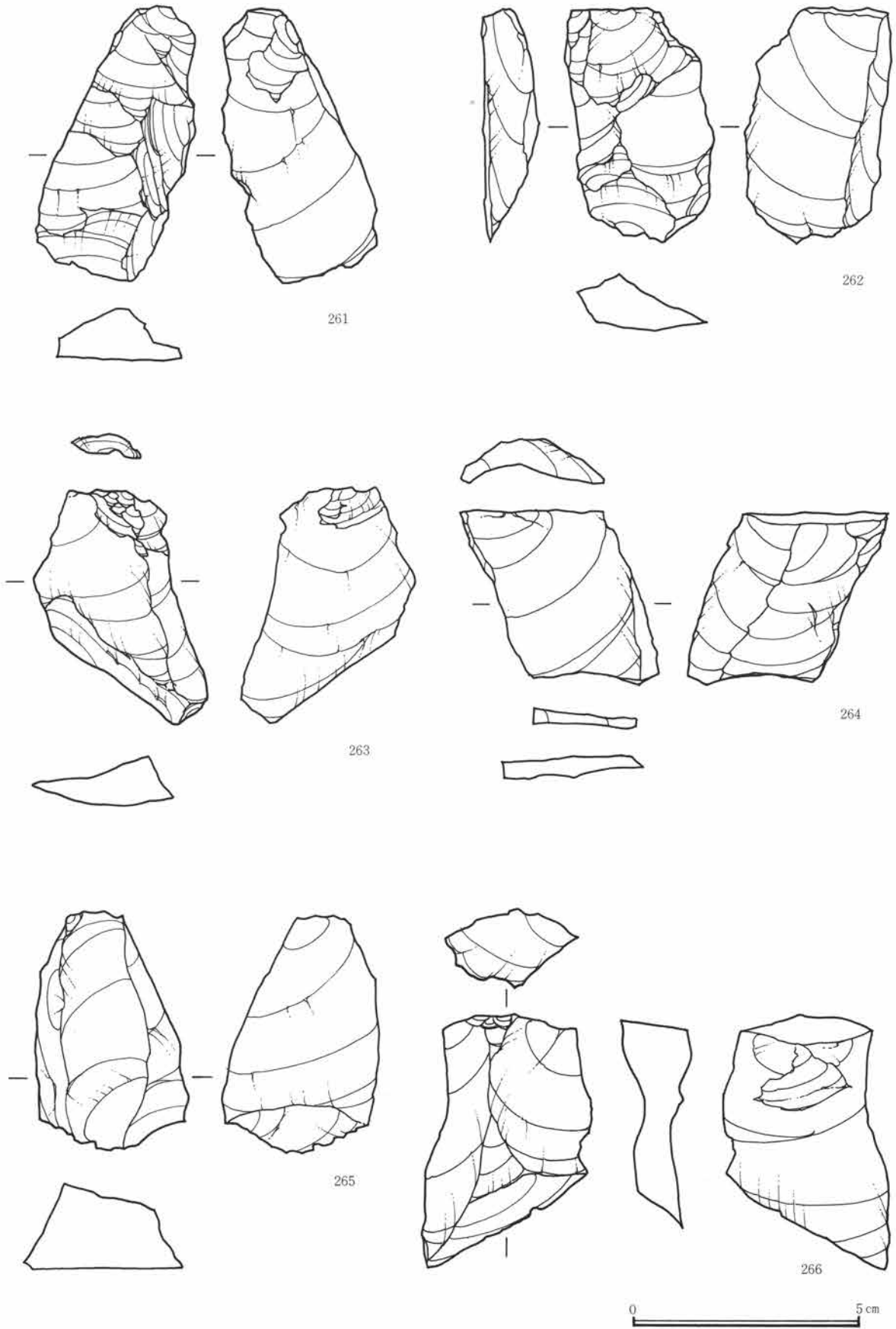
I 旧石器時代の遺構と遺物



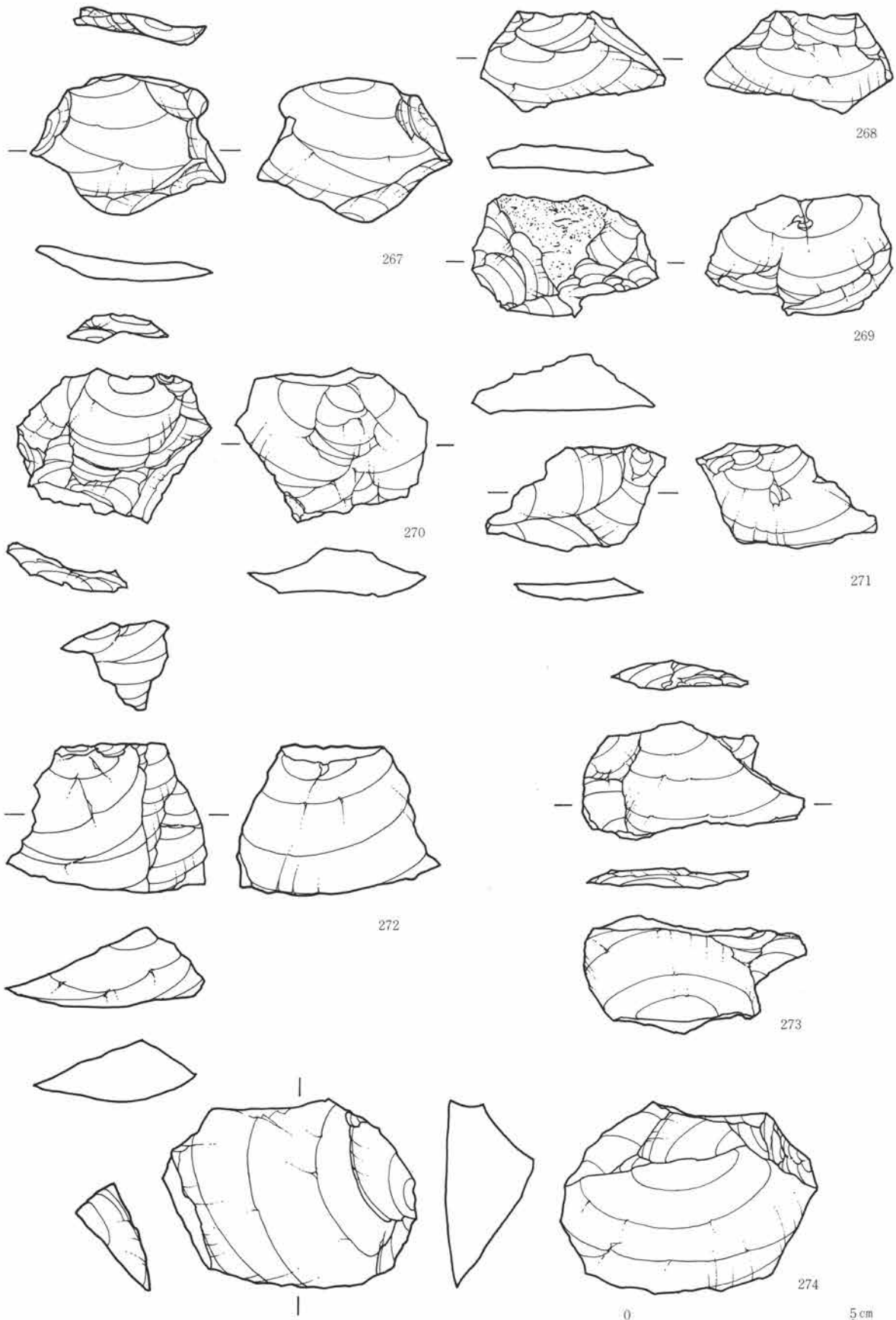
第140図 B区出土の石器(34)



第141図 B区出土の石器(35)

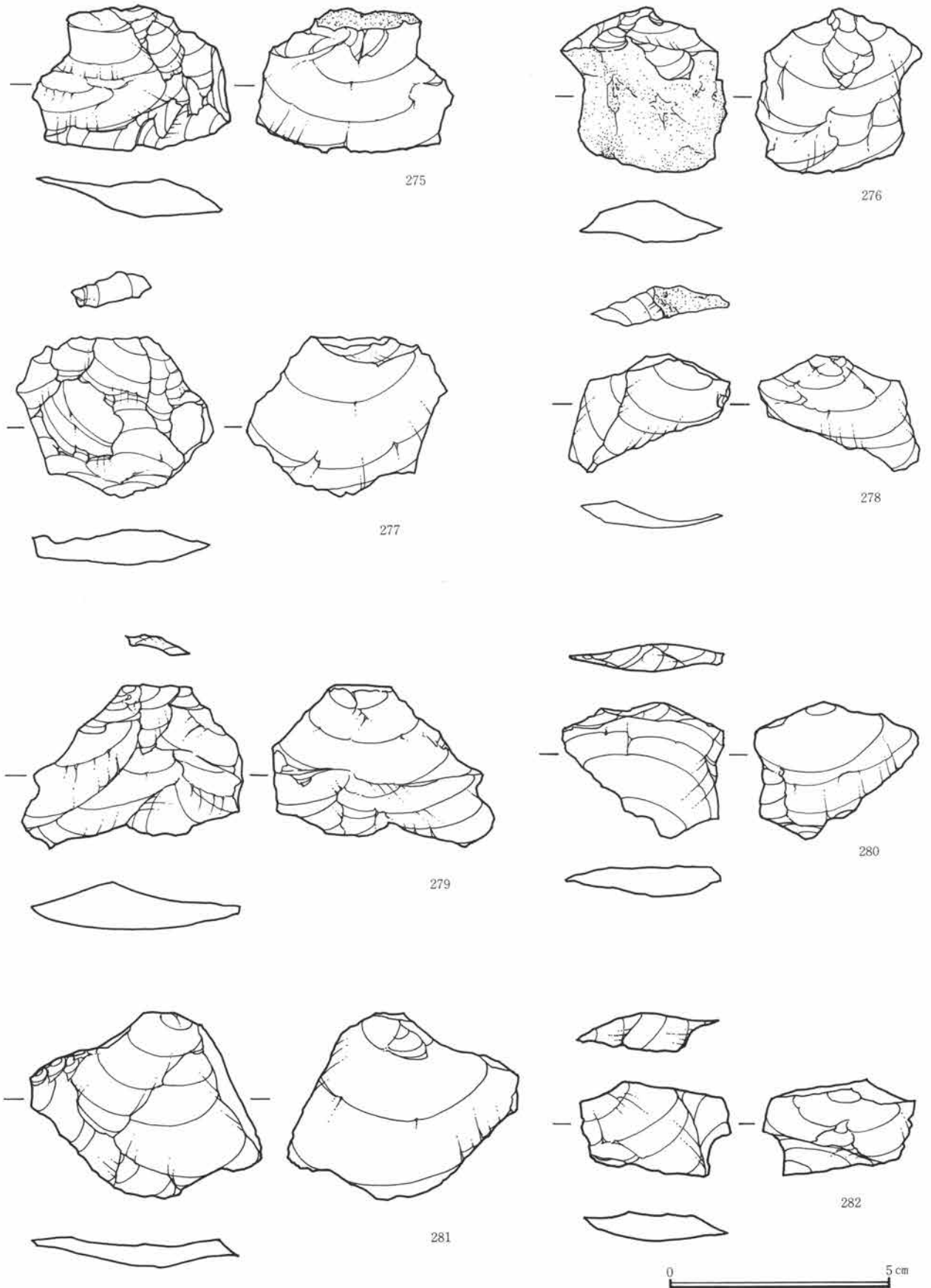


第142図 B区出土の石器(36)

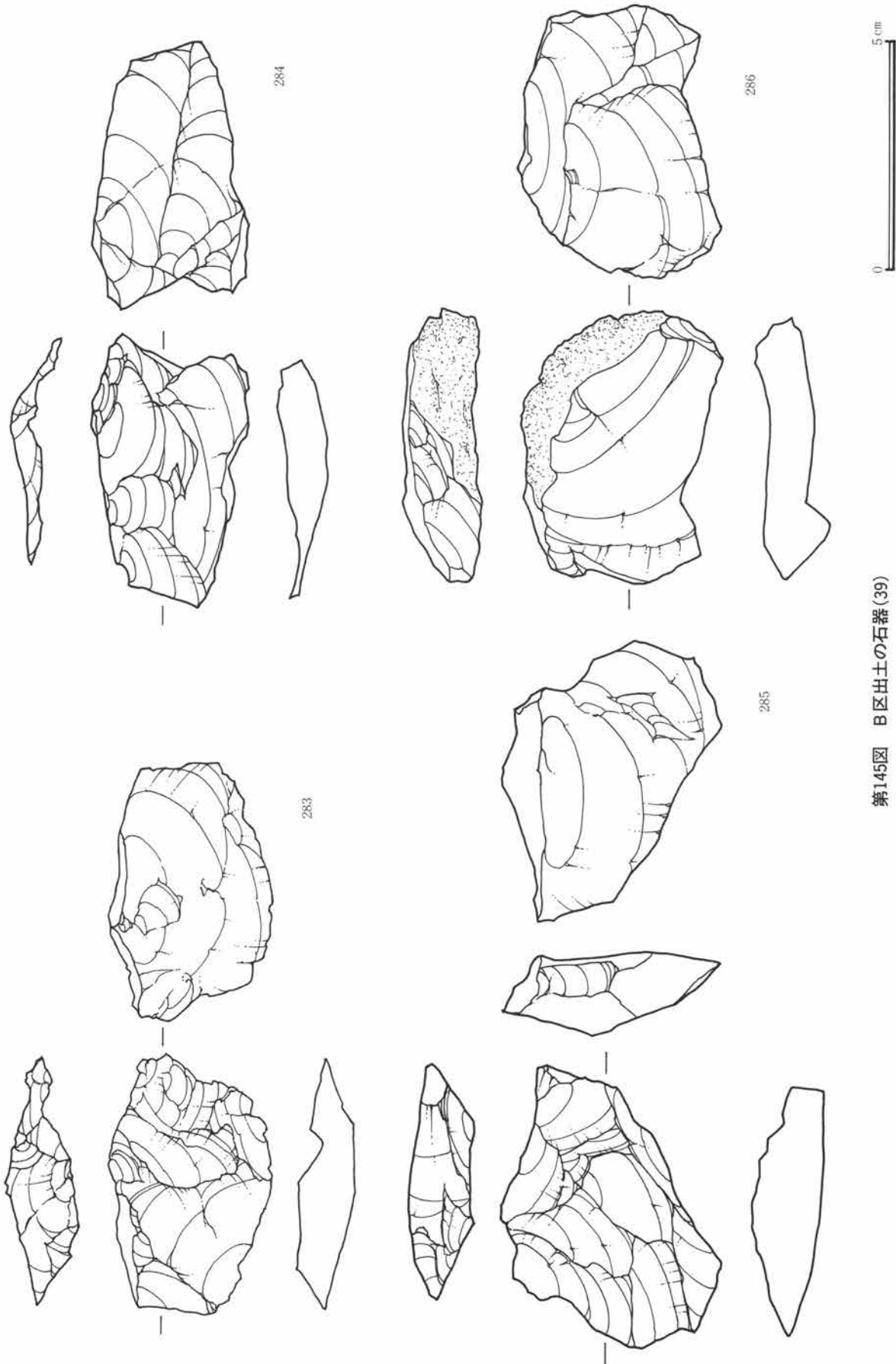


第143図 B区出土の石器(37)

I 旧石器時代の遺構と遺物

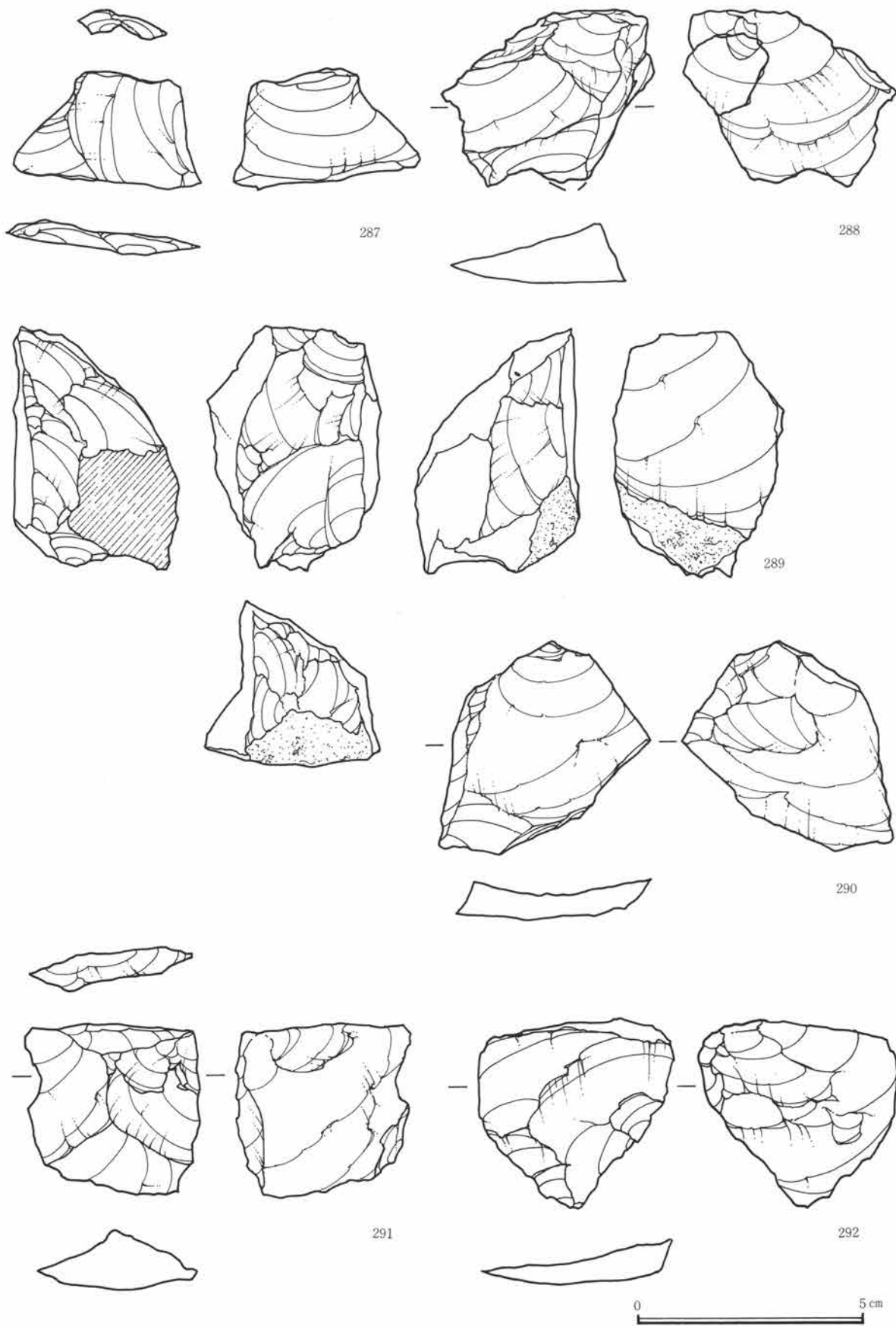


第144図 B区出土の石器(38)

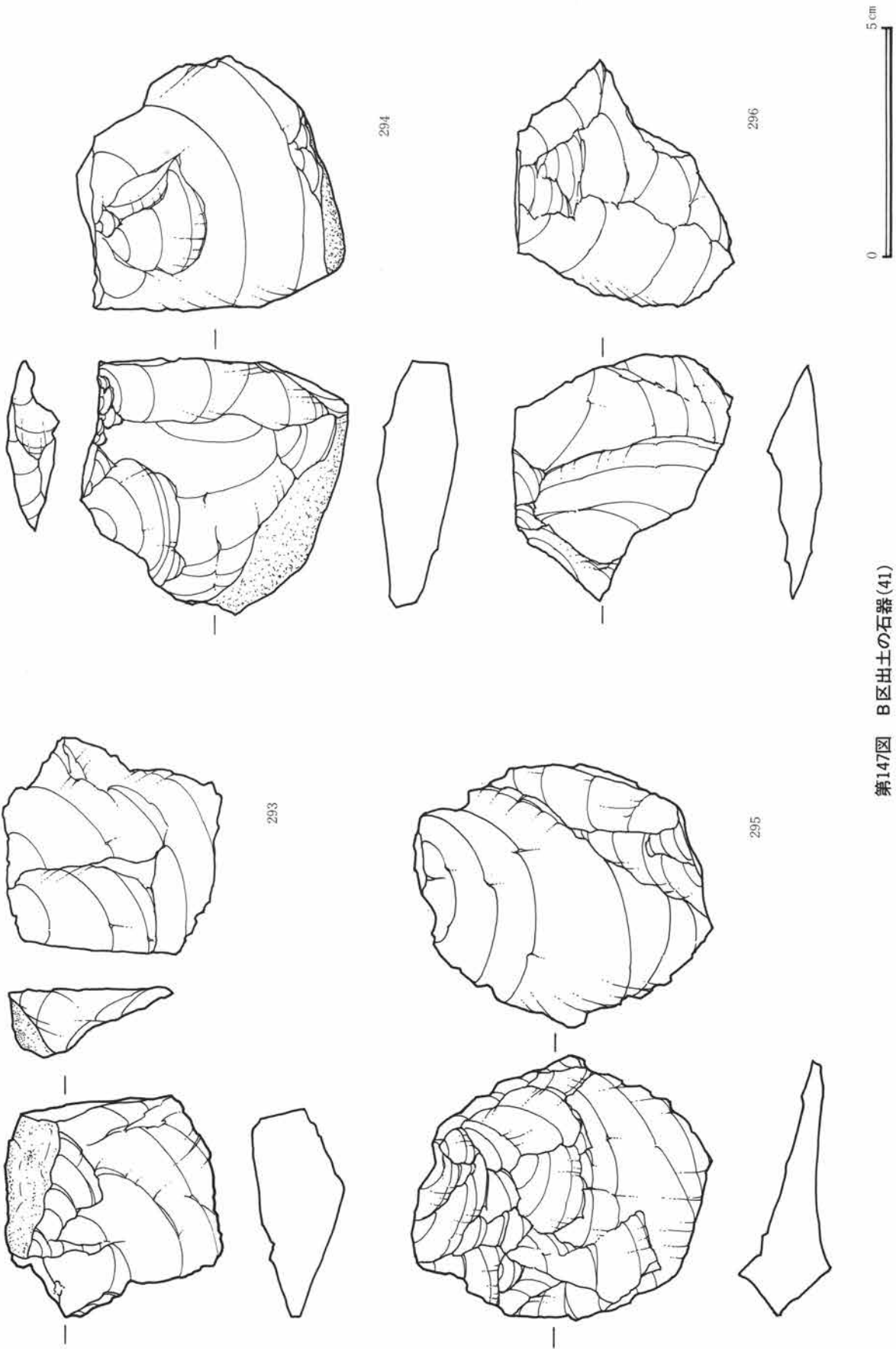


第145図 B区出土の石器(39)

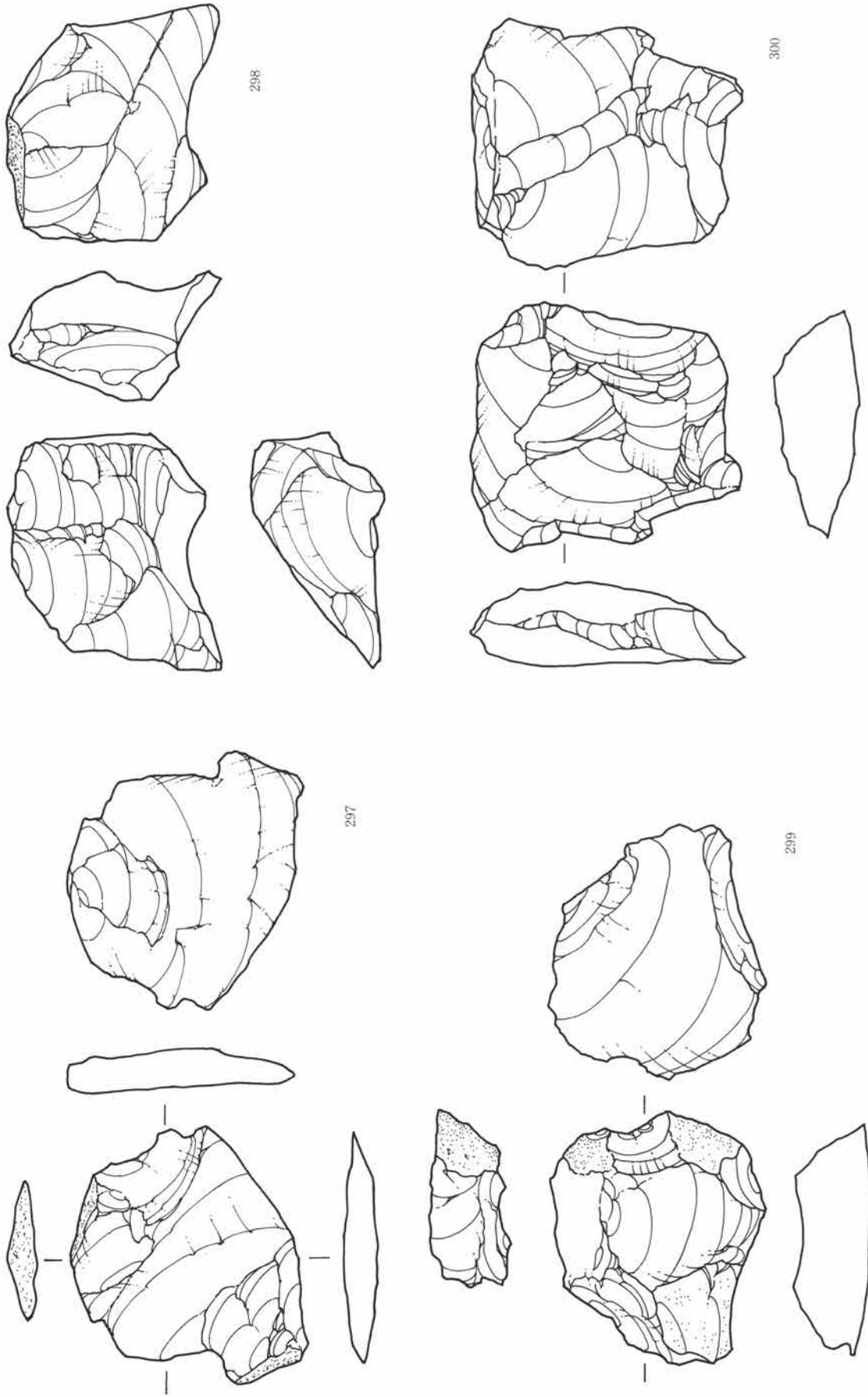
I 旧石器時代の遺構と遺物



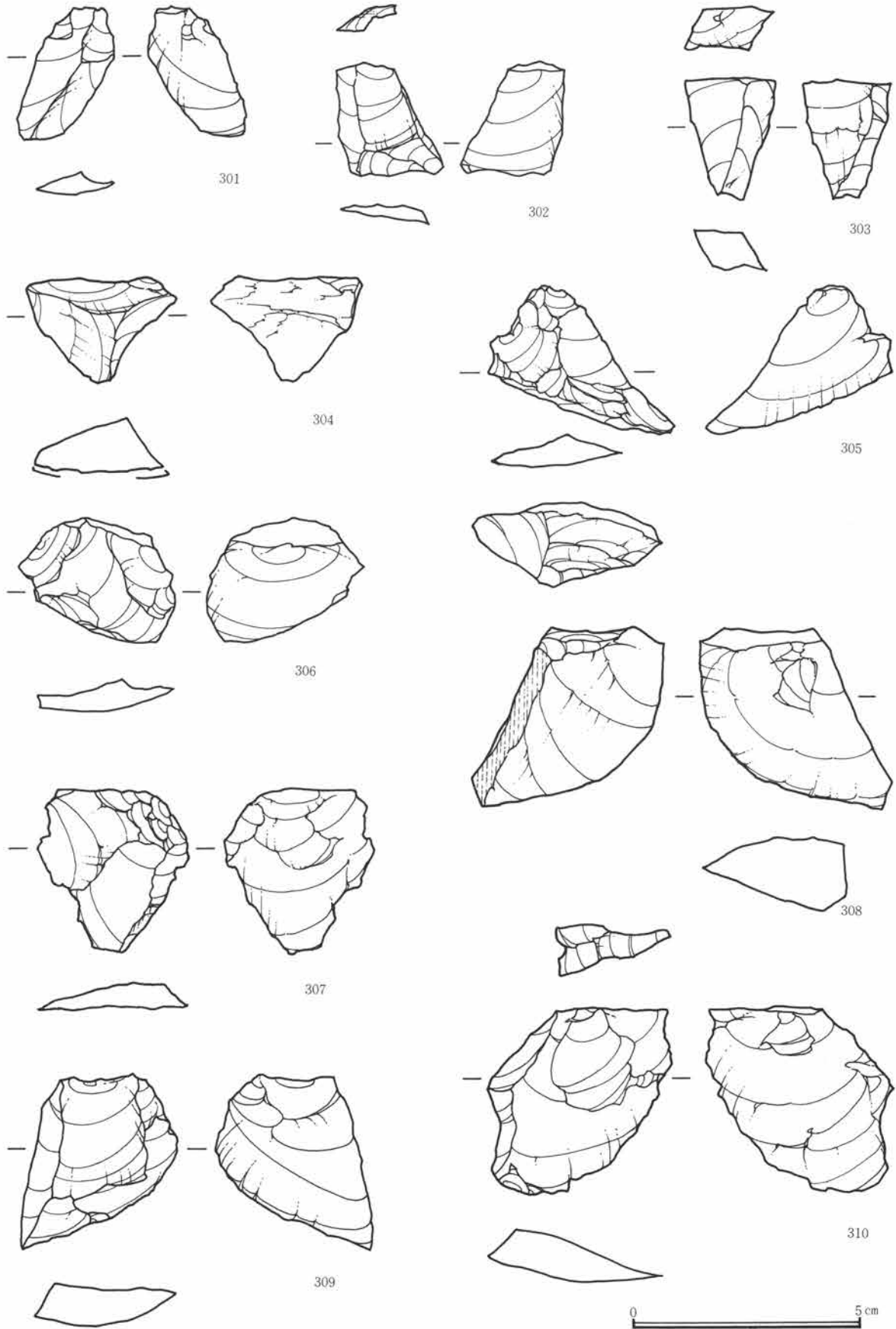
第146図 B区出土の石器(40)



第147図 B区出土の石器(41)

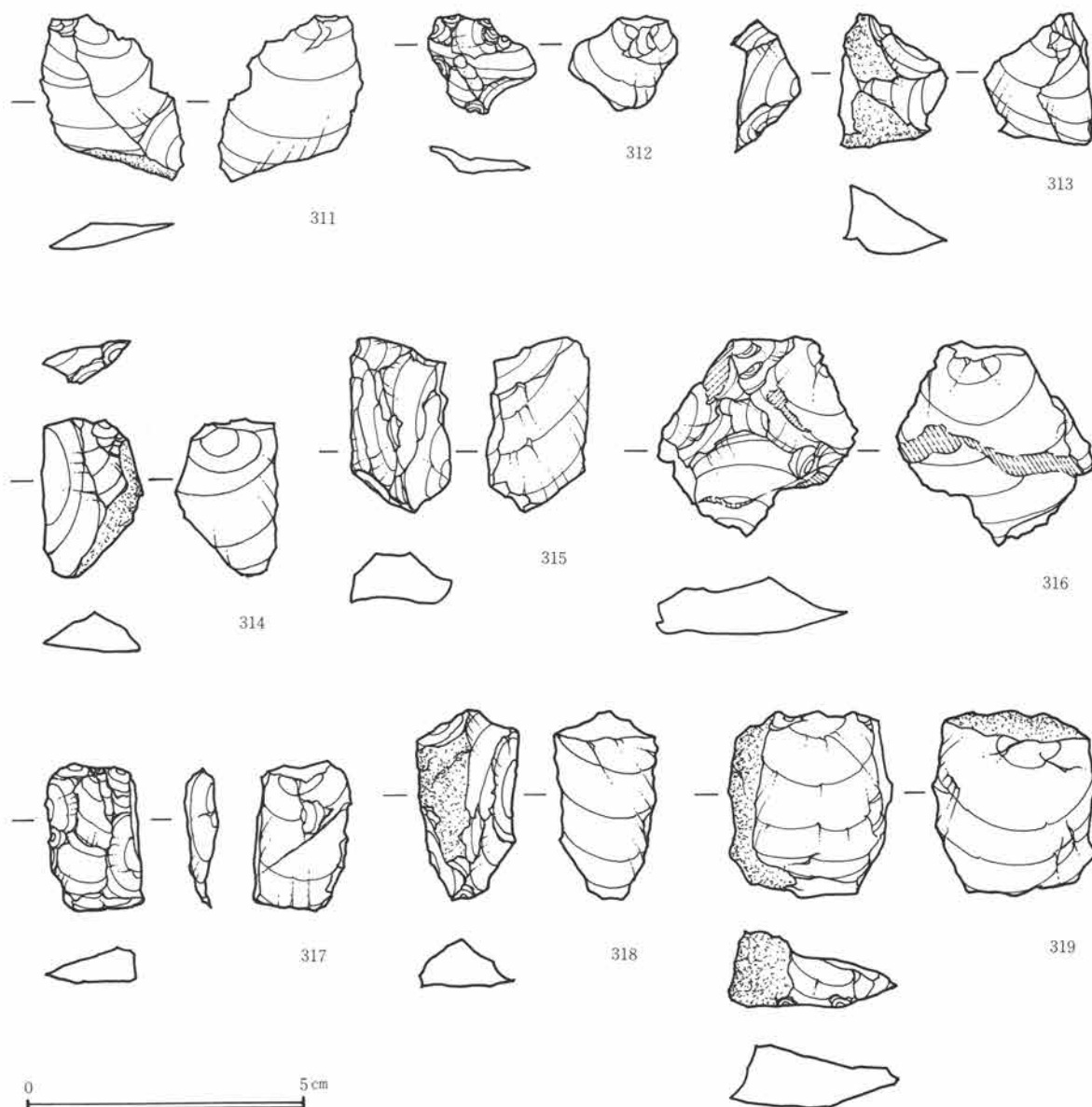


第148図 B区出土の石器(42)



第149図 B区出土の石器(43)

I 旧石器時代の遺構と遺物

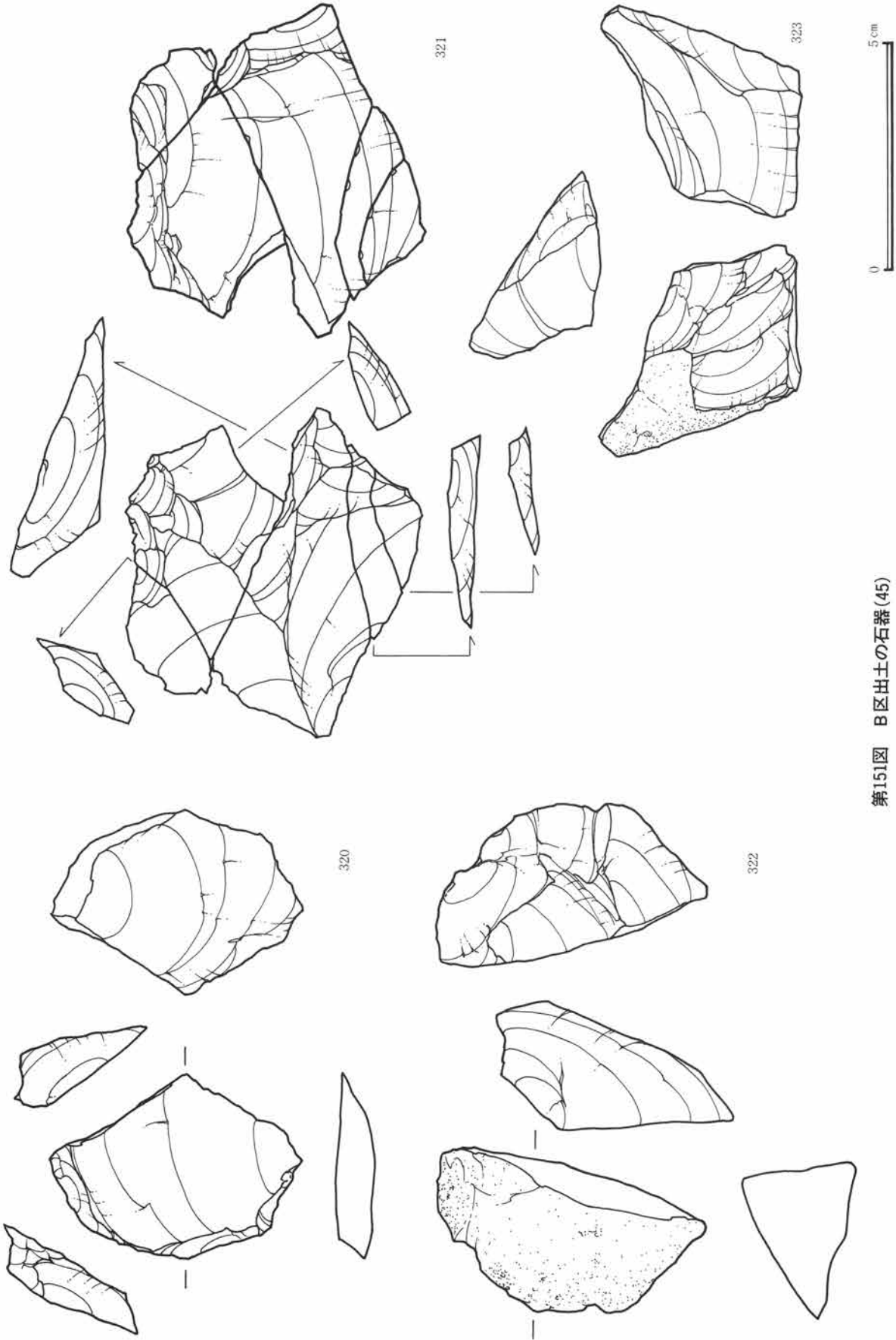


第150図 B区出土の石器(44)

320・322・325～327・332～334は側縁で欠損するやや幅広の剥片である。剝離面を打面とし作出されるが、打面調整および頭部調整は認められない。打点は剥片の稜上を選択することが多い。縦位に接合する資料の場合、その接合部分は打点に一致することが多い。

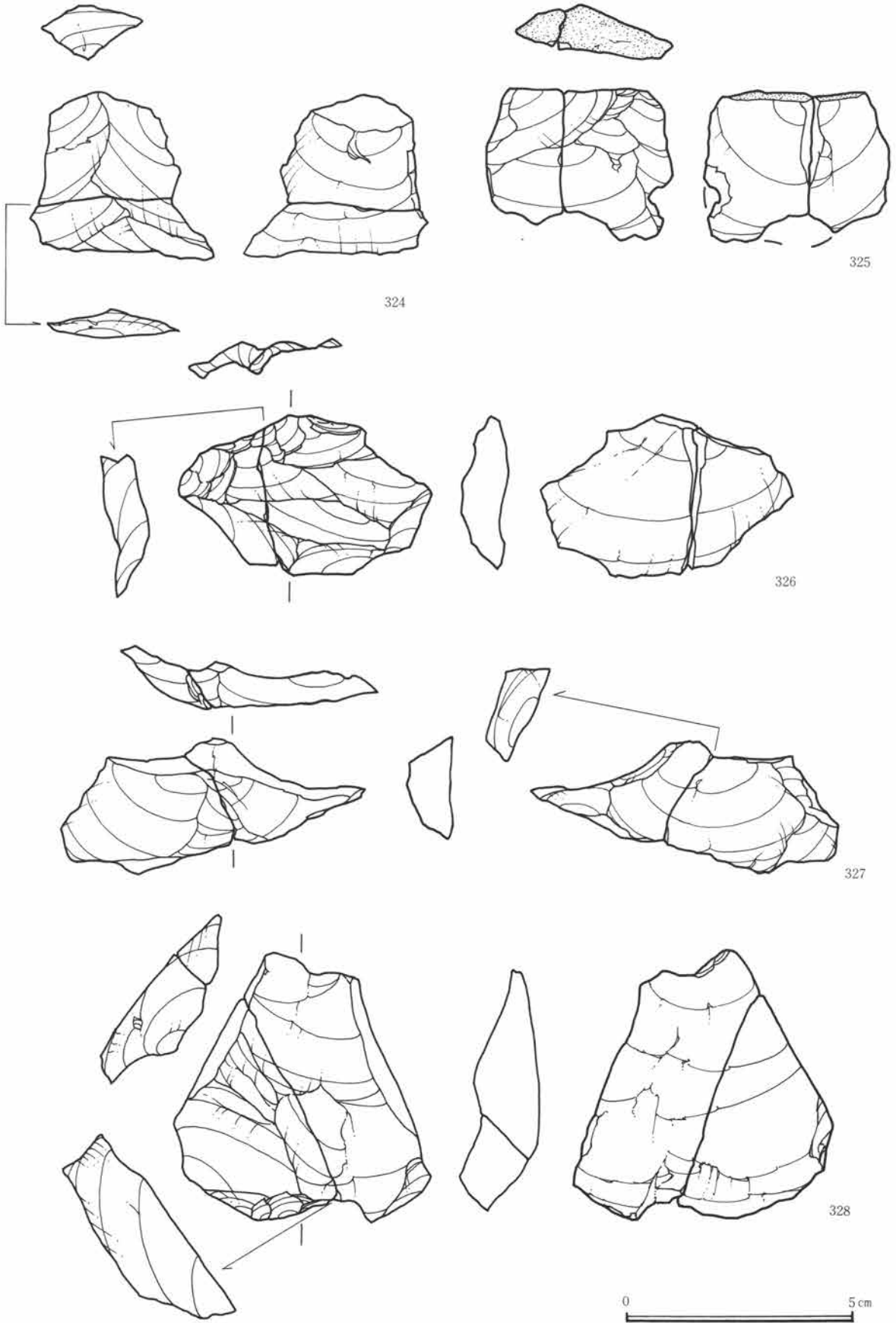
321・324・329・335は、横位に剥片が接合する折断剥片である。礫面あるいは平坦な剝離面を打面とし、作出されるが、打面調整および頭部調整は明確には認められない。打点は剥片の稜上を選択することが多い。横位の折断の場合、数ヶ所で折断される事例(321)が認められ、技術的背景に基づく意図的な折断であることが予想される。

328・331は、斜位に剥片が接合する折断剥片である。剝離面を打面とし作出されるが、打面調整や頭部調整は明確には認められない。斜位の折断の場合、数ヶ所で折断される事例(321)が認められ、技術的背景に基づく意図的な折断であることが予想される。

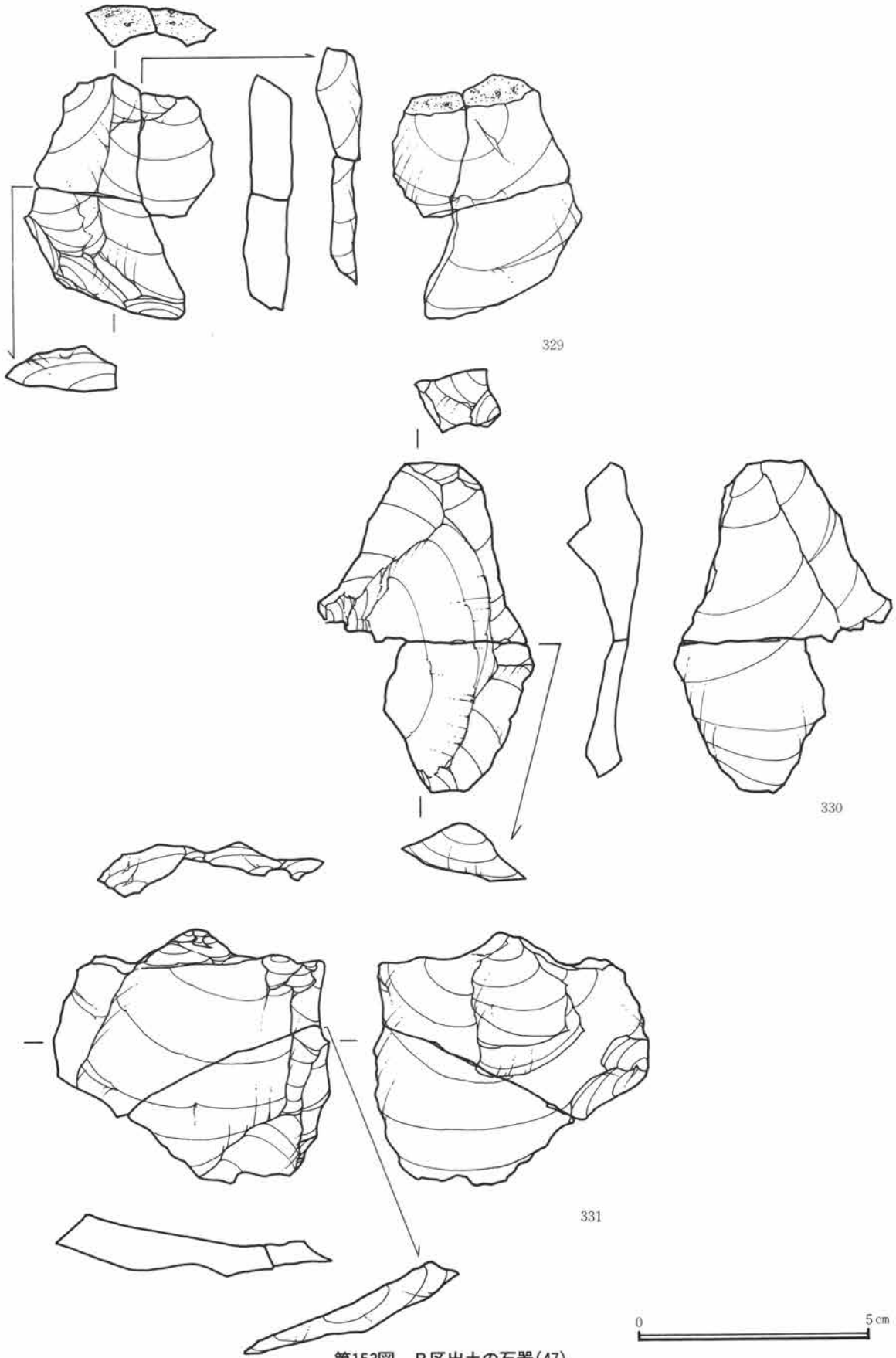


第151図 B区出土の石器(45)

I 旧石器時代の遺構と遺物

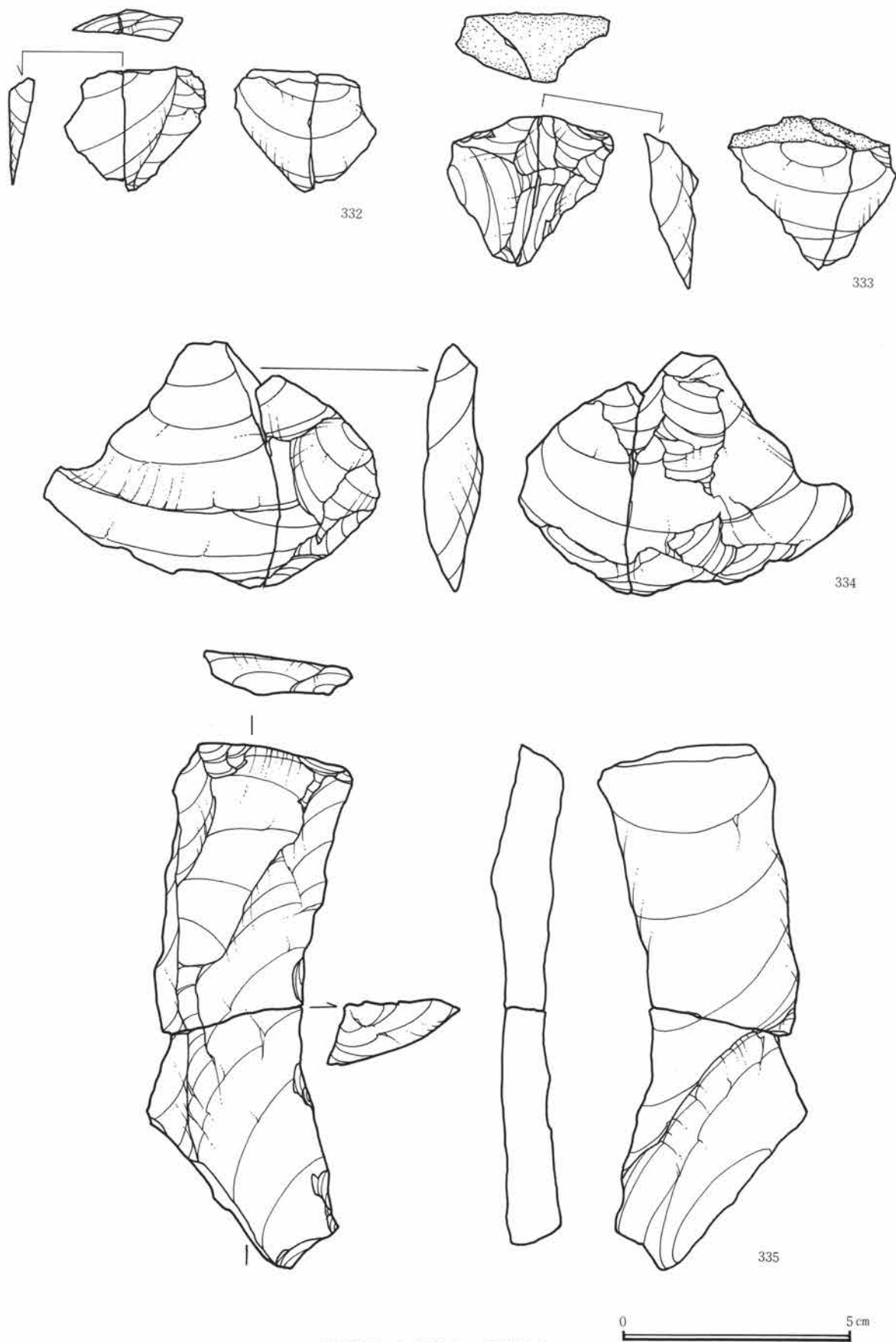


第152図 B区出土の石器(46)



第153図 B区出土の石器(47)

I 旧石器時代の遺構と遺物



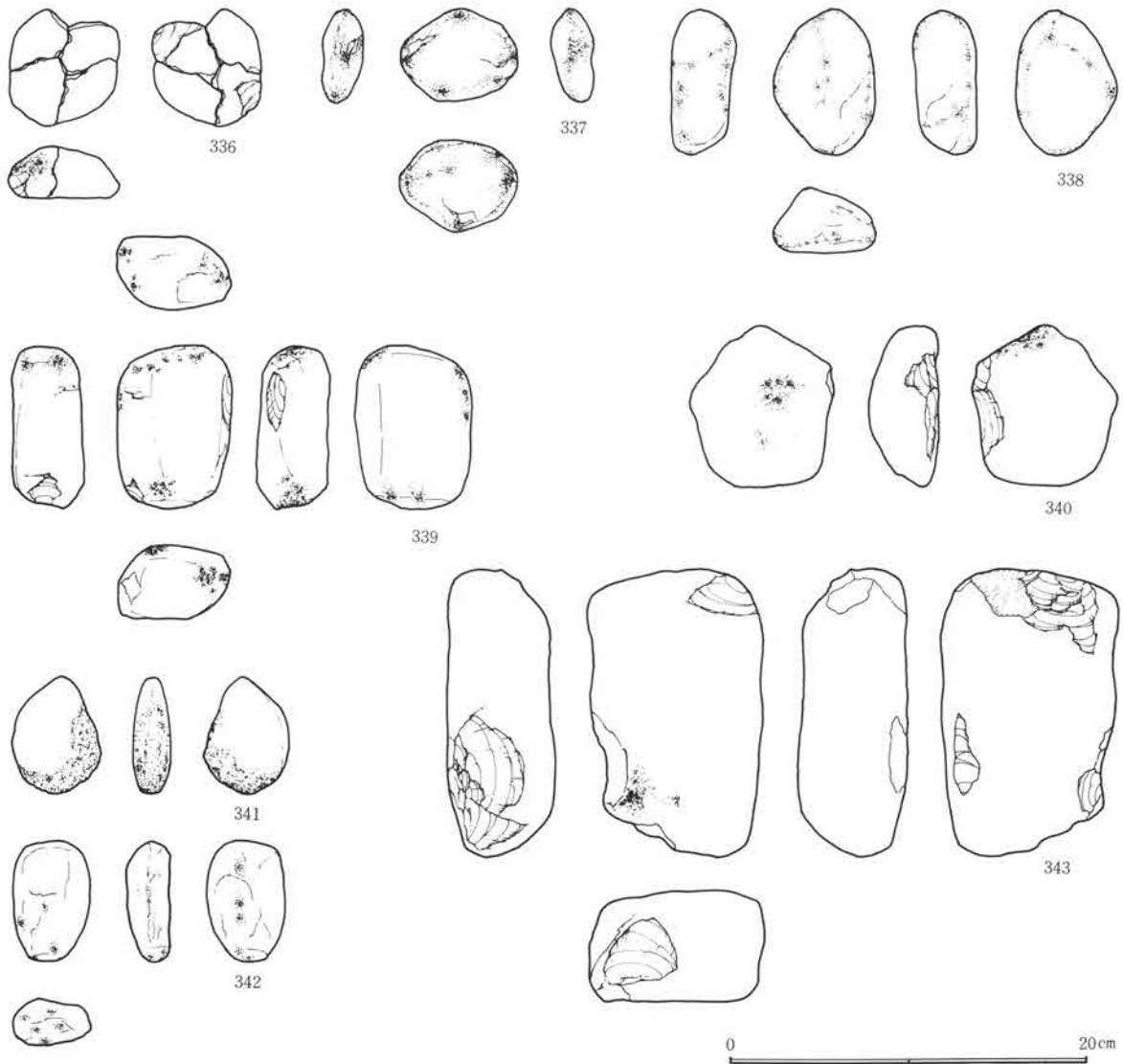
第154図 B区出土の石器(48)

礫石器(第155図～第157図、336～356)

総計74点の礫石器が出土している。河床より採集される偏平礫や山麓斜面より採集される垂角礫が用いられ、前者の場合には敲石(第155図、336～343)や磨石(第156図、344～346)などの石器石材となるが、後者の場合には台石(第156・157図、347～350)などの石器石材となる。これらは明らかに遺跡外部より搬入される。石器には明確な使用痕が認められず、石器の機能を明らかにしえないが、出土状態および接合状態より、意図的な分割を示す石器が存在する。

敲石は総計11点が出土している。礫形状は楕円形状を呈するものが多く、棒状を呈するものは少ない。礫重量は、100g前後を測る小形のもの・300g前後を測る中形のもの・1,000gを越える大形のものなど、大小のパラエティーがみられる。輝緑岩や石英閃緑岩などの火成岩を多く用いるほか、堆積岩(砂岩)もわずかに用いられる。

磨石は総計8点が出土している。礫形状は楕円形状を呈するものが多く、偏平な河床礫を用いる。必ずしも明確ではないが、表裏両面のいずれかには摩耗痕や打撃痕が認められる。礫重量は1,000gを越えることが



第155図 B区出土の石器(49)

I 旧石器時代の遺構と遺物

多い。

台石は総計6点が出土している。広い偏平部分のある礫を用いる。表裏両面のいずれかには打撃痕が認められることが多いこと、礫重量は1,000gを越えることが多いこと、から石器の機能を推察することが可能である。

これらのほかに、意図的分割を示す石器や火処の存在を示す石器が多数出土している。前者の場合には、明確な使用痕が認められないため石器の機能を明らかにしえないが、接合部分にはバルブやリングが認められ、意図的な分割あるいは剥離行為が存在する。接合により完形状態に還元されるが、形状や重量は多種多様である。後者の場合には、割れ面に著しい凹凸がみられる。

336は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。側縁には打撃痕がわずかに認められ、この部分が石器の機能部となる。石器は4点の接合資料(B-9)からなり、割れ面には著しい凹凸が認められる。輝緑岩製。長さ6.5cm・幅6.3cm・重さ144.85gを測る。7号ブロック出土。

337は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。小口部分には著しい打撃痕や剥落痕が認められ、この部分が石器の機能部となる。砂岩製。長さ5.3cm・幅6.5cm・重さ109.60gを測る。94-B-16グリッドより出土する。

338は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。表裏両面のほか側縁および小口部分には著しい打撃痕が認められ、この部分が石器の機能部となる。文象斑岩製。長さ8.0cm・幅5.7cm・重さ213.5gを測る。12号ブロック出土。

339は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。表裏両面のほか側縁および小口部分には著しい打撃痕が認められ、この部分が石器の機能部となる。点紋頁岩製。長さ9.1cm・幅6.6cm・重さ406.3gを測る。8号ブロック出土。

340は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。表裏両面のほか側縁および小口部分には著しい打撃痕が認められ、この部分が石器の機能部となる。輝石安山岩(粗粒)製。長さ8.9cm・幅8.0cm・重さ311.9gを測る。3号ブロック出土。

341は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。側縁および小口部分には著しい打撃痕が認められ、この部分が石器の機能部となる。石英閃緑岩製。長さ6.4cm・幅5.0cm・重さ91.00gを測る。89-B-17グリッドより出土する。

342は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。側縁および小口部分には打撃痕がわずかに認められ、この部分が石器の機能部となる。文象斑岩製。長さ6.7cm・幅4.4cm・重さ118.25gを測る。90-B-17グリッドより出土する。

343は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。側縁および小口部分には著しい打撃痕や剥落痕が認められ、この部分が石器の機能部となる。輝緑岩製。長さ15.9cm・幅10.0cm・重さ1,733.4gを測る。3号ブロックより出土する。

344は、石器の形状は欠損のため明確ではないが、遺存部分より垂角礫に分類される。表裏両面にはわずかなではあるが摩耗痕が認められ、石器の機能部となる。長さ15.2cm・幅12.4cm・重さ2,390.0gを測る。輝石安山岩(粗粒)製。1号ブロック出土。

345は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。表面側にわずかなではあるが摩耗痕が認められ、石器の機能部となる。石器は4点の接合資料からなり、割れ面には著しい凹凸が認められる。長さ19.4cm・幅13.3cm・重さ2,055.3gを測る。輝石安山岩(粗粒)製。7号ブロックおよび12号ブロックより出土。

5. B地点の調査

346は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。表裏両面にわずかではあるが摩耗痕が認められ、石器の機能部となる。石器は2点の接合資料からなり、割れ面の状態は意図的な分割を示す。長さ28.2cm・幅13.3cm・重さ3,737.8gを測る。石英閃緑岩製。3号ブロックの中央付近に出土する。

347は、楕円形状を呈する河床礫を用いる。石器の表面の中央付近には集中打痕が、小口部分には剥離痕が認められる。側縁を一部欠損するが、風化が著しいため欠損段階を特定することはできない。長さ25.1cm・幅14.1cm・重さ2,620.0gを測る。灰色安山岩製。7号ブロックの中央付近に出土する。

348は、石器の形状は欠損のため明確ではないが、遺存部分より亜角礫に分類される。石器の表面中央付近には集合打痕が、側面には剥離痕が認められる。長さ22.7cm・幅17.0cm・重さ6,100.6gを測る。輝石安山岩(粗粒)製。1号ブロック出土。

349は、楕円形状を呈する河床礫を用いる。石器の表面中央付近には明瞭な集合打痕が認められ、石器の主要な機能部となる。石器の形状は欠損のため明確ではないが、欠損部分にはバルブやリングが認められ、意図的な分割を示唆する。長さ15.8cm・幅8.2cm・重さ819.5gを測る。輝石安山岩(粗粒)製。86-B-34グリッドより単独で出土。

350は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。明確な使用痕が認められず、石器の機能を推定することは困難であるが、石器の属性および出土状況などから台石に分類される。石器は2点の接合資料(B-13)よりなり、接合部分にはバルブやリングが認められ、意図的な分割を示唆する。亜角礫に分類される。長さ16.3cm・幅13.3cm・重さ1,657.0gを測る。7号ブロックおよび10号ブロック出土。

351は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。石器は3点の接合資料(B-10)からなり、接合部分にはバルブやリングが認められ、意図的な分割を示唆する。明確な使用痕が認められず、石器の機能を推定することは困難である。亜角礫に分類される。長さ13.5cm・幅8.2cm・重さ529.6gを測る。1号ブロックおよび2号ブロック出土。

352は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。明確な使用痕が認められず、石器の機能を推定することは困難であるが、石器の属性および出土状況などから台石に分類される。長さ15.0cm・幅16.5cm・重さ3,190.0gを測る。1号ブロック出土。

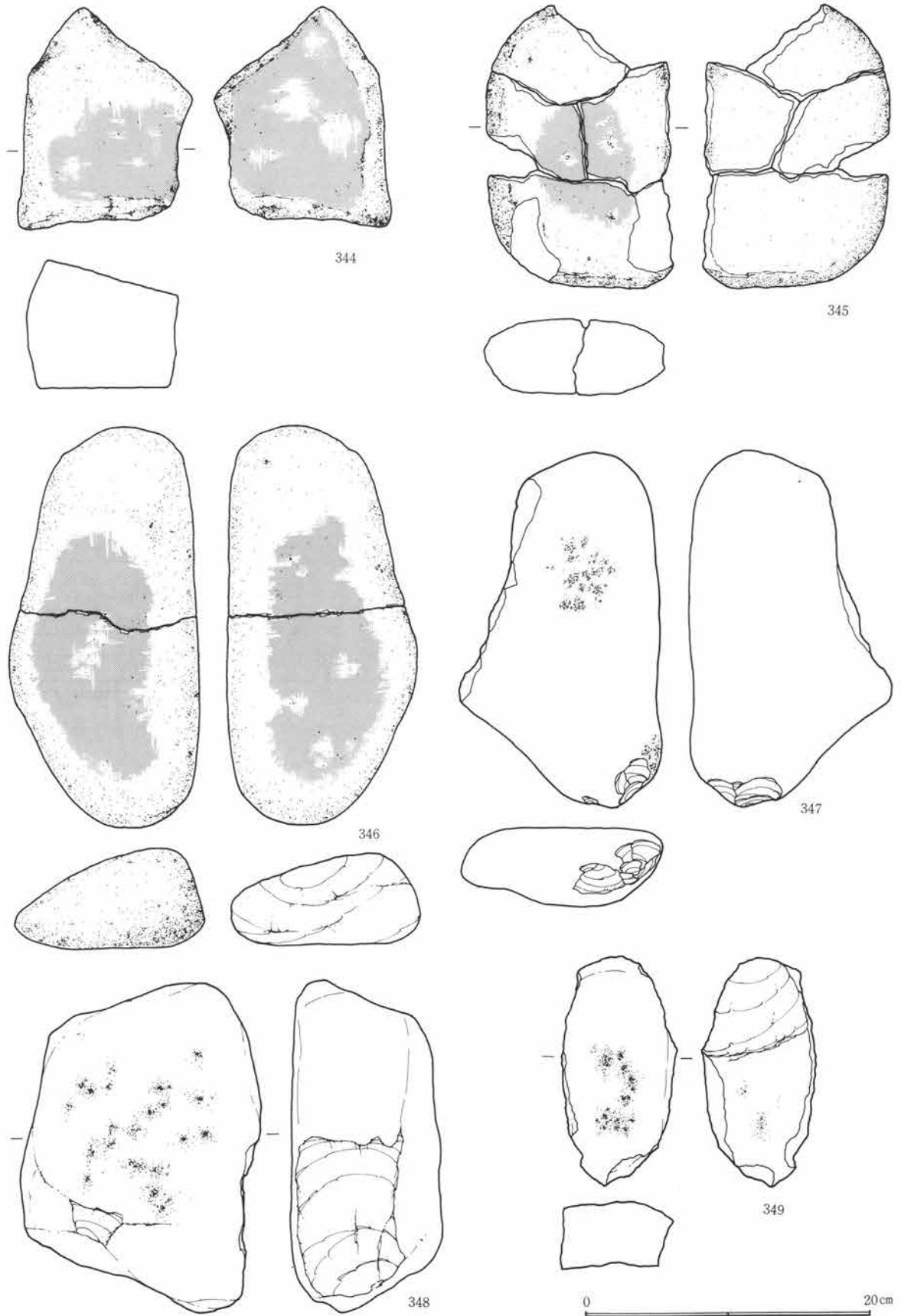
353は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。石器の形状は棒状を呈し、その長幅比は1:2を示す。石器は2点の接合資料(B-11)からなり、接合部分にはバルブやリングが認められ、意図的な分割を示唆する。明確な使用痕が認められず、石器の機能を推定することは困難である。亜角礫に分類される。長さ16.8cm・幅6.6cm・重さ631.5gを測る。1号ブロック出土。

354は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。石器は9点の接合資料(B-9)からなり、割れ面には著しい凹凸が認められる。明確な使用痕が認められず、石器の機能を推定することは困難である。亜角礫に分類される。長さ13.8cm・幅10.6cm・重さ1,181.8gを測る。5号ブロック・6号ブロックおよび12号ブロック出土。

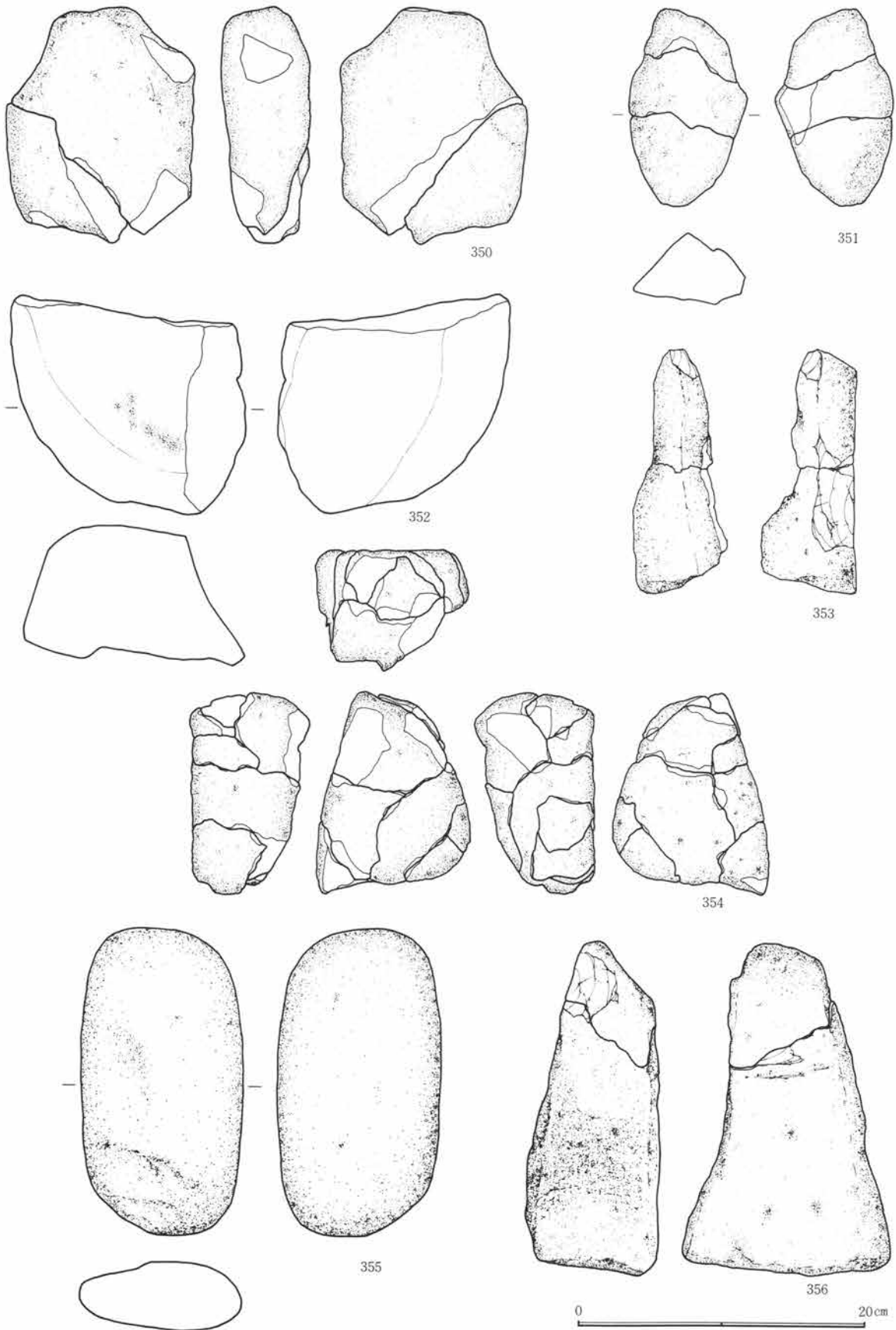
355は、楕円形状を呈する偏平な河床礫を用いる。表裏両面にはわずかではあるが、摩耗痕が認められ、石器の機能部となる。長さ21.3cm・幅11.4cm・重さ2,120.0gを測る。灰色安山岩製。11号ブロックの中央付近に出土する。

356は、輝石安山岩(粗粒)を用いる。石器の形状は棒状を呈し、その長幅比は1:2を示す。石器は2点の接合資料(B-12)からなり、接合部分にはバルブやリングが認められ、意図的な分割を示唆する。明確な使用痕が認められず、石器の機能を推定することは困難である。亜角礫に分類される。長さ23.6cm・幅14.4cm・重さ5,030.0gを測る。7号ブロック出土。

I 旧石器時代の遺構と遺物



第156図 B区出土の石器(50)



第157図 B区出土の石器(51)

I 旧石器時代の遺構と遺物

5-5, 石器の接合

(1) 接合資料

総計1,867点の出土石器のうち、118例513点(礫類の接合; 16例46点を含む)が確認され、接合率は全体の四分の一(27.5%)ほどに達する。原石の状態にまで復元することの可能な資料に乏しいため、製作工程上の位置づけや搬入石材の認定は困難な状況にある。ブロックは互いに隣接・存在し、複数のブロックに互り接合する資料も多い。

接合資料・B-14(母岩別資料・黒色頁岩-11a、第158・159図)

(原石)→(分割) → ○ → 1 → 2+3 → 4 → 5→6→7 → 8

河床より採集される円礫を石核素材とする。剥片剥離は原石を分割・二分することにより開始される。まず、側面より大形の剥片1枚(○)を剥離した後に、90°の打面転移をおこない、小形の剥片数枚(2+3、4)を剥離する。その後、打面転移をおこない同一の打面より3枚の剥片(5・6・7)を剥離し、打面転移をおこない小形の剥片(8)を剥離する。

接合資料・B-119(母岩別資料・黒色安山岩-1、第159図)

1→2 → 3→○→4

本資料は4点(取りあげ個体数6点)よりなる接合資料である。平坦な剥離面を打面に、1・2を連続して剥離した後に、90°の打面転移をおこない、1・2の剥離面を打面とする剥離により3・○を剥離する。

接合資料・B-15(母岩別資料・黒色頁岩-11b、第160~162図)

1→2→(3→4→5→6→7)+(8→9)+(10→11→12)→13→14→15 → 16→17 → 18→19
→ 20→(21→22)→23→24 → 25→26→27+28

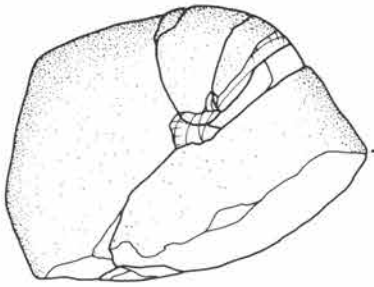
河床より採集される円礫を石核素材とする。剥片剥離は両端の小口部分より開始され、頻繁な打面転移を繰り返す。節理が著しいこと、剥離が明瞭でないこと、などから剥片剥離は不明確な点が多い。

まず、小口部分での剥離作業により縦長の剥片(1・2)を剥離する。その後、剥離は明瞭でないが、大形の剥片(3~7)を、縦長の剥片(8・9)を、幅広の剥片(10~12)を、剥離する。そしてさらに、9の剥離面を打面とし13~15を、15の剥離面を打面とし16・17を、連続して剥離する。以下の剥離作業は石核の右側面を主体とする。ここでは、頻繁な打面転移をおこない盤状剥片(18・22)を石核の素材とし、やや幅広の剥片を剥離する。

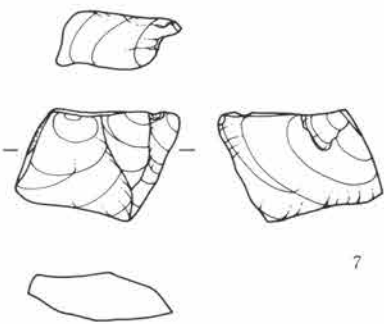
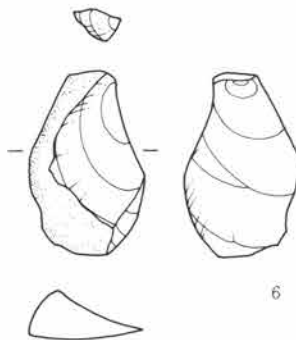
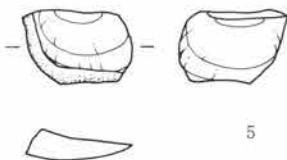
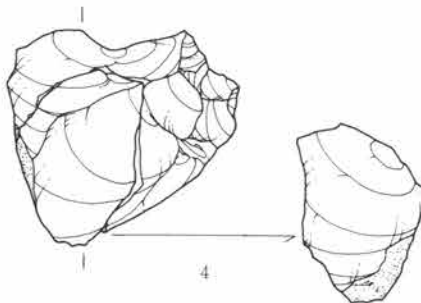
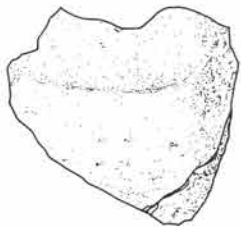
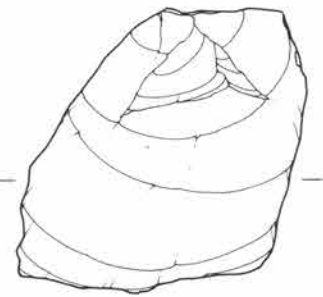
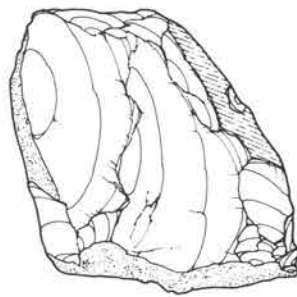
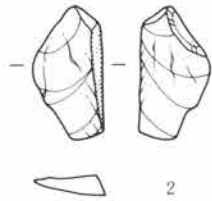
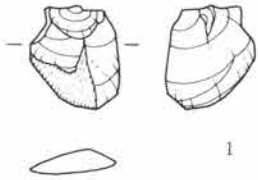
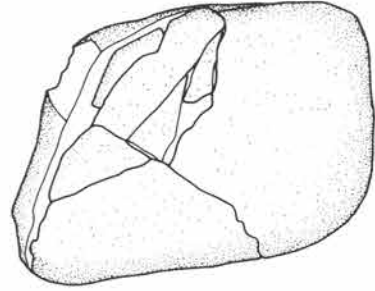
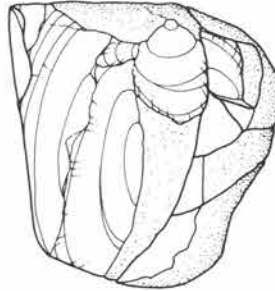
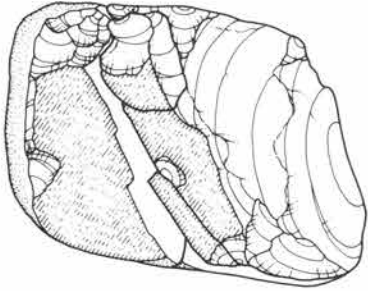
接合資料・B-22(母岩別資料・黒色頁岩-14、第163~166図)

原石→1 → 2 → 3 → 4→5→6→7→8 → 9 → 10→11→12 → (13→14)+(15)→
(16)+(17→18→19→20)・(21 → 22→23)+(24→25)→26

河床より採集される円礫を石核素材とする。剥片剥離は打面を作出(大形の剥片1)することにより開始され、この平坦な打面より大形の剥片を剥離する。小形の剥片2はこの時に生じる。次に、90°の打面転移をおこない、側面の礫面を打面、1の剥離面を作業面、とする剥片剥離(大形の剥片3を剥離)の後に、90°の打面転移をおこない、2の剥離により生じる剥離面を打面とし4を剥離する。この後に、3の剥離により生じる剥離面を打面とし、5~8を連続して剥離する。そしてさらに、2の剥離面を打面とし9が剥離され、再び、

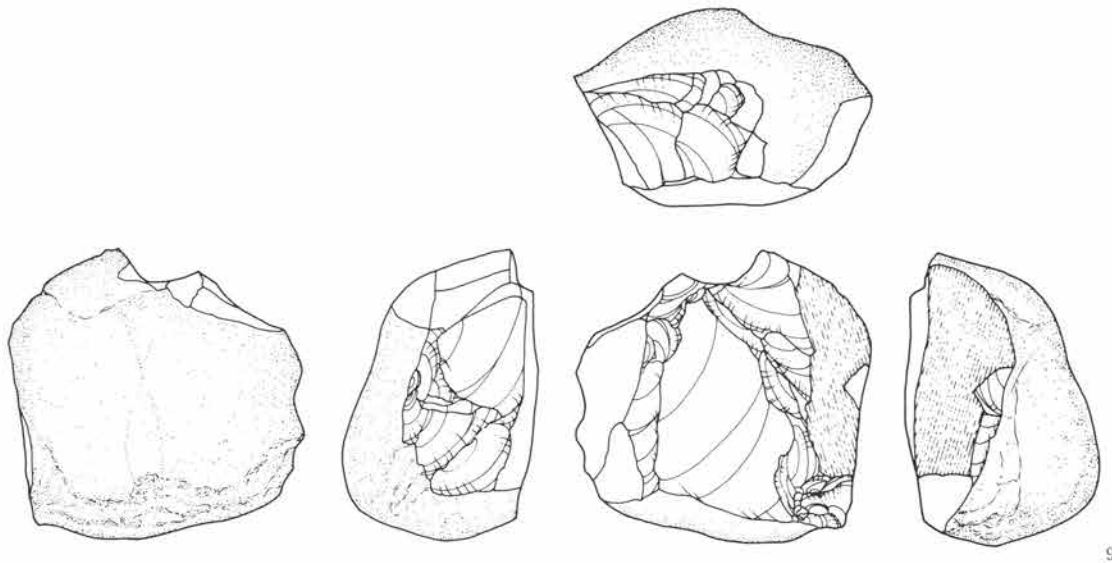


No. B-14

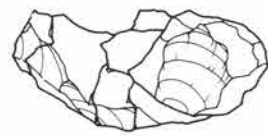


0 10cm

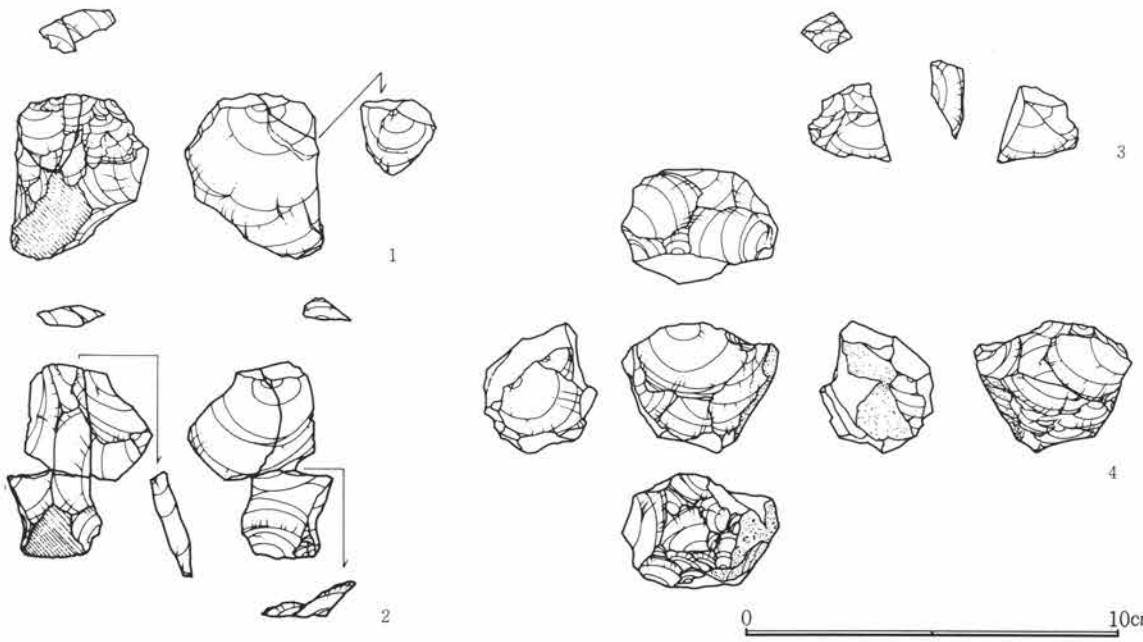
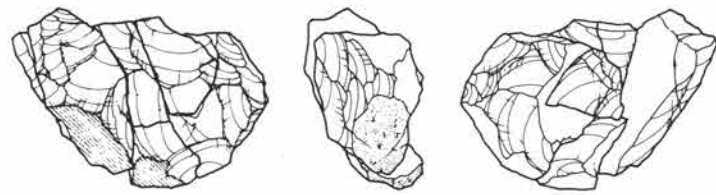
第158図 接合資料B-14(1)



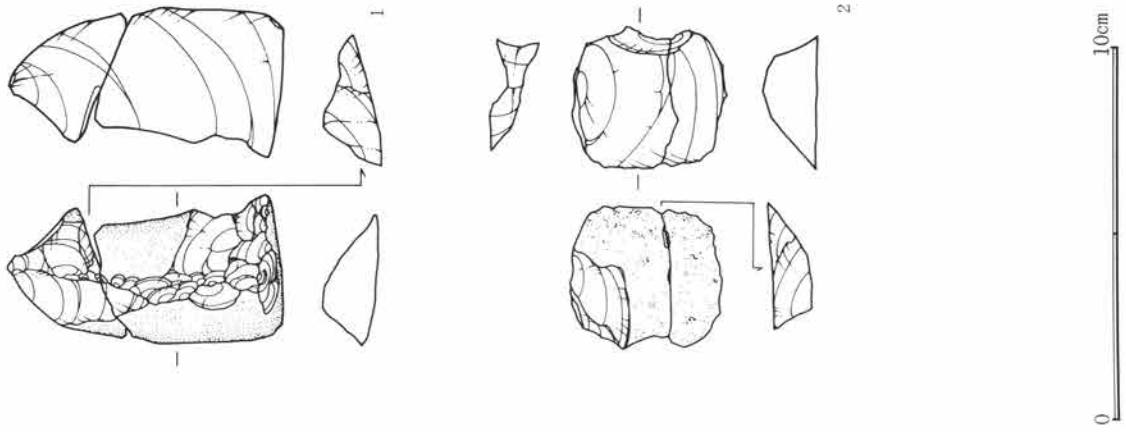
9



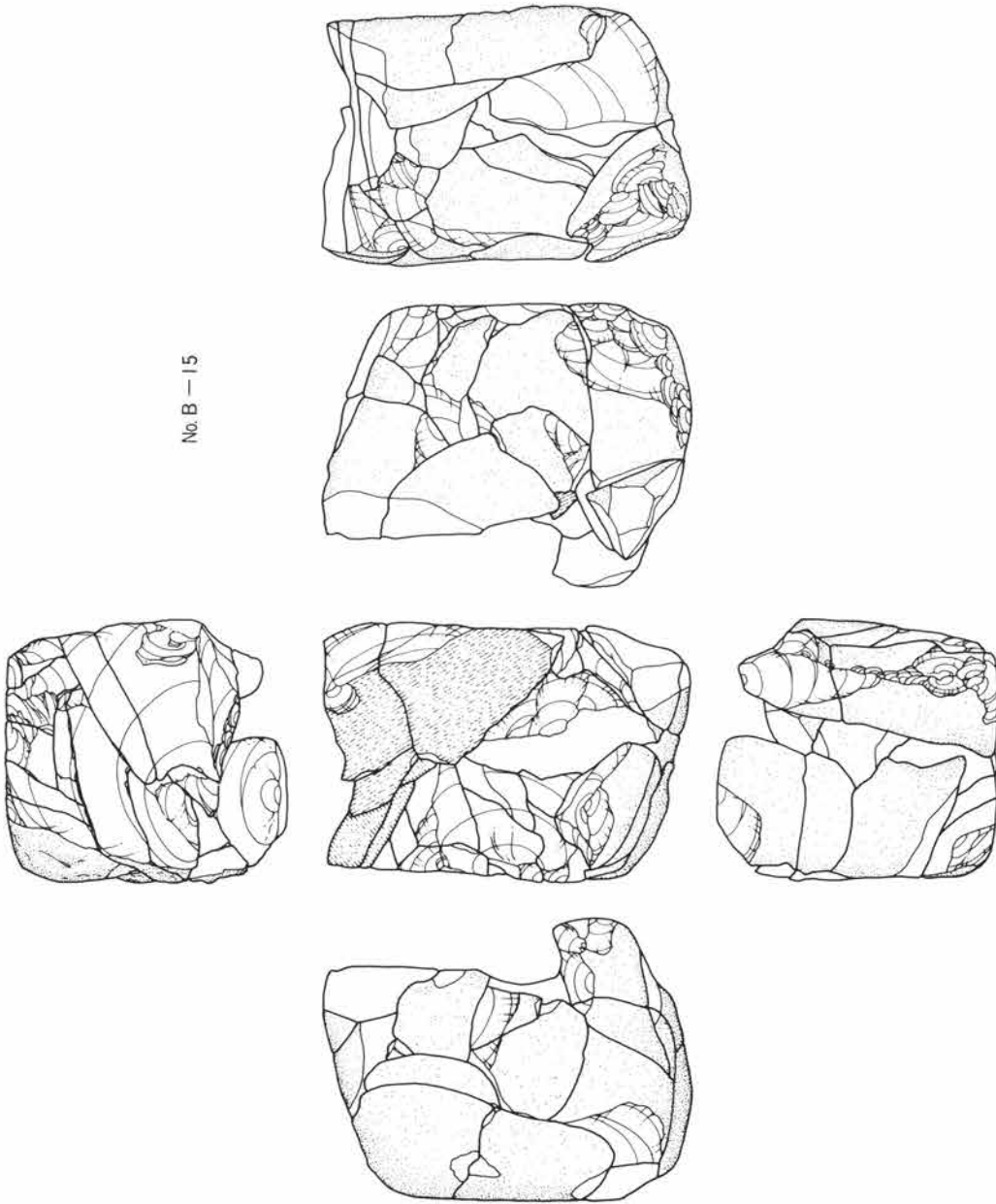
No. B-119



第159図 接合資料B-14(2)・B-119

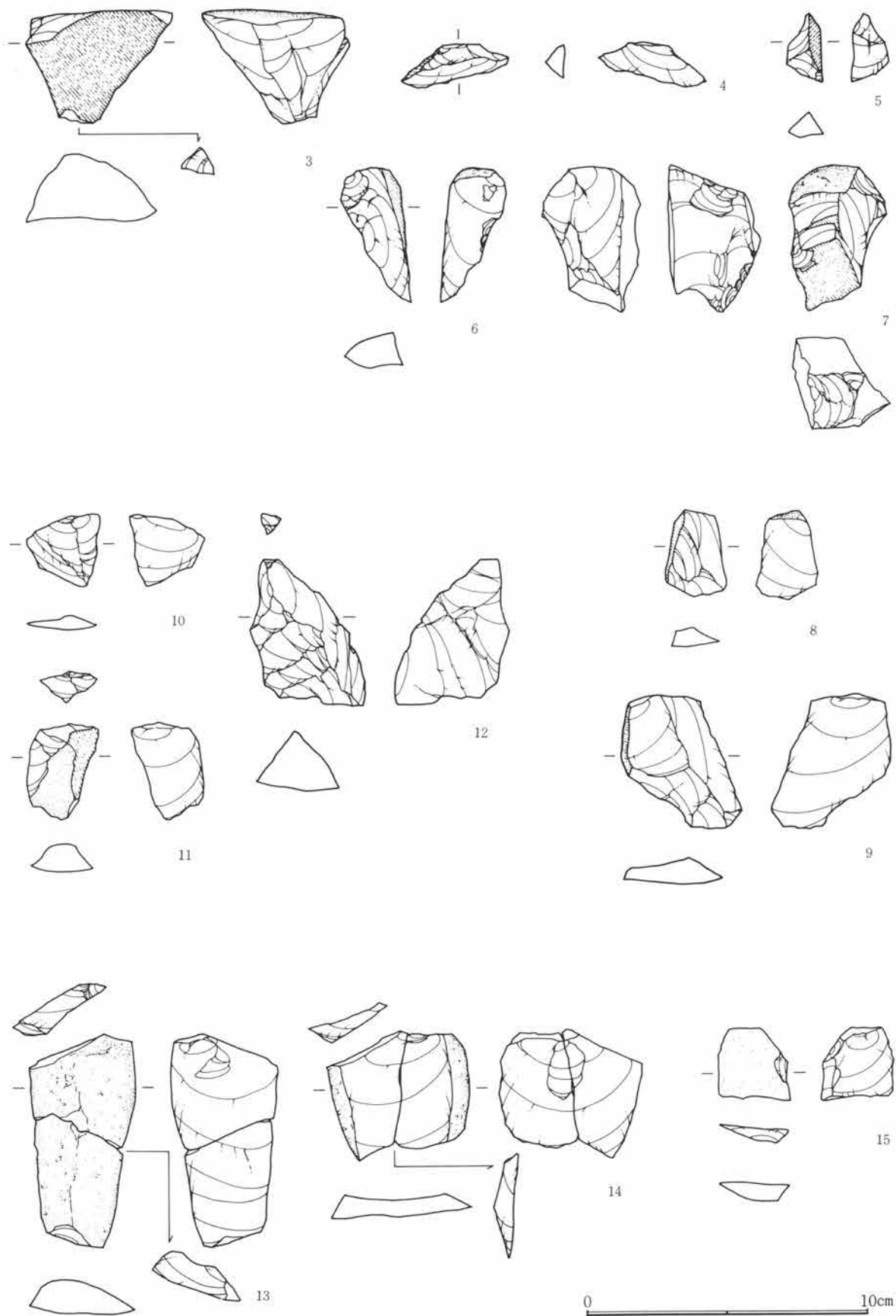


No. B-15



第160図 接合資料B-15(1)

I 旧石器時代の遺構と遺物



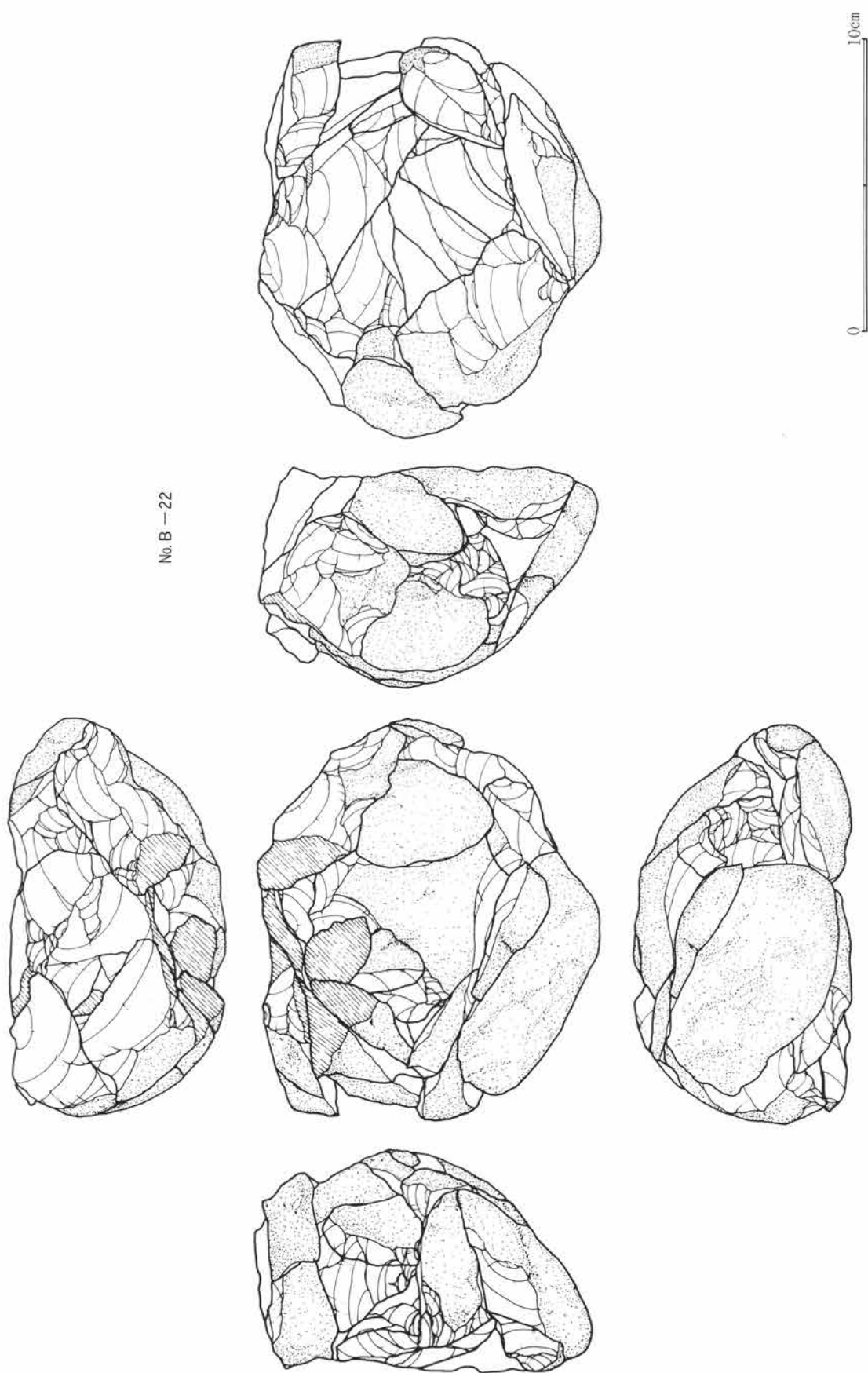
第161図 接合資料B-15(2)

5. B地点の調査



0 10cm

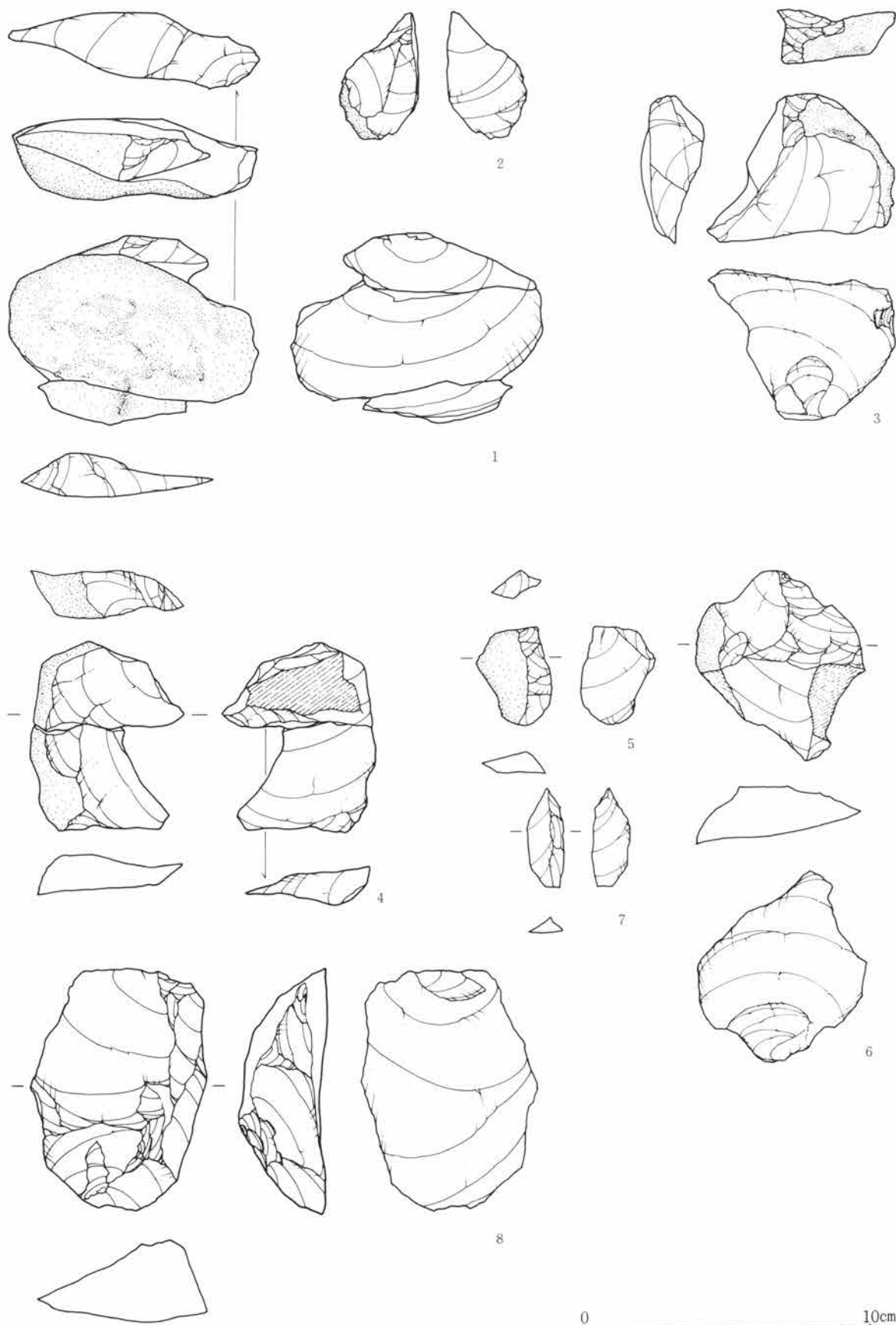
第162図 接合資料B-15(3)



No. B-22

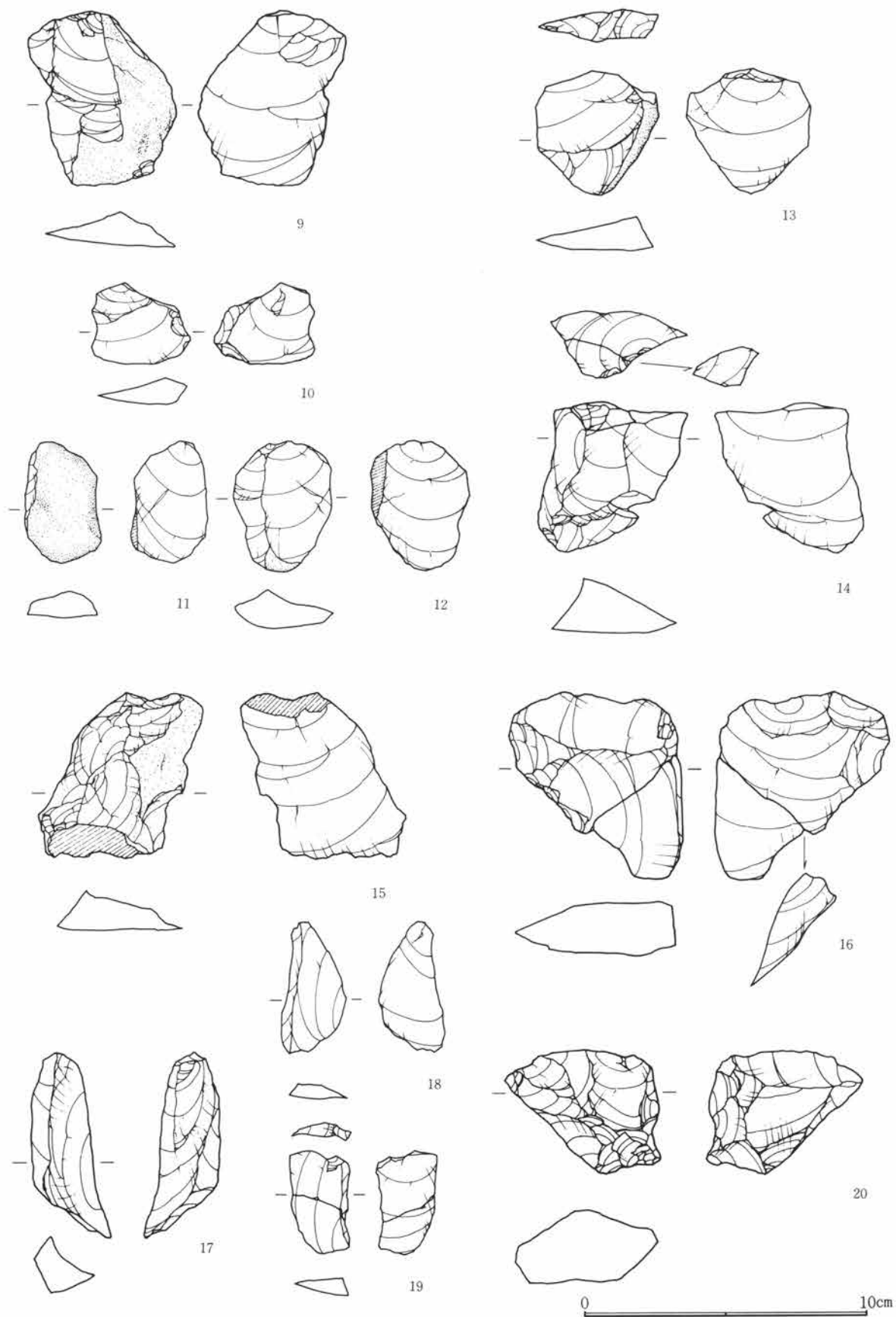
第163図 接合資料B-22(1)

5. B地点の調査

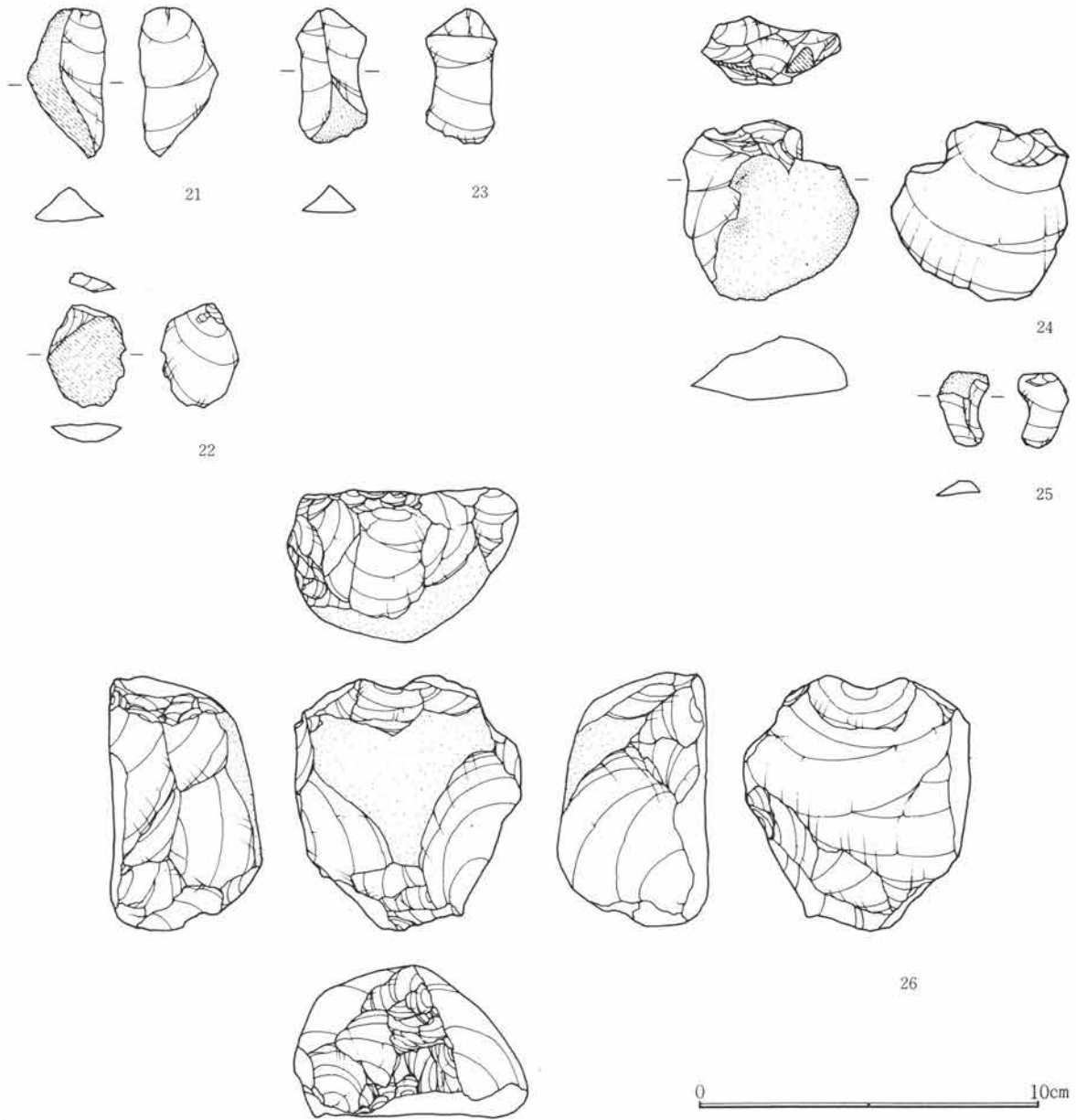


第164図 接合資料B-22(2)

I 旧石器時代の遺構と遺物



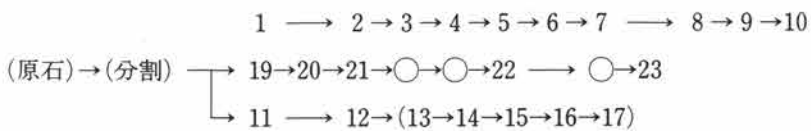
第165図 接合資料B-22(3)



第166図 接合資料B-22(4)

90°の打面転移をおこない、10~12の3枚の剥片を側面の礫面を打面とし連続して作出する。以上の工程は右側の側面での剥離作業が主体となるが、以下の工程は作業の主体を左側の側面に移行する。8の剥離面を打面とし、同一の打面より13~20の剥片を連続して剥離した後に、21~25を剥離する。21~25のなかで、22・23、24・25は同一の剥離面より作出される。

接合資料・B-59(母岩別資料・黒色安山岩-1、第167~169図)



I 旧石器時代の遺構と遺物

河床より採集される円礫を用い、分割することにより石核素材を獲得する。剥片剥離は1～10のグループと、19～23のグループ、および、11～17のグループ、の各々で連続しておこなわれる。

1～10のグループおよび19～23のグループ；分割状態となる要因については明らかでないが、剥片剥離の段階には分割状態となり、各々のグループで剥片剥離がおこなわれる。1～10のグループでは、平坦な剥離面を打面とし1を剥離した後に、礫面を打面とし2～7を剥離する。その後、90°の打面転移をおこない、7の剥離面を打面とし8が、8の剥離面を打面とし9が、剥離される。19～23のグループでは、平坦な剥離面を打面とし19～22の剥片を連続して剥離した後に、90°の打面転移をおこない○・23を剥離する。

11～17のグループ；平坦な剥離面を打面とし、11を剥離する。その後、90°の打面転移をおこない、12や、(13～17)の大形の剥片を剥離する。この大形の剥片(13～17)は石核素材に用いられ、小形の剥片が剥離される。

接合資料・B-19(母岩別資料・黒色頁岩-13、第169図)

(原石)→(分割)→○→1→○→○→2→3→○→○→4→○→5→6

本資料は6点(取りあげ個体数7点)よりなる接合資料である。礫面を打面とする剥片剥離が石核の側縁に沿っておこなわれ、石核の左側から右側へ向け、大きく左右に打点を移動し、連続しておこなわれる。

接合資料・B-114(母岩別資料・黒色安山岩-1、第170図)

(原石)→(分割)→○→1→○→○→○→○→2→3

本資料は3点よりなる接合資料である。原石を分割することにより石核の素材を獲得する。剥片剥離は上下両端の打面および側面でおこなわれる。まず、左側の側面部分で表裏両面の剥離面を打面とし剥片剥離がおこなわれた後に、上設の打面より大形の剥片(1)が剥離される。その後に右側の側面部分で連続して小形の剥片が剥離され、さらに石核の下端部分に作業面を移動する。そこでは裏面側で剥片を剥離した後に、表面側で剥片(2)を剥離する。

接合資料・B-23(母岩別資料・黒色頁岩-16、第171図)

原石 → ○ → 1 → 2 → ○ → 4 → 5 → ○ → ○ → ○ → 6
 └─ 3

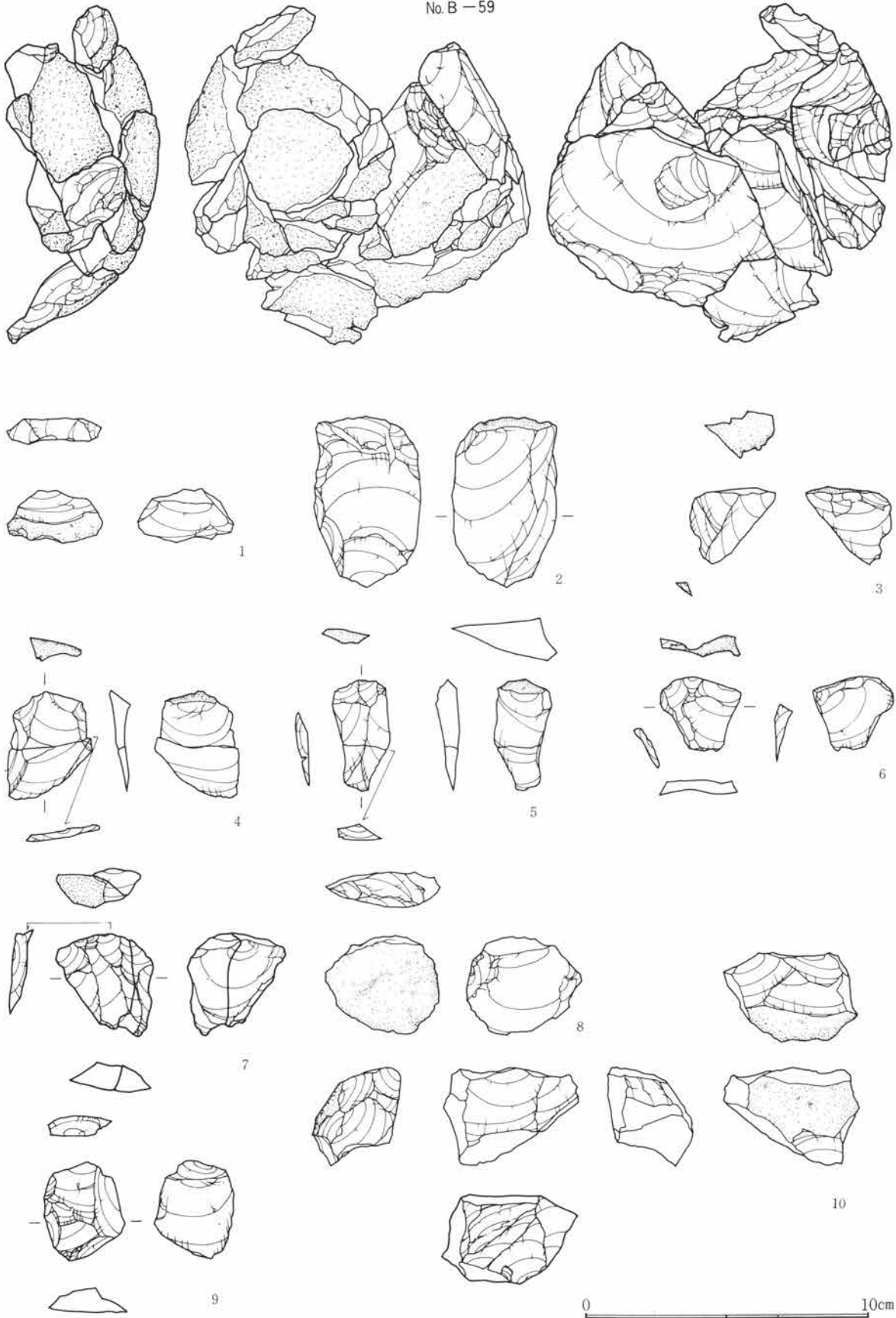
本資料は6点よりなる接合資料である。剥片剥離は小口部分の表裏両面でおこなわれる。まず、礫面を打面とし大形の剥片が作出され、打点を左側に移動しながら小形の剥片(1～4)を連続して剥離する。その後に、この剥離によって生じる剥離面を打面とする剥片剥離がおこなわれ、小形の剥片(5)を剥離する。なお、石核の側面に3が接合するが、剥離順序については不明である。

接合資料・B-44(母岩別資料・頁岩-1、第172図)

(原石)→(分割)→1→2→○→○→○→3→4→○→○→5→○→6

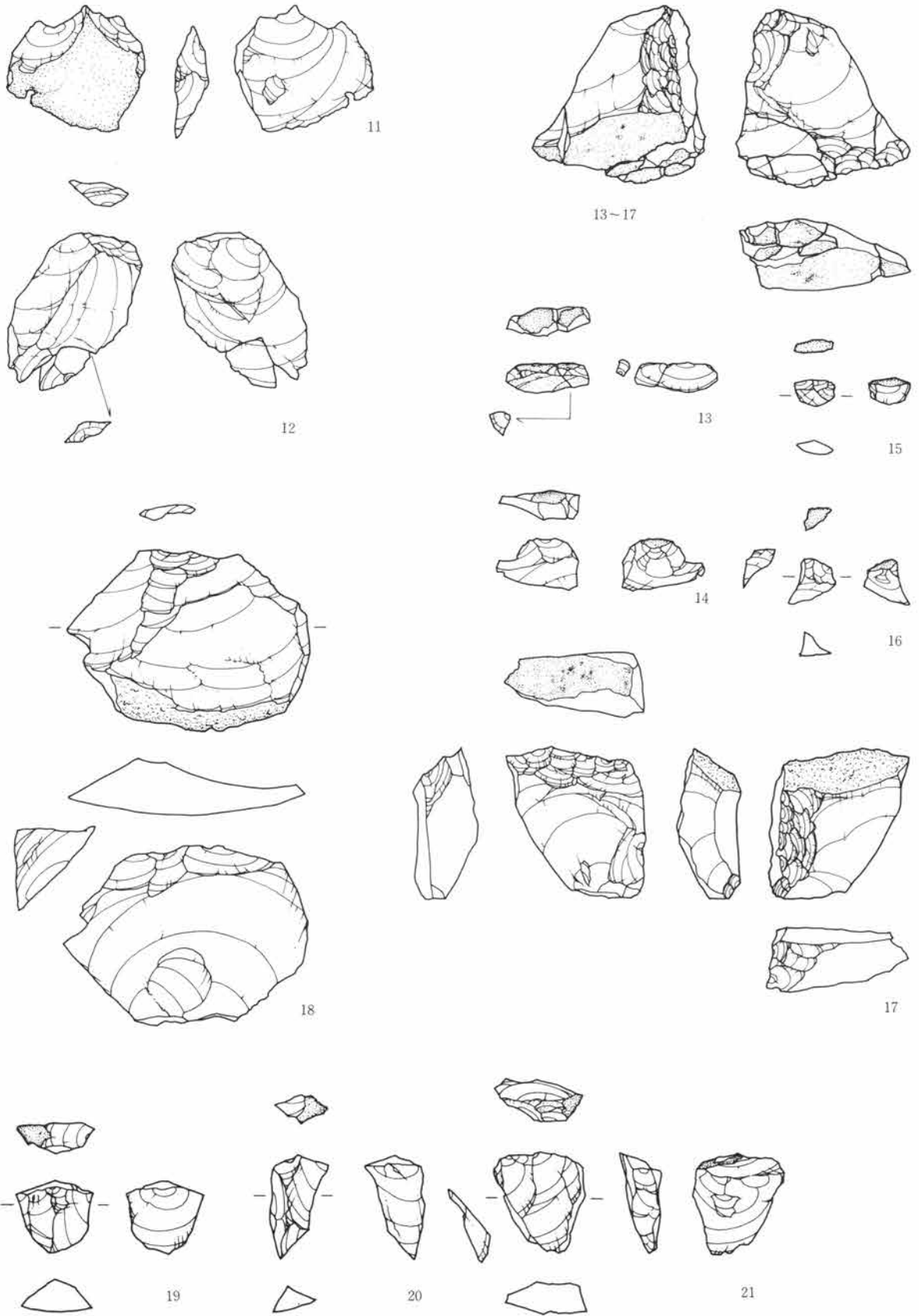
河床より採集される円礫を石核の素材とする。剥片剥離は側面より原石を分割・二分することにより開始され、まず、石核の上面部分で剥片剥離がおこなわれ、小形の横長剥片(1～4)が礫面を打面とし連続して剥離されるようである。その後、90°の打面転移がおこなわれ、4の剥離面を打面とし小形の横長剥片(○・5)を剥離する。頻繁な打面転移をおこない剥離作業は展開する。

No. B-59



第167図 接合資料B-59(1)

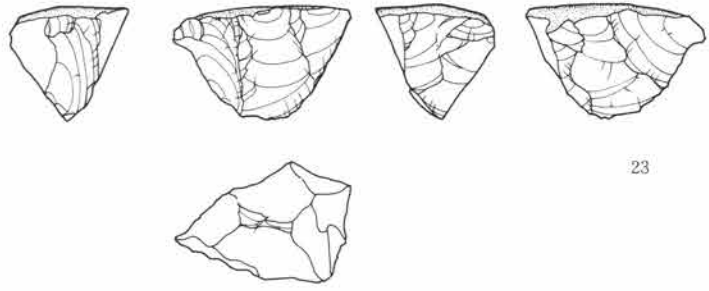
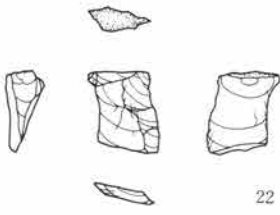
I 旧石器時代の遺構と遺物



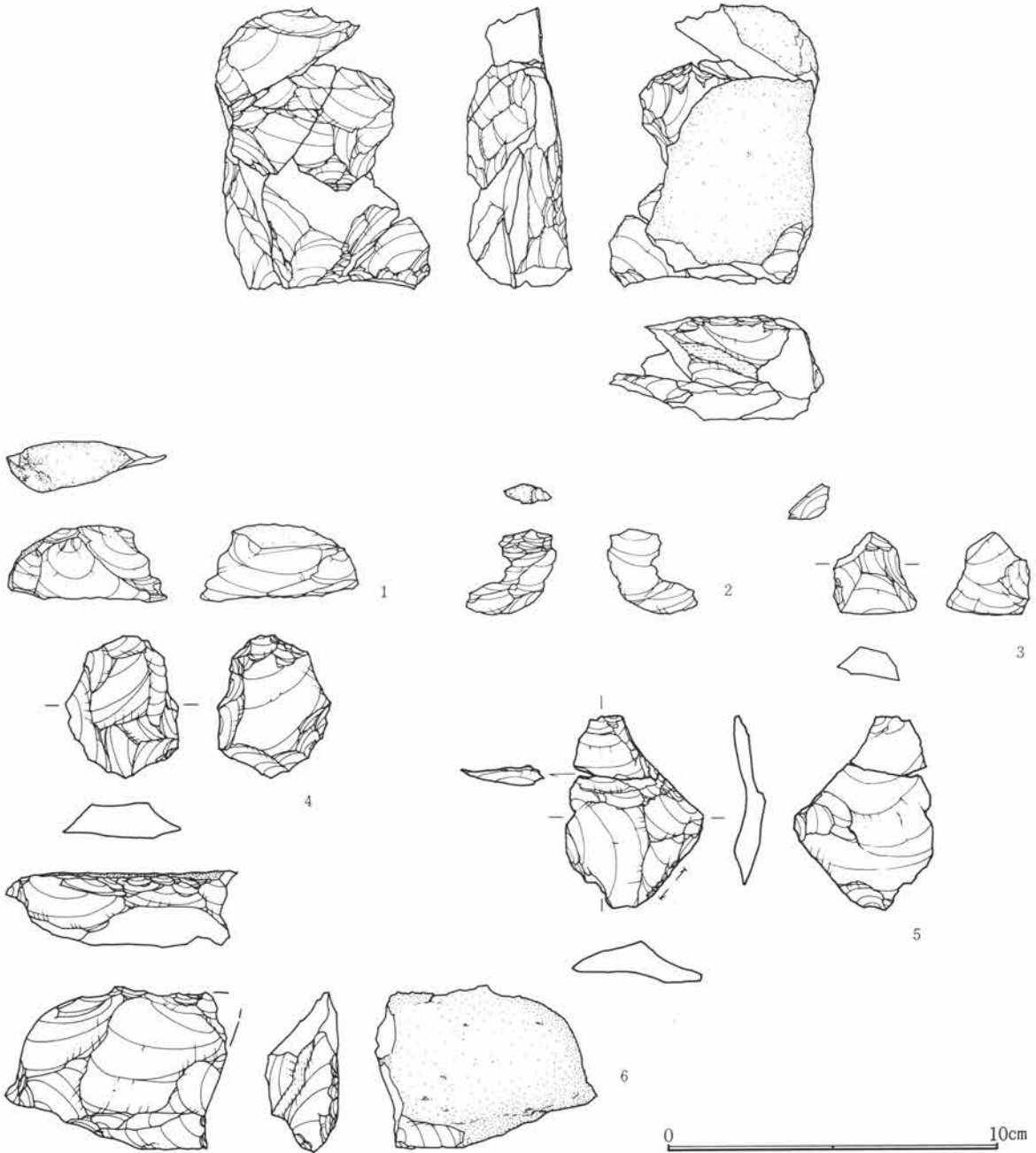
0 10cm

第168図 接合資料B-59(2)

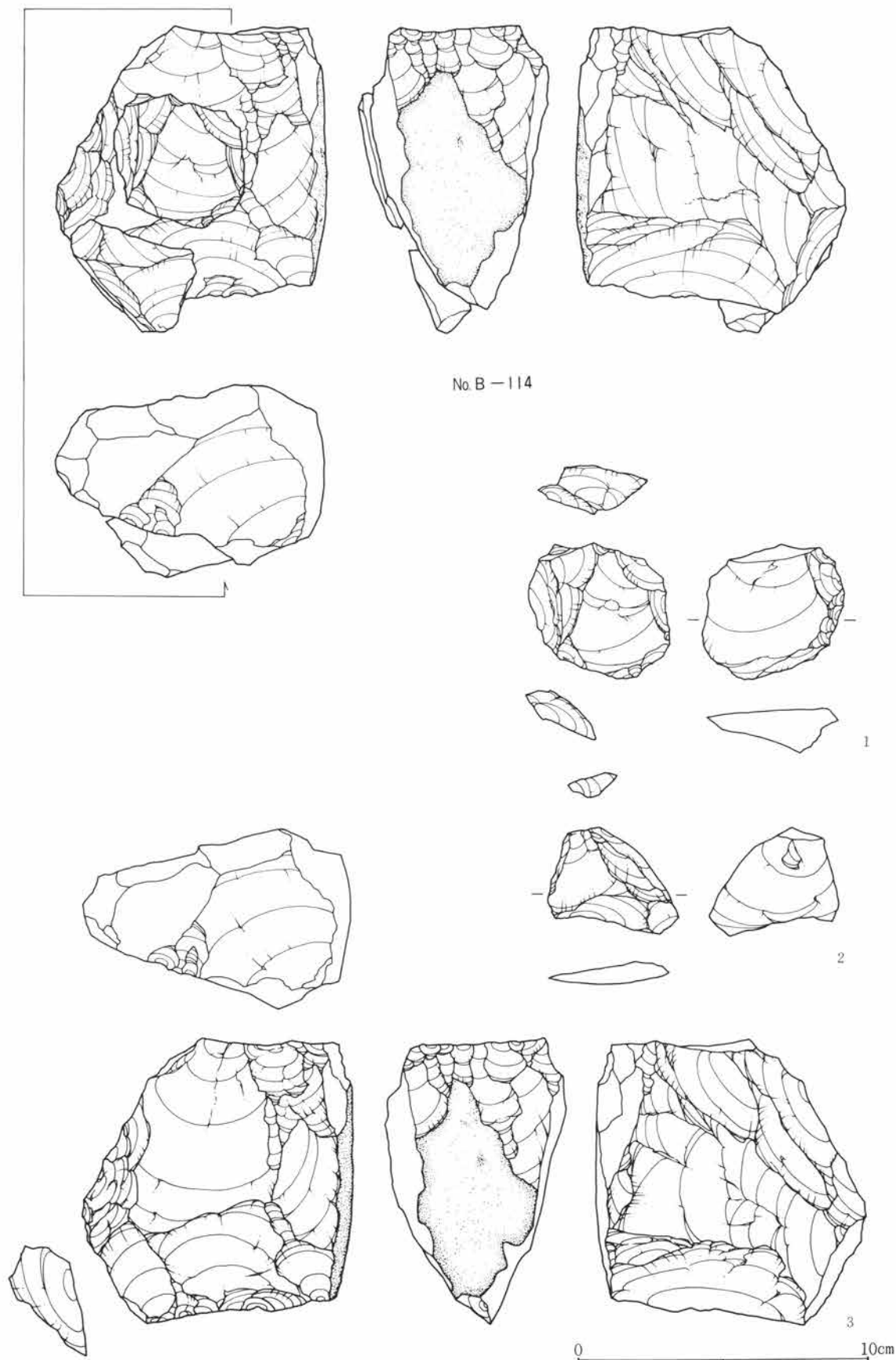
5. B地点の調査



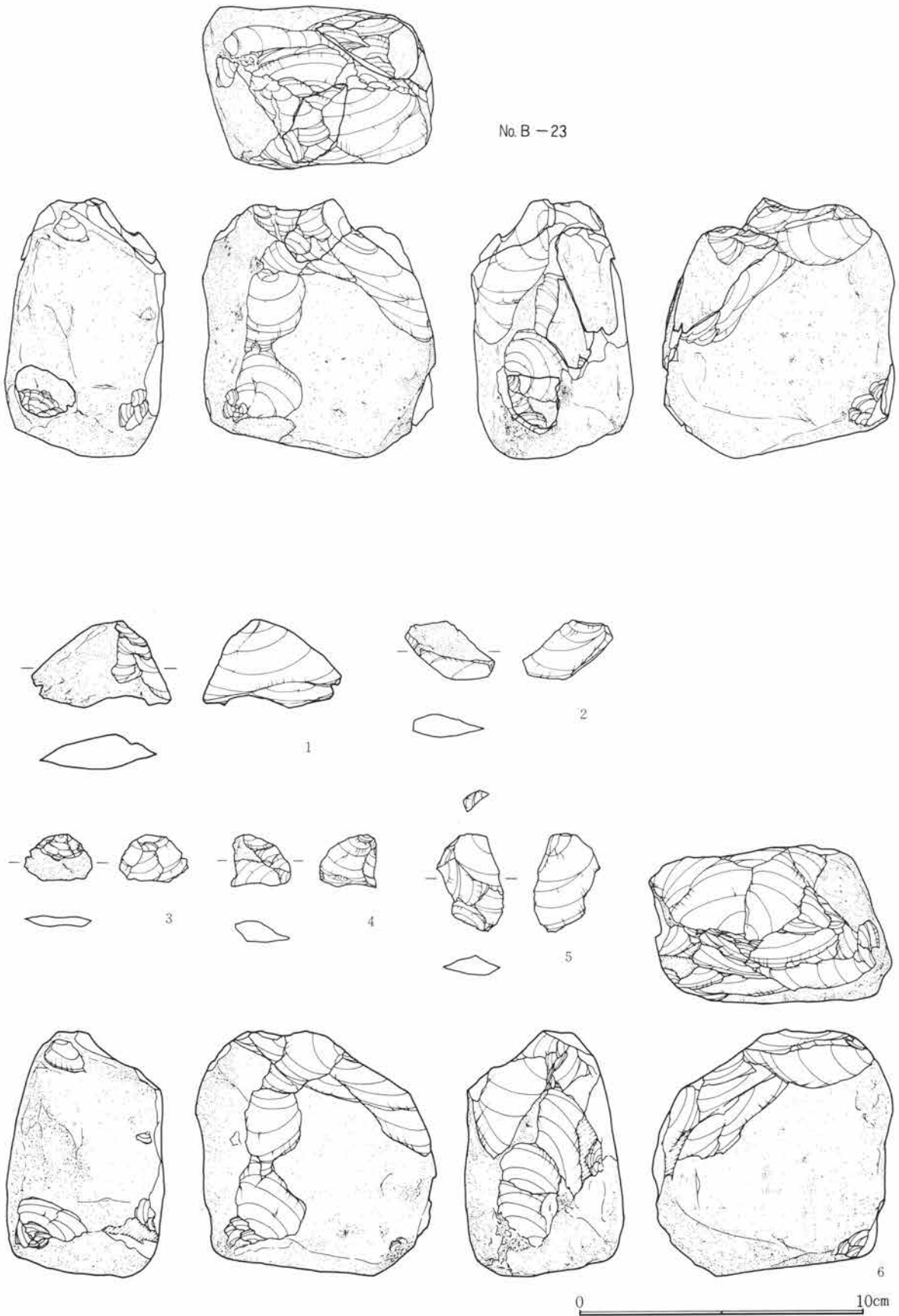
No. B-19



第169図 接合資料B-59(3)・B-19

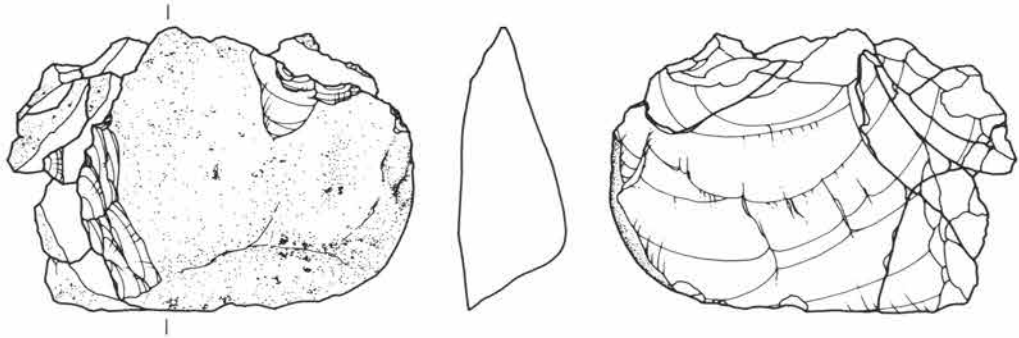


第170図 接合資料B-114

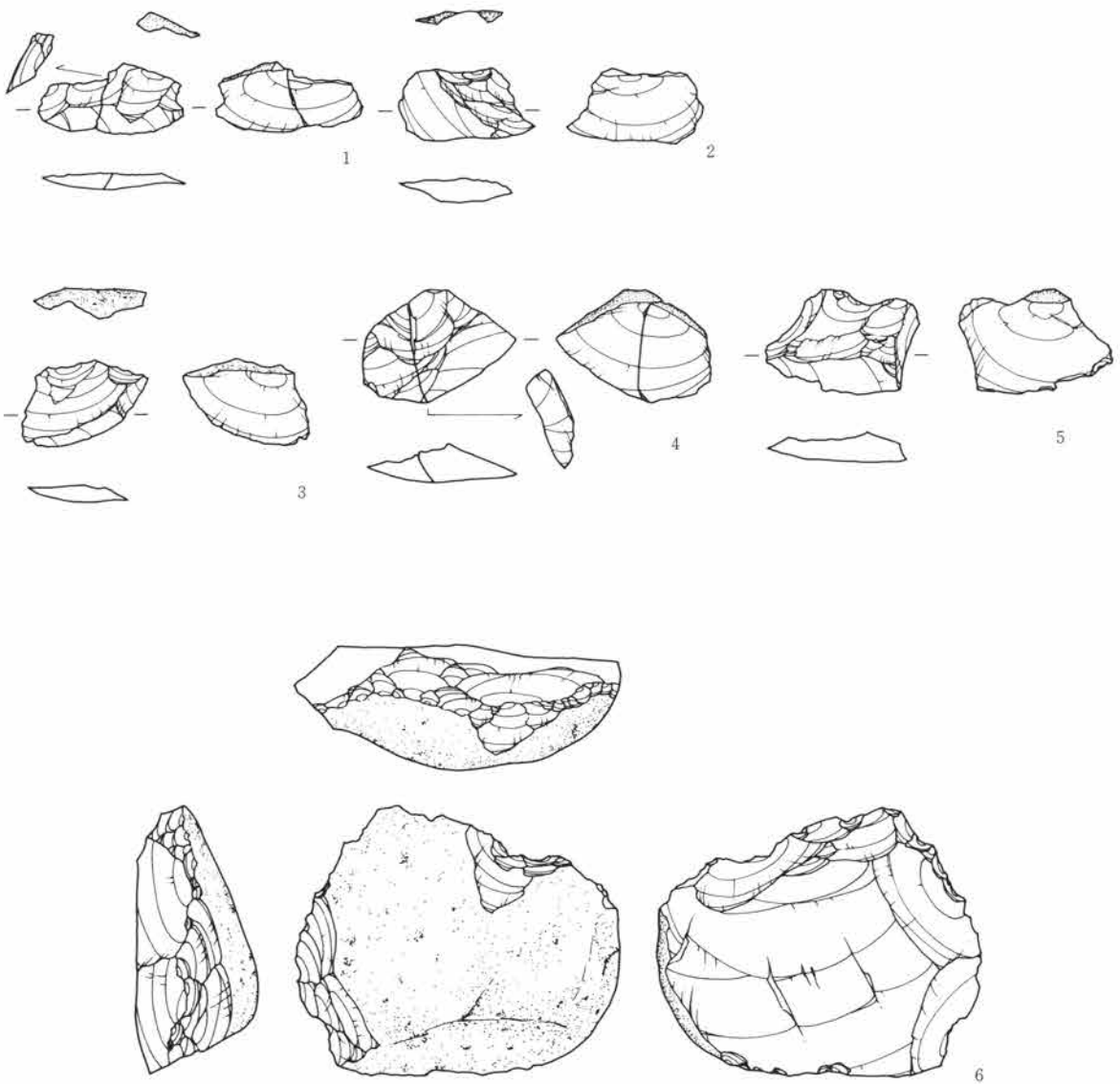


第171図 接合資料B-23

I 旧石器時代の遺構と遺物



No B-44



第172図 接合資料B-44

接合資料・B-17(母岩別資料・黒色頁岩-12b、第173~175図)

(原石)→(分割)→1 → ○→2 → 3 → ○→4 → 5 → 6→7→8→9 →
10→11 → 12→13

河床より採集される円礫を石核の素材とする。剥片剥離は側面より原石を分割・二分することにより開始され、90°の打面転移を繰り返すことにより剥片剥離が展開する。

まず、石核の側縁で剥離作業をおこない幅広の剥片(1)を、90°の打面転移をおこない縦長の剥片(2)を、剥離する。その後、頻繁な打面転移をおこない、3~5の剥片を剥離する。そしてさらに、石核の側縁部分で剥片剥離がおこなわれ、90°の打面転移をおこない、6~9を剥離する。再び、石核の上面で剥片剥離がおこなわれ、90°の打面転移をおこない10・11を、180°の打面転移をおこない12・13を、平坦な打面より剥離する。

接合資料・B-18(母岩別資料・黒色頁岩-13、第175図)

(原石)→(分割)→1→○→2→3→○→4→○→5→○ → 6 → ○→○→7

河床より採集される円礫を石核の素材とし、原石を分割することにより剥片剥離がおこなわれる。まず、石核の小口部分より礫面を打面とし、幅広の剥片(1~5)を連続して剥離する。その後、90°の打面転移をおこない2枚の剥片を剥離する。再び、90°の打面転移をおこない2枚の剥片を剥離する。

接合資料・B-66(黒色安山岩、第176・177図)

(原石)→(分割)→1→(2+3)→4→5→12 → 6→7→8→11 → 9→10→○ → ○→13

河床より採集される円礫を石核の素材とし、原石を分割することにより剥片剥離がおこなわれる。まず、礫面を打面とし、やや幅広の剥片(1~5)を剥離する。その後、180°の打面転移をおこない、同一の打面より6~8を剥離する。再び、180°の打面転移をおこない、礫面を打面とし幅広の剥片3枚を剥離する。

接合資料・B-68(黒色安山岩、第177図)

1→2→3 → 4

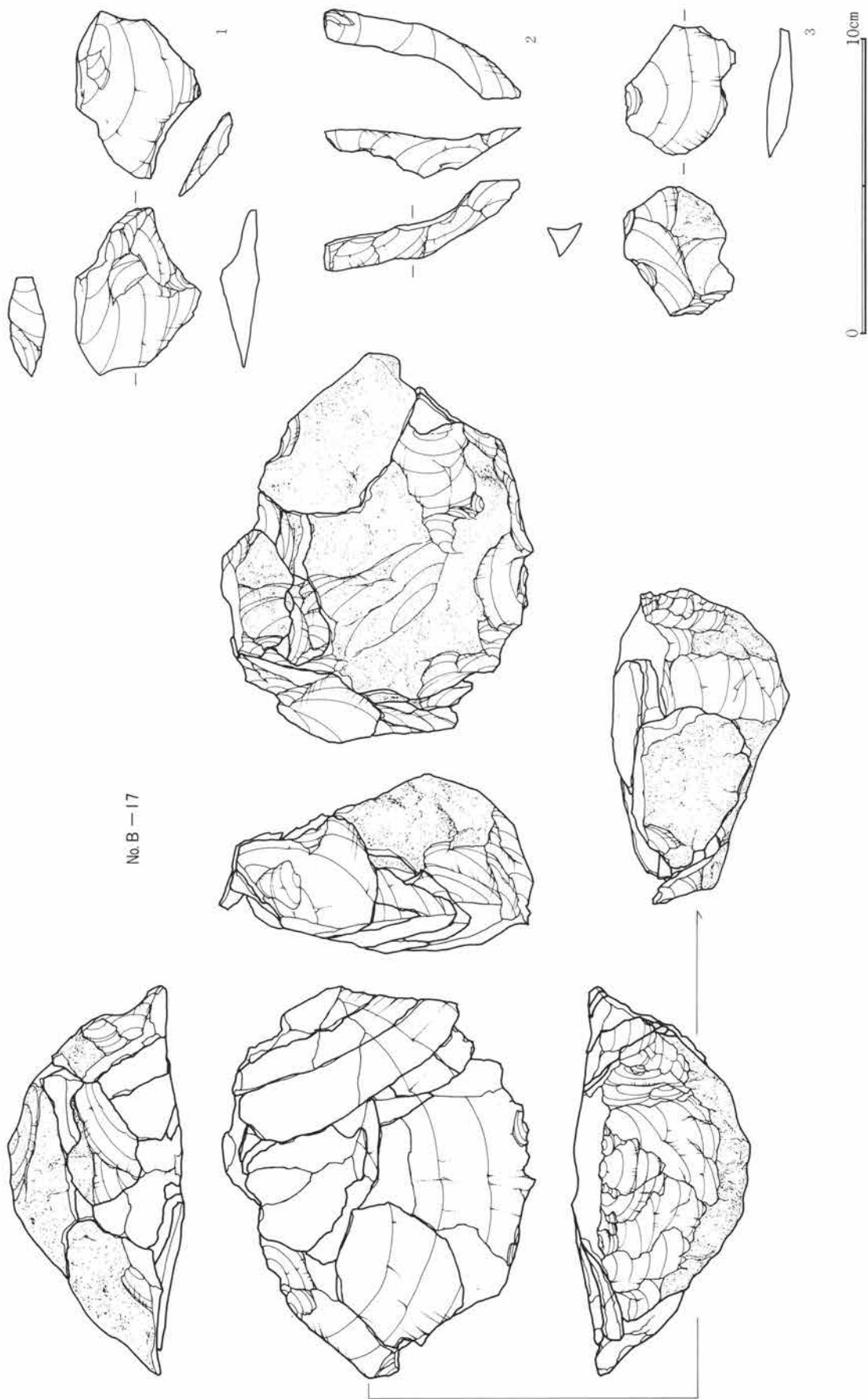
本資料は4点よりなる接合資料である。90°の打面転移を伴う剥離がおこなわれる。平坦な打面より幅広の剥片(1~3)が連続して剥離され、3を剥離した後は、90°の打面転移をおこない4を剥離する。1~4は同一作業面より剥離される。

接合資料・B-63(黒色安山岩、第178・179図)

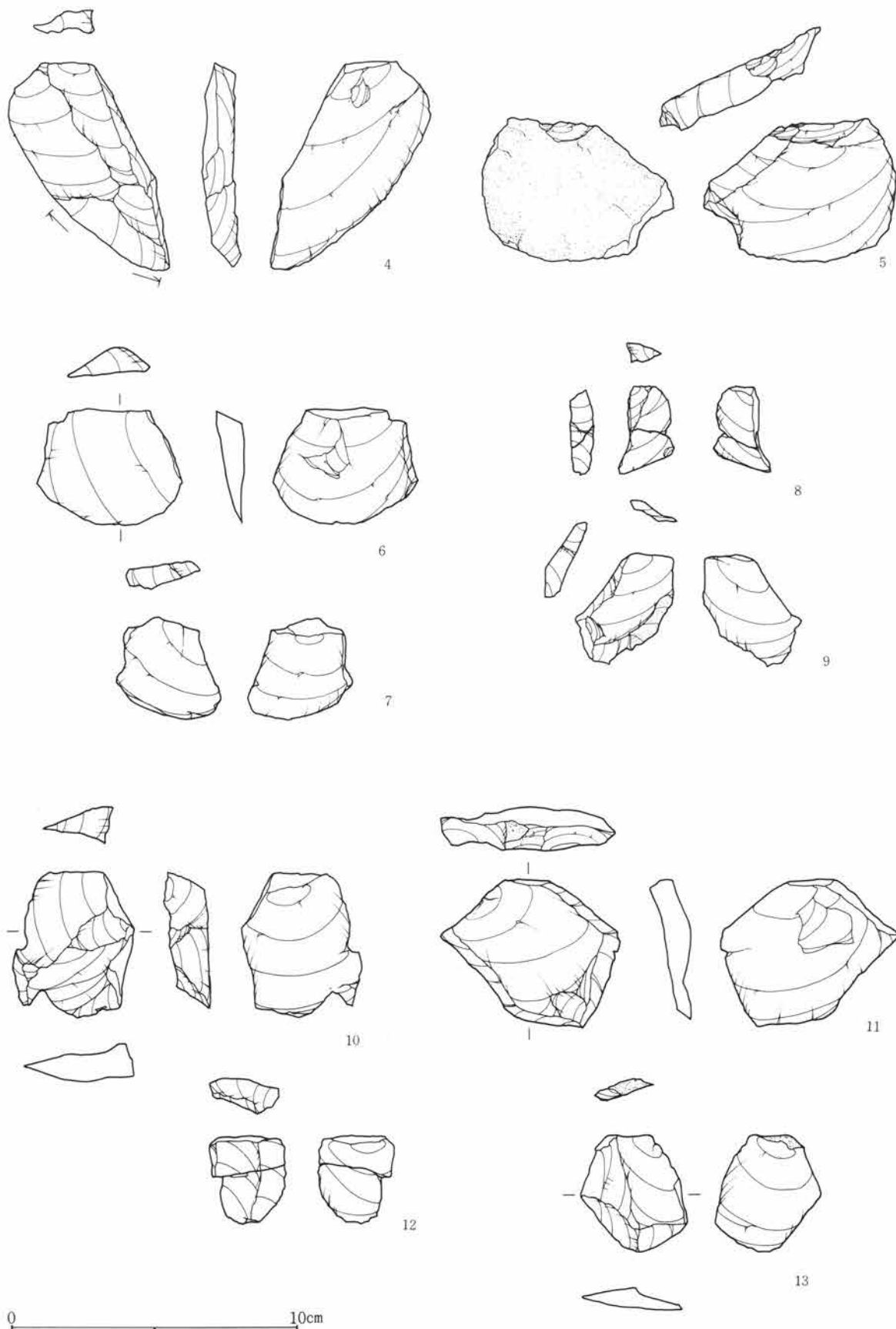
1 → 2→3→4 → 5 → 6
 ↓
 7 → 8→○→9→○→(10→11)→12

まず、石核の側縁より小形の剥片(1)を剥離する。この段階以降、剥片剥離は上面の打面よりおこなわれ、平坦な打面より縦長の剥片(2~4)を連続して剥離する。再び、石核の側縁より小形の剥片(5)が剥離され、この剥離の終了した後、石核は分割・二分され、盤状の石核素材が得られる。二分されるうちの一つでは、石核の側縁より横長の剥片(7)が剥離され、これ以降、90°の打面転移をおこない、同一の打面より連続して剥離がおこなわれる(8~12)。他の石核には、小形の横長剥片(6)を剥離するほか、剥離の実態について、明らかではない。

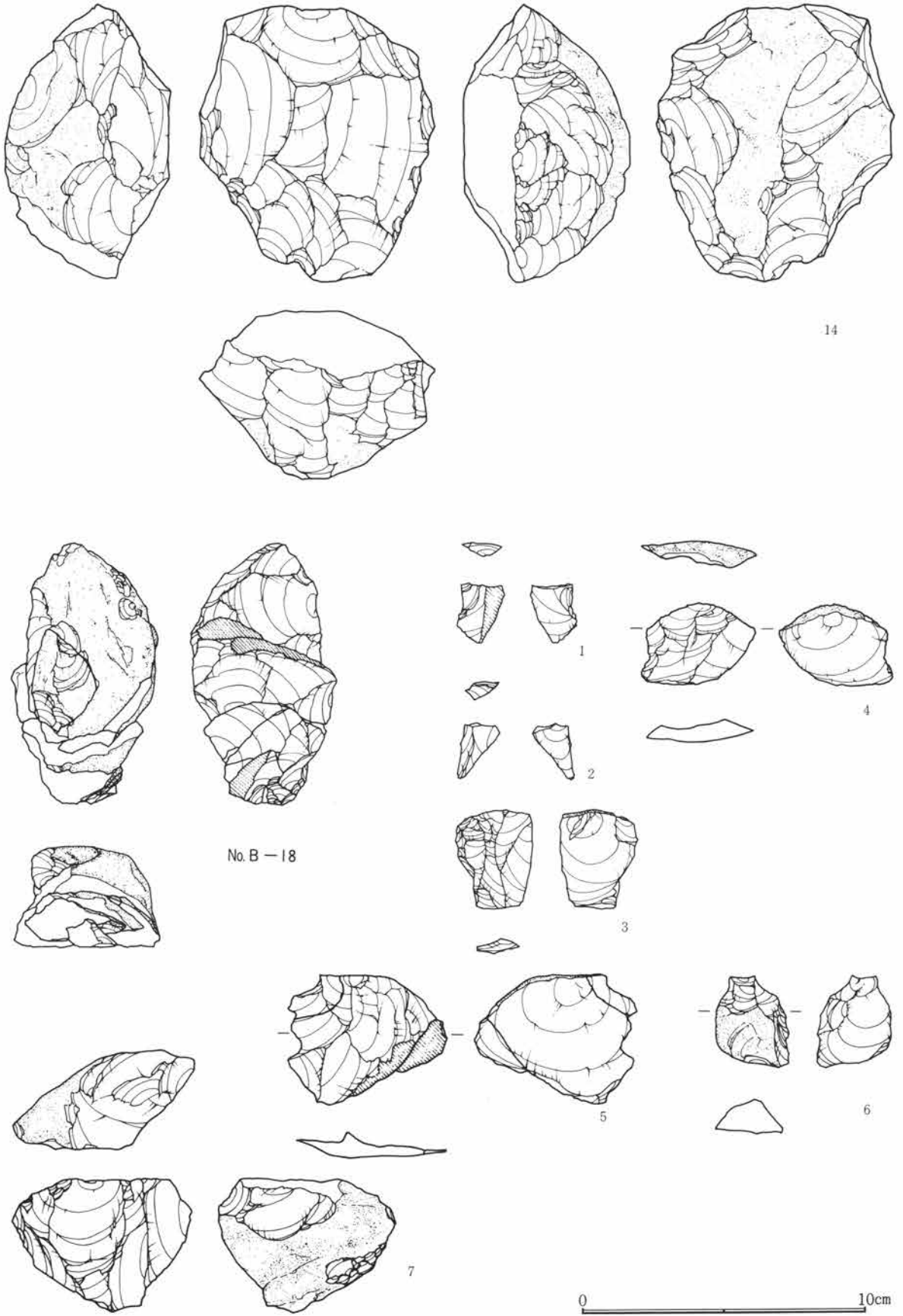
I 旧石器時代の遺構と遺物



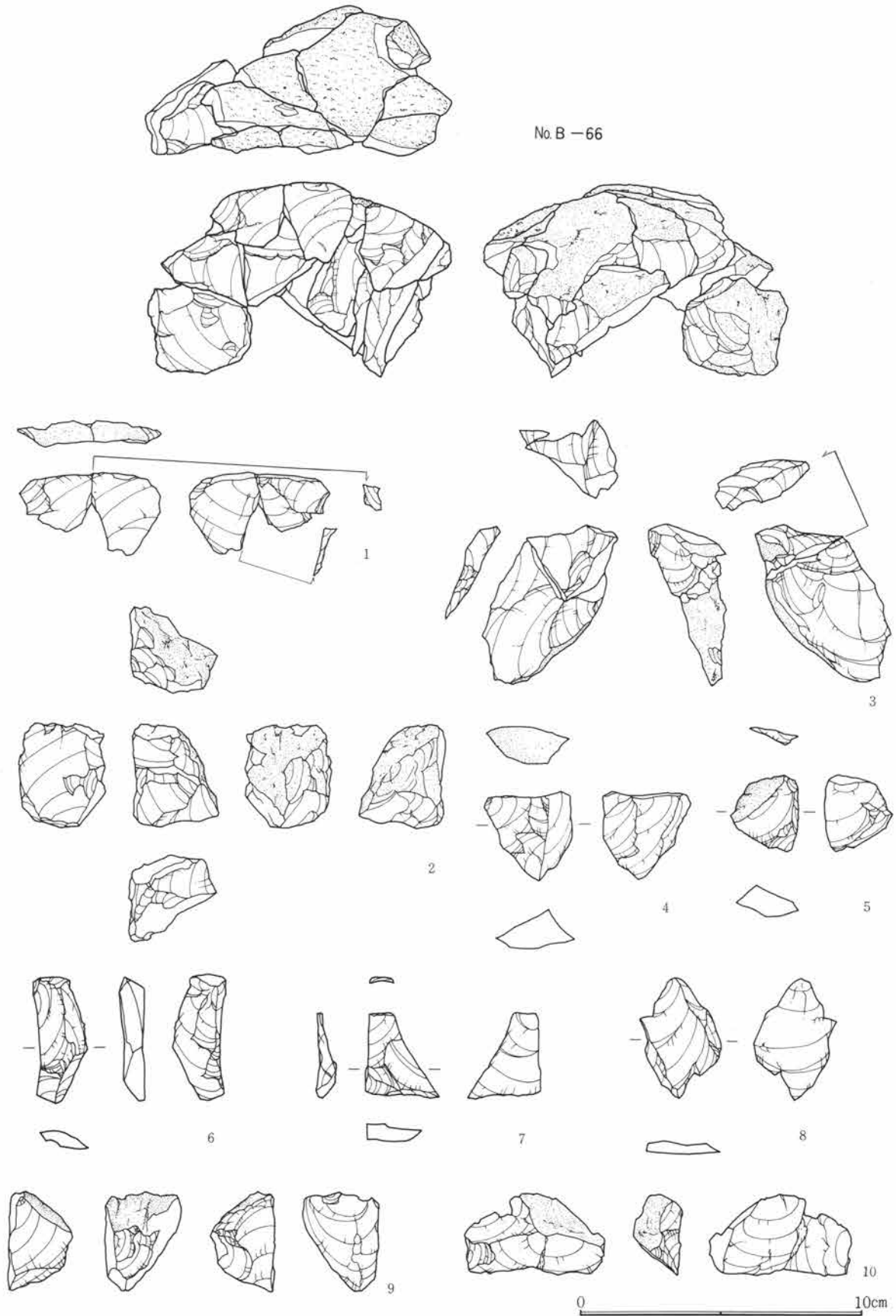
第173図 接合資料B-17(1)



第174図 接合資料B-17(2)

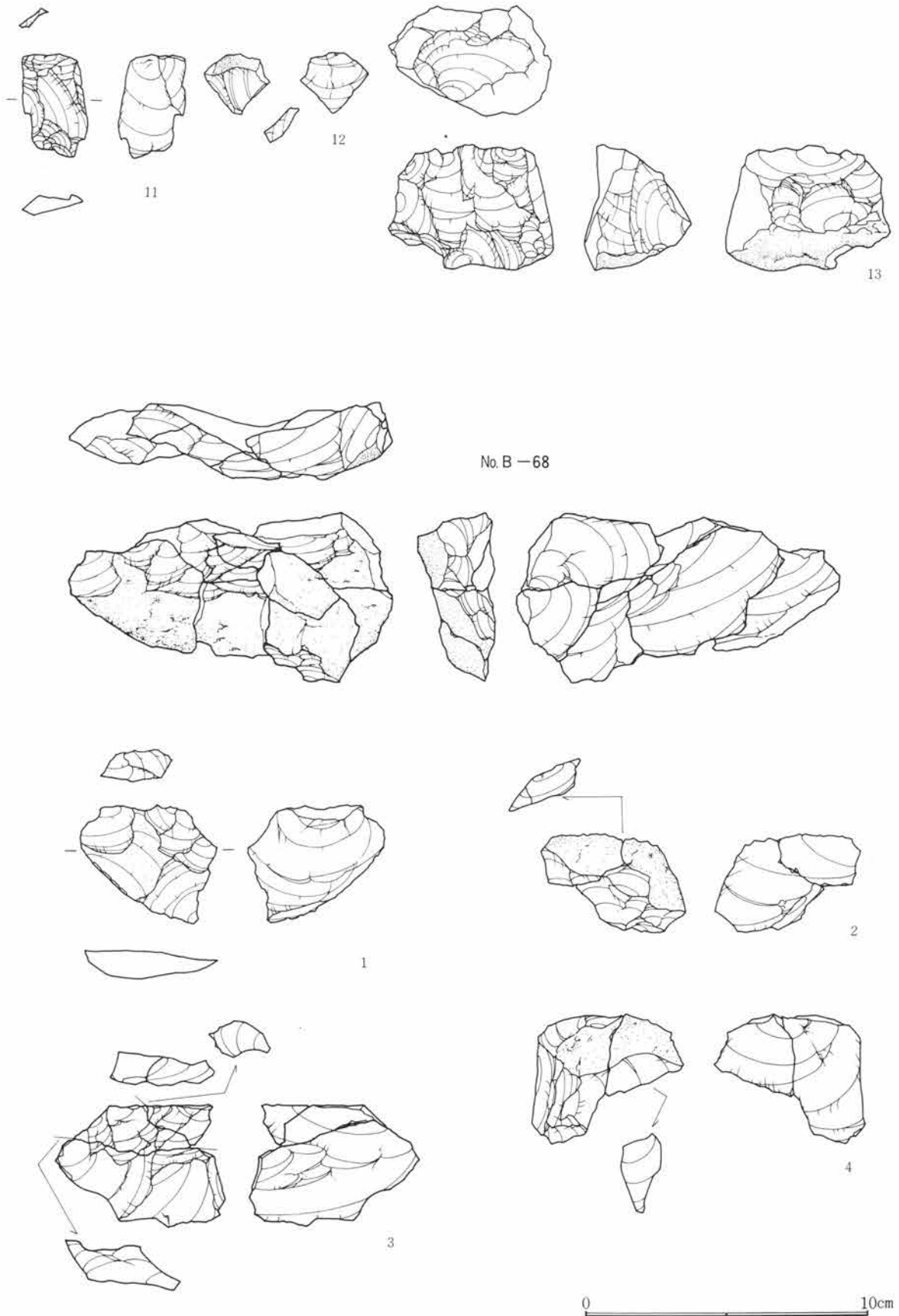


第175図 接合資料B-17(3)・B-18

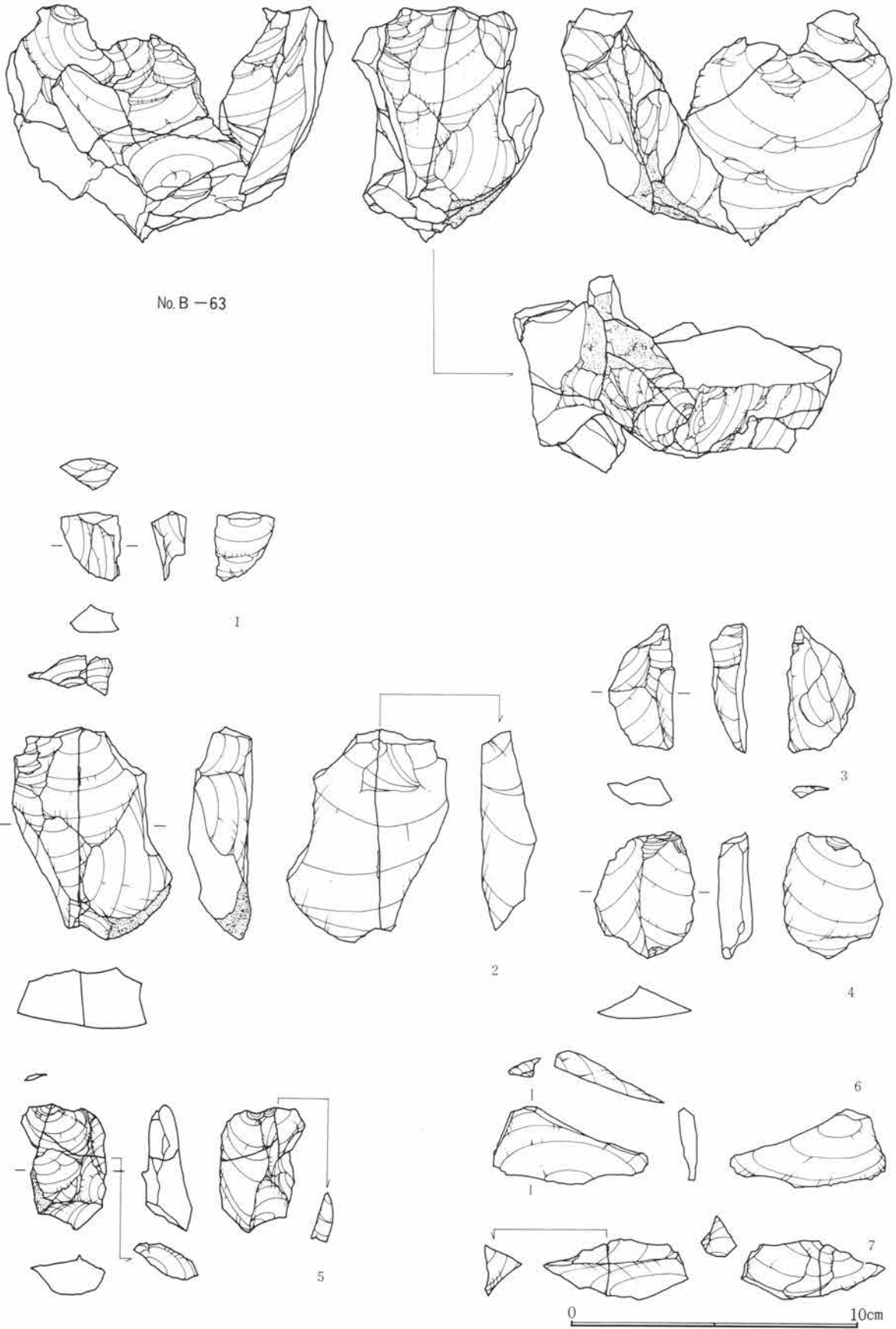


第176図 接合資料B-66(1)

I 旧石器時代の遺構と遺物

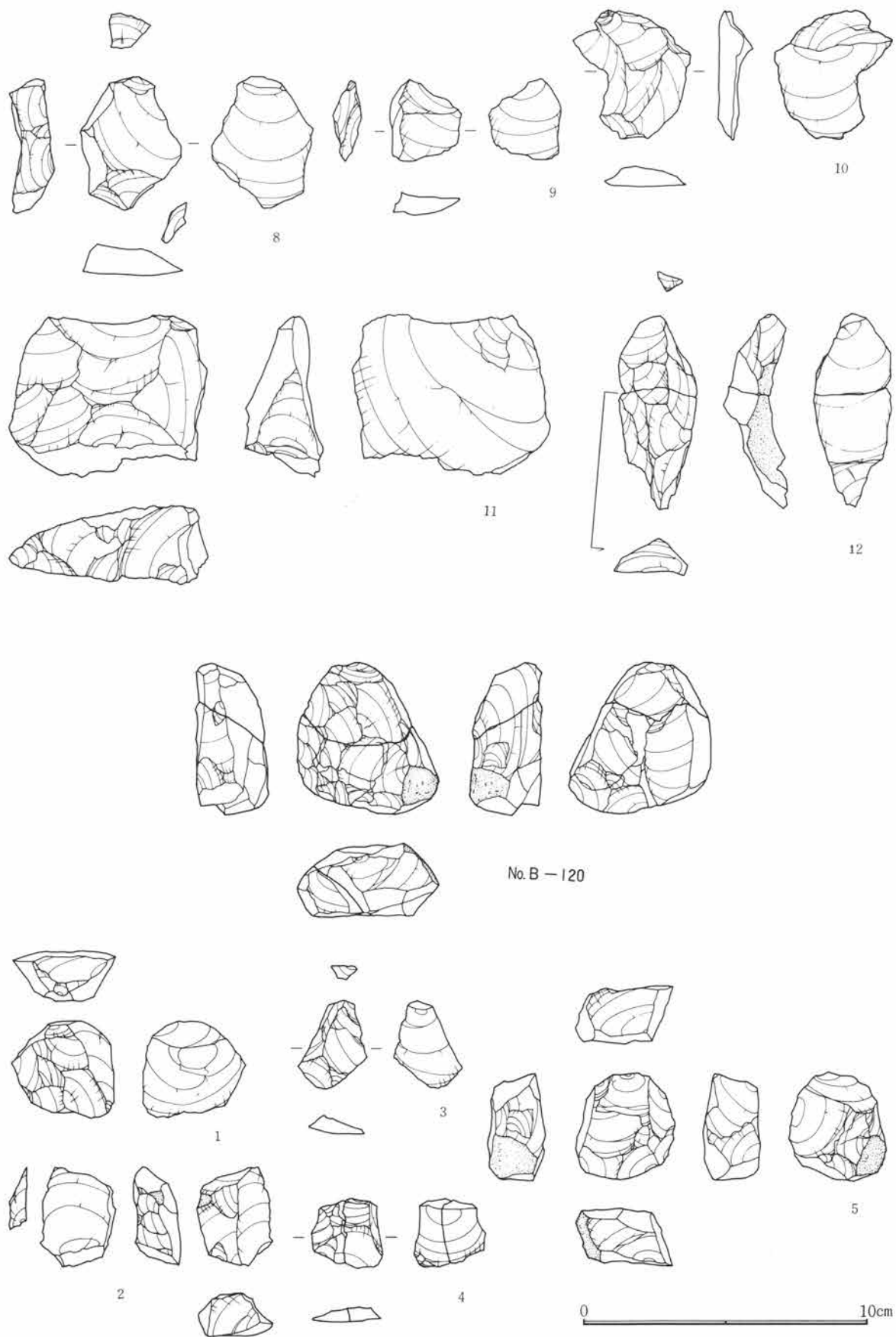


第177図 接合資料B-66(2)・B-68



第178図 接合資料B-63(1)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第179図 接合資料B-63(2)・B-120

接合資料・B-120(母岩別資料・黒色安山岩-1、第179図)

(原石)→分割→○ → 1 → 2 → 3 → 4 → 5

比較的小さな円礫を素材とし、原石を分割・二分することにより盤状の石核素材を獲得する。剥片剥離は分割面を打面とし、やや幅広の剥片(1)を剥離する。その後、90°の打面転移をおこない、同一の打面より縦長の剥片(2・3)を剥離する。そしてさらに、90°の打面転移をおこない、2の剥離面を打面とし、やや縦長の剥片(4)を剥離する。

接合資料・B-70(黒色安山岩、第180図)

1 → 2 → (3 ← 4) → 5

本資料は5点(取りあげ個体数7点)よりなる接合資料である。楕円形状を呈する河床礫を原石に用い、平坦な打面を作出することにより剥離がおこなわれ、剥片を連続して剥離する。この剥離作業によって得られる幅広の縦長剥片は石核の素材(4)に用いられ、横長の剥片を剥離する。

接合資料・B-64(黒色安山岩、第181・182図)

1 + 2 → (3 → 4 → 5 + 6) → 7 → 8 → 9 → 10

本資料は10点(取りあげ個体数12点)よりなる接合資料である。上面の礫面を打面とする剥離によって横長の剥片を連続して剥離する。この剥離作業によって得られる幅広の剥片は石核の素材(5 + 6)に用いられ、横長の剥片(3・4)数枚を剥離する。その後、90°の打面転移をおこない右側側縁より大形の剥片が剥離されるが、再び、90°の打面転移をおこない同一の打面より剥片(8~10)を連続して剥離する。打点を大きく移しながら剥離をおこなうようである。

接合資料・B-50(黒色安山岩、第182図)

1 → ○ → ○ → 2 → ○ → 3 → 4

本資料は5点よりなる接合資料である。大形の盤状剥片を石核の素材とし、石核の周辺で剥片剥離が連続しておこなわれる。剥片端部・打面部分・側縁部分の順で、作業面を移動し、剥片端部で小形の剥片が連続して4枚ほど、打面部分で4枚ほど、側縁部分で6枚ほど、の剥片を剥離する。

接合資料・B-115(母岩別資料・黒色安山岩-1、第183図)

1 → 2 → 3 → (○ → 6 → 4) → 5

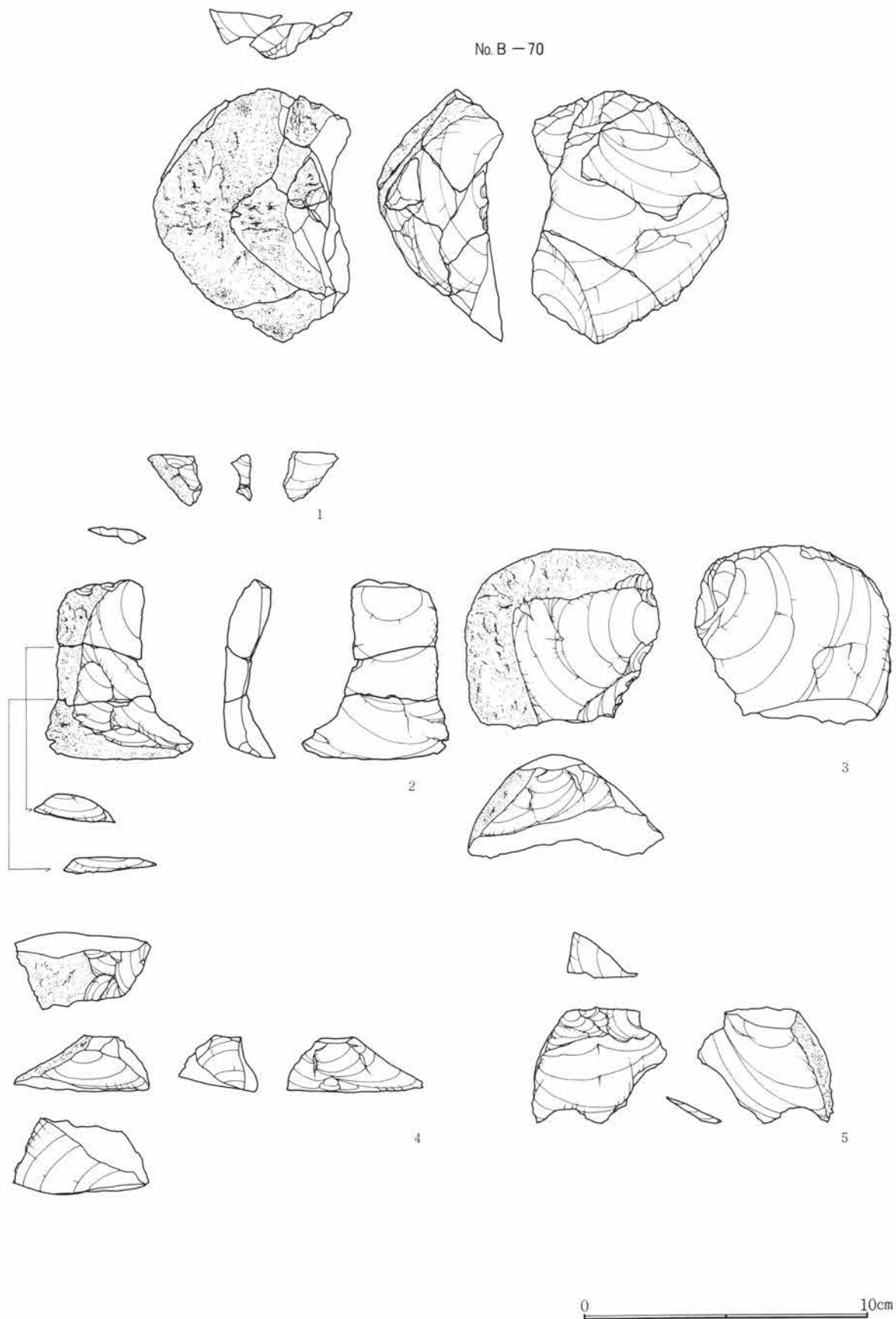
本資料は6点(取りあげ個体数9点)よりなる接合資料である。平坦な打面より、やや幅広の縦長の剥片を連続して剥離する。この剥離作業によって得られる剥片は石核の素材(4)に用いられ、横長の剥片数枚(6)を剥離する。

接合資料・B-26(その他の黒色頁岩、第184図)

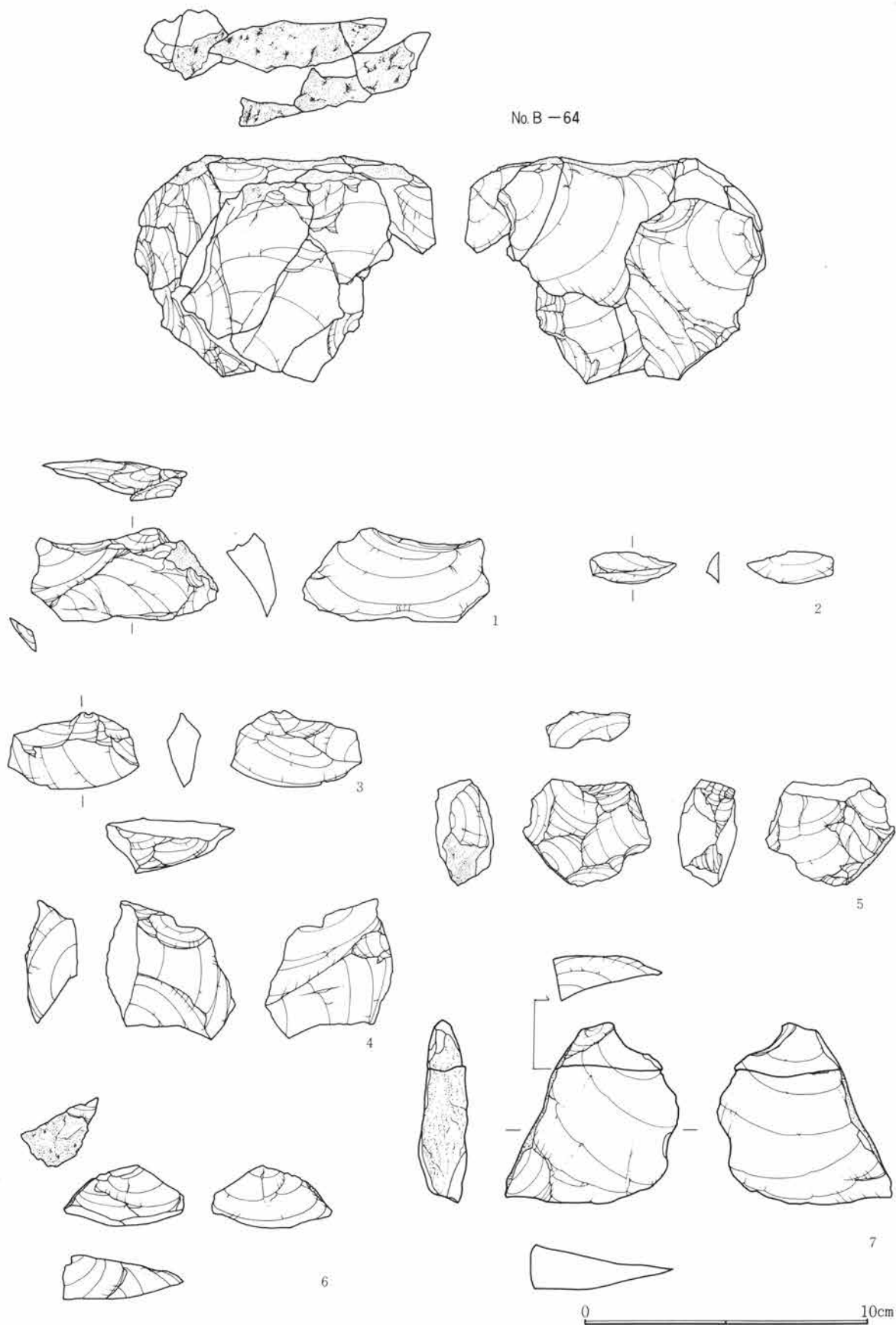
盤状剥片 → ○ → 1 → ○ → ○ → ○ → 2 → 3

本資料は3点よりなる接合資料である。大形の盤状剥片を石核の素材に用い、剥片の打面付近を剥離作業面とする。剥片剥離は石核の表裏両面でおこなわれ、表面側で10枚前後の剥片が、裏面側で5枚前後の剥片が、それぞれ剥離される。

I 旧石器時代の遺構と遺物

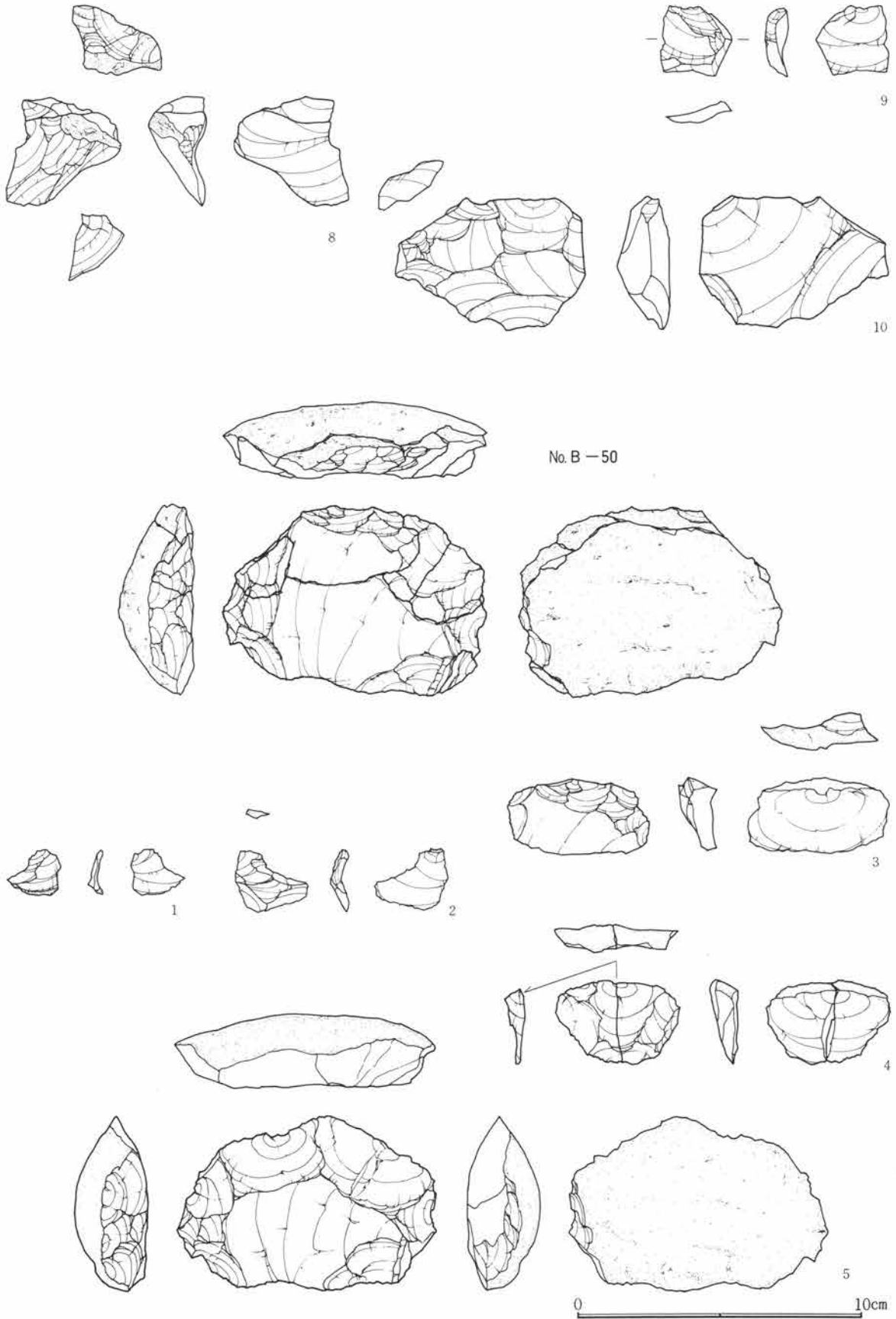


第180図 接合資料B-70

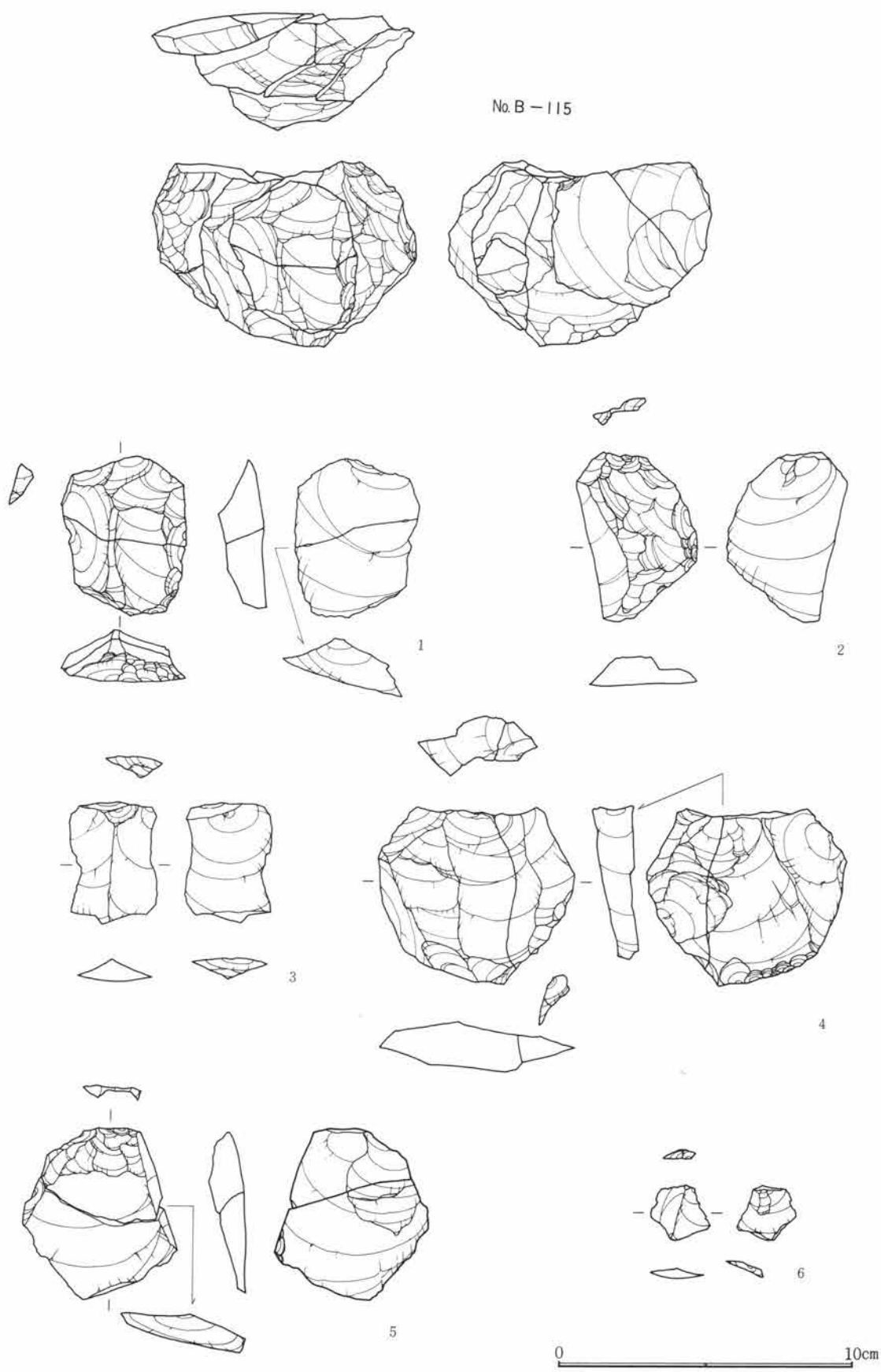


第181図 接合資料B-64(1)

I 旧石器時代の遺構と遺物

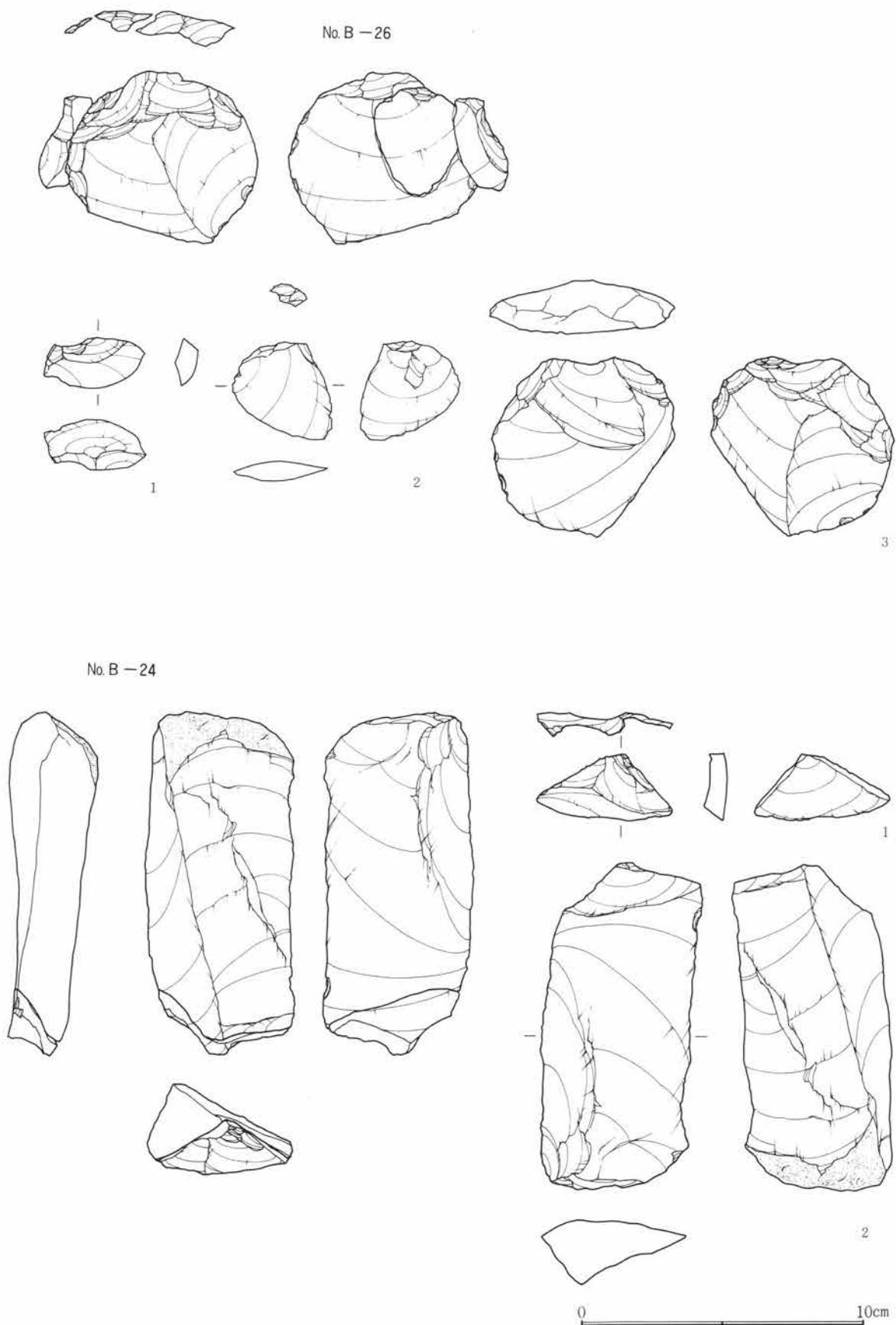


第182図 接合資料B-64(2)・B-50

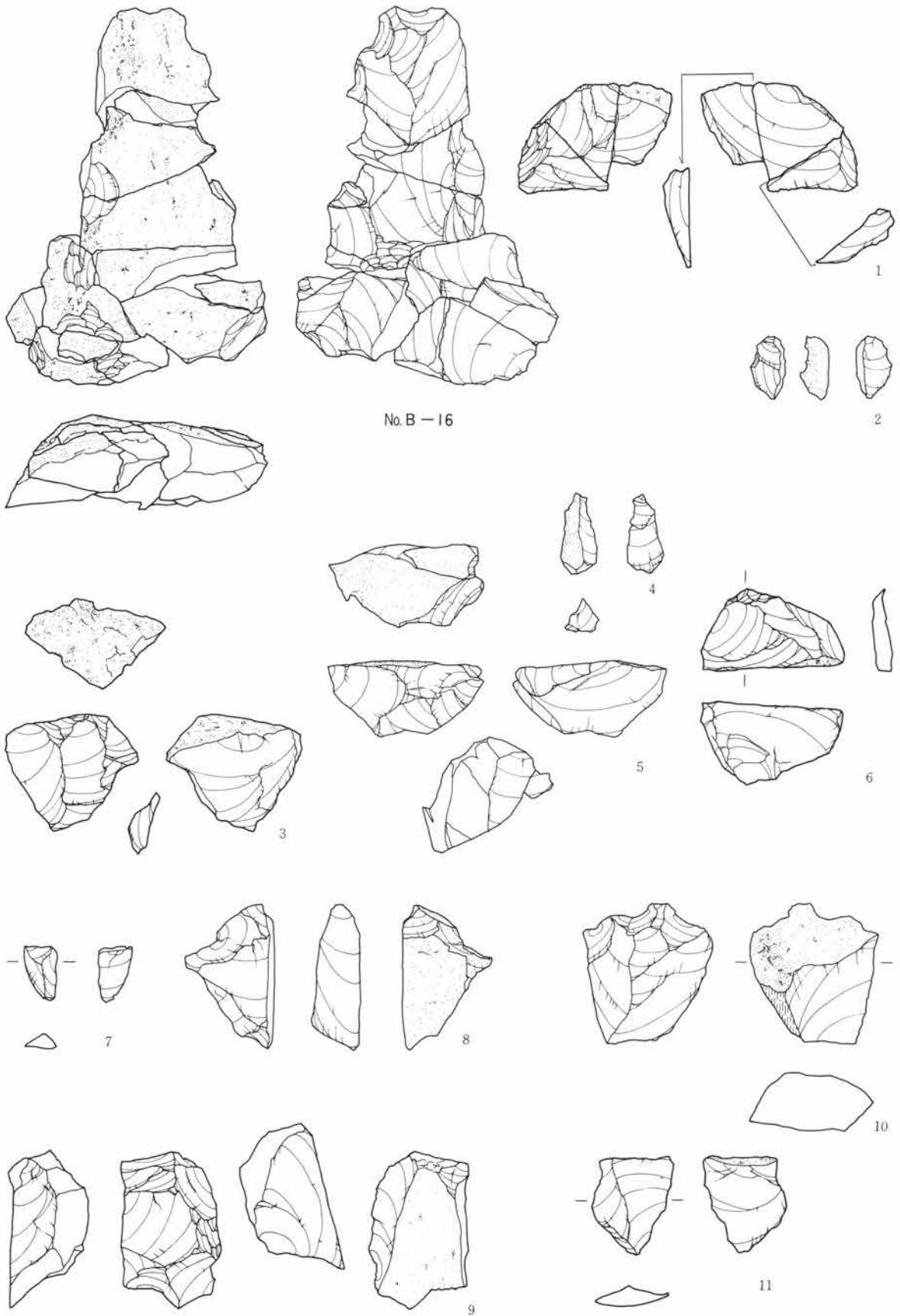


第183図 接合資料B-115

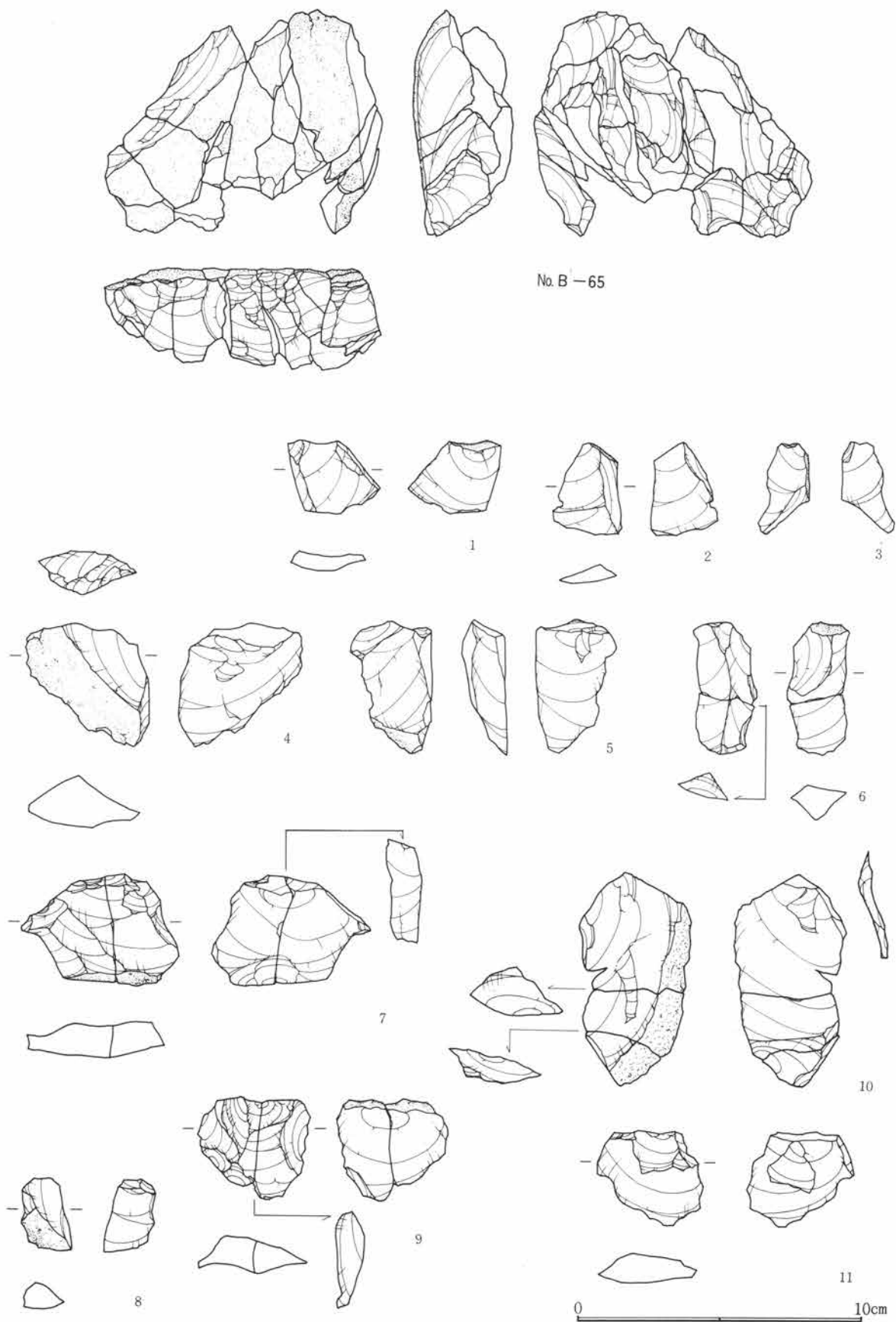
I 旧石器時代の遺構と遺物



第184図 接合資料B-26・B-24

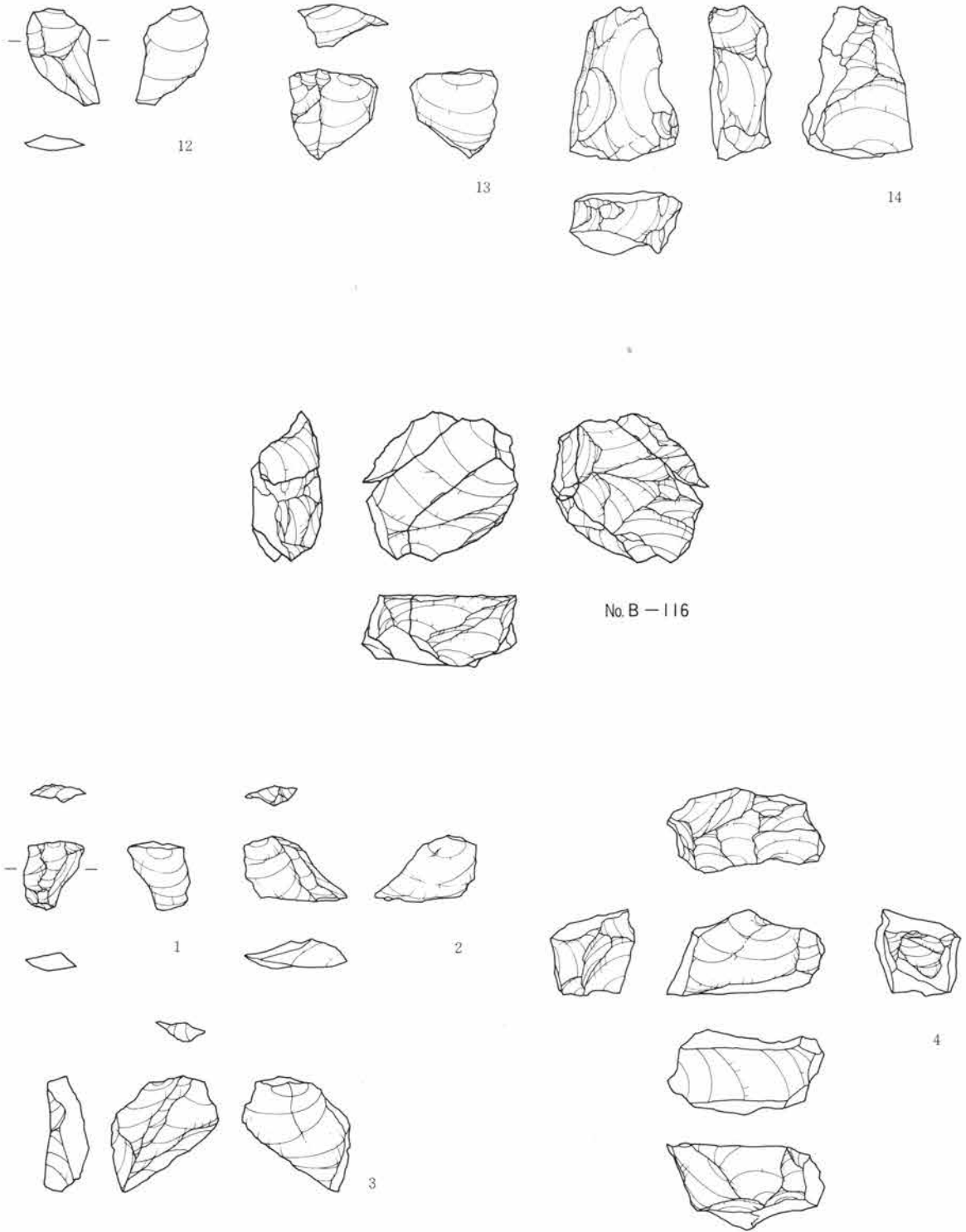


第185図 接合資料B-16



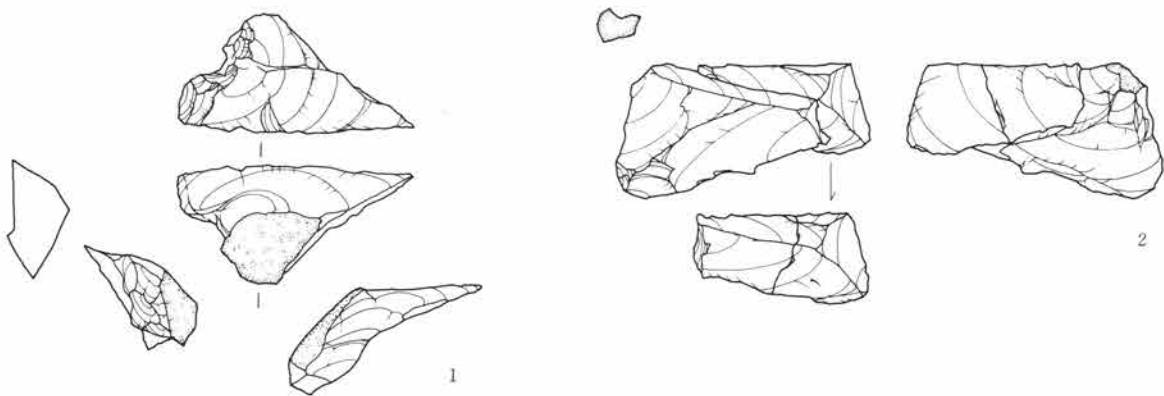
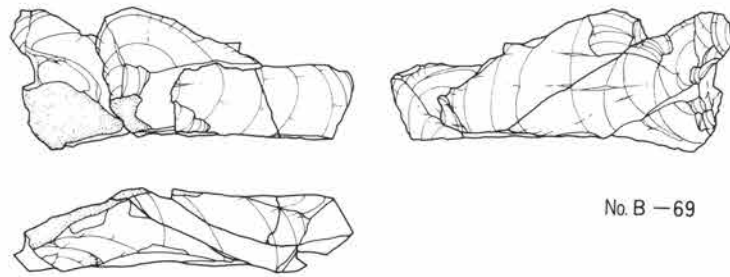
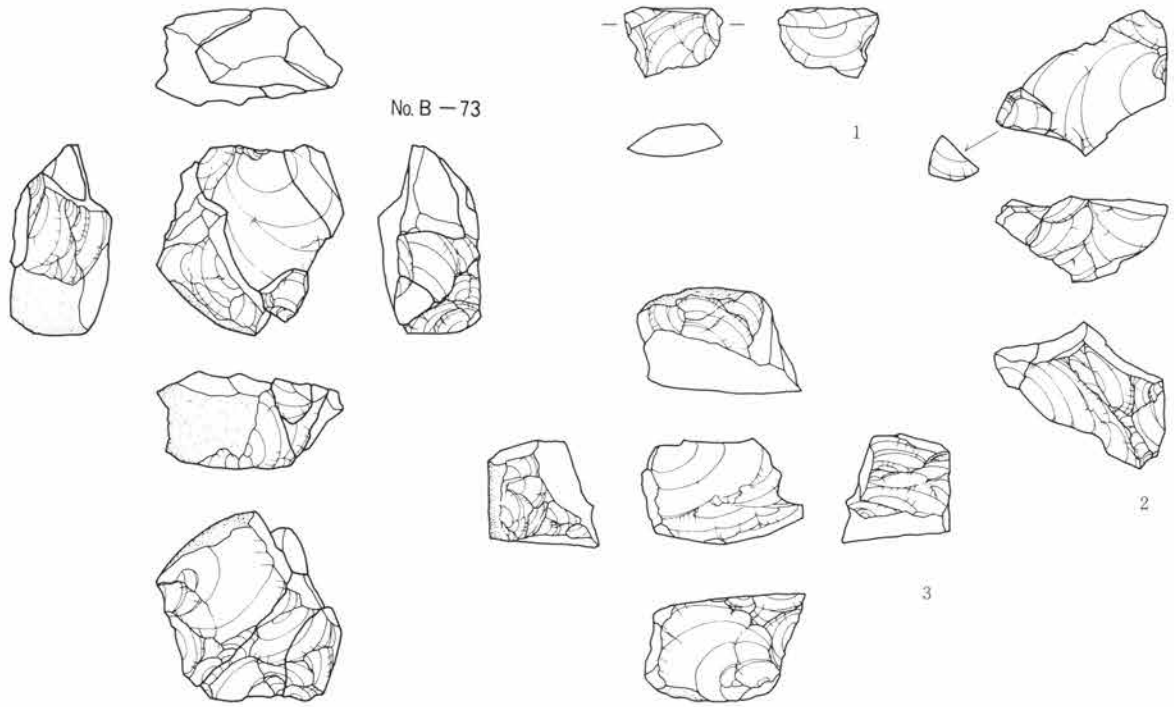
第186図 接合資料B-65(1)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第187図 接合資料B-65(2)・B-116

5. B地点の調査



0 10cm

第188図 接合資料B-73・B-69

I 旧石器時代の遺構と遺物

接合資料・B-117(母岩別資料・黒色安山岩-1、第189図)

1→2

本資料は2点(取りあげ個体数3点)よりなる接合資料である。剥片剥離は90°の打面転移をおこない、平坦な剥離面を打面としやや幅広の剥片を連続して剥離する。

接合資料・B-52(黒色安山岩、第189図)

1→2

本資料は2点(取りあげ個体数3点)よりなる接合資料である。剥片剥離は同一の打面よりおこなわれ、やや幅広の剥片を連続して剥離する。

接合資料・B-71(黒色安山岩、第189図)

1 → 2 → 3 → 4

本資料は4点よりなる接合資料である。剥片剥離は90°の打面転移を伴い、やや幅広の剥片を剥離する。打面調整および頭部調整は認められない。

接合資料・B-84(黒色安山岩、第190図)

1→2

本資料は2点よりなる接合資料である。剥片剥離は90°の打面転移を伴い、やや幅広の剥片を剥離する。打面調整および頭部調整は認められない。

接合資料・B-51(黒色安山岩、第190図)

1 → 2

本資料は2点よりなる接合資料である。打面形状は調整加工により除去されるため明確ではないが、平坦な打面より連続して剥離され、剥片形状は剥片剥離の初期工程を示す。

接合資料・B-75(黒色安山岩、第190図)

1 → 2 → 3

本資料は3点よりなる接合資料である。礫面を打面とし剥片を連続して剥離した後に、90°の打面転移をおこない、平坦な打面より縦長の剥片(2・3)を剥離する。打面調整および頭部調整は認められない。

接合資料・B-76(黒色安山岩、第191図)

1→2

本資料は2点よりなる接合資料である。平坦な剥離面を打面とし、やや幅広の剥片を連続して剥離する。打面調整および頭部調整は認められない。

接合資料・B-20(母岩別資料・黒色頁岩-13、第191図)

1→2

本資料は2点よりなる接合資料である。平坦な剥離面を打面とし、やや幅広の剥片を連続して剥離する。

打面調整および頭部調整は認められない。

接合資料・B-56(黒色安山岩、第191図)

本資料は2点(取りあげ個体数4点)よりなる接合資料である。いずれも礫面を打面とし、やや幅広の剥片を剥離する。打面調整および頭部調整は認められない。このうちの1点には、縦位の折断が認められる。

接合資料・B-58(黒色安山岩、第191図)

本資料は2点よりなる接合資料である。剥片は平坦な打面より作出され、中央付近で横位の折断が認められる。剥片形状は剥片剥離の初期工程を示す。

接合資料・B-118(黒色安山岩、第192図)

1→2

本資料は2点(取りあげ個体数5点)よりなる接合資料である。いずれも礫面を打面とし、やや幅広の剥片を剥離する。2点の剥片には縦位および横位の折断が認められる。

接合資料・B-25(黒色頁岩、第192図)

1→2

本資料は2点(取りあげ個体数5点)よりなる接合資料である。いずれも平坦な剥離面を打面とし、縦長の剥片を剥離する。打面調整および頭部調整は認められない。

接合資料・B-107(黒色安山岩、第192図)

本資料は3点よりなる接合資料である。平坦な剥離面を打面とし、やや幅広の剥片を剥離する。剥片には横位の折断が認められる。

接合資料・B-21(母岩別資料・黒色頁岩-13、第193図)

1→○→○→2→○→○→3

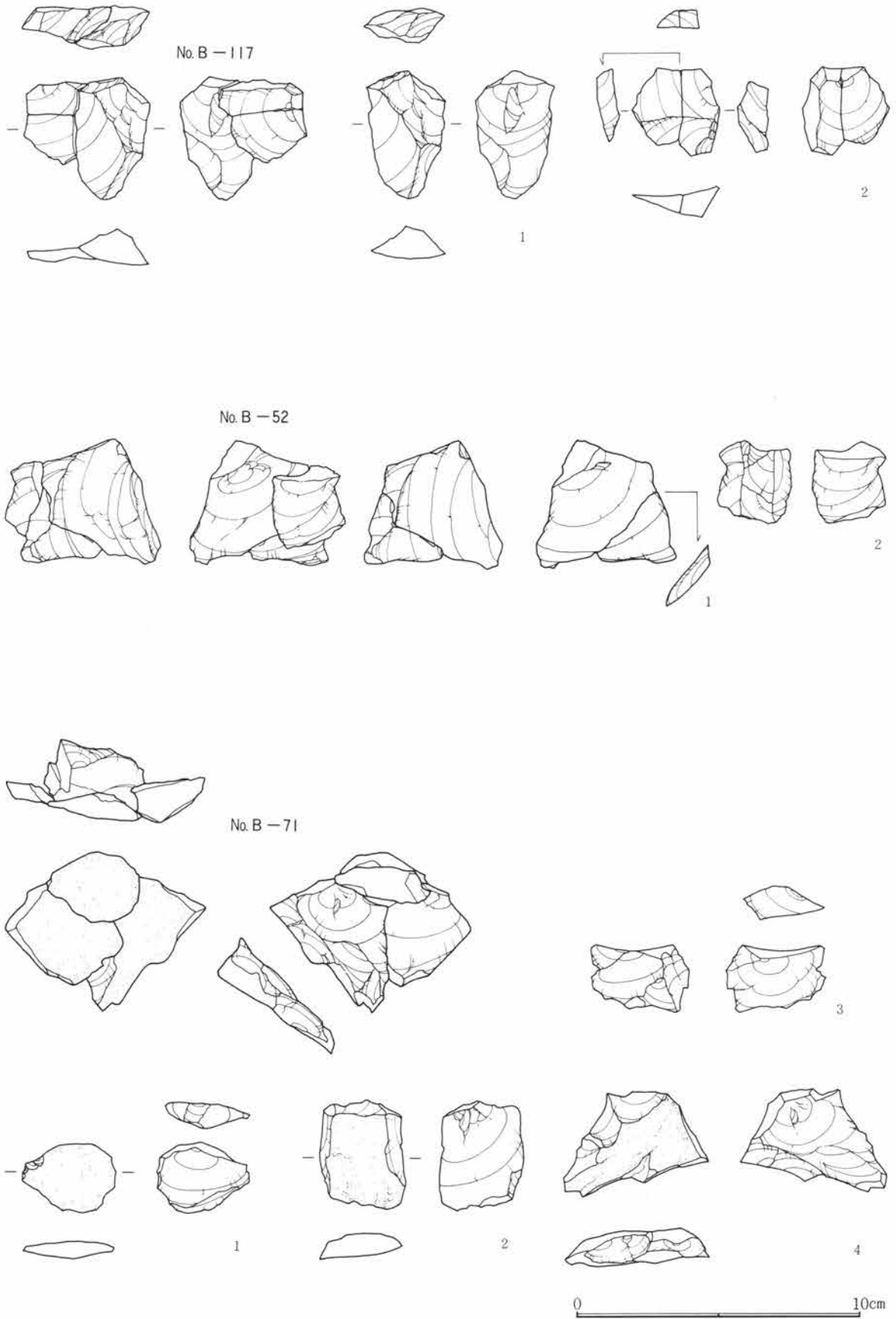
本資料は3点よりなる接合資料である。すでに述べたように石器(3)の分類は必ずしも明らかではないが、接合状態をより石器の形状が本来的な姿を示すものと把え判断するならば、石器は表裏両面を大きく剥離面に覆われるものであることが明らかである。裏面側では平坦な剥離面に覆われるが、表面側ではやや傾斜をもつ剥離面に覆われ、接合状態は蒲鉾状の断面形状を示す。2の剥離終了後、3の表面から裏面に向かう浅い剥離が存在すること、石器の端部に微細な加工が存在すること、前者の剥離は後者の加工に先行すること、など石器の転用が認められる。しかしながら、石器が面的な加工を施されること、あるいは、形態的特徴を示す石器は類例に乏しいこと、などの消極的な理由から打製石斧として分類される可能性も否定できない。

接合資料・B-27(黒色頁岩、第193図)

1→2→3

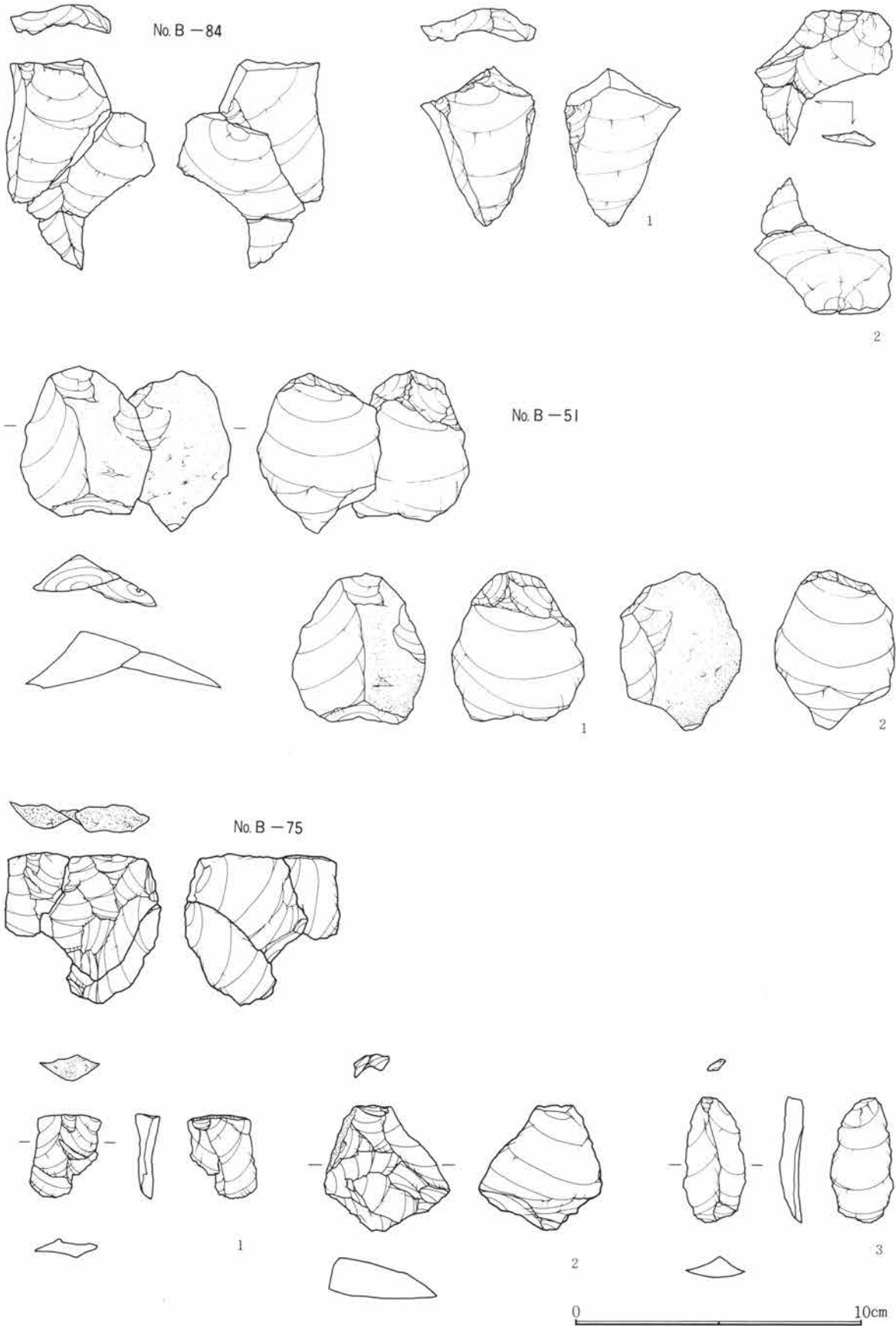
本資料は3点よりなる接合資料である。いずれも平坦な剥離面を打面とし、やや幅広の剥片を剥離する。打面調整および頭部調整は認められない。

I 旧石器時代の遺構と遺物



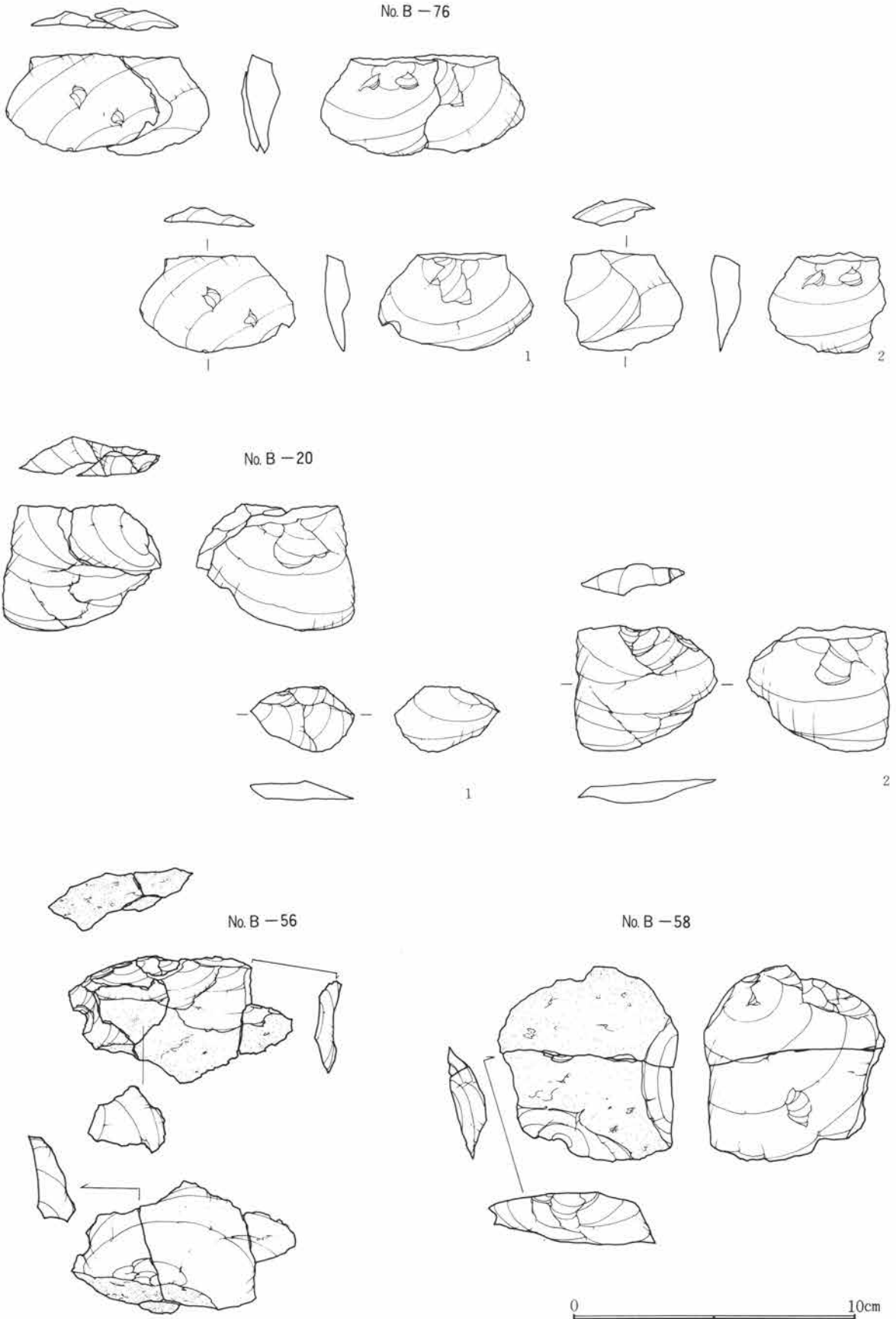
第189図 接合資料B-117・B-52・B-71

5. B地点の調査



第190図 接合資料B-84・B-51・B-75

I 旧石器時代の遺構と遺物

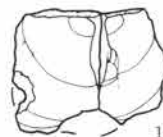
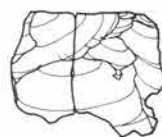
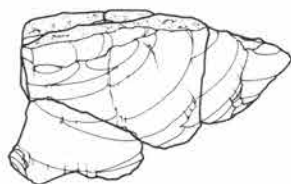
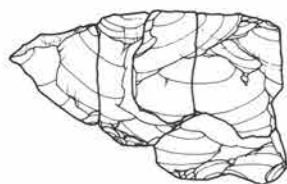


第191図 接合資料B-76・B-20・B-56・B-58

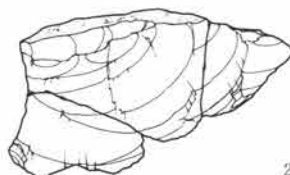
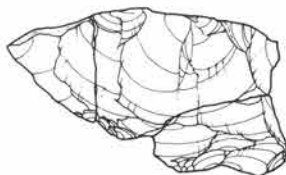
5. B地点の調査



No. B-118



1



2



No. B-25

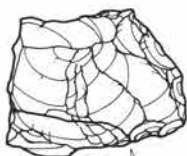
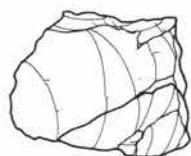


1



2

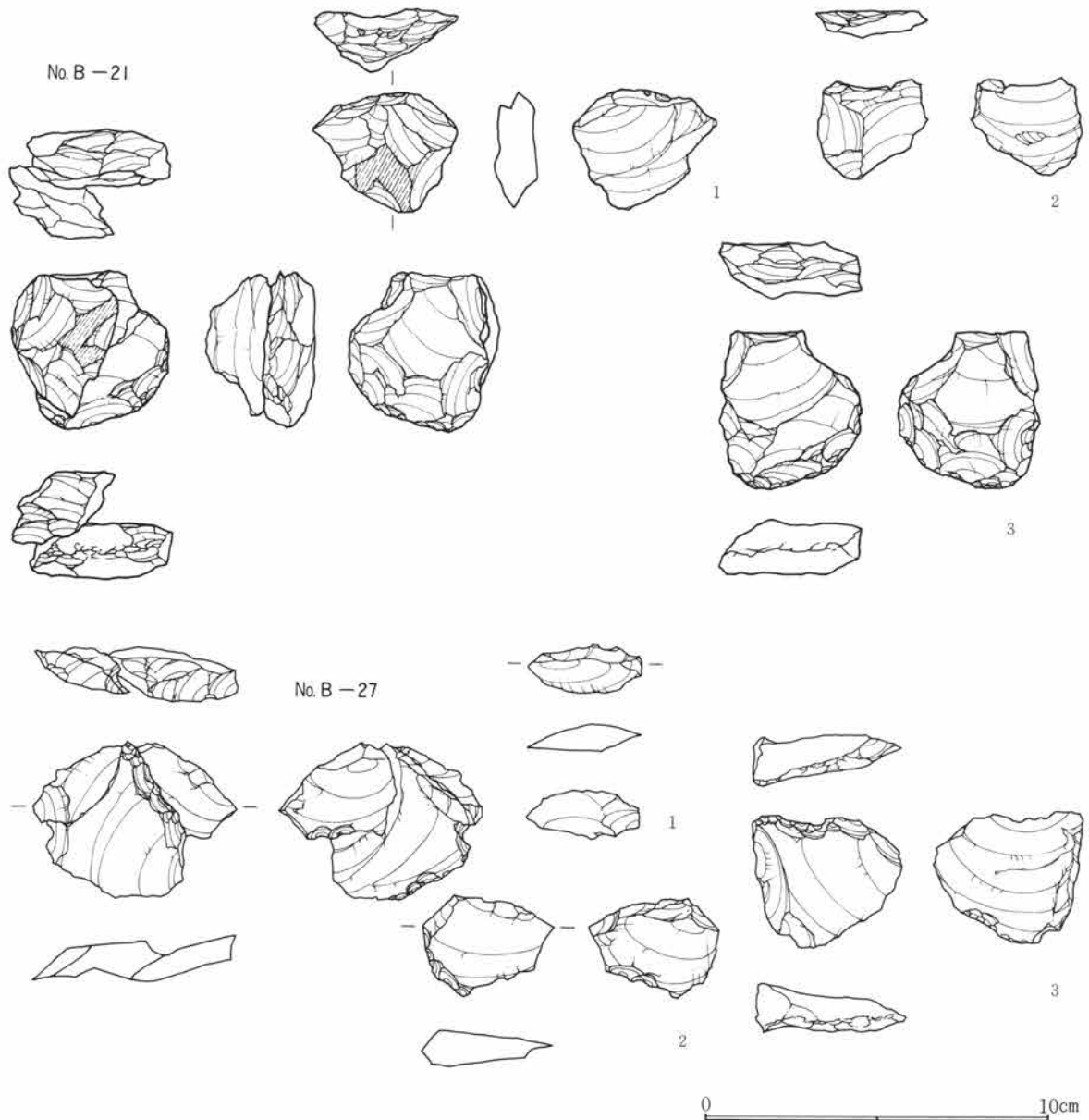
No. B-107



0 10cm

第192図 接合資料B-118・B-25・B-107

I 旧石器時代の遺構と遺物



第193図 接合資料B-21・B-27

(2)分布

B区では、3地点(I～III区)より石器が出土するが接合資料の検討や母岩別資料の分析により、石器群の同時性を疑う根拠はなく、ブロックは互いに密接な関係を保ち遺存することが想定される。石器群の同時性については、接合資料の検討とともに母岩別資料の分析を含めおこなわれるべきであるが、B区出土の石器には原石の状態にまで復元される資料に乏しいため、母岩の分類あるいは共有関係の抽出が困難である。A区同様ここでは、図版が繁雑になることを避け、接合資料の分布状況について記述する。

3号ブロックに存在する接合資料；これに該当する接合資料は、B-63・B-86・B-25・B-50など5例がある。

B-63(第194図)は、16点よりなる接合資料である。3号ブロックの西側集中部(88・89-B-34グリッド)

に散漫な状態で分布する6点と、東側集中部(87-B-34グリッド)に分布する10点とが接合する。西側集中部では1点の石核と5点の剥片が散漫な分布状況を示すが、東側集中部では10点の剥片が良好な分布状況を示す。黒色安山岩製である。

B-56(第194図)は、4点よりなる接合資料である。86-B-34グリッドに分布する3点と、87-B-33グリッドに分布する1点とが接合する。接合資料は3号ブロックの東側集中部に分布し、比較的散漫な分布状態を示す。黒色安山岩製である。

B-86(第194図)は、5点よりなる接合資料である。3号ブロックの東側集中部(87-B-33・34グリッド)に分布する4点と、西側集中部(89-B-34グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料はブロックの東側集中部に分布の主体が認められる。黒色安山岩製。

B-25(第195図)は、4点よりなる接合資料である。3号ブロックの西側集中部(88-B-34グリッド)に分布する。接合資料は2枚の剥片からなり、うち1点には使用痕が認められる。黒色頁岩製。

B-50(第195図)は、6点よりなる接合資料である。3号ブロックの東側集中部(86-B-34グリッド)に分布する。接合資料は3号ブロックの東側集中部に、比較的集中した状態で分布する。黒色安山岩製。

6号ブロックに存在する接合資料；これに該当する接合資料は、B-119・B-116などがある。

B-119(第195図)は7点(1点の石核と6点の剥片)よりなる接合資料である。6号ブロックの北東側集中部分(91-B-15グリッド)に分布の主体が認められ、比較的散漫な状態で分布する。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。

B-116(第195図)は4点(1点の石核と3点の剥片)よりなる接合資料である。6号ブロックの北東側集中部分(91-B-15グリッド)に分布の主体が認められ、比較的散漫な状態で分布する。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。

7号ブロックに存在する接合資料；これに該当する接合資料はB-68・B-69の2例である。

B-68(第195図)は8点よりなる接合資料である。7号ブロックの中央部分(88・89-B-12・13グリッド)に比較的散漫な状態で分布する。黒色安山岩製。

B-69(第195図)は4点からなる接合資料である。7号ブロックの中央部分(87~89-B-12・13グリッド)に比較的散漫な状態で分布する。黒色安山岩製。

9号ブロックに存在する接合資料；これに該当する接合資料はB-118の1例である。

B-118(第196図)は5点よりなる接合資料である。接合資料は2枚の剥片からなり、うち1枚には加工痕がみられる。黒色安山岩製。

ブロックおよびブロックの周辺(外側)に存在する接合資料；これに該当する接合資料は、B-59・B-73の2例である。

B-59(第194図)は27点よりなる接合資料である。3号ブロック全域(86~89-B-34グリッド)に比較的集中して分布する25点と、同ブロックの外側(87-B-35および89-B-35グリッド)に分布する2点とが接合する。接合資料は三分され、各々剥片剥離がおこなわれるが、東側集中部には1~10の剥片が、西側集中部には11~18・19~23の剥片が分布する傾向にある。一方、東側集中部には石核や剥片・破片が存在し、比較的良好的な分布状況を示すこと、西側集中部では散漫な分布状況を示すこと、など様相の相違が認められる。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。

B-73(第196図)は4点よりなる接合資料である。9号ブロックの南側(86-B-10グリッド)に分布する3

I 旧石器時代の遺構と遺物

点と、同ブロックの外側(86-B-9グリッド)に分布する1点とが接合する。黒色安山岩製。

ブロック間に存在する接合資料；これに該当する接合資料は数多く存在し、16例にのぼる。

B-71(第196図)は、4点からなる接合資料である。6号ブロック(92-B-14の周辺)に分布する3点、および、5号ブロック(95-B-16グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料は8mの距離を隔て、存在する。黒色安山岩製。

B-120(第196図)は、6点よりなる接合資料である。6号ブロック(91-B-15周辺)に分布する5点と、9号ブロック(86-B-11グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料は12mの距離を隔て、存在する。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。

B-115(第196図)は、9点よりなる接合資料である。6号ブロック(91~93-B-13~15グリッド)に分布する8点と、7号ブロック(89-B-13グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料は8mの距離を隔て、存在する。母岩別資料・黒色安山岩-1に分類される。

B-17(第197図)は、16点よりなる接合資料である。6号ブロックに分布する8点、12号ブロックに分布する8点とが接合する。12号ブロックには剥片剥離の初期・最終の工程より作出される剥片が多く分布するが、6号ブロックには剥片剥離の中間工程より作出される剥片(5~12)が多く分布する。母岩別資料・黒色頁岩-12bに分類される。

B-70(第198図)は、7点よりなる接合資料である。6号ブロック(91・92-B-14・15グリッド)に分布する3点、7号ブロック(89-B-13グリッド)に分布する2点、11号ブロック(91-B-11グリッド)に分布する1点とが接合する。接合資料は散漫な分布状況を示し、石器の製作地点を特定することは困難である。黒色安山岩製。

B-65(第198図)は、18点よりなる接合資料である。7号ブロック(88・89-B-12・13グリッド)に分布する15点、9号ブロック(86-B-13グリッド)に分布する2点、6号ブロック(93-B-14グリッド)に分布する1点、11号ブロック周辺(90-B-9グリッド)に分布する1点とが接合する。分布の主体は7号ブロックに認められ、石器の製作地点を示す。黒色安山岩製。

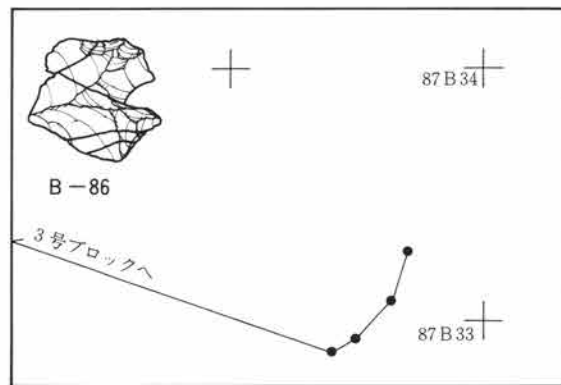
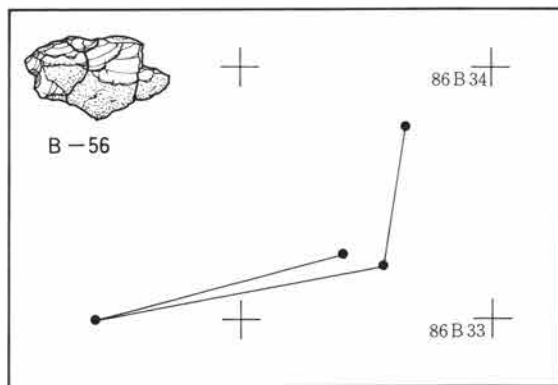
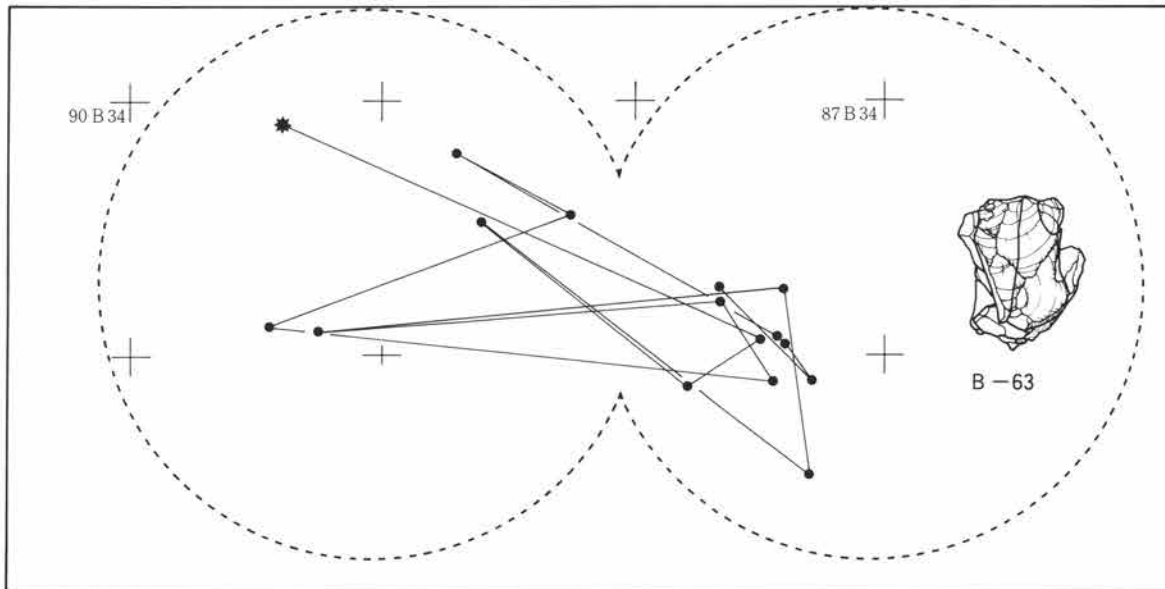
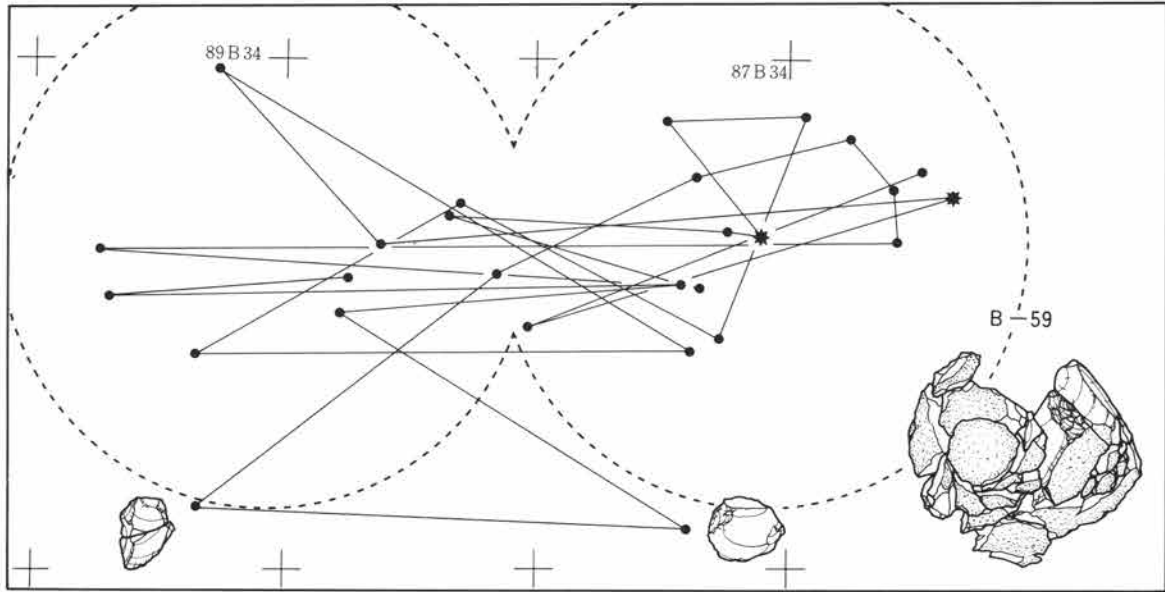
B-64(第199図)は12点よりなる接合資料である。7号ブロック(88・89-B-11・12グリッド周辺)を主体に分布する9点と、6号ブロック(91-B-15グリッド)に分布する2点、10号ブロック(87-B-10グリッド)に分布する1点とが接合する。分布の主体は7号ブロックに認められ、石器の製作地点を示す。黒色安山岩製。

B-16(第200図)は13点よりなる接合資料である。5号ブロック(95・96-B-15・16グリッド)に集中・分布する10点と、同ブロックの周辺(96-B-14グリッド)に分布する1点、7号ブロック(88-B-13グリッド)に分布する1点、12号ブロック(94-B-11グリッド)に分布する1点とが接合する。分布の主体は5号ブロックに認められ、石器の製作地点を示す。母岩別資料・黒色頁岩-12aに分類される。

B-18(第200図)は9点よりなる接合資料である。6号ブロック北側(90~93-B-15グリッド)に分布する8点と、9号ブロック(86-B-11グリッド)に分布する石核1点とが接合する。分布の主体は6号ブロックに認められ、石器の製作地点を示す。母岩別資料・黒色頁岩-13に分類される。

B-44(第201図)は8点よりなる接合資料である。11号ブロック中央部(91・92-B-11・12グリッド)に分布する4点、12号ブロックに分布する3点、6号ブロックに分布する1点とが接合する。分布の主体は11号ブロックに認められ、石器の製作地点を示す。同時に、6号ブロックから12号ブロックへの石器の移動は明らかであるが、移動する必然性の乏しい剥片であることが注目される。母岩別資料・頁岩-1に分類される。

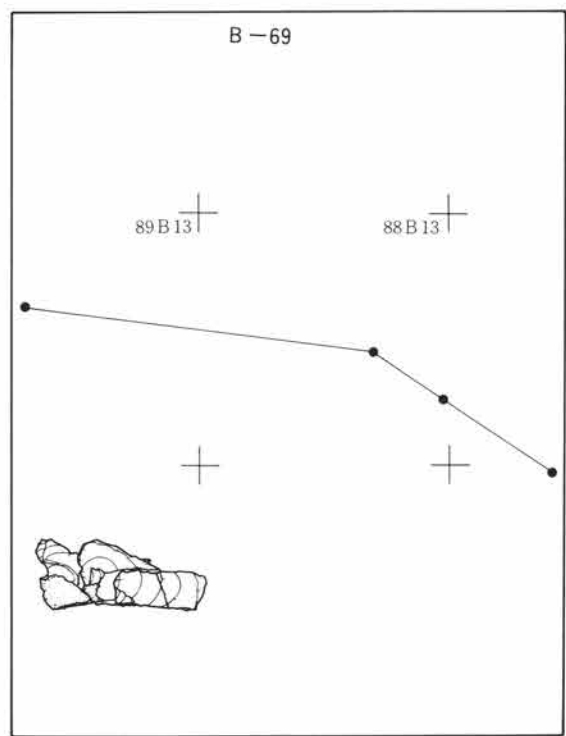
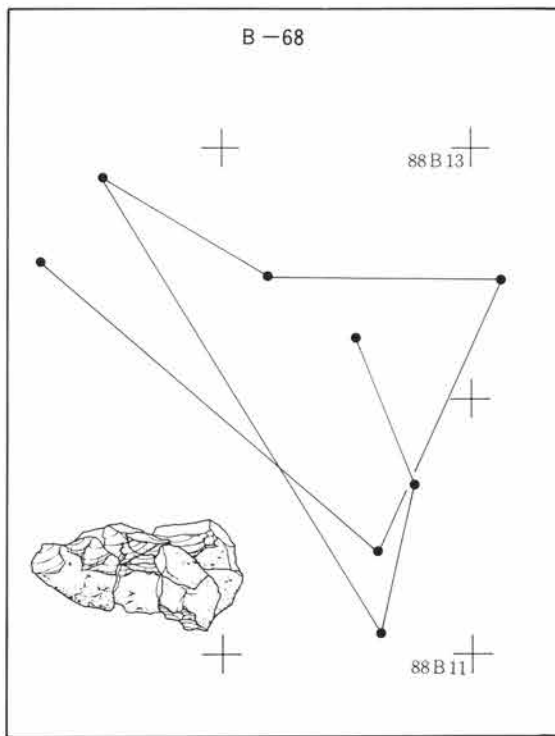
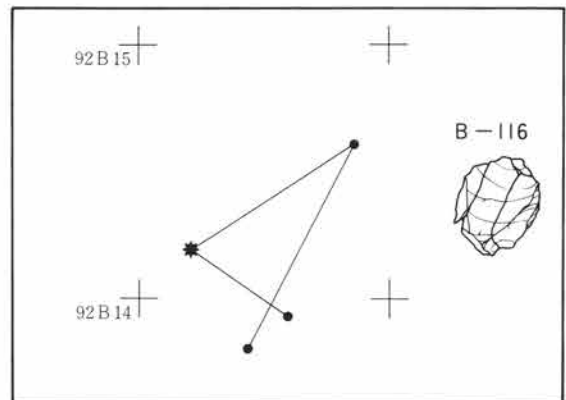
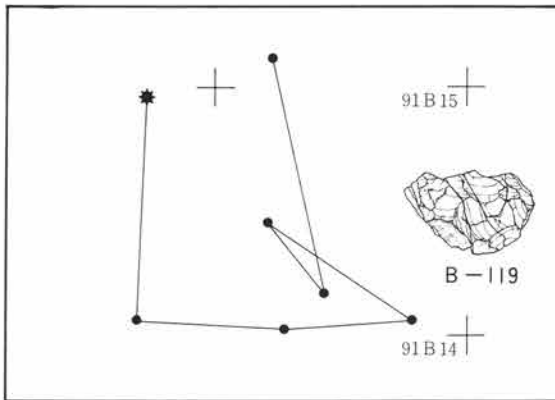
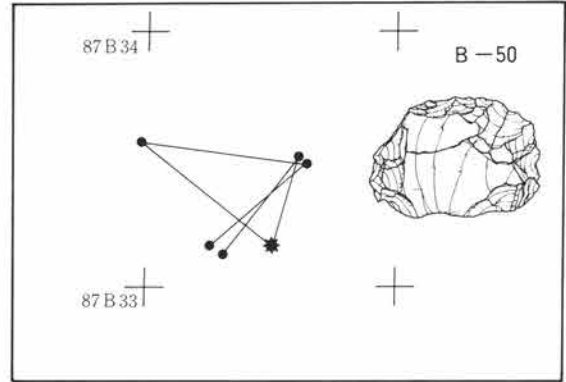
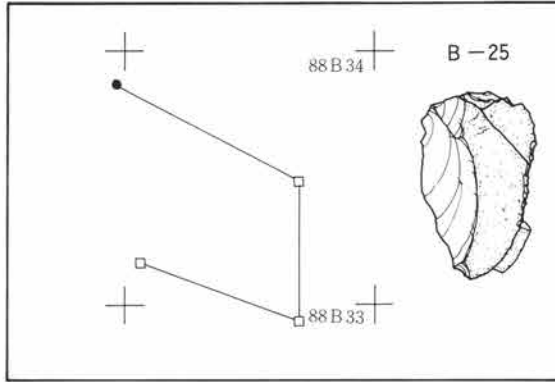
5. B地点の調査



0 2 m

第194図 接合資料の分布(B-59・B-63・B-56・B-86)

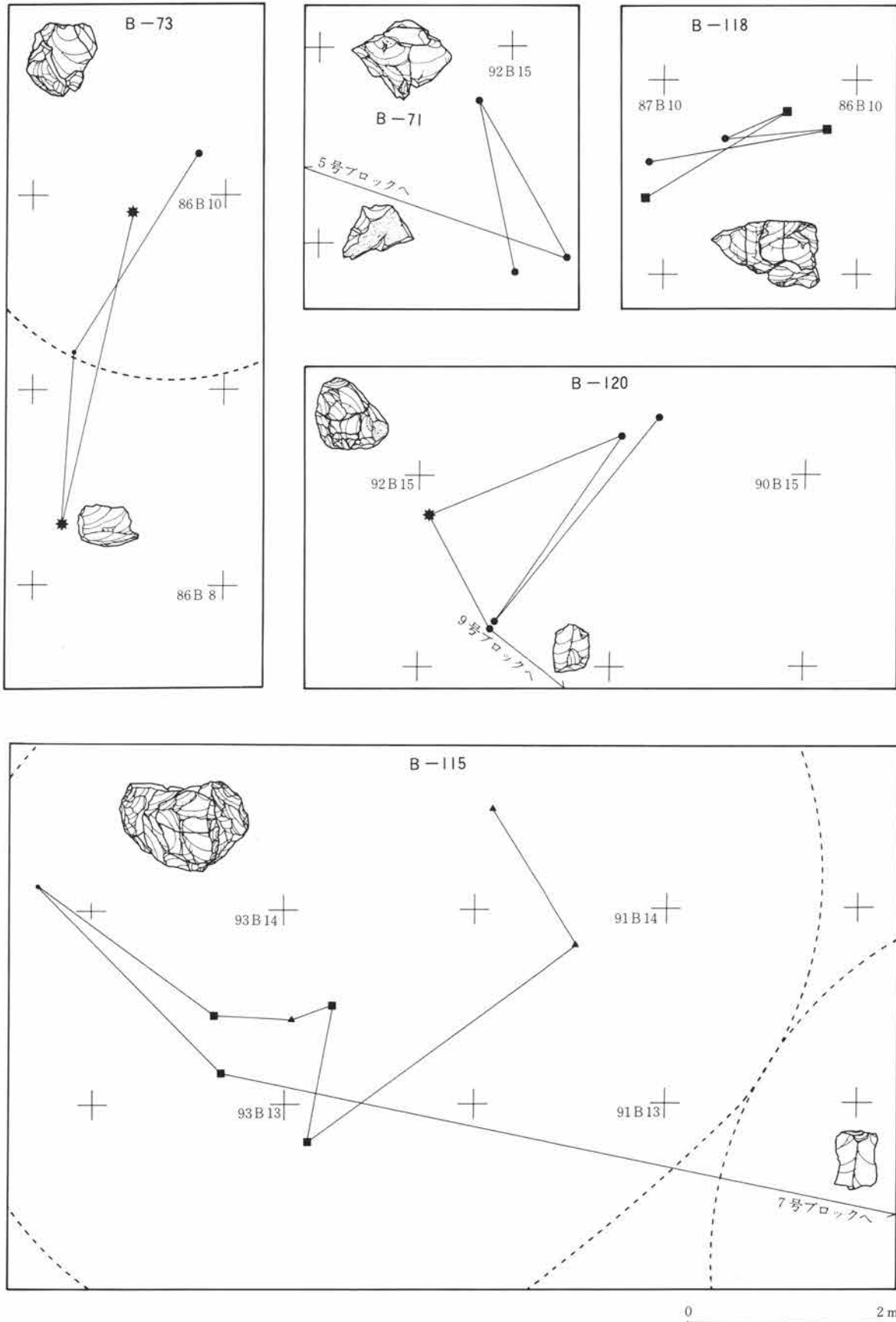
I 旧石器時代の遺構と遺物



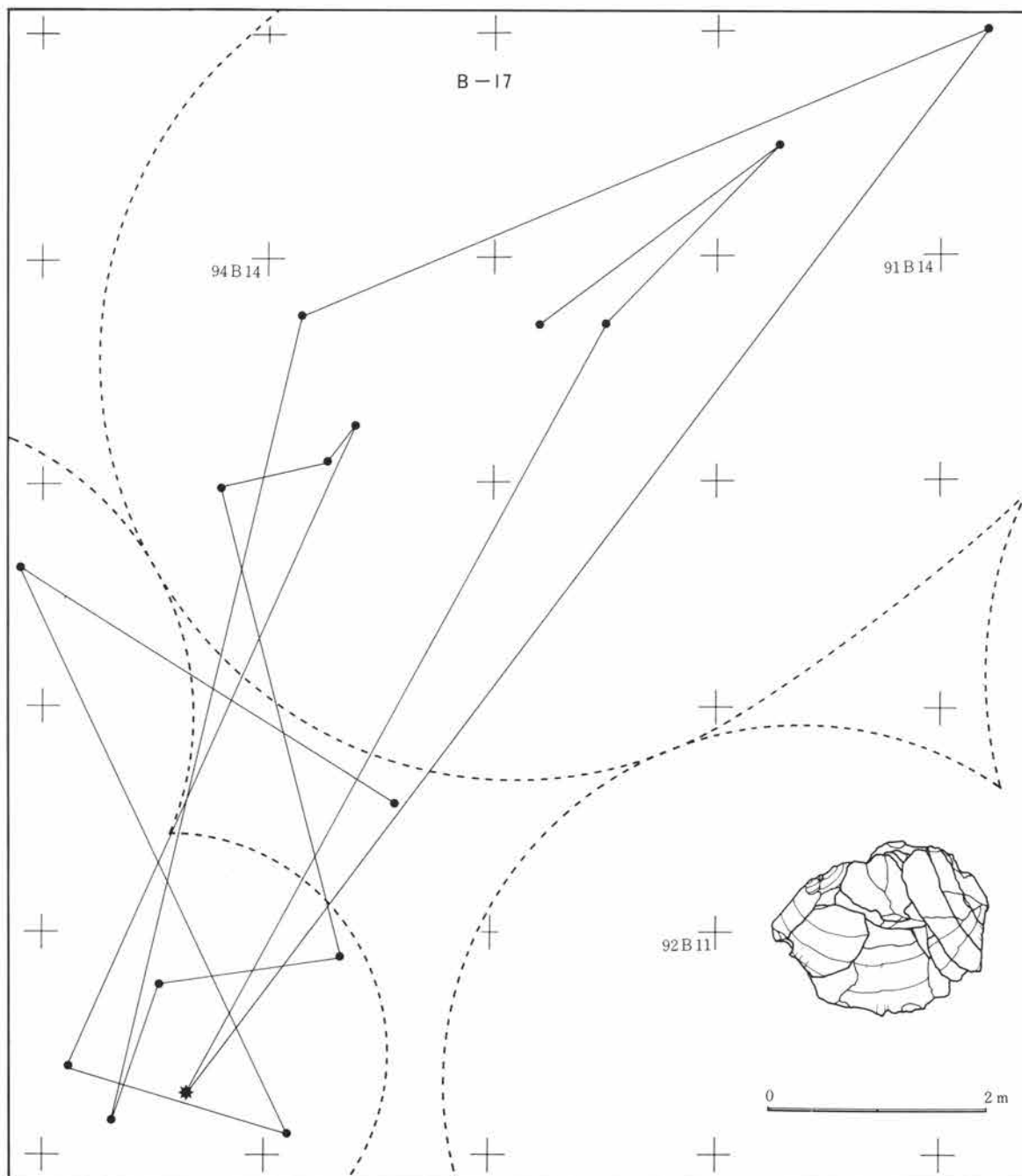
0 2 m

第195図 接合資料の分布(B-25・B-50・B-119・B-116・B-68・B-69)

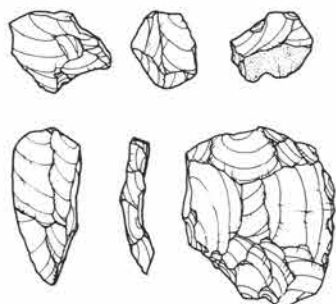
5. B地点の調査



第196図 接合資料の分布(B-73・B-71・B-118・B-120・B-115)



12号ブロック



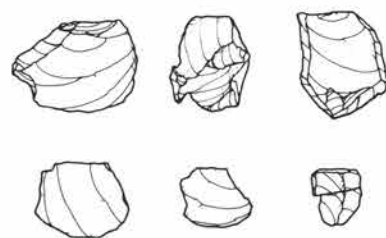
ブロック外



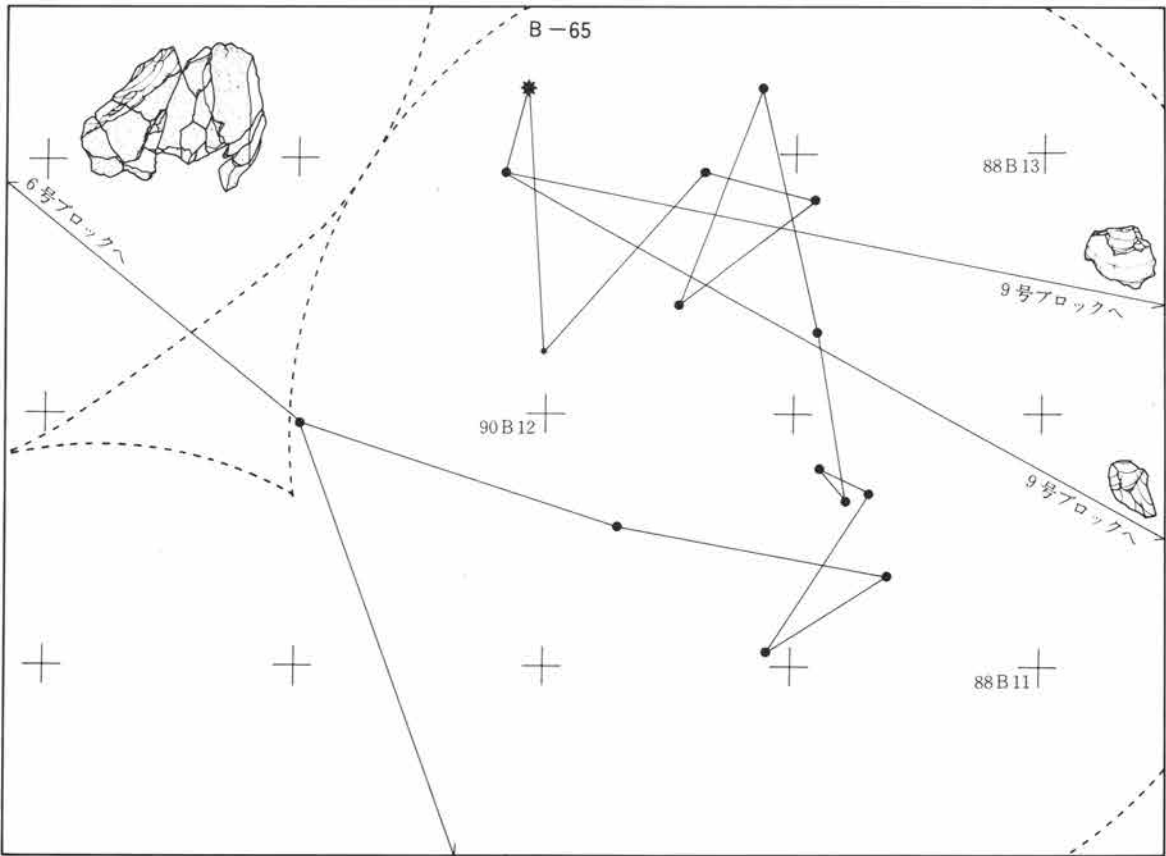
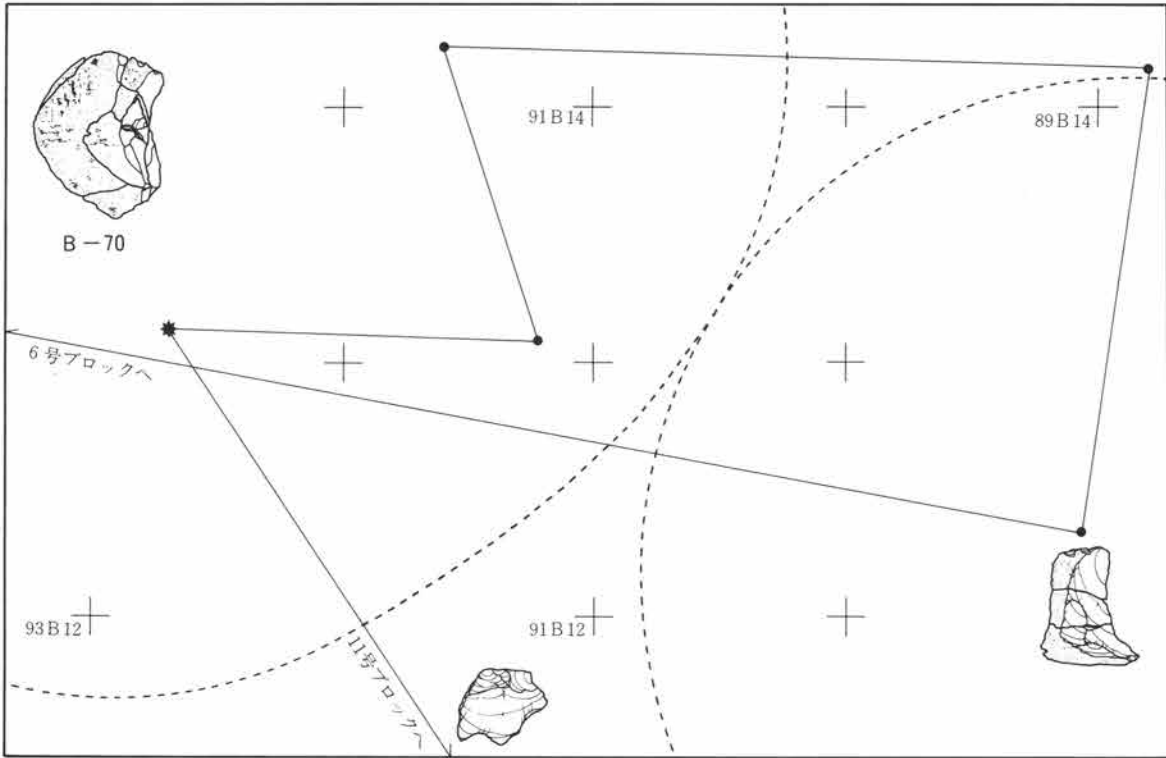
(6+12号)ブロック



6号ブロック

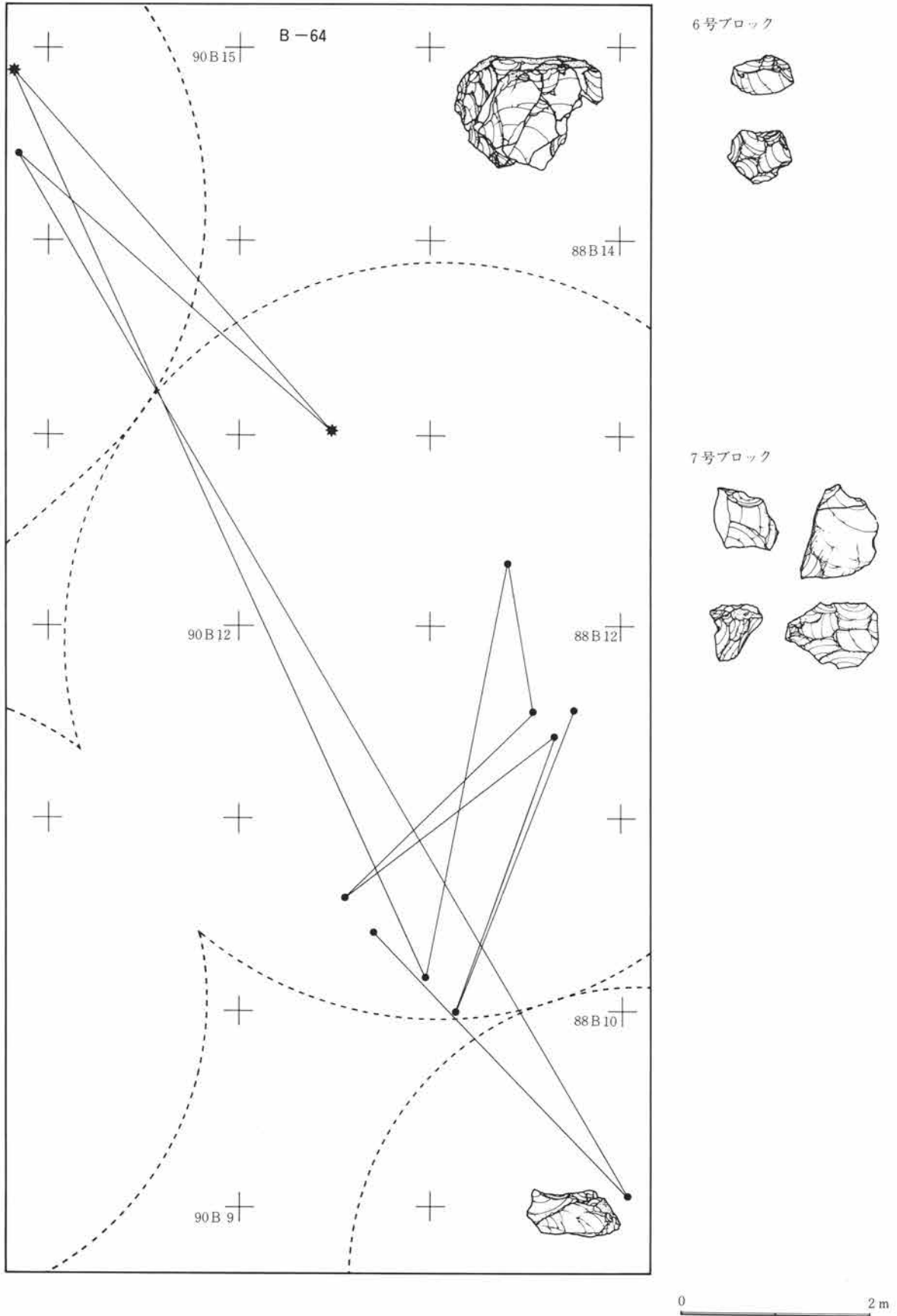


第197図 接合資料の分布(B-17)

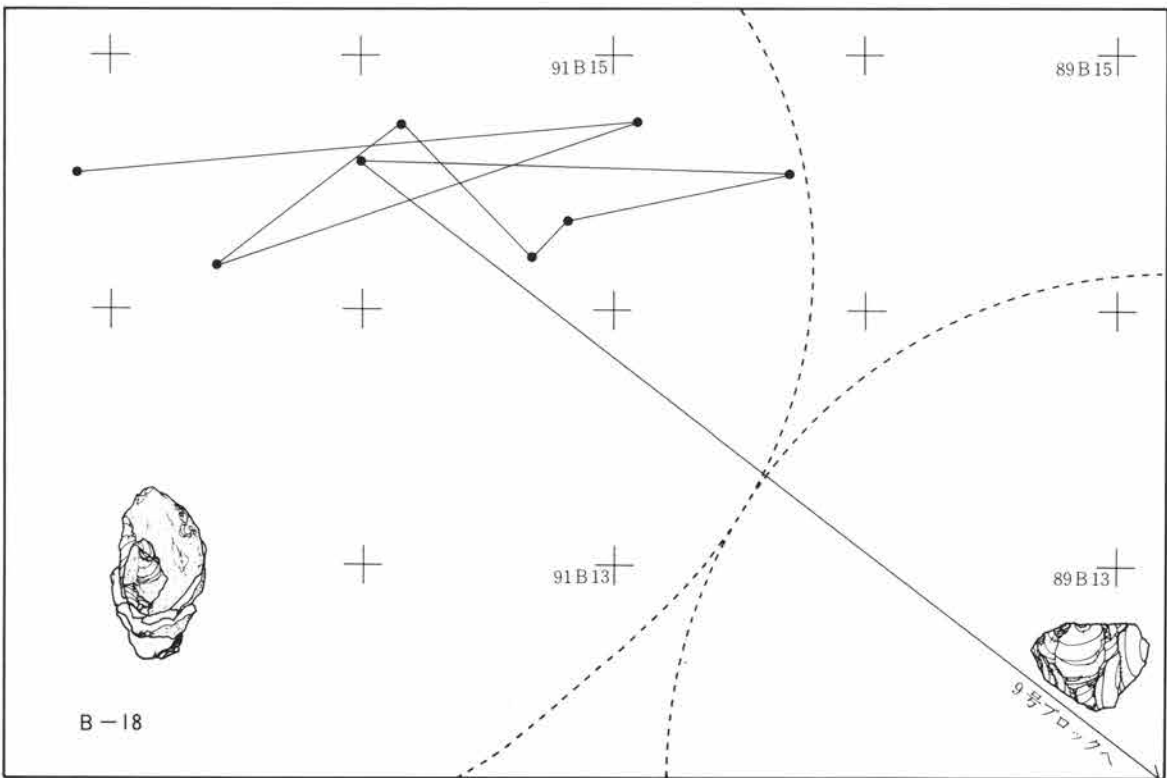
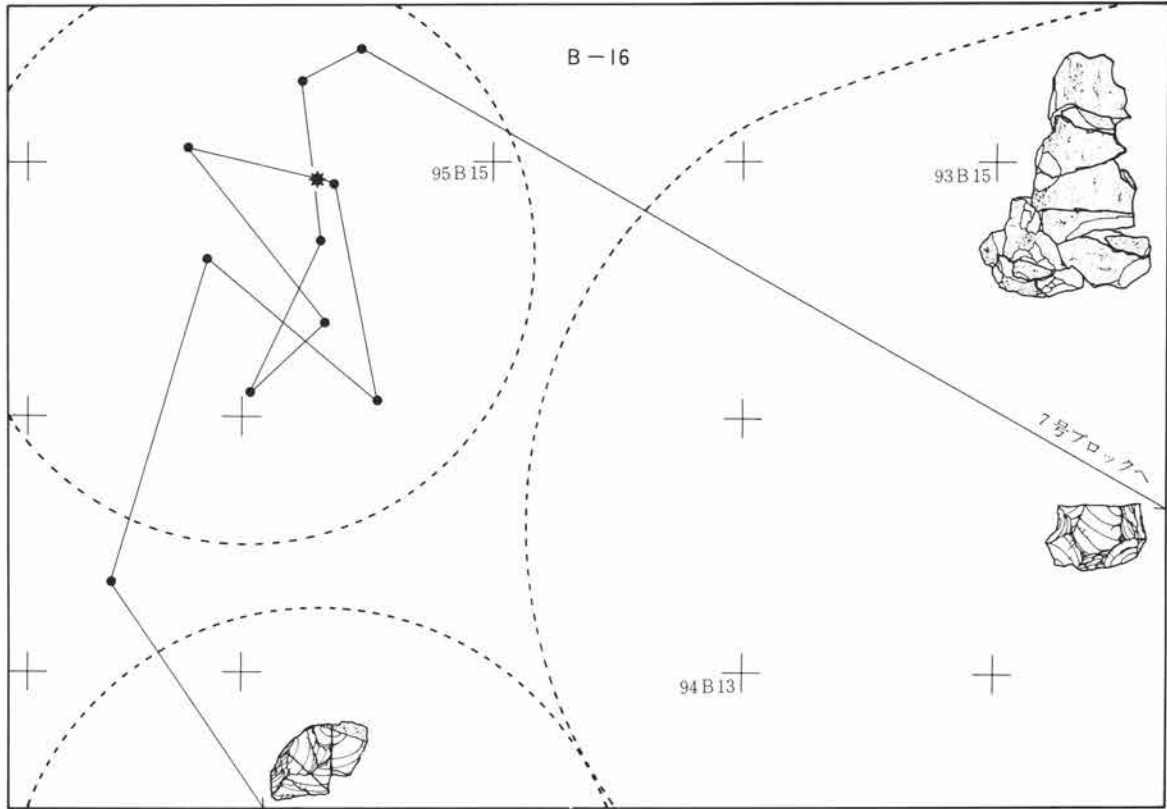


0 2 m

第198図 接合資料の分布(B-70・B-65)



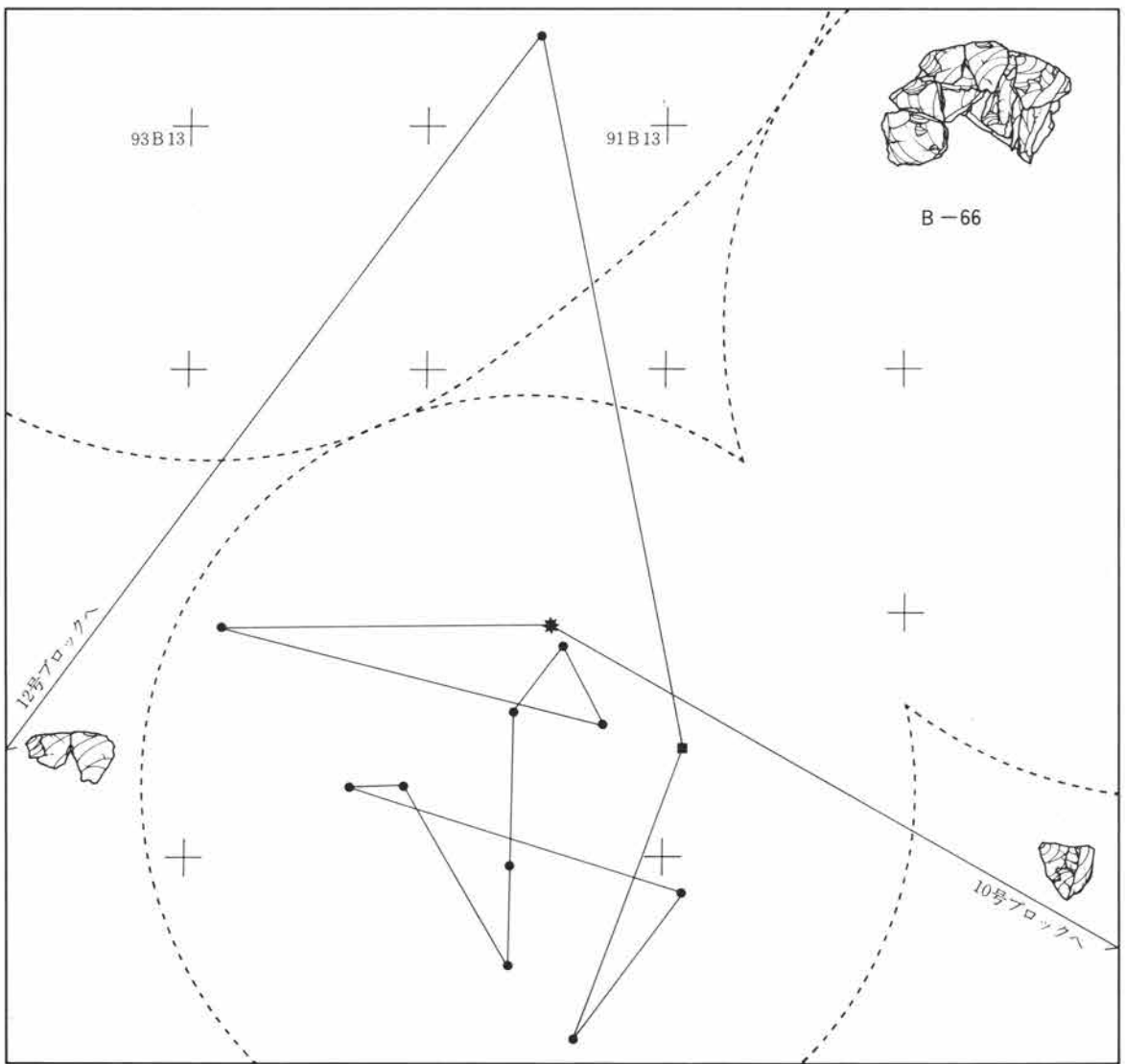
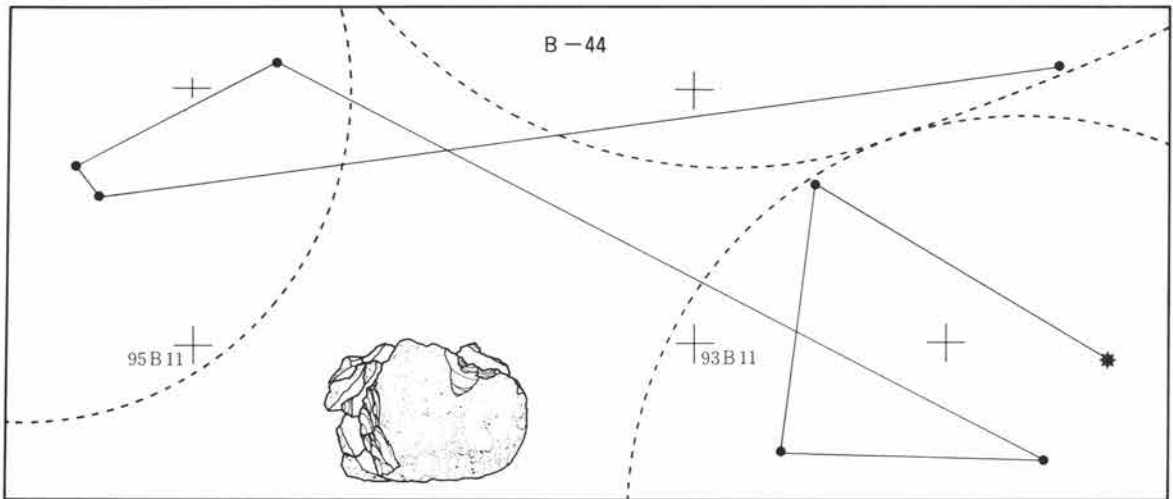
第199図 接合資料の分布(B-64)



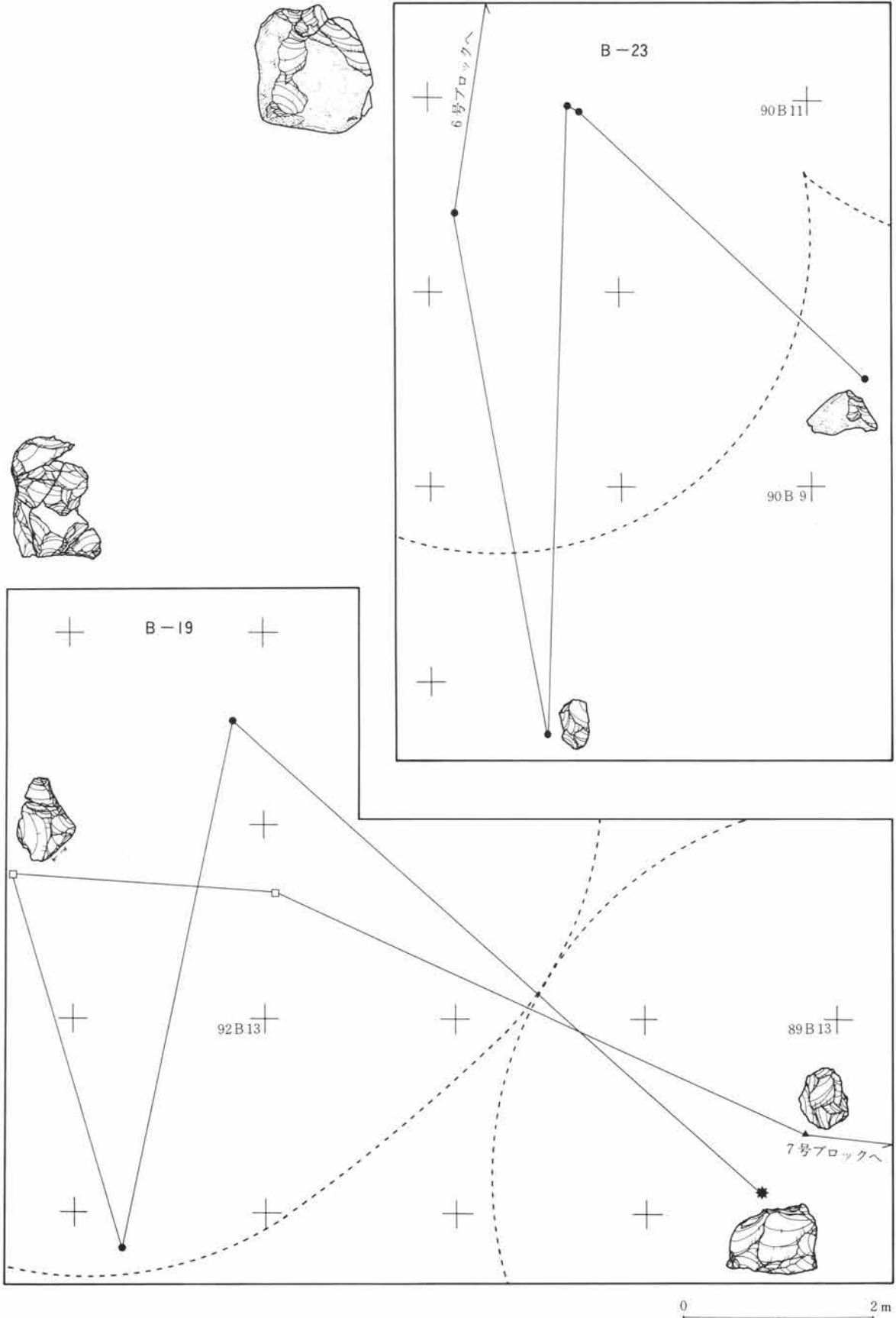
0 2 m

第200図 接合資料の分布(B-16・B-18)

I 旧石器時代の遺構と遺物

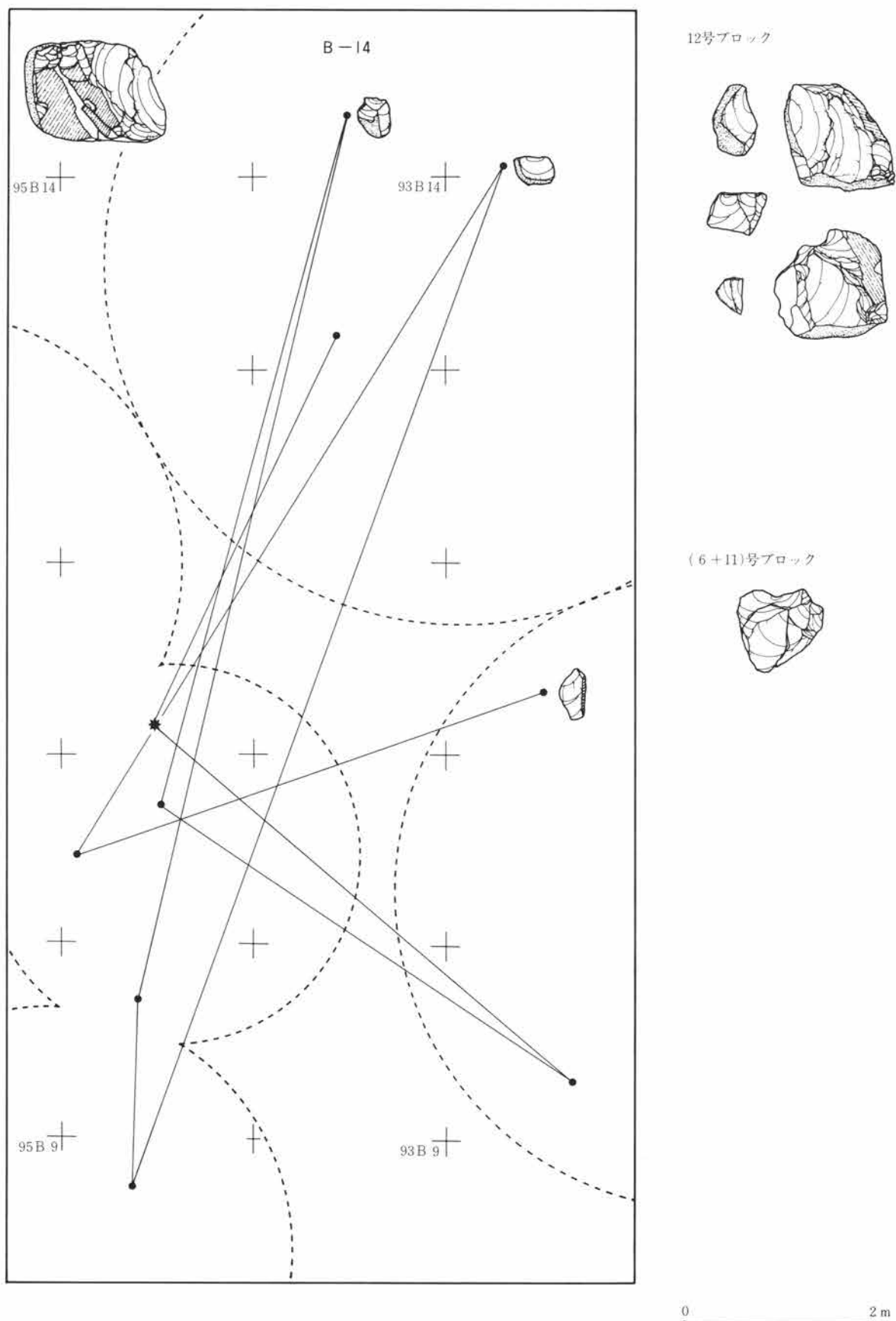


第201図 接合資料の分布(B-44・B-66)

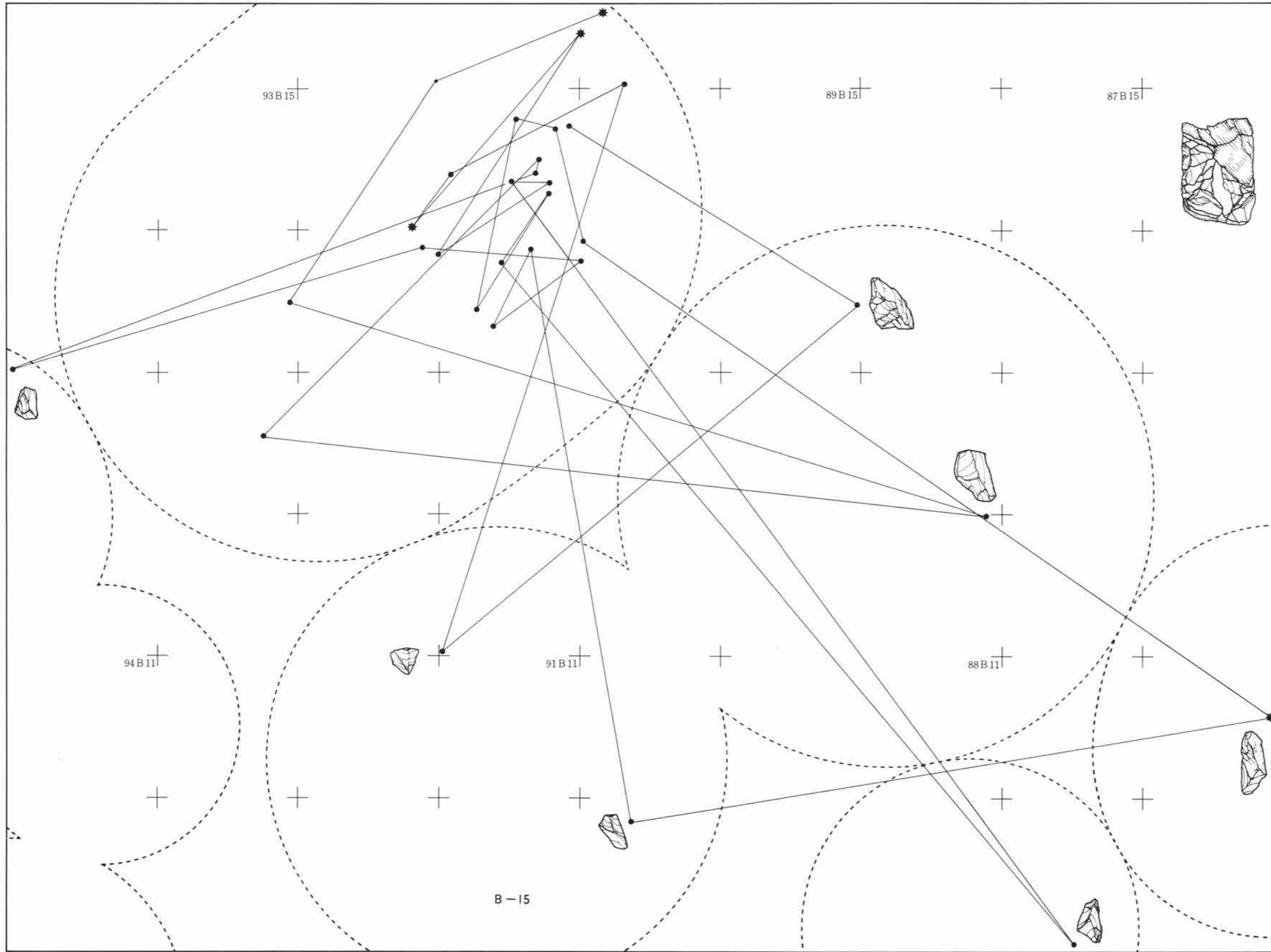


第202図 接合資料の分布 (B-23・B-19)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第203図 接合資料の分布(B-14)

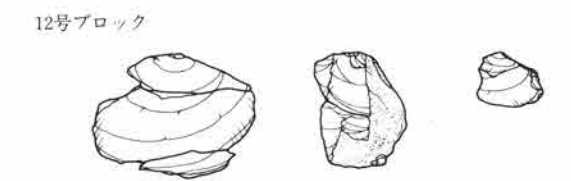
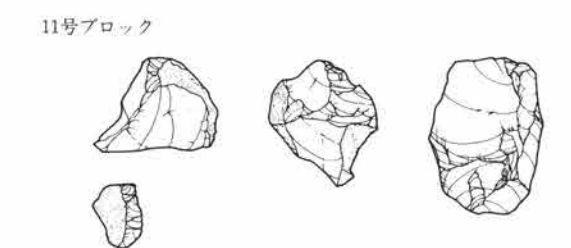
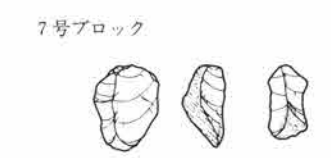
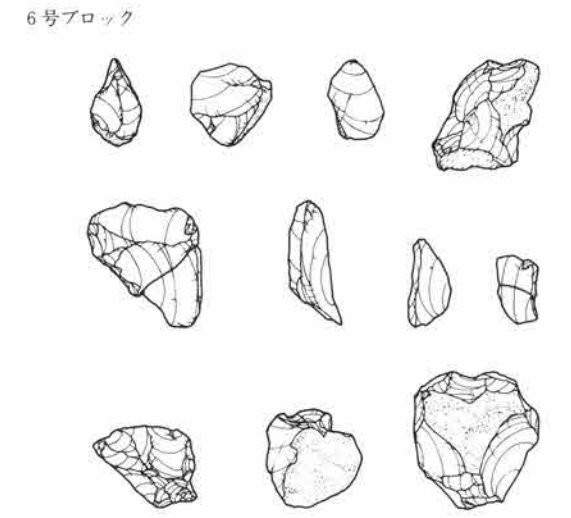
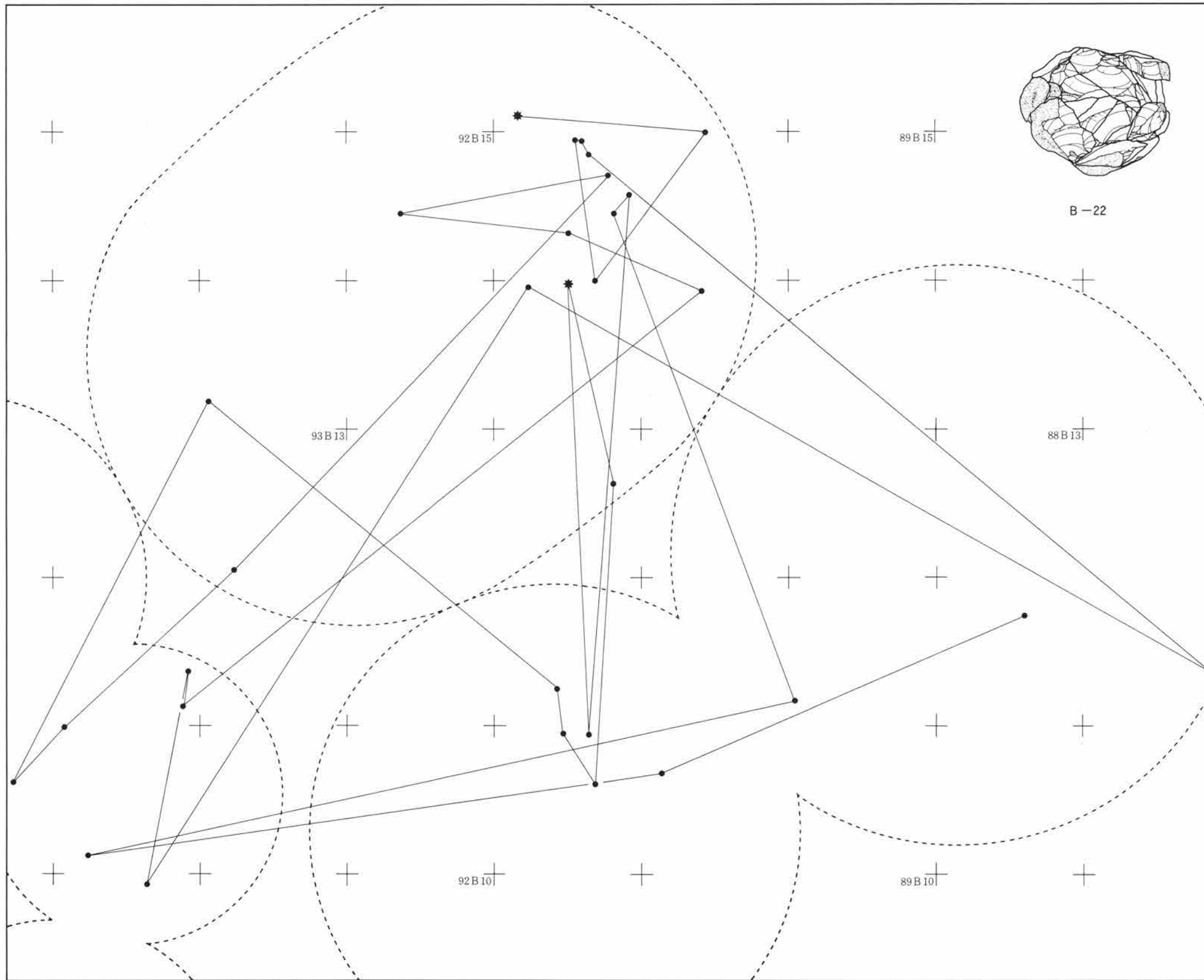


6号ブロック



第204図 接合資料の分布(B-15)

0 2 m



第205図 接合資料の分布(B-22)

0 2m

B-66(第201図)は15点よりなる接合資料である。11号ブロック(91-B-10・11グリッド周辺)に分布する12点、6号ブロック(91-B-14グリッド)に分布する1点、10号ブロック(87-B-9グリッド)に分布する1点、12号ブロック(94-B-10グリッド)に分布する1点とが接合する。分布の主体は11号ブロックに認められ、石器の製作地点を示す。同時に、11号ブロックからの石器の移動は明らかであるが、移動する必然性の乏しい剥片であることが注目される。黒色安山岩製。

B-23(第202図)は6点よりなる接合資料である。11号ブロック(92-B-11グリッド)に分布する3点、6号ブロック(90-B-15グリッド)に分布する1点、11号ブロック周辺に分布(89-B-10、91-B-8グリッド)する2点とが接合する。分布の主体は11号ブロックに認められ、石器の製作地点を示す。母岩別資料・黒色頁岩-16に分類される。

B-19(第202図)は6点よりなる接合資料である。6号ブロック(92・93-B-12・14・15グリッド)に分布する4点、7号ブロック(87・89-B-13グリッド)に分布する3点とが接合する。接合資料は比較的散漫な分布状態を示す。母岩別資料・黒色頁岩-13に分類される。

B-14(第203図)は10点よりなる接合資料である。12号ブロック(93~95-B-10グリッド)に分布する5点、6号ブロック(92・93-B-14・15グリッド)に分布する3点、11号ブロック(92-B-10、92-B-12グリッド)に分布する2点とが接合する。分布の主体は6号ブロックおよび12号ブロックに認められる。いずれのブロックから石器が移動するのかは明らかではない。母岩別資料・黒色頁岩-11aに分類される。

B-15(第204図)は31点よりなる接合資料である。6号ブロック(90~93-B-14~16グリッド)に分布する24点、7号ブロック(89-B-14、88-B-13グリッド)に分布する2点、9号ブロック(86-B-11グリッド)に分布する1点、10号ブロック(87-B-9グリッド)に分布する1点、11号ブロック(90-B-10、92-B-12グリッド)に分布する2点、12号ブロック(95-B-14グリッド)に分布する1点とが接合する。6号ブロックの北東側集中部分(91-B-15グリッド周辺)には石器の製作址に類似する分布状況が認められる。母岩別資料・黒色頁岩-11bに分類される。

B-22(第205図)は31点よりなる接合資料である。6号ブロックに分布する17点、7号ブロックに分布する3点、11号ブロックに分布する5点、12号ブロックに分布する6点とが接合する。6号ブロックの北東側集中部分(91-B-15グリッド周辺)には石器の製作址に類似する分布状況が認められる。母岩別資料・黒色頁岩-14に分類される。

5-6. 母岩別資料の分布

B区では、一部の石材を除き母岩別資料の抽出は必ずしも充分ではないが、黒色安山岩に1種類、黒色頁岩に7種類、頁岩に1種類、チャートに3種類、メノウに1種類、雲母石英片岩に1種類の母岩別資料が抽出されている。

石器石材として多用される黒色安山岩や黒色頁岩・珪質頁岩は母岩別資料に分類することが困難な石材である。A区出土の石器には、接合作業により原石の状態にまで復元される事例が多く存在したが、B区出土の石器の場合には、製作工程の位置づけや搬入石材の有無について充分には確認することができなかった。

そのため、母岩の共有関係や消費状況について十分な説明を加えることができなかった。

母岩別資料・黒色安山岩-1(付図11)

I 旧石器時代の遺構と遺物

本母岩別資料は総計115点(削器4点・加工痕ある剥片8点・石核7点・縦長剥片1点・剥片85点・碎片10点)から構成され、接合資料B-59・B-114・B-115・B-116・B-117・B-119・B-120および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。3号ブロックと6号ブロックを分布の主体とするほか、1号ブロックに2点、2号ブロックに3点、7号ブロックに7点、9号ブロックに12点、12号ブロックに5点、ブロックの周辺に4点が分布する。

3号ブロックにはB-59の接合資料をはじめ、石核3点・剥片31点・碎片1点が存在する。ブロックには2ヶ所の集中部(東側と西側)が認められ、ブロックの全域にわたり散漫な状態で分布しており、石器の製作址の様相を示す。6号ブロックにはB-116・B-119の接合資料をはじめ、削器4点・加工痕ある剥片6点・石核3点・剥片28点・碎片5点が存在する。ブロックには2ヶ所の集中部(北東側と南西側)が認められ、ブロックの全域にわたり散漫な状態に分布しており、石器の製作址の様相を示す。このほか、7号ブロックにはB-115の接合資料が、9号ブロックにはB-120の接合資料が、12号ブロックにはB-114の接合資料が存在し、いずれも6号ブロックとの接合関係が認められる。

母岩別資料・頁岩-1(付図13)

本母岩別資料は総計14点(石核1点・剥片7点・碎片6点)から構成され、接合資料B-44および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。11号ブロックを分布の主体とするほか、6号ブロックに1点、7号ブロックに2点、12号ブロックに3点が分布する。

11号ブロックには石核1点・剥片3点・碎片4点がブロックの北側を主体に存在するなど石器の製作址の様相を示す。

母岩別資料・黒色頁岩-11(付図12)

本母岩別資料はB-14・B-15の接合資料および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。直接の接合関係は認められないが、両者には類似する節理が存在することや原石の形状が一致することから、同一の母岩である可能性が大きい。

母岩別資料・黒色頁岩-11a(B-14)は総計10点(石核1点・剥片9点)から構成される。12号ブロックを分布の主体とし、石核1点・剥片4点が存在する。ブロックには3ヶ所に石器の集中部が認められるが、このうち中央の集中部分に分布しており、石器の製作址の様相を示す。このほか、6号ブロックに3点、11号ブロックに2点、12号ブロックに5点が分布するが、いずれも12号ブロックとの接合関係が認められる。

母岩別資料・黒色頁岩-11b(B-15)は総計31点(石核4点・剥片26点・碎片1点)から構成される。6号ブロックを分布の主体とし、石核3点・剥片20点・碎片1点が存在する。ブロックには北東側および南西側の2ヶ所に石器の集中部が認められるが、このうち北東側の集中部に分布しており、石器の製作址の様相を示す。このほか、7号ブロックに2点、9号・10号・11号・12号ブロックにそれぞれ1点が分布するが、いずれも6号ブロックとの接合関係が認められる。

母岩別資料・黒色頁岩-12(付図12)

本母岩別資料はB-16・B-17の接合資料および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。直接の接合関係は認められないが、両者とも原石の形状が類似することから同一の母岩である可能性が大きい。母岩別資料・黒色頁岩-12a(B-16)は総計13点(石核2点・剥片11点)から構成される。5号ブロックを分布の主体とし、石核1点・剥片9点が存在するなど石器の製作址の様相を示す。このほか、7号ブロックに1点、12号ブロックに2点が分布するが、いずれも5号ブロックとの接合関係が認められる。

5. B地点の調査

母岩別資料・黒色頁岩-12b (B-17)は総計16点(石核1点・剥片15点)から構成される。12号ブロックおよび6号ブロックを分布の主体とし、12号ブロックには石核1点・剥片6点が、6号ブロックには8点の剥片が存在するなど石器の製作址の様相を示す。

母岩別資料・黒色頁岩-13(付図13)

本母岩別資料は総計24点(削器1点・加工痕ある剥片1点・使用痕ある剥片2点・石核2点・剥片16点・破片2点)から構成され、接合資料B-18・B-19・B-20・B-21および接合関係をもたない同一の母岩別資料よりなる。6号ブロックおよび7号ブロックを分布の主体とし、6号ブロックには使用痕ある剥片2点・剥片10点が、7号ブロックには削器1点・石核1点・剥片2点・破片2点が存在するなど石器の製作址の様相を示す。このほか、8号ブロックと9号ブロックにそれぞれ1点、12号ブロックに3点が分布するが、いずれも6号および7号ブロックとの接合関係が認められる。

母岩別資料・黒色頁岩-14(付図13)

本母岩別資料は総計44点(石核2点・剥片31点・破片11点)から構成され、接合資料B-22および接合関係をもたない同一の母岩別資料よりなる。6号ブロックおよび11号ブロックを分布の主体とし、6号ブロックでは石核2点・剥片16点・破片6点が、11号ブロックでは剥片5点・破片5点が存在する。このほか、7号ブロックに3点、12号ブロックに5点、ブロックの周辺に2点が分布するが、いずれも6号および11号ブロックとの接合関係が認められる。

6号ブロックおよび11号ブロックには破片をともなう石器の分布が認められ、石器の製作址の様相を示す。

母岩別資料・黒色頁岩-16(付図14)

本母岩別資料は総計6点(石核1点・剥片5点)から構成され、接合資料B-23および接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。11号ブロックに3点、6号ブロックに1点、ブロックの周辺に2点が分布する。本母岩別資料(B-23)は剥片剥離の初期的様相を示すため、石器の製作地点を特定することは困難である。

母岩別資料・メノウ(付図15)

本母岩別資料は総計4点(剥片2点・破片2点)から構成され、すべて接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。6号ブロックの北東側集中部分に2点、7号ブロックの中央付近に2点が分布する。石器石材は白みを帯び、母岩の分類は容易である。

母岩別資料・チャート-1(付図15)

本母岩別資料は剥片1点から構成され、1号ブロックの中央付近に分布する。石器石材は赤みを帯び、母岩の分類は容易である。

母岩別資料・チャート-2(付図15)

本母岩別資料は使用痕ある剥片2点から構成され、ともに6号ブロックの北東側集中部分に分布する。石器石材は青みを帯び、母岩の分類は容易である。

母岩別資料・チャート-3(付図15)

本母岩別資料は総計12点(剥片5点・破片7点)から構成され、すべて接合関係の認められない同一の母岩別資料よりなる。7号ブロックを分布の主体とし、剥片3点・破片6点が存在するほか、6号ブロックに2点、9号ブロックに1点が分布する。石器石材は黒みを帯び、母岩の分類は容易である。

母岩別資料・雲母石英片岩(付図15)

本母岩別資料は破片2点から構成する。ともに7号ブロックの中央付近に4mほどの距離を隔て分布する。

I 旧石器時代の遺構と遺物

5-7, 出土石器群の分析

1, 検出遺構

B区には「掘り込み」を伴う明確な遺構はなく、わずかながら大形礫や小形礫の分布がみられるに過ぎない。77点の礫が出土してはいるが、6号ブロックや7号ブロックに多出する傾向が窺われるものの、密集し出土する状態ではなく、「礫群」とは相違する。また、出土状態は「配石」にも類似するため「配石」として検討したが、出土石器の一部には打撃痕・摩耗痕がみられ、台石や磨石に用いられていること、欠損状態には相違が存在するため、機能上・用途上の相違が存在すること、からここでは、石器の遺存状態より類型化を試み、記述した。

その結果、類型Aには3,000g前後を測る大形礫を用い、打撃痕や摩耗痕などの使用痕がみられることから、台石や磨石に用いられることが推察されたのである。一方、類型Bや類型Cには多数の接合資料が存在する点で、ともに類似するが、礫重量や割れ面の状態は著しく異なることが指摘される。類型Bの場合には礫重量が1,000gほどのものから4,000gほどのものまでを用い、割れ面には明確な打瘤が存在する。類型Cの場合には礫重量500g前後のものを多く用い、割れ面には著しい凹凸や剥落が存在する。前者の類型Bには人為的意図的な分割、あるいは、剥離行為が予想されよう。後者の類型Cには「礫群」の構成礫と同様な現象が存在することから火処の存在を示すものといえる。赤城山南麓・西麓に立地し、「暗色帯」(A T降下以前)より出土の石器群には、「礫群」の検出事例が極めて少なく、大形の礫が配石状態に検出されることが多い。「礫群」のある武蔵野台地や相模野台地と比べ、対照的であり、地域様相の相違が指摘される(富山県野沢遺跡1982)。A T降灰以後、礫群を搬出するようになるが、「礫群」や「配石」の有無が文化や伝統の相違あるいは変質を示すともいえ、今後とも留意していきたい。

2, 剥片剥離技術(第206図)

B区出土の石器には、118例513点の接合資料(礫の接合、16例46点を含む)が確認され、1例あたり4.6点が接合する。接合資料は剥離工程の一部を示す資料が多く、剥片剥離の実態は明確な状態に捉えられる訳ではないが、頻繁な打面転移をおこなう剥離技術を主体とし、多種多様な剥離手法が存在する。

原石の選択；出土資料のうちには、原石の形状の明確な資料が3例ほど存在する。原石には、長さ10~20cm・幅8~12cm・高さ10cm前後、あるいは、長さ20cm・幅10cm・高さ6~8cm前後を測る円礫が用いられている。一方、遺跡周辺の河床で採集が可能な黒色安山岩には、接合状態が剥離工程の部分的状態を示すこと、一部を除き母岩の分類が困難なこと、の二点が指摘され、出土資料から原石の形状を推定することはできない。

原石の分割；必ずしもすべてに「原石の分割」工程がみられるわけではないが、径20cm前後の大形の原石の場合には、分割をおこない、径10cm前後の円礫と大きさの等しい石核の素材を獲得するようである。

剥片剥離の展開；A区出土の石器は広義の石刃技法を技術基盤を主体に素材剥片の作出不いし石器の作出をおこなうが、B区出土資料には多種多様な形状の剥片が存在するなどA・B両地点出土の石器は著しい様相の相違を示す。接合資料の分析を通し、B区出土の石器には大別二種の剥離手法を抽出することができよう。

I類, 同一の打面より剥離をおこなうもの

II類, 90°の打面転移をおこない、剥離をおこなうもの

III類, 交互剥離をおこなうもの

各々の剥離手法には、打点が打面の周辺を廻る求心的剥離を示す場合や、打点を左右に振りながら後退する

母岩	接合 番号	原石	分割	剥離工程			石核 有無	剥片 剥離
				初期段階	剥離の展開	最終段階		
黒安1	B-59		○				遺存 遺存	II類 IV類
	B-114		—				遺存	II類
	B-115		—				×	II類
	B-116		—				遺存	IV類
	B-119		—				遺存	II類
	B-120		×				遺存	IV類
黒安	B-50		×				遺存	IV類
	B-63		○				×	II類
	B-64		○				×	II類 IV類
	B-65		○				遺存	II類
	B-66		○				遺存	II類
	B-68		×				×	II類
	B-69		—				×	IV類
	B-70		×				×	I類 IV類
	B-73		—				遺存	II類
黒頁11	B-14	○	○				遺存	II類
黒頁11	B-15	○	○				遺存 遺存	II類 IV類
黒頁12	B-16		—				遺存	IV類
黒頁12	B-17		○				遺存	I・II類
黒頁13	B-18		○				遺存	IV類
	B-19		—				遺存	IV類
黒頁14	B-22	○	×				遺存	II類
黒頁16	B-23	○	×				遺存	III類
黒頁	B-24		×				遺存	IV類
	B-26		×				遺存	IV類
頁1	B-44		○				遺存	IV類

第206図 剥離工程図(模式図)

I 旧石器時代の遺構と遺物

場合、などの多様性が認められるほか、I類・II類とは石核形状の相違する大形剥片を石核素材とし、剥離をおこなう剥離手法(IV類)が存在する。この剥離手法には、表裏両面のうち、一方を打撃面に、一方を作業面に、剥離をおこなうもの(a類)、表裏両面で剥離作業をおこなうもの(b類)、などの多様性がみられる。I～IVの剥離手法には、上述のような多種多様な剥離手法が認められるが、打面転移の発生頻度には相違が存在するほか、互いに異なる剥離手法が同一の接合資料(B-59)や石核にみられるなど、複雑な様相を示す。技術上の諸属性；出土石器には多種多様な形状の剥片が作出され、互いに異なる剥離手法が共存するなど、複雑な様相を呈す。平坦な打面(自然面ないし剥離面)より剥離作業はおこなわれるものの、明確な打面調整は存在せず、また、同一母岩には自然面打面ないし剥離面打面の両者が混在するが、適当な打角が得られない場合にのみ打面の作出がおこなわれるようである。長さ3～6cm・幅3～6cm前後(長幅比1:2～2:1)の剥片が多く出土し、多様な形状の剥片が作出され、明確な打面調整や打面再生は存在せず、石核の形状や剥離面構成を重視し、多種多様な形状の剥片を作出するといえる。

B区出土の石器群の場合には、上記二種の剥離手法を主体とする多種多様な剥離手法により剥片の剥離がおこなわれるようである。広義の石刃技法により作出される縦長剥片もみられるが、資料総数は少なく乏しい。石器群に客体的な存在といえよう。打面調整や打面再生など技術上の類似性は認められるとはいえ、このような状態はA区出土の石器群とは著しく異なる。

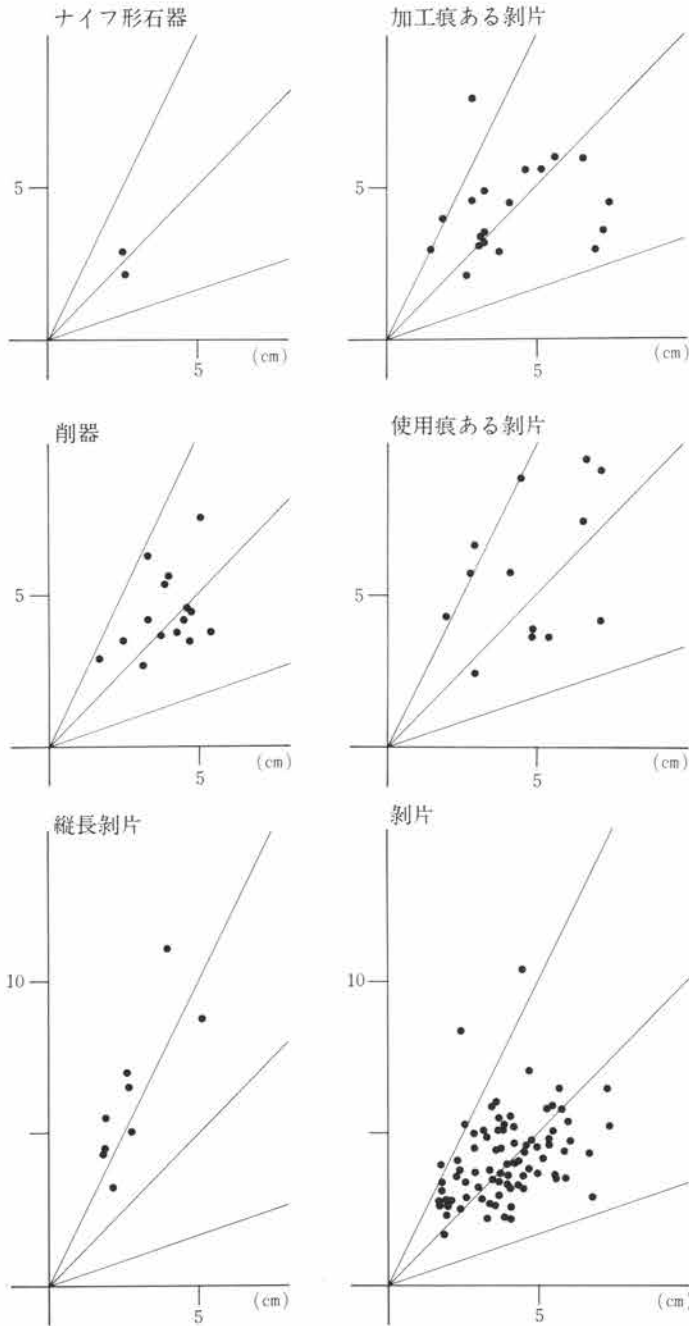
3. 出土石器(第207図)

総計1,867点の出土石器は、3地点(I区～III区)より大別12カ所のブロックを形成し、出土している。各々のブロックには接合資料や同一母岩が存在するとはいえ、接合資料は剥離工程の一部を示し、母岩の分類が困難なことなどから石核の消費状態や母岩の共有状態については充分分析しえていない。しかしながら、出土石器には素材剥片の形状や調整加工の状態などの類似性が指摘され、これらを総合して判断するならば、単位的な石器群として出土石器が遺存するということは明確であるといえよう。

ナイフ形石器 ナイフ形石器は素材剥片を縦位に用いる一群(A群)と横位に用いる一群(B群)の二群に大別される。A区およびB区より出土する石器群には組成に相違が存在するが、両地点より出土するB群のナイフ形石器について比較するならば、石器の形状は横長・台形状(長幅比1:1)を呈すことや裏面側から表面側への急峻な調整加工が施されることなどの類似性が、素材剥片を横位使用するA区出土のナイフ形石器と素材剥片を縦位使用するB区出土のナイフ形石器という相違が、認められる。資料数量が少なく数量的な制約や組成上の制約を前提としなければならず、また、石器群の同時性については、出土石器や剥片剥離の分析をおこなうなかで判断する必要があるが、現状では、A・B両地点より出土するナイフ形石器には相違が指摘され、両地点より出土する石器群には、時間差(段階差)を想定しなくてはならない。

楔形石器 B区出土の5点には石器の短軸方向に対向する剥離はみられないが、やや幅広の剥片を用い、上下両端の対向する剥離が明確に存在する。黒色安山岩を素材とするもの3点、黒色頁岩を素材とするもの2点が出土している。紡錘形状の断面形状を示す場合が多いが、黒色安山岩の3点のうち2点には、楔状の断面形状を示す。素材剥片の形状や剥離痕の在り方には斉一性がみられる。B-I・B-IIIの両地点には石器群の同時性を示す接合関係は存在しないものの、I区およびIII区出土の楔形石器には形態上の類似性がみられ、石器群の同時性を検討するうえでは重要な存在であることが指摘される。

5. B地点の調査



第207図 石器の長幅比(B区)

削器 B区出土の15点には、縦長の剥片を素材とするものと横長の剥片を素材とするものがみられる。両者とも表面側から裏面側への浅く粗い調整加工を施し、鋸歯状ないしノッチ状の機能部を作出することが多く、以上の特徴はA区出土の削器に類似する。また、B区出土の削器の場合、器体の中央付近で欠損する事例も多い。欠損が製作時に生じるのか、使用時に生じるのか欠損する要因については明らかでないが、類似する欠損状態を示す場合が多く、石器の廃棄行為など二次的要因を考慮する必要もあろう。なお、出土状態には偏在性が指摘され、B-I区では石器の製作空間的な要素の存在する3号ブロックを主体に、B-III区では石器の使用空間的な要素の存在する6号・7号ブロックを主体に出土している。

加工痕ある剥片・使用痕ある剥片 46点が出土している。削器や搔器と同様に、加工痕ある剥片或使用痕ある剥片は、素材剥片の形状を大きく変えることなく作出され、A区出土の石器と同様な状態を示す。多種多様な形状の剥片を用い、機能部を確保することが可能な形状の剥片を選択する。加工痕ある剥片には表面側から裏面側への浅く粗い調整加工が施される場合が多い。長幅比1:2~長幅比2:1を示す形状の剥片が用いられる。

縦長剥片 縦長剥片の組成頻度は著しく限られ、わずか0.5%(10点)を占めるに過ぎない。背面を構成する剥離方向は剥片の剥離方向に一致するとはいえ、左右の側縁が平行する形状の良好な資料は極めて少ない。これらについては、搬入されたものであるのか生産されたものであるのか、明確ではない。出土石器や接合資料の示す剥片剥離には、出土資料(接合資料)には縦長剥片を連続して剥離する状態はみられず、多種多様な剥離作業がみられること、剥片の形状は規格性・斉一性に乏しいこと、などが指摘される。以上の傾向は縦長剥片や横長剥片を生産する剥離体系が同一の母岩に共存するA区出土の石器や接合資料の示す剥片剥離とは著しく異なることが指摘される。

I 旧石器時代の遺構と遺物

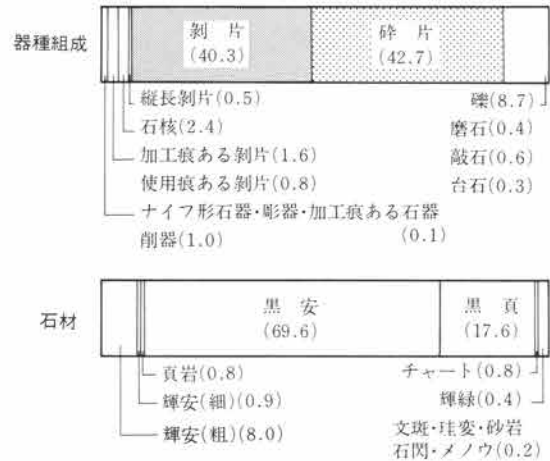
その他 資料数量に乏しいため明確でないが、彫器1点・加工痕のある石器1点が出土している。彫器には、交叉刃状の機能部が剥片端部に作出され、この段階の彫器としては明瞭な資料ではある。加工痕のある石器については、特徴的な形態観より、打製石斧に類似する形態を示す。接合資料ならびに母岩の検討の結果、石器の形状は10cmを越える可能性はなく、当初から小形の石器であるといえ、同一母岩より周辺加工の削器が存在するなど、加工量の相違はあるが、周辺加工であるという類似性がある。したがって、製作意図の観点を勘案するならば、少なくとも打製石斧の機能を十分に果たすといえず、未製品ないしは他器種としての可能性を検討しなければならない。

4. ブロックの構造

a. 石器と石材(第208図)

出土石器には、遺跡周辺の地域で採集が可能な黒色安山岩や輝緑岩など在地系石材のほかに、チャート・珪質変岩など12種に及ぶ多種多様な石材からなる。同様な状態は赤城山麓に立地し、「暗色帯」に出土する、石器群に多い石材の組成であるが、組成状態の逆転も少数例ながら存在する。黒色安山岩を主、黒色頁岩を従とし、これにチャート・珪質頁岩・珪質変岩や信州系の黒曜石が組成する状態はA区出土の石材組成に類似する。

B区(1867点)



b. 母岩別資料の分布と接合

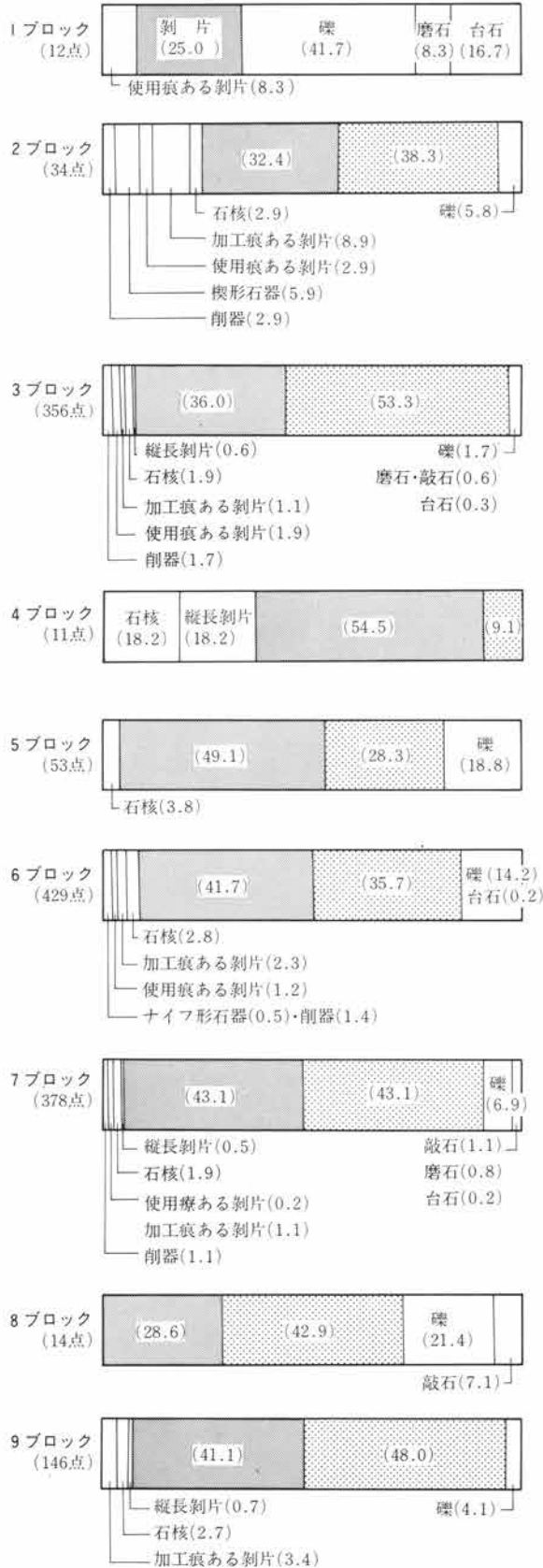
石器群には、12種に及ぶ母岩別資料が確認され、これらが12カ所のブロックを構成する。母岩別資料には上述した工程上の類型化が可能であるが、ここでは分布状態や接合状態の検討をおこない、ブロックの形成や構造を明らかにしたい。
分布状態；通常、母岩別資料には、単一のブロックに分布する一群と複数のブロックに分布する一群に大別されるが、12種に及ぶ母岩別資料の場合、付図11～15にも明らかのように、後者の一群に分類されることが多い。後者の一群については、出土数量の多少が存在するなど分布状態の相違が指摘され、黒色頁岩の場合には6号ブロックを分布の主体とすることが多い。

- 黒色安山岩-1 3号・6号ブロックを主体に分布
- 黒色頁岩-11
 - 11 a 6号・12号ブロックを主体に分布
 - 11 b 6号ブロックを主体に分布
- 黒色頁岩-12
 - 12 a 5号ブロック主体に分布
 - 12 b 6号・12号ブロックを主体に分布
- 黒色頁岩-13 6号・7号ブロックを主体に分布
- 黒色頁岩-14 6号・11号ブロックを主体に分布
- 黒色頁岩-16 11号ブロックを主体に分布

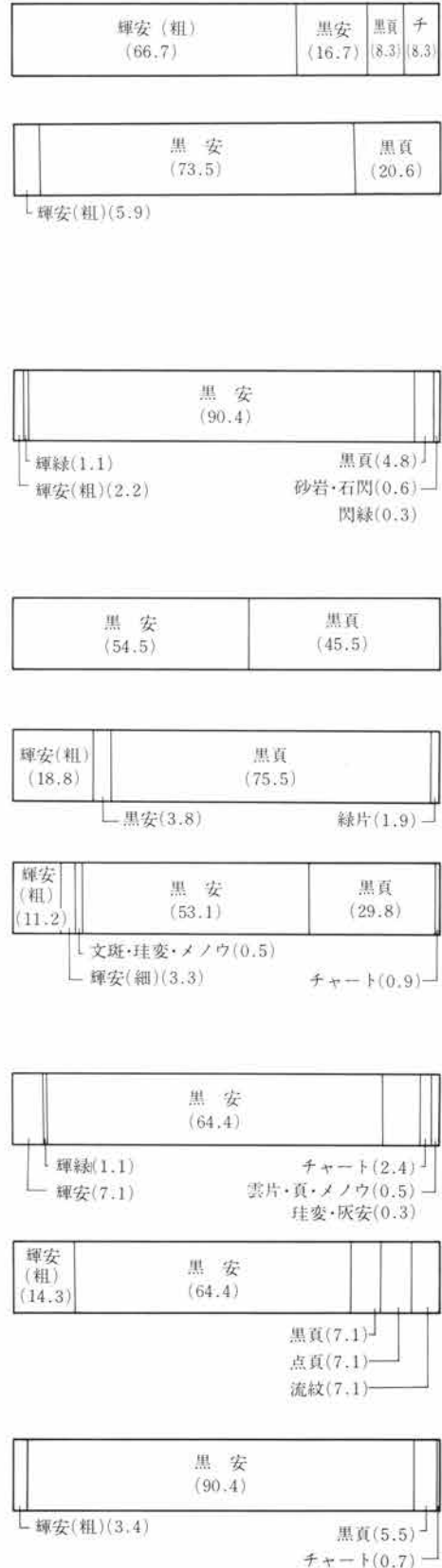
第208図 器種構成と石器石材(B区)

5. B地点の調査

器種

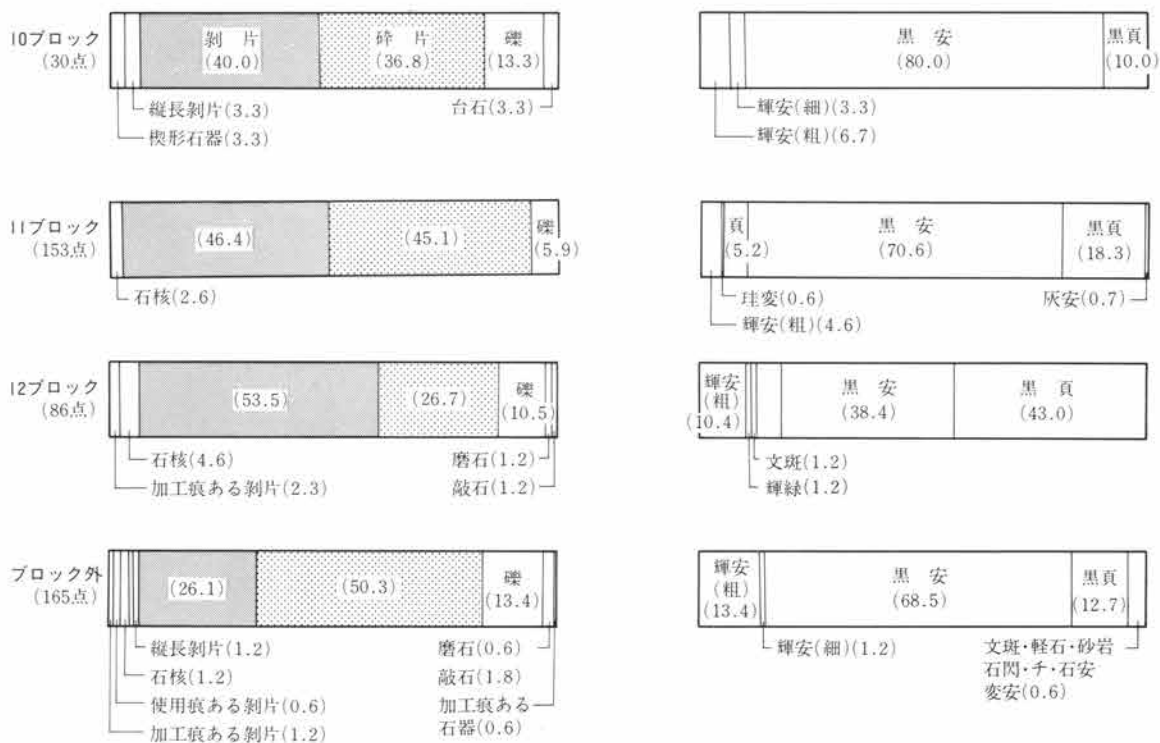


石材



第209図 器種構成と石器石材(ブロック別) 1

I 旧石器時代の遺構と遺物




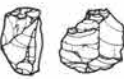
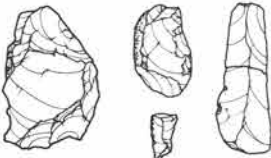

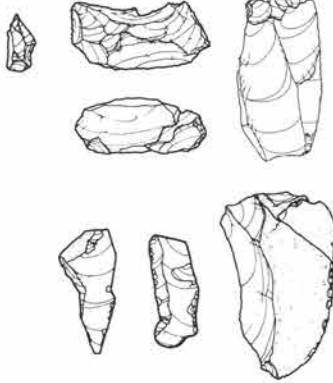
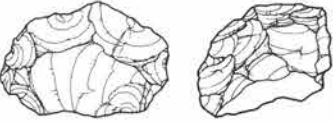

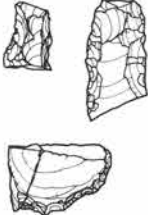
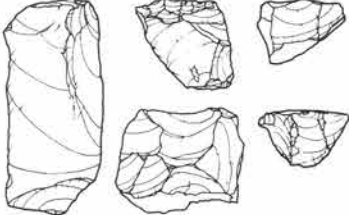

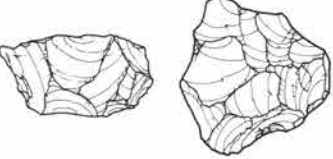
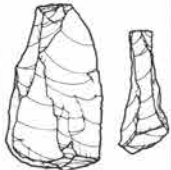


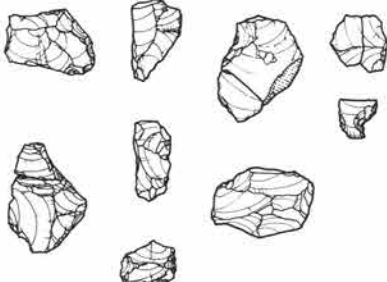
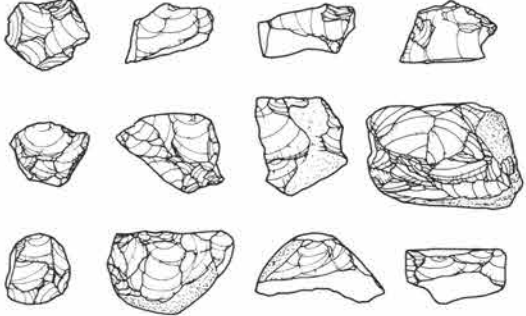
第210図 器種構成と石器石材(ブロック別) 2

接合状態；出土資料には118例に及ぶ接合資料が存在する。ブロック内での接合資料60例・ブロック間での接合資料58例が確認されている。B区出土の石器の場合、母岩の分類は充分ではないこと、石器群は調査区西側の台地先端部分に広がること、など不確定要素も多く、母岩の供給や消費の問題など不明な問題が多々存在する。なお、黒色頁岩には直接の接合関係はないが、黒色頁岩-11a・黒色頁岩-11b、および、黒色頁岩-12a・黒色頁岩-12b、が同一の母岩に分類が可能ではある。ここでは、母岩の分類が可能な資料について母岩の供給や消費の状態を記述する。

母岩の分布状態および接合状態(第194~204図)を合せ判断するならば、6号ブロックを主体的な分布域とすることが指摘されよう。これらのなかには、地点を移動し、剥離作業をおこなう資料(黒色安山岩-1・B-59)も存在し、同様な状態は一部黒色頁岩にもみられる。しかしながら、6号ブロックを分布の主体とする傾向は明らかであり、6号ブロックで剥片の生産をおこない、他の地点に供給する(他の地点で消費する)という在り方が母岩の分布状態および接合状態より指摘されよう。ここで問題なのは6号ブロックと同様な規模の7号ブロックであろう。母岩に帰属の困難な資料が多く存在するため母岩の供給や消費の状況は明確ではないが、7号ブロックを主体に接合する資料が存在すること、ブロックの規模や構造(石器の組成および配石の存在)が類似すること、などから6号ブロックと同様に7号ブロックは評価され、6号ブロック、および7号ブロックは、遺跡形成の主体的役割を担う存在あるいは中心的存在といえ、居住の継続に伴い、周辺のブロックを形成するという構造を示す。

なお、11号ブロックには頁岩-1の主体的な分布域が存在する。頁岩-1は11号ブロックのほかに、6号ブロックをはじめとする周辺のブロックに分布し、頁岩-1および黒色頁岩11~16の分布傾向は著しく異なる。6号ブロックと11号ブロックでは、石材の分布数量の量比が逆転する現象がみられるなど、ブロックが

I 旧石器時代の遺構と遺物

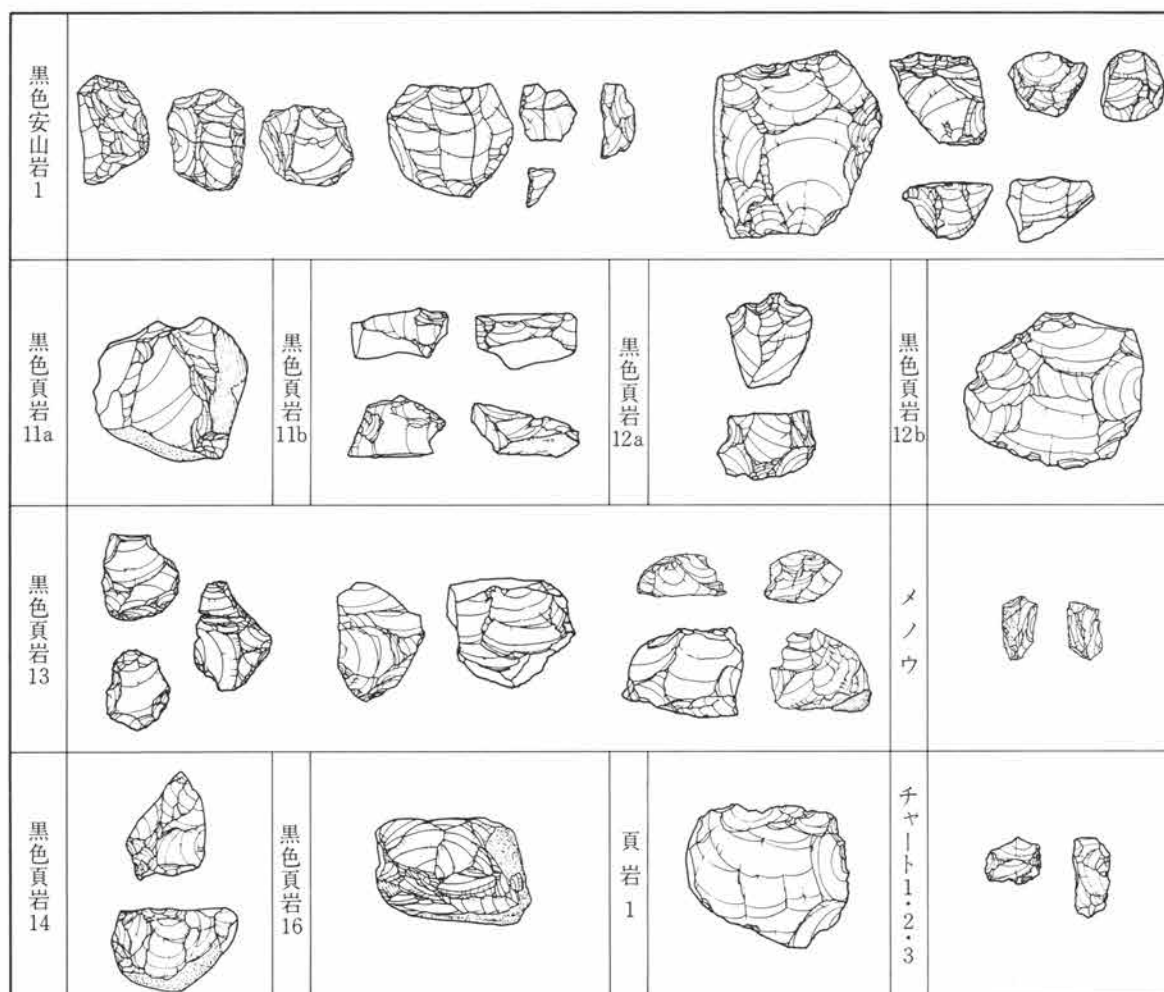
	楔形石器	削器、加工痕ある剥片	石核	縦長剥片
1号ブロック				
2号ブロック				
3号ブロック				
				
4号ブロック				
5号ブロック				
6号ブロック	ナイフ			
				

第212図 ブロックと器種構成(1)

	削器、加工痕・使用痕ある剥片		石核			縦長剥片
7号ブロック						
9号ブロック						
10号ブロック						
11号ブロック						
12号ブロック						
ブロック外	楔形石器	彫器				
	加工痕ある石器					

第213図 ブロックと器種構成(2)

I 旧石器時代の遺構と遺物



第214図 母岩と器種構成

d, 母岩別資料と器種組成(第211・214図)

石器群は12種類に及ぶ母岩別資料からなる。350点(出土総数の19%)がこれら12種類の母岩別資料に分類されるにとどまり、母岩と器種の関係は明確ではない。そのため、資料豊富な母岩別資料・黒色安山岩-1を分析資料とすることで、両者の関係を抽出する。

母岩別資料・黒色安山岩-1は、接合資料・8種(B-59・114~120)からなり、3号ブロックおよび6号ブロックに多く分布する。剥離手法は90°の打面転移を介在し、同一打面より連続する剥離をおこなうほか、石核の表裏両面で剥離作業をおこなう資料(B-114)、交互状剥離や求心的剥離をおこなう資料(B-59)が存在するなど、多種多様な剥離作業が同一の母岩に良好な状態で共存する。これらの接合資料より、縦長の剥片や横長の剥片が作出され、多種多様な形状の削器や加工痕ある剥片・使用痕ある剥片など第二次生産具が作出されるといえる。

ここで分析の対象とした黒色安山岩-1は、上述のように多様性に富む剥離手法を適用する。実態を明示することはできないが、分析の対象とすることのできない資料についても、黒色安山岩-1と同様な状態が推察される。したがって、黒色安山岩-1を分析することにより素材剥片の作出と石器の形状あるいは母岩と器種組成など、推定可能な状態が生まれてこよう。

II 科学的分析

1, テフラの同定

新井 房夫

1. 模式柱状図

本遺跡の標準層序を模式的柱状図で示す(第215図)。

層位関係および岩石記載的性質(後述)から、つぎに示す7枚の示標テフラ層が確認された。上位から略号、テフラ名称、給源火山、推定噴出年代の順に記す。

- FP : ニツ岳降下軽石・榛名火山(6世紀中葉)
- FA : ニツ岳火山灰・榛名火山(6世紀初期)
- SP : 白糸降下軽石・浅間火山(約15,000年前)
- BP : 板鼻褐色軽石・浅間火山(16,000~20,000年前)
- AT : 始良Tn火山灰・始良カルデラ(21,000~22,000年前)
- HA : 八崎火山灰・榛名火山(25,000~30,000年前)
- HP : 八崎降下軽石・榛名火山(約40,000年前)

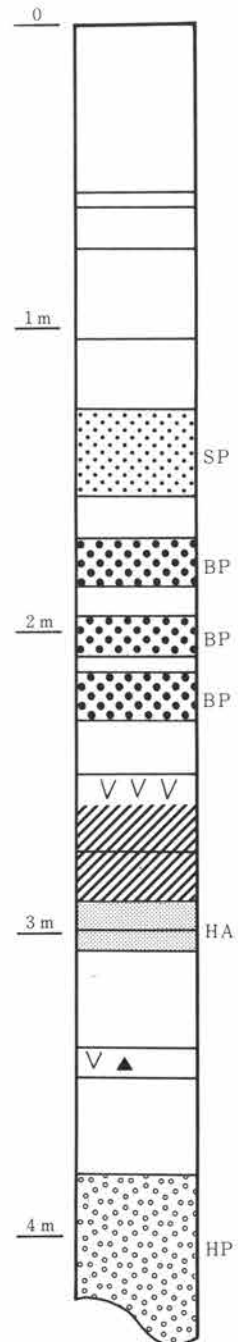
2. ローム層(赤土)中の示標テフラ層の諸性質

(1) 白糸降下軽石層(SP)

層厚25~45cm, 平均最大粒径(ϕ_x) 2~3cmの黄色軽石からなる。最上部はやや細粒となり ϕ_x 0.5cm~1cmとなる。石質岩片は乏しい。軽石中の斑晶鉱物は軽鉱物(斜長石)に富み、重鉱物は比較的乏しい。重鉱物組成は、斜方輝石 > 磁鉄鉱 \geq 単斜輝石を主とし、ごく少量の緑色角閃石を伴うことが特徴である。火山ガラス(軽石型)の屈折率は $n=1.505\sim 1.507$ 、斜方輝石のそれは $\gamma=1.703\sim 1.707$ を示す。野外におけるみかけは板鼻黄色軽石層に類似しているが、緑色角閃石を伴うことや斜方輝石の屈折率が異なる点で両者は明らかに識別できる。

(2) 板鼻褐色軽石層(BP)

間に4~5cmの風化火山灰土(ローム)を挟み、上・中・下3層に区分できる。上部層は層厚15cm、 ϕ_x 0.5cm程度の黄橙色細粒軽石からなる。中部層は層厚15cm、 ϕ_x 2cmとやや粗粒の黄橙色~褐色軽石からなる。下部層は層厚17cmで、 ϕ_x 1cmの褐色軽石と多量の微細岩片および有色鉱物の遊離斑晶片からなり、暗色火山砂状を呈する。それぞれの重鉱物組成は類似し、斜方輝石 \geq 単斜輝石 > 磁鉄鉱の組成で、上位のSPに比較すると重鉱物の量も多い。斜方輝石の屈折率(γ)は、上部層が1.702~1.707、中部層が1.705~1.710、下部層は1.703~1.708を示す。



第215図 土層の堆積

II 科学的分析

(3) 始良Tn火山灰(AT)

板鼻褐色軽石層(BP)の下位約25cm~35cmの層準は褐色ローム中でやや明るい色を呈し、野外の観察によってもこのあたりにATが介在することが予想できる。そこで、BPの下位の厚さ50cmの範囲のローム層を厚さ5~10cm刻みに細分して系統的に7試料を採取し、それぞれに含まれるAT火山ガラスの含有量の消長を検討したところ、BPの下位25cm~30cmに最多のピークが認められた(第215図)。したがって、この層準がAT降下層準に相当するものと認定できる。

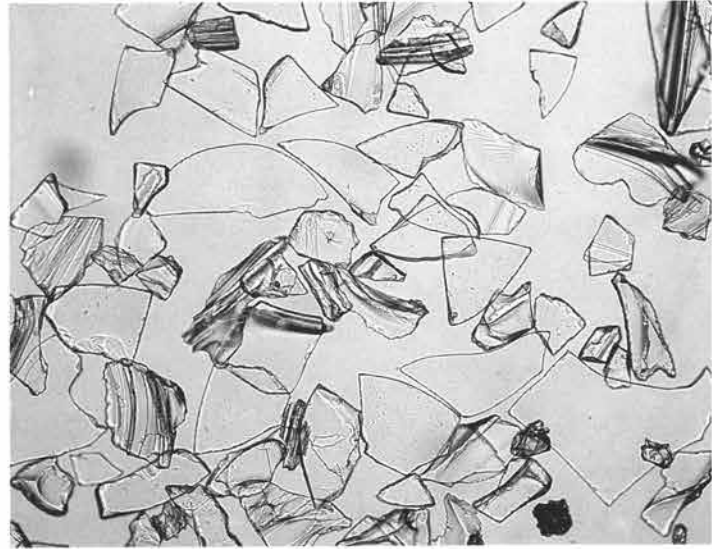


photo 1
顕鏡下のATガラス

0 0.3mm

上記層準からは多量の無色透明、バブル・ウォール型の火山ガラス片($\phi_x 0.5\text{mm}$ 、Photo-1)が検出され、それらの屈折率($n = 1.499 \sim 1.501$)と合わせて確実にATと同定できる。

(4) 八崎火山灰層(HA)

層厚6cmの白色火山灰層で直上に粗粒($\phi_x 6\text{cm}$)の白色軽石粒が散点的に伴う。これらの粗粒軽石粒は、みかけは八崎降下軽石(HP)と似ているが、カミングトン閃石をかなり多く含む点で異なっており、八崎火山灰と一連の火山活動の産物と考えられる。重鉱物組成は、緑色角閃石(カミングトン閃石を含む) \leq 斜方輝石、磁鉄鉱。屈折率は緑色角閃石が $n_2 = 1.669 \sim 1.675$ 、カミングトン閃石は $n_2 = 1.660 \sim 1.665$ 、斜方輝石は $\gamma = 1.708 \sim 1.711$ を示す。

(5) 八崎降下軽石層(HP)

層厚50cm以上、 $\phi_x 5 \sim 6\text{cm}$ の白色軽石からなり、少量ながら石質岩片も含んでいる。重鉱物組成は斜方輝石 \supset 緑色角閃石 $>$ 磁鉄鉱で、カミングトン閃石は認められない。屈折率は斜方輝石が $\gamma = 1.709 \sim 1.712$ 、緑色角閃石が $n_2 = 1.670 \sim 1.677$ を示す。

3. AT降下層準と旧石器遺物包含層準との関係

本遺跡における旧石器遺物は板鼻褐色軽石層下部層の直下から八崎火山灰層の直上層にかけて包含され、遺物は板鼻褐色軽石層下約30cm付近に最も多く出土するようである。一方、AT火山ガラス含量のピークは遺物の多出する層準に一致するか、もしくはやや上位にある。

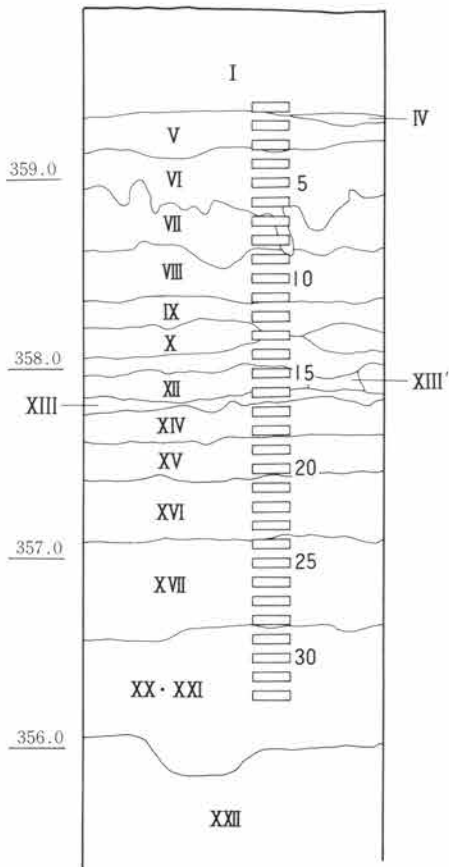
したがって、本遺跡における旧石器文化は八崎火山灰(HA)の降下堆積時(25,000~30,000年前)以後、始良Tn火山灰(AT)の降下堆積時(21,000~22,000年前)以後の文化ということになり、出土状況より判断するならば、遺物は、火山灰降下堆積の直前のものと推定される。

2, 花粉分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社

2-1, 試料

試料は、74-A-31Grid地点のI層(No.1)からXXI層(No.32)にかけて10cm間隔で連続して採取した32点で(第216図)、分析に供した試料はNo.15とNo.18を除いた30試料である(第4表)。なお、堆積層はVIII層とVII層の境界を境に下位が中部ローム層、上位が上部ローム層とされる。



第216図 試料採取地点柱状図

Sample No.	土質	花粉分析	花粉・胞子化石産出傾向
1	黒色土	○	R
2	黒褐色土	○	C
3	黒褐色土	○	C
4	暗褐色ローム	○	C
5	にぶい黄褐色ローム	○	C
6	にぶい黄褐色ローム	○	C
7	黄褐色軽石	○	C
8	黄軽石軽石	○	C
9	明褐色軽石	○	NP
10	明褐色軽石	○	RR
11	明褐色軽石	○	NP
12	明褐色軽石	○	NP
13	明褐色軽石	○	NP
14	明褐色軽石	○	NP
15	明褐色軽石	○	—
16	明褐色軽石	○	NP
17	明褐色軽石	○	NP
18	明褐色軽石	○	—
19	黄褐色ローム	○	NP
20	黄褐色ローム	○	NP
21	にぶい黄褐色ローム	○	RR
22	にぶい黄褐色ローム	○	NP
23	にぶい黄褐色ローム	○	RR
24	にぶい黄褐色ローム	○	NP
25	にぶい黄褐色ローム	○	RR
26	にぶい黄褐色ローム	○	RR
27	にぶい黄褐色ローム	○	NP
28	黄褐色ローム	○	NP
29	黄褐色ローム	○	NP
30	黄褐色ローム	○	NP
31	黄褐色ローム	○	RR
32	黄褐色ローム	○	RR

注: 1) 色調は新版標準土色帖(小山・竹原, 1967)による。
 2) 花粉・胞子化石産出傾向は、AA(極めて多い)、A(多い)、C(普通)、R(少ない)、RR(極めて少ない)の5段階とし、花粉・胞子化石が検出されないものをNPとした。

第4表 花粉分析試料表

II 科学的分析

2-2, 分析方法および結果の表示法

花粉・孢子化石の抽出方法は、以下の手順で行った。

試料を20g前後秤量し、10%塩酸(HCl)処理とフッ化水素(HF)処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行う。次に重液(ZnBr₂ 比重2.2)を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物残渣についてアセトリシス処理を行って植物遺体中のセルロースを加水分解し、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行った。処理後の残渣は、よく攪拌しマイクロピペットで適量を取り、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作成した。

検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類(Taxa)について同定・計数した。

その結果、花粉・孢子化石総数が200個体以上検出された試料について花粉・孢子化石総数を基数として百分率を算出し、花粉化石群集変遷図を作製した。

2-3, 結果

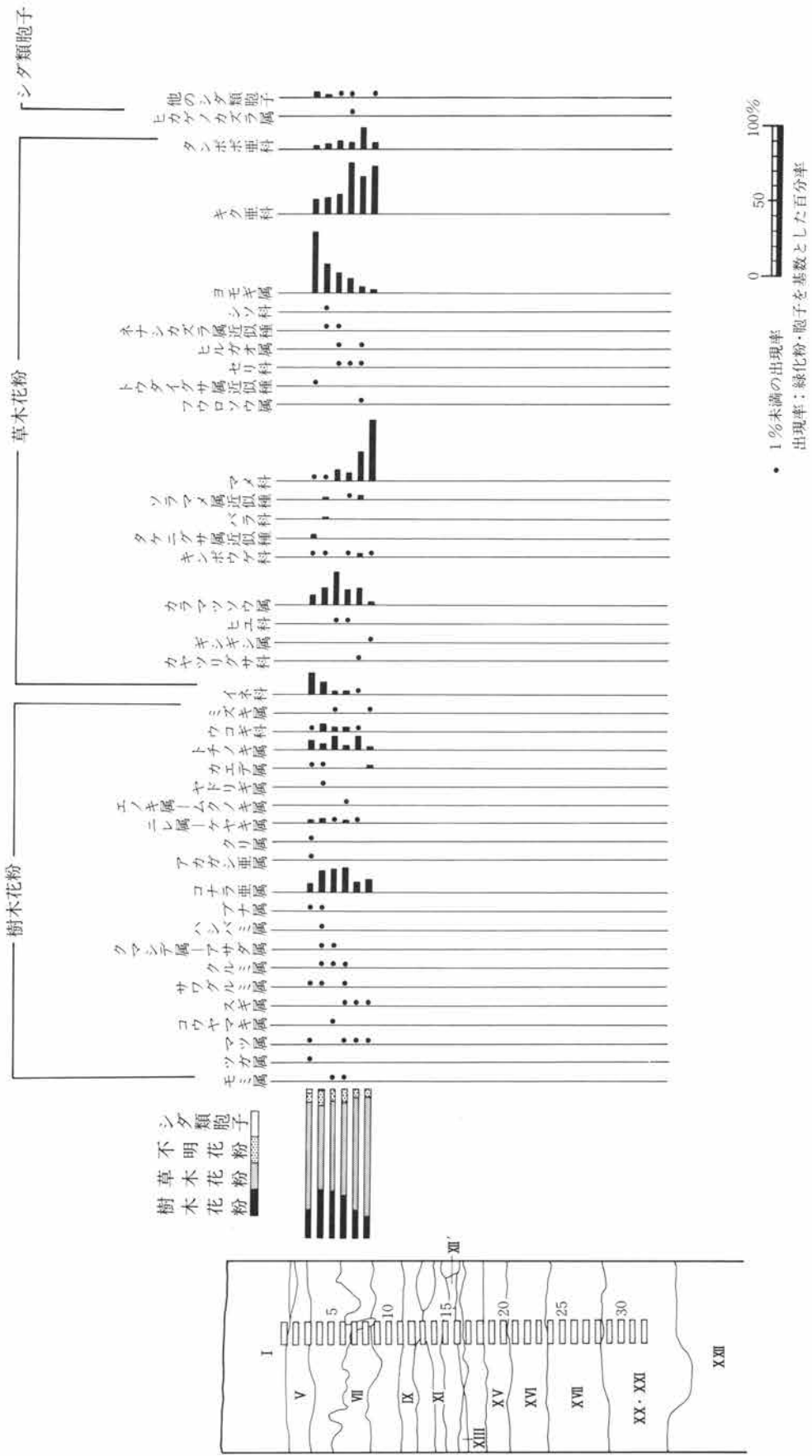
全層準を通じて検出された種類数は、樹木花粉が21種類、草木花粉が19種類、シダ類孢子が3種類であった。その産状は、VII層~V層下部で比較的多く検出されたが、VIII層以深(No.9~32)とV層上部以浅(No.1, 2)ではほとんど検出されなかった(第5表)。

VII層(No.8)~V層下部(No.3)の各試料で認められた花粉化石群集の種類構成はほぼ類似していたが樹木花粉と草木花粉の出現傾向は異なっていた。樹木花粉では、コナラ亜属・トチノキ属・ウコギ科などが高率に検出された。一方、局地的な植生を反映していると考えられる草木花粉ではカラマツソウ属・マメ科・ヨモギ属・キク亜科・タンポポ科・イネ科などが高率に検出され、それらの種類は下から上へ次のような層位変化を示した(第217図)。VII層では草木花粉のマメ科とキク亜科が約40%と高率に出現し、VI層になるとマメ科・キク亜科は減少傾向、低率であったヨモギ属・イネ科が増加傾向を示した。V層になるとマメ科とキク亜科が低率になり、ヨモギ属が約40%と高率に出現するようになった。

2-4, 考察

中部ローム層とFA以浅からは花粉・孢子化石はほとんど検出されなかった。堆積物が主としてローム層からなり、部分的には純粋なパミス層からなることを考えると花粉・孢子化石がほとんど含まれていないのは当然かもしれない。なぜならば、花粉・孢子は空気(酸素)を断たれた還元的状態でよく保存されるが、空気に触れるような酸化的状態では化学的な酸化や土壌微生物の作用によって分解され易く、風成堆積物であるローム層中では花粉・孢子が堆積しても堆積時あるいはその後の経年変化などによって分解したことが推定されるからである。このように、ローム層中に堆積した花粉・孢子化石は大半が失われてしまった可能性が高いことから、情報量も湿原などの水成堆積物に比較して極めて少ないと判断される。

VII層~V層下部において検出された花粉・孢子化石は堆積当時の遺跡周辺に分布していた植物に由来するものと考えられる。しかし、上記したようにローム層中では大半の花粉・孢子が分解・消失していることを考慮すると花粉化石群集が歪曲している可能性が高いとともにこれらの種類以外の植物が遺跡周辺に分布していたと考えられる。したがって、今回の結果からここで古植生について考察することは非常に危険でありまた困難である。



第217図 花粉化石群集の変遷

III 成果と今後の課題

赤城山西麓・暗色帯出土の石器群

A T降灰以前の石器群については、前代の伝統に立脚する石器群であるという認識からの分析(岡村 1976、横山 1976、佐藤 1988、安斉 1988)を要す。宮城県下の成果の他に、東京都下あるいは群馬県下での近年の成果から確実に3万年を遡る石器群(前期旧石器)の存在が確実視されるなかで、今後、石器群の変遷や変質、地域の実態が次第に明らかとなろう。群馬県内より出土のA T降灰以前の石器群については、すでに、詳細な分析や論考(白石 1987)があり、自身も石器群の変遷と様相について概要を既に呈示(岩崎 1988)している。ここでは、勝保沢中ノ山遺跡・二地点より出土する石器群をA T降灰以前の石器群の変遷の中に位置づけ、さらに、出土層位や石器石材の問題について、若干の検討をおこなうこととしたい。

出土石器群の検討

a. 勝保沢中ノ山遺跡出土の石器

A区出土の石器群については4-7の項で、B区出土の石器群については5-7の項で、既に検討した。そのためここでは、A区およびB区より出土する石器群を比較検討し、両地点より出土する石器群の類似点や相違点を示す。

石器群の段階を示す指準的な存在であるナイフ形石器は、素材剥片の用い方(剥片を縦位に使用するか、剥片を横位に使用するか)により大別二群に分類できるものの、両地点より出土する石器群にはナイフ形石器・A群の有無というような石器組成の相違や資料数量が不足する。そのため、両地点より出土する石器群を同等に比較することは困難ではあるが、両地点ともに存在するナイフ形石器・B群について比較するなら、石器の形状が横長・台形状を呈し、裏面側から表面側への急峻な調整加工を施すという類似点と、A区出土のナイフ形石器は剥片を横位に、B区出土のナイフ形石器は剥片を縦位に使用するという顕著な相違とがそれぞれ指摘される。

両地点より出土する石器群の示す剥片剥離には明確な相違が存在する。A区には単設の打面より剥片剥離をおこなうもの(a類)、両設の打面より剥片剥離をおこなうもの(b類)、90°打面転移をおこない剥片剥離をおこなうもの(c類)、大形剥片を石核素材に剥片剥離をおこなうもの(d類)、の大別4種(a類~d類)の剥離手法が存在する。a類~d類の剥離手法では、c・d類に比べa・b類が数量的には主体を占め、a・b類は主体的な剥離手法として、c・d類は客体的な剥離手法として、評価することができる。一方、B区には同一の打面より剥離をおこなうもの(I類)、90°の打面転移をおこなうもの(II類)、I類やII類と石核形状の相違する大形剥片を石核素材とし剥片剥離をおこなう剥離手法(III類)、の大別3種の剥離手法が存在する。I類やII類の剥離手法には、打点が打面の周辺を廻る求心的剥離を示す場合や、打点を左右に振り、後退する場合、III類の剥離手法には、表裏両面のうちの一方を打撃面に一方を作業面に剥離をおこなうもの(III-a類)や、表裏両面で剥離作業をおこなうもの(III-b類)などの多様性が存在する。両地点ともに明確な打面の調整や再生はおこなわれないものの、平坦な打面(自然面ないし剥離面)より剥離作業をおこない、部分的な側縁調整や粗い頭部調整をおこなうこと、平坦な打面を得る場合に限り打面の作出をおこなうこと、など技

III 成果と今後の課題

術上の類似性が存在する。一方、両地点より出土する石器群には、同一の打面から剥離作業が連続するA区出土の石器群と連続性のないB区出土の石器群という相違が指摘されよう。

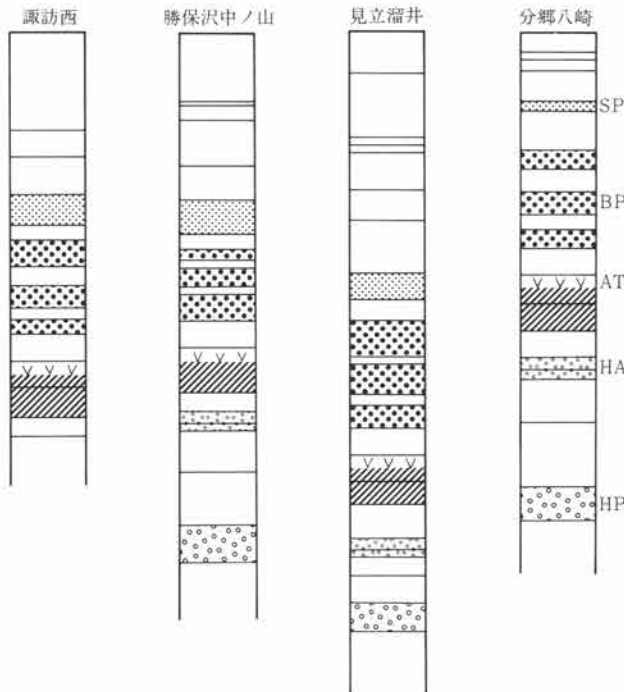
以上、両地点より出土する石器群の類似点と相違点を呈示した。上述の異同に加え、両地点より出土する石器群には接合資料や同一母岩が認められないこと、A地点出土石器群はB地点出土石器群に比べ、出土層位は若干上位にあること、などから現状では石器群の同時性については否定的状況にある。

b. 周辺遺跡出土の石器

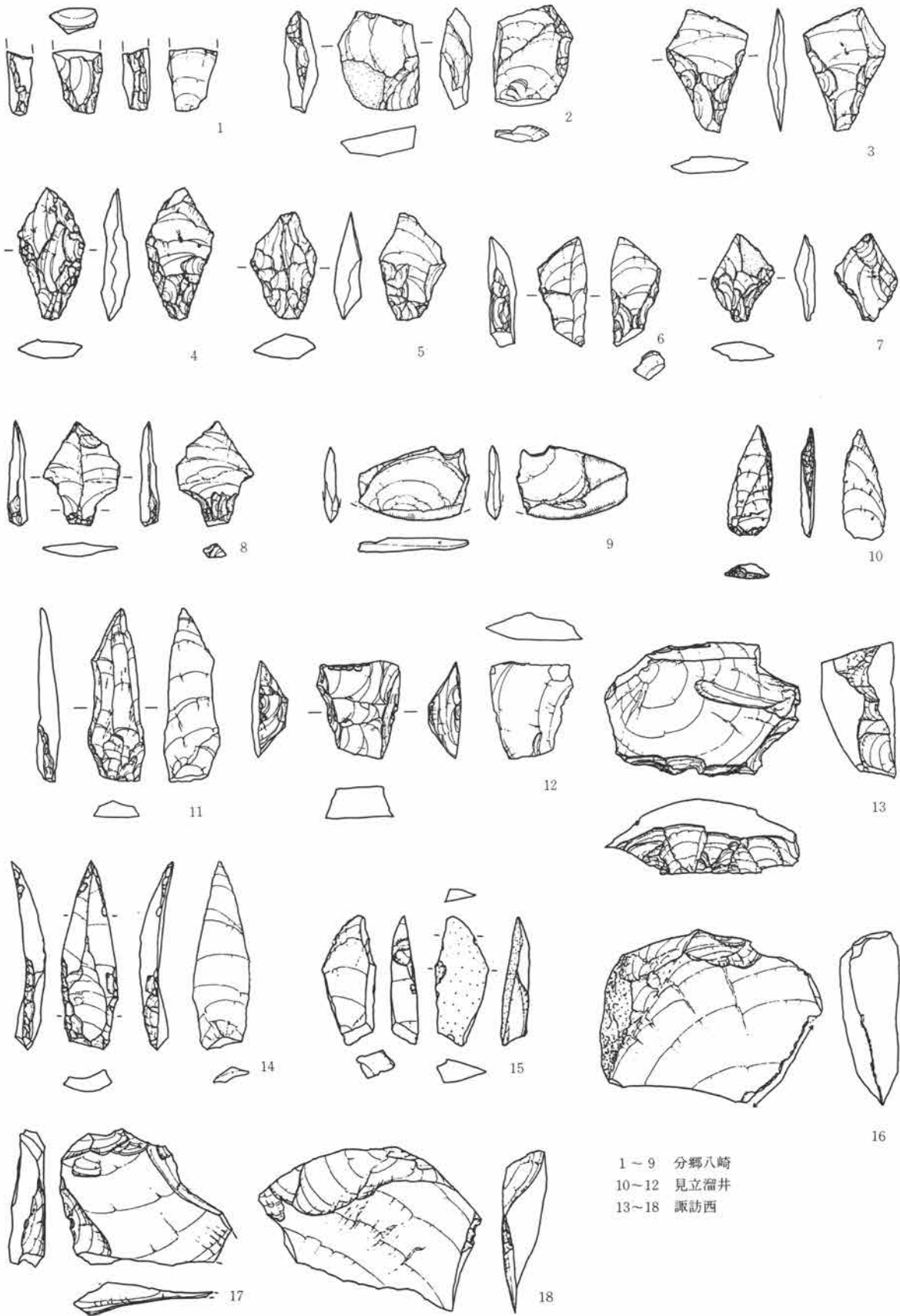
勝保沢中ノ山遺跡の周辺には、諏訪西・房谷戸・分郷八崎・見立溜井など5ヶ所の旧石器時代遺跡が存在する。ここでは、AT降灰以前の暗色帯より出土する石器群を分析し、石器群を類似点と相違点を示す。

諏訪西遺跡には総計301点の石器が出土する。縦長剥片を縦位使用するA群に分類されるナイフ形石器が1点(第219図14)出土する。報告者の御教示によれば、このナイフ形石器には直接の接合関係は存在しないものの、接合資料-No.21(報告の記載No.)と同一の母岩別資料に分類されること、接合資料(No.21)の空白部を埋め、接合する可能性があること、などが予想されるという。接合資料-No.21には、総計15点に及ぶ剥片が接合し、90°打面転移を伴い、縦長の剥片を作出している。このうち、1点(第219図15)には、基部側の両側縁に折断面が形成され、また、一方の側縁には微細な剥離が存在することからB群のナイフ形石器に分類される可能性がある。剥片剥離は90°の打面転移を伴い、打撃面と作業面を頻繁に移動し、剥離作業をおこなうことが出土石核や接合資料により推定される。第220図は、互いに接合する関係にはない剥片の形状、および、接合資料-No.21を構成する剥片の形状を示す集成図である。集成図に示す剥片形状より、縦長剥片を目的に剥片を剥離するということが理解され、大形の剥片を削器(第219図13・16~18)に、剥片形状の良好な縦長剥片をナイフ形石器のA群やB群(第219図14・15)に、それぞれ用いるようである。

分郷八崎遺跡には、ナイフ形石器A群(欠損資料であるため明確でないが、二側縁加工のナイフ形石器である可能性が高い。第219図1)、ナイフ形石器B群(菱形に近い石器の形状を呈すII類を主体とし、I類を組成する。第219図2~8)、局部磨製石斧の他に、削器が出土している。B群の場合には、素材剥片を作出する段階で、背面上にある稜線を剥片の端部に取り込み、尖状部を作出し、機能部とする。裏面基部に特徴的な平坦剥離手法を施す局部磨製石斧を伴う段階の代表的石器群である。剥片剥離は90°の打面転移を伴い、打撃面と作業面を頻繁に移動し、剥片を剥離する。この剥離作業により作出される剥片のうちの、大形の剥片は石核の素材(盤状石核)として用いられることも多く、素材剥片の作出と石核素材の作出は分化した状態にはない。

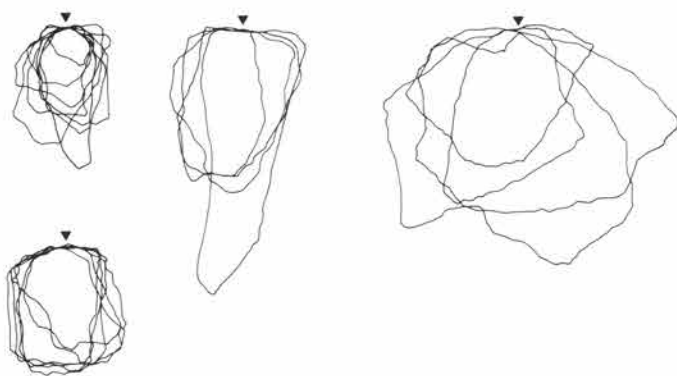


第218図 ローム層の堆積状態



第219図 赤城山西麓出土の石器

III 成果と今後の課題



第220図 諏訪西遺跡出土の剥片形状

出土石核は多面体石核や盤状横長剥片素材の石核が存在する。

見立溜井遺跡には、ナイフ形石器A群(第219図10・11)およびナイフ形石器B群(第219図12)が出土している。A群には基部加工のナイフ形石器のほか、側縁加工に近い先端を斜めに大きく断ち截る先端加工のナイフ形石器が、一方、B群には縦長剥片を横位使用し、側縁に急峻な調整加工を施すナイフ形石器が、組成する。剥片剥離の実態は明確ではない。

c. 石器群の編年的な位置づけ

県内出土石器群の多くは、遺跡内で層位的な石器群の前後関係を確認することの可能な事例に乏しいため、石器群の漸移的な変質を把握、石器群を位置づけることが極めて難しい。そこで、自身の論考では層位的な出土資料を型式学的に分析した須藤氏の成果(須藤 1986)に従い、「調整加工技術の発達に伴い複合的な調整加工技術から単一的な調整加工技術に変遷する」という調整加工技術の変遷を指標(佐藤 1988)とし石器群を位置づけ、変遷過程を呈示した。その結果、多様性に富む調整加工を施し、基部加工のナイフ形石器(A群I類)を主体とする一群、背部加工を主体とするほかに、平坦剥離手法などの調整加工も多いナイフ形石器の諸形態を組成する一群、背部加工を主体に調整加工を施し、ナイフ形石器A群の諸形態が組成する一群、への変遷過程が指摘された。以上の指摘に加え、ナイフ形石器A群およびナイフ形石器B群の共伴関係を踏まえることにより、石器群の段階的な変遷が指摘され、西麓では、分郷八崎出土石器から勝保沢中ノ山出土石器(A区)や見立溜井出土の石器への変遷を呈示することができた(第6表)。ここでは、上述した石器群の変遷観に従い、勝保沢中ノ山遺跡(A区・B区)より出土した石器を編年的に位置づけ、呈示しておく。

勝保沢中ノ山遺跡・両地点より出土する石器群の中でA区出土のナイフ形石器の場合、A群では背部加工を主体に調整加工を施し、B群では剥片を横位に使用し台形状ないし切出状を呈す石器(I類)が主体を占め、剥片の用い方や石器の形状は背部加工を主体に調整加工を施し、ナイフ形石器の諸形態が組成する後田遺跡より出土する石器に類似する。A群には石器組成の一部欠落、ないしは、B群には平坦剥離手法を施す事例が存在するなど、刃潰し加工の確立している後田遺跡出土石器に比べ、古期の様相を呈しやや先行する傾向が窺われるものの、石器群の組成上の類似性が指摘されよう。一方、B区出土のナイフ形石器には、A群の組成はみられないが、剥片を横位使用し、台形状を呈すB群が存在する点でA区出土のナイフ形石器に共通する。しかし、すでに明らかなように、A区では広義の石刃技法を技術基盤とする石器群に特徴的な単設、ないし、両設の平坦な打面より剥離をおこなう手法が主体を占め、B区では90°打面転移をおこない、剥離作業をおこなう手法を主体とするほかに、多様性に富む剥離手法が存在するなど、両地点では、剥片剥離の在り方が著しく異なる。B区の剥離手法は諏訪西遺跡の剥離手法に類似するといえる。一方、諏訪西遺跡より出土する石器群の場合には、資料数量が不足することから、位置づけは極めて難しい。A群のナイフ形石器(第219図14)は背部加工が完成した状態を示すこと、B群のナイフ形石器(第219図15)は2:1前後の長幅比を示し、古段階の「縦長・台形状」を呈す石器形状から新段階での「横長・台形状」を呈す石器形

赤城山南麓 +	赤城山西麓 +	北毛地域 +	西毛地域 +	小田 I a
牛伏・和田		+		I b
藪塚 (武井)	分郷八崎 +		+ 古城	
		大竹・善上	北山	
+	勝保沢・(見立)	+		I c
		後田		
峯岸	+	+	+	II a

第6表 県内出土石器群の変遷

状への変質(岩崎 1988)がB群 I 類に指摘されるということに従うなら、諏訪西遺跡出土の石器群は分郷八崎の段階を遡り古く位置づけられる可能性はないといえよう。

したがって、勝保沢中ノ山遺跡の二地点より出土する石器群は、A区出土の石器群が後田遺跡直前段階に、B区出土の石器群が分郷八崎遺跡以後、勝保沢中ノ山遺跡(A区)以前の段階に、位置づけることができる。

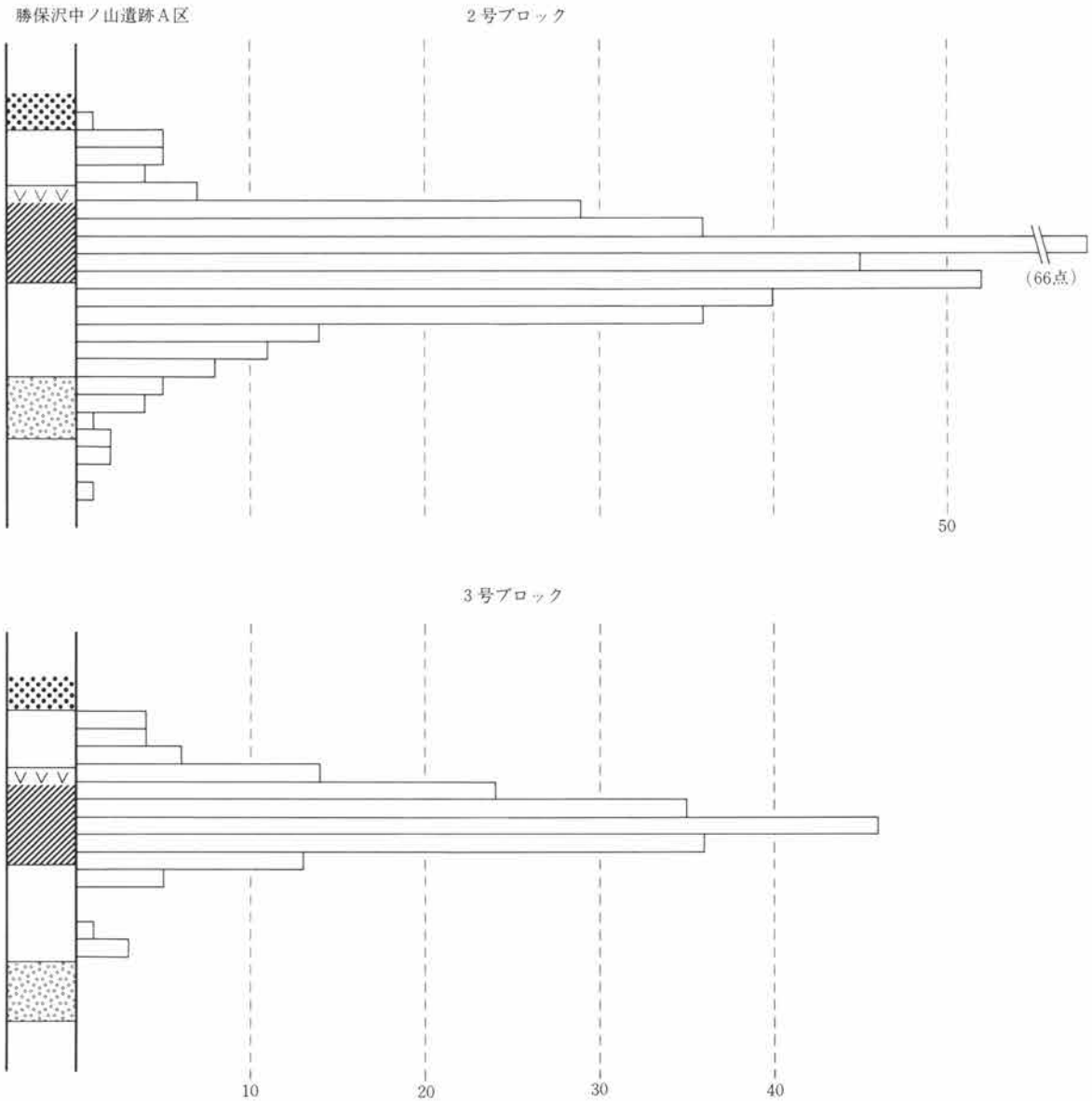
石器の出土状態と石器石材

a. 石器の出土状態

群馬県内には多くの火山が存在し、地域を単位に様々な状態にテフラが堆積する。そのため、地域を越え、各遺跡のテフラを直接対比することはできないが、As-SP・As-BPやATなどのテフラを同定することで、容易に土層対比が可能ではある。旧石器時代遺跡の調査が進行するのにしたがい、赤城山の南麓や西麓、県北の三峰山麓などを単位とする地域では「ほぼ同様な土層の堆積状態を示す」ということを確認しており、隣接する遺跡では、石器群の相対的な上下関係は出土石器の新古を示し、出土するのではないかとすることも容易に^{註1}想定されよう。上述の想定の下にここでは、勝保沢中ノ山遺跡と同様に西麓に立地し、石器群が暗色帯より出土している分郷八崎遺跡と比較するため、遺物の分布曲線を作成し、出土層位と垂直方向での遺物分布状態の関係を検討した(第222図)。

勝保沢中ノ山遺跡では、垂直方向での石器の出土状況を確認するため、石器が集中するブロック(A区；2号ブロック・3号ブロック、B区；3号ブロックおよび6号ブロック・7号ブロック)を対象とし、それぞれ垂直方向での遺物の分布と層序との関係を呈示した(第221・222図)。石器の出土地点が台地傾斜に位置するため、地形の傾斜に沿うよう1m幅に石器の投影部分を限定し、石器を投影した。その結果、分布曲線はいわゆる「ヴィーナス曲線」を描き、A区・2号ブロックおよび3号ブロックではXVI層中位が出土量の極大値となることが、B区ではXVI層下位が出土量の極大値となることが、それぞれ示された。一部では、XIV層(板鼻褐色軽石)やXVIII層(八崎火山灰層)を越え石器が出土する状態もみられるようだが、石器を投影するうえでの地形の傾斜の問題の他に、土層の逆転(倒木址No2)のための石器の移動にも起因することが、2号ブロックでは指摘することができる。一方、分郷八崎遺跡では台地南端の遺物集中地点(Cブロック・Fブロッ

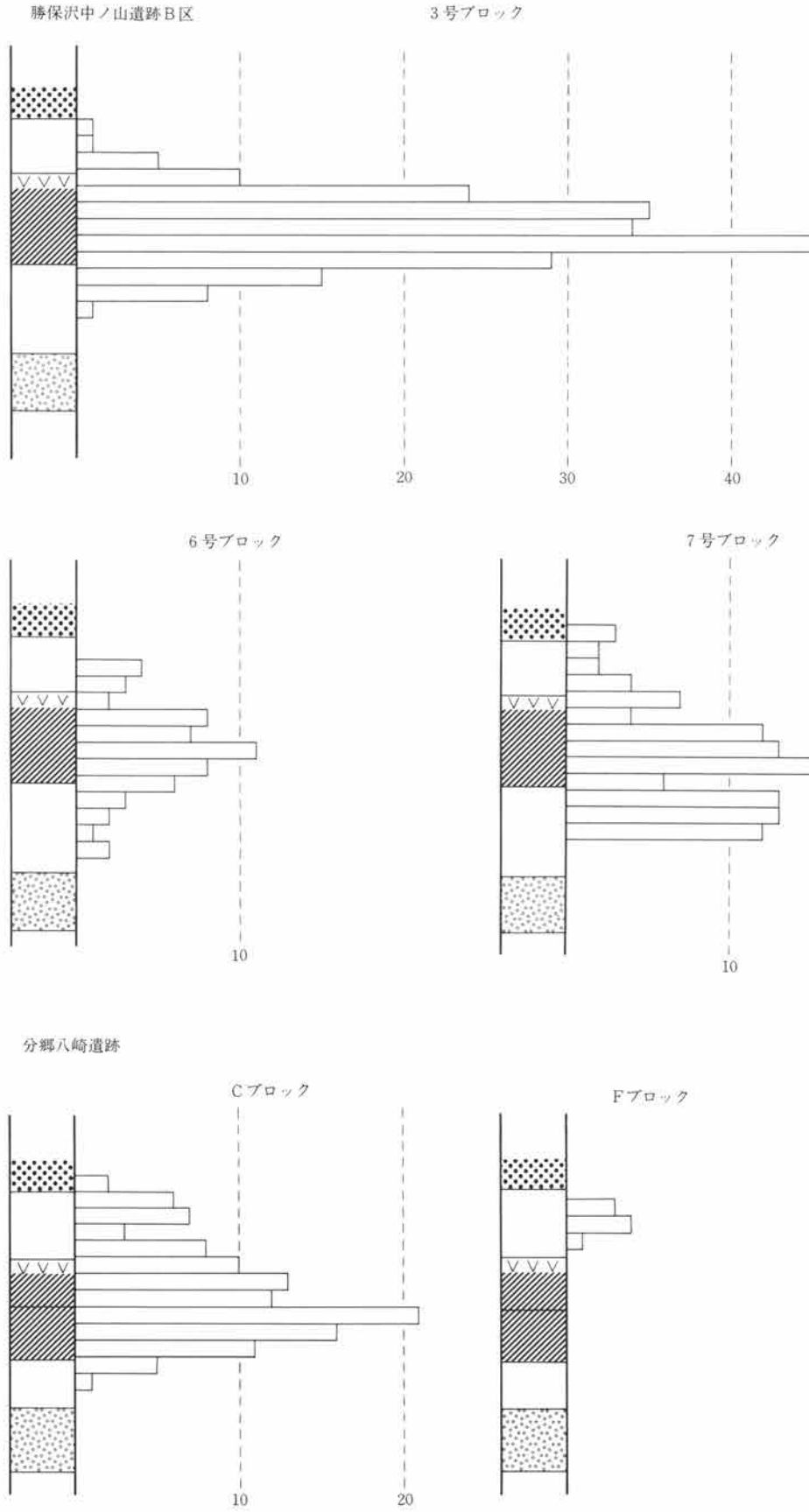
III 成果と今後の課題



第221図 土層堆積と石器の垂直分布(1)

クを対象に、垂直方向での遺物分布と層序との関係を検討した(第222図)。その結果、遺物分布曲線はいわゆる「ヴィーナス曲線」を描き、Cブロックが暗色帯の中位に、Fブロックが暗色帯の直上層の中位に、出土量の極大値を示すことが明らかとなった。報告書の折込図(報文中の第12図)にも示されるように、Fブロックを除き、いずれのブロックも暗色帯の中位に遺物が最も多く出土する。FブロックはA～EブロックやH～Iブロックとは、相違する出土状態を示し、このブロックのみ黒曜石を主体的に保有することから石器群の同時性には疑問が残り、文化層が重複する可能性が指摘されよう。

両遺跡出土石器群とも、暗色帯の中位に出土量の極大値が存在し、出土状態には顕著な相違は存在しないということが分析より指摘され、見事に上述の想定は外れた。層序の区分や堆積環境の相違など検討すべき課題は多い。現状では、石器群の段階的な変遷を出土状態より盲目的に把え判断するには問題を含み、遺跡内の相対的な上下関係や文化層(石器群)の重複を検討する材料として、限定的に取り扱うべきであり、県内



第222図 土層堆積と石器の垂直分布(2)

III 成果と今後の課題

旧石器時代遺跡で石器群(文化層)の重複が層位的に確認されない以上、石器群を総合的に分析し、石器群を構造的に把え、分析するというのが第一の課題であろう。

b. 石器石材

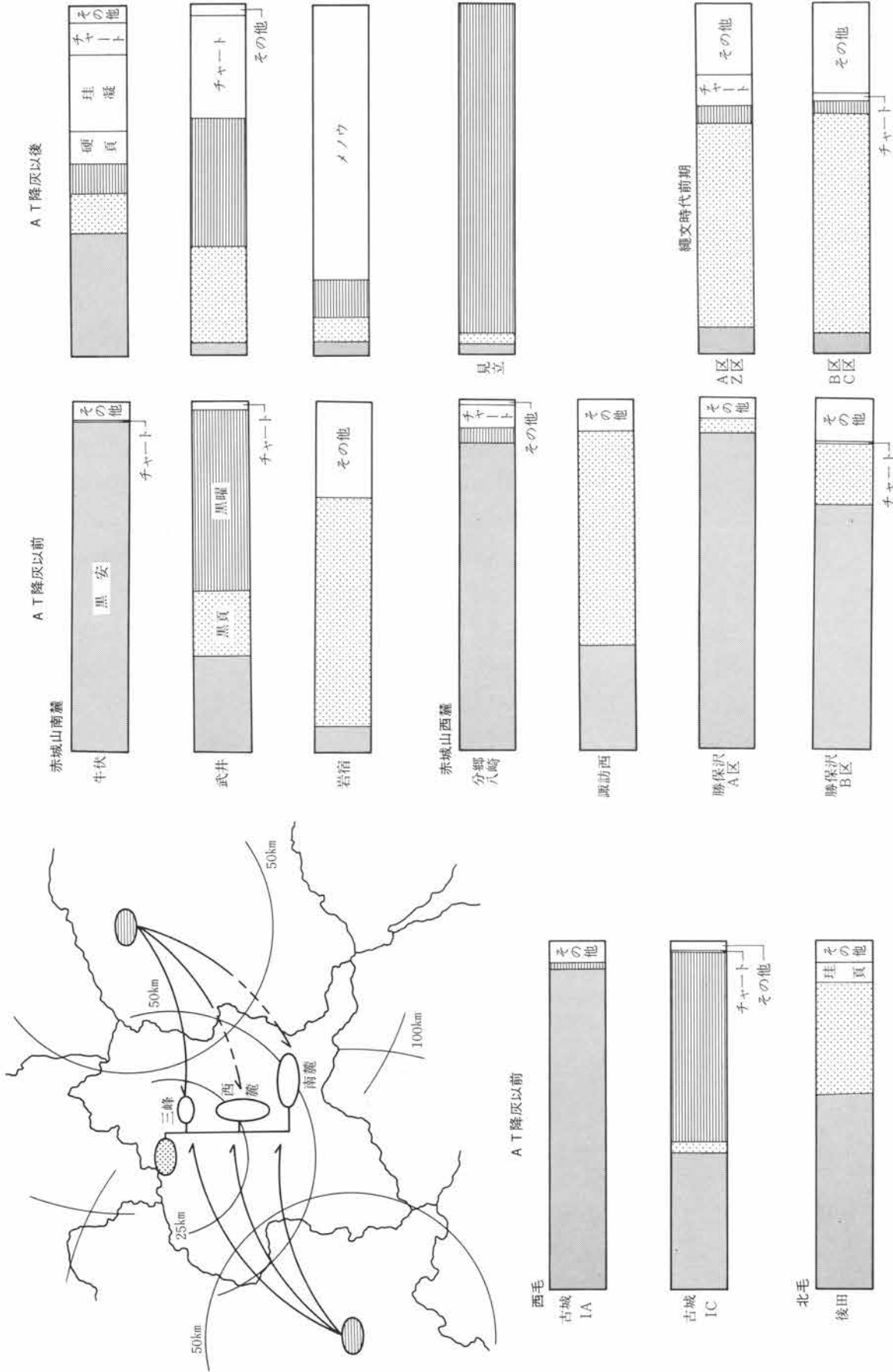
勝保沢中ノ山遺跡では、両地点ともに遺跡の周辺で採集が可能な黒色安山岩や輝石安山岩を主体に、三国山系の黒色頁岩や珪質頁岩、信州系の黒曜石などからなる石材組成を示す。黒色安山岩が主体を占める点では、赤城山の南麓や西麓に立地し、暗色帯より出土する石器群と同様な一般的な在り方を示すといえる。石材の在り方については、中東氏と飯島氏の県内産出石材を対象とした共同研究(中東・飯島 1984)を指針に分析される場合が多い。A T降灰以前の県内の出土資料についてはすでに分析(麻生 1987)があり、報文中で遺跡毎に石材組成の概要を指摘しており、ここでは、以上の成果を下に問題を整理し、検討する。なお、地域や時期を限定し分析するには資料的に不十分なため、ここではA T降灰以前と以後に分け、石材組成の在り方を呈示する。

第223図では、赤城山の南麓と西麓、北毛および西毛の地域に県内を大別し、さらに、A Tの降灰以前と以後に分け、文化層毎に石材組成を図化した。A T降灰の前後では石器に使用する石材の種類こそ類似するとはいえ、A Tの降灰以前では黒色安山岩などの在地系石材を多用すること、「広域交易石材」である信州系黒曜石などは希なこと、A T降灰以後では多様性に富む石材を用い石器が製作されるという傾向が指摘され、A T降灰前後には石材使用に画期が存在する。

在地系石材を多用するA T降灰以前の県内遺跡の中で、黒曜石の原産地に最も近い西毛の古城遺跡では、信州系の黒曜石を多く用い、この段階では著しく異なる石材組成を示す。しかしながら、古城遺跡には80mほど距離を隔て石器の出土地点が二ヶ所(1 A区・1 C区)にあり、1 C区では信州系黒曜石を、1 A区では黒色安山岩を多く組成するなど石材組成は相違する。現状では、資料数が不十分なため断定はできないが、古城遺跡(1 C区)と同様に南麓の武井遺跡でも黒曜石を多く用い、産出地からの距離に関係なく、黒曜石が遺跡に存在し、以上の傾向は石材の消費に際し石材の供給事情の差異が存在することを暗示するのかもしれない。A T降灰以後では、西麓の見立溜井遺跡では黒曜石を多く用い、全体の90%を越す。南麓では武井遺跡で全体の30%を、岩宿遺跡や牛伏遺跡で全体の10%を、黒曜石で占め、遺跡間で黒曜石の使用頻度は多様性に富む。単位的な石器群の分布範囲が調査されているかどうか必ずしも明らかではないが、各遺跡間で格差が存在する。見立溜井や武井では原石を搬入し、一連の石器製作工程の存在が想定されるものの、岩宿や牛伏は石器の搬入あるいは二次加工など工程が限定され、石材の供給事情に差異が存在するということを示す。以上のA T降灰以降の傾向は、A Tの降灰以前の様相に類似し、後述する野川流域に所在するA T降灰以後の遺跡とは、多様性に富む石材を使用する点では類似するものの、黒曜石の組成率(依存率)は著しく異なり、黒曜石ばかりでなく珪質頁岩や珪質凝灰岩など珪化の顕著な石材を多用する点で相違すると言える。

一方、黒色頁岩は^{註2}三国山系に原産地(第223図)が限定され、直接入手するかどうか必ずしも明らかでないが、在地系石材ほど容易に入手が可能な石材ではない。段階や地域を越え、黒色頁岩の多寡が生じるのは黒曜石の場合と同様に、石材供給事情の差異がその根底には存在したものといえよう。そのため、黒色頁岩の組成割合の相違が各遺跡間で生じ、「小地域内での交易」も想定されるような様相を呈してもいるのではないだろうか。

ところで、南関東地方武蔵野台地に所在する遺跡を対象に石材組成を検討した稲田孝司氏は、石材の入手過程に関し学説(稲田 1984)を呈示し、武蔵野第VI層段階以後、黒曜石の組成率(依存率)が増大すること、石材入手のシステムが確立すること、を指摘している。武蔵野台地での石材入手システムの有無や入手形態存



第223図 石器石材の入手と石材組成

III 成果と今後の課題

否とは別に、第VI層・A Tの降灰前後を境に石材組成は変質し、多様性に富む石材を使用している。以上の傾向は群馬県内の旧石器時代遺跡と同様な傾向を示し、野川流域での黒曜石の依存率の上昇は第VI層段階以後の旧石器時代人の行動範囲が広範な地域に及び、産出地と消費地の密接な交流が存在したということを示している。また、氏の言う「部族長的役割」(稲田 1984)を担う鈴木遺跡では、第VI層段階以後だけではなくそれ以前より黒曜石の保有率は他遺跡を凌ぐ数量を保有することから、鈴木遺跡の担う役割は変わることなく、継続するかのようにもみえ、すでに、石材入手システムが確立しているともとれ、A T降灰前後では集団構造や居住形態の変質が予想されるものの、石材組成の変化のみから石材入手の在り方まで規定することができるのか疑問な点が多く、様々な視点からの分析を要し、課題は多い。また、鈴木遺跡の性格については、拠点的な集落とする考え方あるいは単位的な石器群の集合とする考え方、など賛否両論があり、ここで、鈴木遺跡の性格を検討するのは、自身には有り余る課題である。検討には別稿を準備しなければならないが、要は、第二の鈴木遺跡が群馬県内にも存在するのか、あるいは、稲田氏の指摘されるような状態が県内にもあてはまるのか、ということが現在の自身の問題意識であるということである。そうした意味では、古城遺跡や武井遺跡の黒曜石の在り方は社会背景や集団構造を知る上で重要な位置を占める筈で、遺跡周辺の石材組成の在り方については注視する必要がある、今後調査の進展が望まれるところである。

以上、群馬県内出土のA T降灰以前の石器群を分析する中で、言及することのできなかった問題を中心に若干の私見を述べてきた。資料不足や分析が不十分なため結論には遠い。現状で、旧石器時代の社会組織や石材入手システムを検討することはできないが、今後の課題としてここに確認しておく。(岩崎)

註

- 註1. 1982年の冬、前橋市東部の荒砥南部圃場整備事業に伴い北三木堂遺跡の調査で、ローム層を対象に調査を実施した。当時、岩宿遺跡や武井遺跡を除き詳細な層序を記述した文献は、その段階では公表されておらず、層序区分は岩宿・武井遺跡の層序や相沢・新井両氏の層序区分を下に、「三分法」に従い、細分する方向で分層を試行した。その後、県内各地より旧石器時代遺跡の調査事例の増加に従い、地域により土層の堆積状態は相違するが、赤城山麓や赤城山西麓、県北の三峰山麓などを単位とする地域では、「ほぼ同様な土層の堆積状態を示す」ということが明らかとなり、地域の基本層序を設定した(谷藤・麻生・岩崎 1982)。その結果、地域を越え出土石器を直接対比することは困難ではあるが、隣接する遺跡では出土石器の新古が石器群の相対的な上下関係を示し出土することを、基本層序の設定当時、予想した。
- 註2. 縄文時代には結晶片岩を多用する地域(県南西部)・チャートを多用する地域(県南東部)など、石材選択上の地域性が生じ西麓に立地する遺跡では黒色頁岩の使用頻度が増大し、前代とは相違する石材使用の実態が指摘されるようになる。縄文時代前期の勝保沢中ノ山遺跡では4,200点中2,600点を黒色頁岩が占め、黒色安山岩の使用頻度は減少する。周辺遺跡でも同様な傾向が集落の規模や時期の相違にかかわらずみられる。
- 註3. IX層段階の黒曜石の出土数量は、高井戸東遺跡ではIX上で4点(全体の2.5%)、IX中で19点(0.1%)、IX下で1点(0.4%)、多聞寺前遺跡ではIX層で61点(全体の11.1%)、武蔵台遺跡IではIX層で4点(全体の4%)である。いずれも鈴木遺跡IX層の2,094点(全体の5.4%)をうまわることはない。

ブロックの形成と遺跡の構造

—A区出土石器の分析を中心に—

1. はじめに

旧石器時代遺物は特定の地点に集中して出土する場合が多い。一般に、遺物の集中地点はブロックと呼称され、通常有意ある遺物集中地点と捉え、あらゆる分析の単位に汎用している。石器群の同時性については、厳密な意味での課題や問題は予想されるものの、接合関係や母岩の分類を通し、よくよく検討され、集落の継続利用が希で、一般には、「移動生活を頻繁に繰り返す」という時代の特性もあり、問題となるような混乱はないかのようにもみえる。しかし、背景として人間集団を想定するとき、どの程度まで実態が明確なのかという実態の不明な点も多く、些か、議論は停滞しているというのが現状であろう。明確な遺構に乏しく、出土遺物が石器に限られるという制約の中で、遺跡の構造は様々な視点から分析すべきであるが、集団の構造や動態は母岩の分類を通し分析検討するという分析手法を汎用することで、はじめて実現可能であるといえよう。現実には、上述した意識と裏腹に、母岩の分類が困難な場合も多く、また、石器の搬入や石材の消費など、正確に断定して報告記述できない場合も多い。幸い、勝保沢中ノ山遺跡・A区出土石器は良好な出土状態を示し、かつ、これまでになく確実な母岩の分類が可能で、そうした意味では、遺跡や集団の構造実態に迫り得る資料といえよう。ここでは、勝保沢中ノ山遺跡・A区出土石器の分析を中心に、ブロックの形成と石材の消費の在り方を示し、集団の構造について、二三の問題を指摘する。

2. A区出土石器の分析

勝保沢中ノ山遺跡A区では、調査区西側(台地南側斜面)および調査区東側(台地北側斜面)の2地点に石器の集中部が検出され、調査区西側の集中部では1,600点前後の石器が2ヶ所のブロック(2号ブロック・3号ブロック)を形成し、調査区東側の集中部ではおよそ10点ほどの石器が散漫な状態にブロック(1号ブロック)を形成している。接合作業の結果、66例に及ぶ接合資料が確認され、接合率は全体の四分の一(24.9%)にも達する。このなかには、原石の状態まで復元が可能な資料も多く、そのため、これまでになく確実な母岩の分類が可能で、出土資料には22種に及ぶ母岩別資料が抽出されている。一方、調査区西側および調査区東側の2地点の集中部には石器の分布状態や器種組成の在り方が相違し、調査区西側所在の2号・3号ブロックには石器の製作空間の様相を、調査区東側所在の1号ブロックには石器の使用ないし消費空間の様相を看取することができる。と同時に、両地点間には50mほど距離を隔て接合する資料や同一の母岩が存在するなど石器群の同時性については疑問を差し挟む余地は無い。なお、東側の遺物集中地点および西側の遺物集中地点には、直線距離で50mという広範な遺物の空白地域が存在し、単に、場の機能の相違として判断するのは困難で、時間の経過と共に、ブロックが形成される^{註1}ということ^{註1}を推定しておく。ここでは、A区出土資料を中心にブロックの形成と石材の消費について分析検討することとしたい。

a. 石器と原石(石核)の搬入

西側集中地点(2号ブロックおよび3号ブロック)には、遺跡外部で製作し搬入した石器や、原石の状態で遺跡外部より搬入した石核素材が存在する。搬入石器としては、2号ブロックにはナイフ形石器(第12図3・5)が、3号ブロックにはナイフ形石器(第12図2・4)や削器(第16図28)のほかに、加工痕ある剥片(第17図33)・使用痕ある剥片(第19図39)がそれぞれ組成する。石核素材としては、2号ブロックには8個体(第226図)

III 成果と今後の課題

が、3号ブロックには12個体(第226図)が、それぞれ組成する。いわゆる搬入石器には、黒色頁岩や珪質頁岩ないし黒曜石を素材とする石器が相当し、黒色安山岩は全く存在しないということが指摘されよう。また一方では、3号ブロックには黒色頁岩が6個体存在するのに対して、2号ブロックでは黒色頁岩が2個体存在するのにとどまり、黒色頁岩の量比は相違し、必ずしも均質な状態にないということが、指摘されよう。

一方、東側集中地点(1号ブロック)には、2号ブロックから2点の剥片(母岩別資料・黒色安山岩-3)を、3号ブロックから2点の剥片(母岩別資料・黒色安山岩-5)を、それぞれ搬入するほか、黒色安山岩-5に分類される削器(第16図30)が存在する。原石や石核の搬入は存在せず、ブロックには剥離作業の痕跡は確認できない。

ブロックの周辺には搬入石器も多く、と同時に、加工痕ある剥片・使用痕ある剥片・縦長剥片など完成した状態の石器が出土する場合が多い。

b. 母岩の消費と母岩の共有

第224・225図に明らかなように、母岩の分布状態には単一のブロックに分布する場合と複数のブロックに分布する場合の分布上の二様態がある。ここではまず、単一のブロックに分布する母岩と複数のブロックに分布する母岩に分け、各々の母岩の消費状況と共有状態を示す。

単一のブロックに分布する母岩

2号ブロックに分布する母岩；黒色安山岩-3・4・9・10

黒色頁岩-3・6

3号ブロックに分布する母岩；黒色安山岩-1・5

黒色頁岩-1・2・4・5・7・8

輝緑岩-1・2

頁岩-1

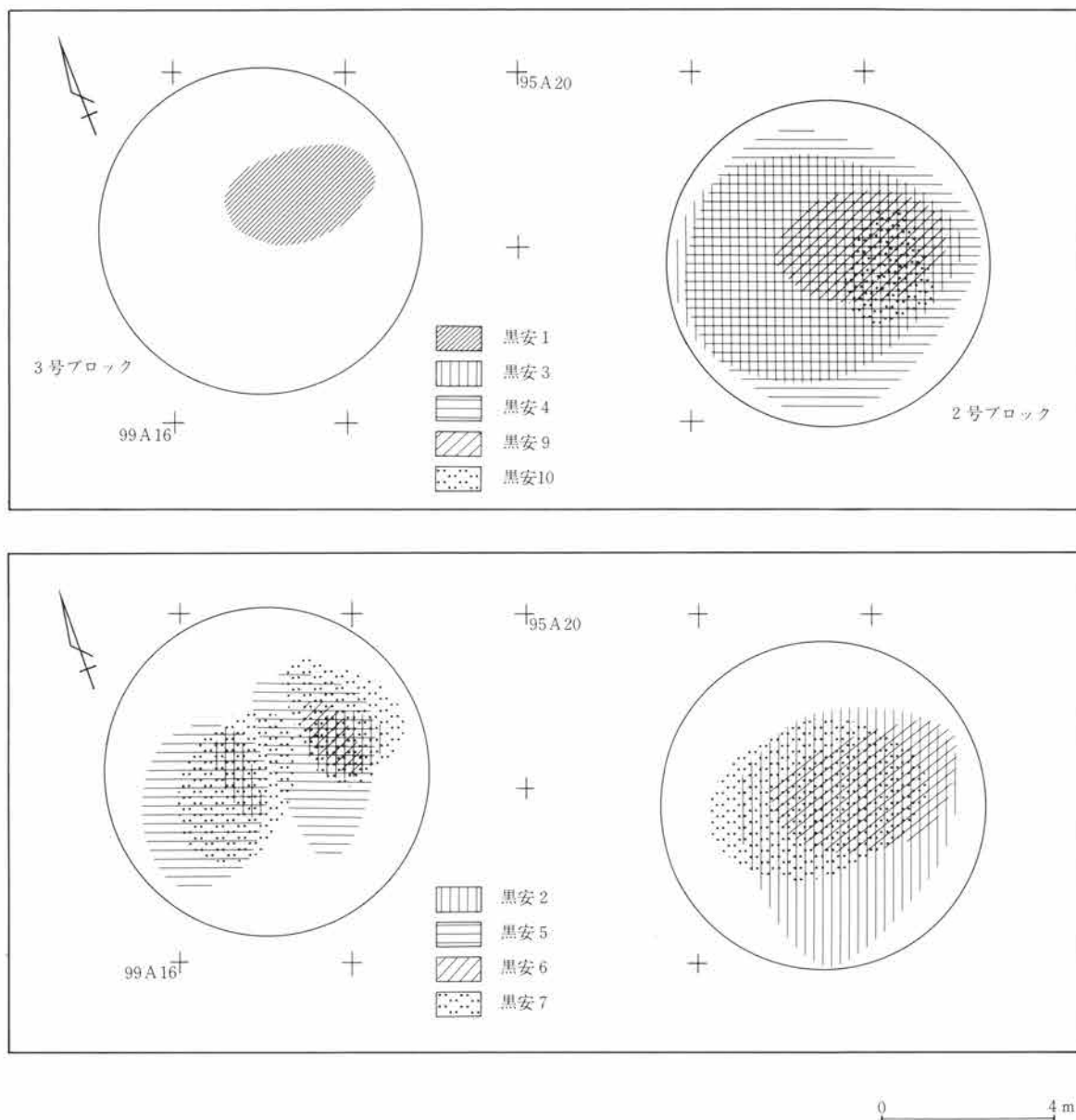
複数のブロックに分布する母岩

黒色安山岩-2・6・7

珪質頁岩-1

母岩の消費状態；接合作業の結果、原石の状態まで復元の可能な資料も多く、母岩別資料・黒色安山岩-1(接合資料A-1)・黒色安山岩-4(接合資料A-19・20)・黒色安山岩-5(接合資料A-16)や黒色頁岩-2(接合資料A-50)、輝緑岩-1(接合資料A-66)・輝緑岩-2(接合資料A-65)、の6個体を原石の状態で遺跡外部より搬入している。黒色安山岩-1・黒色安山岩-4は共に原石を分割するものの、黒色安山岩-1の場合には、分割した一方の石核では剥離作業をおこなうことなく石核が放棄され、黒色安山岩-4の場合には、剥片剥離の初期段階で剥離作業を終了している。黒色安山岩-5の場合には、原石の $\frac{1}{2}$ を残し、剥離作業を終了する。また、搬入段階の状態は明確でないものの、黒色安山岩-2の場合には石核の $\frac{1}{2}$ を、黒色安山岩-3の場合には石核の $\frac{1}{2}$ を消費するということが接合状態より想定されよう。なお、黒色頁岩の場合には剥片剥離工程の一部を示す資料が多く、石核を消費する割合は低い。10点を越す同一の母岩は存在せず、石核は遺跡外部へ搬出されることが圧倒的に多い。

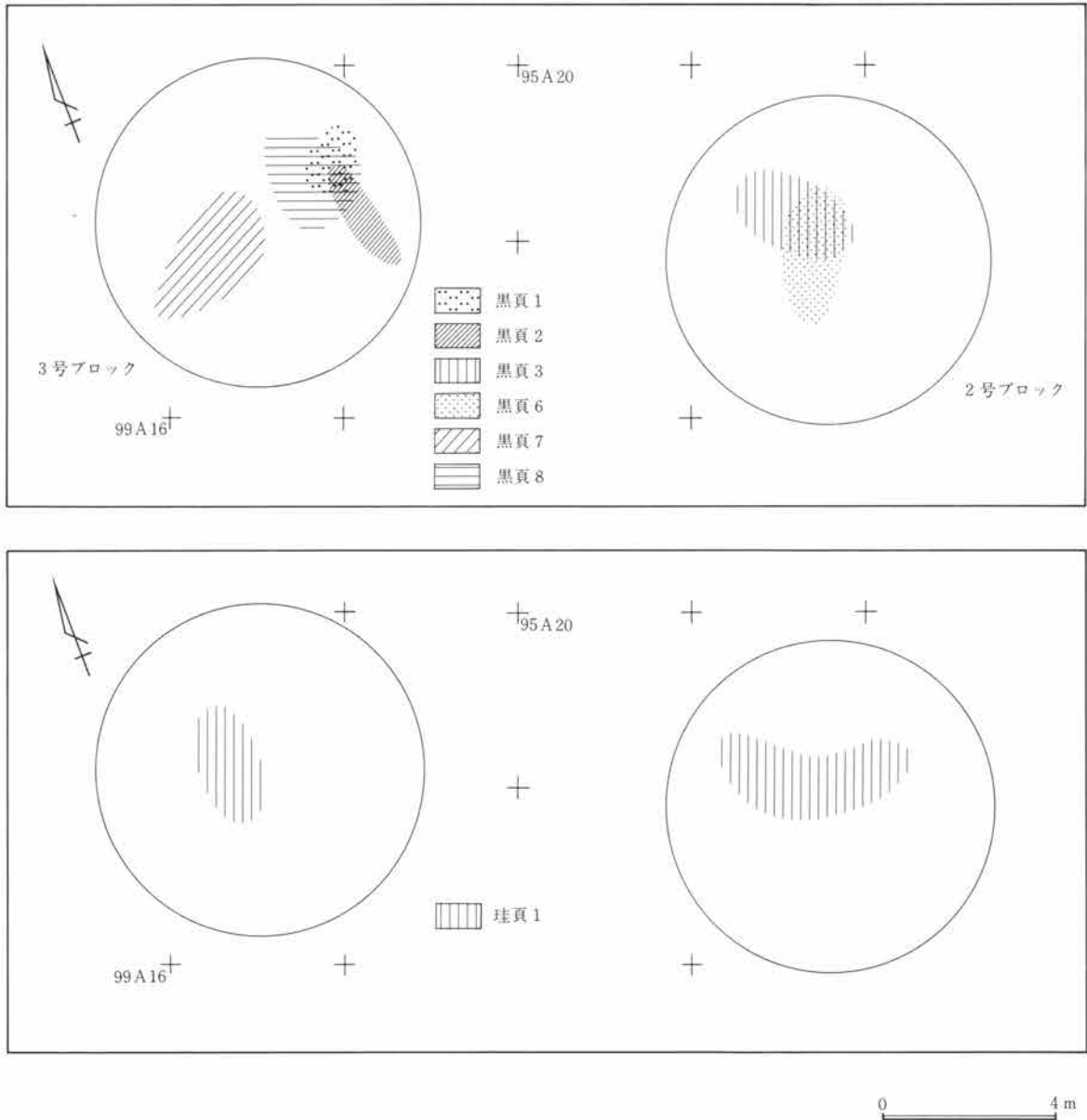
母岩の共有状態について；2号ブロックおよび3号ブロックには4種の母岩(母岩別資料・黒色安山岩-2・6・7、母岩別資料・珪質頁岩-1、第224~226図)を共有する。母岩別資料・黒色安山岩-2(接合資料A



第224図 母岩別資料の分布1 (A区)

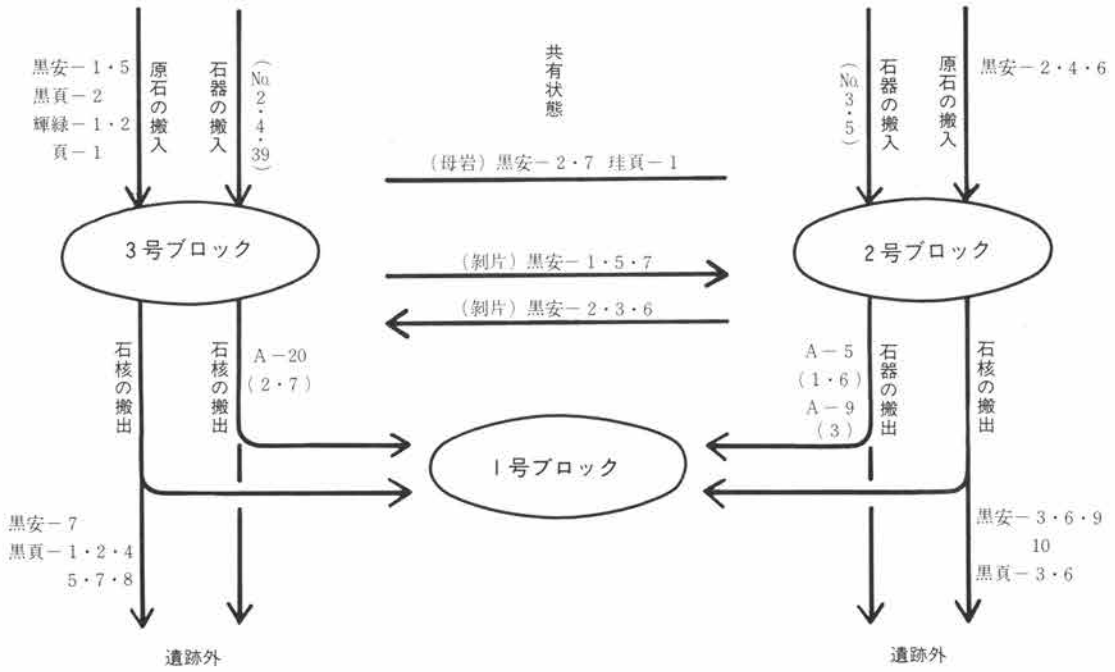
ー2)は、2号ブロックを主に、3号ブロックを従に分布し、2号ブロックの内部で頻繁に接合する。3号ブロックとの間には接合関係が確認されていない。3号ブロックには剥片や碎片が存在するため剥片剥離がおこなわれたということは明らかであるが、原石を四分の一ほどに分割するため3号ブロック出土の剥片や碎片の存在が母岩を移動し、遺存したものなのかどうか、あるいは、原石を分割する段階で別々の石核を用意し、それぞれ独立した状態で剥離作業がおこなわれたものなのかどうか、判然としない。黒色安山岩ー2の場合と同様に黒色安山岩ー6(接合資料A-32・35)の場合には、2号ブロックに分布の主体が存在し、3号ブロックに少量の剥片や碎片が出土している。両ブロック間で接合する資料も存在せず、また、石核の搬入状態も明確ではないため、資料の遺存理由は判然としない。以上の事例に示されるように、その遺存状態は不明な場合が多いが、黒色安山岩ー7(接合資料A-36・37・38)の場合には、両ブロック間で明確な分布の

III 成果と今後の課題

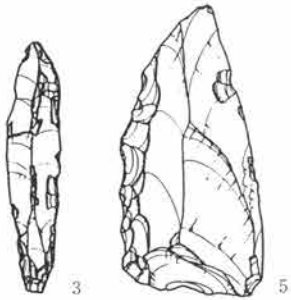


第225図 母岩別資料の分布 2 (A区)

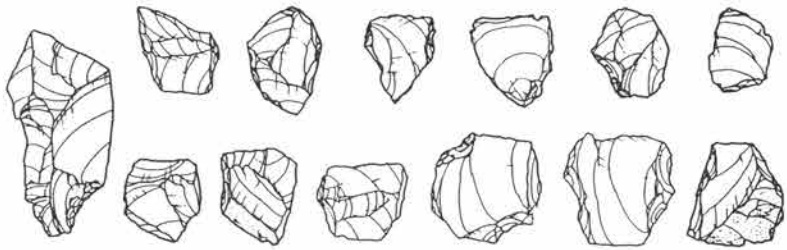
相違が存在するため、分布の解釈は容易である。^{註2}母岩は3号ブロックを主に、2号ブロックを従に、それぞれ分布する。それぞれのブロックを比較した場合、2号ブロックに比べ3号ブロックでは碎片が圧倒的に多く分布するなど、分布状態の相違は剥片剥離の作業地点を示す可能性が強い。珪質頁岩-1の場合には、2号ブロック・3号ブロックともに搬入石器(ナイフ形石器・楔形石器)と碎片が組成し、均質な器種組成を示す。2号ブロックより出土した加工痕ある剥片(第15図24)と楔形石器(第16図29)は、右側縁の折断面で接合する可能性が強く、出土した碎片の形状はナイフ形石器の製作に伴う、「ブランディング・チップ」とは相違することから、素材剥片を搬入した後、分割され、それぞれのブロックで加工されたものといえよう。



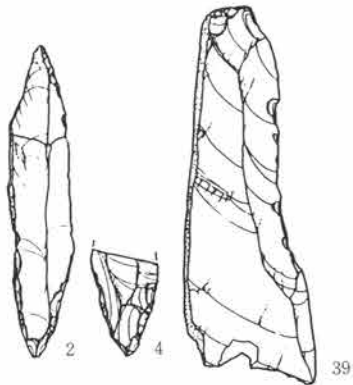
2号ブロックに搬入された石器



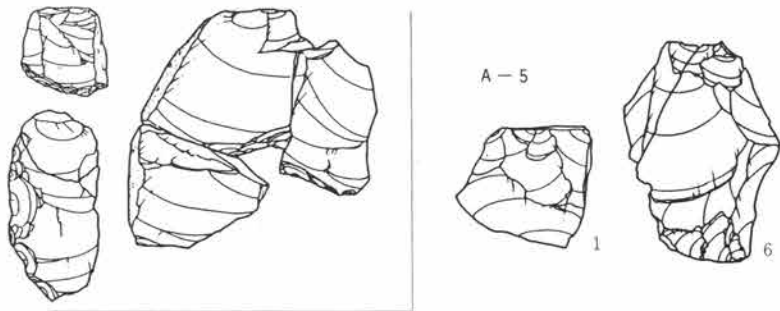
2号ブロックで製作された石器



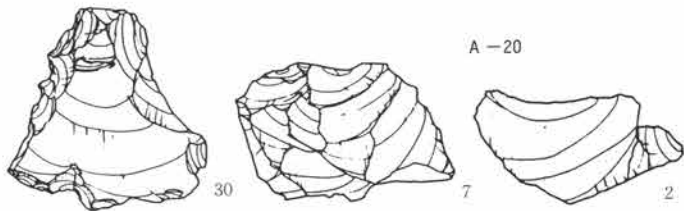
3号ブロックに搬入された石器



3号ブロックで製作された石器



1号ブロックに搬入された石器



第226図 石器の搬入と石材の消費

III 成果と今後の課題

c. ブロックの構造と性格

以上、石器や原石(石核)の搬入および母岩の消費と共有関係について、2号ブロック・3号ブロックでの在り方を中心に指摘した。上述の在り方を時間的経過の下に石器の動態を位置づけるならば、第226図上段のように表現されることになろう。ここでは、以上の状態について記述したい。

まず、西側の集中部分の2号ブロック・3号ブロックでは、黒曜石を除き黒色頁岩や珪質頁岩を素材に製作された石器を均質に組成し、石器の搬入というレベルで対等であることを示している。一方、石核の遺存数量は2号ブロックで3個体(黒色安山岩3個体)、3号ブロックで5個体(黒色安山岩2個体・黒色頁岩1個体・輝緑岩2個体)で、石核の保有というレベルでは相違が存在するようにもみえるが、一般的に輝緑岩が石器石材には用いられないことを考慮し、原石の状態で搬入した資料に限り比較するならば、2号ブロックには黒色安山岩4個体を、3号ブロックには黒色安山岩2個体・黒色頁岩1個体・頁岩1個体・輝緑岩2個体を、それぞれ搬入しており、原石の搬入というレベルでさえ、両ブロック間の対等な関係を示唆する。そしてさらに、各母岩の分布状態は、母岩がブロックに帰属し、ブロックで石器が製作されるということを反映・示唆するものであるが、母岩別資料・黒色安山岩-7の分布状態(付図5)は、3号ブロックに石核と共に多量の碎片が、2号ブロックにナイフ形石器を含む剥片が、それぞれ分布していることから、2号ブロックではナイフ形石器が製作されたものの、3号ブロックではナイフ形石器が製作された痕跡が存在しないということを示し、専ら素材剥片を作出したものとみることができる。上述の分布状態は石核や石器の「譲渡」・「交換」というような状態ではなく、石器製作の在り方は石器や原石・石核の搬入というレベルでの対等な関係とは相違する。

両ブロック間には、母岩別資料・黒色安山岩-1・5や母岩別資料・黒色安山岩-3・6が、共に一方のブロックを主に、一方のブロックを従に、それぞれ分布する。主体的な分布域(ブロック)からの移動であるものの、これらがいずれも移動する必然性のない剥片であることは注目される。

東側集中地点の1号ブロックにはブロックの内部で剥離作業がおこなわれたような痕跡はなく、総計12点の出土石器には、2号ブロックを主体に分布する接合資料A-5・A-9(母岩別資料・黒色安山岩-3)や3号ブロックを主体に分布する接合資料A-20(母岩別資料・黒色安山岩-5)や母岩別資料・黒色安山岩-5に分類の可能な削器(30)など、12点中6点は西側集中地点(2号ブロック・3号ブロック)からの搬入資料であることが明確である。西側集中地点と東側集中地点は50mの距離を隔て位置し、上述の6点の資料が意図的・人為的な行為の下に1号ブロックに齎されたということは明確で、西側の集中地点に剥離の作業地点が在る頁岩(第24図57、76-A-21)が東側集中地点に存在するということを含め評価するならば、活動の拠点を西側集中地点から東側集中地点へと移動したことが想定される。

3. 単位的石器群との比較検討

ここでは、集団の連続した同一地点での生活の結果、遺存した一群の一括遺物を単位的石器群と認定し、母岩の共有や消費が明瞭な単位的石器群として砂川遺跡を取り上げ(第227図)、勝保沢中ノ山遺跡(A区)と比較する。そして、石器や石材の搬入の在り方など類似点と相違点を呈示し、さらに、集団構成の在り方の相違を指摘する。砂川遺跡の場合、研究者により把え方は若干相違するようであるが、本稿では、第54回日本考古学協会での発表に従い、検討する。

石器や原石(石核)の搬入というレベルでは、勝保沢中ノ山遺跡の場合、黒曜石を除き、搬入石器は2号・3号ブロックに均質に存在し、また、原石の状態で搬入した資料に限り比較するならば、2号ブロックには

4 個体を、3号ブロックには6 個体(輝緑岩 2 個体を含む)をそれぞれ搬入しており、一般的に輝緑岩が石器石材には用いられないということを考慮するならば、原石の搬入というレベルでさえ両ブロック間の関係が均質に維持されているといえる。接合資料はブロックの内部で接合する場合が多い。一方、砂川遺跡では、遺跡内部で制作した石器や石核の「石器保有の均一化^{註4}」が指摘され、また、接合資料の分布状態はブロックの内部で接合する場合が多く、各々の母岩は共通した分布状態を示す。以上、石器・原石の搬入や接合資料の分布という点で、両遺跡ともに類似した様相を呈す。

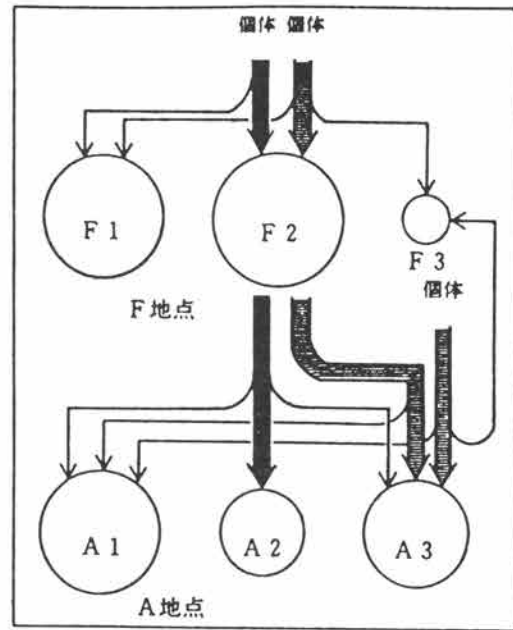
石器の製作や組成というレベルでは、勝保沢中ノ山の場合、2号ブロックではナイフ形石器の製作を主体に若干量の削器類が作出されるものの、3号ブロックではナイフ形石器を作出した痕跡は存在せず、削器などの加工具が多く作出され、両ブロック間には顕著な相違が存在する。また、技術基盤である剥片剥離の在り方は、ともに広義の石刃技法を主体に剥片が剥離されるものの、縦長剥片剥離手法と横長剥片剥離手法は2号ブロックでは同一の母岩に共存するのに対し、3号ブロックでは同一の母岩に共存することなく、それぞれ別々の母岩に独立した状態で存在するなど相違する。一方、砂川遺跡では加工具類の組成頻度は希で、剥片剥離手法には強い斉一性が看取されるため直接比較することはできないが、器種組成の良好なA地点では、ナイフ形石器の諸形態が組成し、A1~A3のブロックが均質であることを示している。

両遺跡から出土する石器群には、石器の分布状態が同様であるのをはじめとし、石器や石材の搬入などに類似点が指摘されるものの、石器の組成や母岩の消費に相違が存在し、砂川では剥離作業がブロックに帰属する場合が多く、ブロック相互が共に組成上自立的であるのに対して、勝保沢中ノ山では一方のブロックで素材剥片を、一方のブロックで石器を作出すること(母岩別資料・黒色安山岩-7)、1号ブロックには2号ブロックや3号ブロックに分布する剥片が共存することなど、ブロック相互が補完的に存在する実態を良く示す。母岩の共有や接合資料の存在する厳密な意味で石器群の同時性が明確な単位的な石器群でさえ、上述した相違が存在し、遺跡の形成過程は相違する。

両遺跡から出土する石器群には、石器の分布状態が同様であるのをはじめとし、石器や石材の搬入などに類似点が指摘されるものの、石器の組成や母岩の消費に相違が存在し、砂川では剥離作業がブロックに帰属する場合が多く、ブロック相互が共に組成上自立的であるのに対して、勝保沢中ノ山では一方のブロックで素材剥片を、一方のブロックで石器を作出すること(母岩別資料・黒色安山岩-7)、1号ブロックには2号ブロックや3号ブロックに分布する剥片が共存することなど、ブロック相互が補完的に存在する実態を良く示す。母岩の共有や接合資料の存在する厳密な意味で石器群の同時性が明確な単位的な石器群でさえ、上述した相違が存在し、遺跡の形成過程は相違する。

4. 今後の課題

遺跡の構造分析には母岩の分類検討は欠くことのできない分析手法であるが、母岩の分類が困難な場合も多い。そのため、資料数量を確保し、遺跡構造の様々な様態や変質が明確に把握されないのが現状でもある。以前、考古学研究会では集団の構造や居住形態について「集団論」をテーマとして取り上げ、そこでは、様々な視点から様々な問題を提起した(近藤 1976、春成 1976、小野 1976)。近藤氏や春成氏は、血縁を紐帯に固定的な集団構造を、小野氏は流動的な集団構造を、それぞれ想定するなど、集団の捉え方は必ずしも一致しないようであるが、単位集団が日常生活の単位であること、単位集団は離合集散すること、などでは一致する。各氏とも遺跡分布や規模・石器組成や接合のほか、諸外国の住居址などの具体例を引き分析してはい



第227図 砂川遺跡に於ける石材の消費過程
(栗島 1988)

III 成果と今後の課題

るが、問題は考古資料や分析手法を以て、どこまで実証が可能なのかを呈示するということである。そうした意味では、第54回・日本考古学協会での発表(栗島 1988)には、母岩の消費や石器の移動を通し、単位的石器群の形成や構造を把握、有意ある成果を獲得したといえることができる。そこでは、石器の接合は「ブロックを越え、頻繁な接合関係」を示し、「A・Fそれぞれの地点で収束する」という傾向、また、「特定のブロックに石核や剥片が集中する」という傾向を指摘し、同時存在する^{註3}ブロックは石器を「譲り合う」関係が存在し、石器の保有が均一な状態に保たれるということ、より詳細に具体例を以て指摘した。そしてさらに、同一の母岩が地点を越え存在することから、集団の移動や世帯の分裂を推察した。以上の指摘がどこまで普遍性を示すことになるのか類例の増加を以て検証しなければならないが、同様な状態は勝保沢中ノ山遺跡でも確認され、生活や移動あるいは生産活動を行う最小の単位集団の実態を普遍的に示す可能性が強く、単位的石器群には石器や母岩の搬入・保有ならびに母岩の消費(石器の製作)など、均質な状態を示す二三の単位(「世帯」)が存在するのではないかという想定が少なからず可能となろう。また一方では、砂川と勝保沢中ノ山の相違は同じ最小の単位集団でも集団を構成する世帯の拘わり方の相違、あるいは、相互の依存状態の相違を示唆するのではないか、ということが指摘される。

また、上述した近藤・春成の両氏とも集団の離合集散を指摘し、「集団狩猟活動」を契機とする集団の集合を想定している。この場合には、「複数世帯の同時存在」(小野)を証明しなければならないが、そのためには、砂川遺跡と同様に母岩の共有や消費を徹底的に分析し、具体的にデータを示す必要性を自身痛感している。現実には、この操作に耐え得る資料には恵まれないため分析不能な場合が多く、推測の域を越えない点も多々ある。しかし、近年の調査事例には集団の集合状態を想定するのに十分な石器の分布状態を示す調査事例も確認されはじめている。出土石器は母岩別資料の分類が困難な黒色安山岩を多用するため、母岩の共有や消費は必ずしも明らかではなく慎重でなければならないが、群馬県内では赤堀町・下触牛伏遺跡や北橋村・分郷八崎遺跡の「環状ブロック」が上述の状態に相当する石器の分布状態を示す。自身報告した下触牛伏遺跡では、石器の接合はブロックの内部、あるいは、隣接するブロックの間に存在する場合が多く、さらに、熱を受け破損した剥片や礫の出土地点、および、配石や搬入石器の出土地点は環状ブロックの内側に突出する同一地点(15号ブロック)に存在した(岩崎 1986)。石器の接合状態や遺跡の内部で製作したナイフ形石器の分布は砂川や勝保沢中ノ山と同様な傾向が窺われるものの、搬入石器が均質に存在することなく特定の地点に偏在する状態は砂川や勝保沢中ノ山の状態とは相違する。以上の類似点と相違点は集団構成の相違を示すのではないかと推察も可能で、下触牛伏には受熱剥片の存在から火処の存在が1ヶ所に予想されること、搬入石器が配石や火処の想定地点と一致すること、などからこの地点には搬入石器や獲得食糧の分配を行う広場(共有地点)としての機能が予想されよう。以上の状況は、牛伏の搬入石材が集団を統率する人物からこの共有地点で各々の世帯に分配される以前の状態を示すのではないかとすることを容易に想定させるものであり、集団が集合した場合の規範や規制の在り方を示しているのではないと思う。

以上、単位的な石器群の二様態を代表的な事例を以て指摘した。比較検討した事例には母岩の共有や消費の単位が存在し、ブロック=母岩の搬入・消費=^{註6}「世帯」というような関係が成り立つ。しかしながら、隣接するブロックの間で、「頻繁な接合関係を持つ」というように表現される状態の場合、母岩の分類が碎片には適用できないということを考慮するならば、石器の分布地点すなわち石器の製作地点との解釈には問題が多く、地点を頻りに移動し剥片を剥離するとの解釈は生産性の面で妥当性を欠き、蓋然性の高い解釈とは言い難い。遺跡の形成過程は不明な点も多い。現状では、遺跡は様々な過程を辿り、形成されるということが予想され、一様に律することは避けなければならない。そこでまずは、第一に、単位的な石器群を対象に資料集積

を行い、単位集団が遺跡を形成したのか、複数の単位集団が遺跡を形成したのか、というような観点で時間的・段階的^{註7}の相違を明確にする必要があり、そしてさらに、何が普遍的な事実で何が特異性のある事実なのか明確にすることで、はじめてそこから社会の復元や集団の変質が記述される可能性が生じるのではないかと思われるのである。

5. おわりに

以上、勝保沢中ノ山遺跡の出土資料を整理分析する中から、若干の問題意識の下にブロックの形成と遺跡の構造を分析した。その結果、石器や原石の搬入・原石の消費が均質な状態を示す点からはじめて世帯が規定され、単位集団は二三の世帯から構成されるのではないかとことを指摘した。そしてさらに、狩猟採集社会の中で、単位集団は協業形態を維持する、と同時に、居住形態、および、世帯相互の拘わり方に時間的・段階的な変質を予想した。用語の規定や分析資料の吟味など、不十分な点や推測の域を越えない点が多々ある。分析手法の呈示も必要だが、一定の方法に従う分析検討も必要と思い、本稿を草した。浅学ゆえに誤解も多く、先学諸氏の御教示・御批判を戴けたなら、このうえない喜びである。(岩崎)

註

- 註1. 調査区東側の遺物の集中地点、および、調査区西側の遺物の集中地点には、接合資料や同一母岩が存在することから石器群の同時性は確実で、疑問を差し挟む余地は無い。東側の遺物の集中地点には石器を製作した状況にはないこと、東側および西側の集中地点出土の石器には接合関係が存在することから、西側の遺物集中地点から東側の遺物集中地点への石器の移動は明確だが、「石器の製作も生活の一部」で「居住生活の場所がすなわち石器製作の場所」であるということから推察するなら、両地点間には広範な遺物の空白地帯が存在するなど、単に、場の機能の相違とは判断し難い。両地点の遺物集中地点は時間差を以て形成された可能性が想定されよう。
- 註2. 接合資料や同一母岩が複数の地点に互り分布する場合、剥片剥離の作業地点の認定なくして、接合資料や同一母岩の分布状態を正確に判断することはできないであろう。剥離作業地点の特定は破片の存在を以て認定すべきである。しかしながら、破片は母岩の分類が困難な場合が多く、そのため、作業地点の移動(石核の移動)については、慎重に分析検討されなければならない。母岩別資料・黒色安山岩-7の場合、母岩の分類が希に容易で、分布状態の相違が作業地点の相違として確認された。
- 註3. 砂川遺跡ではA・Fそれぞれの地点で石器の集中地点を確認している。A地点およびF地点から出土の石器が同時存在するかどうかについては、同時存在したとみる見解(小野 1976、安藤 1978)と前後関係を以て形成されるという見解(稲田 1977)の他に、同一集団が否かという相反する見解がある。筆者には非常に微妙な問題を問う上述の見解に対し、断定して判断する根拠を持ち合わせてはいない。ただ、A地点・F地点の同時存在については、母岩Na7や母岩Na10にはF地点からA地点へ移動が想定されるという点で、A地点からF地点への逆の移動が存在しないかぎり、F地点からA地点への分与と見做され、集団に上下関係を想定しなければならない状況にもなりかねないであろう。そして、この見解が正しいとするならば、石器石材の搬入や獲得食糧の分配が等質な状態とは著しく異なることになり、歴史的原則に反することになるだろう。
- 註4. 下触牛伏遺跡・第I文化層(佐波郡赤堀町)を構成する石器にも同様な傾向が指摘されよう。牛伏出土の珪質頁岩や硬質頁岩などには遺跡の内部で剥離された痕跡がなく、いずれも遺跡外部より搬入された可能性が高い。以上の状態は素材剥片の搬入というレベルでもブロックの対等な関係を示唆するのではなからうか。
- 註5. 3号ブロックには、母岩別資料・黒色安山岩-1・5・7が分布するほか、黒色頁岩-3・6を除く母岩が存在する。出土資料及び接合資料から、黒色安山岩を素材にナイフ形石器が製作されたという痕跡はない。黒色頁岩の場合には、縦長の剥片を多く含む、その可能性を完全に否定できない状況にあるもの、各々の母岩から剥離される資料が数点で、接合状態より想定される剥片の存在も無く、母岩を消費する頻度は低い。しかし、素材剥片を作出し、遺跡外部へ搬出したことまで否定している訳ではない。現状では、以上の諸点が指摘されよう。
- 註6. 砂川遺跡では、ブロックを単位に母岩の消費と石器を「譲り合う」均質な関係が、勝保沢中ノ山遺跡では、石器や原石の搬入あるいは母岩の消費に均質な関係が、それぞれ存在するため、ブロック=世帯という関係を見出し、分析した。ブロックを基準とする分析は当然のことであるが、あらゆる場合に上述の関係が成り立つ訳ではない。あくまで母岩の消費や石器の移動(搬入)などから背景として世帯が想定されるということに留意する必要があるだろう。
- 註7. 武蔵野IX・X層の段階に特徴的に存在する環状ブロックには、集団の離合集散状態の内の集合状態を良く示す事例であるといえよう。この段階以後には同様な事例は存在しないようであるが、はたして集団の集合状態を示す事例は存在しないのだろうか。A T降灰以後の段階の大規模遺跡では、同一の母岩や接合資料の分布から同時存在が否定される場合が多く、また、小群に区分されることが多い。出土状態も牛伏の様な共有地点(広場)の存在を示唆する状況にはなく、不明な点が多い。しかしながら、砂川遺跡で指摘される石器の製作ないし母岩の消費実態(母岩がブロックに帰属し、ブロックで石器が製作される)からするなら、同一母岩や接合資料の分布からだけでは居住状態や集落の観景を説明するには不十分であるということも明確で、石器や原石の搬入あるいは母岩の消費の単位を把握、関連分野の成果を含め総合的に分析すべきである。背景としての世帯を考慮することなしには、集落観景の復元あるいは社会復元は困難であることを指摘しておく。

III 成果と今後の課題

引用参考文献

- 「初音ヶ原B遺跡」「三島の遺跡」1987年 三島市教育委員会
「後田遺跡(旧石器編)」1987年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
「下触牛伏遺跡」1986年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
「古城遺跡」1988年 群馬県安中市教育委員会
「中畦遺跡 諏訪西遺跡」1986年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
「分郷八崎遺跡」1986年 北橋村教育委員会
「見立溜井遺跡 見立大久保遺跡」1985年 赤城村教育委員会
「富山県大沢野町野沢遺跡発掘調査報告書〈A地点〉」1982年 平安博物館編
「高井戸東遺跡」1977年 高井戸東遺跡調査会
「多摩蘭坂遺跡」1980年 国分寺市教育委員会
「多聞寺前遺跡II」1983年 多聞寺前遺跡調査会
「武蔵台遺跡I」1984年 都立府中病院内遺跡調査会
「栗原中丸遺跡」1984年 神奈川県立埋蔵文化財センター
「群馬県史 資料編1」原始古代1 旧石器・縄文 1988年 群馬県史編さん委員会
安斎正人 「斜軸尖頭器石器群からナイフ形石器群への移行ー前・中期 後期旧石器時代過渡期の研究ー」『先史考古学研究』 第1号 1988年 阿佐ヶ谷先史学研究会
稲田幸司 「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』 30-4 1984年 考古学研究会
「旧石器時代の小集団について」『考古学研究』 24-2 1977年 考古学研究会
岩崎泰一 「AT降灰期前の石器群ー県内出土石器群の分析ー」『群馬の考古学』 1988年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
「ローム層中に見られる逆転層の存在とその意味について」『研究紀要』 2 1985年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
岡村道雄 「日本前期旧石器時代の始源と終末」『考古学研究』 23-3 1976年 考古学研究会
小野 昭 「後期旧石器時代の集団関係」『考古学研究』 23-1 1976年 考古学研究会
栗島義明 「砂川先土器時代遺跡の構造ー先土器時代遺跡の形成と集団構成についてー」『日本考古学協会第54回総会 研究発表要旨』 1988年 日本考古学協会
近藤義郎 「先土器時代の集団構成」『考古学研究』 22-4 1976年 考古学研究会
佐藤宏之 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』 第73巻 第3号 1988年 日本考古学会
白石典之 「分郷八崎遺跡の石器群をめぐる二、三の問題」『群馬県史研究』 第26号 1987年 群馬県史編さん委員会
杉原荘介 「群馬県岩宿遺跡発見の石器文化」『明治大学文学部研究報告』 考古学 第1冊 1956年 明治大学
「群馬県武井における二つの石器文化」『明治大学文学部研究報告』 考古学 第7冊 1977年 明治大学
須藤隆司 「群馬県藪塚遺跡の石器文化(ナイフ形石器の型式学的考察)」『館報』 No.2 1986年 明治大学考古学博物館
谷藤保彦・麻生敏隆・岩崎泰一 「最近の先土器時代遺跡の調査から」『埋文月報』 8月号 1983年 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勅使河原彰 「縄文時代集落をめぐる問題」『歴史評論』 2月号 1989年 歴史科学協議会
中東耕志・飯島静男 「群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材ー黒色頁色と黒色安山岩ー」『群馬県立歴史博物館年報』 第5号 1983年 群馬県立歴史博物館
春成秀爾 「先土器・縄文時代の画期について(1)」『考古学研究』 22-4 1976年 考古学研究会
横山英介 「秋田県阿美多地遺跡出土の旧石器」『東北考古学の諸問題』 1976年 東北考古学会

計 測 値 一 覧 表

凡 例

1. 本遺物一覧表はA区およびB区出土の石器のうち、本書に図示した石器についてのみ、その計測値を掲載した。
2. 長さとは幅は、少数点第2位を四捨五入し、cm単位であらわした。
3. 重量は、少数点第3位を四捨五入し、g単位であらわした。
4. 「器種」の欄の略号は次のことを示す。

ナイフ：ナイフ形石器

加剥：加工痕ある剥片

楔形：楔形石器

使剥：使用痕ある剥片

縦剥：縦長剥片

5. 「石材」の欄の略号は次のことを示す。また、数字は母岩別資料の番号に一致する。

黒安：黒色安山岩

黒頁：黒色頁岩

珪頁：珪質頁岩

黒：黒曜石

頁：頁岩

輝安：輝石安山岩

閃緑：閃緑岩

輝緑：輝緑岩

チ：チャート

文斑：文象斑岩

点頁：点紋頁岩

石閃：石英閃緑岩

灰安：灰色安山岩

搬：搬入

計測値一覧表

A区出土の石器																		
遺物 番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石 材												
1	2	ナイフ	6.9	3.5	25.90	黒安	3	58	2	石核	8.4	10.1	498.00	黒安	3			
2	3	ナイフ	10.4	2.2	13.60	黒真	搬	59	2	石核	5.7	6.9	192.90	黒安	3			
3	2	ナイフ	8.4	1.9	16.51	珪真	1	60	外	石核	9.5	5.6	226.80	黒安	2			
4	3	ナイフ	3.6	2.2	5.80	黒	搬	61	2	石核	9.9	4.6	99.67	黒真	搬			
5	2	ナイフ	9.7	4.9	95.58	黒真	搬	62	3	石核	8.8	7.6	340.10	黒安	1			
6	2	ナイフ	1.7	2.2	2.47	黒安	3	63	2	縦剥	3.8	1.8	8.73	黒安	2			
7	2	ナイフ	2.6	3.1	9.36	黒安	3	64	2	縦剥	4.8	2.4	12.45	黒安	3			
8	3	ナイフ	2.8	1.8	5.10	珪真	1	65	2	縦剥	4.5	2.7	10.70	黒真	搬			
9	2	ナイフ	3.1	3.7	11.90	黒安	6	66	2	縦剥	6.8	2.4	10.00	黒安	2			
10	2	ナイフ	3.1	2.8	6.65	黒安	10	67	2	縦剥	3.8	2.3	5.72	黒安	2			
11	2	ナイフ	2.4	2.5	4.66	黒安	6	68	2	縦剥	4.2	2.2	10.29	黒真	搬			
12	2	ナイフ	2.7	2.6	4.46	黒安	3	69	3	縦剥	5.0	3.9	21.01	黒安	1			
13	2	ナイフ	3.3	2.2	8.54	黒安	4	70	3	縦剥	5.5	3.3	17.75	黒安	1			
14	2	ナイフ	3.7	2.5	4.97	黒安	7	71	2	縦剥	5.3	1.5	9.40	黒安	2			
15	2	ナイフ	3.0	2.8	7.74	黒安	3	72	2	縦剥	5.0	3.5	12.96	黒安	3			
16	2	ナイフ	3.7	3.8	19.18	黒安	10	73	3	縦剥	5.4	1.9	8.80	黒真	搬			
17	2	ナイフ	2.8	2.3	5.08	黒安	6	74	外	縦剥	6.6	3.0	17.30	黒真	搬			
18	2	ナイフ	3.8	3.8	15.90	黒安	4	75	2	縦剥	7.2	2.2	12.41	黒真	搬			
19	2	ナイフ	3.0	2.3	7.35	黒安	4	76	外	縦剥	7.1	3.5	32.20	黒真	搬			
20	2	ナイフ	3.0	2.7	6.55	黒安	4	77	3	縦剥	9.3	3.9	30.94	黒真	1			
21	3	削器	6.4	3.1	33.19	黒安	5	78	3	縦剥	8.5	2.4	12.61	黒真	搬			
22	3	搔器	2.9	3.0	9.41	黒安	5	79	2	縦剥	8.8	4.6	36.34	黒安	3			
23	外	加剥	3.5	6.0	22.70	黒安	2	80	3	縦剥	7.9	2.6	20.48	黒真	1			
24	2	加剥	2.4	1.7	1.94	珪真	1	81	2	縦剥	8.5	4.9	48.52	黒安	3			
25	2	加剥	1.5	1.3	0.80	黒真	搬	82	2	縦剥	8.9	5.5	108.92	黒安	3			
26	外	加剥	6.0	8.0	59.60	黒安	5	83	2	縦剥	9.5	3.9	30.57	黒安	6			
27	3	削器	4.4	5.4	54.44	黒真	5	84	外	縦剥	9.6	4.0	27.78	黒真	搬			
28	3	削器	8.3	5.1	90.31	黒真	5	85	外	縦剥	9.4	4.5	84.40	黒真	搬			
29	3	楔形	2.6	1.6	5.35	珪真	1	86	2	縦剥	7.7	3.2	23.32	黒安	2			
30	1	削器	6.8	6.7	61.57	黒安	5	87	2	縦剥	8.1	3.1	28.10	黒安	2			
31	外	加剥	8.4	2.7	26.20	黒真	搬	88	3	縦剥	12.4	3.9	53.19	黒真	搬			
32	3	加剥	7.9	3.6	20.53	黒真	1	89	2	縦剥	10.1	3.9	42.96	黒安	3			
33	3	加剥	10.4	3.4	45.70	黒真	8	90	2	縦剥	3.1	2.7	7.29	黒安	4			
34	2	加剥	5.0	3.4	16.72	黒安	3	91	外	縦剥	2.6	4.0	11.40	黒真	搬			
35	外	加剥	10.9	5.7	71.40	黒真	搬	92	3	縦剥	5.6	3.4	27.47	黒安	1			
36	3	使剥	4.9	3.8	9.32	黒安	7	93	3	縦剥	7.3	2.8	20.67	黒真	搬			
37	3	使剥	8.7	3.5	33.28	黒真	搬	94	3	縦剥	6.7	3.4	31.40	黒安	1			
38	3	使剥	10.4	3.3	35.40	黒真	搬	95	2	縦剥	3.9	2.9	7.90	黒安	3			
39	外	使剥	12.7	4.4	69.58	黒真	搬	96	2	剥片	3.2	2.3	6.00	黒安	5			
40	3	使剥	2.4	4.7	8.22	黒安	7	97	2	剥片	4.5	3.7	20.47	黒真	搬			
41	3	使剥	3.6	1.4	1.97	黒真	搬	98	2	剥片	3.7	3.1	9.80	黒安	3			
42	3	石核	5.5	4.7	50.07	黒安	4	99	2	剥片	4.0	4.4	7.43	黒真	搬			
43	2	石核	4.4	6.6	51.31	黒安	3	100	2	剥片	2.7	5.3	10.70	黒安	7			
44	3	石核	3.5	4.6	30.96	黒安	5	101	3	剥片	5.0	3.5	21.52	黒真	搬			
45	2	石核	5.3	7.4	85.06	黒安	4	102	外	剥片	6.7	3.1	7.80	黒真	搬			
46	3	石核	4.0	6.0	36.68	黒安	7	103	3	剥片	4.7	2.8	13.22	黒安	3			
47	2	石核	5.3	5.5	52.54	黒安	4	104	3	剥片	4.1	2.9	13.53	黒真	搬			
48	2	石核	2.6	3.6	7.21	黒安	4	105	2	剥片	6.1	2.9	20.10	黒安	4			
49	2	石核	6.6	6.9	108.29	黒安	5	106	3	剥片	6.6	3.9	17.61	黒真	搬			
50	2	石核	4.5	3.5	22.05	黒安	4	107	2	剥片	5.7	2.4	7.30	黒安	4			
51	2	石核	4.5	3.7	45.80	黒安	4	108	1	剥片	3.1	4.1	1.55	黒安	5			
52	2	石核	10.2	4.7	88.67	黒安	3	109	2	剥片	4.6	3.7	14.30	黒安	3			
53	2	石核	4.1	3.4	26.01	黒安	4	110	2	剥片	2.8	2.2	3.65	黒安	5			
54	2	石核	6.3	8.7	89.99	黒安	4	111	2	剥片	5.7	4.3	16.09	黒安	3			
55	3	石核	8.7	9.2	116.11	黒安	5	112	外	剥片	9.4	6.6	147.90	黒真	搬			
56	2	石核	4.7	6.2	103.49	黒安	3	113	2	剥片	3.9	3.8	14.61	黒安	3			
57	外	石核	5.6	9.0	640.50	真	1	114	1	剥片	3.9	4.1	17.20	黒安	5			
								115	2	剥片	3.7	5.0	17.05	黒安	4			
								116	2	剥片	4.7	4.0	16.45	黒安	安			
								117	2	剥片	8.0	5.6	64.09	黒真	搬			
								118	1	剥片	3.7	7.9	30.77	黒安	5			
								119	1	剥片	6.1	6.9	63.08	黒安	5			

A・B区出土の石器

遺物番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石	材
120	3	敲石	6.3	7.5	770.80	輝	安
121	3	敲石	9.0	7.1	447.00	閃	緑
122	2	敲石	9.1	8.0	408.80	輝	安
123	3	敲石	11.8	7.9	824.20	輝	安
124	外	敲石	11.9	9.9	1,045.50	輝	安
125	3	敲石	9.0	7.1	447.00	輝	安
126	外	磨石	17.3	9.4	1,372.60	輝	緑
127	2	磨石	10.7	7.6	578.30	輝	安
128	3	礫・搬	8.9	7.7	639.30	輝	安
129	3	礫・搬	7.0	9.9	379.50	輝	安
130	外	礫・搬	11.3	9.5	703.30	輝	安
131	2	礫・搬	16.0	13.3	2,371.00	輝	安
132	3	礫・搬	15.7	12.8	2,874.00	輝	安
133	3	礫・搬	15.9	14.7	1,825.00	輝	安

B区出土の石器

遺物番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石	材
134	6	ナイフ	2.2	2.6	4.19	黒	頁
135	6	ナイフ	2.9	2.5	5.93	黒	頁
136	外	彫器	4.1	2.0	8.71	黒	安
137	10	楔形	1.9	1.8	3.61	黒	安
138	2	楔形	3.5	2.2	10.30	黒	安
139	外	楔形	4.6	3.7	21.57	黒	安
140	3	楔形	3.3	2.9	9.32	黒	頁
141	2	楔形	3.3	3.5	10.09	黒	安
142	3	削器	6.3	3.4	35.69	黒	頁
143	7	削器	4.2	3.4	17.31	黒	頁13
144	3	削器	3.5	2.5	10.04	黒	安
145	6	削器	5.7	4.1	26.81	黒	安1
146	6	削器	5.4	4.0	36.90	黒	安1
147	6	削器	3.5	4.8	22.94	黒	安
148	3	削器	3.7	3.8	8.56	黒	安
149	6	削器	4.6	4.8	36.03	黒	安1
150	7	削器	2.7	3.2	11.84	黒	安
151	7	削器	3.8	4.4	17.60	黒	頁
152	7	削器	4.2	4.6	32.05	黒	安
153	3	削器	3.8	5.5	26.84	黒	安
154	外	削器	2.9	1.7	2.84	黒	安
155	9	削器	4.5	4.9	35.60	黒	頁
156	2	削器	7.6	5.2	66.97	黒	安
157	6	加剝	6.0	6.7	77.17	黒	安
158	2	加剝	8.0	2.9	21.56	黒	頁
159	外	加剝	3.5	3.3	10.93	黒	安
160	外	加剝	3.4	3.2	11.10	黒	安
161	6	加剝	5.6	4.7	39.65	黒	頁
162	6	加剝	4.4	2.8	16.57	黒	安
163	9	加剝	3.2	3.3	9.05	黒	頁
164	7	加剝	2.9	3.8	10.22	黒	頁
165	7	加剝	3.6	2.1	9.98	黒	安
166	3	加剝	3.0	1.5	4.93	黒	安
167	12	加剝	4.0	1.9	10.14	黒	安
168	6	加剝	3.1	3.1	7.65	黒	安1
169	2	加剝	4.9	3.3	21.72	黒	頁
170	6	加剝	5.6	5.2	33.03	黒	安1

171	外	加剝	4.6	2.9	15.07	黒	安
172	12	加剝	6.0	5.7	88.04	黒	頁
173	6	加剝	2.1	2.0	2.45	黒	安
174	9	加剝	2.1	1.5	1.65	黒	安1
175	7	加剝	2.1	2.7	4.13	黒	安
176	7	加剝	1.6	2.5	1.91	黒	安
177	3	加剝	3.0	7.1	32.03	黒	安
178	3	加剝	4.5	7.6	47.37	黒	安
179	3	加剝	3.6	7.4	29.33	黒	安
180	外	加剝	4.5	4.1	30.87	黒	頁
181	2	使剝	2.4	1.4	1.17	黒	頁
182	外	使剝	3.9	4.9	17.31	黒	安
183	6	使剝	2.5	3.0	4.70	黒	頁3
184	7	使剝	3.7	4.9	10.62	黒	頁
185	6	使剝	3.7	5.5	26.28	黒	頁
186	5	使剝	4.2	7.3	33.79	黒	安
187	3	使剝	5.8	2.8	16.02	黒	頁
188	1	使剝	7.5	6.7	38.57	黒	頁
189	3	使剝	9.6	6.8	141.57	黒	頁
190	6	使剝	5.8	4.2	18.56	黒	頁13
191	3	使剝	6.7	3.0	11.23	黒	頁
192	6	使剝	4.3	2.0	9.32	黒	頁3
193	3	使剝	9.2	7.3	403.60	閃	緑
194	3	使剝	8.9	4.5	51.74	黒	頁
195	6	石核	5.9	6.6	271.10	黒	頁
196	3	石核	3.0	4.8	38.97	黒	安1
197	11	石核	3.4	5.1	60.90	黒	安
198	12	石核	9.6	9.2	563.50	黒	安
199	11	石核	4.3	5.8	94.96	黒	安
200	9	石核	4.6	6.2	85.80	黒	頁13
201	3	石核	5.6	7.2	118.50	黒	安
202	12	石核	4.4	6.8	240.60	黒	頁
203	4	石核	4.3	8.2	108.94	黒	頁
204	12	石核	5.8	6.8	240.60	黒	頁
205	12	石核	9.6	8.3	469.70	黒	頁12b
206	6	石核	8.6	8.9	589.61	黒	頁16
207	外	石核	3.0	4.6	33.20	黒	安
208	6	石核	3.7	3.5	32.71	黒	安1
209	3	石核	3.5	4.7	48.97	黒	安1
210	6	石核	3.5	5.1	57.14	黒	頁11b
211	6	石核	3.5	3.2	39.21	黒	安1
212	6	石核	3.2	4.5	34.43	黒	安
213	11	石核	3.6	3.0	32.94	黒	安
214	外	石核	2.9	4.4	37.86	黒	安
215	7	石核	3.5	5.0	36.62	黒	安
216	9	石核	5.9	2.6	29.88	黒	頁11b
217	6	石核	4.3	5.5	55.37	黒	頁14
218	6	石核	2.7	5.1	38.13	黒	安1
219	7	石核	4.3	5.7	50.50	黒	安
220	9	石核	4.0	4.6	30.90	黒	安
221	6	石核	4.9	5.3	48.88	黒	安
222	7	石核	6.2	6.4	64.48	黒	頁
223	4	石核	8.3	7.9	113.53	黒	安
224	3	石核	11.4	5.7	167.10	黒	頁
225	3	石核	5.6	7.0	92.60	黒	安
226	7	石核	6.6	4.9	79.58	黒	頁13
227	3	石核	5.1	4.8	50.49	黒	安1
228	6	石核	2.6	5.2	78.27	黒	頁11b
229	6	石核	2.9	5.3	69.30	黒	頁11b
230	6	石核	3.6	6.9	146.46	黒	安
231	3	石核	6.0	9.1	156.72	黒	安
232	11	石核	7.5	9.0	565.74	黒	頁1

計測値一覧表

遺物 番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石	材									
233	7	石核	12.9	8.5	507.30	黒	頁		291	外	剥片	3.7	3.9	18.50	黒	安
234	3	石核	16.2	15.0	3,200.00	黒	安		292	9	剥片	4.1	4.4	11.71	黒	安
235	3	縦剥	4.4	1.8	4.12	黒	頁		293	11	剥片	4.8	4.8	40.88	黒	安
236	外	縦剥	4.6	1.9	2.30	黒	頁		294	7	剥片	5.9	5.5	65.42	黒	頁
237	7	縦剥	3.3	2.2	4.31	黒	安		295	3	剥片	6.5	5.7	60.50	黒	安
238	外	縦剥	5.6	1.9	10.41	黒	頁		296	7	剥片	4.8	5.4	24.75	黒	安
239	10	縦剥	7.1	2.6	16.77	黒	安		297	6	剥片	5.1	5.5	23.89	黒	安
240	7	縦剥	5.1	2.8	11.67	黒	安	1	298	7	剥片	4.6	5.0	50.51	黒	安
241	4	縦剥	8.9	5.2	102.53	黒	安		299	11	剥片	4.6	5.4	45.30	黒	安
242	3	縦剥	11.2	4.0	51.40	黒	頁		300	3	剥片	5.8	5.3	58.30	黒	安
243	4	縦剥	6.6	2.7	10.52	黒	安		301	5	剥片	2.8	2.1	2.79	黒	頁
244	9	剥片	2.7	1.7	3.68	黒	安		302	外	剥片	2.5	2.4	2.82	黒	頁
245	9	剥片	3.4	2.6	7.45	黒	安		303	7	剥片	2.6	2.0	4.79	黒	安
246	6	剥片	4.0	1.8	6.97	黒	安		304	3	剥片	2.2	3.3	5.95	黒	頁
247	外	剥片	3.6	2.6	6.72	黒	安		305	6	剥片	3.2	4.1	4.78	黒	安
248	9	剥片	8.4	2.4	20.28	黒	頁		306	5	剥片	2.7	3.4	8.06	黒	安
249	3	剥片	3.7	2.9	5.69	黒	安		307	7	剥片	4.9	3.3	6.93	黒	安
250	3	剥片	4.5	3.8	23.59	黒	安		308	6	剥片	4.0	4.3	23.32	黒	頁
251	7	剥片	3.8	2.4	11.81	黒	安		309	6	剥片	3.8	3.4	9.26	黒	安
252	7	剥片	5.1	3.7	11.40	黒	安		310	11	剥片	4.0	4.0	15.31	黒	安
253	11	剥片	4.1	2.3	7.39	黒	頁		311	6	剥片	2.9	2.6	2.75	黒	2
254	5	剥片	3.6	2.3	7.05	黒	頁		312	7	剥片	1.7	1.9	0.91	黒	3
255	7	剥片	5.3	2.6	8.31	黒	安		313	9	剥片	2.3	1.9	4.15	黒	3
256	12	剥片	5.0	2.9	15.70	黒	安		314	7	剥片	2.8	1.8	3.06	黒	2
257	6	剥片	4.5	2.9	10.05	黒	安		315	1	剥片	3.1	1.8	5.85	黒	1
258	10	剥片	4.5	3.6	7.01	黒	頁		316	—	剥片	3.5	3.5	11.60	黒	3
259	7	剥片	4.7	4.2	12.55	黒	安		317	7	剥片	2.6	1.7	3.46	黒	3
260	7	剥片	4.4	6.7	23.42	黒	安		318	7	剥片	3.4	1.8	5.05	メノ	ウ
261	3	剥片	5.9	3.5	22.46	黒	安		319	6	剥片	3.2	3.0	12.68	メノ	ウ
262	9	剥片	5.1	3.2	17.90	黒	安		320	11	剥片	5.6	4.1	24.39	黒	安
263	7	剥片	5.1	3.8	15.99	黒	頁		321	3	剥片	6.5	7.3	61.24	黒	安
264	7	剥片	3.7	4.4	10.15	黒	安		322	5	剥片	6.0	3.6	41.63	黒	頁
265	9	剥片	5.1	3.5	30.98	黒	安		323	12	剥片	4.4	4.6	29.46	黒	頁
266	外	剥片	5.5	3.7	23.45	黒	頁		324	3	剥片	3.6	4.0	8.61	黒	安
267	—	剥片	3.1	4.4	9.37	黒	安		325	9	剥片	3.3	4.0	11.14	黒	安
268	7	剥片	2.2	4.1	3.97	黒	安		326	7	剥片	3.5	5.6	17.67	黒	安
269	7	剥片	2.6	4.1	11.40	黒	安		327	7	剥片	2.9	6.8	13.49	黒	安
270	6	剥片	3.3	4.3	13.27	黒	安		328	6	剥片	5.8	5.8	57.14	黒	安
271	6	剥片	2.2	3.9	4.66	黒	頁		329	7	剥片	5.2	4.2	23.19	黒	安
272	12	剥片	3.2	4.4	26.14	黒	安		330	3	剥片	7.1	4.7	35.87	黒	安
273	8	剥片	2.5	4.8	7.63	黒	安		331	7+9	剥片	5.4	6.0	31.32	黒	安
274	3	剥片	5.6	4.2	44.53	黒	安		332	3	剥片	2.8	3.1	3.87	黒	安
275	7	剥片	3.2	4.5	12.81	黒	安		333	6+7	剥片	3.4	3.7	13.21	黒	安
276	12	剥片	3.7	3.8	13.82	黒	頁		334	7+12	剥片	5.3	7.4	39.77	黒	安
277	9	剥片	3.6	4.5	15.44	黒	安		335	9	剥片	10.4	4.5	71.53	黒	安
278	11	剥片	2.6	3.6	4.07	黒	安		336	7	敲石	6.5	6.3	144.85	輝	安
279	11	剥片	3.7	5.0	14.12	黒	安		337	外	敲石	19.4	13.3	109.60	砂	岩
280	7	剥片	3.0	3.7	6.09	黒	安		338	12	敲石	8.0	5.7	213.50	文	斑
281	6	剥片	4.2	5.2	10.85	黒	頁		339	8	敲石	9.1	6.6	406.30	点	頁
282	11	剥片	2.1	3.4	5.47	黒	安		340	3	敲石	8.9	8.0	311.90	輝	安
283	外	剥片	3.6	5.6	24.70	黒	安		341	外	敲石	6.4	5.0	91.00	石	閃
284	7	剥片	3.5	5.9	20.46	黒	安		342	外	敲石	6.7	4.4	118.25	文	斑
285	3	剥片	4.8	6.1	43.25	黒	安		343	3	敲石	15.9	10.0	1,733.40	輝	緑
286	6	剥片	4.4	5.9	44.93	黒	安		344	1	磨石	15.2	12.4	2,390.00	輝	安
287	7	剥片	2.6	4.1	6.16	黒	安		345	7+12+外	磨石	19.4	13.3	2,055.30	輝	安
288	7	剥片	3.8	4.7	16.45	黒	安		346	3	磨石	28.2	13.3	3737.80	石	閃
289	5	剥片	5.3	3.9	73.03	黒	安		347	7	台石	25.1	14.1	2,620.00	灰	安
290	3	剥片	4.6	4.6	15.03	黒	安		348	1	台石	22.7	17.0	6,100.60	輝	安
									349	3	台石	15.8	8.2	819.50	輝	安
									350	7+10	台石	16.3	13.3	1,657.00	輝	安
									351	1+2	礫・搬石	13.5	8.2	529.60	輝	安
									352	1	台石	15.0	16.5	3,190.00	輝	安

A区出土の接合資料

遺物 番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石 材
353	1	礫・搬	16.8	6.6	631.50	輝 安
354	5 + 6 + 12	礫・搬	13.8	10.6	1,181.85	輝 安
355	11	礫・搬	21.3	11.4	2,120.00	灰 安
356	7	礫・搬	23.6	14.4	5,030.00	輝 安

A区出土の接合資料

遺物 番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石 材
----------	------	----	------------	-----------	-----------	-----

A-1

1	外	石 核	16.9	11.3	2,026.00	黒 安
2	3	剥 片	5.6	4.9	16.88	黒 安
3	3	剥+碎	3.0	3.2	5.61	黒 安
4	3	碎 片	1.6	3.2	2.27	黒 安
5	3	剥 片	10.6	7.4	419.00	黒 安
6	3	剥 片	4.8	5.4	21.41	黒 安
7	3	剥 片	5.4	6.2	36.43	黒 安
8	3	剥+碎	10.1	9.8	308.45	黒 安
9	3	剥 片	2.6	2.5	3.43	黒 安
10	3	碎 片	2.2	1.6	1.84	黒 安
11	3	剥 片	2.1	1.9	2.70	黒 安
12	3	碎 片	1.7	1.6	1.96	黒 安
13	3	剥 片	5.1	2.5	16.33	黒 安
14	3	剥 片	4.0	3.9	10.68	黒 安
15	3	剥 片	12.2	6.4	251.20	黒 安
16	3	縦+碎	6.7	3.6	31.40	黒 安
17	3	碎 片	2.7	1.9	2.21	黒 安
18	2	剥 片	5.4	4.8	32.41	黒 安
19	3	縦 剥	5.5	3.3	17.75	黒 安
20	3	縦 剥	5.0	4.1	22.18	黒 安
21	3	縦 剥	5.6	3.4	27.47	黒 安
22	3	剥 片	2.7	1.8	3.38	黒 安
23	3	碎 片	2.4	1.3	1.37	黒 安
24	3	剥 片	4.9	1.8	4.36	黒 安
25	3	剥 片	3.3	1.8	2.71	黒 安
26	外	碎 片	2.6	1.3	1.68	黒 安
27	3	碎 片	2.1	2.3	1.33	黒 安
28	3	碎 片	2.9	1.2	1.85	黒 安
29	3	剥 片	5.5	5.6	25.08	黒 安
30	3	剥 片	7.4	2.6	16.93	黒 安
31	3	剥 片	5.0	4.4	21.28	黒 安
32	3	剥 片	4.2	3.2	6.53	黒 安
33	3	剥 片	5.0	3.6	14.03	黒 安
34	3	剥 片	2.0	3.7	6.00	黒 安
35	3	石 核	8.8	7.6	340.10	黒 安

A-2

1	2	剥 片	3.0	4.2	13.06	黒 安
2	2	剥 片	3.5	5.2	18.72	黒 安
3	2	剥 片	1.8	3.5	2.74	黒 安
4	2	剥 片	3.9	6.6	40.27	黒 安
5	2	碎 片	2.6	2.2	3.55	黒 安
6	2	剥 片	5.8	5.5	43.88	黒 安
7	2	剥 片	3.4	4.7	37.38	黒 安
8	2	剥 片	3.6	5.1	21.36	黒 安
9	2	剥 片	6.4	6.9	115.31	黒 安
10	2	剥 片	2.8	4.2	6.98	黒 安

11	2	剥 片	3.1	4.3	12.19	黒 安
12	2	剥 片	5.0	5.8	34.88	黒 安
13	2	碎 片	3.3	2.5	11.40	黒 安
14	2	碎 片	2.1	1.1	1.45	黒 安
15	2	剥 片	2.8	5.4	29.70	黒 安
16	2	碎 片	3.6	3.5	1.77	黒 安
17	2	縦 剥	7.7	3.4	23.14	黒 安
18	2	縦 剥	3.8	2.3	5.72	黒 安
19	2	剥 片	3.0	2.7	4.77	黒 安
20	2	剥 片	3.9	2.1	9.80	黒 安
21	2	縦 剥	5.3	1.5	9.40	黒 安
22	2	縦 剥	4.8	1.8	8.73	黒 安
23	2	縦 剥	5.4	2.2	12.51	黒 安
24	2	縦 剥	6.8	3.1	26.26	黒 安
25	外	石 核	9.5	5.6	226.80	黒 安

A-3

1	2	縦 剥	9.0	5.5	108.90	黒 安
2	2+外	縦 剥	8.5	4.9	48.52	黒 安
3	2	碎 片	2.9	1.3	1.12	黒 安
4	2	加 剥	5.0	3.4	16.72	黒 安
5	2	剥 片	5.9	4.0	13.67	黒 安
6	2	剥 片	9.0	5.6	50.26	黒 安
7	2	ナイフ	7.0	3.6	25.90	黒 安
8	2	縦 剥	3.5	3.5	6.91	黒 安
9	2	剥 片	2.3	3.3	5.09	黒 安
10	2	縦 剥	9.5	3.9	30.57	黒 安
11	2	縦 剥	5.1	3.3	12.96	黒 安
12	2	碎 片	1.5	2.6	4.30	黒 安
13	2	剥 片	9.8	9.9	133.30	黒 安

A-4

1	2	縦 剥	8.8	4.6	36.34	黒 安
2	2	石 核	4.4	6.6	51.31	黒 安
3	2	剥 片	2.9	2.4	8.09	黒 安
4	2	剥 片	3.2	3.4	13.30	黒 安
5	2	剥 片	2.9	3.7	6.05	黒 安
6	2	剥 片	2.7	3.7	6.20	黒 安
7	2	石 核	10.1	4.8	90.36	黒 安
8	2	縦 剥	10.1	3.9	42.96	黒 安

A-5

1	1	剥 片	4.0	4.5	33.54	黒 安
2	2	剥 片	3.5	2.9	6.11	黒 安
3	2	石 核	4.7	6.2	103.49	黒 安
4	2	剥 片	4.0	3.4	6.50	黒 安
5	2	碎 片	1.3	1.5	0.70	黒 安
6	1+2	剥 片	7.4	5.3	38.36	黒 安
7	2	剥 片	2.5	2.5	4.81	黒 安
8	2	剥 片	2.2	2.9	5.76	黒 安
9	2	碎 片	2.0	2.3	3.92	黒 安
10	2	碎 片	1.5	2.2	1.89	黒 安
11	2	剥 片	4.0	5.5	27.96	黒 安
12	2	碎 片	2.2	2.5	1.87	黒 安
13	2	剥 片	2.7	2.8	5.37	黒 安
14	2	碎 片	2.7	2.6	3.38	黒 安
15	2	石 核	5.7	6.9	192.90	黒 安

A-19

1	3	剥 片	2.1	1.6	1.46	黒 安
2	3	剥 片	4.8	6.2	24.68	黒 安
3	3	碎 片	1.6	2.4	3.28	黒 安
4	3	剥 片	3.7	2.0	2.30	黒 安
5	3	剥 片	6.2	3.0	10.87	黒 安
6	3	剥 片	2.0	0.9	0.79	黒 安
7	3	碎 片	1.7	2.5	1.30	黒 安

計測値一覧表

遺物番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石 材
8	3	剥片	2.6	3.1	2.24	黒安 5
9	3	剥片	3.2	1.4	1.27	黒安 5
10	3	剥片	2.6	2.2	3.03	黒安 5
11	3	剥片	6.3	6.8	29.86	黒安 5
12	3	剥片	3.6	4.6	9.74	黒安 5
13	3	剥片	1.5	2.3	2.25	黒安 5
14	3	剥片	3.1	1.6	1.85	黒安 5
15	3	剥片	3.2	4.5	10.66	黒安 5
16	3	砕片	1.6	2.8	4.29	黒安 5
17	外	石核	17.6	15.3	3,518.00	黒安 5
A-16						
1	2	剥片	2.1	2.8	3.75	黒安 4
2	2	剥片	6.8	6.8	52.09	黒安 4
3	2	剥片	4.1	3.3	16.92	黒安 4
4	2	剥片	5.8	7.6	57.97	黒安 4
5	2	剥片	4.0	5.0	30.90	黒安 4
6	2	剥片	8.2	6.3	43.80	黒安 4
7	2	ナイフ	3.3	2.6	8.88	黒安 4
8	2	剥片	1.9	2.6	4.46	黒安 4
9	2	砕片	1.2	1.8	0.66	黒安 4
10	2	剥片	7.8	3.6	32.07	黒安 4
11	2	剥片	6.4	4.3	32.18	黒安 4
12	2	剥片	5.0	4.4	7.93	黒安 4
13	2	剥片	1.3	3.1	2.13	黒安 4
14	2	砕片	1.1	1.6	0.95	黒安 4
15	2	剥片	3.4	2.9	3.45	黒安 4
16	2	石核	4.5	3.5	22.05	黒安 4
17	2	剥片	2.5	3.1	7.76	黒安 4
18	2	砕片	2.5	1.9	5.62	黒安 4
19	2	石核	5.5	4.7	50.07	黒安 4
20	2	剥片	4.8	4.6	61.15	黒安 4
21	2	剥片	1.6	3.6	1.56	黒安 4
22	2	剥片	2.9	2.6	4.39	黒安 4
23	2	剥片	1.9	3.1	5.35	黒安 4
24	2	剥片	1.2	2.3	1.71	黒安 4
25	2	剥片	1.3	1.4	0.54	黒安 4
26	2	剥片	1.3	1.9	0.88	黒安 4
27	2	石核	4.1	3.4	26.01	黒安 4
28	2	剥片	2.4	2.3	2.74	黒安 4
29	2	剥片	2.6	2.6	6.06	黒安 4
30	2	剥片	1.2	2.1	1.19	黒安 4
31	2	剥片	2.5	2.6	4.13	黒安 4
32	2	剥片	1.9	5.0	17.30	黒安 4
33	2	石核	4.5	3.7	45.80	黒安 4
34	2	剥片	6.8	4.5	24.45	黒安 4
35	2	剥片	1.6	2.2	1.96	黒安 4
36	2	剥片	2.7	5.8	12.69	黒安 4
37	2	剥片	2.1	3.8	8.19	黒安 4
38	2	剥片	2.9	2.1	2.70	黒安 4
39	2	剥片	3.0	5.0	14.14	黒安 4
40	2	石核	5.3	5.5	52.54	黒安 4
41	2	石核	5.3	7.4	85.06	黒安 4
42	2	剥片	8.0	3.8	34.67	黒安 4
43	2	剥片	6.4	7.1	66.21	黒安 4
44	2	剥片	2.4	2.9	2.77	黒安 4
45	2	剥片	2.0	2.9	1.45	黒安 4
46	2	剥片	2.6	2.4	3.19	黒安 4
47	2	砕片	1.4	2.0	1.13	黒安 4
48	2	剥片	2.9	2.0	2.57	黒安 4
49	2	剥片	1.5	4.4	2.69	黒安 4
50	2	剥片	4.8	3.0	9.57	黒安 4
51	2	ナイフ	3.8	3.8	15.90	黒安 4
52	2	剥片	2.4	3.1	3.08	黒安 4
53	2	剥片	5.0	3.1	5.33	黒安 4
54	2	剥片	3.2	5.0	10.17	黒安 4
55	2	剥片	2.0	3.6	4.21	黒安 4
56	2	剥片	2.4	4.3	4.52	黒安 4
57	2	砕片	0.7	2.8	0.58	黒安 4
58	2	剥片	3.5	4.2	16.34	黒安 4
59	2	砕片	1.5	0.7	0.26	黒安 4
60	2	剥片	1.8	3.4	2.90	黒安 4
61	2	剥片	4.9	7.3	77.37	黒安 4
62	2	剥片	4.1	4.1	12.44	黒安 4
63	2	剥片	2.6	2.6	4.24	黒安 4
64	2	石核	8.4	10.1	498.00	黒安 4
A-9						
1	2	剥片	3.3	3.6	6.54	黒安 3
2	2	剥片	3.1	3.3	6.20	黒安 3
3	1+外	剥片	3.5	6.4	2.69	黒安 3
A-20						
1	3	剥片	2.7	4.7	11.98	黒安 5
2	1+3	剥片	3.7	7.0	24.82	黒安 5
3	外	剥片	3.5	1.5	2.47	黒安 5
4	3	剥片	4.2	3.2	14.30	黒安 5
5	3	剥片	2.5	3.5	5.91	黒安 5
6	3	剥片	4.0	3.2	11.22	黒安 5
7	1	剥片	4.7	7.3	56.26	黒安 5
8	3	剥片	4.6	5.0	8.76	黒安 5
9	3	剥片	4.5	6.6	21.68	黒安 5
10	外	剥片	2.6	6.1	12.00	黒安 5
11	3	石核	14.0	9.9	770.80	黒安 5
A-66						
1	3	剥片	3.6	3.6	12.38	輝緑 1
2	3	剥片	4.4	5.7	75.06	輝緑 1
3	3	石核	12.6	8.5	695.20	輝緑 1
A-65						
1	3	剥片	4.2	4.1	34.68	輝緑 2
2	3	石核	9.0	6.4	364.30	輝緑 2
A-50						
1	3	剥片	3.7	1.9	6.89	黒頁 2
2	外	石核	11.0	7.0	496.00	黒頁 2
A-51						
1	2	剥片	2.6	4.1	3.88	黒頁 3
2	2	剥片	3.7	3.8	14.86	黒頁 3
3	2	剥片	6.0	5.3	51.59	黒頁 3
4	2	剥片	2.6	1.9	5.45	黒頁 3
5	2	剥片	5.4	4.2	28.02	黒頁 3
A-52						
1	2	剥片	3.6	2.7	7.35	黒頁 3
2	3	剥片	4.8	4.9	18.34	黒頁 3
3	2	剥片	4.7	2.6	8.42	黒頁 3
A-32						
1	外	砕片	2.5	1.8	2.50	黒安 6
2	2	剥片	4.5	4.1	13.16	黒安 6
3	2	砕片	2.4	1.3	3.45	黒安 6
4	2	剥片	5.3	4.6	35.07	黒安 6
5	2	剥片	4.5	3.3	9.50	黒安 6
6	2	砕片	2.1	1.5	0.14	黒安 6
7	2	剥片	4.0	3.4	14.39	黒安 6
8	2	剥片	5.4	2.9	12.64	黒安 6

B区出土の接合資料

遺物 番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石 材
9	2	剥片	5.8	5.3	58.64	黒安6
10	2	剥片	3.5	2.0	5.49	黒安6
11	2	剥片	5.6	4.0	19.10	黒安6
12	2	砕片	2.3	2.4	1.61	黒安6
13	2	剥片	6.3	4.6	25.21	黒安6
14	2	剥片	3.0	3.0	6.50	黒安6
A-43						
1	外	剥片	7.5	6.1	56.28	黒安10
2	2	剥片	3.1	5.9	21.63	黒安10
3	2	ナイフ	3.1	2.8	6.65	黒安10
4	2	ナイフ	3.7	3.8	19.18	黒安10
A-57						
1	2	剥片	4.2	2.0	5.72	黒頁搬
2	2	石核	9.9	4.6	99.67	黒頁搬
A-49						
1	3	縦剥	9.3	3.9	30.94	黒頁1
2	3	縦剥	7.9	2.5	20.38	黒頁1
3	3	加剥	7.8	2.4	20.53	黒頁1
A-47						
1	3	剥片	5.3	3.4	18.95	頁1
2	3	砕片	1.7	1.0	0.46	頁1
3	3	剥片	5.3	3.3	13.63	頁1
4	3	剥片	3.2	3.2	3.01	頁1
5	3	剥片	4.1	3.4	11.88	頁1
6	3	剥片	3.7	1.8	2.38	頁1
7	3	剥片	3.1	3.0	4.46	頁1
8	3	剥片	5.7	4.5	30.37	頁1
A-58						
1	2	縦剥	4.2	2.2	10.29	黒頁搬
2	2	縦剥	4.5	2.7	10.70	黒頁搬
A-41						
1	2	剥片	4.0	4.9	20.26	黒安9
2	2	砕片	2.4	1.6	2.64	黒安9
3	2	剥片	3.1	2.2	18.01	黒安9
A-8						
1	2	剥片	4.4	3.5	12.08	黒安3
2	2	剥片	5.3	4.3	16.62	黒安3
A-39						
1	2	砕片	1.6	2.1	5.05	黒安9
2	外	剥片	7.4	4.5	45.32	黒安9
3	2	剥片	4.5	3.8	13.97	黒安9
A-40						
1	2	剥片	4.8	3.2	13.25	黒安9
2	2	剥片	5.1	3.2	14.68	黒安9
3	2	剥片	4.7	4.2	19.01	黒安9
4	2	剥片	4.7	2.1	6.60	黒安9
5	2	剥片	4.2	2.1	6.61	黒安9
A-23						
1	3	剥片	2.8	4.3	11.08	黒安5
2	3	砕片	2.2	1.1	1.33	黒安5
3	3	砕片	2.8	2.0	3.66	黒安5
4	3	石核	4.1	3.2	19.71	黒安5
A-35						
1	2	ナイフ	3.1	3.7	11.90	黒安6
2	2	ナイフ	2.8	2.3	5.08	黒安6
A-12	2	剥片	2.8	4.4	6.05	黒安5
A-25	3	剥片	7.8	8.4	75.11	黒安5
A-21						

1	3	剥片	3.1	3.3	11.67	黒安5
2	3	石核	3.5	4.6	30.96	黒安5
3	3	石核	3.2	3.8	19.89	黒安5
4	3	剥片	3.2	1.3	3.59	黒安5
5	3	剥片	1.5	2.8	6.85	黒安5
A-7						
1	2	剥片	2.6	3.2	5.13	黒安3
2	2	剥片	3.3	2.3	3.89	黒安3
3	2	剥片	3.1	3.6	7.64	黒安3
A-45						
1	2	剥片	1.8	1.7	2.54	黒安10
2	2	砕片	1.5	1.4	0.75	黒安10
3	2	剥片	3.3	3.6	11.40	黒安10
4	2	砕片	1.2	1.8	0.57	黒安10
A-22						
1	3	砕片	2.3	1.6	0.07	黒安5
2	3	剥片	2.5	3.0	9.47	黒安5
3	3	剥片	3.7	3.2	13.03	黒安5
A-15	2	剥片	2.4	2.9	4.09	黒安3
A-28	3	剥片	2.3	4.0	7.21	黒安5
A-29	3	剥片	2.4	3.9	4.95	黒安5
A-13	2	剥片	2.9	4.9	6.80	黒安3
A-36	3	剥片	4.3	4.8	12.71	黒安7
A-26	3	剥片	4.6	7.1	25.98	黒安5
A-38	2	剥片	5.1	3.3	20.87	黒安7

B区出土の接合資料

遺物 番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石 材
B-14						
1	6	剥片	2.7	2.4	3.90	黒頁11a
2	11	剥片	3.6	1.9	4.46	黒頁11a
3	12	剥片	7.5	7.7	141.33	黒頁11a
4	11	剥片	5.4	6.2	64.15	黒頁11a
5	6	剥片	2.0	2.9	5.08	黒頁11a
6	12	剥片	4.9	3.1	17.10	黒頁11a
7	12	剥片	2.9	4.4	17.55	黒頁11a
8	12	剥片	2.6	2.0	2.48	黒頁11a
9	12	石核	7.9	7.6	381.80	黒頁11a
B-119						
1	6	剥片	4.4	3.7	23.71	黒安1
2	6	剥片	5.2	3.9	18.12	黒安1
3	6	剥片	2.1	2.1	3.85	黒安1
4	6	石核	3.5	3.2	39.21	黒安1
B-15						
1	6	剥片	7.4	3.9	44.67	黒頁11b
2	6	剥片	4.2	3.8	24.80	黒頁11b
3	6	剥片	4.1	5.2	41.65	黒頁11b
4	6	剥片	1.6	3.8	3.00	黒頁11b
5	—	砕片	2.4	1.2	1.84	黒頁11b
6	6	剥片	4.7	2.4	10.41	黒頁11b
7	6	石核	3.5	5.1	57.14	黒頁11b
8	12	剥片	3.1	2.2	4.80	黒頁11b
9	7	剥片	4.6	4.2	18.03	黒頁11b
10	11	剥片	2.5	2.6	3.46	黒頁11b
11	6	剥片	3.3	2.5	6.88	黒頁11b
12	7	剥片	5.1	4.0	30.05	黒頁11b
13	6	剥片	7.4	3.8	42.10	黒頁11b
14	6	剥片	4.6	5.0	20.03	黒頁11b

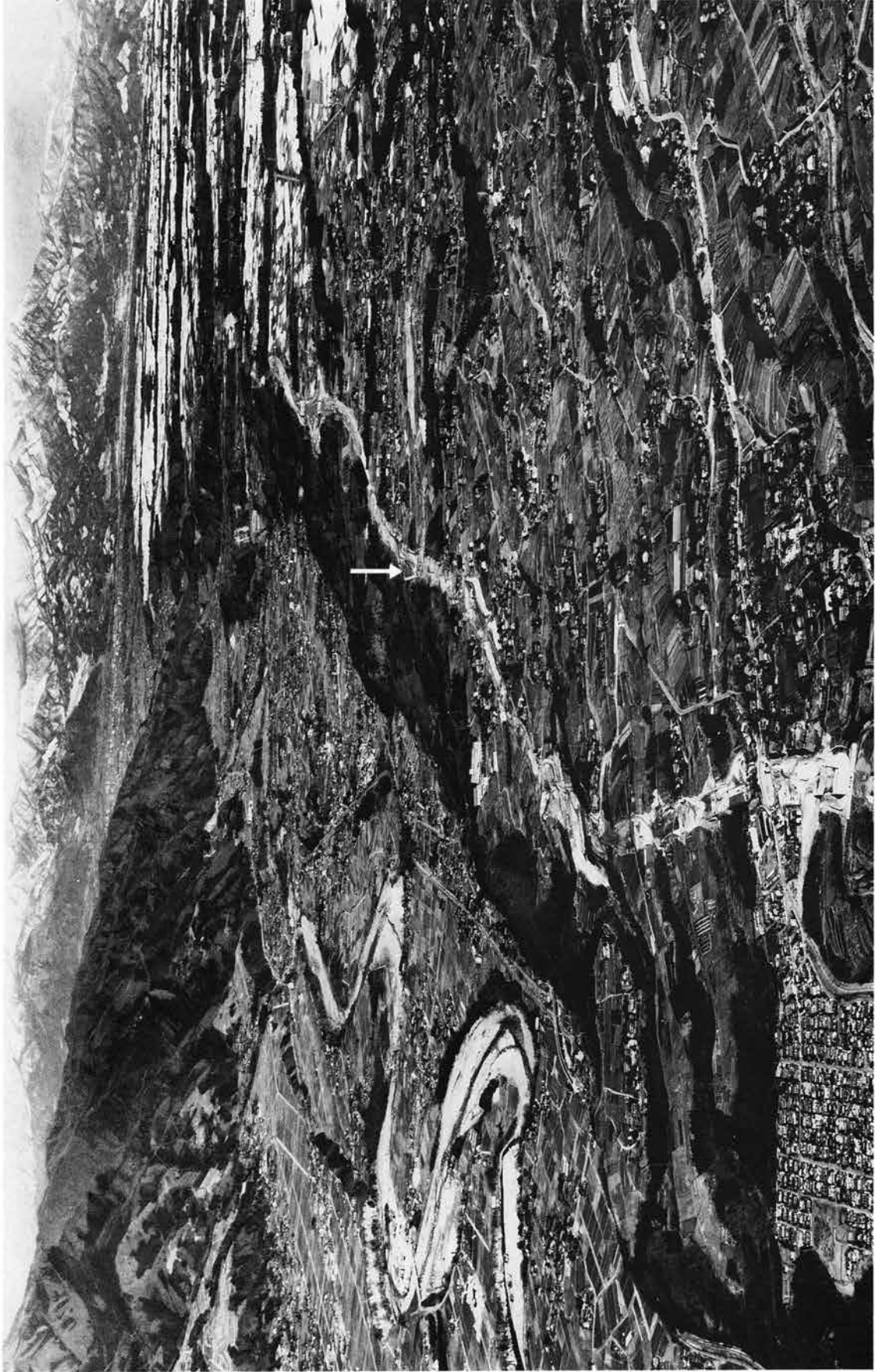
計測値一覧表

遺物 番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石 材							
15	6	剥片	2.6	2.6	5.20	黒頁11b	17	3	石核	5.1	4.8	50.49	黒安 1
16	6	剥片	2.3	4.6	5.80	黒頁11b	18	3	剥片	6.1	8.3	93.28	黒安 1
17	6	剥片	3.2	4.2	11.68	黒頁11b	19	3	剥片	2.5	2.6	6.62	黒安 1
18	6	剥片	4.6	4.3	38.24	黒頁11b	20	3	剥片	3.5	2.0	5.09	黒安 1
19	6	剥片	3.7	2.2	8.40	黒頁11b	21	3	剥片	3.4	3.1	13.80	黒安 1
20	6	剥片	5.0	4.2	20.12	黒頁11b	22	3	剥片	2.2	1.9	3.60	黒安 1
21	9	石核	5.9	2.6	29.88	黒頁11b	23	3	石核	3.0	4.8	38.79	黒安 1
22	11	剥片	3.3	2.7	5.89	黒頁11b	B-19						
23	6	剥片	3.3	3.8	9.59	黒頁11b	1	6	剥片	2.2	4.8	11.50	黒頁 13
24	10	剥片	4.2	2.4	8.17	黒頁11b	2	11	剥片	2.5	2.7	2.64	黒頁 13
25	—	剥片	2.6	2.4	2.20	黒頁11b	3	7	剥片	2.4	2.5	5.46	黒頁 13
26	6	剥片	4.6	3.8	26.99	黒頁11b	4	7	削器	4.2	3.4	17.31	黒頁 13
27	6	石核	2.9	5.3	69.30	黒頁11b	5	6	使剥	5.8	4.2	18.56	黒頁 13
28	6	石核	2.6	5.2	78.27	黒頁11b	6	7	石核	6.6	4.9	79.58	黒頁 13
B-22							B-114						
1	12	剥片	6.7	8.8	167.17	黒頁 14	1	6	削器	4.6	4.8	36.03	黒安 1
2	6	剥片	4.3	2.8	6.69	黒頁 14	2	12	剥片	3.7	4.4	11.51	黒安 1
3	11	剥片	5.1	6.5	62.42	黒頁 14	3	12	石核	9.6	9.2	563.50	黒安 1
4	6+外	剥片	6.5	4.9	57.19	黒頁 14	B-23						
5	11	剥片	3.4	2.1	7.10	黒頁 14	1	外	剥片	3.0	4.9	13.70	黒頁 16
6	11	剥片	6.6	5.8	56.40	黒頁 14	2	11	剥片	2.0	3.2	3.59	黒頁 16
7	6	剥片	2.6	5.8	2.43	黒頁 14	3	11	剥片	1.7	2.4	1.47	黒頁 16
8	11	剥片	8.3	6.1	141.02	黒頁 14	4	11	剥片	1.8	2.1	2.43	黒頁 16
9	12	剥片	6.1	5.3	40.12	黒頁 14	5	外	剥片	3.3	2.4	4.81	黒頁 16
10	外	剥片	2.8	3.5	9.10	黒頁 14	6	6	石核	8.6	8.9	589.61	黒頁 16
11	6	剥片	4.2	2.7	15.62	黒頁 14	B-44						
12	7	剥片	4.6	3.5	16.62	黒頁 14	1	12	剥片	2.0	4.1	4.38	頁 1
13	6	剥片	4.3	4.3	21.07	黒頁 14	2	11	剥片	2.1	3.9	5.36	頁 1
14	6+11	剥片	5.3	5.2	43.34	黒頁 14	3	6	剥片	2.4	3.5	5.67	頁 1
15	6	剥片	5.7	5.8	45.62	黒頁 14	4	11+12	剥片	3.3	4.4	12.03	頁 1
16	6	剥片	6.5	6.1	64.21	黒頁 14	5	11	剥片	2.8	4.3	9.89	頁 1
17	6	剥片	6.4	2.7	21.00	黒頁 14	6	11	石核	7.5	9.0	565.74	頁 1
18	6	剥片	4.6	2.3	7.00	黒頁 14	B-17						
19	6	剥片	3.6	2.2	5.95	黒頁 14	1	12	剥片	4.3	5.7	24.14	黒頁12b
20	6	石核	4.3	5.5	55.37	黒頁 14	2	12	剥片	6.7	3.0	9.00	黒頁12b
21	7	剥片	4.3	2.3	8.15	黒頁 14	3	12	剥片	3.7	4.3	13.21	黒頁12b
22	6	剥片	3.0	2.3	4.29	黒頁 14	4	12	剥片	7.1	5.6	38.82	黒頁12b
23	7	剥片	3.9	2.1	7.43	黒頁 14	5	6	剥片	4.9	6.7	48.39	黒頁12b
24	6	剥片	5.2	5.1	47.32	黒頁 14	6	6	剥片	4.0	5.0	16.75	黒頁12b
25	6	剥片	2.1	1.5	1.10	黒頁 14	7	6	剥片	3.5	3.6	9.94	黒頁12b
26	6	石核	6.6	7.3	276.00	黒頁 14	8	6	剥片	3.0	2.0	3.73	黒頁12b
B-59							9	外	剥片	3.8	3.4	7.20	黒頁12b
1	3	剥片	1.9	3.3	6.19	黒安 1	10	6	剥片	5.0	4.2	24.75	黒頁12b
2	3	剥片	5.9	3.8	36.46	黒安 1	11	6	剥片	5.1	6.2	32.02	黒頁12b
3	3	剥片	2.6	3.0	7.25	黒安 1	12	6	剥片	3.1	2.5	8.07	黒頁12b
4	3	剥片	3.7	3.0	6.37	黒安 1	13	12	剥片	4.0	3.7	10.83	黒頁12b
5	3	剥片	3.9	2.0	5.70	黒安 1	14	12	石核	9.6	8.3	469.70	黒頁12b
6	3	剥片	2.5	2.8	4.14	黒安 1	B-18						
7	3	剥片	3.6	3.4	12.47	黒安 1	1	6	剥片	2.0	1.7	1.15	黒頁 13
8	外	剥片	3.4	4.0	16.23	黒安 1	2	6	剥片	1.9	1.5	0.67	黒頁 13
9	3	剥片	3.4	2.8	9.22	黒安 1	3	6	剥片	3.4	2.7	6.98	黒頁 13
10	3	石核	3.5	4.7	48.97	黒安 1	4	6	剥片	2.9	4.0	8.31	黒頁 13
11	3	剥片	4.3	4.8	25.80	黒安 1	5	6	剥片	4.5	5.2	15.26	黒頁 13
12	3	剥片	5.3	4.6	24.76	黒安 1	6	6	剥片	3.2	2.6	9.60	黒頁 13
13	3	剥片	2.1	2.9	2.91	黒安 1	7	9	石核	4.6	6.2	85.80	黒頁 13
14	3	剥片	1.7	2.8	4.17	黒安 1	B-66						
15	3	剥片	0.9	1.4	0.74	黒安 1	1	6+12	剥片	2.9	5.0	7.84	黒安 安
16	3	剥片	1.6	1.6	1.19	黒安 1	2	11	石核	3.6	3.0	32.94	黒安 安
							3	11	剥片	5.4	4.8	36.84	黒安 安
							4	10	剥片	3.1	3.1	10.06	黒安 安
							5	11	剥片	2.7	2.4	6.76	黒安 安
							6	11	剥片	4.3	1.9	6.64	黒安 安

計測値一覧表

遺物 番号	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石	材
2	6	剥片	4.8	5.0	9.02	黒	安
B-51							
1	3	剥片	5.2	4.6	37.47	黒	安
2	3	剥片	5.5	4.2	21.85	黒	安
B-75							
1	11	剥片	2.9	2.5	3.97	黒	安
2	11	剥片	4.3	4.3	20.76	黒	安
3	6	剥片	4.3	2.1	5.06	黒	安
B-76							
1	12	剥片	3.4	5.5	16.73	黒	安
2	7	剥片	3.5	4.2	13.41	黒	安
B-20							
1	8	剥片	2.3	3.6	5.58	黒	頁 13
2	12	剥片	4.3	5.0	17.88	黒	頁 13
B-56	3	剥片	4.4	7.8	45.40	黒	安
B-58	3	剥片	6.8	6.4	42.57	黒	安
B-118							
1	9	剥片	3.4	4.2	11.14	黒	安
2	9	加剥	4.5	7.6	47.37	黒	安
B-25							
1	3	使剥片	9.6	6.8	141.57	黒	頁
2	3	剥片	8.4	5.3	74.20	黒	頁
B-107	6	削器	4.0	4.8	22.94	黒	安
B-21							
1	12	剥片	3.4	3.8	19.25	黒	頁 13
2	7	剥片	2.8	3.2	5.26	黒	頁 13
3	外	加剥	4.5	4.1	30.87	黒	頁 13
B-27							
1	7	剥片	1.1	3.3	2.82	黒	頁
2	7	加剥	2.9	3.8	10.22	黒	頁
3	7	削器	3.8	4.4	17.60	黒	頁

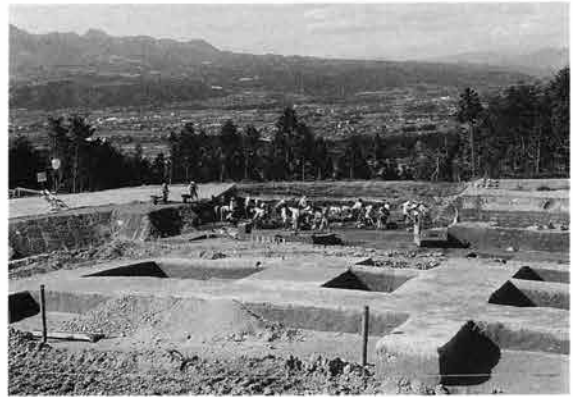
写 真 图 版



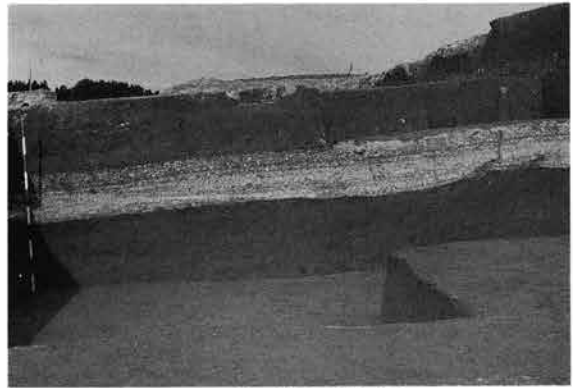
遺跡の遠影（遺跡の位置する赤城山西麓と利根川を南側より望む）



1 土層の堆積状態 (1)



2 A区第3区の調査



3 土層の堆積状態 (2)



4 土層の逆転現象 No.1 (確認状態)



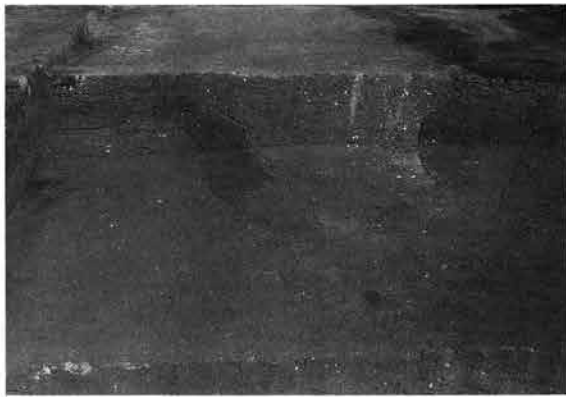
5 土層の逆転現象 No.1 (土層の堆積状態)



6 土層の逆転現象 No.1 (完掘状態)



7 土層の逆転現象 No.1 (遺物の出土状態)



1 土層の逆転現象 No.2 (確認状態)



2 土層の逆転現象 No.2 (土層の堆積状態)



3 土層の逆転現象 No.2 (完掘状態)



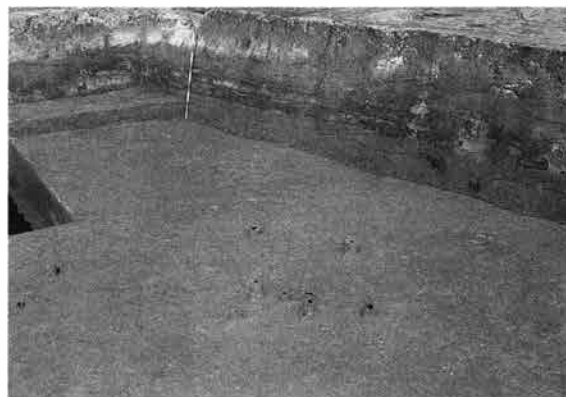
4 2・3号土壌 (確認状態)



5 2・3号土壌 (完掘状態)



6 3号土壌 (完掘状態)



7 1号ブロック (遺物と出土層位)



8 1号ブロック (遺物の分布状況)



1 2号ブロック (遺物の分布状況、西側から)



2 2号ブロック (遺物の分布状況、北側から)



3 2号ブロック (遺物の出土状態 1)



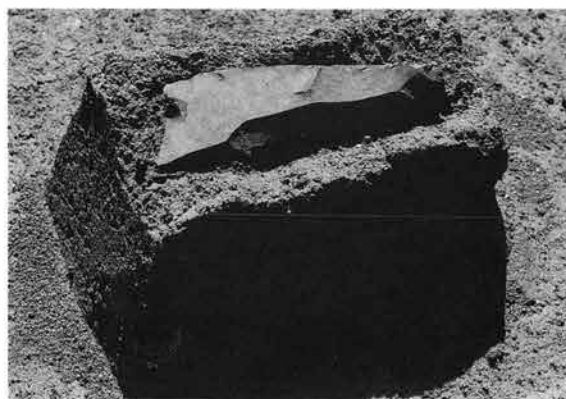
4 2号ブロック (遺物の出土状態 2)



5 3号ブロック (遺物と出土層位 1)



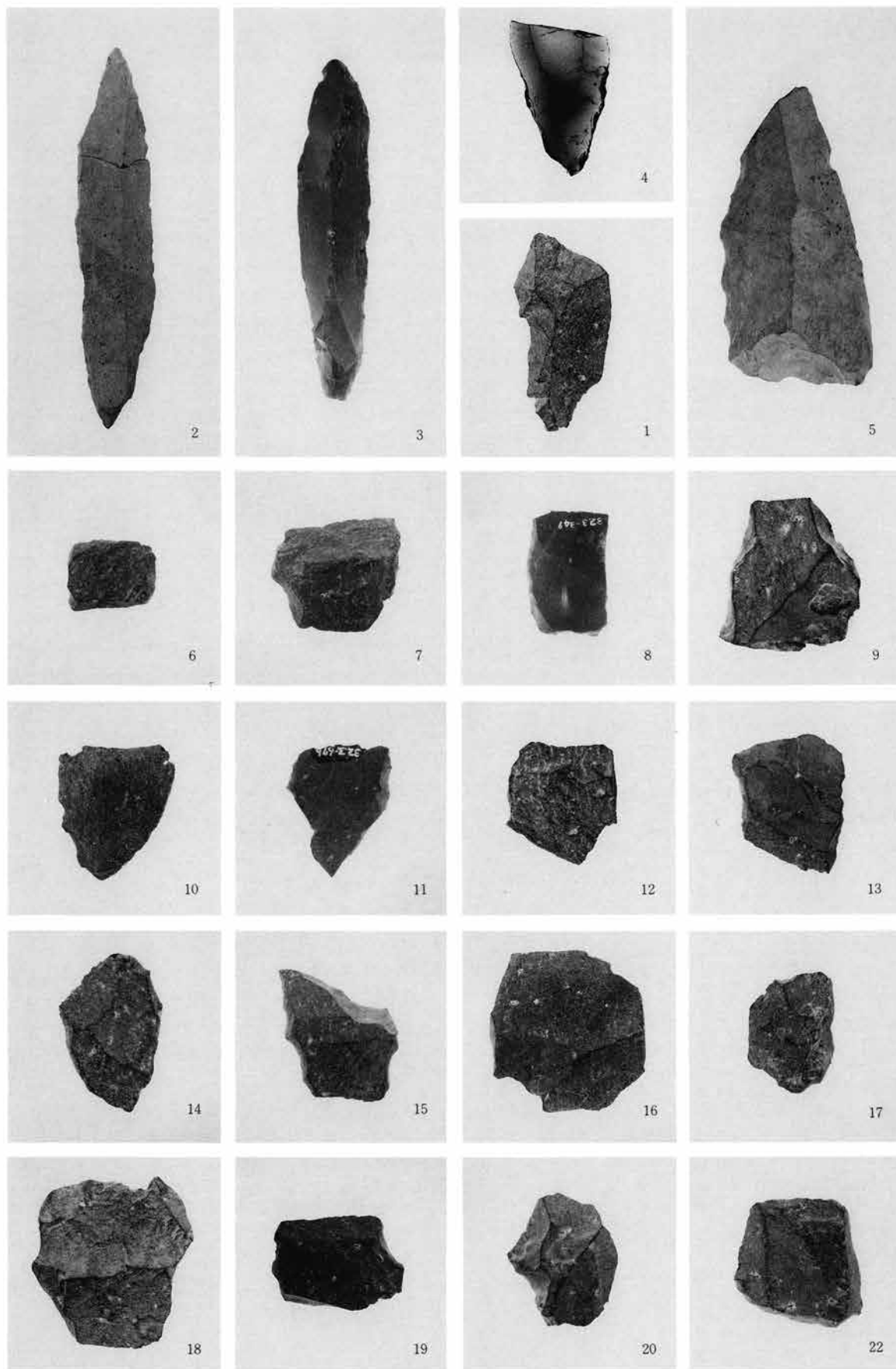
6 3号ブロック (遺物と出土層位 2)



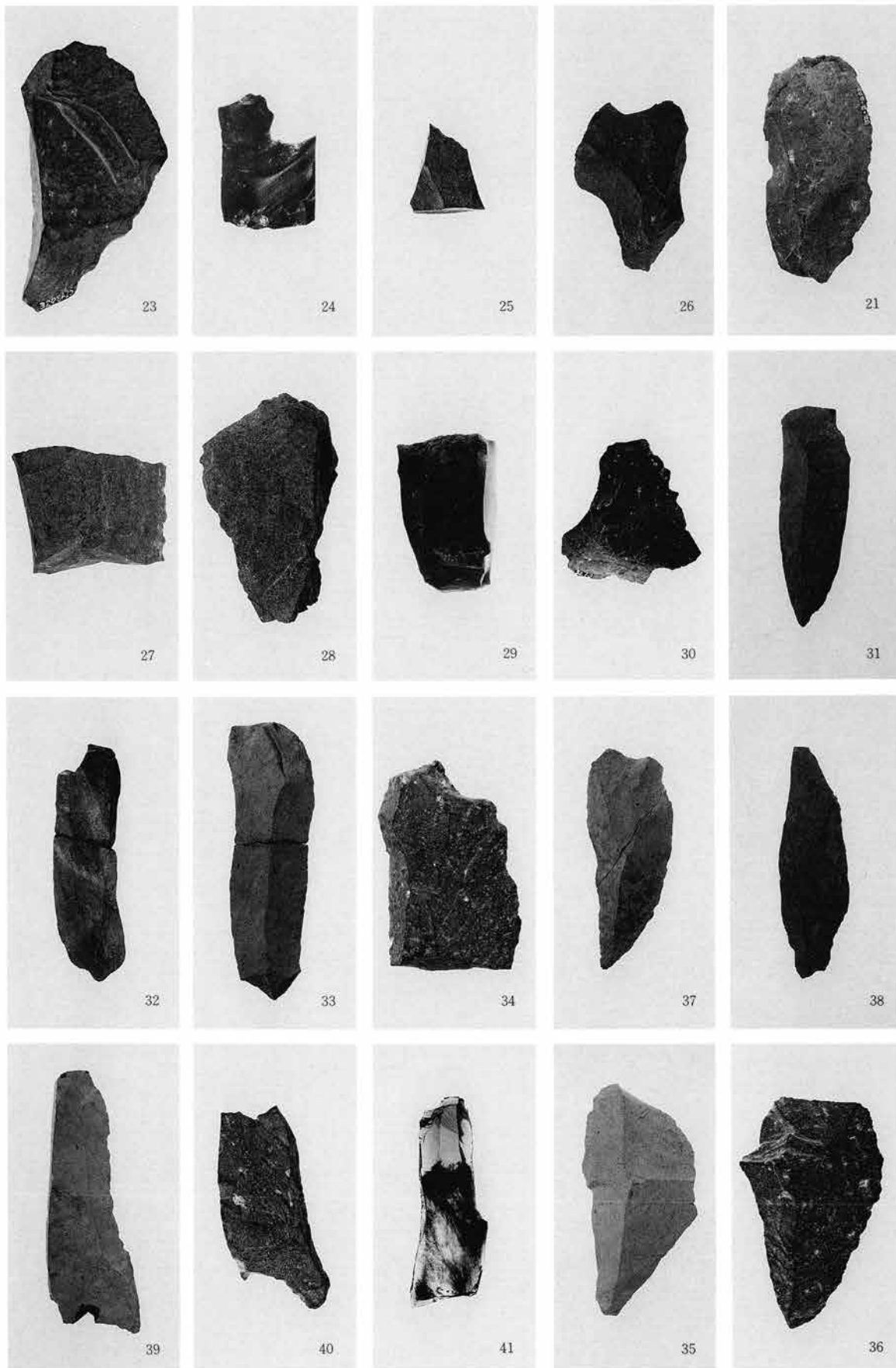
7 グリッド出土の遺物 (1)



8 グリッド出土の遺物 (2)



A区出土の石器 (1)



A区出土の石器 (2)



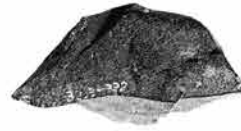
43



46



48



44



49



52



54

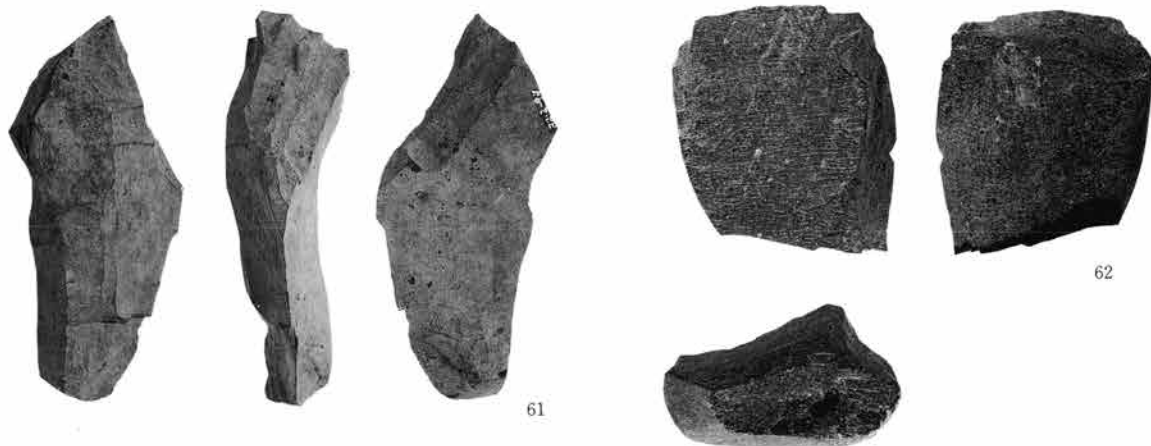


55

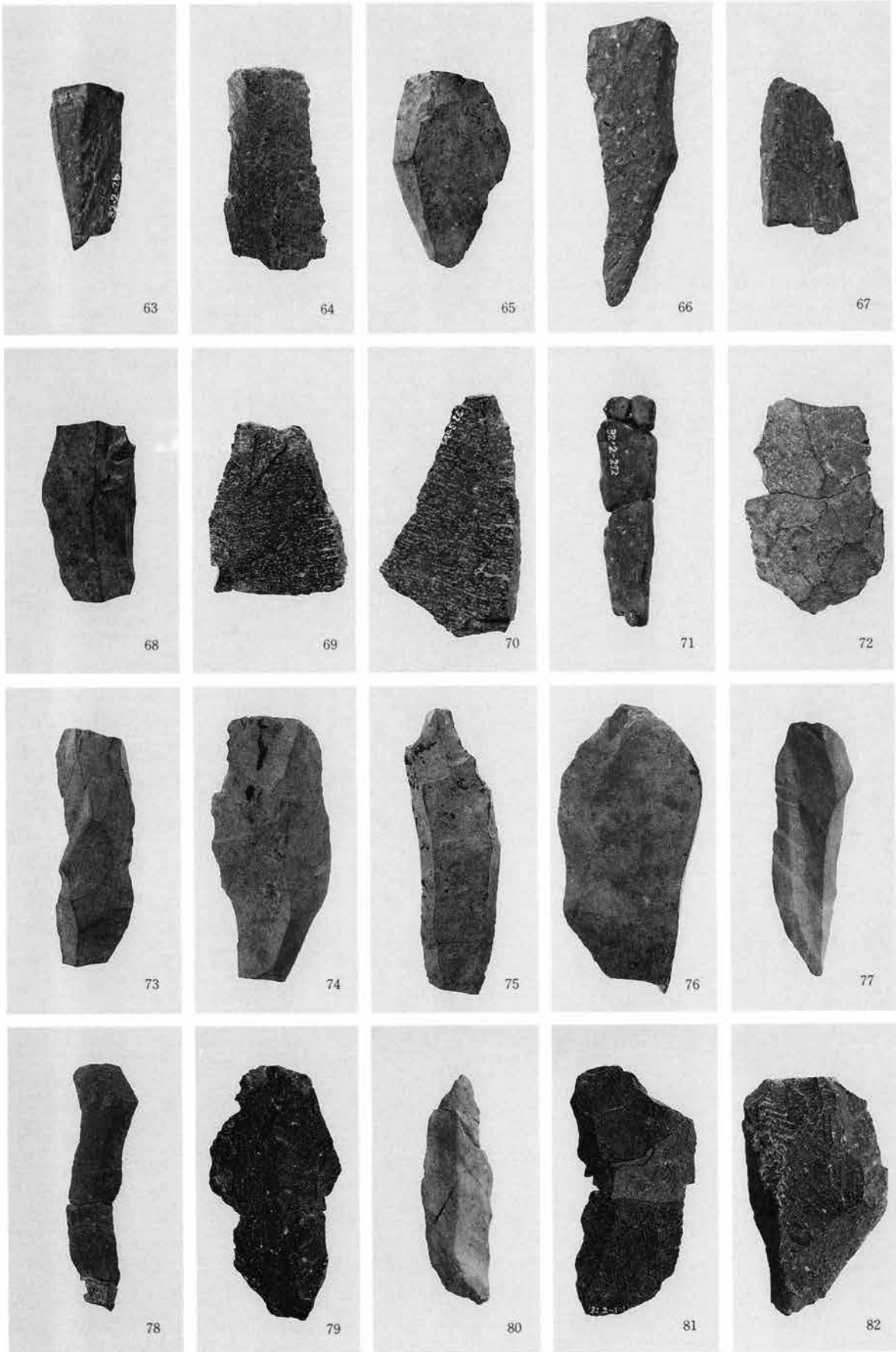


51

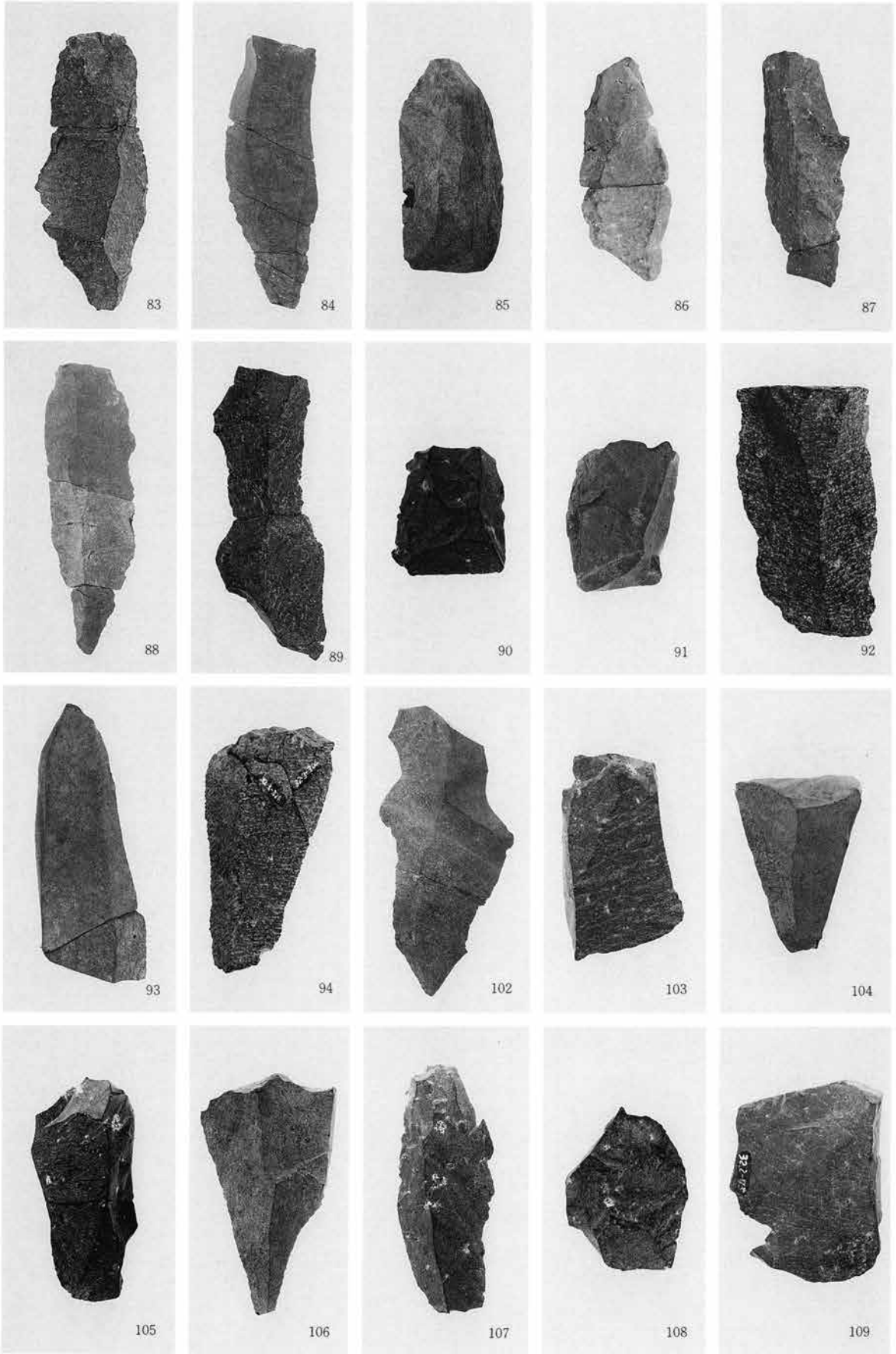
PL 8



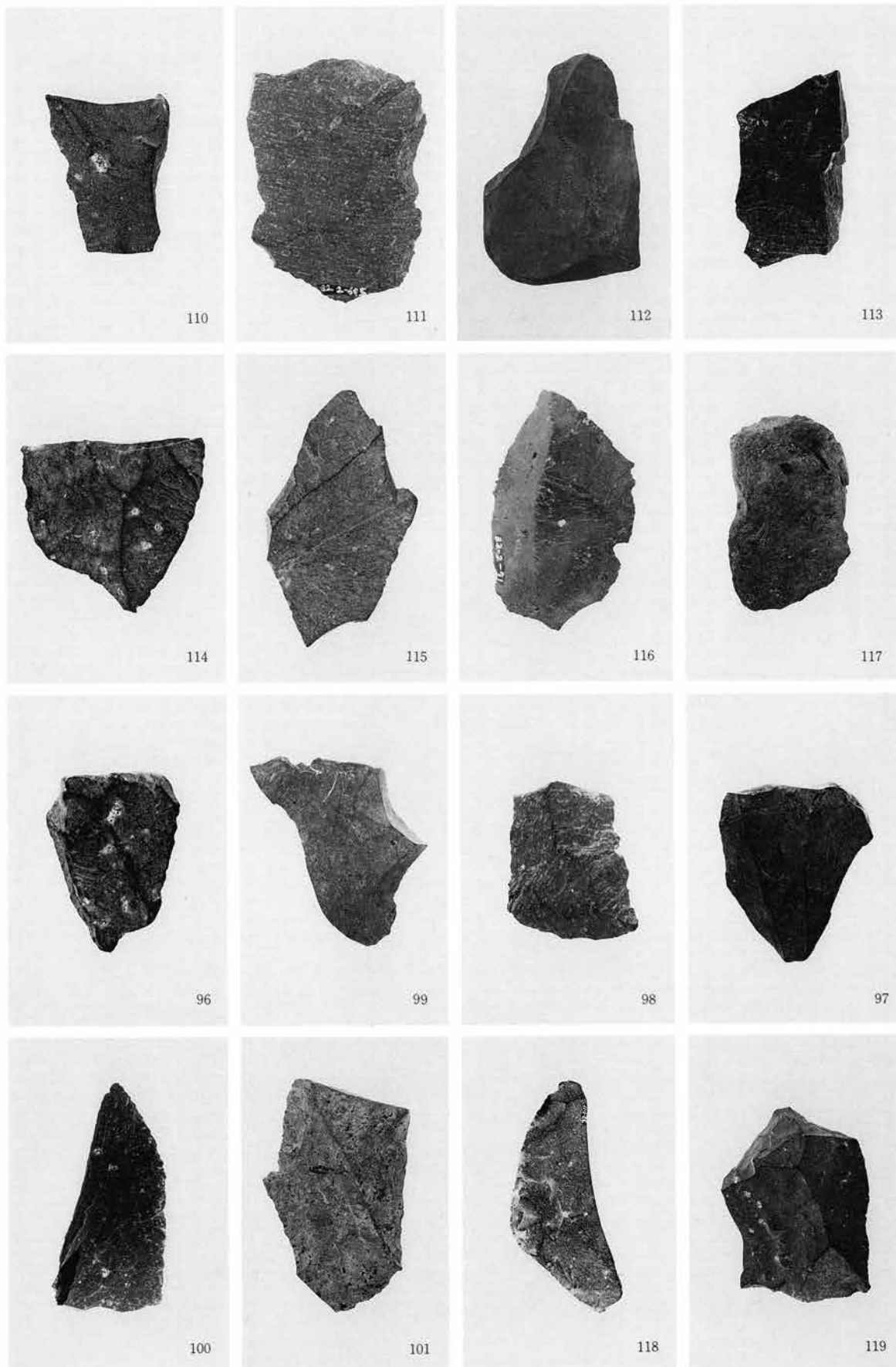
A区出土の石器 (4)



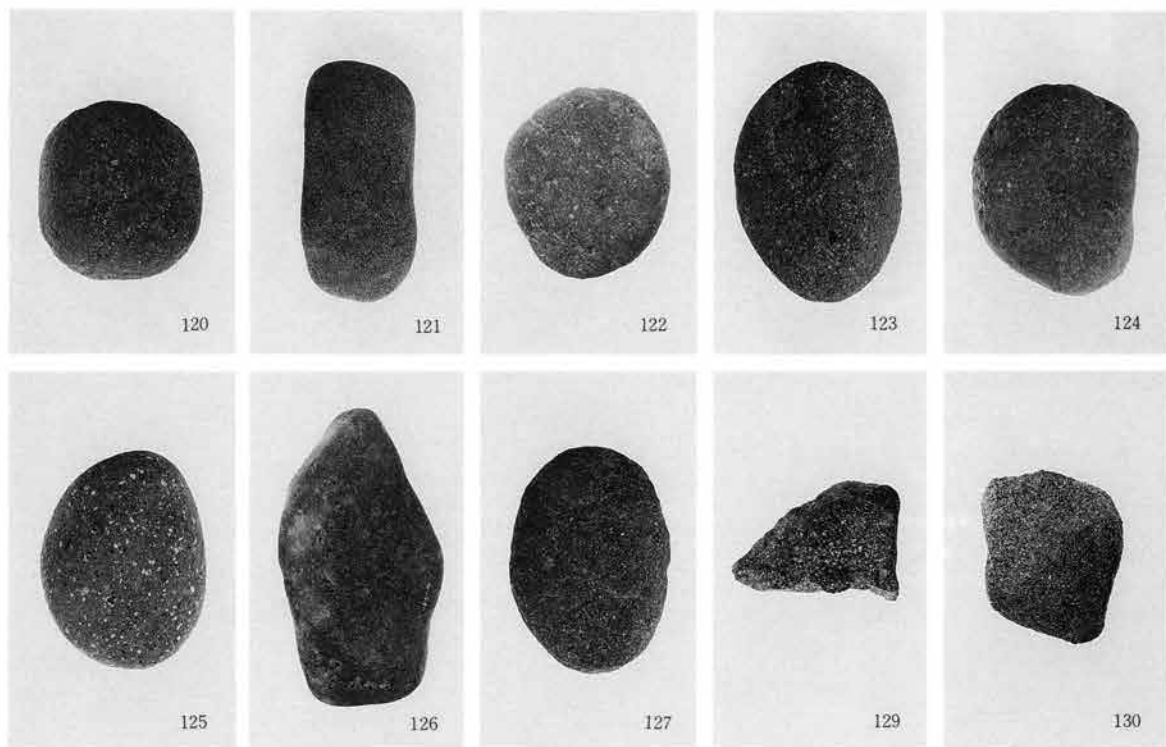
A区出土の石器 (5)



A区出土の石器 (6)



A区出土の石器 (7)

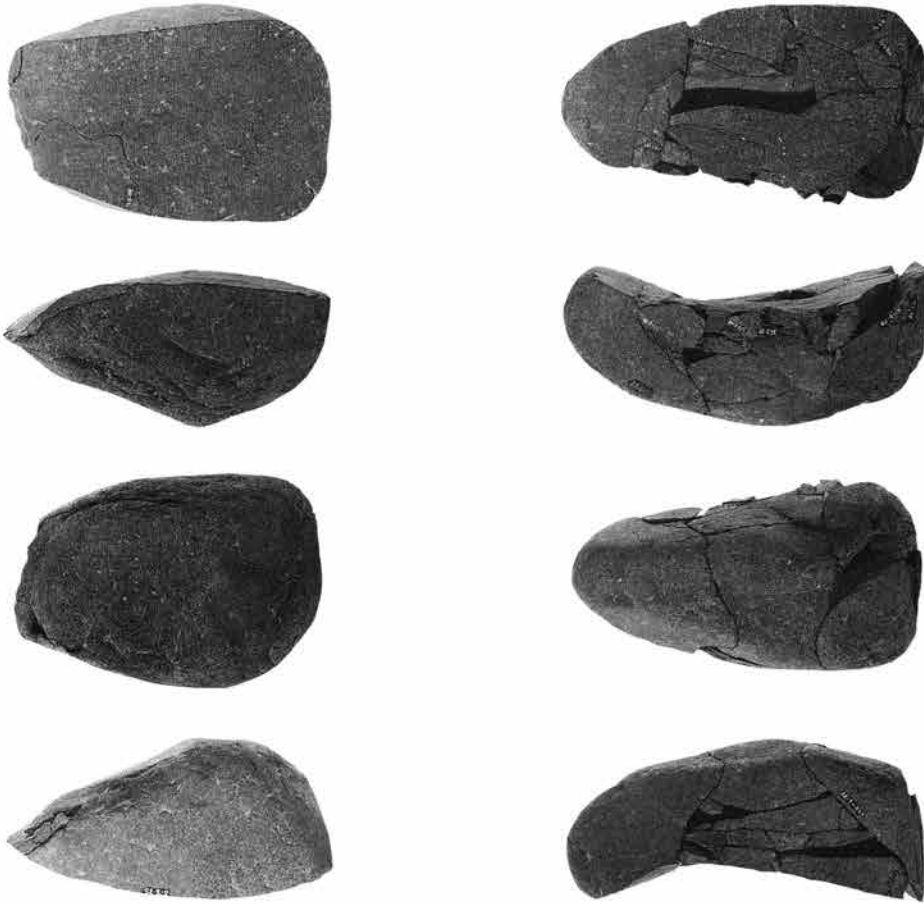


1 A区出土の石器 (8)

No. A - 1



2 A区出土の接合資料 (1)



No. A - 1



No. A - 2



A区出土の接合資料 (2)

PL 14



No. A - 3



No. A - 4



No. A - 5



No. A - 9



No. A - 16



A区出土の接合資料 (3)

No. A - 19



No. A - 20



No. A - 50



No. A - 66



A区出土の接合資料 (4)

PL 16



No. A - 65



No. A - 51



No. A - 47



No. A - 52



No. A - 58



No. A - 32



A区出土の接合資料(5)



No. A - 43

No. A - 57



No. A - 49



No. A - 40



No. A - 41



No. A - 8



No. A - 39





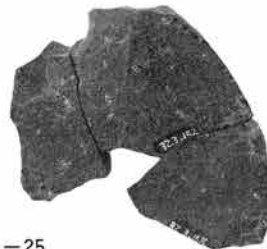
No. A - 23



No. A - 35



No. A - 25



No. A - 21



No. A - 12



No. A - 7



No. A - 45



No. A - 22



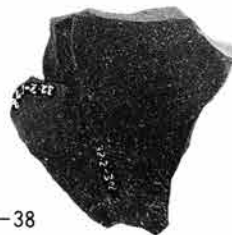
No. A - 28



No. A - 36



No. A - 38

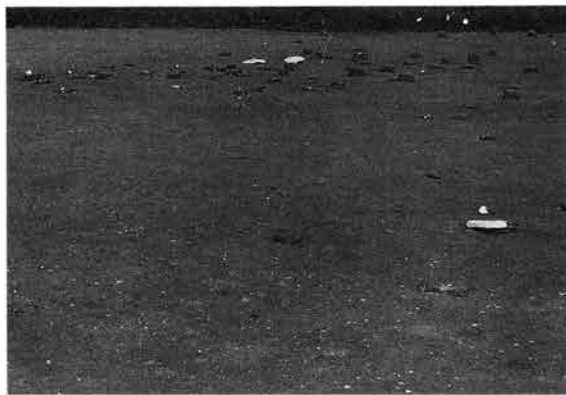


No. A - 26





1 B地点の調査風景（手前は4～12号ブロック、遺物の分布状況）



2 7・11号ブロック（遺物の出土状態1）



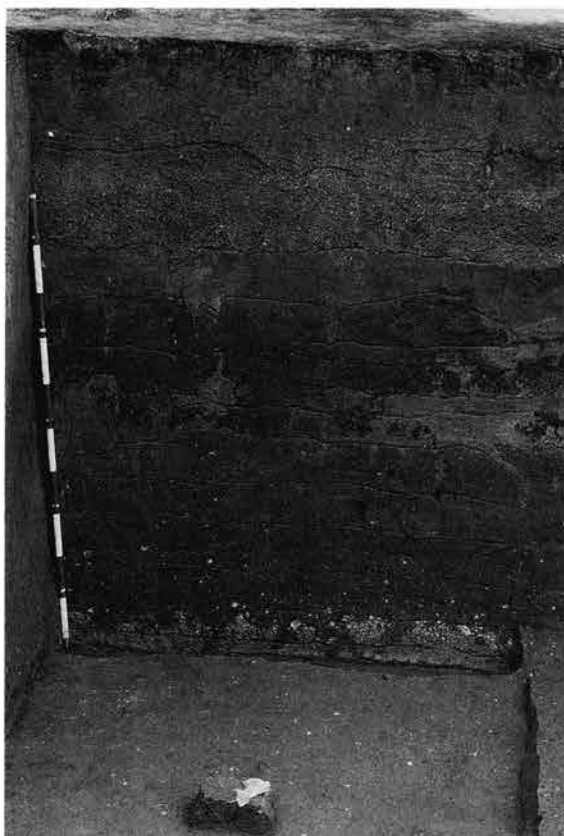
3 7・11号ブロック（遺物の出土状態2）



4 12号ブロック出土の石核



5 7号ブロック出土の石核



1 土層の堆積状態



2 3号ブロック (遺物の出土状態)



3 3号ブロック出土の石器 (1)



4 3号ブロック出土の石器 (2)



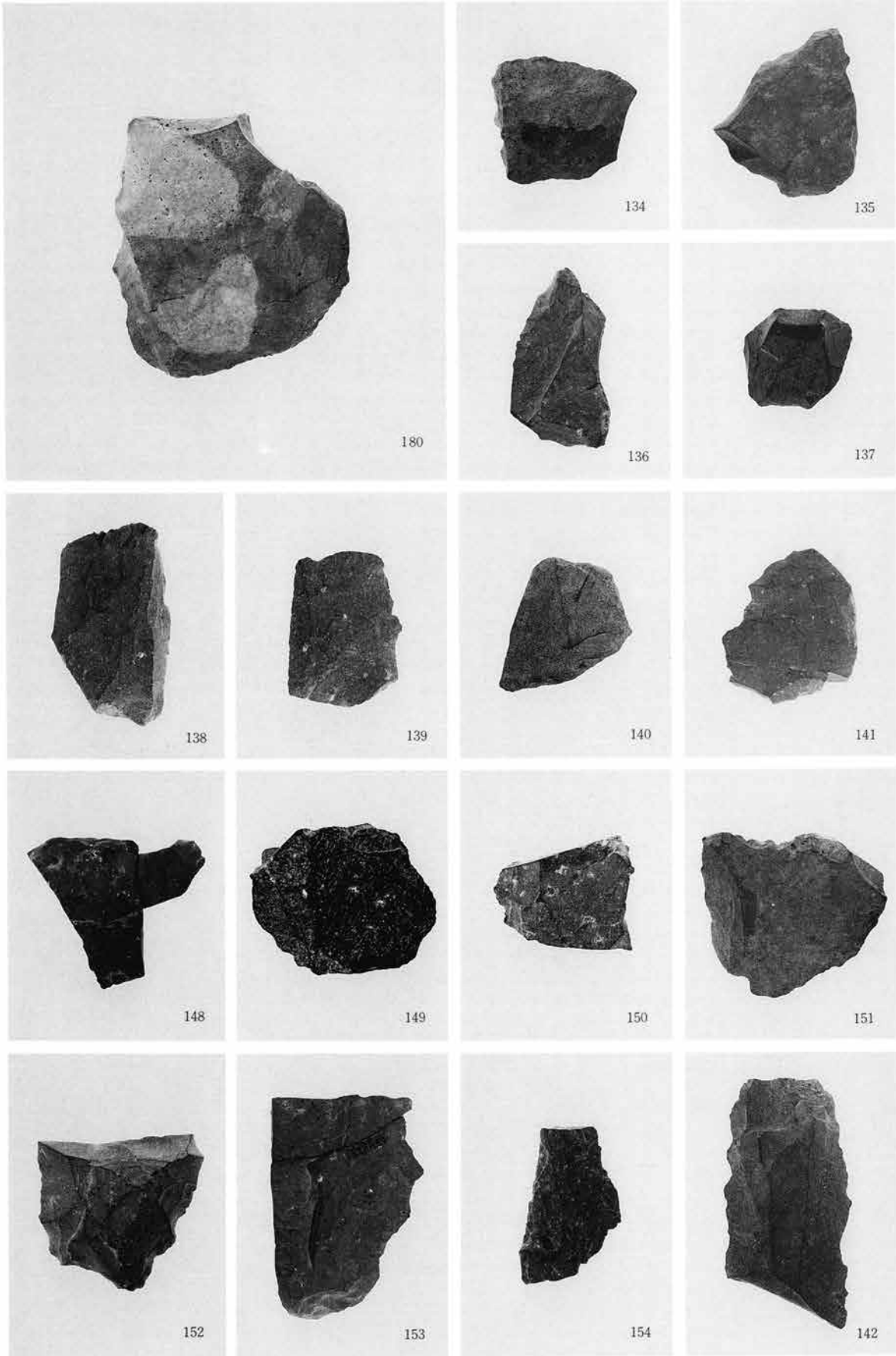
5 3号ブロック出土の石器 (3)



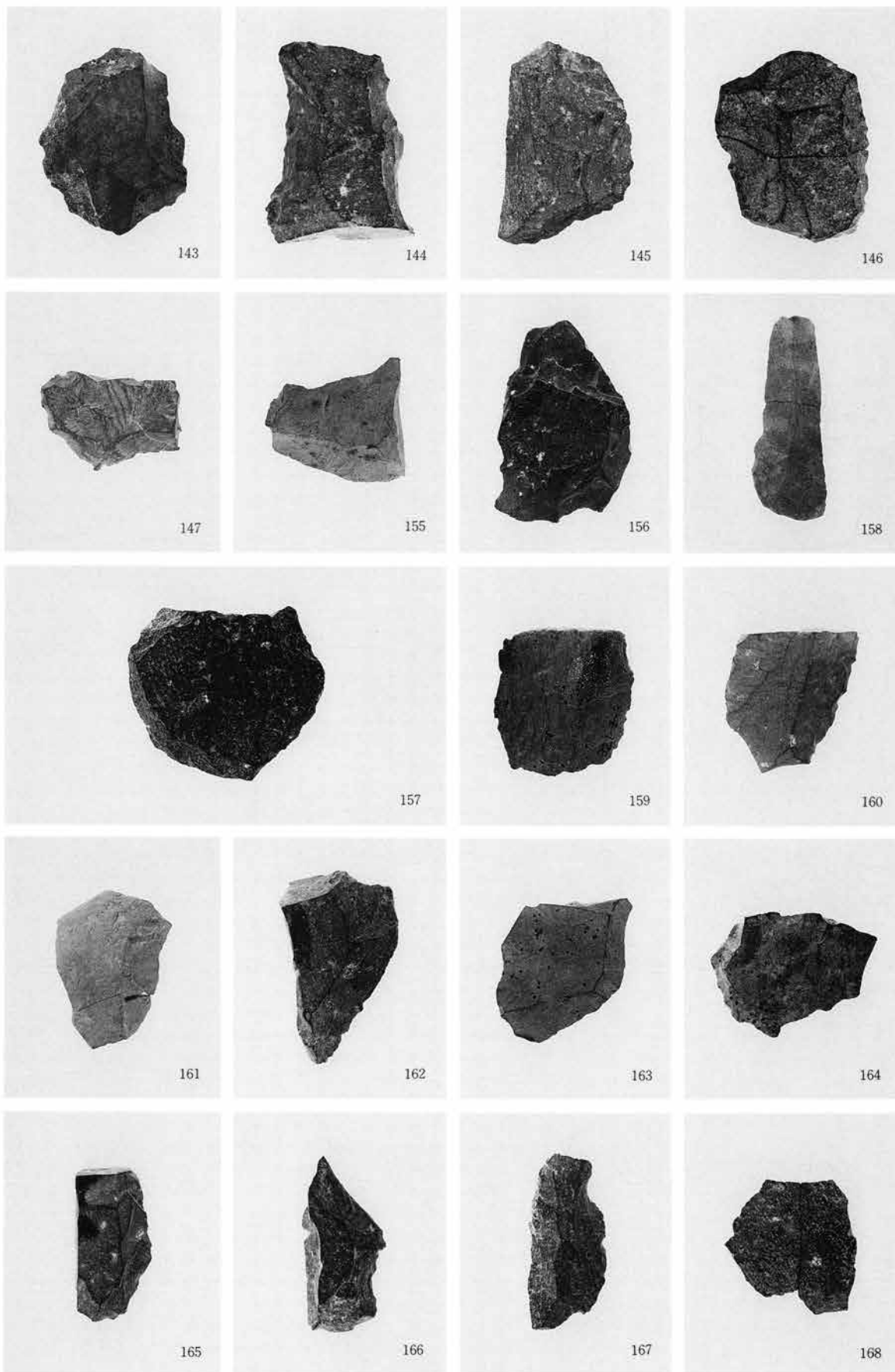
6 礫の出土状態 (1号ブロック、南側から)



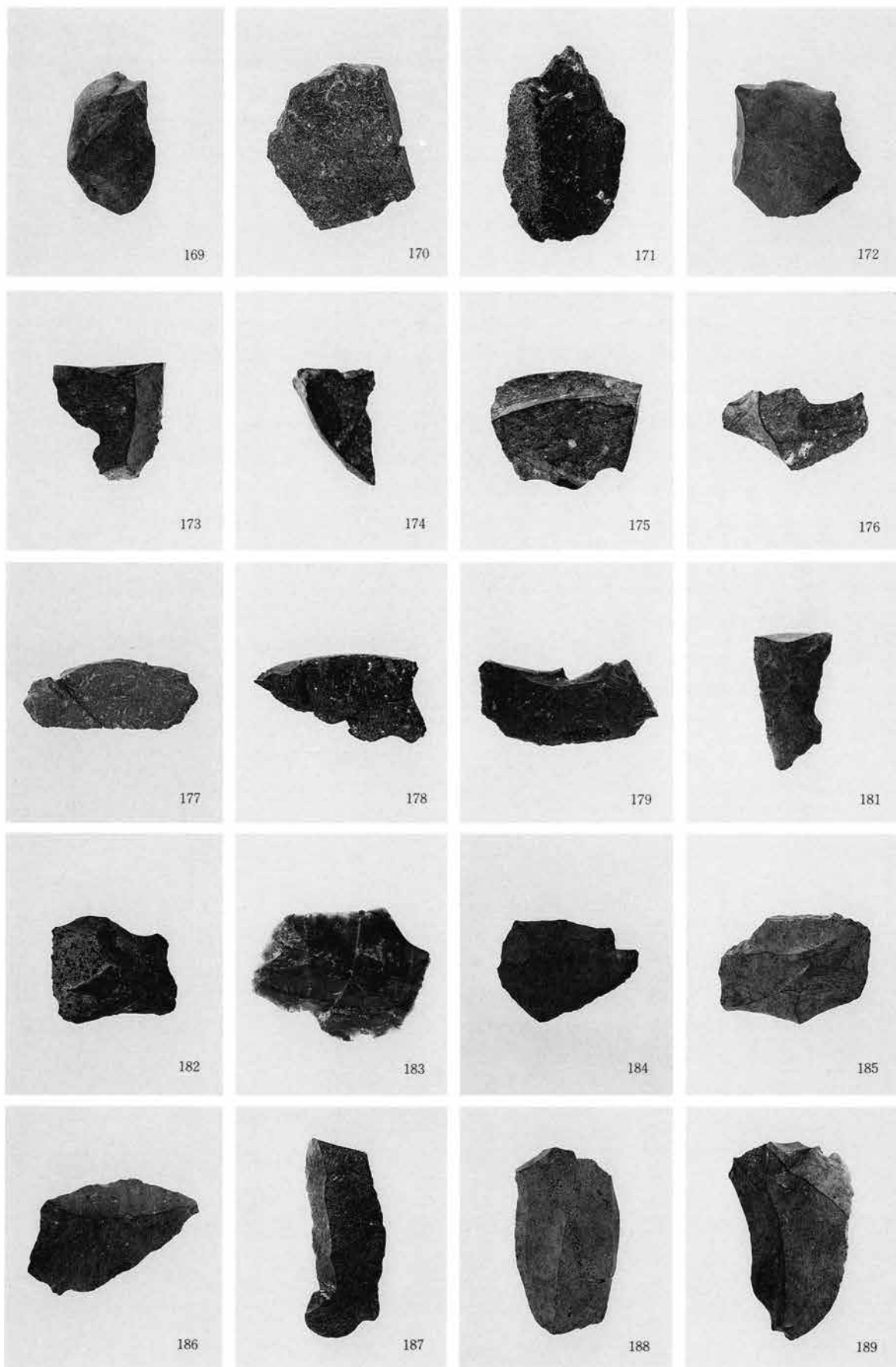
7 礫の出土状態 (1号ブロック、北側から)



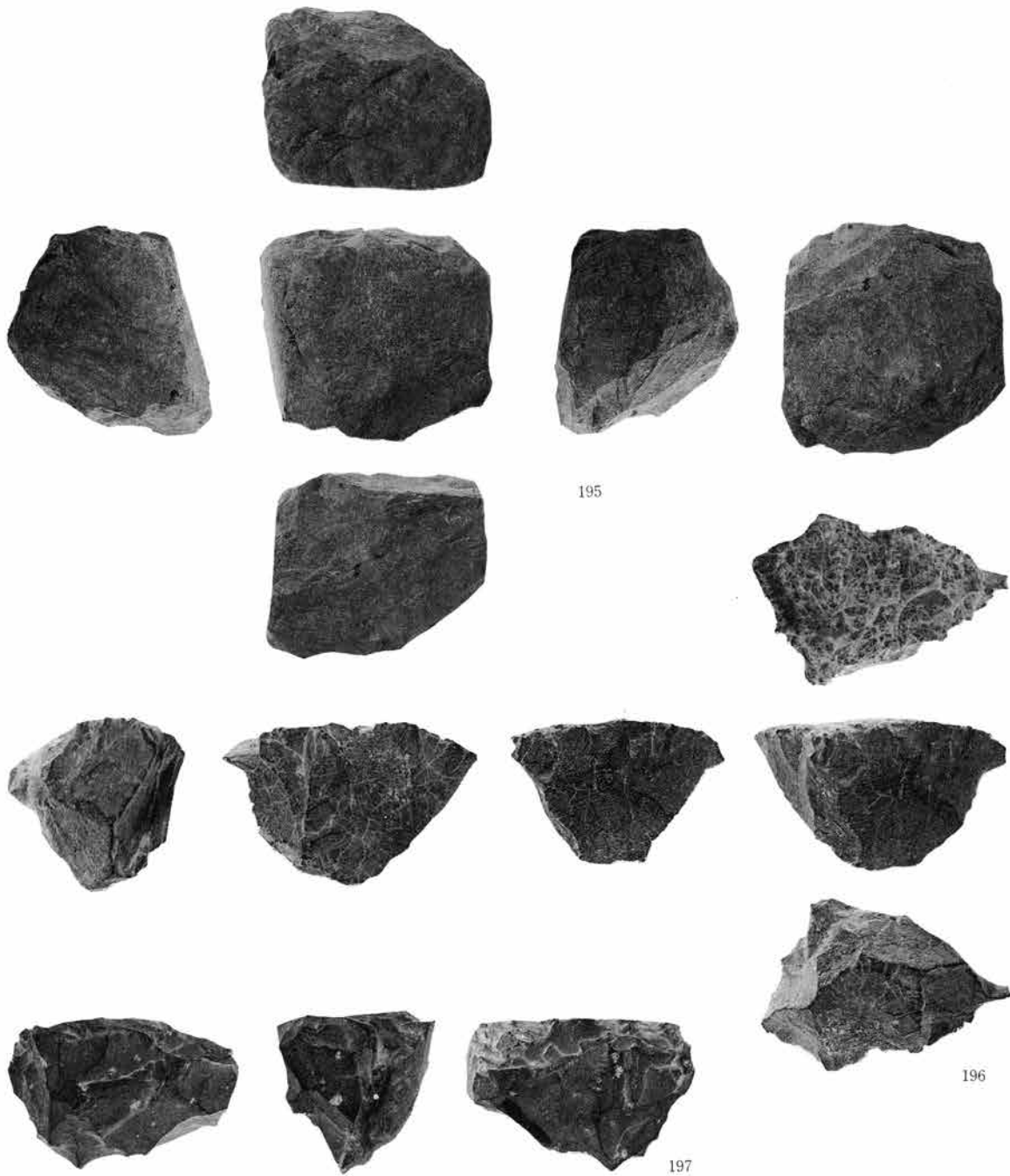
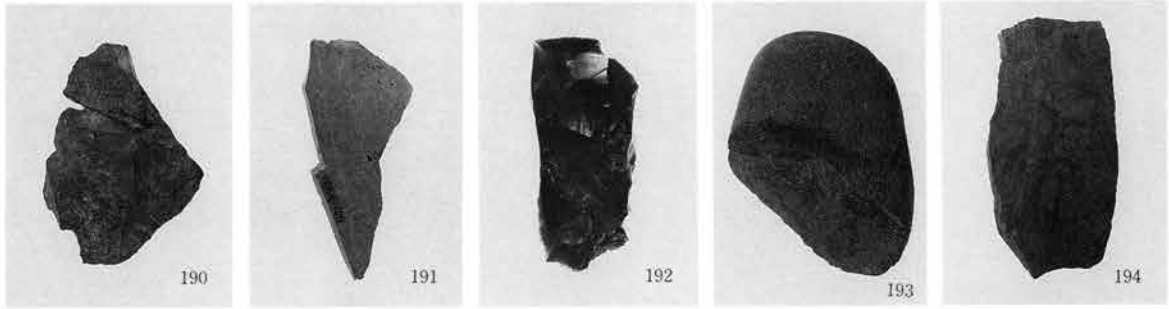
B区出土の石器 (1)



B区出土の石器 (2)



B区出土の石器 (3)



B区出土の石器 (4)



199



200



198



B区出土の石器 (5)

PL 26



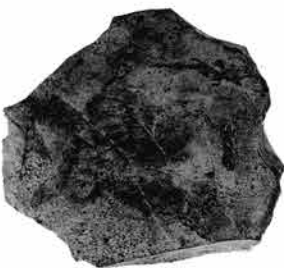
201



203



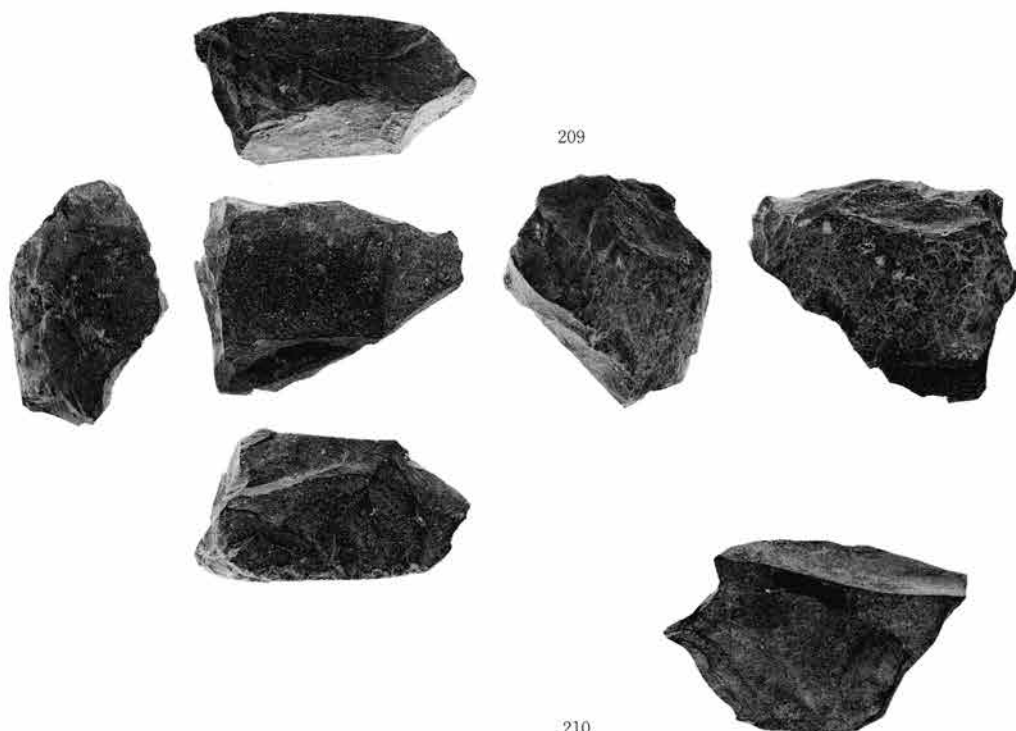
204



202



B区出土の石器 (6)



209



210

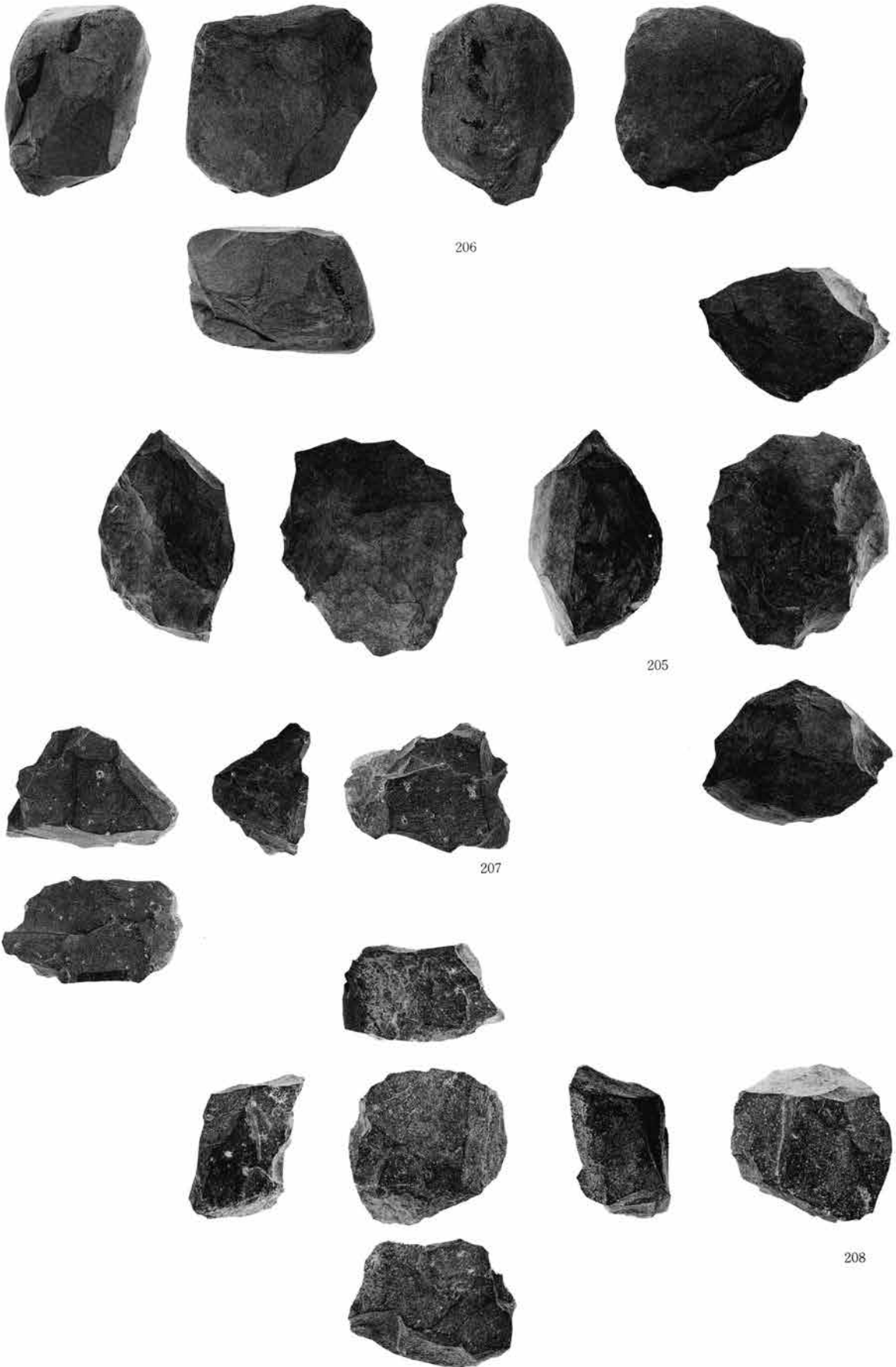


211

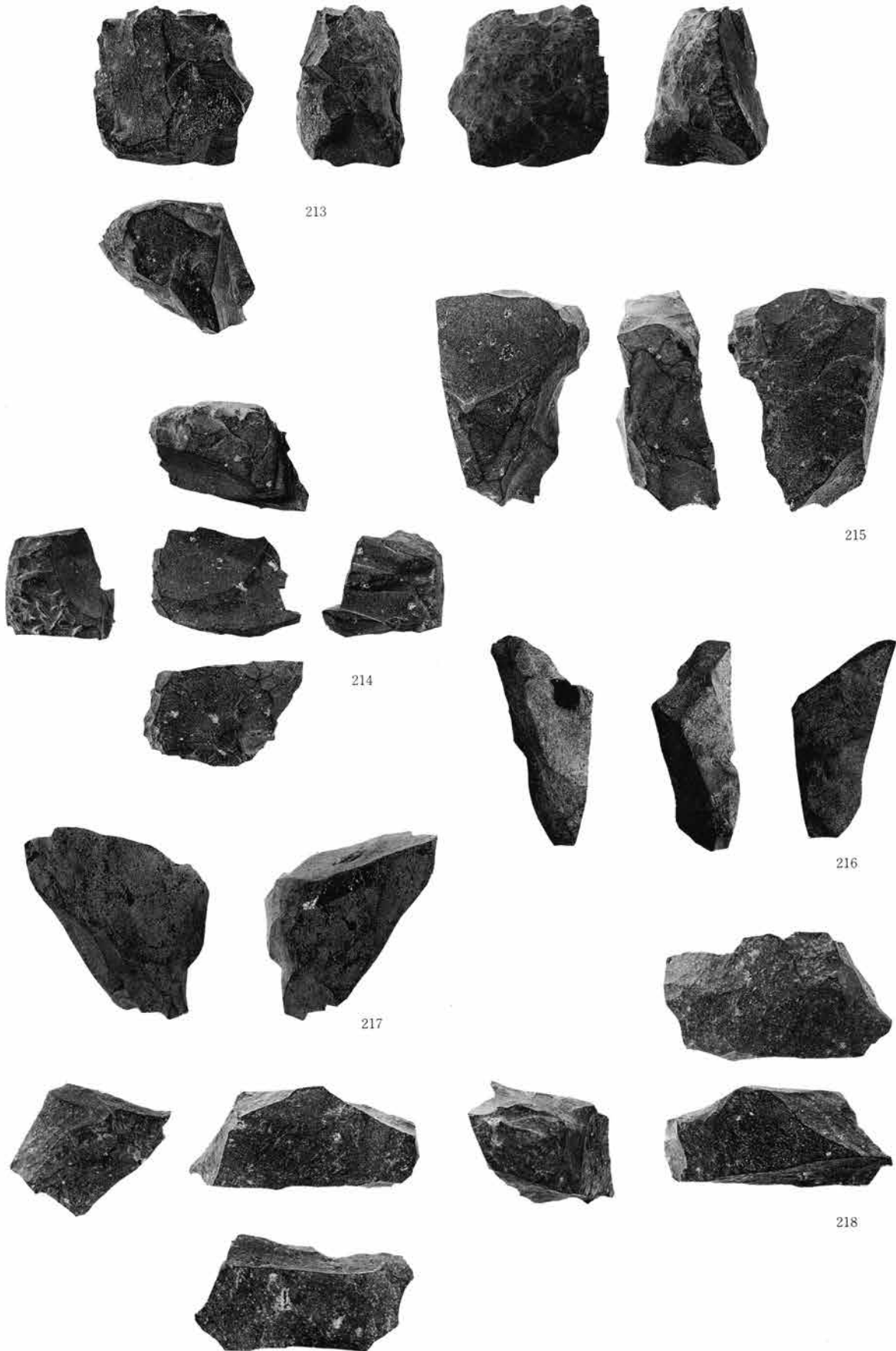


212

B区出土の石器 (7)



B区出土の石器 (8)



B区出土の石器 (9)

PL 30



219



220



221



222



223



224



225



B区出土の石器 (10)



226



227

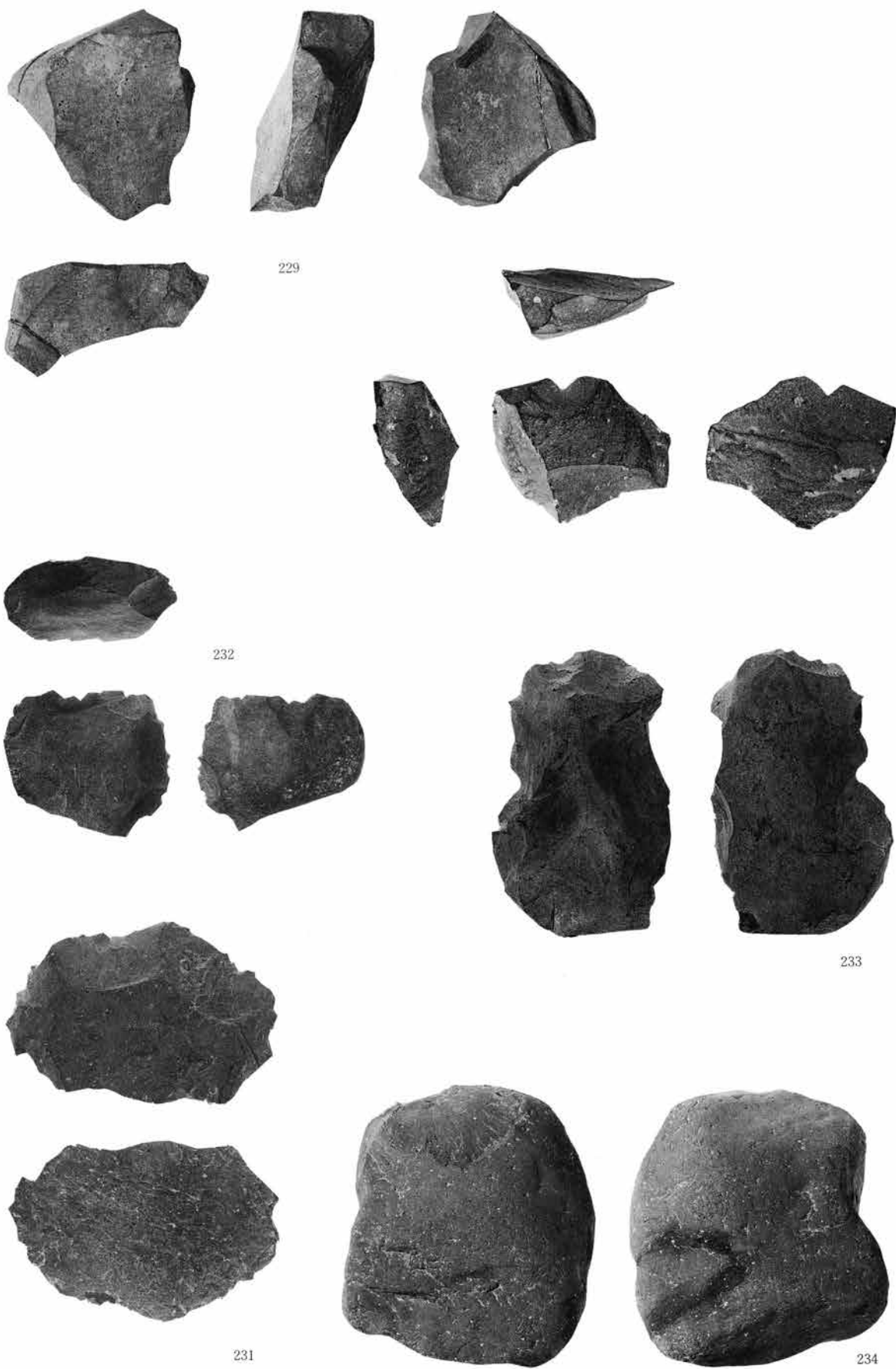


228

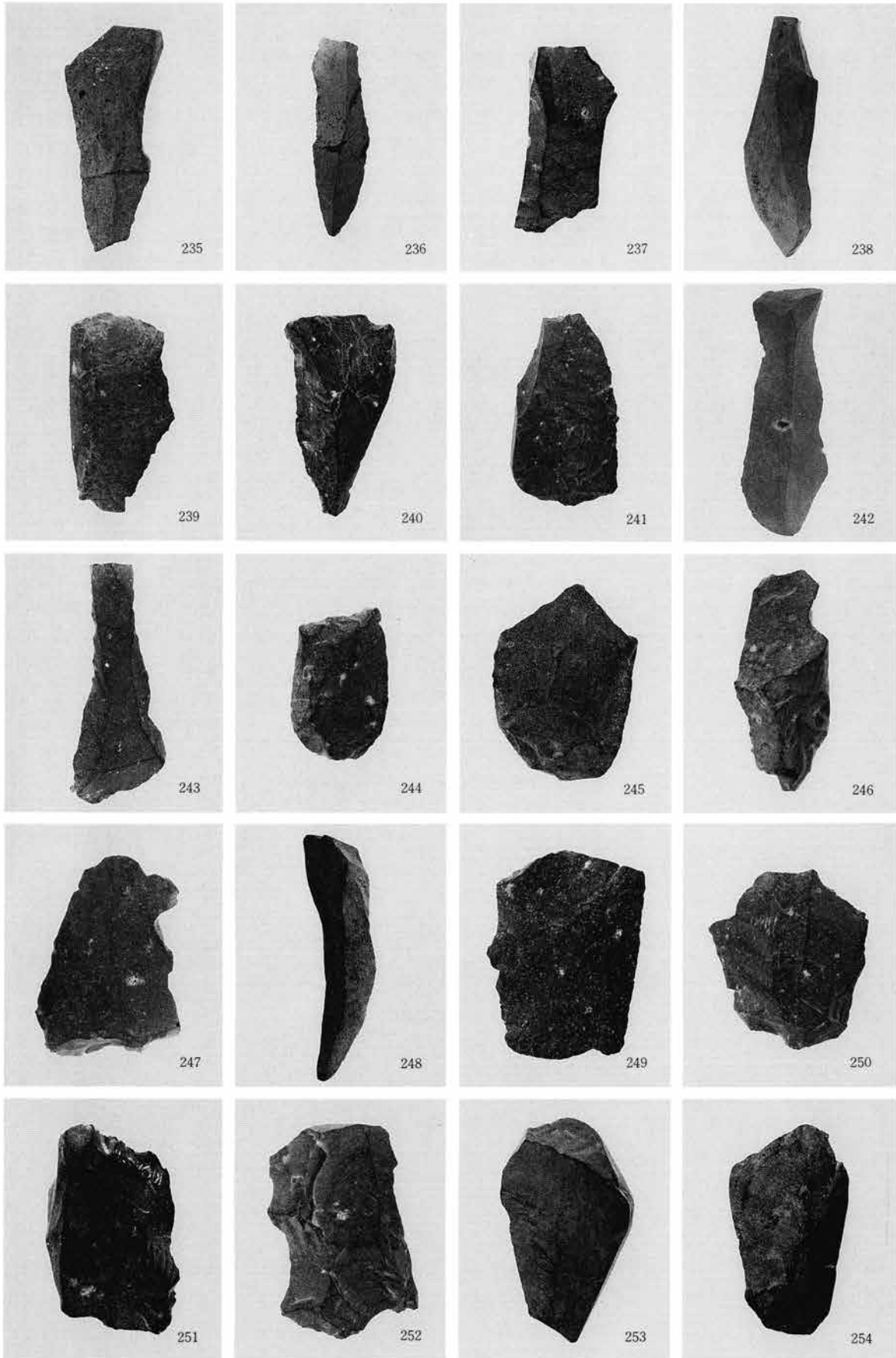


230

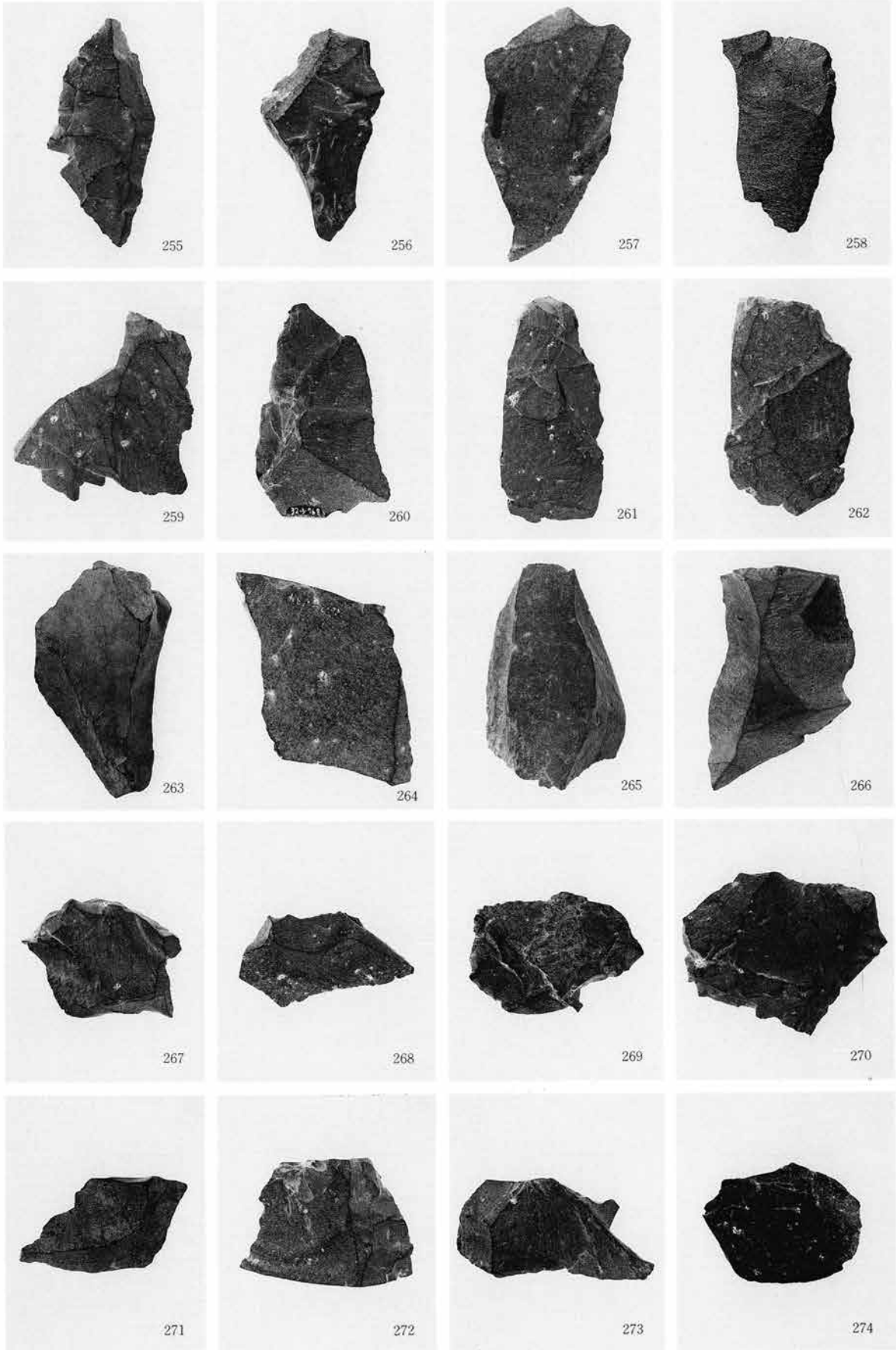
B区出土の石器 (1)



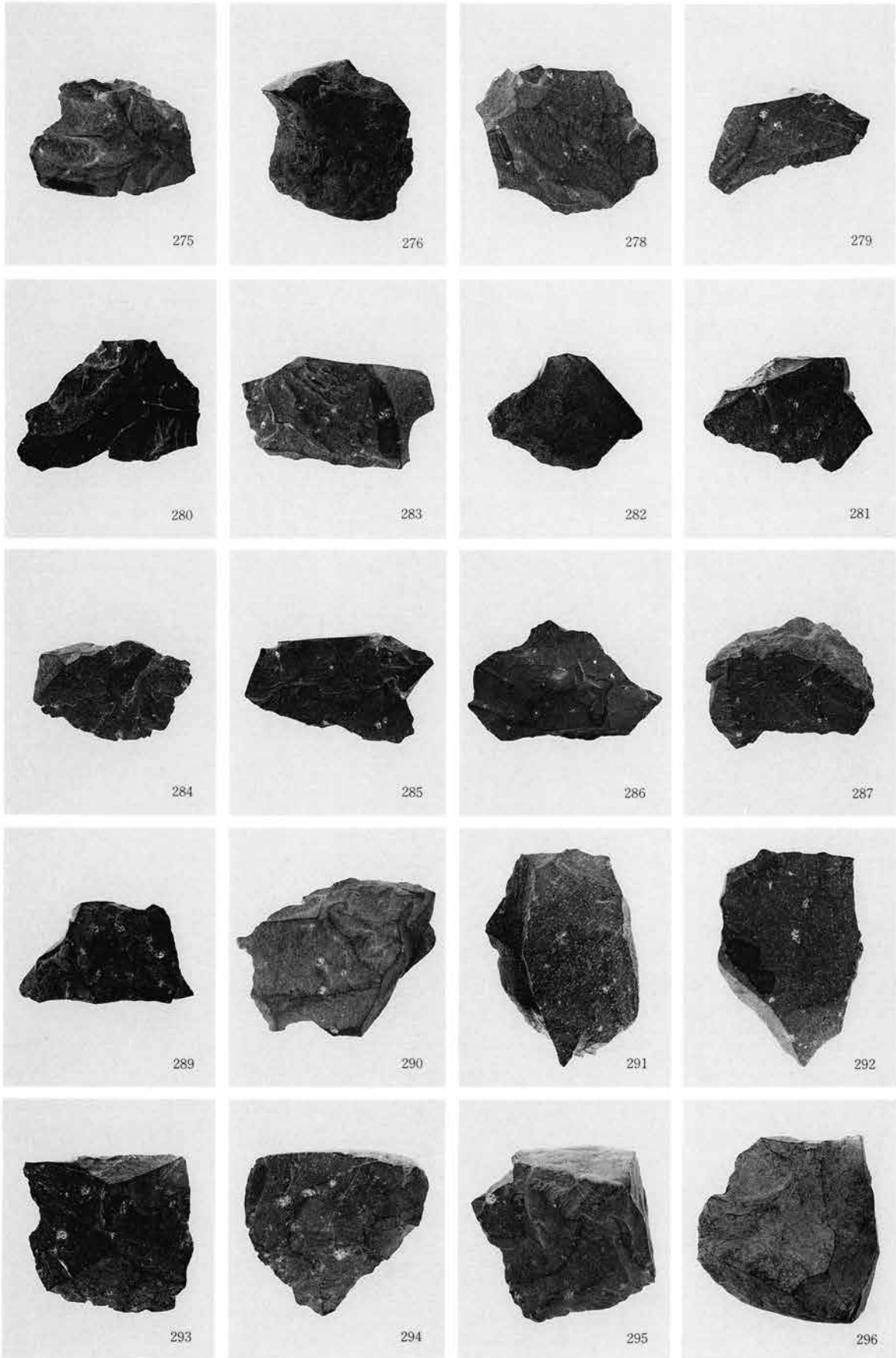
B区出土の石器 (12)



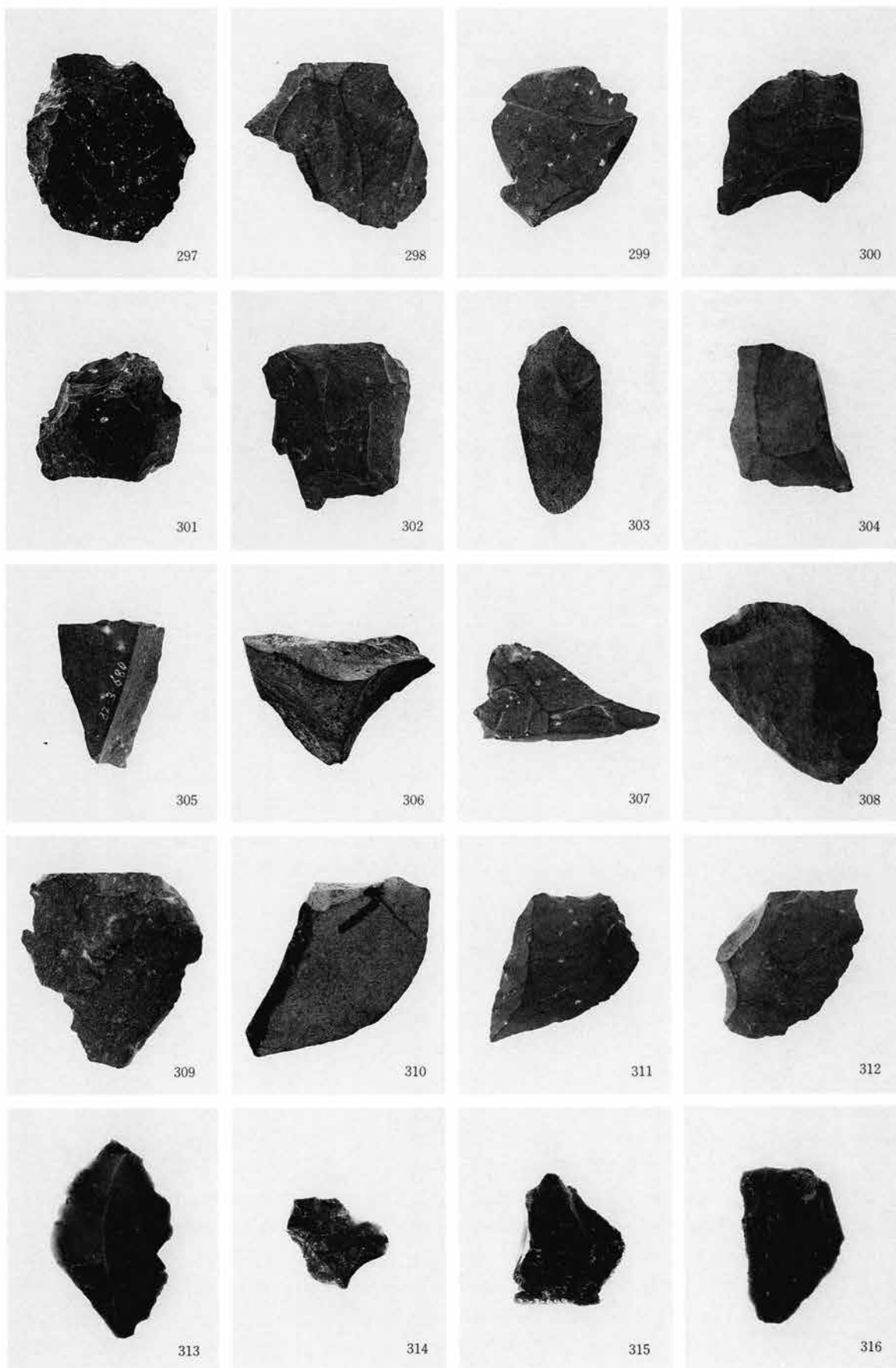
B区出土の石器 (13)



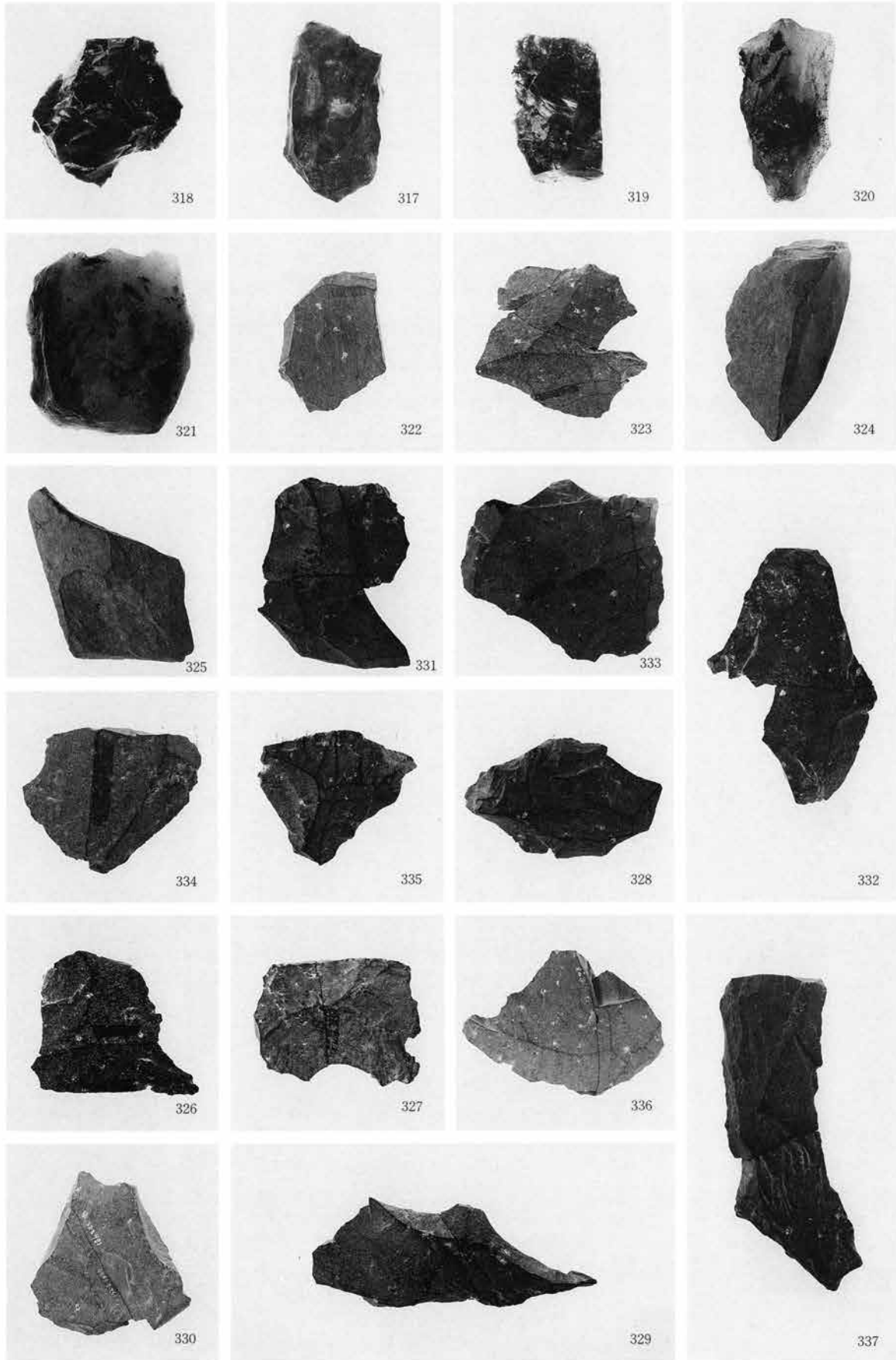
B区出土の石器 (14)



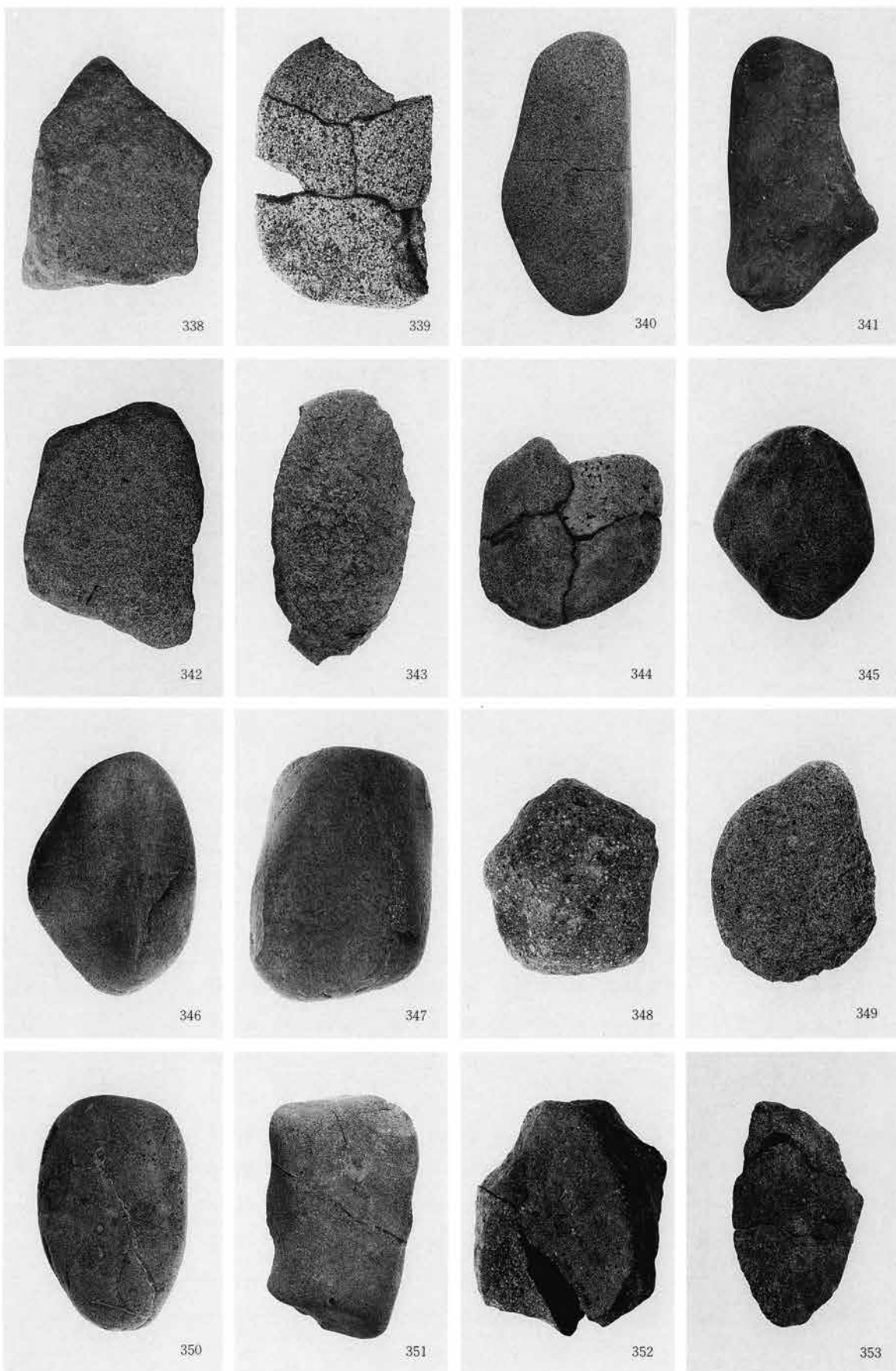
B区出土の石器 (15)



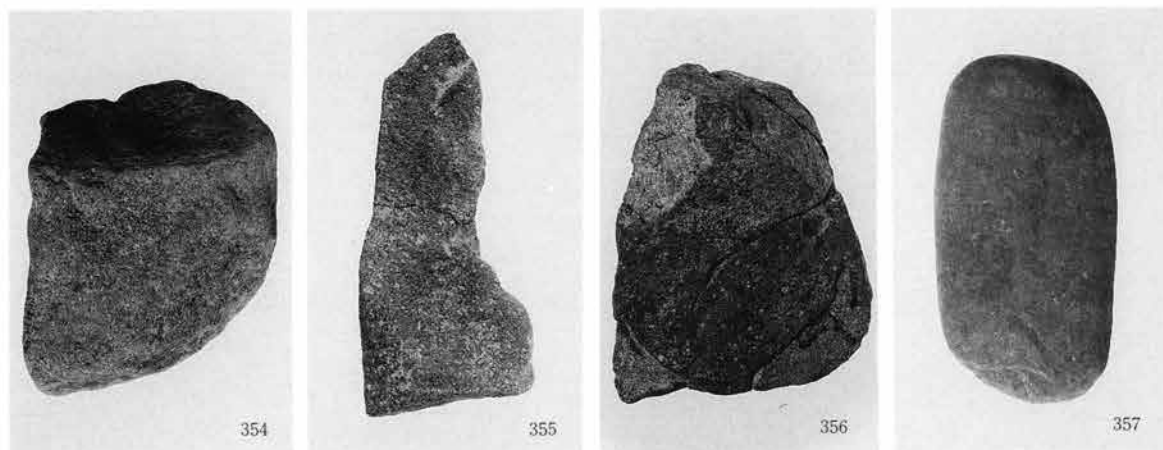
B区出土の石器 (16)



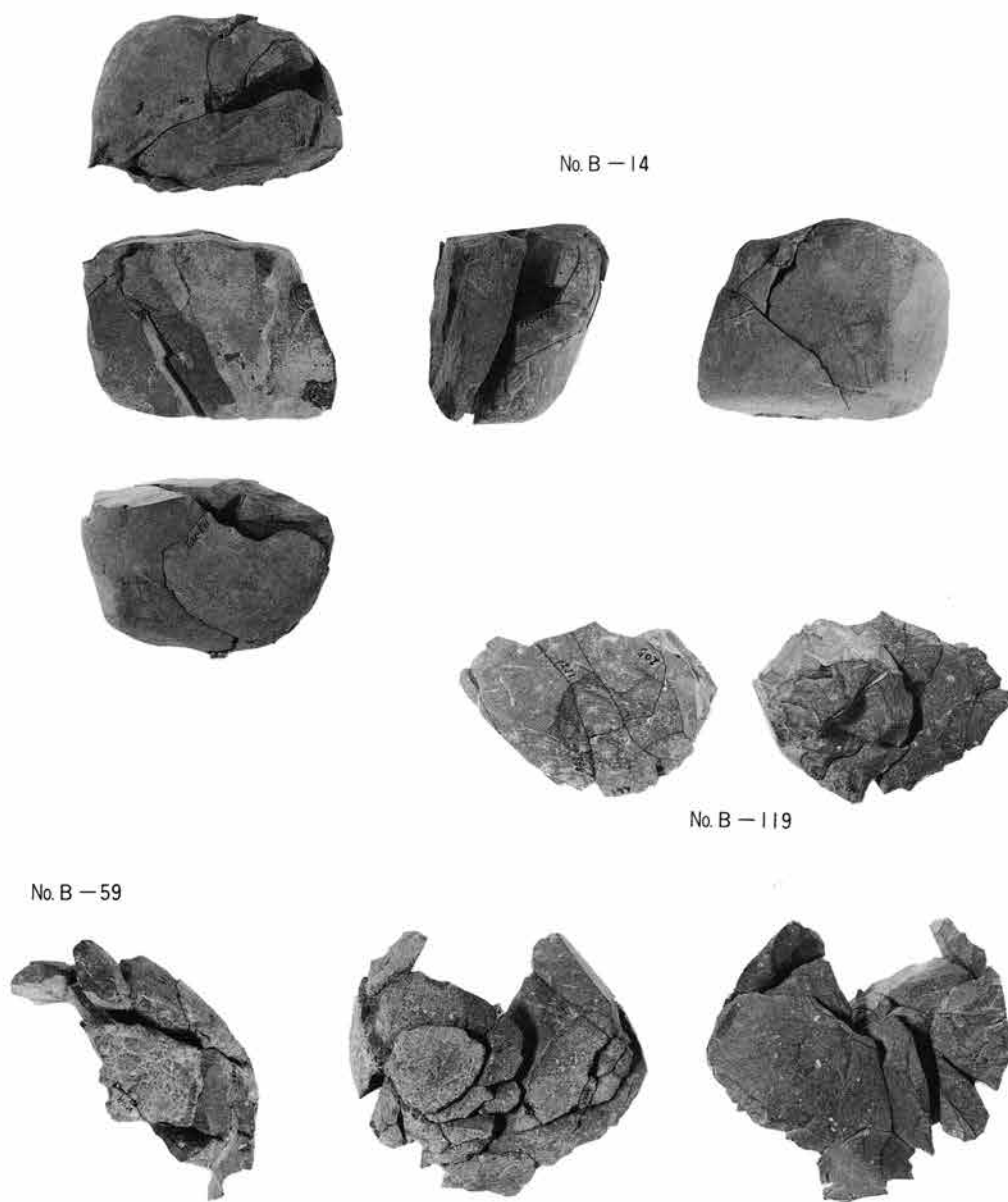
B区出土の石器 (17)



B区出土の石器 (18)



1 B区出土の石器 (19)



2 B区出土の接合資料 (1)



No. B - 15



No. B - 19



No. B - 22





No. B-23



No. B-114



No. B-44



No. B-17



PL 42



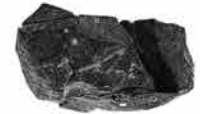
No. B-18



No. B-66



No. B-68



No. B-120



No. B-63



B区出土の接合資料(4)



No. B-50

No. B-70



No. B-64



No. B-26



No. B-16



No. B-115



No. B-24





No. B - 65



No. B - 73



No. B - 116



No. B - 69



No. B - 11



No. B - 71



No. B - 52





No. B - 20



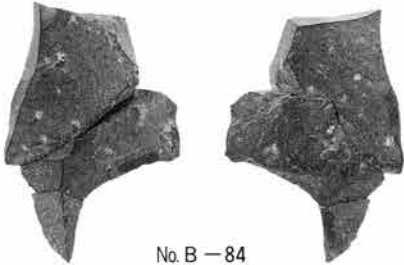
No. B - 51



No. B - 75



No. B - 76



No. B - 84



No. B - 56



No. B - 58



No. B - 118



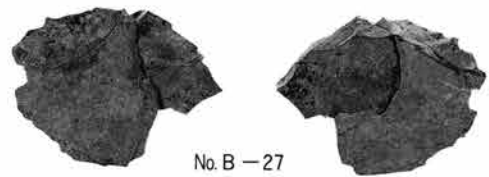
No. B - 107



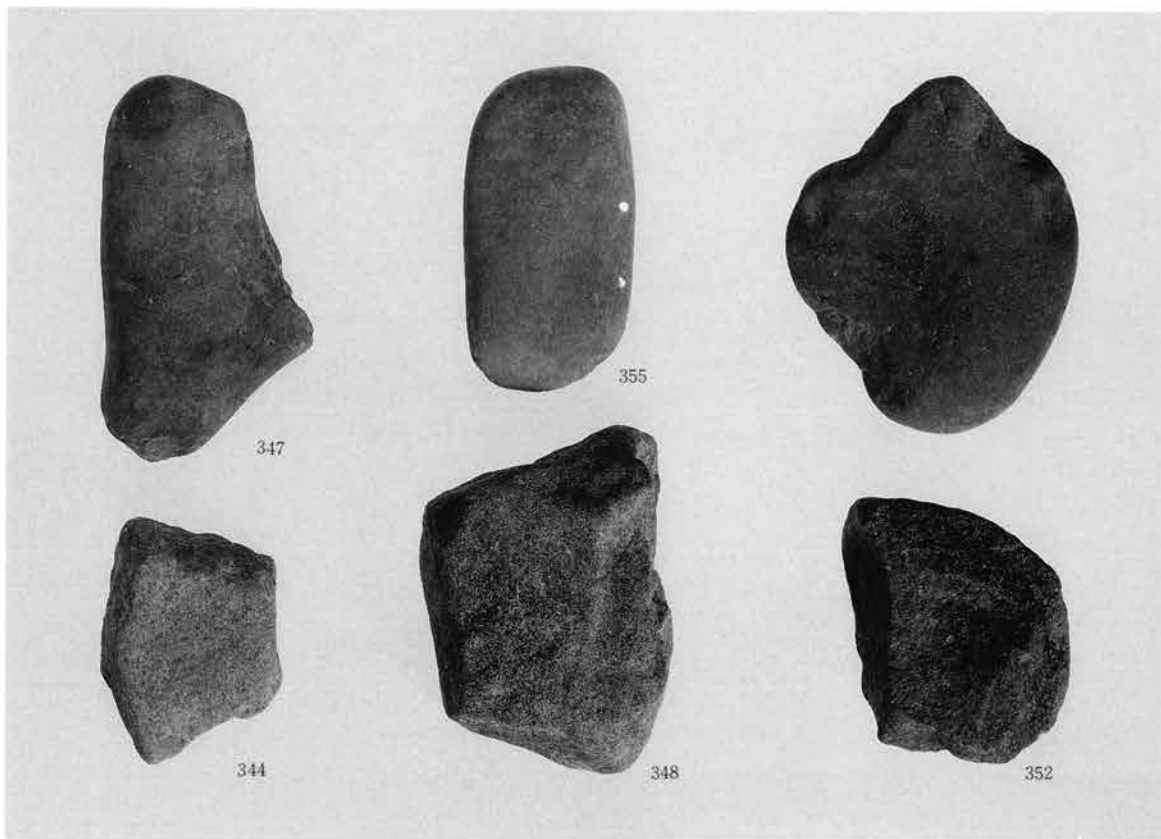
No. B - 25



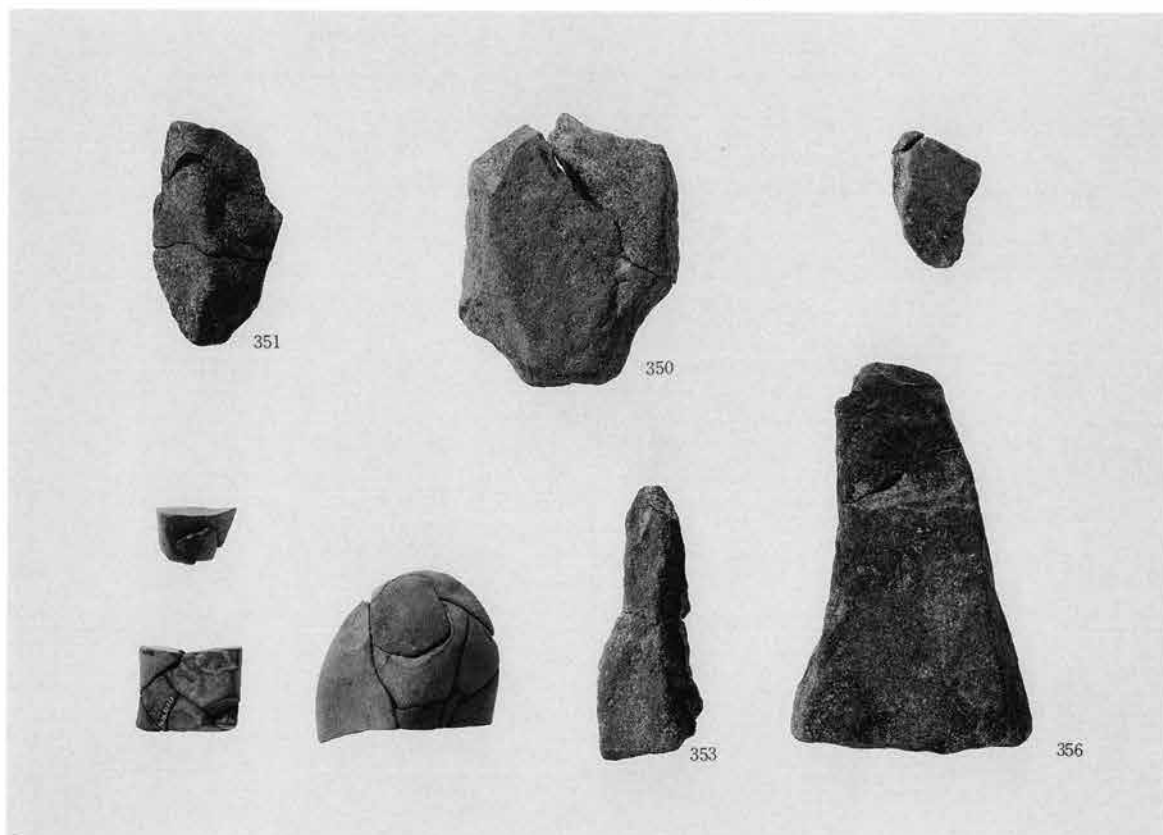
No. B - 21



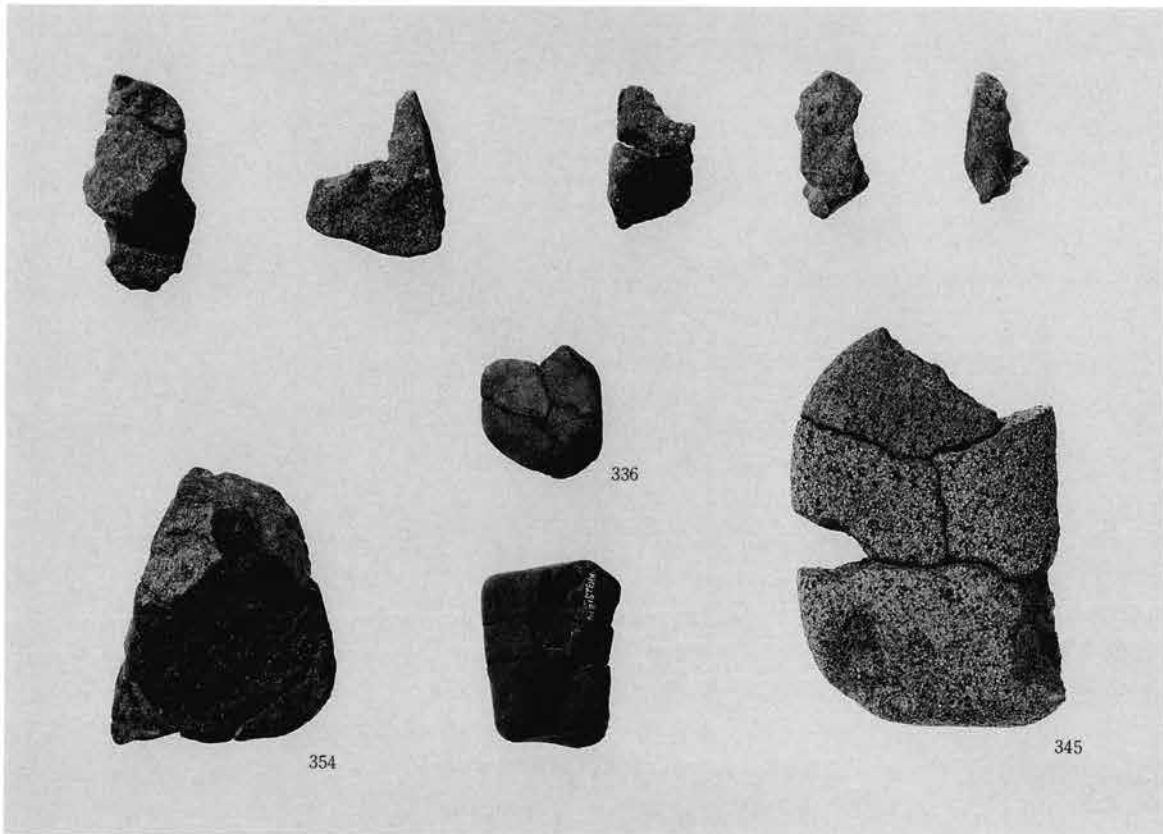
No. B - 27



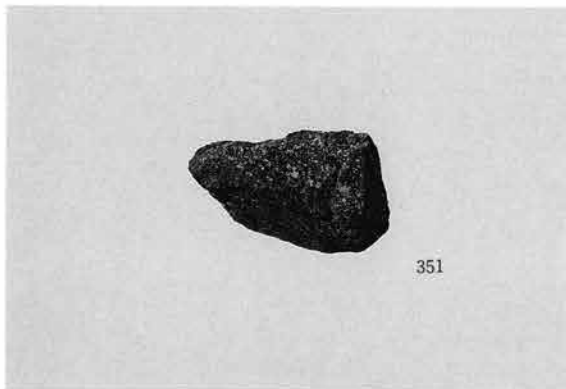
1 A・B区出土の礫石器・類型A (1)



2 A・B区出土の礫石器・類型B (2)



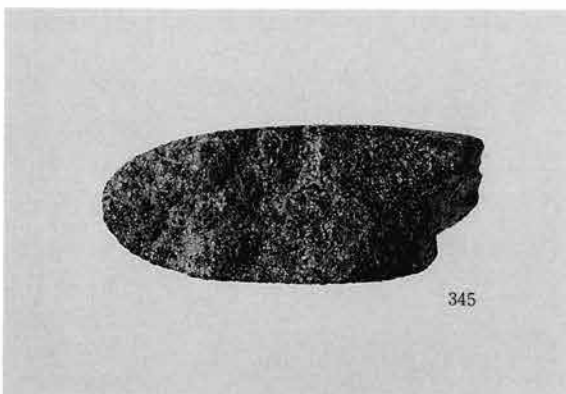
1 A・B区出土の礫石器・類型C (3)



2 石器断面の状態・類型B (1)



3 石器断面の状態・類型B (2)



4 石器断面の状態・類型C (3)



5 石器断面の状態・類型C (4)



調査風景

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第87集

勝保沢中ノ山遺跡Ⅱ

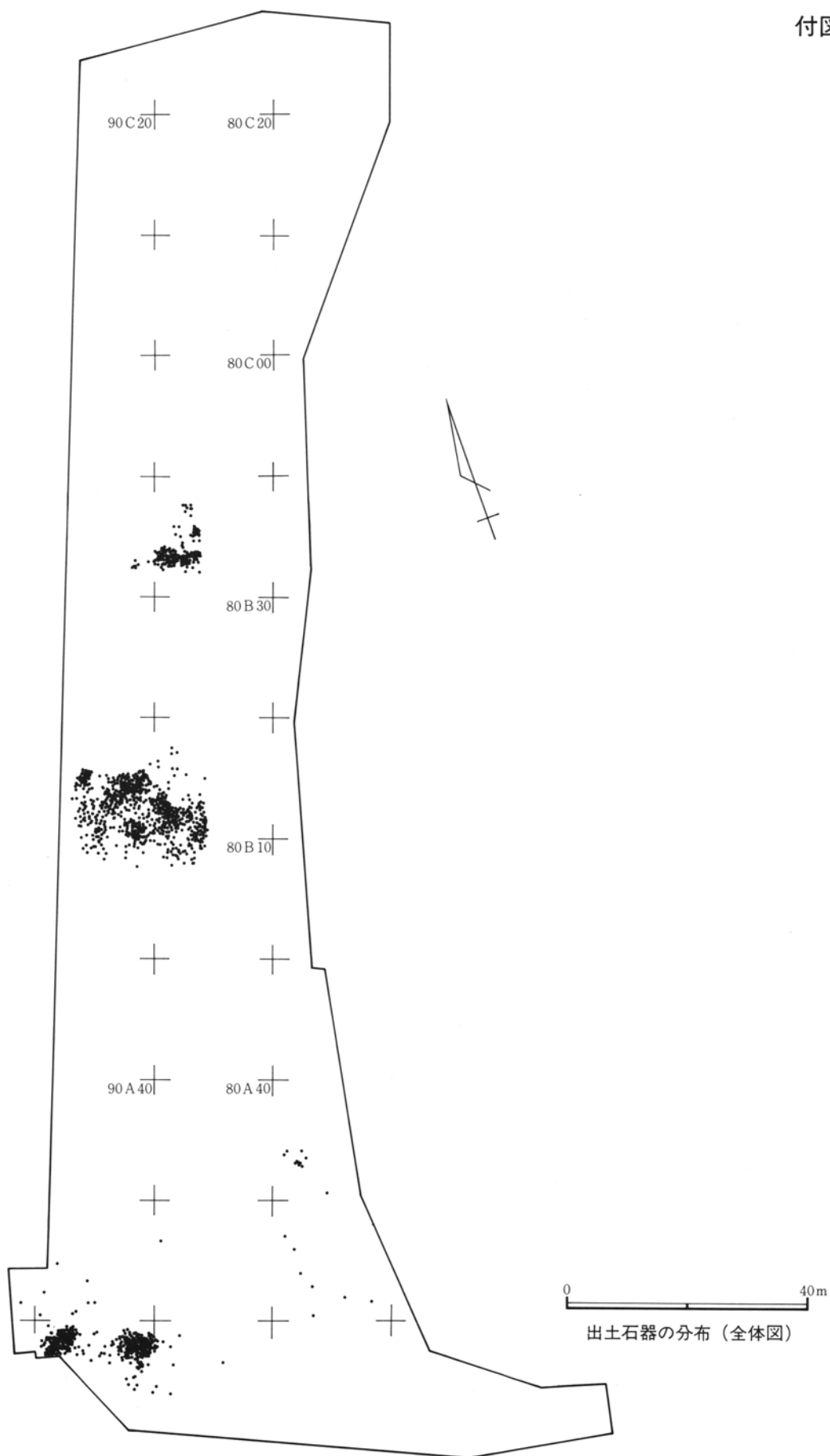
一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書 第25集一

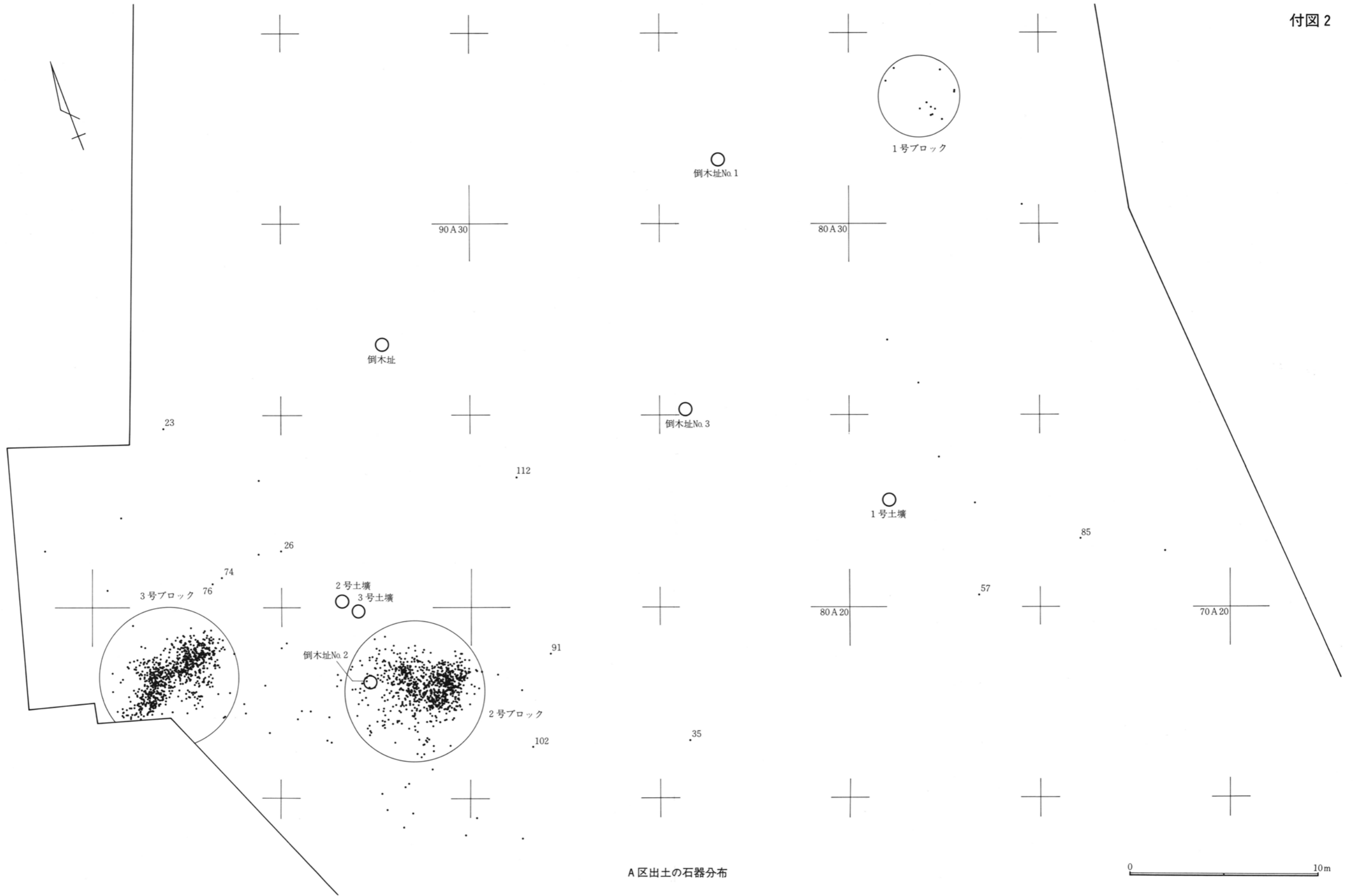
平成元年3月23日 印刷
平成元年3月31日 発行

発行・編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社

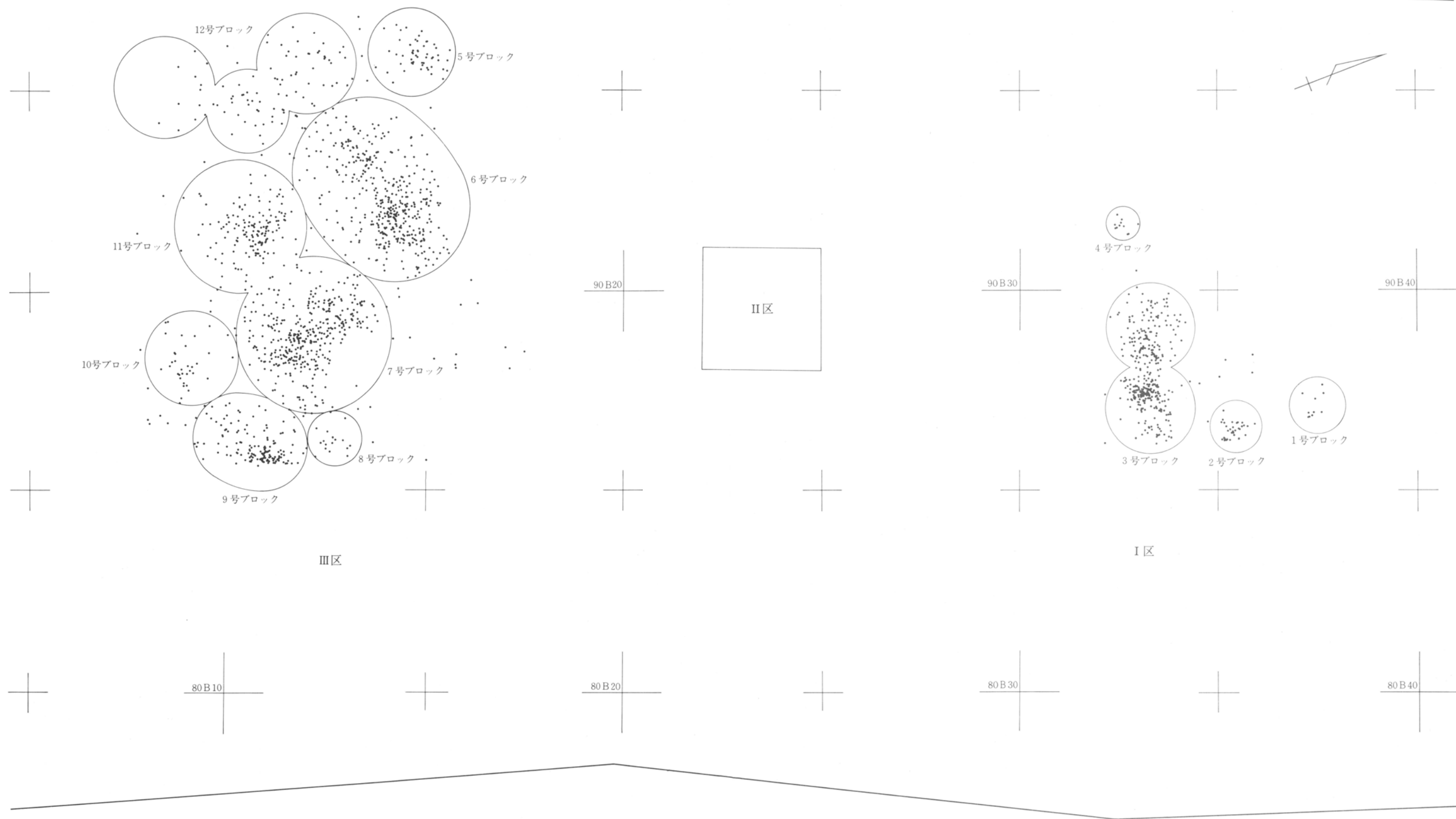
付図 1





A区出土の石器分布

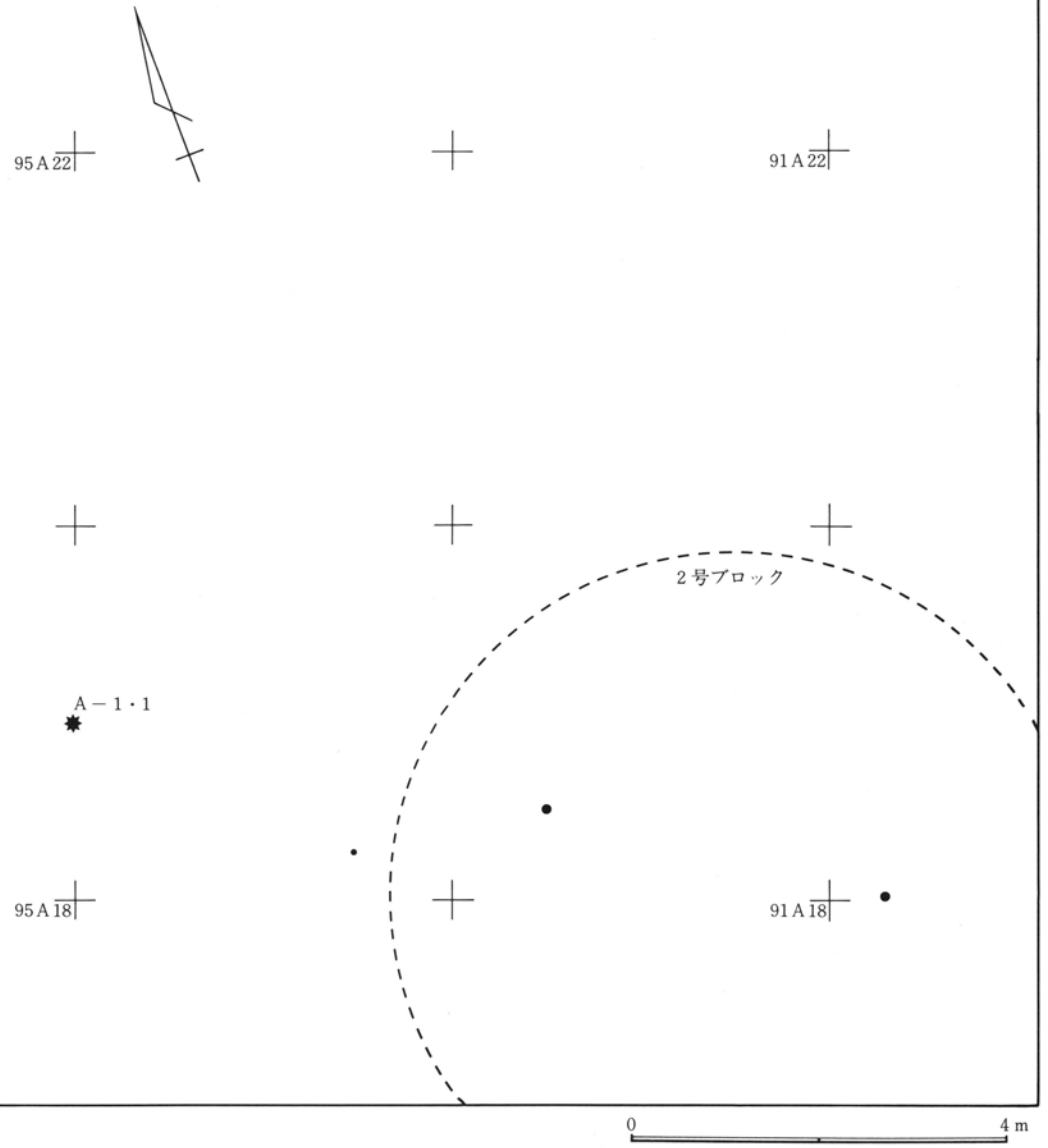
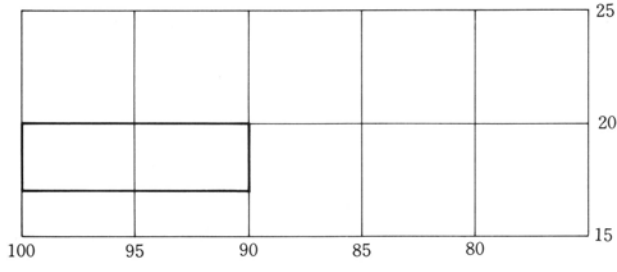
0 10m



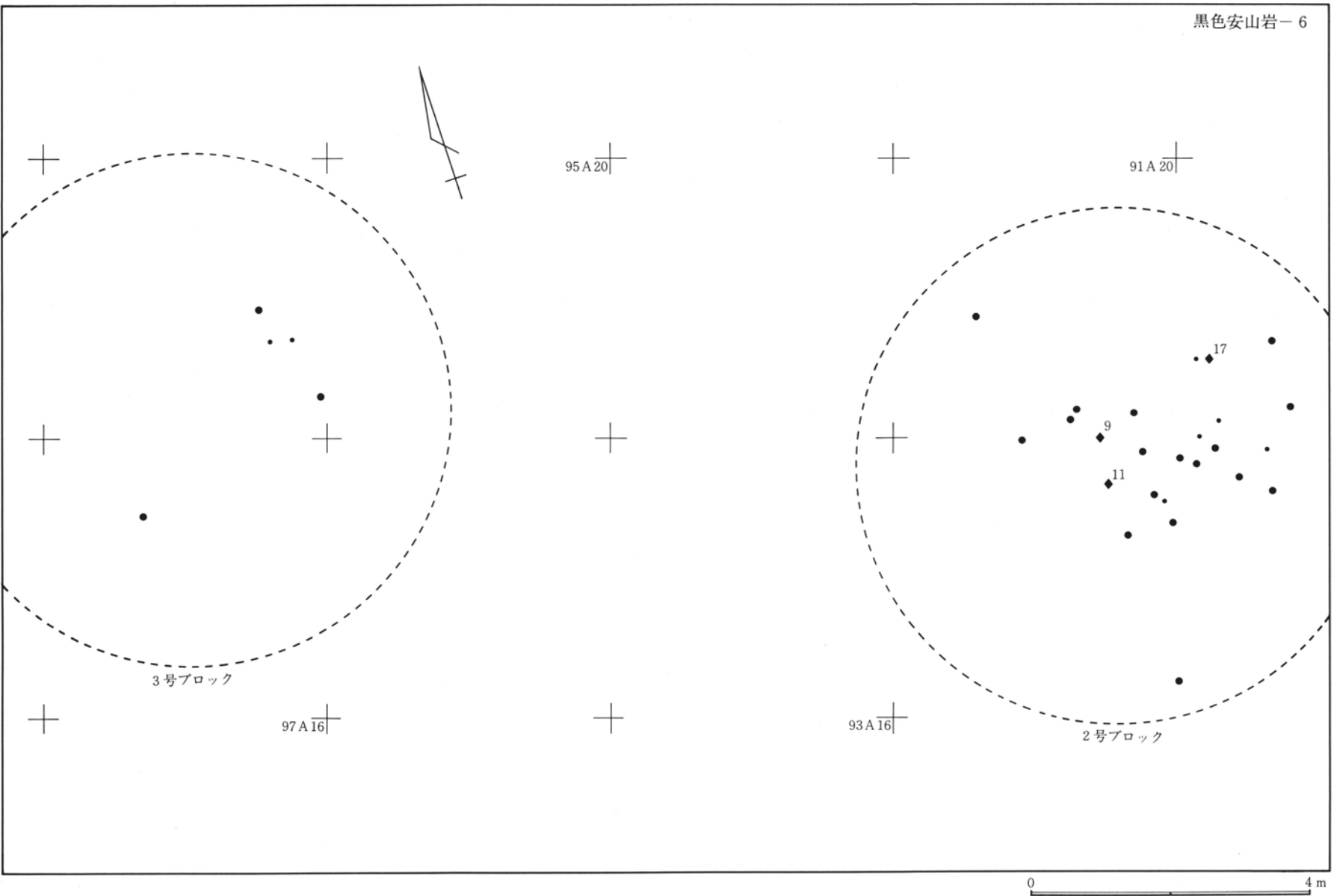
B区出土の石器分布

0 10m

黒色安山岩 - 1

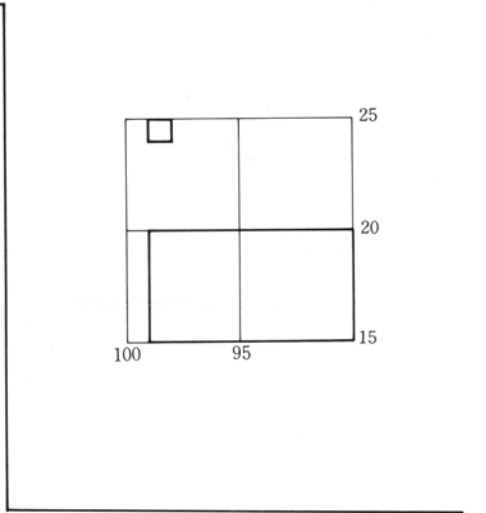
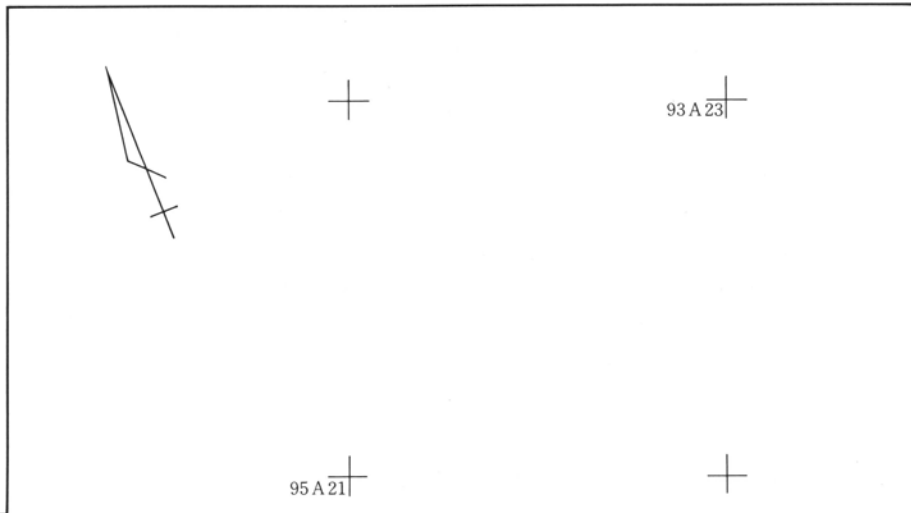
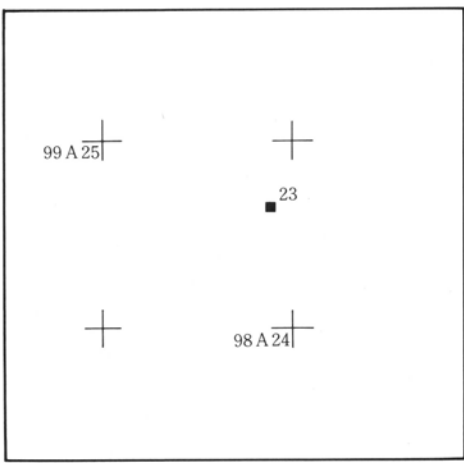
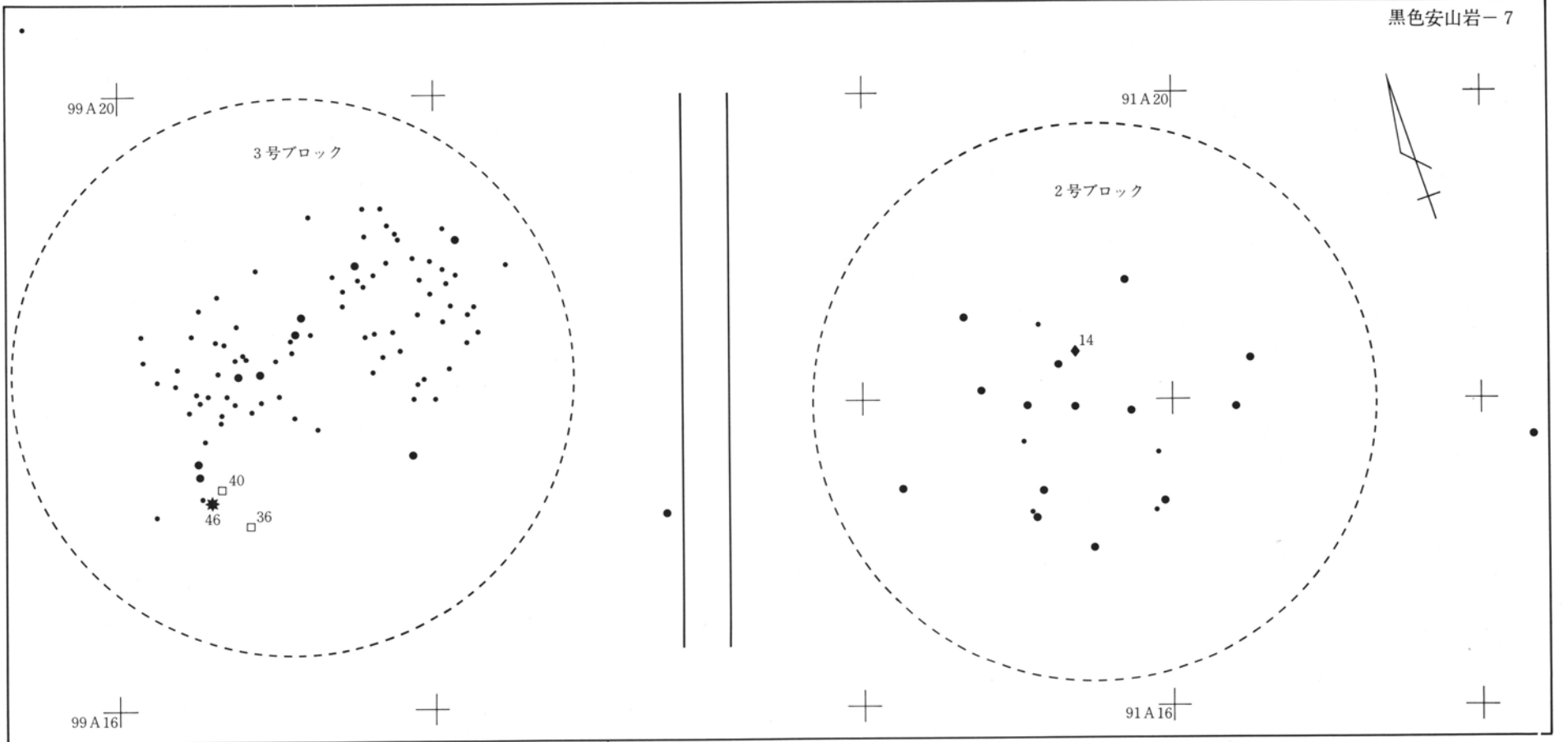


黒色安山岩 - 6

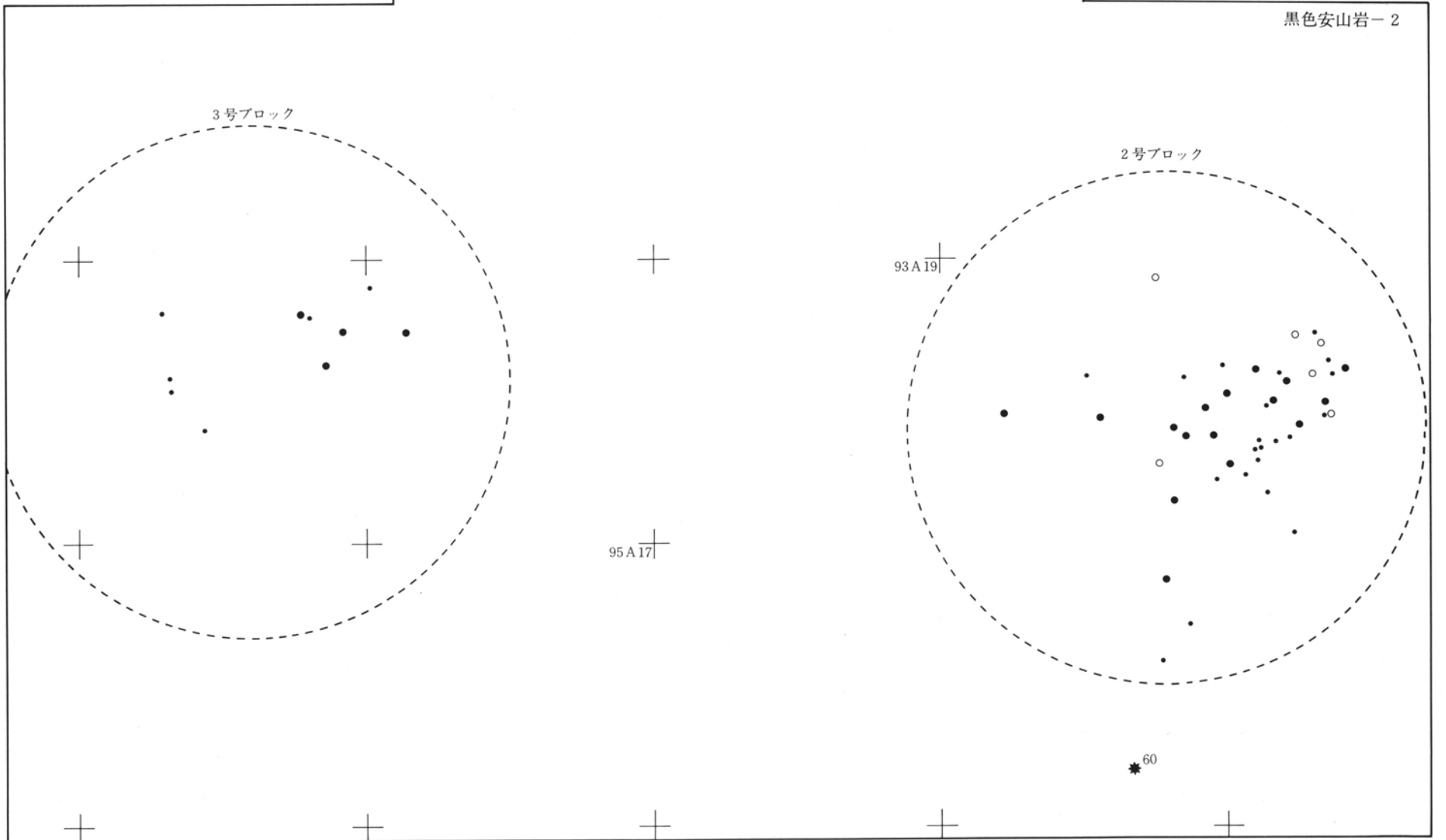


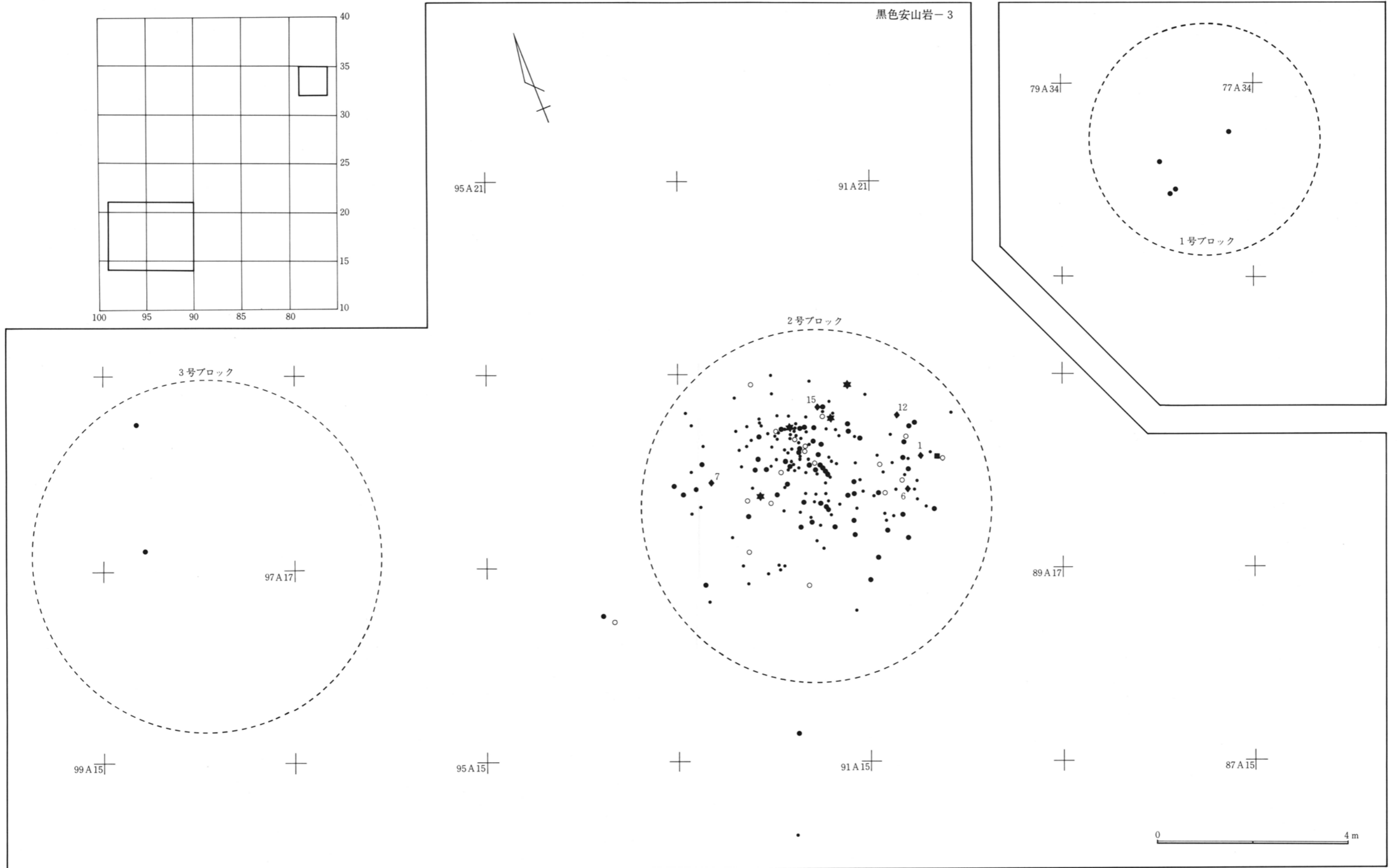
母岩別資料の分布 (I)

黒色安山岩-7

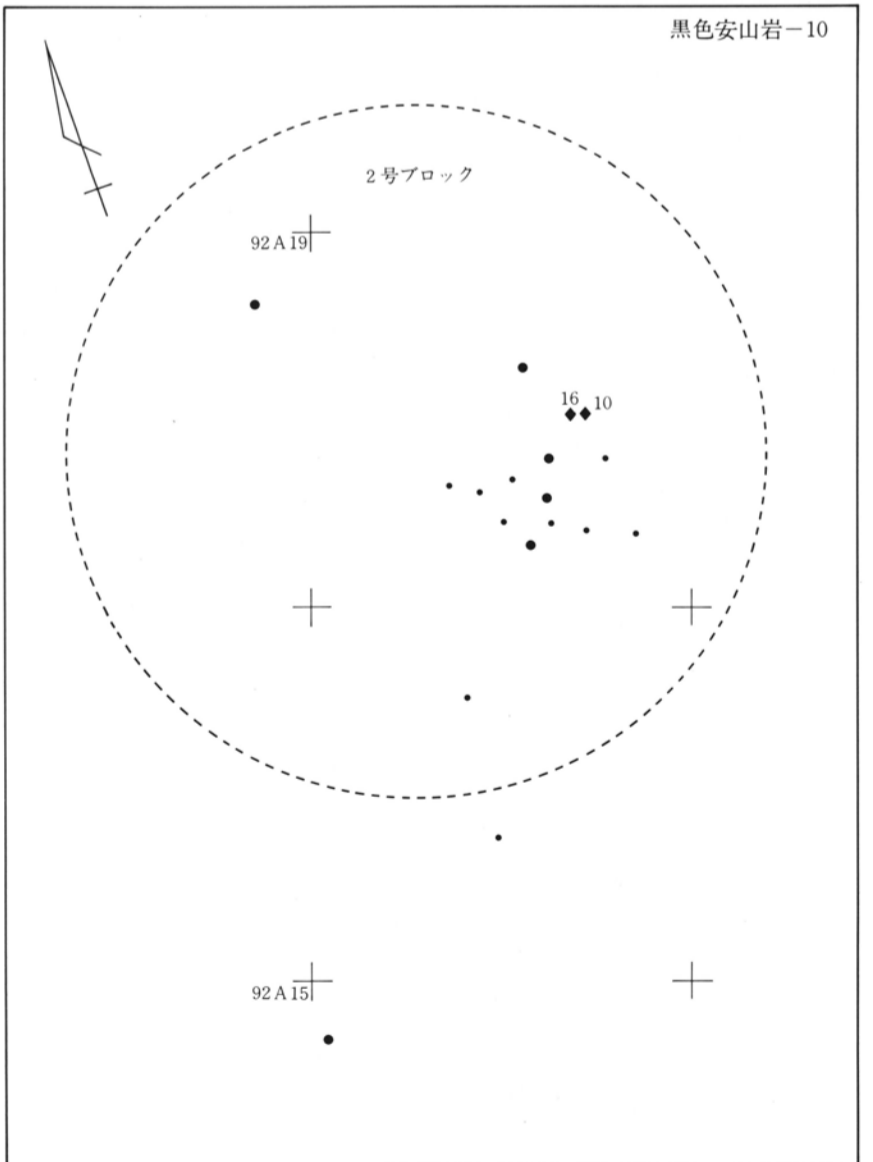
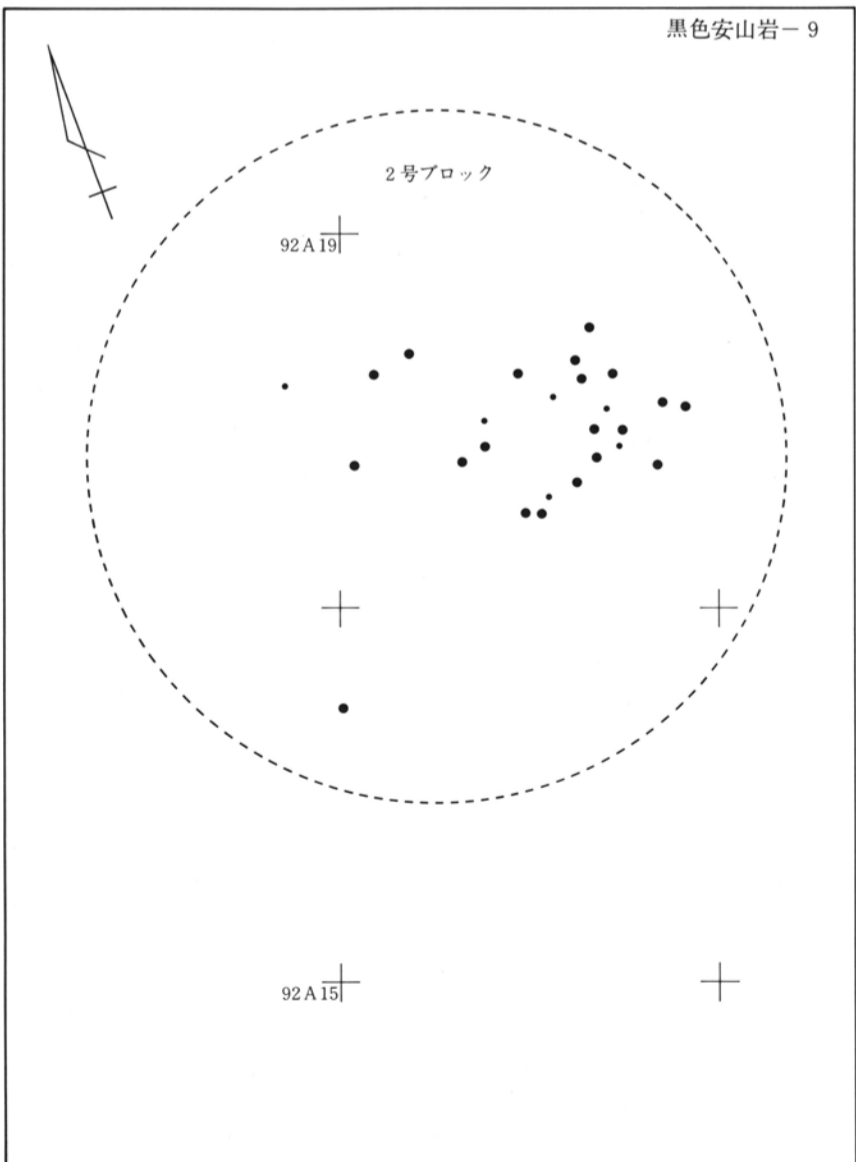
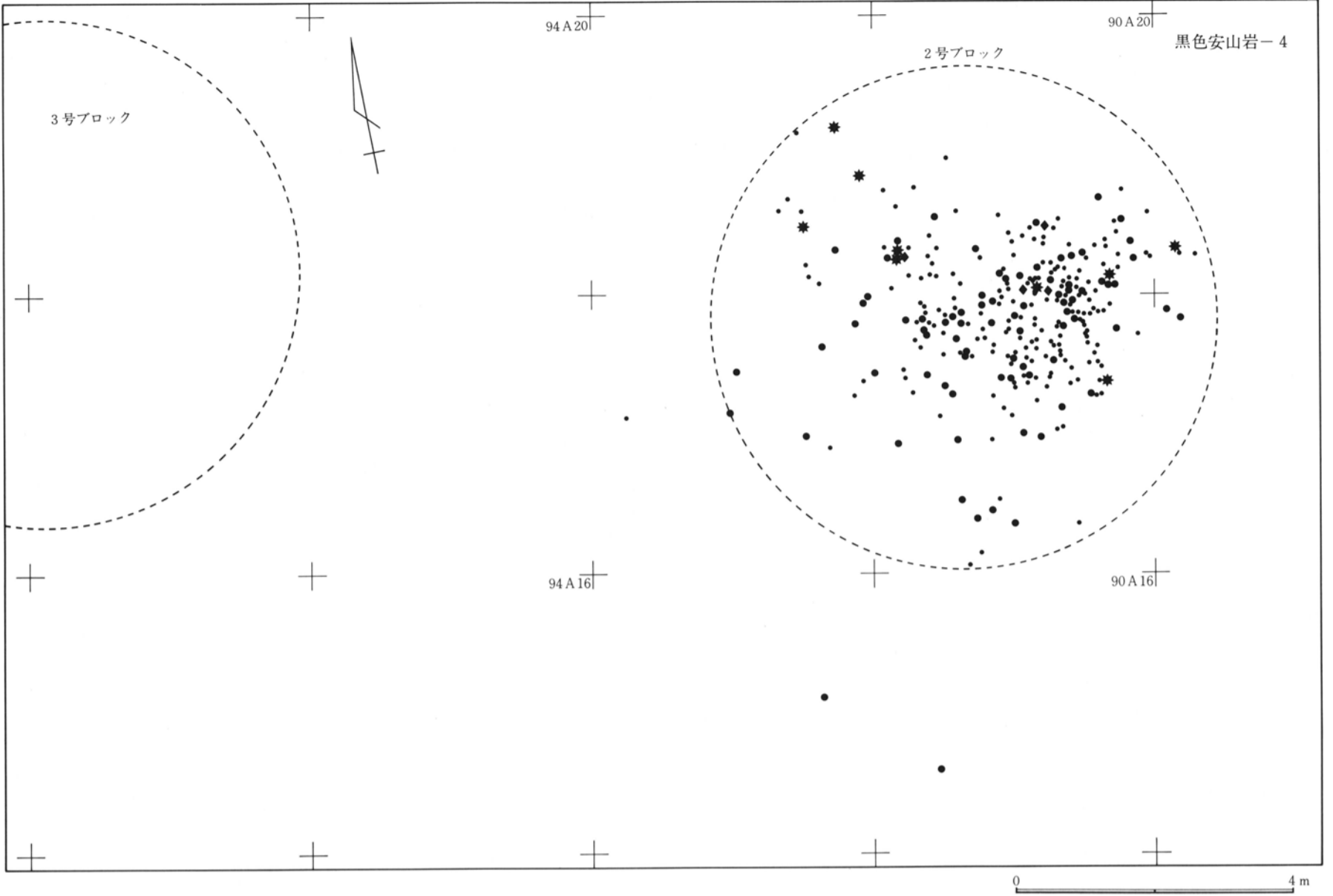


黒色安山岩-2

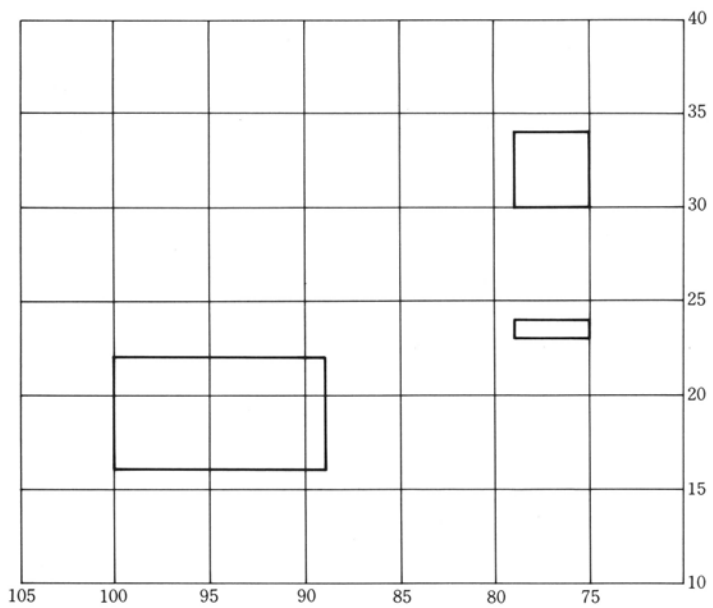




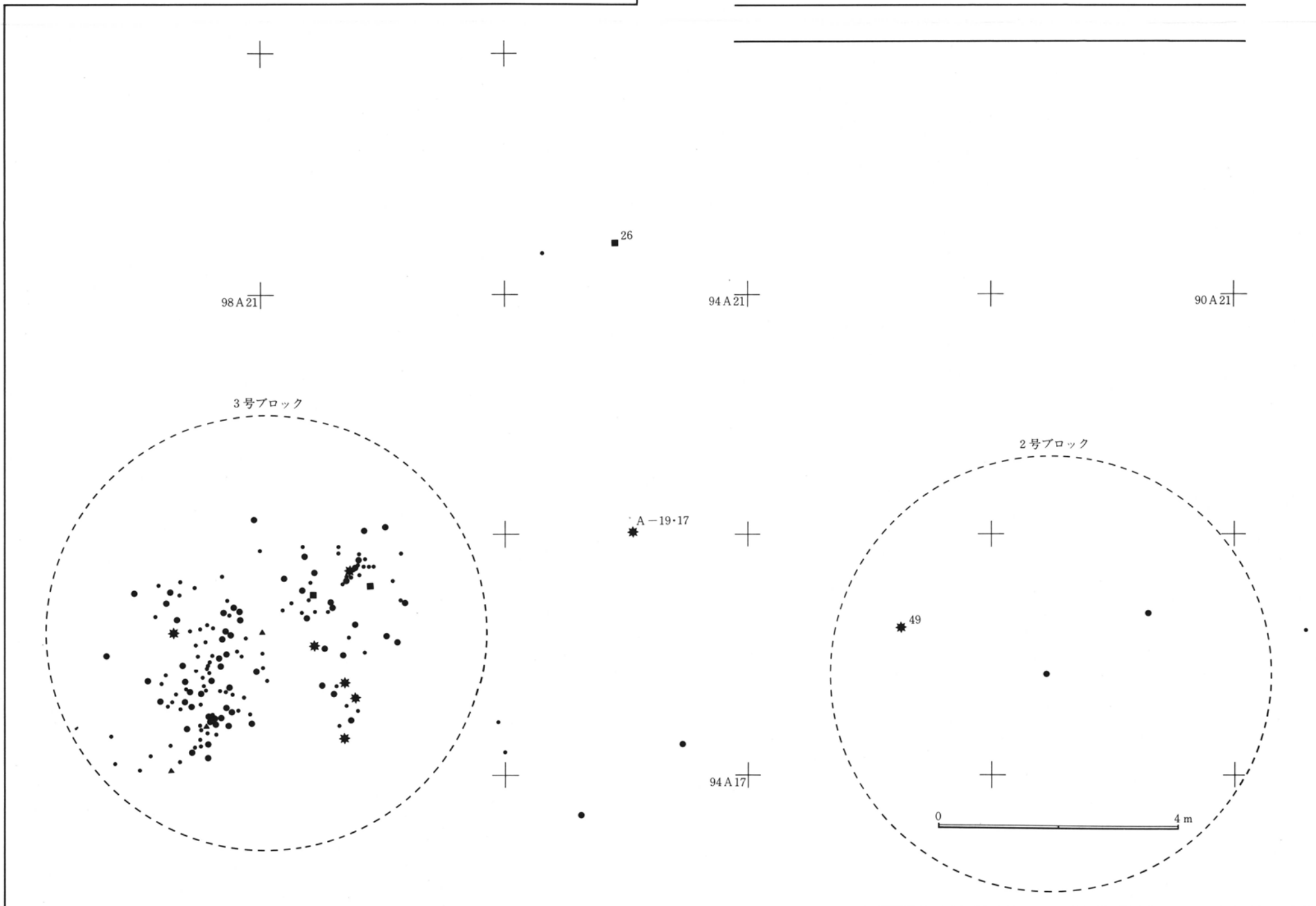
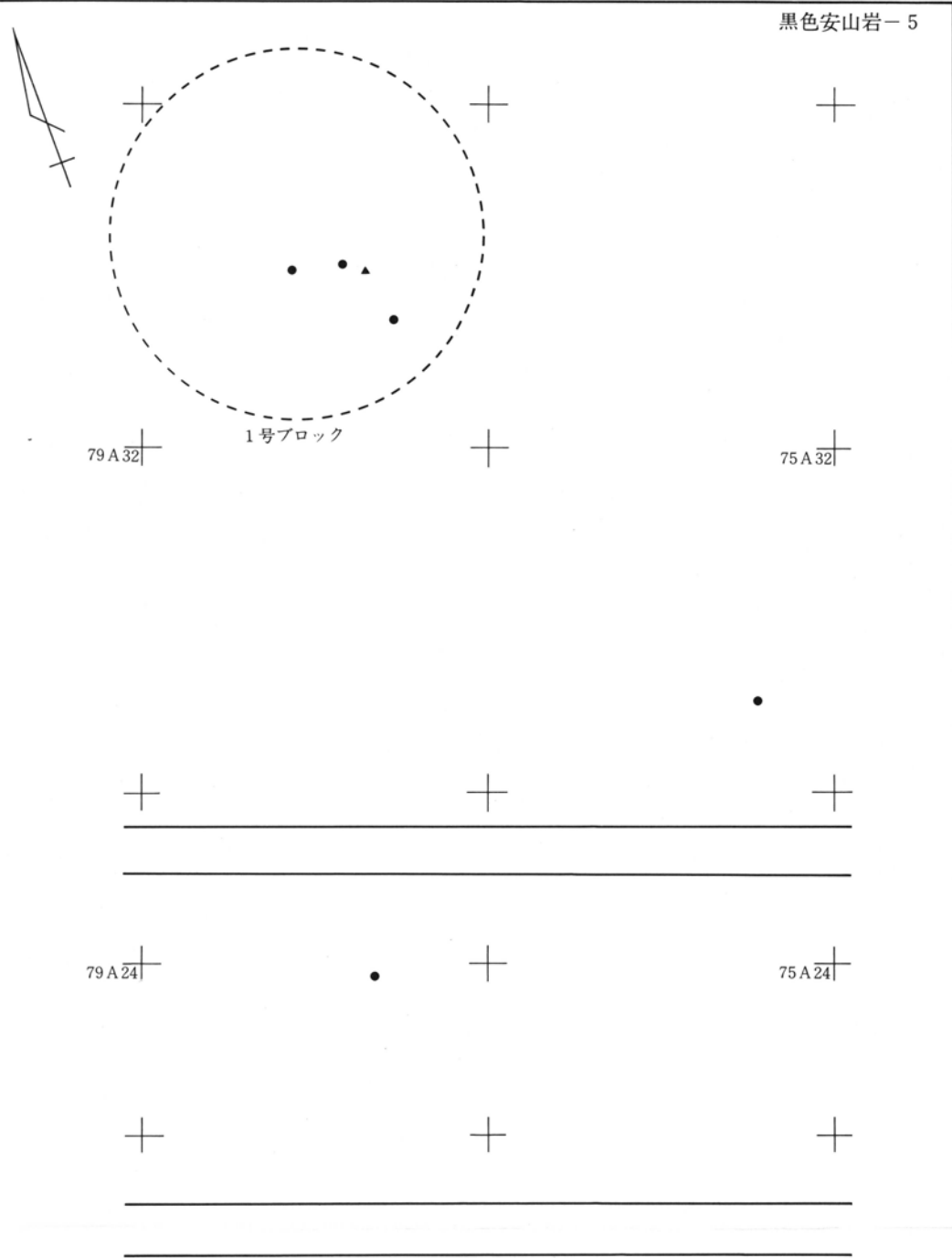
母岩別資料の分布 (3)

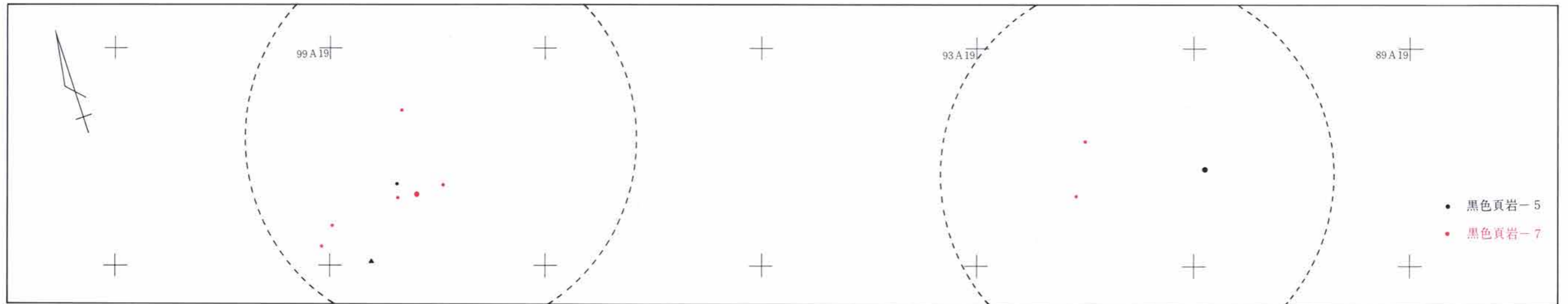
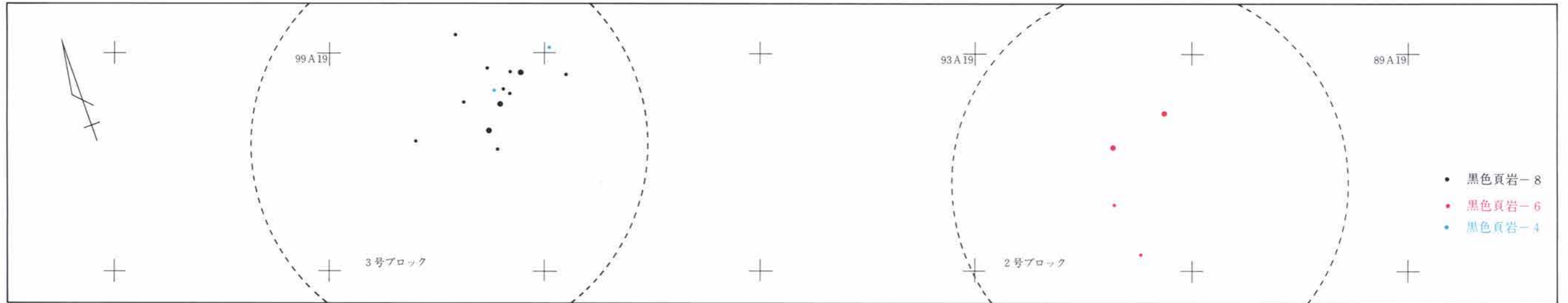
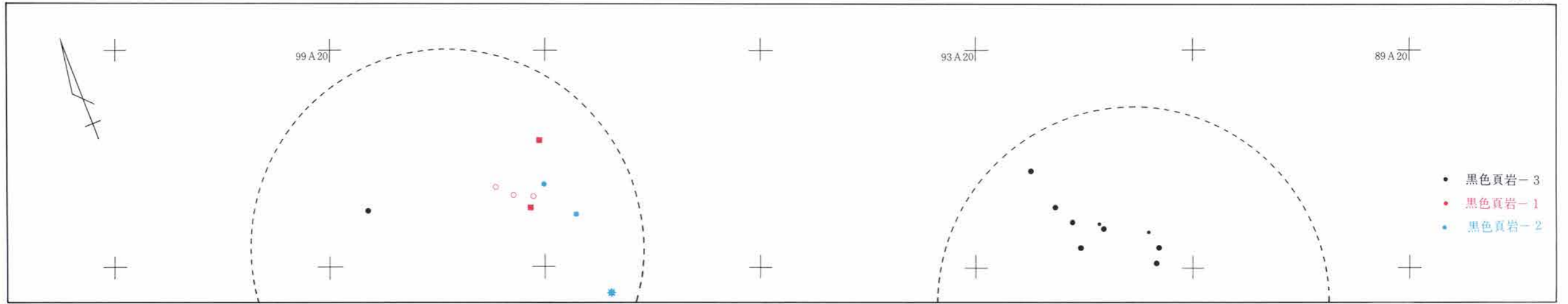


黒色安山岩 - 5

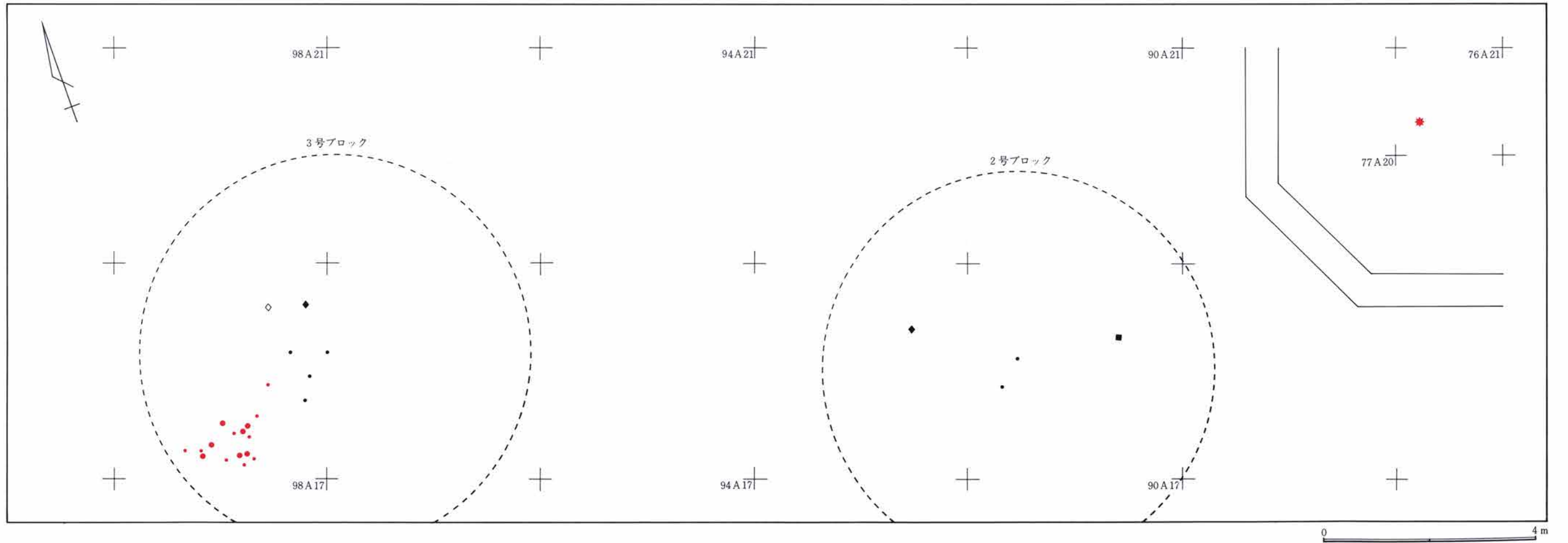
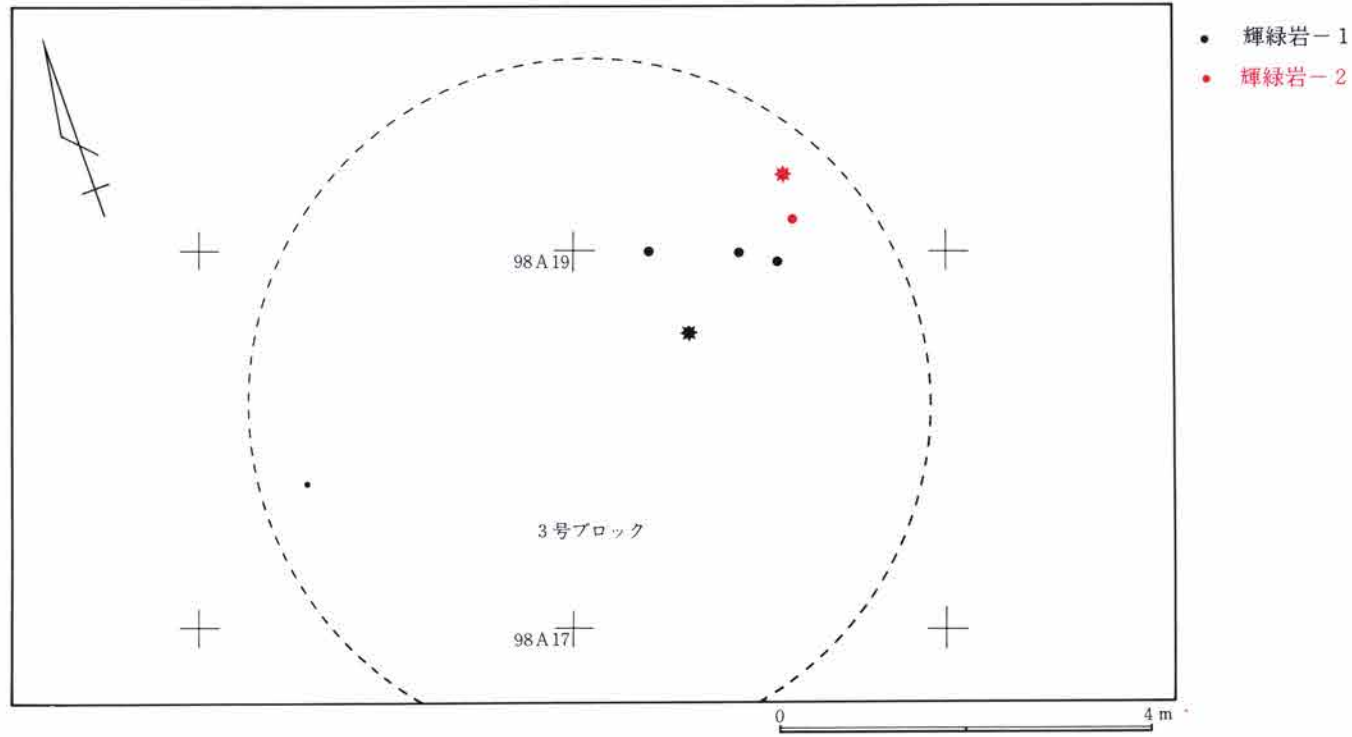


母岩別資料の分布 (5)

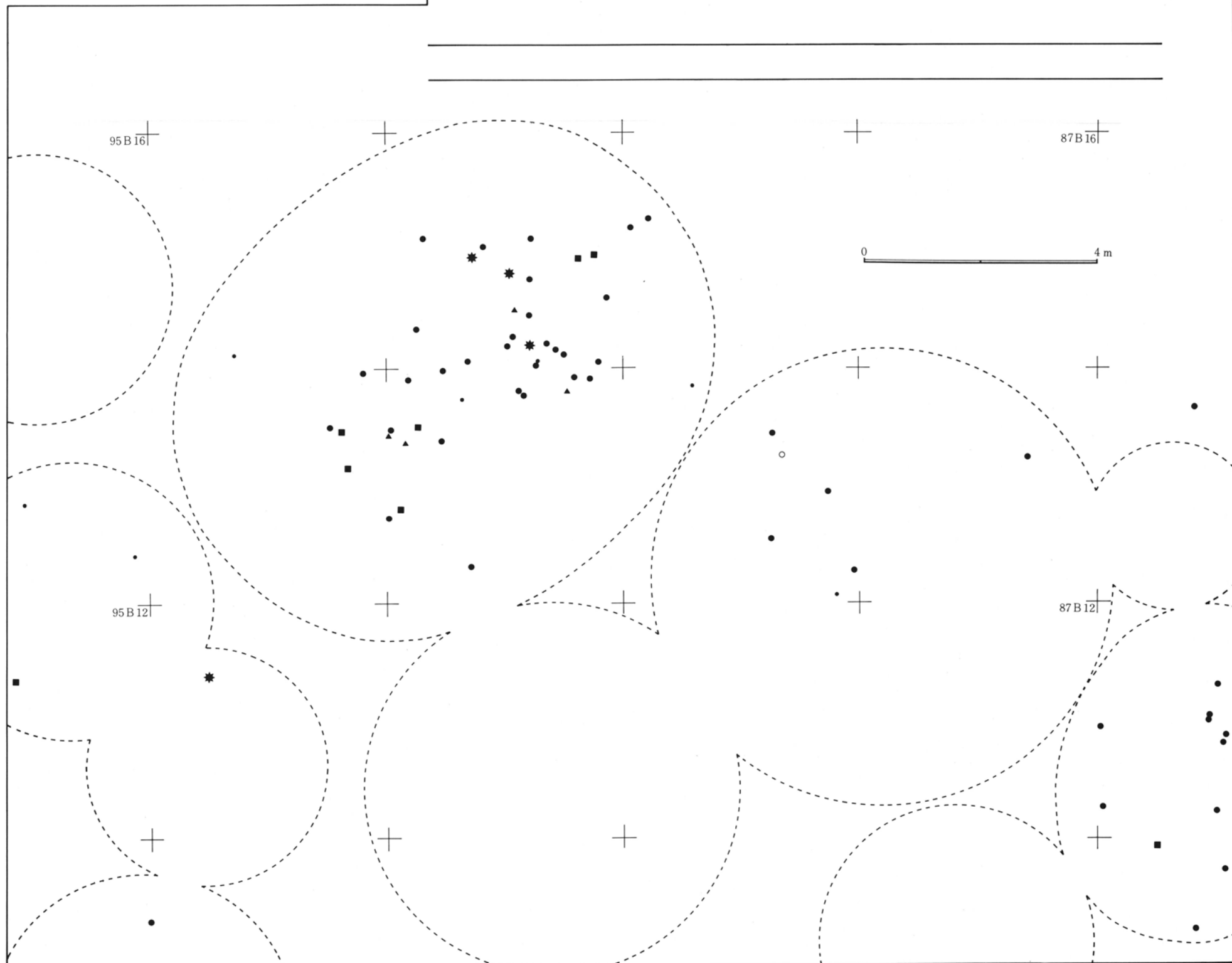
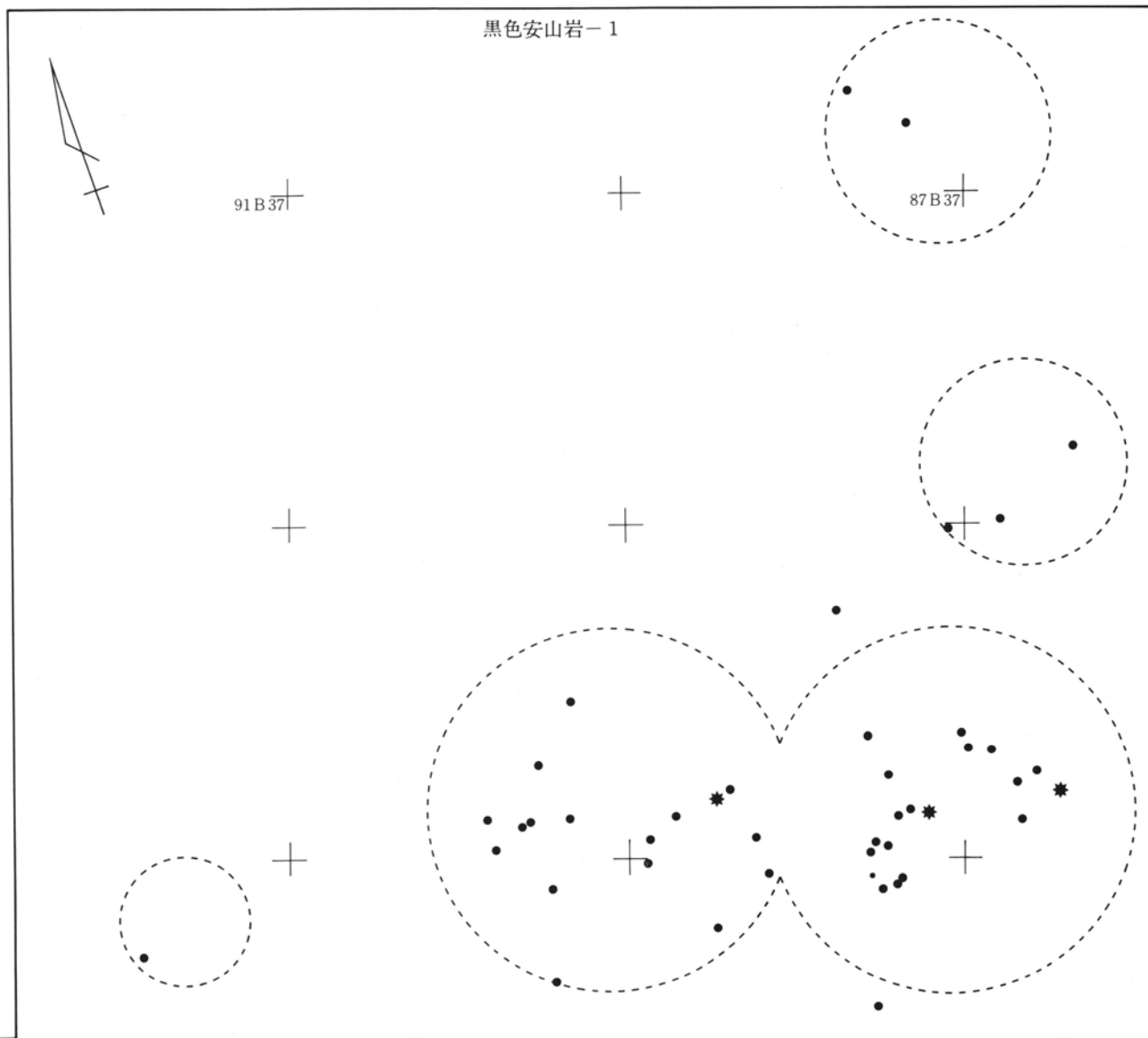




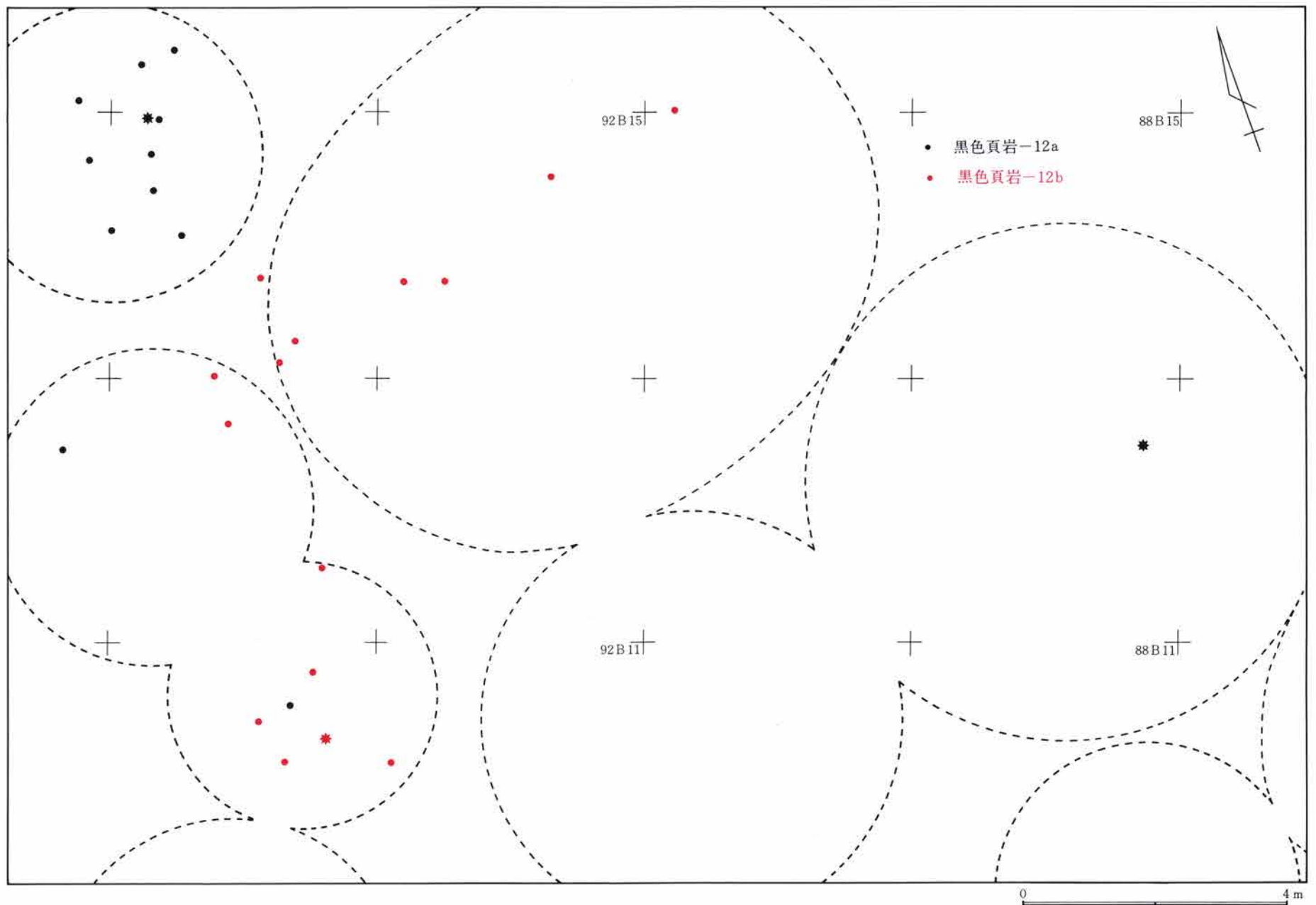
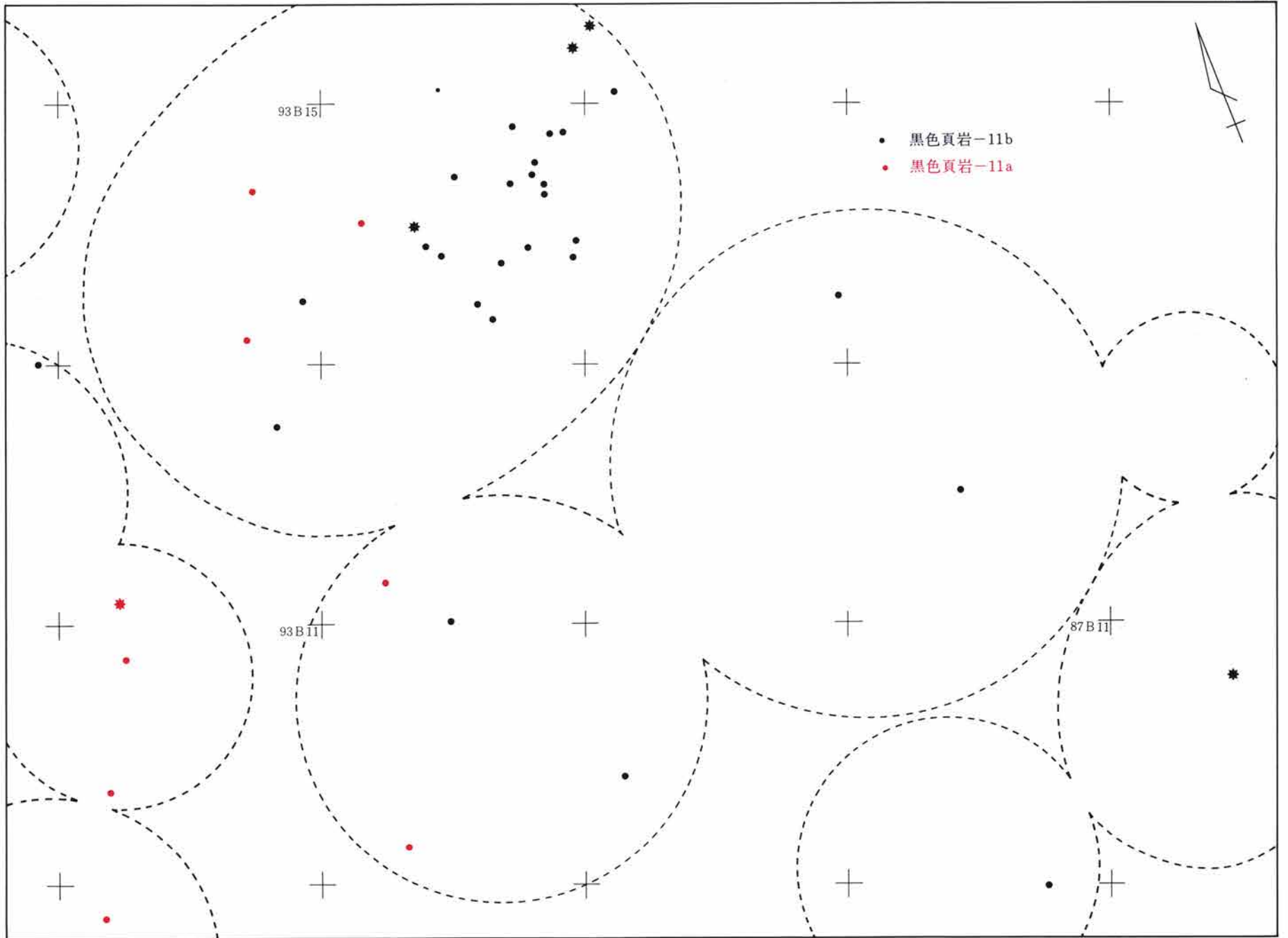
母岩別資料の分布 (6)



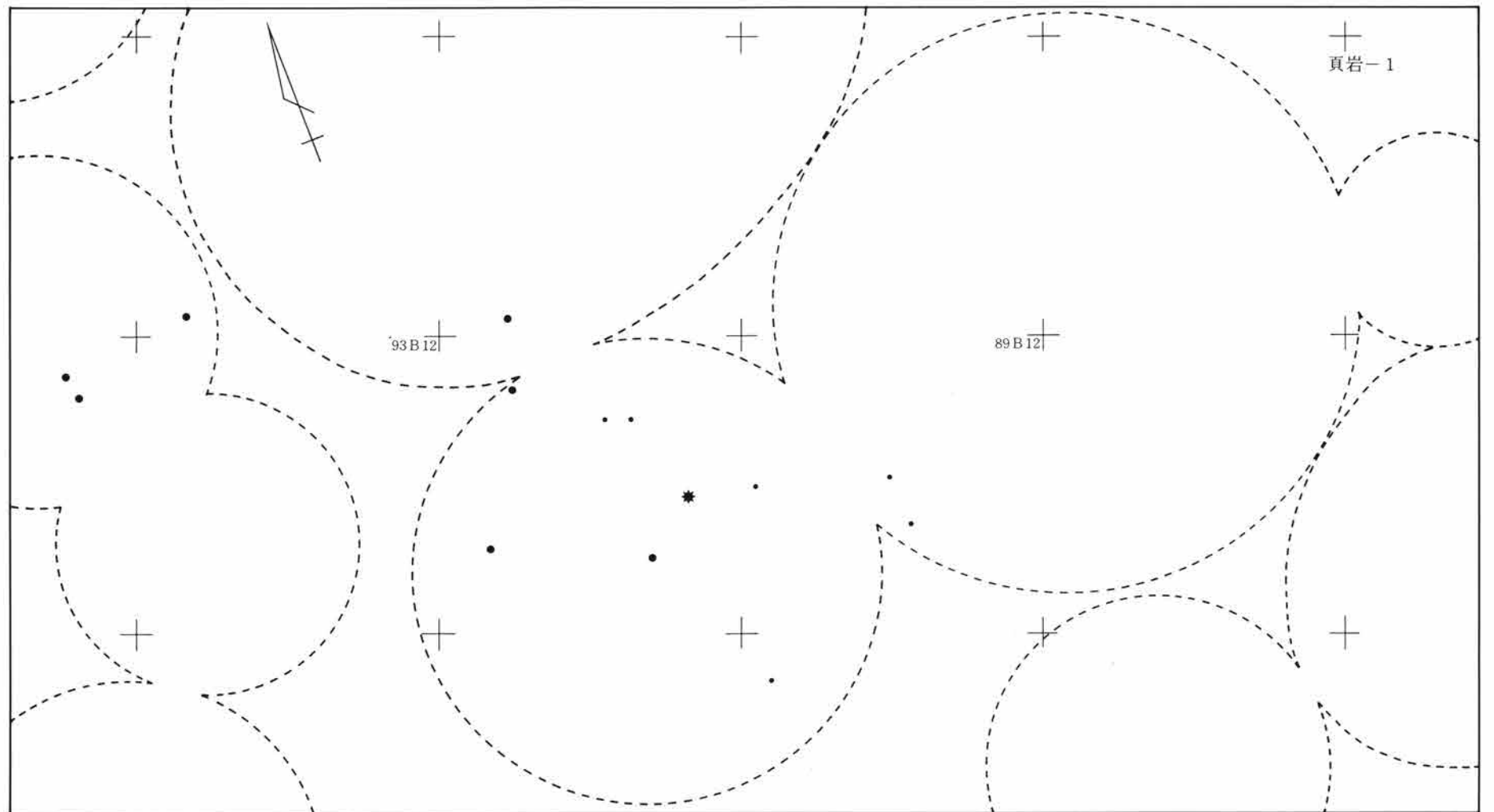
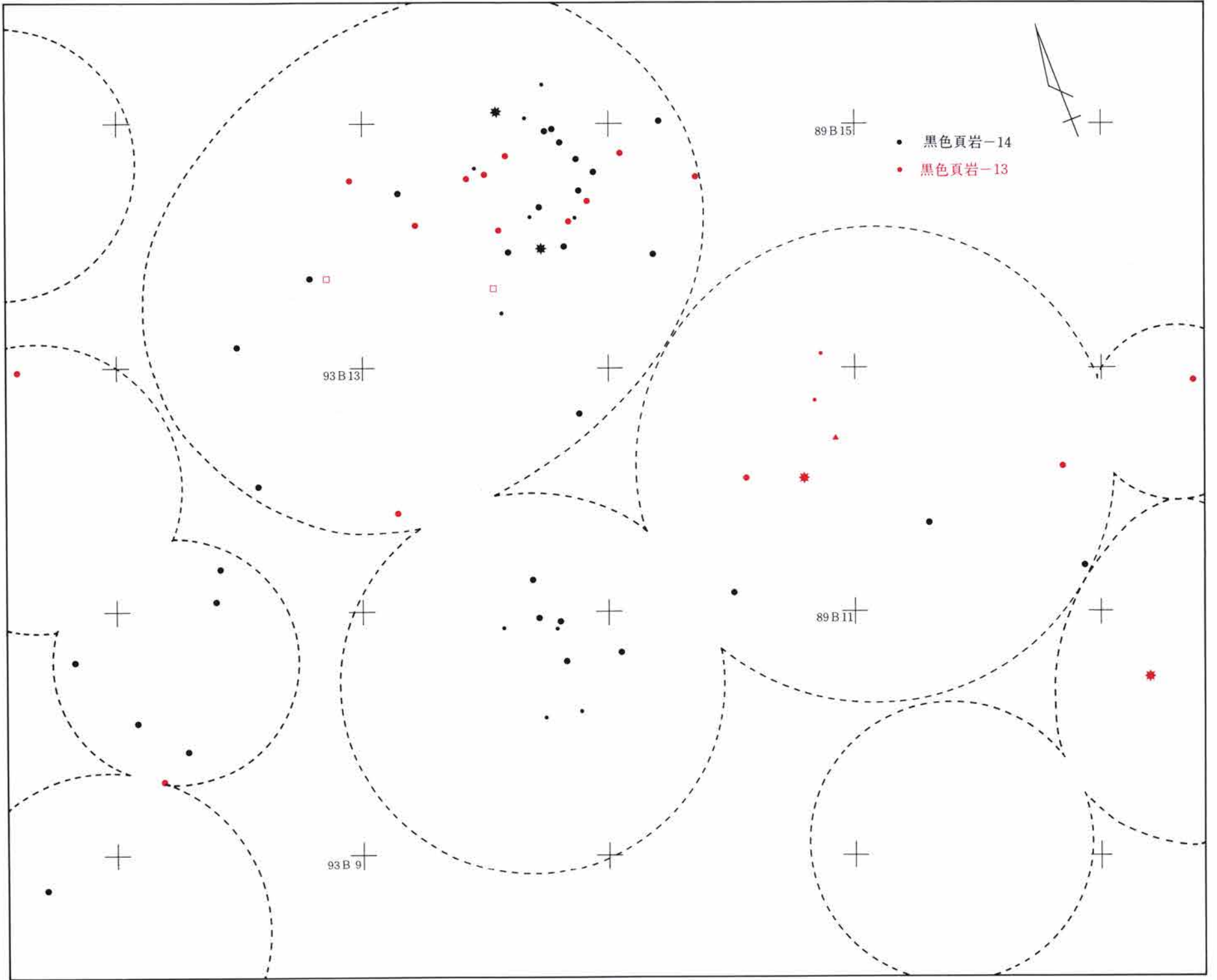
母岩別資料の分布 (7)



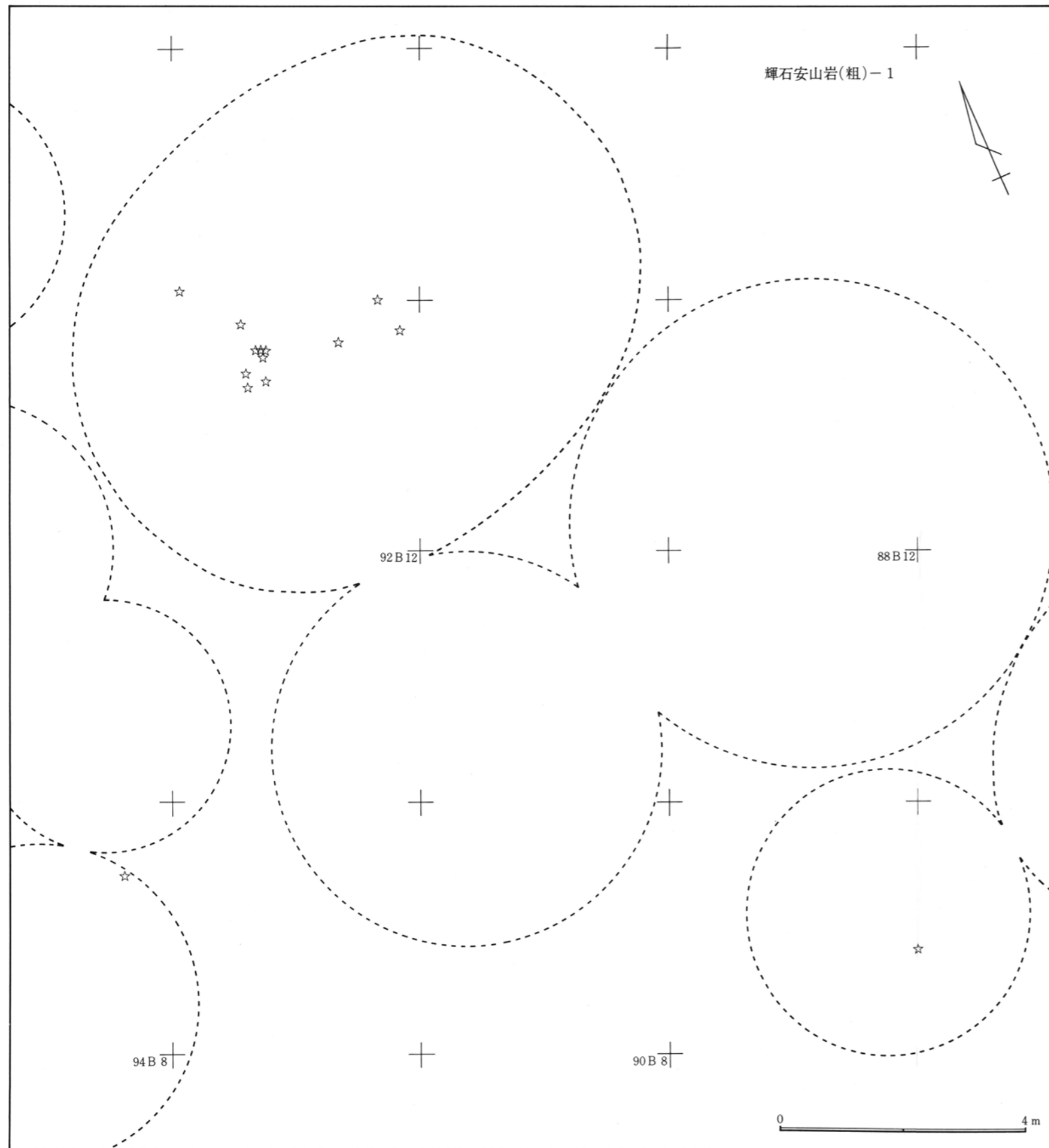
母岩別資料の分布 (8)



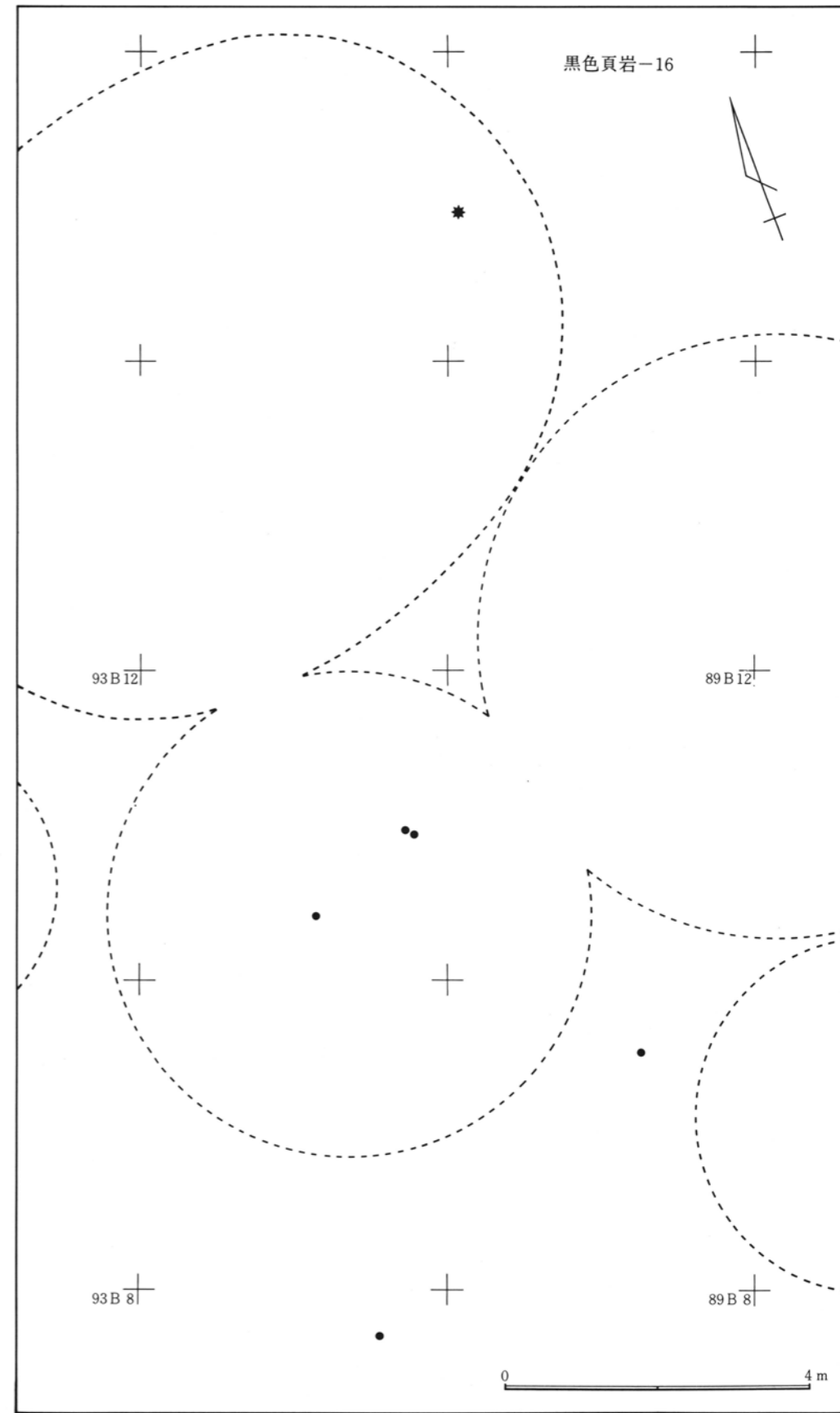
母岩別資料の分布 (9)

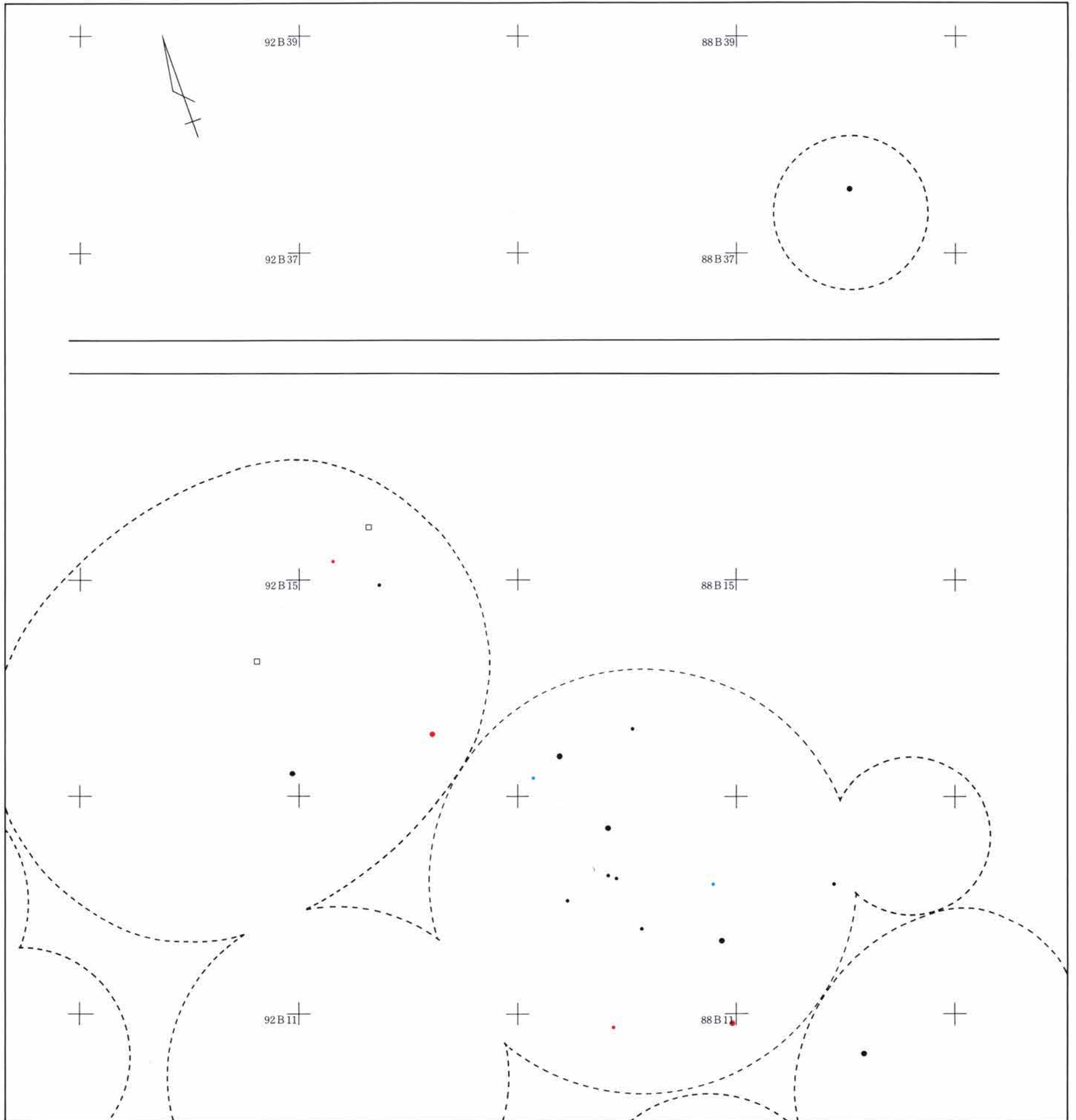


0 4 m



母岩別資料の分布 (1)





- チャート-1
- チャート-2
- チャート-3
- メノウ
- 雲母石英片岩

0 4 m